高知空港拡張整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

田村遺跡群

第8分冊

1986

高知県教育委員会

田村遺跡群

第8分冊

本文Ⅷ

例　言

1．本書は、高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財―田村遺跡群―の発掘調査報告書15分冊の内、第８分冊である。

2．調査は、運輸省第三港湾建設局の委託を受け、高知県教育委員会が実施した。調査期間は、昭和54～58年に発掘調査、昭和58～60年度に整理作業及び報告書作成を行い、７年間にわたった。

3．遺跡の名称としては、調査対象地の大部分から各時代の遺構、遺物を検出しており、調査区も多いため、これを一括して田村遺跡と呼ぶこととした。また、各調査区はLoc. 1～48と呼称した。

4．本書の作成にあたっては、本文執筆、図版作成、写真撮影等の作業を各調査区を担当した調査員が行い、各時期、時代についても担当者を決め、これをまとめた。編集は高知県教育委員会である。

5．発掘調査、整理作業及び報告書作成を通じて、顧問岡本健児教授（高知女子大学）には、御指導、御助言をいただいた。記して感謝する次第である。

6．図中の方位はすべて磁北であり、標高は海抜高である。遺構図の縮尺は、竪穴住居址、掘立柱建物址、柵列を1/80、その他の遺構、断面図及びセクション図を1/60とした。遺物実測図の縮尺は、原則として土器については、縄文・弥生時代を1/4、古墳時代以降を1/3、石器、金属器を1/2、木器を1/3とした。写真図版は約1/2～1/3であるが縮尺不同である。

7．遺構の略号は、竪穴住居址－ＳＴ、掘立柱建物址－ＳＢ、土坑－ＳＫ、溝－ＳＤ、井戸－ＳＥ、柵列－ＳＡ、水留り状遺構－ＳＰ、性格不明遺構－ＳＸ、ピット－Ｐ、自然流路－ＳＲとした。

8．調査期間を通じて多くの方々、諸機関に御協力、御援助をいただいた。各々の名称はあげないが、記して感謝する次第である。

9．出土遺物その他の資料については、高知県教育委員会が保管の任にあたっている。

本 文 目 次

第Ⅷ章　中～近世

1．Loc. 22 …… 1

2．Loc. 23 …… 39

3．Loc. 25 …… 59

4．Loc. 26 …… 129

5．Loc. 28 …… 153

6．Loc. 30 …… 167

7．Loc. 31 …… 319

8．Loc. 32 …… 455

9．Loc. 33 …… 481

挿 図 目 次

1．Loc. 22
第 1 図　調査区設定図
第 2 図　調査区セクション
第 3 図　ＳＢ１・２
第 4 図　ＳＫ１・３・４・９～16
第 5 図　ＳＫ19～22・24・25、ＳＤ２～８・11、ＳＰ１
第 6 図　第Ⅰ層出土遺物
第 7 図　〃
第 8 図　〃
第 9 図　〃
第10図　第Ⅰ層、ＳＫ９・14・19、ＳＤ３～５出土遺物
第11図　ＳＤ７出土遺物
第12図　ＳＤ８、ＳＥ１、ＳＰ１出土遺物
第13図　ＳＫ19、ＳＤ７、ＳＰ１、ＳＸ１出土遺物
第14図　ＳＤ７・８出土遺物
2．Loc. 23
第15図　調査区設定図
第16図　調査区セクション
第17図　ＳＢ１
第18図　ＳＢ２・５
第19図　ＳＢ３・４
第20図　ＳＢ６・７・10
第21図　ＳＢ８・９
第22図　ＳＫ１～７
第23図　ＳＫ４・５・９～11・13
第24図　ＳＢ８、ＳＫ４・５出土遺物
3．Loc. 25
第25図　調査区設定図
第26図　ＳＢ１・２
第27図　ＳＢ３～５
第28図　ＳＢ６～９
第29図　ＳＢ10・11
第30図　ＳＢ12
第31図　ＳＢ13～15
第32図　ＳＢ16～18
第33図　ＳＫ１～６
第34図　ＳＫ７～13
第35図　ＳＫ14～19
第36図　ＳＫ20～26
第37図　ＳＤ１・２
第38図　ＳＤ１・３
第39図　ＳＡ１～４
第40図　ＳＡ５～７
第41図　第Ⅰ～Ⅲ層出土遺物
第42図　〃
第43図　〃
第44図　〃
第45図　第Ⅰ～Ⅲ層・撹乱、ＳＢ16、ＳＫ１・２、ＳＥ１・２、ＳＤ１出土遺物
第46図　ＳＤ１出土遺物
第47図　〃
第48図　〃
第49図　〃
第50図　〃
第51図　〃
第52図　〃
第53図　〃
第54図　〃
第55図　〃
第56図　〃

第57図　ＳＤ２、Ｐ65・68・69・71・74・82・104・110・117出土遺物
第58図　Ｐ115・119・127・131・133～135・139～142・144・160・163・165出土遺物
第59図　近世墓出土遺物
第60図　ＳＤ１、Ｐ134出土遺物
第61図　ＳＤ１出土遺物
４．Loc. 26
第62図　調査区設定図
第63図　調査区セクション
第64図　ＳＢ１
第65図　ＳＢ２～６
第66図　ＳＢ７～11
第67図　ＳＫ３・５・６・８・10
第68図　ＳＫ11～13・16
第69図　第Ⅰ～Ⅲ層出土遺物
第70図　第Ⅰ～Ⅲ層、ＳＢ６・11、ＳＫ１・３出土遺物
第71図　ＳＫ５・10・12、ＳＤ２・３出土遺物
第72図　Ｐ１・２・５・27出土遺物
５．Loc. 28
第73図　調査区設定図
第74図　ＳＢ２
第75図　ＳＢ４
第76図　ＳＢ５
第77図　ＳＢ３、ＳＫ３・５～７、ＳＤ３
第78図　ＳＢ４・５、Ｐ１出土遺物
６．Loc. 30
第79図　調査区設定図
第80図　調査区セクション
第81図　〃
第82図　〃
第83図　調査区セクション
第84図　ＳＢ１・２
第85図　ＳＢ３・４
第86図　ＳＢ５・６
第87図　ＳＢ７・８
第88図　ＳＢ９・10
第89図　ＳＢ11・12
第90図　ＳＢ13・14
第91図　ＳＢ15～17
第92図　ＳＢ18・19
第93図　ＳＢ20・21
第94図　ＳＢ22・23
第95図　ＳＢ24～26
第96図　ＳＢ27～29
第97図　ＳＢ30・31
第98図　ＳＢ32～34
第99図　ＳＢ35
第100図　ＳＢ36・37
第101図　ＳＢ38・39
第102図　ＳＢ40・41
第103図　ＳＢ42・44
第104図　ＳＢ43・45
第105図　ＳＫ１～５
第106図　ＳＫ６～10
第107図　ＳＫ11～15・18
第108図　ＳＫ16・17・19～22
第109図　ＳＫ23～30
第110図　ＳＫ31～34・36
第111図　ＳＫ35・37～39
第112図　ＳＫ40～43
第113図　ＳＫ44～47
第114図　ＳＫ48～51
第115図　ＳＫ52～55
第116図　ＳＫ56～61

第117図　ＳＫ62～66
第118図　ＳＫ67～71
第119図　ＳＫ72・73・76～78
第120図　ＳＫ75・91・92
第121図　ＳＫ79～83
第122図　ＳＫ84～88
第123図　ＳＫ89・94・95・97・98
第124図　ＳＫ99～103
第125図　ＳＫ104～109
第126図　ＳＫ110～116
第127図　ＳＫ117～119・121
第128図　ＳＤ１～23
第129図　ＳＡ１～４
第130図　第Ⅰ～Ⅲ層出土遺物
第131図　第Ⅲ層出土遺物
第132図　〃
第133図　〃
第134図　〃
第135図　〃
第136図　ＳＢ５・12・13・18・21・22・24・25・30・31・33～35・40出土遺物
第137図　ＳＢ35・36、ＳＫ８～10・14・15・36・39出土遺物
第138図　ＳＫ40・42・45・50・52・53・58・59・66・70・71・75出土遺物
第139図　ＳＫ77・82・83・88・105・111・112・114～116・118・121出土遺物
第140図　ＳＫ121、ＳＤ４・６・10・13出土遺物
第141図　ＳＤ13・14・22～24、Ｐ２・４出土遺物
第142図　Ｐ２・５・６・８・10～14・16～24出土遺物
第143図　Ｐ25～34・36～40出土遺物
第144図　Ｐ41～53出土遺物
第145図　Ｐ３・35出土遺物
第146図　ＳＫ14・39・41、ＳＤ６出土遺物
第147図　ＳＫ20・30・85、Ｐ９・15出土遺物
第148図　ＳＫ２・39・41・42・65・66・71出土遺物
第149図　ＳＫ20・30、Ｐ７出土遺物
第150図　ＳＫ34・52、Ｐ２・４出土遺物
７．Loc. 31
第151図　調査区設定図
第152図　調査区セクション
第153図　〃
第154図　〃
第155図　〃
第156図　〃
第157図　〃
第158図　ＳＢ１・２
第159図　ＳＢ３～５
第160図　ＳＢ６・７
第161図　ＳＢ８
第162図　ＳＢ９・10
第163図　ＳＢ11
第164図　ＳＢ12・13
第165図　ＳＢ14・15
第166図　ＳＢ16～18
第167図　ＳＢ19・20
第168図　ＳＢ21・24
第169図　ＳＢ22・25
第170図　ＳＢ23・26・27
第171図　ＳＢ28・31
第172図　ＳＢ29

第173図　ＳＢ30・32
第174図　ＳＢ33・34
第175図　ＳＢ35・36
第176図　ＳＫ１～５
第177図　ＳＫ６～11
第178図　ＳＫ12～16
第179図　ＳＫ17～22
第180図　ＳＫ23～27
第181図　ＳＫ28～32
第182図　ＳＫ33～35・37
第183図　ＳＫ36・38～41
第184図　ＳＫ42～46
第185図　ＳＫ47～54
第186図　ＳＤ１～14
第187図　ＳＥ１、ＳＡ１・２
第188図　第Ⅰ～Ⅲ層出土遺物
第189図　第Ⅲ層出土遺物
第190図　第Ⅱ・Ⅲ層出土遺物
第191図　ＳＢ６・８・15・29・36、ＳＫ１・14・16・28・30出土遺物
第192図　ＳＫ30・36・37・42・52出土遺物
第193図　ＳＤ１出土遺物
第194図　〃
第195図　ＳＤ１・４・６、ＳＥ１出土遺物
第196図　ＳＥ１出土遺物
第197図　ＳＥ１、Ｐ１～10出土遺物
第198図　ＳＫ33出土遺物
第199図　ＳＢ29、Ｐ11出土遺物
第200図　ＳＫ１、ＳＥ１、Ｐ12出土遺物
第201図　ＳＫ１、ＳＥ１出土遺物
第202図　ＳＫ１、Ｐ13・14出土遺物
第203図　ＳＢ１・２
第204図　ＳＢ３・５・６
第205図　ＳＢ４
第206図　ＳＫ１～５
第207図　ＳＫ６～９・11
第208図　ＳＫ12～14
第209図　ＳＫ15～20
第210図　ＳＫ21～26
第211図　ＳＫ27～32
第212図　ＳＫ33～38
第213図　ＳＤ１～４・６～９
第214図　ＳＰ１
第215図　第Ⅰ～Ⅳ層出土遺物
第216図　ＳＫ１・２・８出土遺物
第217図　ＳＫ31・38、ＳＤ３出土遺物
第218図　ＳＤ３・６～８、ＳＰ１、Ｐ２・３出土遺物
第219図　ＳＫ２・27、ＳＰ１出土遺物
第220図　ＳＫ２、ＳＰ１、Ｐ１出土遺物
第221図　第Ⅲ層、ＳＫ１、ＳＤ１出土遺物
８．Loc. 32
第222図　調査区設定図
第223図　調査区セクション
第224図　試掘トレンチセクション
第225図　〃
第226図　ＳＢ１
第227図　ＳＢ２
第228図　ＳＢ３・４
第229図　ＳＫ１～７
第230図　ＳＫ８～11、ＳＤ２～４
第231図　第Ⅱ・Ⅲ層出土遺物
第232図　第Ⅲ層、ＳＢ１・２、ＳＤ４出土遺物
９．Loc. 33
第233図　調査区設定図
第234図　調査区セクション
第235図　ＳＢ１・２

第236図　ＳＢ３・４
第237図　ＳＢ５・６
第238図　ＳＢ７
第239図　ＳＢ８・９
第240図　ＳＢ10・11
第241図　ＳＢ12
第242図　ＳＢ13・14
第243図　ＳＢ15・16
第244図　ＳＢ17・18
第245図　ＳＢ19・20
第246図　ＳＢ21・22
第247図　ＳＢ23・24
第248図　ＳＢ25・26
第249図　ＳＢ27・28
第250図　ＳＢ29・30
第251図　ＳＢ31・32
第252図　ＳＢ33・34
第253図　ＳＢ35・36
第254図　ＳＢ37・38
第255図　ＳＢ39・40
第256図　ＳＢ41・42
第257図　ＳＢ43・44
第258図　ＳＢ45～47
第259図　ＳＢ48・49
第260図　ＳＢ50
第261図　ＳＫ１～４
第262図　ＳＫ５～８
第263図　ＳＫ９
第264図　ＳＫ10～12
第265図　ＳＫ13～16
第266図　ＳＫ17～22
第267図　ＳＫ23～29
第268図　ＳＫ30～36
第269図　ＳＫ37～40
第270図　ＳＫ41～45
第271図　ＳＫ46～53
第272図　ＳＫ54～62
第273図　ＳＫ63～67
第274図　ＳＫ68～73
第275図　ＳＤ１～14
第276図　ＳＥ１
第277図　ＳＡ１・２
第278図　第Ⅲ層出土遺物
第279図　〃
第280図　〃
第281図　ＳＢ５・20・26・29・30、ＳＫ４・７・９・11・12・14出土遺物
第282図　ＳＫ22・29・36・39・40・42・49・63、ＳＤ１出土遺物
第283図　ＳＤ１出土遺物
第284図　〃
第285図　ＳＤ１・８、ＳＥ１出土遺物
第286図　Ｐ１～15出土遺物
第287図　ＳＫ59、ＳＤ１、ＳＥ１出土遺物
第288図　ＳＫ14、ＳＤ１出土遺物
第289図　ＳＤ１・３、ＳＥ１、Ｐ12・14出土遺物

表 目 次

1．Loc. 22
第1表　掘立柱建物址計測表
第2表　土坑計測表
第3表　包含層出土土器観察表
第4表　包含層出土石器観察表
第5表　遺構出土土器観察表
第6表　遺構出土石器観察表
第7表　遺構出土木器観察表
2．Loc. 23
第8表　掘立柱建物址計測表
第9表　土坑計測表
第10表　遺構出土土器観察表
3．Loc. 25
第11表　掘立柱建物址計測表
第12表　土坑計測表
第13表　包含層出土土器観察表
第14表　遺構出土土器観察表
第15表　遺構出土石器観察表
第16表　遺構出土金属器観察表
4．Loc. 26
第17表　掘立柱建物址計測表
第18表　土坑計測表
第19表　包含層出土土器観察表
第20表　包含層出土金属器観察表
第21表　遺構出土土器観察表
5．Loc. 28
第22表　掘立柱建物址計測表
第23表　土坑計測表
第24表　遺構出土土器観察表
6．Loc. 30
第25表　掘立柱建物址計測表
第26表　土坑計測表
第27表　包含層出土土器観察表
第28表　包含層出土石器観察表
第29表　包含層出土金属器観察表
第30表　遺構出土土器観察表
第31表　遺構出土石器観察表
第32表　遺構出土金属器観察表
7．Loc. 31
第33表　Loc. 31 A 掘立柱建物址計測表
第34表　Loc. 31 A 土坑計測表
第35表　Loc. 31 A 包含層出土土器観察表
第36表　Loc. 31 A 包含層出土石器観察表
第37表　Loc. 31 A 遺構出土土器観察表
第38表　Loc. 31 A 遺構出土石器観察表
第39表　Loc. 31 A 遺構出土木器観察表
第40表　Loc. 31 B 掘立柱建物址計測表
第41表　Loc. 31 B 土坑計測表
第42表　Loc. 31 B 包含層出土土器観察表
第43表　Loc. 31 B 遺構出土土器観察表
第44表　Loc. 31 B 遺構出土石器観察表
第45表　Loc. 31 B 遺構出土金属器観察表
第46表　Loc. 31 A・B 包含層出土古銭観察表
第47表　Loc. 31 A・B 遺構出土古銭観察表
8．Loc. 32
第48表　掘立柱建物址計測表
第49表　土坑計測表
第50表　包含層出土土器観察表
第51表　包含層出土石器観察表
第52表　遺構出土土器観察表
第53表　遺構出土石器観察表
9．Loc. 33
第54表　掘立柱建物址計測表
第55表　土坑計測表

第56表　包含層出土土器観察表
第57表　包含層出土石器観察表
第58表　遺構出土土器観察表
第59表　遺構出土石器観察表
第60表　遺構出土木器観察表
第61表　遺構出土金属器観察表

1. Loc.22

Loc. 22

1．位置と調査経過

Loc. 22は、田村遺跡群の北端に位置し、字名を神田屋敷と称す。調査前は標高約7.10ｍを測る水田であった。

調査は、昭和56年度に行われ、まず、トレンチによる試掘調査を行った。トレンチは、グリッドを基準に南北トレンチ（Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｇトレンチ）４本と東西トレンチ（Ａ・Ｅ・Ｆ・Ｈトレンチ）４本の計８本を設定した。その結果、Ａ・ＢトレンチとＣ・Ｄトレンチの北側から遺構が検出され、該当部分の全面発掘を実施した。また、空港拡張範囲北端部の場周道路と水路部についても試掘トレンチ（Ｉ）を設定した。調査の結果、耕作土下に現代の撹乱坑を検出したのみであり、他の遺構は存在せず、遺物も近現代の陶磁器片を若干出土しただけであるので、拡張せずに終了した。

調査期間は昭和56年４月１日から６月20日までの81日間であり、最終的な調査面積は1,224㎡であった。

2．調査概要

Loc. 22では、調査によって、中近世の遺構を検出したが溝に囲まれた中世屋敷跡は確認できなかった。確認された遺構は、掘立柱建物址２棟、土坑26基、溝12条、井戸１基、水溜状遺構１基、性格不明遺構１基と散在する柱穴とみられるピットである。これらの遺構は、散在し、規格性は認められない。

出土遺物は総数約1,500点であり、復元できたのは124点であった。この中には、近世の遺構から出土した多数の陶磁器が含まれる。また、周辺部に弥生時代の遺構が存在するため、弥生土器が混入していた遺構もあった。

3．層序と出土遺物

調査区において認められた基本層序は以下の通りである。

第Ⅰ層　耕作土

第Ⅱ層　褐色粘質土層（床土）

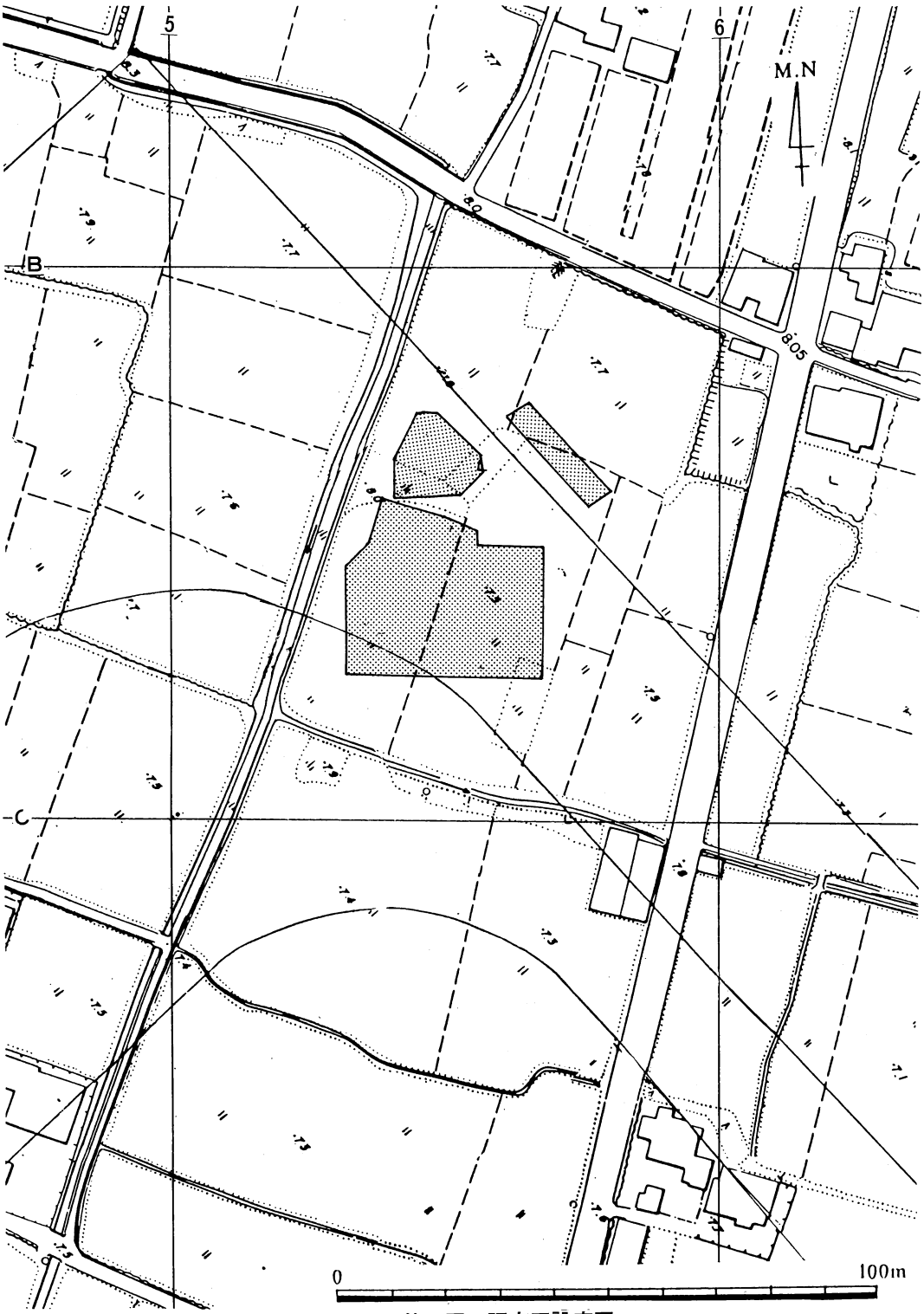
第Ⅲ層　黒褐色粘質土層

第Ⅳ層　黄褐色粘質土層

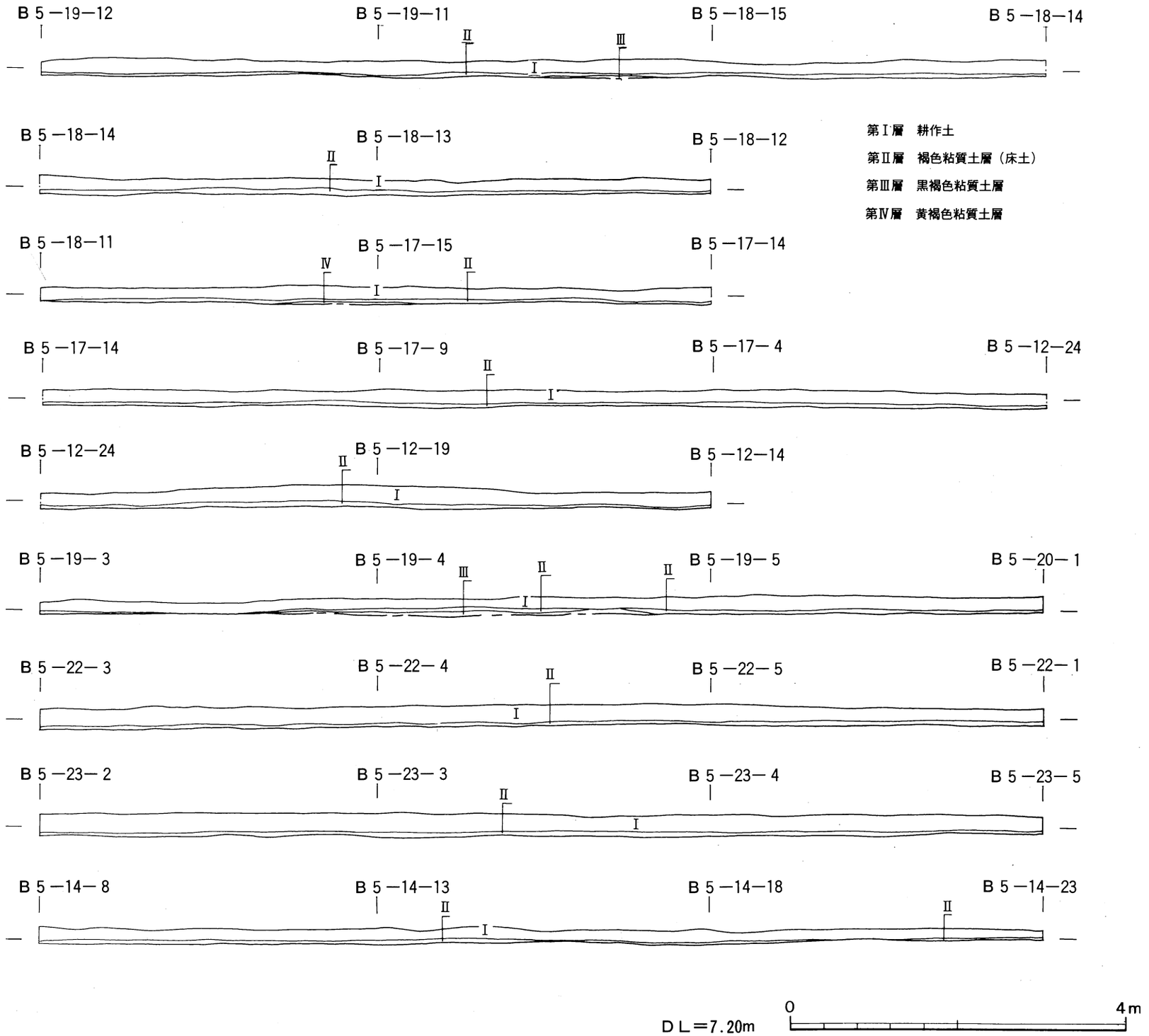
中世の遺構が検出されたのは第Ⅲ層と第Ⅳ層上面であった。

第Ⅰ層は現代の耕作土であり、遺物はほとんどこの層から出土している。

第Ⅱ層は、第Ⅰ層に伴う床土であり、部分的に確認した。遺物はすべて細片で、図示できたものはなかった。



第1図　調査区設定図



第2図　調査区セクション

第Ⅲ層は、腐植土層で、調査区の南東部で確認した土層である。遺物は全く含まれていなかった。

第Ⅳ層は、自然堆積層で、第Ⅲ層が検出されなかった部分で確認した土層である。遺構はほとんどこの層の上面で検出された。

出土遺物は第Ⅰ層からのものが90％以上であり、図示できた72点はすべて第Ⅰ層から出土したものである。遺物は弥生土器から近世の陶磁器までが混在していた。

4．遺構と遺物

掘立柱建物址

ＳＢ１

ＳＢ１は、調査区中央部北東寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

建物は、１×１間の南北棟で、棟方向はＮ－20°－Ｅである。梁間（東西）2.30ｍ、桁行（南北）3.00ｍを測る。柱穴の平面形はすべてほぼ円形を呈し、直径25～50㎝を測り、柱径は直径約15㎝である。これら柱穴の深さは検出面より９～39㎝で、基底面の標高は6.747～7.069ｍを測る。柱間距離は、梁が2.30ｍ、桁が2.90ｍと3.00ｍである。埋土は褐灰色粘質土であった。付属施設と考えられるものは確認できなかった。出土遺物はすべて細片で、図示できるものはない。建物はＳＤ３と重複している。

ＳＢ２

ＳＢ２は、調査区中央部東寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

建物は、１×１間の東西棟で、棟方向はＮ－71°－Ｗである。梁間（南北）3.50ｍ、桁行（東西）3.60ｍを測る。柱穴の平面形は、すべて円形を呈し、直経12～32㎝を測り、柱径は直径約12㎝と推定される。柱穴の深さは検出面より10～22㎝、基底面の標高は6.951～7.066ｍを測る。柱間距離は、梁が3.50ｍ、桁が3.60ｍである。埋土は褐灰色粘質土であった。付属施設とみられるものは確認できなかった。遺物はほとんど出土せず、かつ、細片であり、図示できるものはない。建物はＳＤ９と重複している。

土坑

ＳＫ１

ＳＫ１は、調査区北部に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。遺構は調査区外に延びている。

平面形は、不整形を呈し、長径2.33ｍ、短径1.29ｍ、深さ0.17ｍを測る。長軸方向はＮ－

26°－Ｅである。断面形はほぼ逆台形をなし、壁は底面よりやや傾斜して上がっている。埋土は褐灰色粘質土であった。出土遺物は少なく、かつ、細片であり、図示できるものはない。

ＳＫ２

ＳＫ２は、調査区北部に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。遺構は調査区外へ延びている。

平面形は、不整形を呈し、長径3.20ｍ、短径1.71ｍ、深さ0.17ｍを測る。長軸方向はＮ－18°－Ｅである。断面形はほぼ逆台形をなし、壁は底面より傾斜して上がっている。底面には北部と南部に不整形の落ち込みがある。埋土は褐灰色粘質土であった。出土遺物は皆無に等しく、図示できるものはない。

ＳＫ３

ＳＫ３は、調査区北部に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。遺構は調査区外に延びている。

平面形は、ほぼ方形をなし、長径1.05ｍ、短径0.66ｍ、深さ８㎝を測る。長軸方向はＮ－10°－Ｅである。断面形はほぼ逆台形をなし、壁は底面より急角度で上がっている。埋土は褐灰色粘質土であった。出土遺物は皆無である。

ＳＫ４

ＳＫ４は、調査区北部に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

平面形は、方形を呈し、長径1.20ｍ、短径0.83ｍ、深さ４㎝を測る。長軸方向はＮ－72°－Ｗである。断面形は逆台形をなし、壁は底面より傾斜して上がっている。埋土は褐灰色粘質土であった。付属遺構として、西部の底面よりピットを検出した。出土遺物は皆無である。遺構はＳＤ２に切られている。

ＳＫ５

ＳＫ５は、調査区北部に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。遺構のほとんどは調査区外に延びている。

平面形は、不明であり、長径1.21ｍ以上、短径0.34ｍ以上、深さ0.30ｍを測る。長軸方向はＮ－15°－Ｗである。断面形はＵ字形を呈していたとみられ、壁は底面より内湾して上がっている。埋土は褐灰色粘質土であった。遺物は土師質土器の細片が数点出土したのみで、図示できるものはない。

ＳＫ６

ＳＫ６は、調査区北部に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

平面形は、楕円形を呈し、長径0.57ｍ、短径0.49ｍ、深さ0.19ｍを測る。長軸方向はＮ－

88°－Ｅである。断面形は逆台形をなし、壁は底面より急角度で上がっている。埋土は褐灰色粘質土であった。出土遺物は皆無である。

ＳＫ７

ＳＫ７は、調査区北部に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

平面形は、不整形を呈し、長径4.02ｍ、短径1.43ｍ、深さ８㎝を測る。長軸方向はＮ－66°－Ｗである。断面形はほぼ逆台形をなし、壁は底面より急角度で上がっている。底面は、ほぼ平坦で、中央部に不整の落ち込みを検出した。埋土は灰色粘質土であった。付属遺構として、北部でピットを検出した。出土遺物は少なく、かつ、細片で、図示できるものはなかった。遺構はＳＤ２を切って掘り込まれていた。

ＳＫ８

ＳＫ８は、調査区北部に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

平面形は、不整形で、長径1.94ｍ、短径0.60ｍ、深さ0.11ｍを測る。長軸方向はＮ－74°－Ｅである。断面形はほぼ逆台形をなし、壁は底面より急角度で上がっている。底面は、ほぼ平坦で、不整形の落ち込みを数ケ所で検出した。埋土は褐灰色粘質土であった。出土遺物は皆無である。遺構はＳＸ１に切られている。

ＳＫ９

ＳＫ９は、調査区中央部北寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

平面形は、不整形を呈し、長径2.90ｍ、短径0.78ｍ、深さ0.18ｍを測る。長軸方向はＮ－12°－Ｅである。断面形は逆台形をなし、壁は底面より急角度で上がっている。埋土は褐灰色粘質土であった。付属遺構として、底面より数個のピットを検出した。出土遺物は少なく、図示できたのは73の産地不明陶器である。

ＳＫ10

ＳＫ10は、調査区中央部に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

平面形は、楕円形を呈し、長径1.22ｍ、短径1.07ｍ、深さ0.40ｍを測る。長軸方向はＮ－71°－Ｅである。断面形はほぼ逆台形をなし、壁は底面より急角度で上がっている。埋土は、上層が黄灰色粘質土、下層が灰色粘質土であった。出土遺物は皆無である。遺構は３個のピットに掘り込まれていた。

ＳＫ11

ＳＫ11は、調査区中央部西寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

平面形は、不整形を呈し、長径1.20m、短径0.78m、深さ0.20mを測る。長軸方向はN－67°－Wである。断面形は逆台形をなし、壁は底面より急角度で上がっている。埋土は黄灰色粘質土であった。出土遺物は皆無である。遺構はＳＫ12を切って掘り込まれている。

ＳＫ12

ＳＫ12は、調査区中央部西寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

平面形は、不整形を呈し、長径1.39m、短径0.79m、深さ９cmを測る。長軸方向はN－75°－Wである。断面形は逆台形を呈し、壁は底面より傾斜して上がっている。埋土は褐灰色粘質土であった。出土遺物は皆無に等しく、図示できるものはなかった。遺構はＳＫ11に切られている。

ＳＫ13

ＳＫ13は、調査区中央部西寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

平面形は、不整楕円形を呈し、長径0.93m、短径0.70m、深さ0.23mを測る。長軸方向はN－70°－Ｅである。断面形はほぼＵ字形をなし、壁は底面より内湾気味に上がっている。底面は東部に２つの不整形の平場を有する。埋土は褐灰色粘質土であり、出土遺物は皆無であった。遺構はＳＤ12と接している。

ＳＫ14

ＳＫ14は、調査区ほぼ中央部に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

遺構は、ほぼ円形を呈し、直径0.87m、深さ0.22mを測る。断面形はほぼＵ字形をなし、壁は、底面より西部で緩やかに、東部で急角度で上がっている。埋土は灰色粘質土であった。出土遺物は少なく、図示できたのは74の瀬戸・美濃系碗１点のみである。遺構はＳＤ７を切って掘り込まれていた。

ＳＫ15

ＳＫ15は、調査区東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

平面形は、不整楕円形を呈し、長径1.00m、短径0.96m、深さ0.28mを測る。長軸方向はN－26°－Ｅである。断面形はＵ字形をなし、壁は底面より内湾気味に上がっている。埋土は、第Ⅰ層が茶褐色砂礫土、第Ⅱ層が灰黒色粘質土であった。出土遺物は皆無である。遺構はＳＫ16を切って掘り込まれている。

ＳＫ16

ＳＫ16は、調査区東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

平面形は、不整楕円形を呈し、長径1.40m、短径1.30m、深さ0.27mを測る。長軸方向はN－81°30′－Wである。断面形は逆台形をなし、壁は底面より急角度で上がっている。底面より大小4個の河原石を検出した。埋土は黒褐色粘質土であった。付属遺構として、東壁直下よりピットを検出した。出土遺物は皆無である。遺構はSK15に切られていた。

SK17

SK17は、調査区東端に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。遺構は調査区外に延びている。

平面形は、楕円形を呈するとみられ、長径1.30m以上、短径0.95m以上、深さ0.39mを測る。長軸方向はN－2°－Eである。断面形はほぼ逆台形をなし、壁は底面より急角度で上がっている。埋土は褐灰色粘質土であった。出土遺物は皆無である。

SK18

SK18は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

平面形は、不整形を呈し、長径1.41m、短径0.46m、深さ0.35mを測る。長軸方向はN－70°－Wである。断面形は逆台形をなし、壁は底面より急角度で上がっている。埋土は灰色粘質土であった。遺物は近世陶磁器の細片が数点出土したのみで、図示できるものはない。

SK19

SK19は、調査区中央部に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

平面形は、不整形を呈し、長径2.56m、短径0.68m、深さ0.18mを測る。長軸方向はN－12°－Eである。断面形は逆台形をなし、壁は底面より急角度で上がっている。埋土は灰色粘質土であった。遺物はほとんど出土せず、図示できたのは唐津系碗1点(75) のみである。

SK20

SK20は、調査区中央部東寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

平面形は、楕円形を呈し、長径1.50m、短径1.27m、深さ0.65mを測る。長軸方向はN－5°－Eである。断面形はU字形をなし、壁は底面より内湾して上がっている。壁に沿って、竹を笊編みしたものが検出された。埋土は灰色粘質土であった。出土遺物は皆無である。遺構はSK21を切って掘り込まれていた。

SK21

SK21は、調査区中央部東寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

平面形は、楕円形を呈し、長径1.45m、短径1.25m、深さ0.42mを測る。長軸方向はN－11°－Eであった。断面形は逆台形をなし、壁は平坦な底面より急角度で上がっている。壁に

沿って、竹を笊編みしたものが検出された。埋土は褐灰色粘質土であった。出土遺物は皆無である。遺構はＳＫ20に切られている。

ＳＫ22

ＳＫ22は、調査区東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

平面形は、不整形を呈し、長径1.58ｍ、短径1.45ｍ、深さ0.15ｍを測る。長軸方向はＮ－82°－Ｗである。断面形は逆台形をなし、壁は底面より急角度で上がっている。埋土は褐灰色粘質土であった。遺物は土師質土器片が数点出土したのみで、図示できるものはない。

ＳＫ23

ＳＫ23は、調査区西端に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

平面形は、不整形を呈し、長径4.12ｍ、短径1.03ｍ、深さ0.11ｍを測る。長軸方向はＮ－69°－Ｗである。断面形は逆台形をなし、壁は底面より急角度で上がっている。遺物は土師質土器の細片が数点出土したのみで、図示できるものはない。

ＳＫ24

ＳＫ24は、調査区南西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

平面形は、不整形を呈し、長径1.94ｍ、短径0.87ｍ、深さ0.18ｍを測る。長軸方向はＮ－9°－Ｅである。断面形はほぼ逆台形状をなし、壁は底面より急角度で上がっている。出土遺物は皆無であった。遺構は、ピットに掘り込まれ、かつ、ＳＫ25に切られている。

ＳＫ25

ＳＫ25は、調査区南西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

平面形は、楕円形を呈し、長径1.50ｍ、短径1.30ｍ、深さ0.34ｍを測る。長軸方向はＮ－88°－Ｗである。断面形は逆台形をなし、壁は底面より急角度で上がっている。底面より大小16個の河原石を検出した。埋土は褐灰色粘質土であった。出土遺物は皆無である。遺構はＳＫ24を切って掘り込まれていた。

ＳＫ26

ＳＫ26は、調査区南部に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

平面形は、不整楕円形を呈し、長径0.58ｍ、短径0.53ｍ、深さ0.11ｍを測る。長軸方向はＮ－9°－Ｅである。断面形は逆台形をなし、壁は底面より急角度で上がっている。埋土は褐灰色粘質土であった。出土遺物は皆無である。遺構はピットに掘り込まれていた。

溝

ＳＤ１

ＳＤ１は、調査区北部に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。溝はさらに調査区外へ延びている。

溝は、南北に延びるもので、途中で２条に分かれ、南端で広がっている。幅0.20～2.00ｍ、深さ２～19㎝、残存長4.30ｍを測る。断面形はＵ字形ないし逆台形をなし、壁は底面より傾斜して上がっている。埋土は灰色粘質土であった。遺物は近世陶磁器の細片が数点出土したのみで、図示できるものはない。

ＳＤ２

ＳＤ２は、調査区北部に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

溝は、南北に延びる細長いもので、幅0.20～0.40ｍ、深さ１～４㎝、全長9.30ｍを測る。断面形はほぼＵ字形をなし、壁は底面より内湾気味に上がっている。底面は南北両端から中央部に向ってやや傾斜している。埋土は灰色粘質土であった。出土遺物はすべて細片で、図示できるものはない。溝は、ＳＫ４を切って掘り込まれ、ＳＫ７に切られている。

ＳＤ３

ＳＤ３は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

溝は、南北に延びるもので、幅0.80～1.80ｍ、深さ７～46㎝、全長13.80ｍを測る。断面形はほぼＵ字形をなし、壁は底面より内湾して上がっている。底面は南に向ってやや傾斜している。埋土は、上層が黄灰色粘質土、下層が褐灰色粘質土であった。

遺物は弥生土器から近世陶磁器までが混在していたが、ほとんど細片で、図示できたのは86の唐津系の碗１点のみである。溝は、ＳＤ４に切られ、かつ、多数のピットに掘り込まれている。

ＳＤ４

ＳＤ４は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

溝は、東西に延びるもので、幅0.50～2.00ｍ、深さ0.23～0.49ｍ、全長約11.00ｍを測る。断面形はほぼ逆台形をなし、壁は底面より急角度で上がっている。底面では多数の河原石が散在していた。埋土は、上層が灰色粘質土、下層が黄灰色粘質土であった。

遺物は、弥生土器から近世陶磁器までが散在していて、図示できたのは77～80の４点のみであった。この内の３点の弥生土器は混入したものとみられる。溝はＳＤ３・12を切って掘り込まれている。

ＳＤ５

ＳＤ５は、調査区西端に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。溝のほとんどは調査区外へ延びている。

溝は、東西に延びるものとみられ、幅1.00～2.40ｍ、深さ３～26㎝、残存長2.70ｍを測る。断面形はほぼ逆台形をなし、壁は底面より傾斜して上がっている。底面では多数の河原石を検出した。埋土は灰褐色粘質土であった。付属遺構としてＳＰ１を検出した。出土遺物はほとんど細片で、図示できたのは81と82の２点のみである。

ＳＤ６

ＳＤ６は、調査区中央部北東寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

溝は、南北に延びる細長いもので、幅0.25～0.40ｍ、深さ７～20㎝、全長5.50ｍを測る。断面形はほぼU字形をなし、壁は底面より内湾して上がり、底面は北に向って傾斜している。埋土は褐灰色粘質土であった。出土遺物は皆無である。溝は２個のピットに掘り込まれていた。

ＳＤ７

ＳＤ７は、調査区中央部東寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

溝は、南北に延びるもので、南端で２条に分かれる。幅0.20～1.40ｍ、深さ３～25㎝、全長約10.00ｍを測る。断面形はほぼ逆台形をなし、壁は底面より傾斜して上がっている。埋土は灰色粘質土であった。

遺物は、多数の近世陶磁器を中心に、底面より投棄された状態で出土した。この中にはいくつかの木製品も含まれていた。この内、図示できたのは83～95、120～124の18点で、５点の木製品が含まれる。溝は、ＳＫ14・20・21に切られ、ＳＤ８と接している。

ＳＤ８

ＳＤ８は、調査区中央部東寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

溝は、南北に延びる細長いもので、北端でＳＤ７と接している。幅0.12～0.88ｍ、深さ３～17㎝、全長12.80ｍを測る。断面形はほぼU字形をなし、壁は底面より内湾して上がっている。埋土は灰色粘質土であった。

遺物は、ＳＤ７同様、多数の近世陶磁器を中心に底面より投棄された状態で出土した。この中には数点の木製品が含まれる。この内、図示できたのは96～107、119の13点である。溝はＳＤ７と接する。

ＳＤ９

ＳＤ９は、調査区中央部東寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

溝は、南北に延びる短いもので、幅0.34～0.50m、深さ0.10～0.25m、全長2.03mを測る。断面形はほぼU字形をなし、壁は底面より急角度で上がっている。埋土は灰色粘質土である。出土遺物は皆無に等しく、図示できるものはなかった。溝はＳＢ２の柱穴を切って掘り込まれていた。

ＳＤ10

ＳＤ10は、調査区西端に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。溝はさらに調査区外へ延びている。

溝は、東西に延びるもので、幅0.80～1.00m、深さ８～11cm、残存長2.00mを測る。断面形はほぼ逆台形をなし、壁は底面より急角度で上がっている。埋土は褐灰色粘質土であった。出土遺物は皆無である。

ＳＤ11

ＳＤ11は、調査区南西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。溝はさらに調査区外へ延びている。

溝は、北側で南北に延びたのち、南へ屈曲して延びる。幅0.48～1.10m、深さ７～28cm、残存長約10.00mを測る。断面形は逆台形をなし、壁は底面より急角度で上がっている。埋土は、上層が灰褐色粘質土、下層が灰茶褐色砂質土であった。遺物は土師質土器や瓦質土器の細片ばかりで、図示できるものはない。

ＳＤ12

ＳＤ12は、調査区中央部西寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

溝は、南北に延びるもので、幅0.40～1.40m、深さ６～９cm、残存長3.00mを測る。断面形は逆台形をなし、壁は底面より急角度で上がっている。底面は南に向ってやや傾斜している。埋土は灰色粘質土であった。出土遺物は皆無である。溝は、ＳＤ４に切られ、かつ、ピットに掘り込まれていた。

井戸

ＳＥ１

ＳＥ１は、調査区北部に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

平面形は、楕円形を呈し、長径2.33m、短径2.10m、深さ2.50mを測る。井戸の本体は、石組になっていたとみられるが、すべて抜き取られていて明確ではない。底には自然木を刳り貫いた井筒が設置されている場合が多いが、この井戸からは検出することができなかった。堀り方の断面形はほぼ逆台形状をなす。埋土は、上層が人頭大の河原石を含んだ灰褐色粘質土、下

層が灰色粘性砂礫土であった。

遺物は、中世陶磁器や近世陶磁器が混在して少量出土したのみで、図示できたのは108～110の３点である。110は瀬戸・美濃系灰釉皿で大窯４期に相当する。なお、他の近世陶磁器片もほぼ同時期のものである。

水溜状遺構

ＳＰ１

ＳＰ１は、調査区西端に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

ＳＤ５に伴うもので、ＳＤ５に掘り込まれている。平面形は、ほぼ円形を呈し、直径1.88ｍ、深さ0.73ｍを測る。断面形は逆台形状をなし、壁は底面より急角度で上がっている。埋土は、灰褐色粘質土を始めとして６層に分層できる。出土遺物は少なく、図示できたのは111の瀬戸・美濃系の香炉１点のみであった。遺構はＳＤ５と接している。

性格不明遺構

ＳＸ１

ＳＸ１は、調査区北部に位置し、第Ⅳ層上面で検出した。

遺構は、南西部が撹乱されているが、平面形は、ほぼ方形を呈していたとみられ、長径3.70ｍ、短径2.80ｍ、深さ0.28ｍを測る。断面形はほぼ逆台形をなし、壁は底面より急角度で上がっている。埋土は、上層が灰褐色粘質土、下層が黄灰色粘質土であった。付属遺構として、３個のピットを検出した。出土遺物は、図示できた112の土師質土器鍋と、113の瀬戸・美濃系天目茶碗２点であった。遺構はＳＫ８を切って掘り込まれている。

５．まとめ

Loc.22では以上の遺構を確認することができた。以下それらについてまとめてみたい。

まず、掘立柱建物址では、出土遺物に乏しく時期を明確に出来ないが、２棟ともほぼ同じ方向を示し、かつ、ＳＤ７・８に平行に建てられていることからそれらとほぼ同時期ではないかとの観方も出来るが、これは一つの可能性である。

土坑は、散在し、かつ、一時期に決定し得る遺物に乏しく、時期を明確にできないが、数少ない遺物から時期が判明するＳＫ９・14・19は17～18世紀の遺構であり、埋土が類似する他の土坑もほぼその頃に属するのではないかとみられる。この内、竹を笊編みしたものが検出されたＳＫ20・21は、他の土坑とは異なる何らかの施設が設けられていたのではなかろうか。

溝は、ほぼ同じ方向に造られているが、規格性があったとは考えにくく、その性格は不明で

ある。遺物はＳＤ７・８を中心に近世陶磁器が出土していた。このＳＤ７・８からは、伊万里系磁器ではⅢ期を中心にⅠ期からⅣ期が混在して出土し、ほぼ同時期の唐津系、瀬戸・美濃系、在地等の陶磁器も出土している。このことからこの２つの溝は18世紀末から19世紀前半には廃絶したとみられる。他の溝も、ほぼ同じ方向を示すことや埋土が類似することから、ほぼ同時期のものと把握して誤りないと考える。

井戸は１基しか検出されないが、出土した擂鉢が備前のⅤ期、甕が備前のⅣ期、瀬戸・美濃系灰釉皿が大窯４期に相当することから、15世紀から16世紀にかけてのものとみられる。しかし、このＳＥ１に伴う屋敷関係の遺構は確認できなかった。

他の遺構では、ＳＰ１が出土した瀬戸・美濃系香炉から17世紀後半から18世紀前半にかけての遺構であり、ＳＸ１が出土した瀬戸・美濃系天目茶碗から17世紀頃の遺構であるとみられる。

以上、Loc. 22では17世紀から18世紀を中心とした遺構を確認することができた。

第１表　掘立柱建物址計測表

挿図番号	遺構番号	規模			棟方向	面積 (m²)	備考
		梁(間)×桁(間)	梁 × 桁(m)	柱間距離(m)			
第３図	ＳＢ１	１ × １	2.30 × 3.00	2.30 ～ 3.00	N－20°－E	6.9	
〃	ＳＢ２	１ × １	3.50 × 3.60	3.50 ～ 3.60	N－71°－W	12.6	

第２表　土坑計測表

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第４図	ＳＫ１	不整形	2.33	1.29	0.17	N－26°－E	逆台形	
――	ＳＫ２	〃	3.20	1.71	0.17	N－18°－E	〃	
第４図	ＳＫ３	方形	1.05	0.66	0.09	N－10°－E	逆台形状	
〃	ＳＫ４	〃	1.20	0.83	0.04	N－72°－W	逆台形	
――	ＳＫ５	不明	1.21 以上	0.34 以上	0.30	N－15°－W	Ｕ字形	
――	ＳＫ６	楕円形	0.57	0.49	0.19	N－88°－E	逆台形	
――	ＳＫ７	不整形	4.02	1.43	0.08	N－66°－W	〃	
――	ＳＫ８	〃	1.94	0.60	0.11	N－74°－E	〃	

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第4図	SK 9	不整形	2.90	0.78	0.18	N－12°－E	逆台形	
〃	SK 10	楕円形	1.22	1.07	0.40	N－71°－E	〃	
〃	SK 11	不整形	1.20	0.78	0.20	N－67°－W	〃	
〃	SK 12	〃	1.39	0.79	0.09	N－75°－W	〃	
〃	SK 13	不整楕円形	0.93	0.70	0.23	N－70°－E	U字形	
〃	SK 14	円形	0.87	——	0.22	———	〃	
〃	SK 15	不整楕円形	1.00	0.96	0.28	N－26°－E	〃	
〃	SK 16	〃	1.40	1.30	0.27	N-81°30′-W	逆台形	
——	SK 17	楕円形	1.30以上	0.95以上	0.39	N－2°－E	〃	
——	SK 18	不整形	1.41	0.46	0.35	N－70°－W	〃	
第5図	SK 19	〃	2.56	0.68	0.18	N－12°－E	〃	
〃	SK 20	楕円形	1.50	1.27	0.65	N－5°－E	U字形	
〃	SK 21	〃	1.45	1.25	0.42	N－11°－E	逆台形	
〃	SK 22	不整形	1.58	1.45	0.15	N－82°－W	〃	
——	SK 23	〃	4.12	1.03	0.11	N－69°－W	〃	
第5図	SK 24	〃	1.94	0.87	0.18	N－9°－E	〃	
〃	SK 25	楕円形	1.50	1.30	0.34	N－88°－W	〃	
——	SK 26	不整楕円形	0.58	0.53	0.11	N－9°－E	〃	

第３表　包含層出土土器観察表

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手法	備考
1	第Ⅰ層	弥生土器 甕	21.8 4.9 —— ——	ほぼ直立する胴部から、口縁部は短く反し、端部にヘラ状原体による刻目を施す。(如意形口縁)	口縁部ヨコナデ調整。内面ナデ調整。外面ハケ調整。	
2	〃	須恵器 杯蓋	10.4 (1.8) —— ——	丸味のある底部より、口縁部は緩やかに下り、端部で少なく下方へ屈曲する。	内外面ともヨコナデ調整。	内外面とも青灰色。

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
3	第Ⅰ層	土師質土器 小皿	8.6 2.2 —— 4.0	平らな底部から、体部は上外方へ上がり、端部を細く仕上げる。	内面にロクロ目が残存。他は不明。底部は回転糸切り底である。	
4	〃	土師質土器 皿	10.6 2.2 —— 6.0	平らな底部から、体部は上外方へ上がり、端部を丸く仕上げる。	内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り底。	
5	〃	土師質土器 杯	10.0 (3.0) —— ——	体部は上外方へ上がり、そのまま口縁部に至り、端部を丸く仕上げる。	内外面ともロクロナデ。	
6	〃	擂鉢	29.4 (6.5) —— ——	体部は上外方へ上がり、口縁部は内傾してのびる。口縁部下端をやや拡張する。	内外面ともロクロナデ。内面には８本単位の条線を部分的に施す。	備前焼。
7	〃	〃	10.6 (5.7) —— ——	体部は上外方へ上がり、口縁部はほぼ直立し下端を拡張する。	内外面ともロクロナデ。内面には９本単位の条線を部分的に施す。	〃
8	〃	皿	13.4 3.1 —— 7.0	削り出し高台。体部は内湾気味に上がる。	見込にコンニャク判の五弁花と口縁内面蔓草文。見込蛇ノ目状釉ハギ。	伊万里系。
9	〃	〃	—— (3.0) —— 8.0	〃	口縁内面に唐草文。外面に文様と高台外面に３条の界線。	〃
10	〃	〃	14.0 3.2 —— 8.0	蛇ノ目凹形高台。体部は内湾気味に上がり、端部を丸く仕上げる。深皿。	見込と口縁内面に草花文。外面に文様と１条の界線。	伊万里系。 胎土、灰色。
11	〃	猪口	3.6 1.5 —— 1.2	削り出し高台。体部は内湾気味に上がり、端部は水平な面をなす。	内外面に透明釉を施釉する。	〃
12	〃	〃	4.6 (0.7) —— ——	口縁部は内湾気味に上がり、端部は水平な面をなす。	外面に放射線状の刻目。	〃
13	〃	〃	4.8 (1.2) —— ——	体部は内湾気味に上がり、端部は内傾する平面をなす。	〃	〃
14	〃	〃	4.4 (1.4) —— ——	体部は内湾気味に上がり、そのまま口縁部に至る。端部上方を向く凹面をなす。	〃	胎土、白色。 伊万里系。

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
15	第Ⅰ層	猪口	4.8 (1.2) —— ——	体部は内湾気味に上がり、口縁部で上外方を向く。端部は細く仕上げられる。	外面に放射線状の刻目。	胎土、白色。 伊万里系。
16	〃	〃	6.2 3.3 —— 2.4	削り出し高台。体部は上外方へ上がり、口縁部で反り、端部を細く仕上げる。	内外面に施釉。畳付は釉ハギ。	〃
17	〃	〃	6.4 2.9 —— 2.6	削り出し高台。体部は内湾気味に上がり、端部は細く仕上げる。	口縁外面に文様あり。	〃
18	〃	〃	6.6 3.3 —— 2.8	削り出し高台。体部は上外方へ上がり、端部は細く仕上げる。	口縁外面に数条の界線あり。	〃
19	〃	〃	7.8 (1.5) —— ——	体部は内湾気味に上がり、端部を細く仕上げる。	外面に祥瑞の丸文。呉須の発色はよい。	〃
20	〃	碗	8.0 4.1 —— 3.4	削り出し高台。体部は内湾気味に上がり、端部を丸く仕上げる。	外面に文様。高台外面に2条の界線。	胎土、灰白色。 伊万里系。
21	〃	〃	5.8 (3.0) —— ——	削り出し高台。体部は内湾気味に上がる。	畳付釉ハギ。半磁器。	〃
22	〃	〃	—— (3.4) —— 3.6	削り出し高台。体部は内湾気味に上がり、口縁部で直立する。	外面に蔓草文。高台外面に2条の界線。見込に1条の界線。	胎土、白色。 伊万里系。
23	〃	〃	—— (4.0) —— 10.8	上外方へのびる口縁部。端部は細く仕上げられる。	口縁内面に文様。外面に1条の界線と草花文。	〃
24	〃	〃	11.4 6.2 —— 4.6	削り出し高台。体部は内湾気味に上がり、口縁部で上外方へのびる。	口縁内面に文様。外面に窓絵と界線。	〃
25	〃	〃	10.6 6.6 —— 6.4	広東茶碗である。削り出し高台。体部は内湾気味に上がり、端部を丸く仕上げる。	口縁内面に3条の界線。外面に草花文。高台外面に2条の界線。	〃
26	〃	瓶	1.2 7.5 2.8 2.2	仏具とみられる。削り出し高台。胴部は内湾して上がり、口頸部は直立する。	外面に文様あり。	〃
27	〃	蓋文	4.8 1.0 —— ——	平らな天井部。内面を削り出す。	天井部に山水文。	〃
28	〃	碗	11.4 (3.8) —— ——	体部は内湾気味に上がり、端部を丸く仕上げる。	口縁内面と外面に文様あり。	胎土、白色。 能茶山焼。
29	〃	〃	11.1 6.9 —— 6.6	広東茶碗。削り出し高台。体部は内湾気味に上がり、端部を細く仕上げる。	見込に1条の界線と文様。外面に文様。高台外面に2条の界線。外底に「サ」の銘あり。	〃

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
30	第Ⅰ層	蓋	9.2 3.0 —— 4.2	碗の蓋である。丸味のある天井部から、口縁部は内湾して下る。天井部には削り出しのつまみが付く。	内面に雷文。外面に文様あり。つまみの内側にも1条の界線と銘がある。	胎土、白色。 能茶山焼。
31	〃	皿	11.8 3.2 —— 4.6	削り出し高台。体部は内湾気味に上がり、端部を丸く仕上げる。青緑皿。	見込に蛇ノ目状釉ハギ。体部外面回転ヘラ削り。	胎土、灰白色。 唐津系。
32	〃	〃	12.8 3.0 —— 5.0	〃	〃	〃
33	〃	〃	15.0 (2.1) —— ——	口縁部は内湾気味に上がり、端部を丸く仕上げる。青緑皿。	内外面に青緑色釉を施釉。	〃
34	〃	碗	11.8 (3.6) —— ——	〃	内外面に淡緑色釉を施釉。	〃
35	〃	〃	—— (4.6) —— 4.3	削り出し高台。体部は内湾気味に上がる。	見込から外面にかけて、淡青緑色釉を施釉する。	〃
36	〃	〃	—— (3.8) —— 5.2	〃	見込から外面にかけて、鉄釉を施釉する。体部外面回転ヘラ削りのあとナデ調整。	〃
37	〃	瓶	4.8 26.0 16.4 11.4	削り出し高台。胴部は内湾気味に上がり、口頸部はほぼ直立し、端部で短く外反する。	二彩唐津で、外面にハケ目。内面ロクロナデ。下胴部回転ヘラ削り。口縁部から外面にかけて施釉。	胎土、赤褐色。 唐津系。
38	〃	甕	37.4 (2.6) —— ——	口縁部は内反して上がり、端部両端を拡張し、2条の凹線を施す。	外面にハケ目。内面ロクロナデ。口唇部から外面にかけて施釉。	胎土、灰褐色。 唐津系。
39	〃	碗	11.8 6.4 —— 6.8	広東茶碗である。削り出し高台。体部は内湾気味に上がり、端部を丸く仕上げる。	口縁内面に2条の界線と見込に梅文。外面に松竹梅文。	胎土、黄白色。 瀬戸・美濃系。
40	〃	〃	12.2 6.9 —— 6.0	〃	口縁内面に2条の界線と見込に梅文。外面に捻文。高台外面に1条の界線。	〃
41	〃	瓶	8.4 (2.9) —— ——	胴部は内湾して上がり、口縁部はほぼ直立する。内面にかえりが付く。	外面に赤絵あり。	胎土、白色。 瀬戸・美濃系。
42	〃	鍋	18.0 (3.7) —— ——	胴部は内湾して上がり、口縁部で屈曲する。行平鍋。	口縁内面以外に施釉。	〃
43	〃	擂鉢	18.6 (6.4) —— ——	体部は上外方へやや内湾気味に上がり、口縁部を肥厚し、外面に2条の凹線を施す。	内外面ロクロナデ。内面全面に14本単位の条線を施す。	備前焼。
44	〃	〃	17.0 (5.8) —— ——	体部は上外方へやや内湾気味に上がり、口縁部はやや肥厚され、外面に2条の凹線を施す。	内外面ともロクロナデ。外面は回転ヘラ削りのあとロクロナデ。内面全面に7本単位の条線を施す。	〃

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
45	第Ⅰ層	擂鉢	33.0 (4.1) —— ——	体部は上外方へ上がり、口縁部を肥厚させ、外面に2条の凹線を施す。	内外面ともロクロナデ。内面には7本以上の単位の条線を施す。	備前焼。
46	〃	〃	36.8 (3.7) —— ——	〃	内外面ともロクロナデ。内面には11本以上の単位の条線を施す。	〃
47	〃	〃	33.4 (5.3) —— ——	体部は内湾気味に上がり、口縁部を肥厚させ、外面に2条の凹線を施す。	口縁部から内面にかけてロクロナデ。外面回転ヘラ削り。内面には9本単位の条線を施す。	〃
48	〃	〃	34.0 (4.5) —— ——	口縁部を肥厚させ、外面に2条の凹線を施す。	内外面ロクロナデ。内面には8本単位の条線を施す。	〃
49	〃	〃	38.8 (7.6) —— ——	体部は上外方へ上がり、口縁部を肥厚させ、外面に2条の凹線を施す。	内外面ロクロナデ。内面全面に8本単位の条線を施す。	〃
50	〃	皿	9.6 2.3 —— 4.8	削り出し高台。口縁部は外反気味に短く上がり、端部を丸く仕上げる。	体部外面回転ヘラ削り。見込から外面にかけて施釉。	青緑色釉。
51	〃	猪口	6.6 3.4 —— 2.2	削り出し高台。体部は内湾し、口縁部で上外方へのびる。	口縁内面に2条の界線と見込に文様。外面に文様。	胎土、白色。
52	〃	碗	—— (3.0) —— 4.2	削り出し高台。体部は内湾気味に上がる。	見込に胎土目が4ケ所残存。見込から外面にかけて施釉。	黄橙色釉。
53	〃	〃	—— (2.9) —— 5.4	〃	畳付釉ハギ。	淡黄橙色釉。
54	〃	〃	—— (3.4) —— 4.2	〃	見込に1条の界線と銘。外面に草花文と3条の界線。外底に1条の界線と銘。	胎土、白色。
55	〃	〃	9.6 7.2 —— 3.6	〃	畳付釉ハギ。	青緑色釉。
56	〃	〃	—— (3.1) —— 5.2	〃	見込から外面にかけて施釉。	胎土、灰白色。
57	〃	鉢	17.2 (4.0) —— ——	体部は内湾気味に上がり、口縁部は直立し、端部を内方へ屈曲さす。	全面に施釉。	青緑色釉。
58	〃	瓶	4.3 15.0 8.2 4.6	削り出し高台。胴部は内傾して上がり、口縁部で内方に屈曲したのち直立する。注口、把手が付く。	畳付に砂が付着。内底面と外面に施釉。	鉄釉。
59	〃	鍋	12.4 8.9 10.7 ——	胴部はやや外傾してのび、口縁部で屈曲し、端部で内方へ曲げる。行平鍋。	口縁部内面以外に施釉。	〃

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
60	第Ⅰ層	橙明皿	6.5 4.3 — 3.0	皿の上に脚の付く皿がのる。皿は斜め上方を向き、端部を丸く仕上げる。	下の皿の外面以外に施釉。底部回転糸切り底。	鉄釉。
61	〃	不明	— (3.5) — 7.2	平らな底部から、胴部は直立する。	内面ロクロナデ。胴部外面に施釉。底部は回転糸切り底。	淡青緑色釉。
62	〃	〃	— (3.6) — 9.0	削り出し高台。胴部は直立する。	〃	鉄釉。
63	〃	〃	— (2.2) — 9.8	底部端部に小さな台を3ケ所に付ける。体部は上外方へのびる。	内面施釉。外面ロクロナデ。	〃
64	〃	玉	長さ 0.6 径 0.6 孔の径 0.2 重量(g) 3.2	土製の玉で、ほぼ球体をなし、ほぼ中央部に円孔を穿つ。	表面は摩耗している。	褐色を呈す。
65	〃	〃	長さ 0.7 径 0.7 孔の径 0.1 重量(g) 3.3	〃	〃	〃
66	〃	〃	長さ 0.7 径 0.7 孔の径 0.1 重量(g) 3.1	〃	〃	〃
67	〃	〃	長さ 0.7 径 0.7 孔の径 0.1 重量(g) 2.9	〃	〃	〃
68	〃	〃	長さ 0.6 径 0.7 孔の径 0.1 重量(g) 2.7	〃	〃	〃
69	〃	〃	長さ 0.6 径 0.6 孔の径 0.2 重量(g) 2.8	〃	〃	〃
70	〃	〃	長さ 0.7 径 0.6 孔の径 1.2 重量(g) 2.6	〃	〃	〃

第4表　包含層出土石器観察表

挿図番号	層位	器種	計測値(cm, g) 最大長 / 最大幅 / 最大厚 / 重量	材質	特徴	備考
71	第Ⅰ層	石斧	8.4 5.3 1.5 84.0	砂質結晶片岩	環状石斧で約½が欠損している。刃部は両面から研ぎだされている。全面を研磨するが、部分的敲打痕が残る。	

挿図番号	層位	器種	計測値(cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重量	材質	特徴	備考
72	第Ⅰ層	石臼	復元径 28.5 厚さ 8.4 重量(kg) 3.6	砂岩	上臼で、約½が欠損する。上面は内側をくぼませ、やや外よりに供給口を設ける。摺目は摩滅してやや浅く残る。	

第5表　遺構出土土器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
73	SK9	碗	11.2 (4.3) —— ——	体部は内湾気味に上がり、口縁部は反り、端部は細く仕上げる。	見込から外面にかけて施釉。体部外面回転ヘラ削り。	鉄釉。
74	SK14	〃	13.4 (5.4) —— ——	体部は内湾気味に上がり、端部は丸く仕上げる。	〃	胎土、黄白色。 瀬戸・美濃系。
75	SK19	〃	—— (3.2) —— 4.4	削り出し高台。体部は内湾気味に上がる。	見込から外面にかけて施釉。体部外面回転ヘラ削り。見込に胎土目が残る。	鉄釉。 唐津系。
76	SD3	〃	8.8 (5.6) —— ——	体部は内湾し、口縁部はほぼ直立し、端部を丸く仕上げる。天目茶碗。	見込から外面にかけて施釉。体部外面ナデ調整。	〃
挿図番号	遺構	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
77	SD4	弥生土器 壺	15.4 (8.1) —— ——	内傾して上がる頸部から、口縁部は短く外傾する。外面に3本のヘラ描沈線を2段に施す。	口縁部ヨコナデ調整。他はナデ調整。	
78	〃	弥生土器 甕	19.4 (3.9) —— ——	如意形口縁。端部下端にヘラ状原体による刻目を施す。	〃	
79	〃	〃	14.4 8.1 —— ——	如意形口縁。端部下端にヘラ状原体による刻目を施す。胴部は内湾気味に上がる。	〃	上胴部に黒斑が残存。
挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
80	SD4	碗	—— (4.9) —— 5.4	削り出し高台。体部は内湾して上がる。	畳付釉ハギ。高台内の削りが深い。	京焼系。
81	SD5	仏飯器	6.6 (3.2) —— ——	体部は内湾して上がり、端部を丸く仕上げる。	外面に蛸唐草文。	胎土、白色。 伊万里系。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　　態	文　様　・　手　法	備　　考
82	ＳＤ５	鍋	48.4 (2.5) —— ——	口縁部は緩やかに上がる。端部は丸く仕上げる。	口縁部ヨコナデ。内面ナデ。	外面には煤が付着。
83	ＳＤ７	土師質土器 小皿	6.6 (1.3) —— 4.0	平らな底部から体部は内湾気味に上がり、端部を細く仕上げる。	内外面ロクロナデ。底部は回転糸切り底。	
84	〃	猪口	4.4 (1.6) —— 3.6	削り出し高台。体部は内湾気味に上がり、端部は水平な平面をなす。	外面に放射線状の刻目。	胎土、白色。 伊万里系。
85	〃	碗	—— 4.2 —— 5.6	削り出し高台。体部は内湾気味に上がる。	見込、口縁内面と外面に文様あり。外底に茶の銘。	胎土、白色。 能茶山焼。
86	〃	〃	10.8 5.9 —— 4.0	削り出し高台。体部は内湾気味にのび、口縁部は上外方へ上がり、端部を丸く仕上げる。	見込と口縁内面に１条の界線と文様。外面に草花文と１条の界線。	〃
87	〃	蓋	9.8 3.2 —— 4.0	天井部は丸味を有し、そのまま下り、端部を丸く仕上げる。天井部にはつまみを付ける。	つまみは削り出しによる。内面に雷文、外面に「寿福」銘をはさんで窓絵。	〃
88	〃	〃	9.7 2.7 —— 5.6	〃	つまみは削り出しによる。内外面に文様あり。	胎土、白色。 能茶山焼。 広東茶碗の蓋。
89	〃	皿	11.2 2.4 —— 4.4	削り出し高台。体部は斜め上方へ上がり、端部を丸く仕上げる。	見込から外面にかけて施釉。見込に砂目が残る。	胎土、灰白色。 唐津系。
90	〃	碗	8.6 5.6 —— 4.5	削り出し高台。体部は内湾し、口縁部は上外方へ上がり、端部を細く仕上げる。	体部外面に回転ヘラ削り。見込から外面にかけて施釉。	胎土、灰白色。 唐津系。外底面に煤が付着する。
91	〃	擂鉢	29.8 (5.9) —— ——	体部は上外方へ上がり、口縁部は肥厚され、外面に２条の凹線を施す。	口縁部から内面にかけてロクロナデ。外面回転ヘラ削り。内面全面に７本単位の条線を施す。	備前焼。
92	〃	皿	9.0 2.3 —— 4.3	削り出し高台。口縁部は短く外反する。	体部外面回転ヘラ削り。見込から外面にかけて施釉。	青緑色釉。
93	〃	碗	11.6 (3.7) —— ——	体部は内湾し、口縁部は上外方へのび、端部を丸く仕上げる。外面に１条の凹線。	〃	鉄釉。
94	〃	甕	24.0 (15.0) 32.8 ——	胴部は内湾して上がり、口縁部は直立し、両端部を肥厚さす。	内外面ともロクロナデ。外面に施釉。	〃
95	〃	鍋	—— 3.8 —— 6.2	体部は上外方へのび、鍔は斜め下方を向く。	内外面ロクロナデ。底部回転糸切り底。	胎土、白色。 鍔以下に煤が付着する。
96	ＳＤ８	土師質土器 皿	10.4 1.9 —— 6.0	平らな底部から、体部は上外方へのび、端部を丸く仕上げる。	〃	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
97	SD8	皿	14.4 2.3 —— 6.6	削り出し高台。体部は内湾気味に上がり、端部を丸く仕上げる。	口縁内面に蔓草文、見込蛇ノ目状釉ハギ。畳付に砂が付着。	胎土、灰白色。伊万里系。
98	〃	碗	7.6 3.7 —— 2.0	削り出し高台。体部は内湾気味に上がり、端部を細く仕上げる。	口縁外面に笹文。	胎土、白色。伊万里系。
99	〃	〃	7.4 3.5 —— 1.8	削り出し高台。体部は内湾気味に上がり、端部を丸く仕上げる。	〃	〃
100	〃	〃	10.2 5.3 —— 3.2	削り出し高台。体部は内湾気味にのび、口縁はほぼ直立し、端部を細く仕上げる。	口縁内面に3条の界線。外面に鶴の文様。	〃
101	〃	蓋	8.8 2.3 —— ——	丸い天井部には擬宝珠形のつまみが付く。口縁部は水平となり、内面にかえりが付く。	内面ロクロナデ。外面に施釉。	胎土、浅黄色。瀬戸・美濃系。
102	〃	皿	19.0 4.0 —— 7.6	削り出し高台。体部はやや内湾気味に上がる。	見込蛇ノ目状釉ハギ。	藁灰釉。
103	〃	碗	12.6 4.7 —— 4.2	削り出し高台。体部は内湾して上がり、端部を丸く仕上げる。	見込蛇ノ目状釉ハギ。見込から外面にかけて施釉。	胎土、灰白色。
104	〃	〃	13.8 5.6 —— 4.8	削り出し高台。体部は内湾して上がり、口縁部で外傾する。口唇部を5ケ所内側におりまげる。	見込から外面にかけて青緑色釉がかかる。	〃
105	〃	〃	11.0 7.6 —— 3.8	削り出し高台。体部は内湾してのび、口縁部はほぼ直立し、端部を丸く仕上げる。	見込から外面にかけて施釉。見込に胎土目が3ケ所残る。体部外面回転ヘラ削り。	〃
106	〃	瓶	9.6 10.8 19.0 12.0	胴部は内湾して上がり、口縁部は短く上方を向く。肩部には円孔を穿った把手が付く。	内面ロクロナデ。外面胴部以下に回転ヘラ削り。口縁部から外面にかけて施釉。	〃
107	〃	合子	—— (5.6) 10.6 6.4	平らな底部から、胴部は上外方へのびたのち直立する。	内面ロクロナデ。外面にヘラで文様を施す。下胴部外面に回転ヘラ削り。外面に施釉。	鉄釉。
108	SE1	擂鉢	29.4 (5.1) —— ——	体部は上外方へのび、口縁部はほぼ直立し、下端を拡張する。	内外面ロクロナデ。内面には7本単位の条線を部分的に施す。	備前焼。
109	〃	甕	32.0 (5.9) —— ——	玉縁口縁。	内外面ロクロナデ。	〃
110	〃	皿	9.0 2.4 —— 3.6	碁笥底。体部はやや外反気味に上がり、端部を丸く仕上げる。	見込円形釉ハギ。見込から外面にかけて施釉。	灰釉。瀬戸・美濃系。
111	SP1	香炉	10.8 6.8 —— ——	平らな底部には3ケの高台が付く。体部は直立し、口縁部は内側に拡張する。	外面に半割菊文。内面ロクロナデ。口縁部から外面にかけて施釉。	胎土、黄白色。灰釉。瀬戸・美濃系。丸彫半割菊文香炉。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形　態	文様・手法	備　考
112	ＳＸ１	土師質土器 鍋	49.0 (5.9) —— ——	口縁部は上外方へのび、端部で外傾する。	器面は摩耗が著しく、調整不明。	
113	〃	碗	11.2 (4.0) —— ——	天目茶碗で、口縁部は内湾気味に上がり、端部を丸く仕上げる。	見込から外面にかけて施釉。	鉄釉。 瀬戸・美濃系。

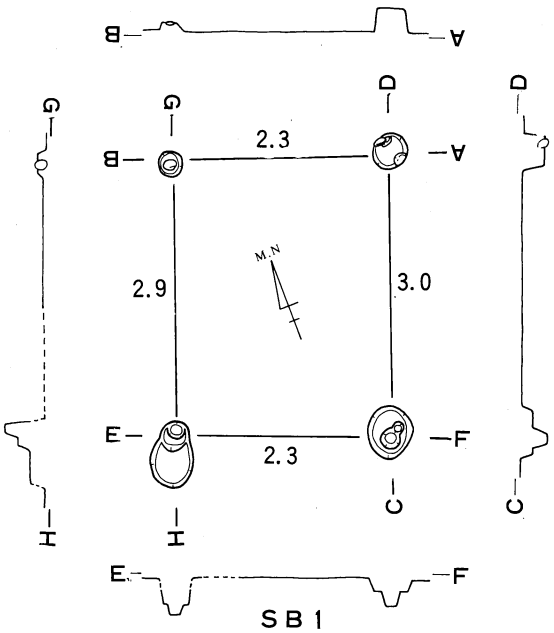
第６表　遺構出土石器観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	計測値(cm, g) 最大長 / 最大幅 / 最大厚 / 重　量	材　質	特　徴	備　考
114	ＳＫ19	砥石	6.2 5.2 1.2 58.1	泥　岩	板状の砥石で大半が欠損する。表面と両側面の３面を使用している。	
115	〃	〃	7.2 3.7 0.7 31.4	〃	板状の砥石で大半が欠損する。表裏２面を使用している。	
116	ＳＰ１	〃	15.0 5.4 1.7 285.0	〃	板状の砥石で主に表面のみを使用している。かなり使用されたとみられ、中央部が凹む。	
117	ＳＫ19	〃	8.5 4.4 3.0 186.0	砂　岩	約½が欠損する。４面を使用し、その内２面に溝状の凹みが出来ている。	
118	ＳＤ７	〃	12.4 12.4 8.0 1485.0	〃	河原石を使用したもので、２面を使用している。	

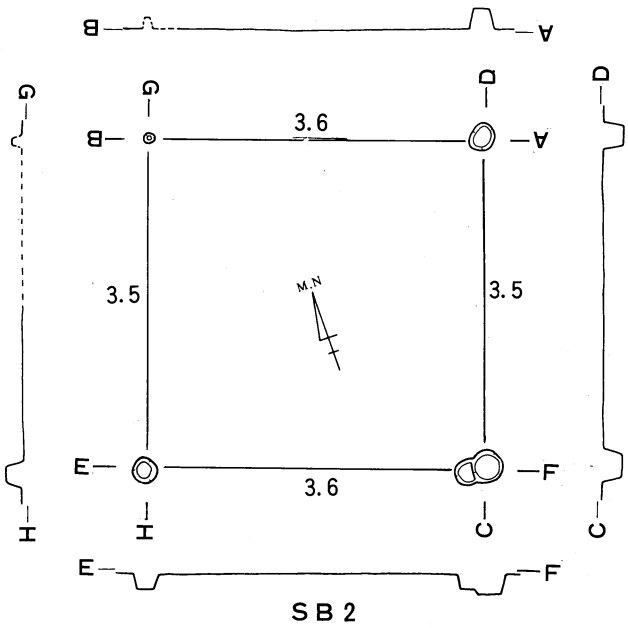
第７表　遺構出土木器観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	計測値(cm, g) 最大長 / 最大幅 / 最大厚 / 重　量	材　質	特　徴	備　考
119	ＳＤ８	箸	長さ　14.0 径　　0.6	桧	３本に折れ、かつ両端が欠損している。断面菱形をなし、面取りするように削っている。	
120	ＳＤ７	曲物の底	5.2 4.6 0.9 ——	不　明	大部分が欠損しており、径は不明。表面を削って薄くしている。	

挿図番号	遺構番号	器　種	計測値(cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　考
121	ＳＤ７	杭	長さ　12.0 径　　4.0	不　明	杭の先端部とみられる。先端は４方から削られ、尖っている。	
122	〃	〃	長さ　30.2 径　　3.8	〃	断面ほぼ円形をなし、表面を丁寧に削っている。両端部は欠損する。	
123	〃	不明	19.3 1.3 0.6	〃	薄い棒状のもので、表面を削っている。又、表面は炭化している。	
124	〃	〃	19.1 3.1 0.4	〃	薄い板状のもので、表面を削っている。用途不明。	



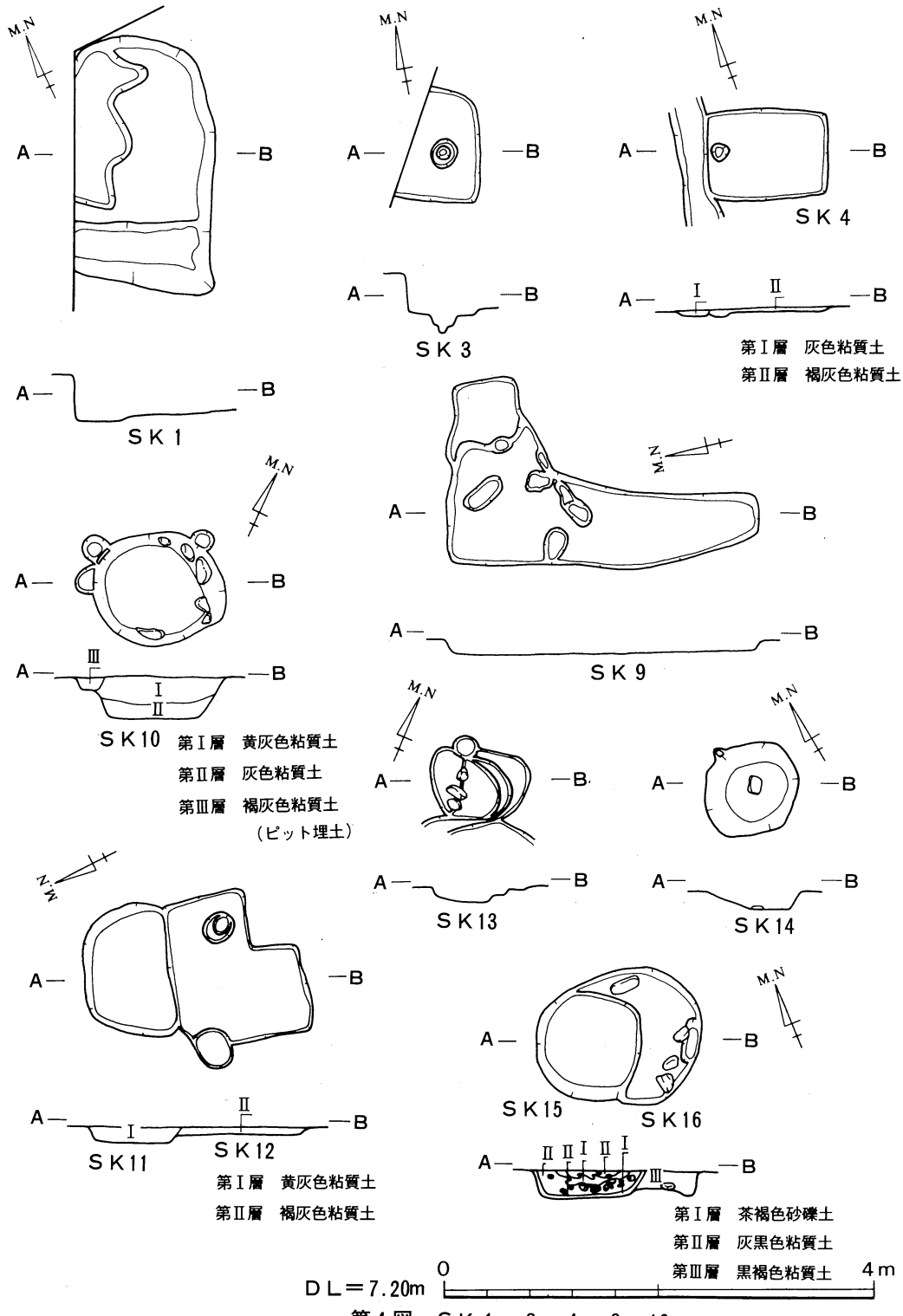
SB1



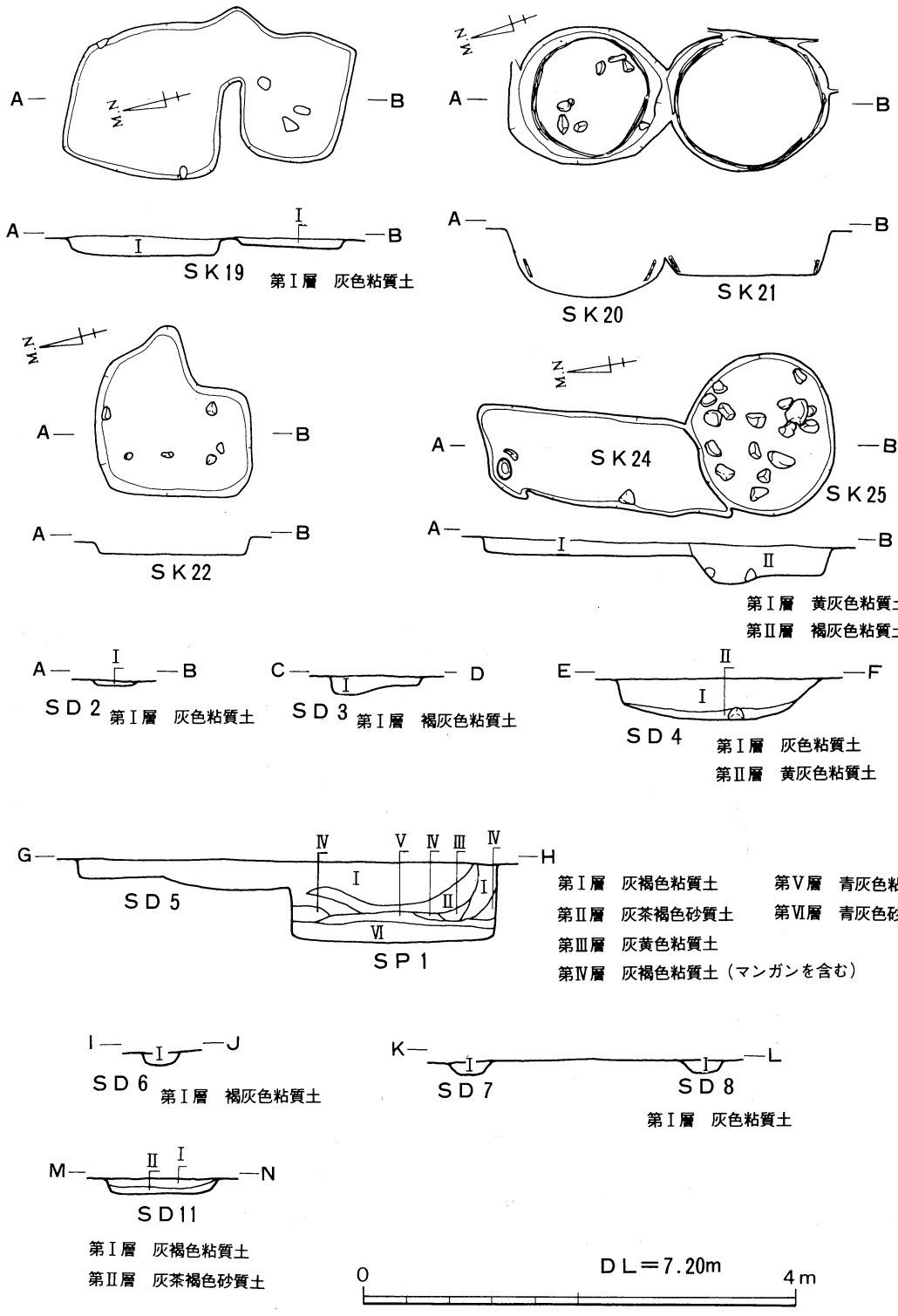
SB2

DL＝7.20m 0 4m

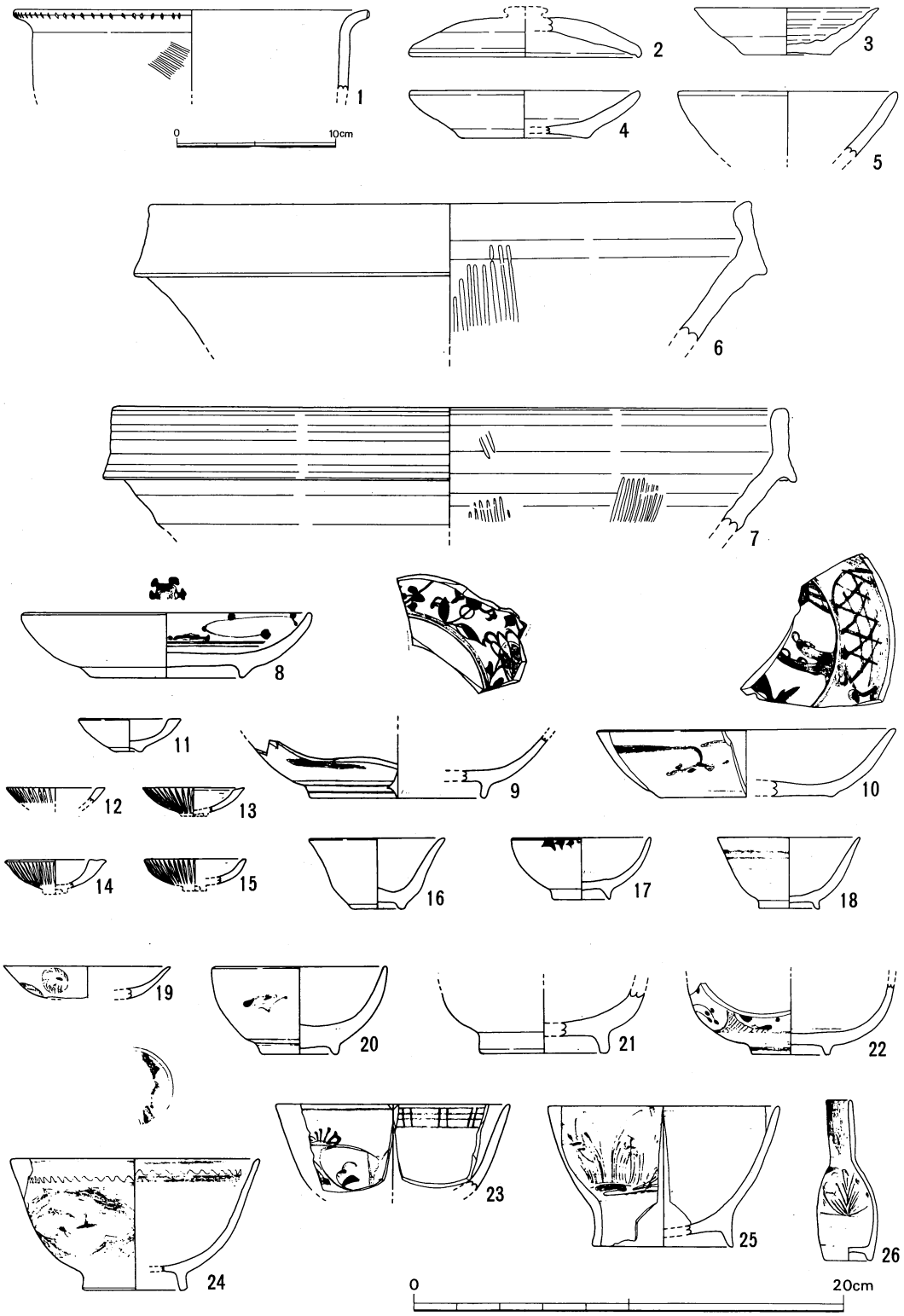
第3図　SB1・2



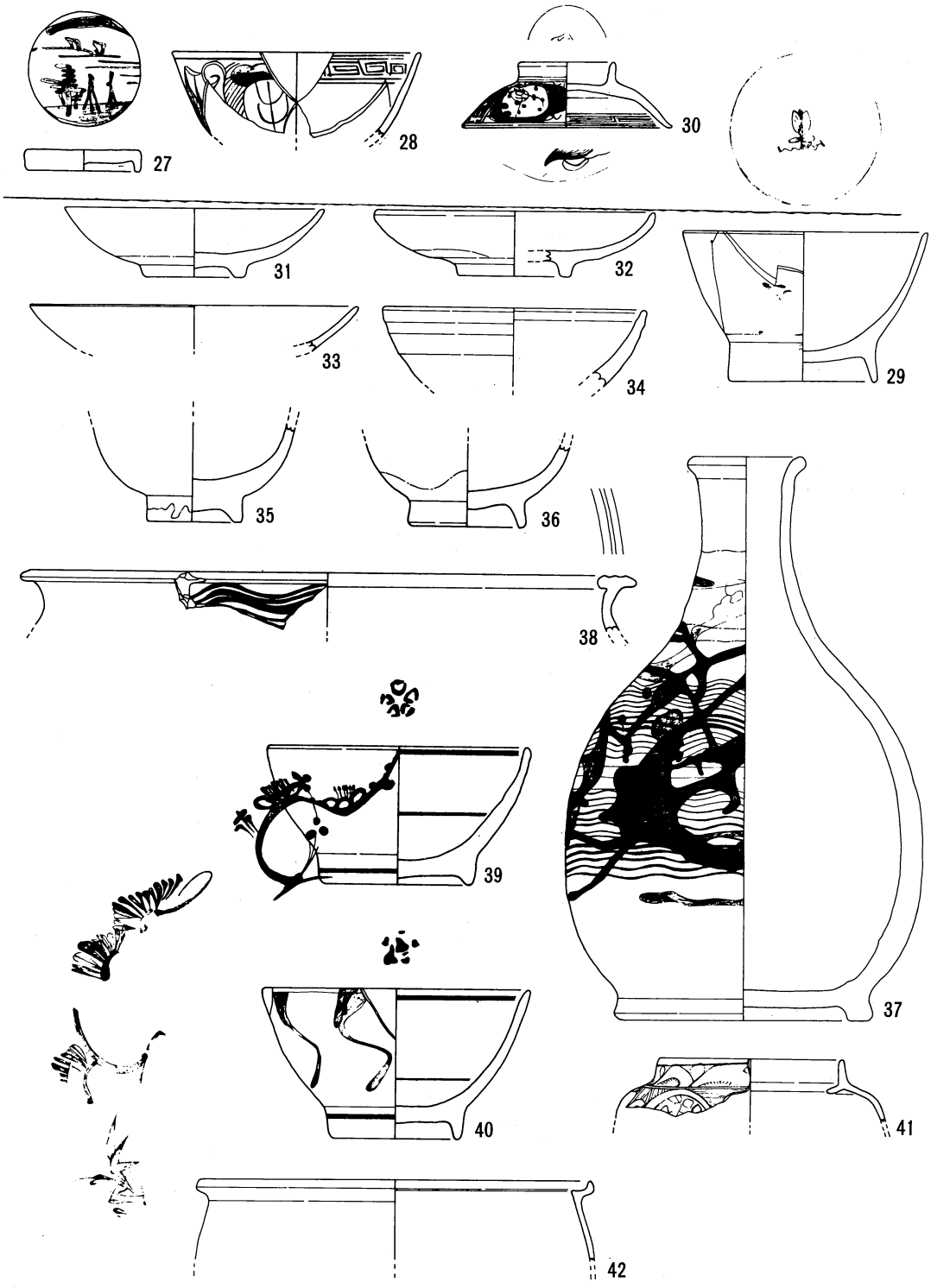
第4図　SK 1・3・4、9～16



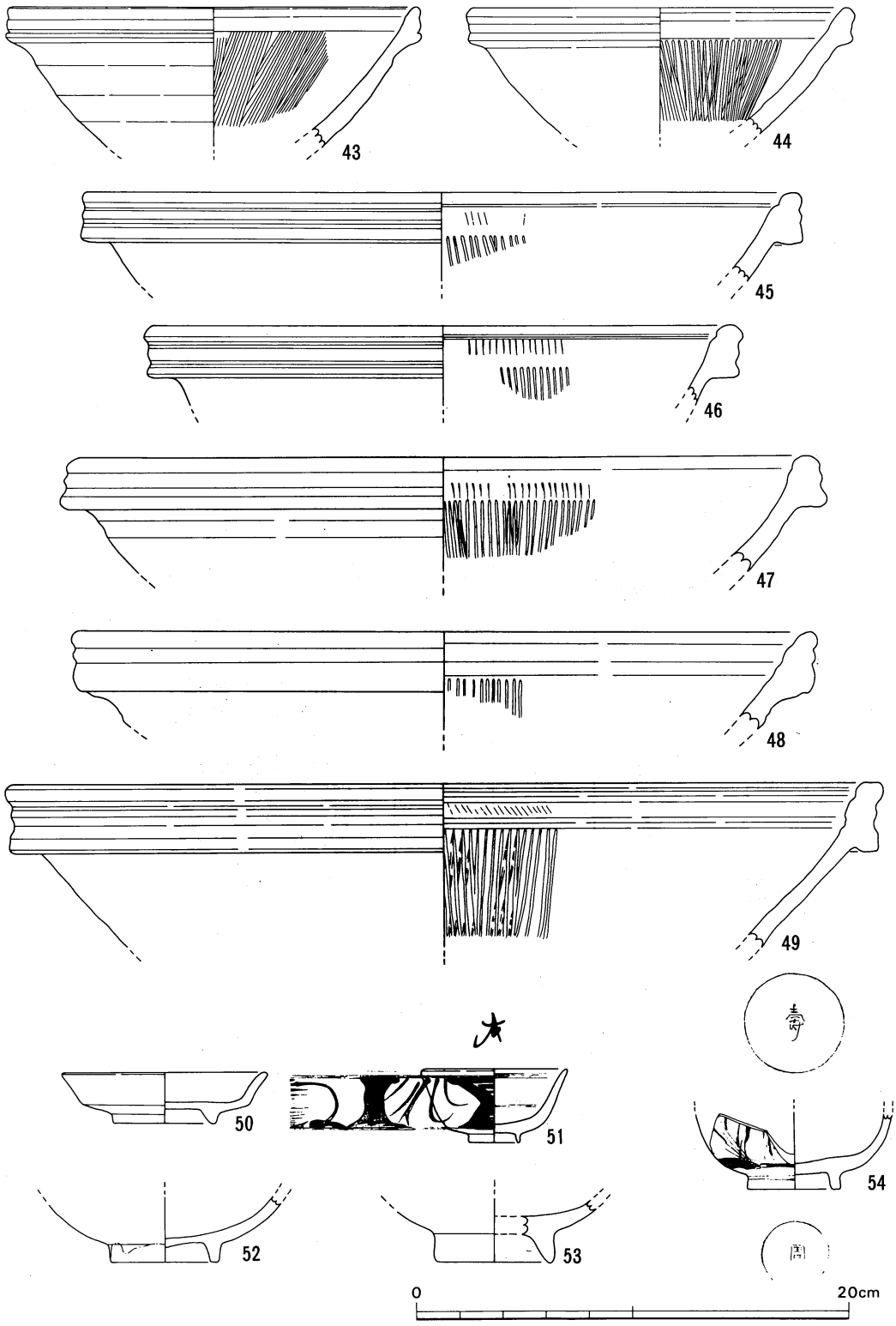
第5図SK19～22・24・25、SD2～8・11、SP1


1
0
10cm
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
0
20cm

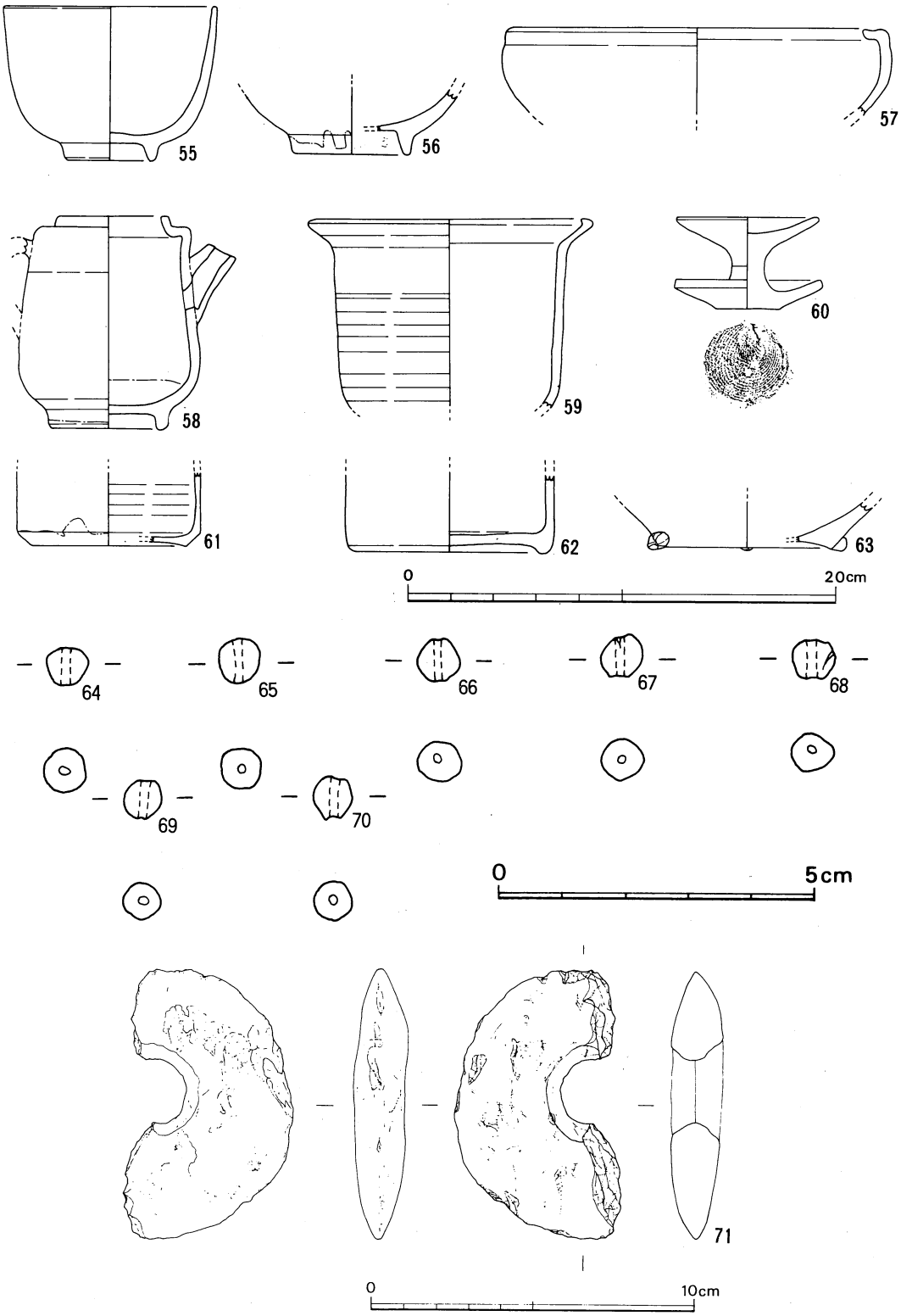
第6図　第Ⅰ層出土遺物



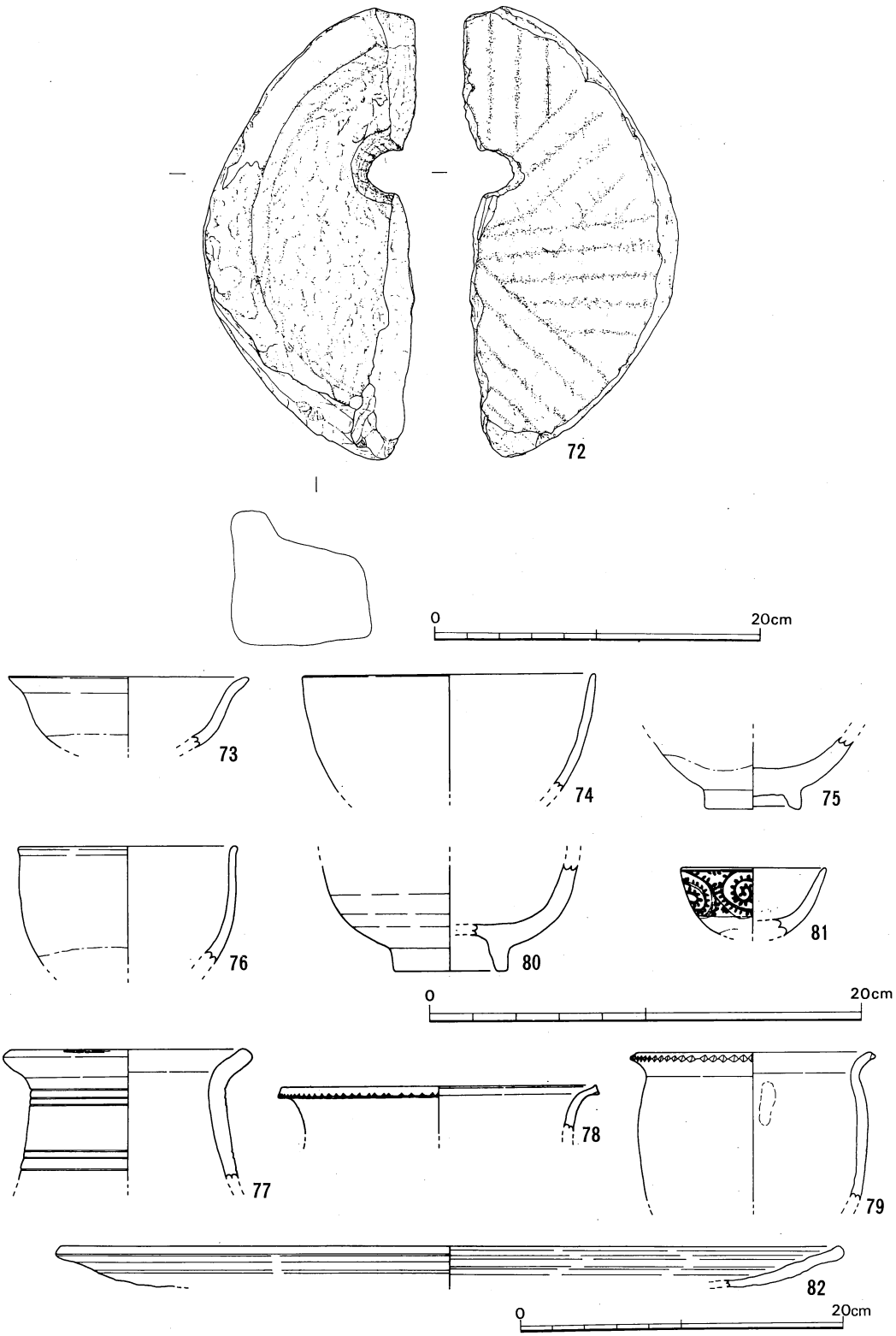
第7図　第Ⅰ層出土遺物



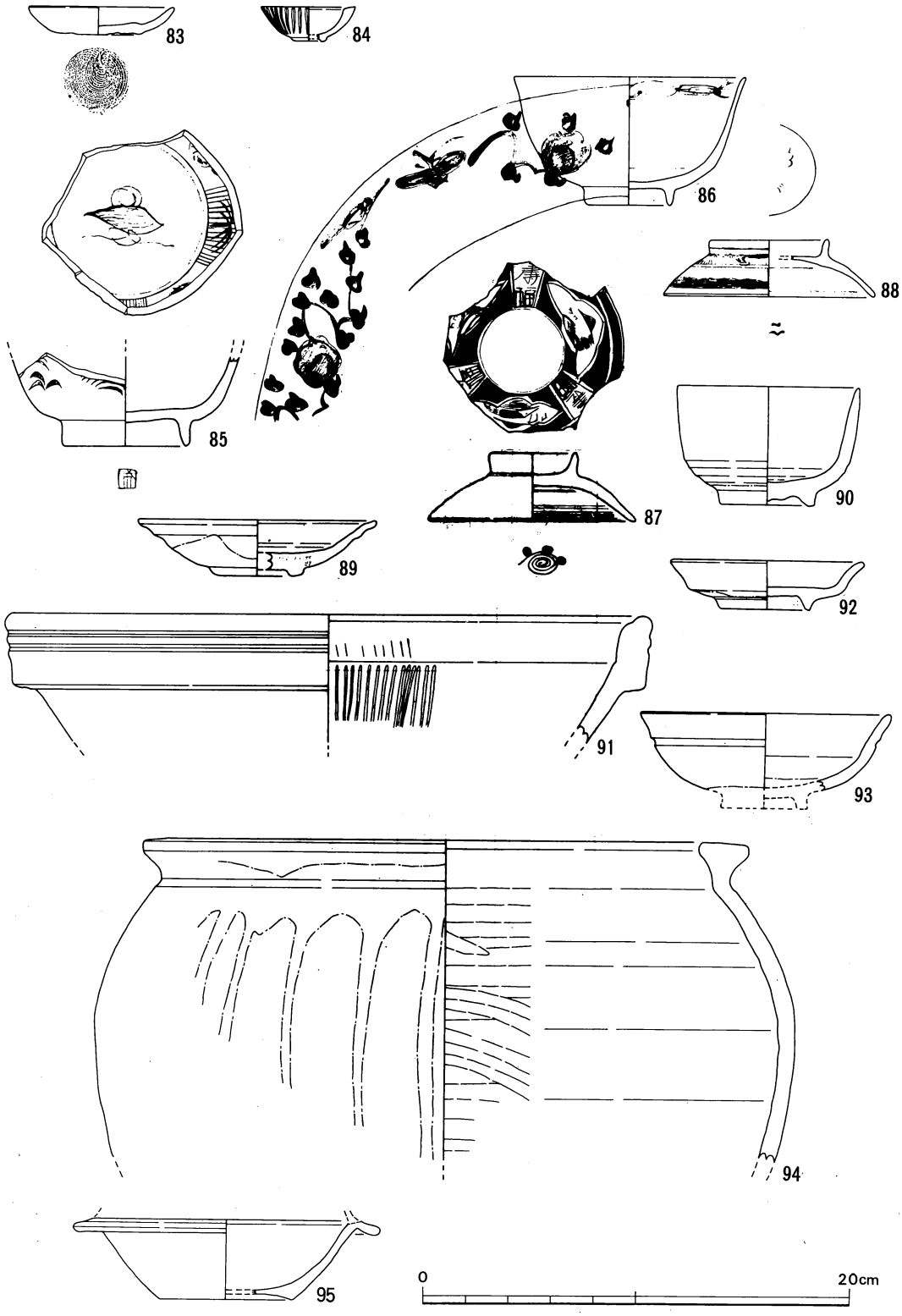
第8図　第Ⅰ層出土遺物



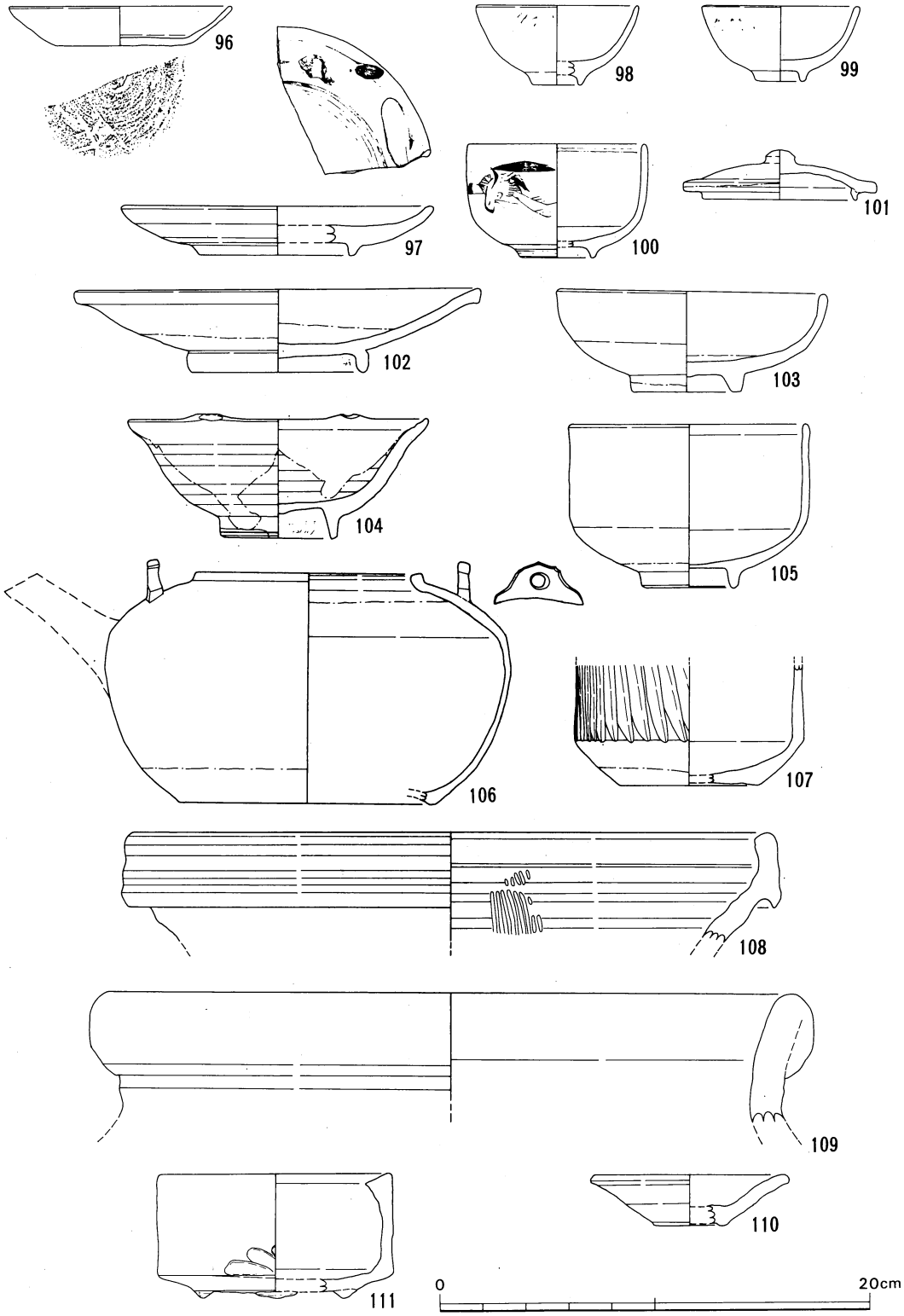
第9図　第Ⅰ層出土遺物



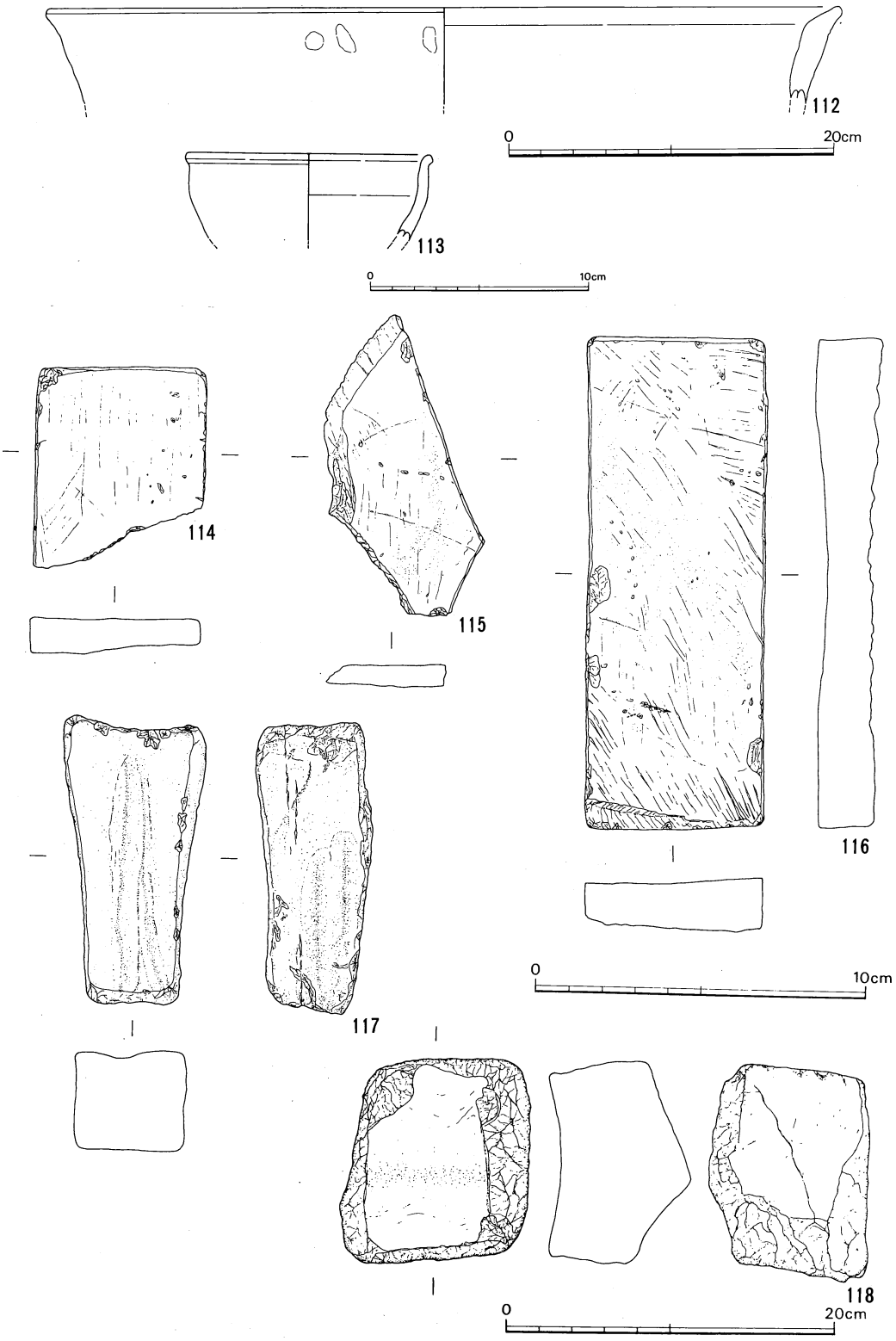
第10図　第１層、ＳＫ９・14・19、ＳＤ３～５出土遺物



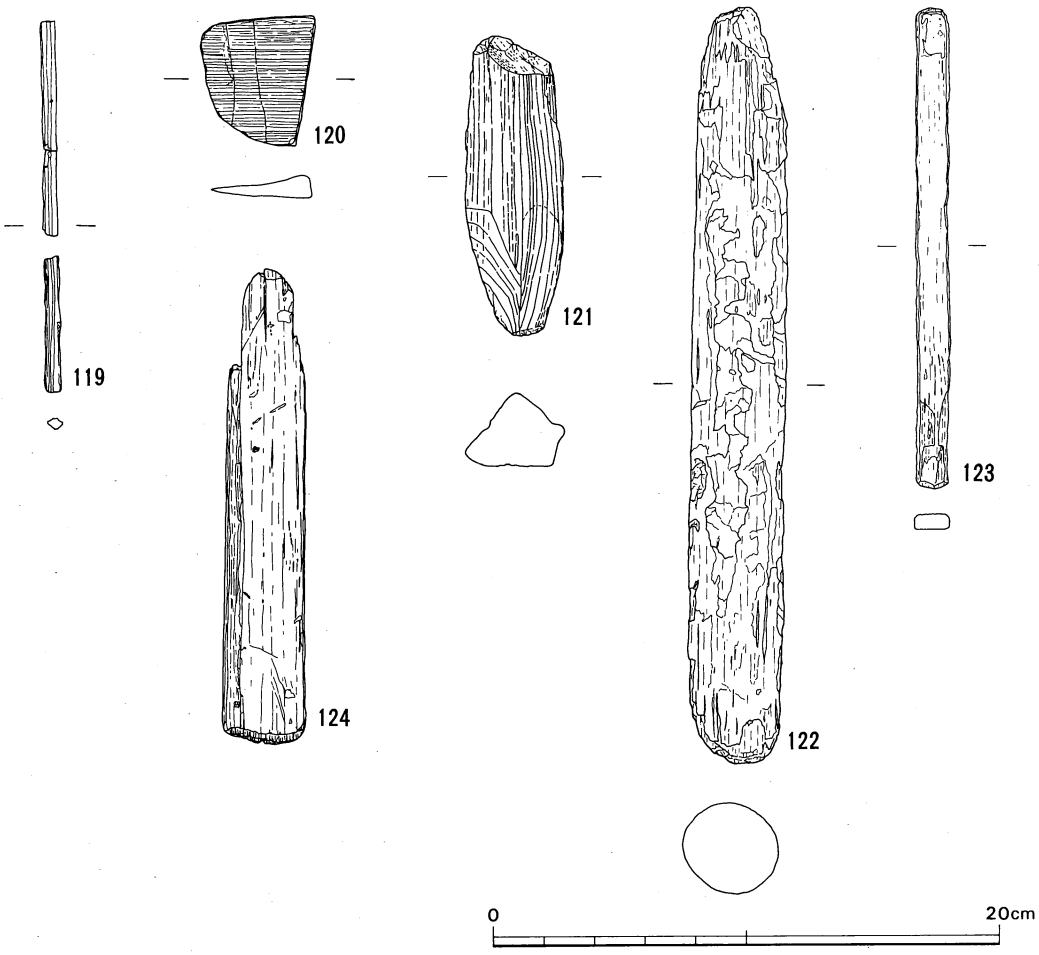
第11図　ＳＤ７出土遺物



第12図　ＳＤ８、ＳＥ１、ＳＰ１出土遺物



第13図　ＳＫ19、ＳＤ７、ＳＰ１、ＳＸ１出土遺物



第14図　ＳＤ７・８出土遺物

2. Loc. 23

Loc. 23

1．位置と調査経過

Loc. 23は、田村遺跡群中央部のやや西寄りに位置しており、小字は船戸田（フナトダ）である。船戸田地区は、調査対象面積がかなり広大であったため、北西部をA地点（Loc. 23）とし、南部及び東部をB地点（Loc. 24）として調査を進めた。

Loc. 23の調査期間は昭和56年9月17日から11月9日までの約50日間であり、調査面積は約1,152㎡であった。

2．調査概要

Loc. 23では、8本の試掘トレンチを設定し、遺構の分布状況を把握してから、調査区を設定した。試掘トレンチは4m幅でグリッドラインに沿って設定した。

試掘調査の結果から、Loc. 23は北西部に遺構が集中して分布することが判明したので、北西部を拡張して調査した。

Loc. 23の調査は北部から南部に向かって進めたが、検出した遺構も少なく、出土遺物も極端に少なかった。Loc. 23で検出した遺構は14～15世紀の掘立柱建物址10棟と土坑13基及びピット群であった。また、遺構の分布状況は調査区の北半部に集中する傾向がみられた。

3．層序と出土遺物

Loc. 23の基本的な層序は以下の通りである。

第Ⅰ層　耕作土

第Ⅱ層　黄褐色粘質土層

第Ⅲ層　暗黒茶色粘質土層

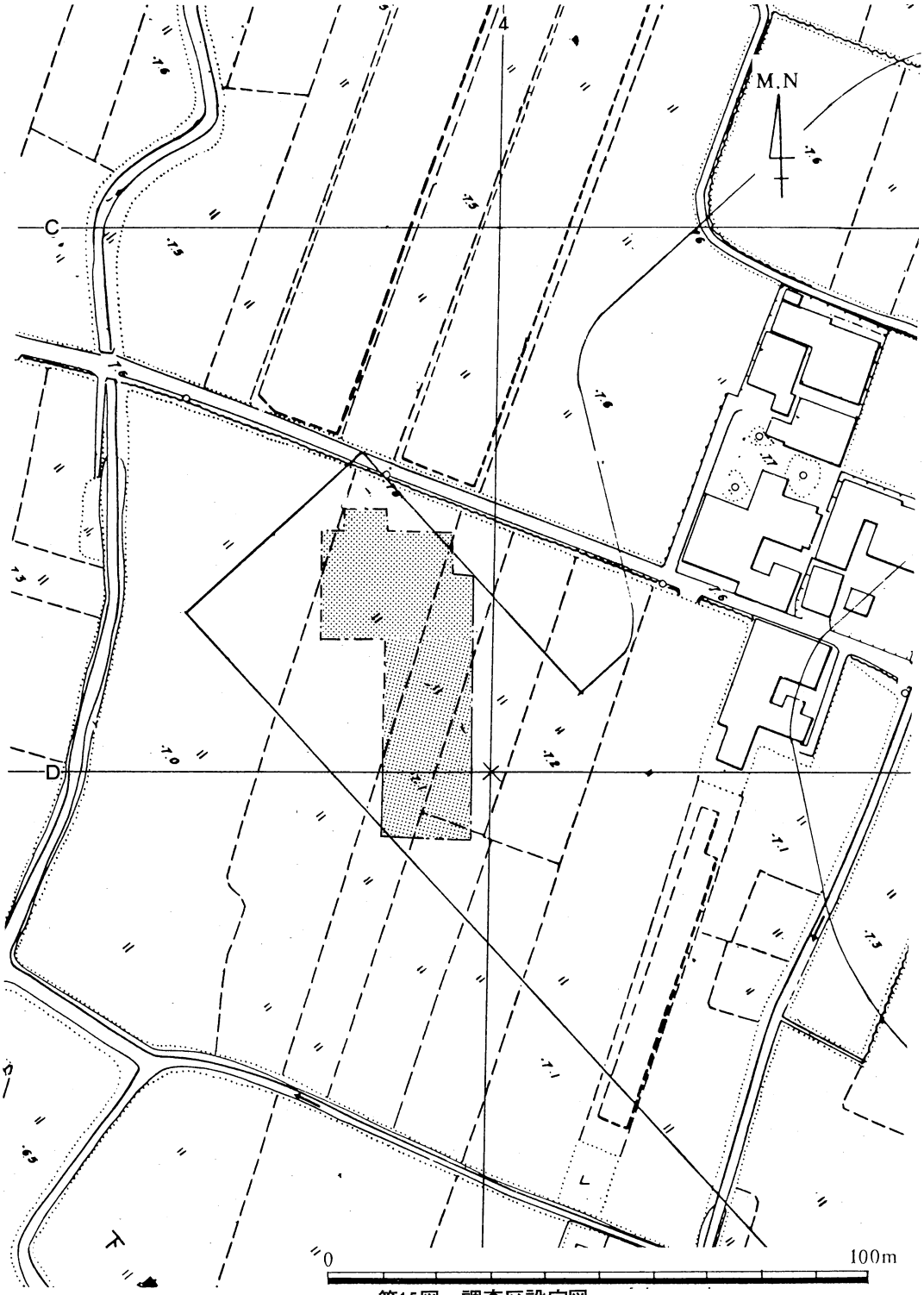
第Ⅰ層は耕作土で、ほぼ水平に堆積していた。第Ⅱ層は黄褐色粘質土層で、中世の遺構検出面であり、無遺物層である。第Ⅱ層は、調査区の全域に堆積していた。第Ⅲ層は暗黒茶色粘質土層で、無遺物層であり、全域にはみられなかった。

4．遺構と遺物

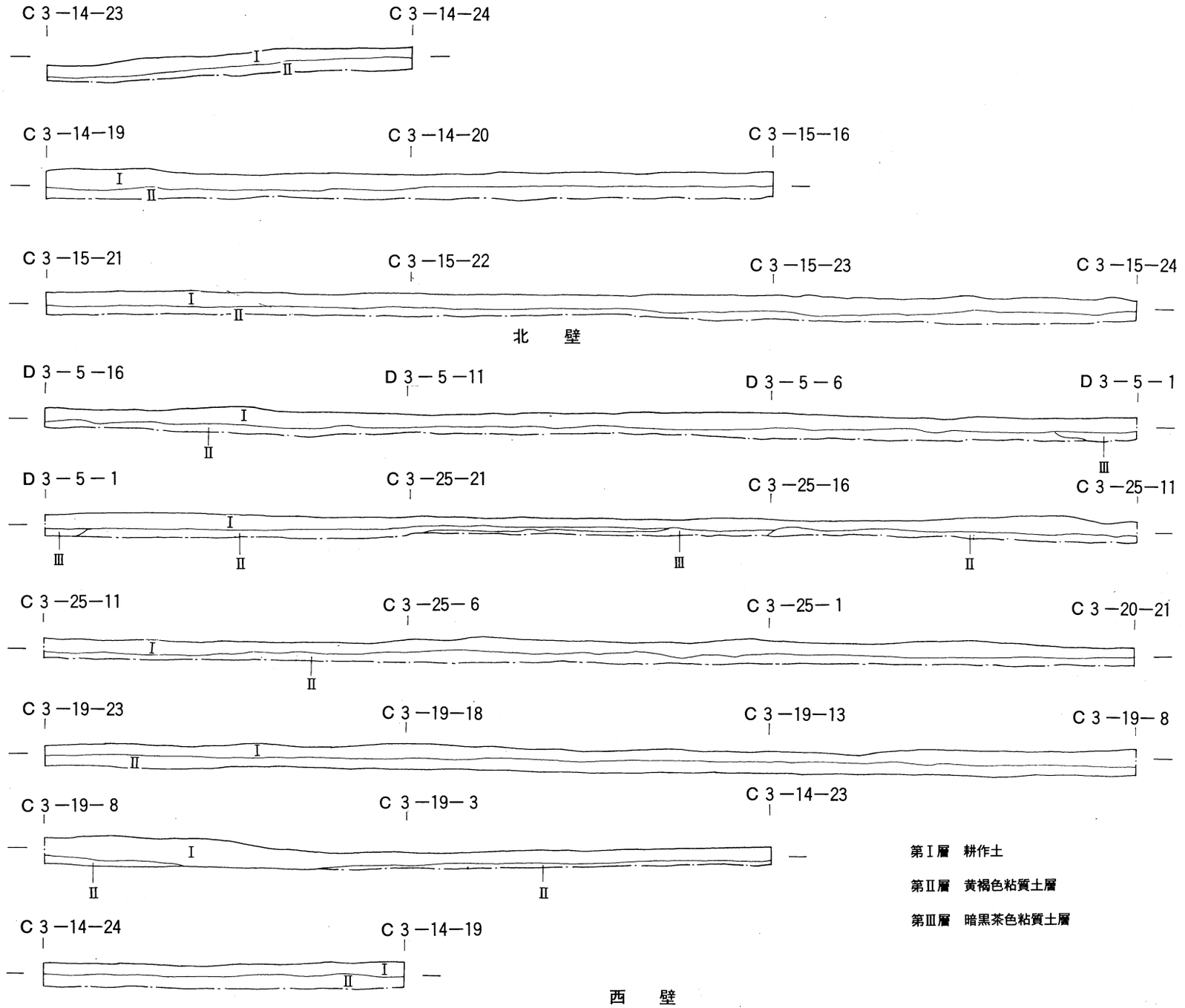
掘立柱建物址

SB1

SB1は、調査区北部に位置し、第Ⅱ層の黄褐色粘質土層で検出された。規模は3×4間の東西棟の総柱の掘立柱建物址で、棟方向はN－72°－Wである。梁間は4.84mを測り、柱間距



第15図　調査区設定図



第16図　調査区セクション

離は1.38～1.93ｍである。桁行は7.66ｍを測り、柱間距離は1.28～2.84ｍである。柱穴は、直径20～26㎝、深さ18～32㎝を測り、不整円形及び隅丸方形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器及び瓦質土器の細片が出土した。ＳＢ１は、ＳＢ２～５と重複関係がみられるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ２

ＳＢ２は、調査区北部に位置し、第Ⅱ層で検出された。規模は２×３間の東西棟の掘立柱建物址で、棟方向はＮ－74°－Ｗであるが、南東隅の柱穴１個は検出されなかった。梁間は3.35ｍを測り、柱間距離は1.48～1.69ｍである。桁行は4.48ｍを測り、柱間距離は1.09～1.73ｍである。ＳＢ２の西面は、廂かもしれない。柱穴は、直径20～28㎝、深さ22～40㎝を測り、不整円形を呈す。

埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＢ２は、ＳＢ１・３と重複関係がみられるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ３

ＳＢ３は、調査区北部に位置し、第Ⅱ層で検出された。規模は２×２間の南北棟の掘立柱建物址で、棟方向はＮ－13°－Ｅである。梁間は3.25ｍを測り、柱間距離は1.53～1.70ｍである。桁行は4.17ｍを測り、柱間距離は1.93～2.14ｍである。柱穴は、直径16～26㎝、深さ12～28㎝を測り、円形及び不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯の小破片が出土した。ＳＢ３は、ＳＢ１・２・４と重複関係がみられるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ４

ＳＢ４は、調査区北部に位置し、第Ⅱ層で検出された。規模は１×２間の東西棟の掘立柱建物址で、棟方向はＮ－71°－Ｗであるが、北辺中央部の柱穴１個は検出されなかった。梁間は1.61ｍを測り、柱間距離は1.55～1.61ｍである。桁行は2.35ｍを測り、柱間距離は1.10～1.25ｍである。柱穴は、直径24～26㎝、深さ16～50㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＢ４は、ＳＢ１・３・５と重複関係がみられるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ５

ＳＢ５は、調査区北部に位置し、第Ⅱ層で検出された。規模は２×３間の東西棟の掘立柱建物址で、棟方向はＮ－72°－Ｗであるが、南西隅の柱穴１個は検出されなかった。梁間は3.49ｍを測り、柱間距離は1.74～1.78ｍである。桁行は4.75ｍを測り、柱間距離は1.44～1.67ｍである。柱穴は、直径20～28㎝、深さ28～40㎝を測り、不整円形及び隅丸方形を呈す。

埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器及び瓦質土器の細片が出土した。ＳＢ５は、ＳＢ１・４・６と重複関係がみられるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ６

ＳＢ６は、調査区北部に位置し、第Ⅱ層で検出された。規模は２×２間の南北棟の掘立柱建物址で、棟方向はＮ－18°－Ｅである。梁間は3.83ｍを測り、柱間距離は1.81～1.93ｍである。桁行は5.69ｍを測り、柱間距離は2.82～2.86ｍである。柱穴は直径24～32㎝、深さ32～40㎝を測り、円形及び不整円形を呈す。

埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯の小破片及び炭化物が出土した。ＳＢ６は、ＳＢ５と重複関係がみられるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ７

ＳＢ７は、調査区北部のやや西寄りに位置し、第Ⅱ層で検出された。規模は１×３間の南北棟の掘立柱建物址で、棟方向はＮ－14°－Ｅである。梁間は1.45ｍを測り、柱間距離は1.43～1.45ｍである。桁行は3.41ｍを測り、柱間距離は0.77～1.81ｍである。柱穴は、直径21～28㎝、深さ24～36㎝を測り、不整円形、楕円形及び隅丸方形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＢ７は、１×１間の母屋の南北両面に廂を有した建物址かもしれない。

ＳＢ８

ＳＢ８は、調査区中央部の北寄りに位置し、第Ⅱ層で検出された。規模は２×３間の東西棟の総柱の掘立柱建物址で、棟方向はＮ－67°－Ｗである。梁間は3.85ｍを測り、柱間距離は1.71～1.93ｍである。桁行は7.69ｍを測り、柱間距離は1.56～3.05ｍである。柱穴は直径32～37㎝、深さ24～60㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、Ｐ１からは瓦質土器鍋（１、２）が出土しており、Ｐ２からも土師質土器及び瓦質土器の細片が出土した。ＳＢ８は、出土遺物等から14世紀の建物址と考えられ、西面は廂かもしれない。

ＳＢ９

ＳＢ９は、調査区中央部に位置し、第Ⅱ層で検出された。規模は２×４間の東西棟の掘立柱建物址で、棟方向はＮ－72°－Ｗであるが、南西隅の柱穴１個は検出されなかった。梁間は3.31ｍを測り、柱間距離は1.56～1.78ｍである。桁行は5.47ｍを測り、柱間距離は1.15～1.76ｍである。柱穴は直径20～56㎝、深さ12～60㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。

ＳＢ10

ＳＢ10は、調査区南部の北寄りに位置し、第Ⅱ層で検出された。規模は１×１間の東西棟の掘立柱建物址で、棟方向はＮ－82°－Ｗであるが、南西隅の柱穴１個は検出されなかった。梁間は1.87ｍを測り、柱間距離は1.87ｍである。桁行は2.52ｍを測り、柱間距離は2.52ｍである。柱穴は直径20～28㎝、深さ28～40㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

土坑

ＳＫ１

ＳＫ１は、調査区北部に位置しており、第Ⅱ層の黄褐色粘質土層を10㎝ほど除去して検出された。平面形は隅丸台形を呈し、長径2.16ｍ、短径1.84ｍ、深さ0.38ｍを測る。断面形は箱形に近い逆台形を呈し、長軸方向はＮ－18°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。

ＳＫ２

ＳＫ２は、調査区北部に位置し、第Ⅱ層で検出された。ＳＫ２は南西部をＳＫ１に切られており、長径及び短径の全長等は不明である。平面形は不整楕円形を呈し、長径の残存長0.96ｍ、短径の残存長0.64ｍ、深さ0.16ｍを測る。断面形は浅い逆台形を呈し、長軸方向はＮ－72°－Ｅである。

埋土は灰褐色粘質土に黄褐色粘質土の小ブロックが混入しているが、出土遺物はみられなかった。

ＳＫ３

ＳＫ３は、調査区北部に位置し、第Ⅱ層で検出された。平面形はやや細長い不整楕円形を呈し、長径1.28ｍ、短径0.56ｍ、深さ0.18ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－78°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。

ＳＫ４

ＳＫ４は、調査区北部に位置し、第Ⅱ層で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径1.32ｍ、短径0.80ｍ、深さ0.12ｍを測る。断面形は浅い逆台形を呈し、長軸方向はＮ－15°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯（３～６）等の遺物が出土した。

ＳＫ４の埋土中には拳大から人頭大程度の大きさの自然礫の集石がみられ、底面には木棺が腐蝕したと考えられる非常に薄い木質痕の付着がみられた。ＳＫ４は、出土遺物等から14～15

世紀の木棺墓と考えられる。

ＳＫ５

ＳＫ５は、調査区北部に位置し、第Ⅱ層で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径1.08ｍ、短径0.72ｍ、深さ0.13ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－14°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、ＳＫ５の底面のやや上部から土師質土器杯（７）、青磁底部（８）、土師質土器釜（９）等の遺物が出土した。ＳＫ５は出土遺物等から、14～15世紀の土坑墓と考えられる。

ＳＫ６

ＳＫ６は、調査区北部に位置し、第Ⅱ層で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径1.14ｍ，短径0.72ｍ、深さ７㎝を測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－24°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＫ６は、形態及び規模等がＳＫ４・５に類似しており、ＳＫ６も14～15世紀の土坑墓と考えられる。

ＳＫ７

ＳＫ７は、調査区北部に位置し、第Ⅱ層で検出された。平面形は隅丸方形を呈し、長径1.12ｍ、短径1.04ｍ、深さ9㎝を測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－26°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＫ７は、ＳＫ４～６と比較すると形態がやや異なるが、調査区における遺構の分布状況を考えると、土坑墓の可能性がある。

ＳＫ８

ＳＫ８は、調査区中央部に位置し、第Ⅱ層で検出された。平面形は円形を呈し、長径0.60ｍ、短径0.56ｍ、深さ0.10ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－65°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＫ９

ＳＫ９は、調査区中央部に位置し、第Ⅱ層で検出された。平面形は隅丸方形を呈し、長径0.76ｍ、短径0.56ｍ、深さ0.19ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－55°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＫ10

ＳＫ10は、調査区中央部に位置し、第Ⅱ層で検出された。平面形は隅丸方形を呈し、長径1.36ｍ、短径1.20ｍ、深さ0.35ｍを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はＮ－20°－Ｅで

ある。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＫ10の南半部は、かなり大きな段部を有し、拳大程度の自然礫の集石がみられた。

ＳＫ11

ＳＫ11は、調査区中央部に位置し、第Ⅱ層で検出された。平面形は隅丸台形を呈し、長径1.24ｍ、短径0.96ｍ、深さ0.24ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－15°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＫ11は、南部に２段の段部を有しており、底面は南部から北部に向かって序々に深まっている。

ＳＫ12

ＳＫ12は、調査区南部に位置し、第Ⅱ層で検出された。平面形は円形を呈し、長径の残存長0.72ｍ、短径0.80ｍ、深さ0.34ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－87°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＫ12は、東部をピットに切られており、長径の全長等は不明である。

ＳＫ13

ＳＫ13は、調査区南端部に位置し、第Ⅱ層で検出された。平面形は長方形を呈し、長径1.72ｍ、短径1.24ｍ、深さ0.15ｍを測る。断面形は箱形に近い逆台形を呈し、長軸方向はＮ－72°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。

５．まとめ

Loc.23では、14～15世紀と考えられる掘立柱建物址10棟と、土坑13基等の遺構が検出された。掘立柱建物址群（ＳＢ１～９）の棟方向も規則性がみられ、南北棟の建物址は、Ｎ－13°－ＥからＮ－18°－Ｅにおさまり、東西棟の建物址は、Ｎ－67°－ＷからＮ－74°－Ｗにおさまる傾向がみられる。棟方向がＮ－13°－ＥからＮ－18°－Ｅの掘立柱建物址群には、ＳＢ３・６・７が存する。棟方向がＮ－67°－ＷからＮ－74°－Ｗの掘立柱建物址群には、ＳＢ１・２・４・５・８・９が存する。

また、調査区北部では、掘立柱建物址が集中しており、重複関係がみられるが、屋敷地を区画する溝及び井戸等の施設は全く認められなかった。これらの掘立柱建物址群（ＳＢ１～９）は、重複関係や方向等から、少くとも３時期の切り合いが考えられる。また、これらの建物址群は、構造や柱間距離等により、ＳＢ１・６・８、ＳＢ３・５・７、ＳＢ２・４・９がそれぞれ機能した３時期を考えることができるが、新旧関係等は明確に出来ない。また、調査区北部及び中央部で検出された土坑群（ＳＫ４～７・10）は、形態や規模等が類似しており、前記の建物址に付随する14～15世紀の屋敷墓と考えられる。

第8表　掘立柱建物址計測表

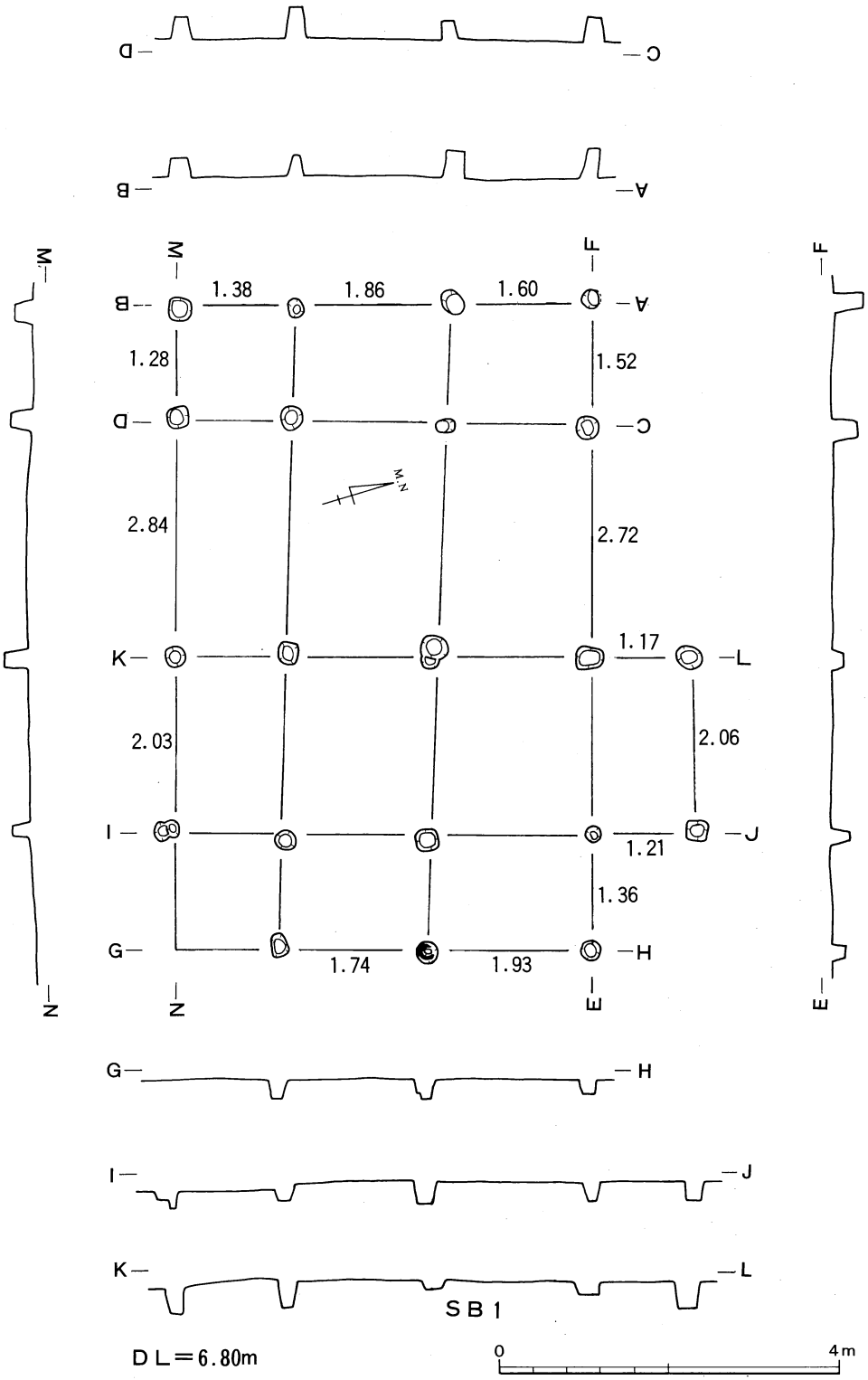
挿図番号	遺構番号	規模			棟方向	面積 (m²)	備考
		梁(間)×桁(間)	梁 × 桁(m)	柱間距離(m)			
第 17 図	S B 1	3 × 4	4.84 × 7.66	1.28 ～ 2.84	N－72°－W	37.1	
第 18 図	S B 2	2 × 3	3.35 × 4.48	1.09 ～ 1.73	N－74°－W	15.0	
第 19 図	S B 3	2 × 2	3.25 × 4.17	1.53 ～ 2.14	N－13°－E	13.6	
〃	S B 4	1 × 2	1.61 × 2.35	1.10 ～ 1.61	N－71°－W	3.8	
第 18 図	S B 5	2 × 3	3.49 × 4.75	1.44 ～ 1.78	N－72°－W	16.6	
第 20 図	S B 6	2 × 2	3.83 × 5.69	1.81 ～ 2.86	N－18°－E	21.8	
〃	S B 7	1 × 3	1.45 × 3.41	0.77 ～ 1.81	N－14°－E	4.9	
第 21 図	S B 8	2 × 3	3.85 × 7.69	1.56 ～ 3.05	N－67°－W	29.6	
〃	S B 9	2 × 4	3.31 × 5.47	1.21 ～ 1.78	N－72°－W	18.1	
第 20 図	S B 10	1 × 1	1.87 × 2.52	1.87 ～ 2.52	N－82°－W	4.7	

第9表　土坑計測表

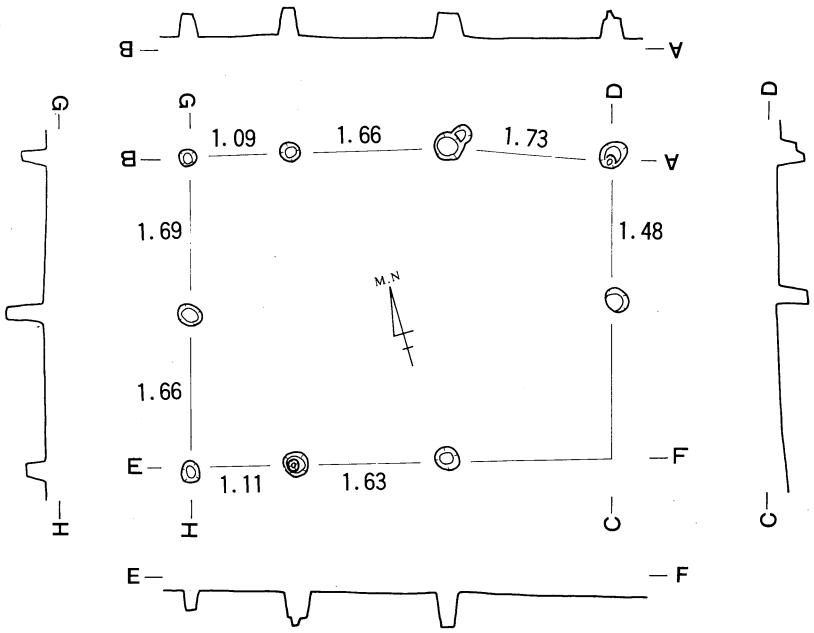
挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第 22 図	S K 1	隅丸台形	2.16	1.84	0.38	N－18°－E	箱形に近い逆台形	
〃	S K 2	不整楕円形	(0.96)	(0.64)	0.16	N－72°－E	浅い逆台形	
〃	S K 3	やや細長い不整楕円形	1.28	0.56	0.18	N－78°－W	逆台形	
〃	S K 4	隅丸長方形	1.32	0.80	0.12	N－15°－E	浅い逆台形	
〃	S K 5	〃	1.08	0.72	0.13	N－14°－E	逆台形	
〃	S K 6	〃	1.14	0.72	0.07	N－24°－E	〃	
〃	S K 7	隅丸方形	1.12	1.04	0.09	N－26°－E	〃	
——	S K 8	円形	0.60	0.56	0.10	N－65°－E	〃	
第 23 図	S K 9	隅丸方形	0.76	0.56	0.19	N－55°－W	〃	
〃	S K 10	〃	1.36	1.20	0.35	N－20°－E	擂鉢形	
〃	S K 11	隅丸台形	1.24	0.96	0.24	N－15°－W	逆台形	
——	S K 12	円形	(0.72)	0.80	0.34	N－87°－E	〃	
第 23 図	S K 13	長方形	1.72	1.24	0.15	N－72°－W	箱形に近い逆台形	

第10表　遺構出土土器観察表

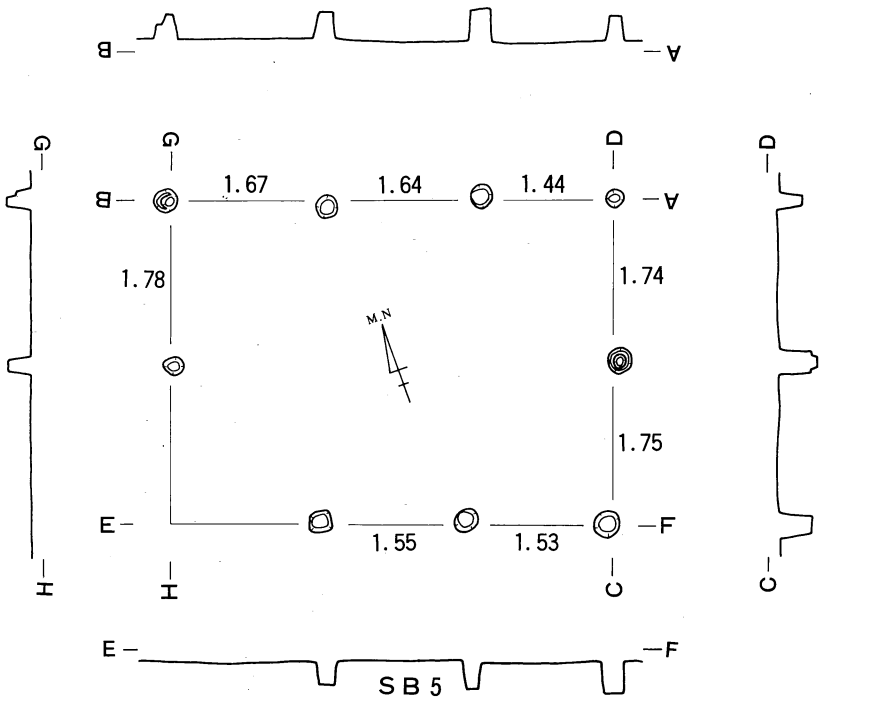
挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　　態	文　様　・　手　法	備　　考
1	ＳＢ８	瓦質土器 鍋	23.1 (11.7) 26.9 ——	口縁は内傾するが、体部の張りは弱い。口縁部外面には断面三角形の突帯を貼付し、鍔を成形している。	磨耗し、調整は不明であるが、体部外面に指頭圧痕が残る。	
2	〃	〃	26.9 (10.2) 31.2 ——	内傾する口縁部に続く体部はやや張り出す。	器表面が磨耗するが、体部外面には指頭圧痕が残る。	
3	ＳＫ４	土師質土器 杯	10.5 4.7 —— 6.5	体部に続く口縁部は、外上方に直線状にのびる。口唇部は丸くおさめる。	ロクロナデ。底部は回転糸切りである。	焼成不良。 約½個体。
4	〃	〃	10.9 4.8 —— 6.1	〃	〃	〃
5	〃	〃	12.6 (3.8) —— ——	〃	ロクロナデ。	
6	〃	〃	12.4 (3.2) —— ——	〃	〃	
7	ＳＫ５	〃	12.2 (3.3) —— ——	〃	〃	
8	〃	青磁 碗	—— (2.8) —— 5.6	器壁の厚い底部である。	外底面釉はぎ。灰白色の素地に緑色釉がかかる。	
9	〃	土師質土器 釜	16.6 (16.2) 24.8 ——	内傾する肩部に続く口縁部は直立する。肩部と体部の境の２ケ所に把手がある。	体部外面はナデで仕上げ、底部外面は叩き調整である。体部内面はヨコハケで仕上げる。	口縁部内面及び体部両面に輪積み成形痕が残る。


D
C
B
A
M
F
1.38
1.86
1.60
1.28
1.52
2.84
2.72
K
L
1.17
2.03
2.06
I
J
1.21
1.36
G
H
1.74
1.93
N
E
SB1
DL=6.80m
0
4m

第17図　ＳＢ１



SB 2

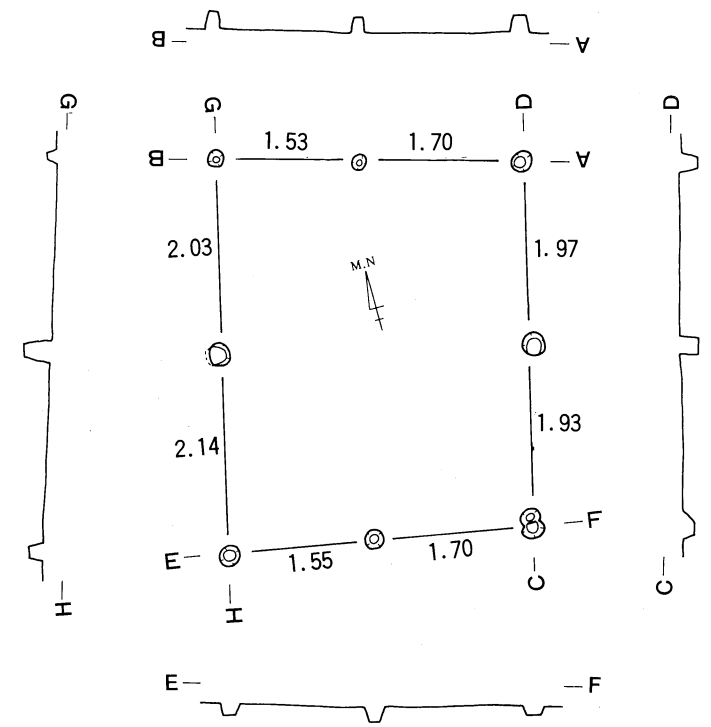


SB 5

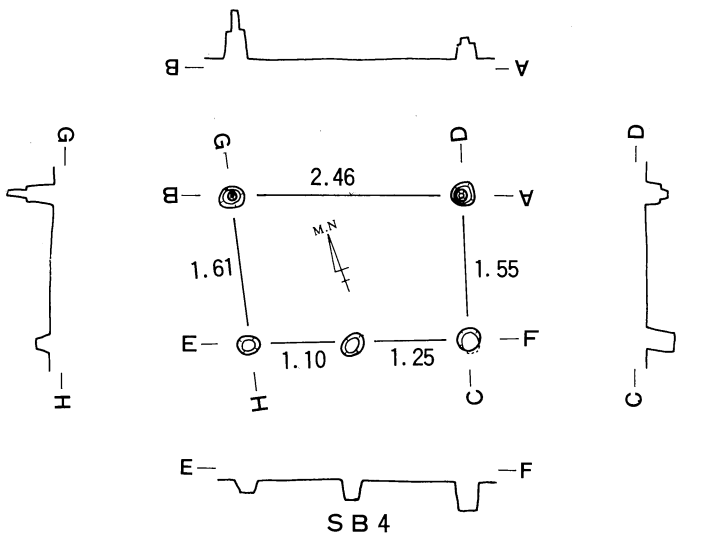
DL＝6.80m

0 4m

第18図　SB 2 ・ 5



SB3

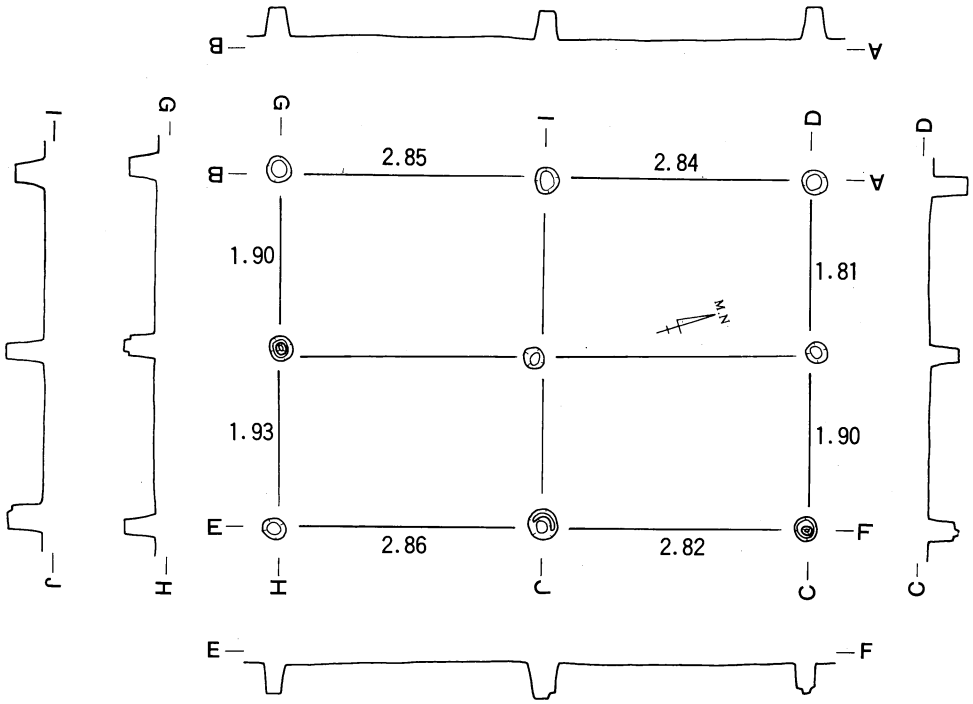


SB4

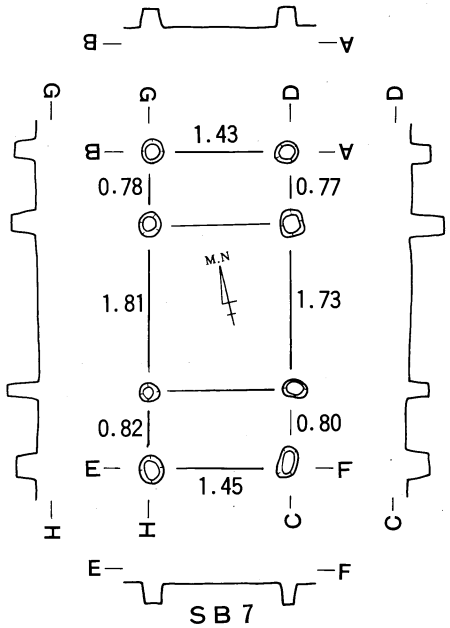
DL＝6.80m

0 4m

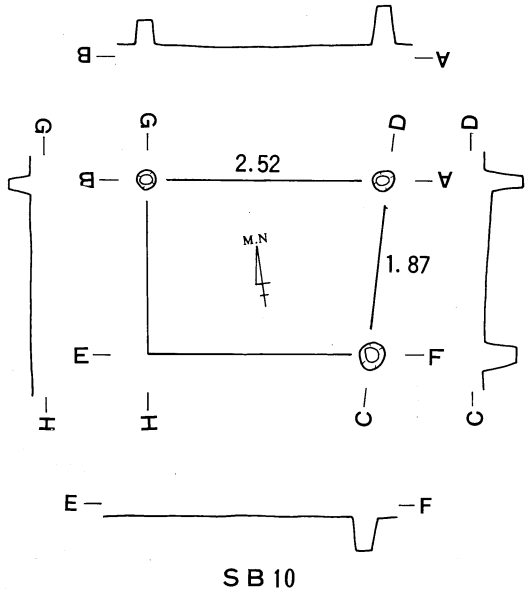
第19図　SB3・4



SB 6



SB 7

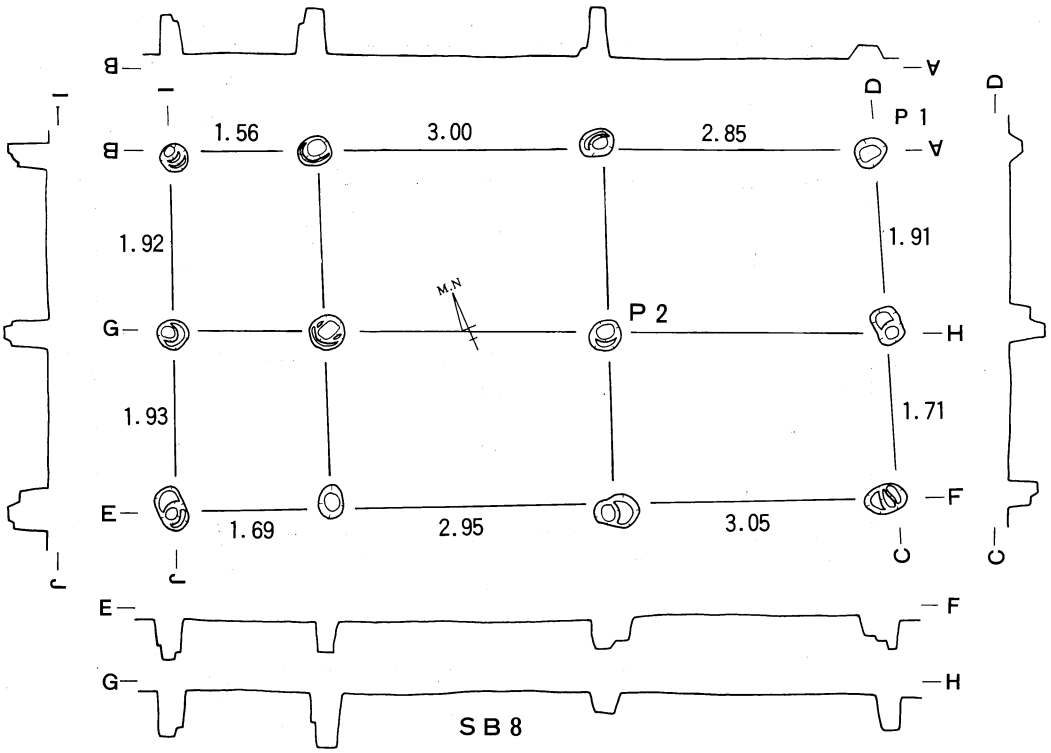


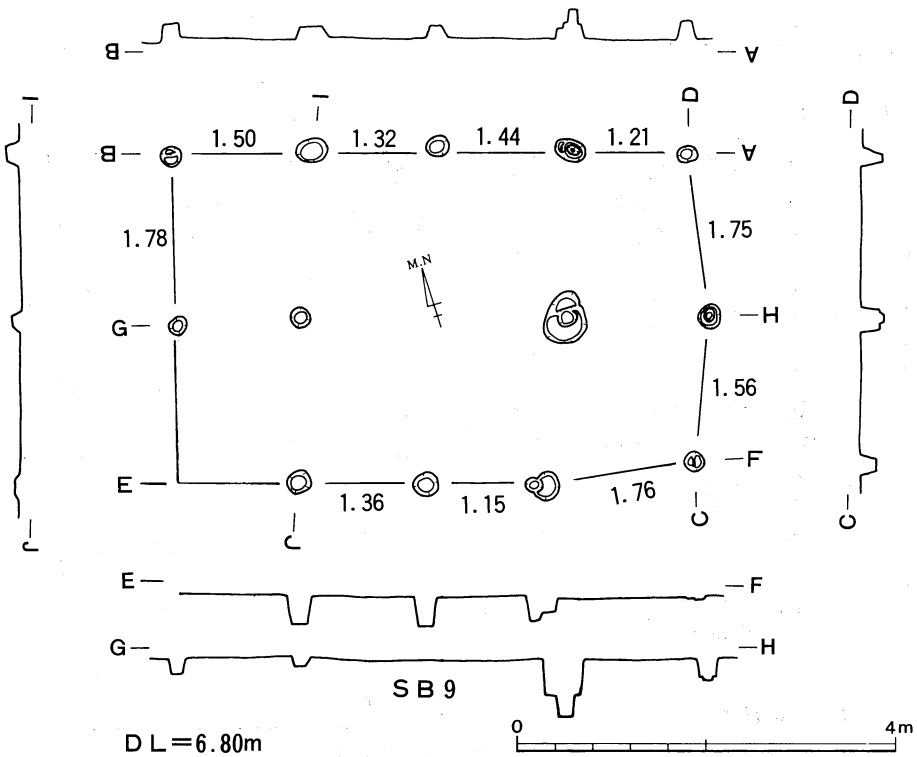
SB 10

DL＝6.80m

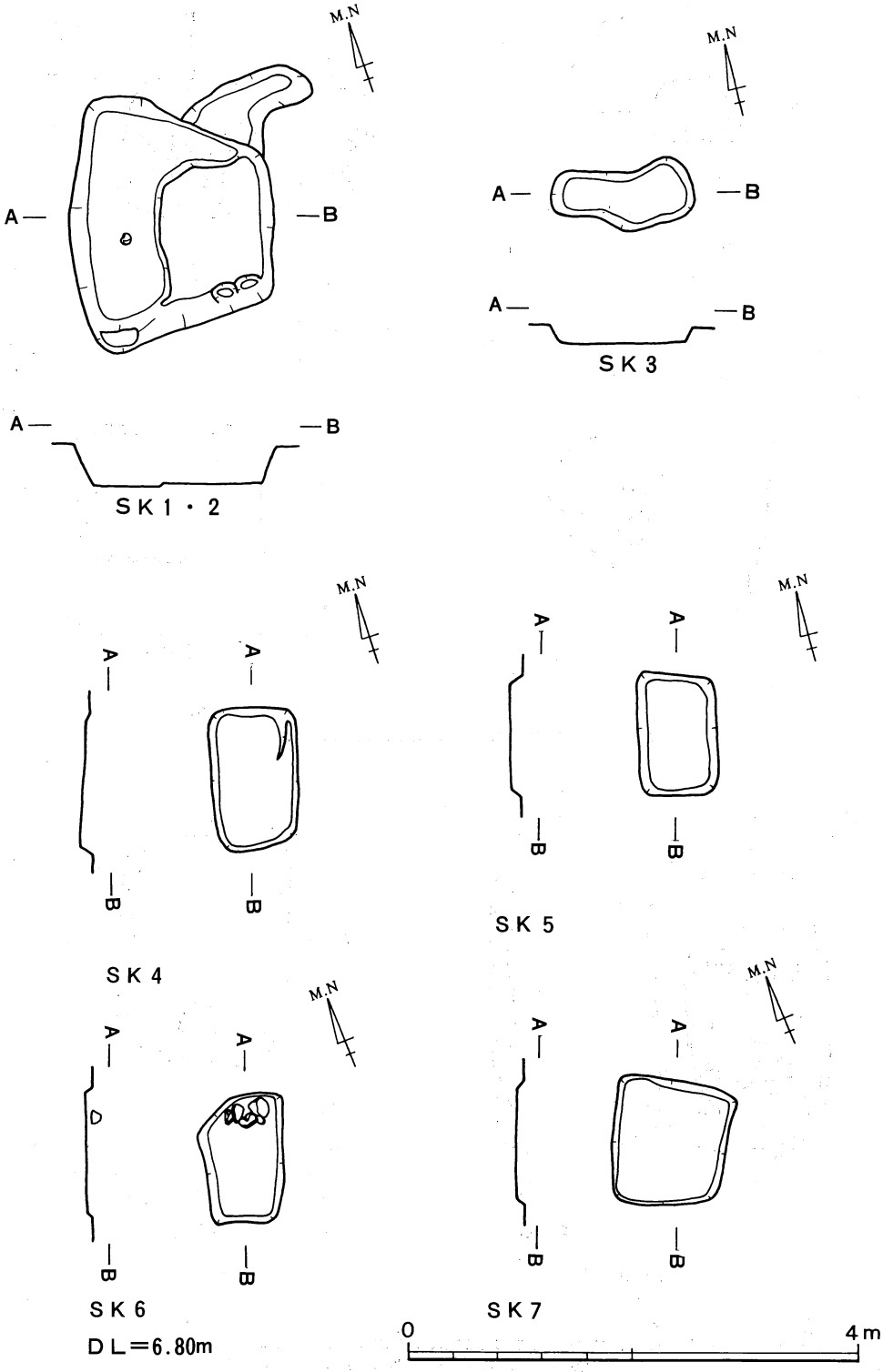
0 4m

第20図　SB 6 ・ 7 ・ 10

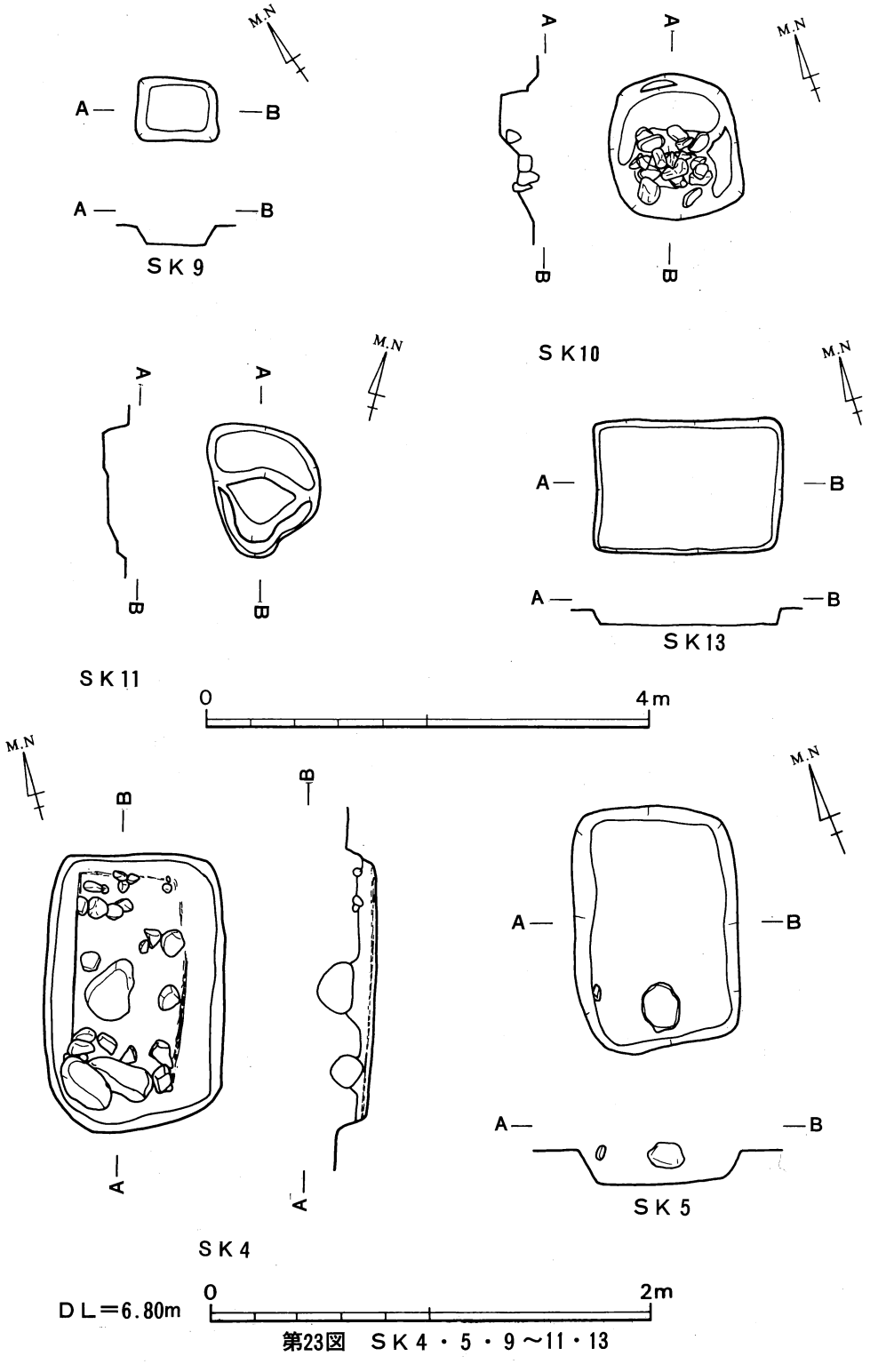

B
A
I
D
P 1
1.56
3.00
2.85
1.92
1.91
M.N
G
P 2
H
1.93
1.71
E
F
1.69
2.95
3.05
C
J
SB 8


B
A
I
D
1.50
1.32
1.44
1.21
1.78
1.75
M.N
G
H
1.56
E
F
1.36
1.15
1.76
C
J
SB 9
DL=6.80m
0
4m

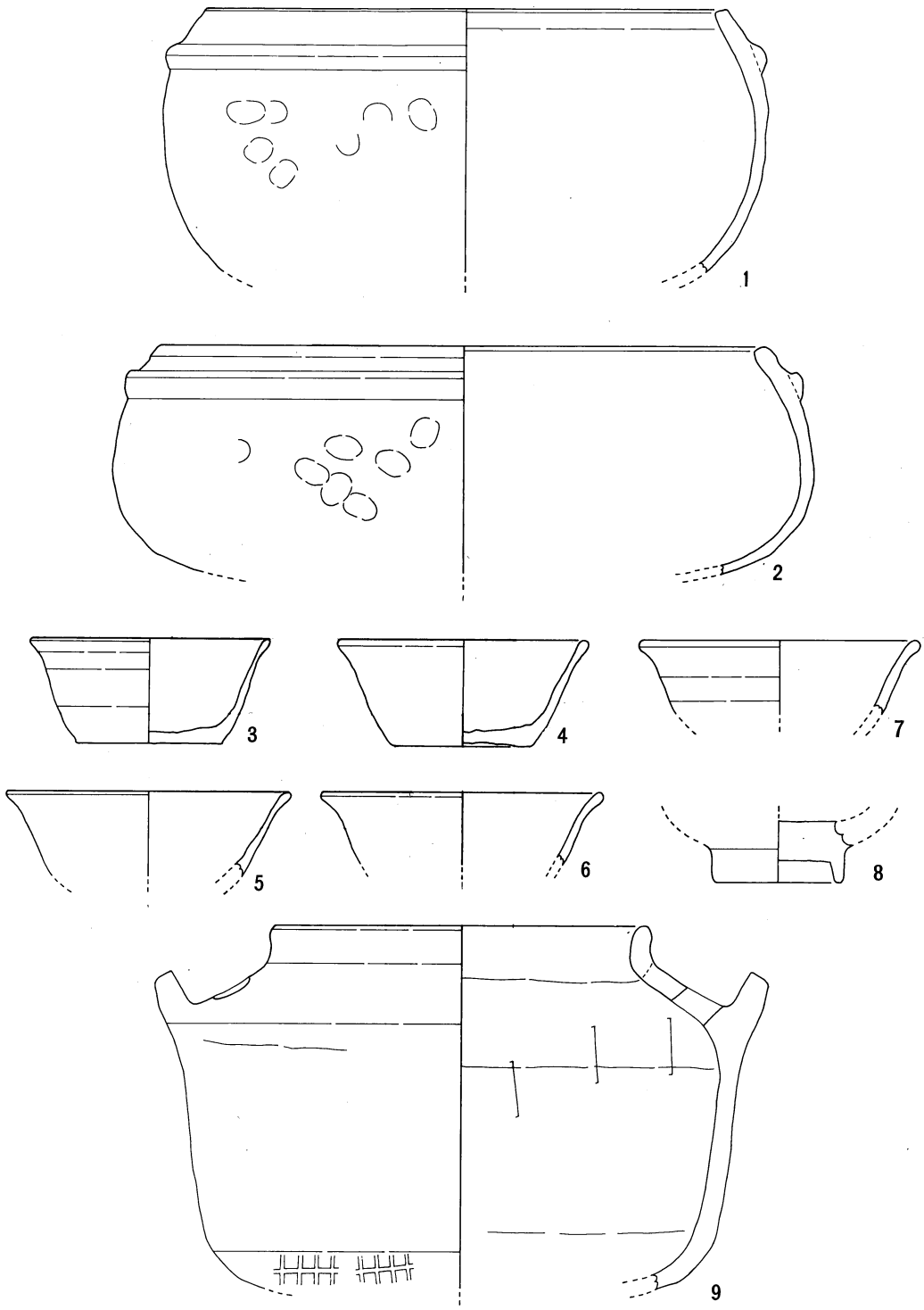
第21図　ＳＢ８・９



第22図　SK 1～7



第23図　SK 4 ・ 5 ・ 9 ～11 ・13



第24図　ＳＢ８、ＳＫ４・５　出土遺物

3. Loc. 25

Loc. 25

1．位置と調査経過

Loc. 25は、通称ワカサカ内と呼ばれ、調査区南部に位置し、南側場周道路に面している。東はLoc. 16に、西はLoc. 27に接し、南は道路を隔ててLoc. 26と近接している。Loc. 25は弥生前期の項で述べた如く、面積は11,000㎡を測り、南北方向に走る3本の畦畔が、調査区を縦長に4区に画している。調査は先述のようにトレンチを設け、遺構の広がりを確認した上で、全面を発掘した。

2．調査概要

Loc. 25は、弥生前期の項で述べたように、11本のトレンチを設定し、遺構の範囲を確認した上で、全面発掘に切り換えた。先述したように、1区全面と、2・3区の北端を除いて全面から遺構が検出された。主要な遺構は中世の溝に囲まれた屋敷址であり、東と西に2つ存在している。便宜上、西のものを屋敷A、東のものを屋敷Bとする。

3．層序と出土遺物

Loc. 25の層序は、弥生前期の項で図示した3・4区と同様に、耕作土と床土を除くと中世の遺構検出面である。ただ異なるのは、2区の中世遺構検出面の下層に弥生の包含層が全く形成されず、砂礫層となっていることである。

遺物は、Ⅰ層（耕作土）、Ⅱ層（床土）、Ⅲ層（遺構検出面）上面で、土師質土器、瓦質土器、備前焼等（1～59）が出土した。

4．遺構と遺物

掘立柱建物址

SB1

調査区北西端に位置する。現存規模は1×2間であるが、棟方向の柱穴が1個ずつ欠如していると考えられる。従って、梁間1間桁行3間の建物になると考えられる。棟方向はN－11°－Eを示し、柱間距離は1.90～3.57mを測る。柱穴の掘り方は、径56cm、柱根跡は径28cmを測り、4個の柱穴底に、扁平な河原石を礎盤として入れている。柱穴の埋土は灰色粘質土で、遺物は出土していないが、時期は近世と考えられる。また、建物址群を囲むSD2を跨いでおり、棟方向も溝に囲まれた屋敷地内の掘立柱建物とは異なっている。

第25図　調査区設定図

ＳＢ２

ＳＢ１の南に位置し、屋敷Ａを囲むＳＤ３に平行している。規模は南北棟梁間１間桁行２間で、棟方向はＮ－21°－Ｅを示す。柱間距離は1.18～2.15ｍを測る。柱穴の掘り方は、径30㎝の円形、及び楕円形で、柱根跡は径10㎝内外を測る。柱穴の１個に河原石の礎盤を置いている。柱穴の埋土は黄灰色粘質土である。遺物は見られないが、埋土、棟方向から、屋敷Ａを囲む溝と同時期と考えられる。

ＳＢ３

ＳＢ２の南に位置する。規模は東西棟梁間１間桁行３間である。棟方向はＮ－75°－Ｗを示し、ＳＤ３に直交している。柱間距離は1.41～2.27ｍを測り、柱穴は円形であるが、径10㎝前後のものから30数㎝のものまである。柱穴の埋土は灰黄色粘質土で、遺物は見られない。屋敷Ａを囲む溝と同時期のものと考えられる。

ＳＢ４

ＳＢ３の南に位置する。規模は、２×１間の正方形に近い建物である。南北棟とすれば、棟方向はＮ－17°－Ｅを示し、ＳＤ３に平行している。また、桁側の柱穴が東西１個ずつ欠如していると考えられ、２×２間の掘立柱建物であったと考えられる。柱穴の掘り方は円形で、径30㎝前後を測り、柱根跡は径10㎝前後を測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質土で、遺物は見られない。屋敷Ａを囲む溝と同時期と考えられる。

ＳＢ５

ＳＢ４の東に位置し、屋敷Ａを囲む溝の中にある。規模は南北棟梁間１間桁行２間である。棟方向はＮ－21°－Ｅを示す。柱間距離は1.78～2.25ｍを測る。柱穴は円形を呈し、径20～30㎝を測る。桁側の１個の柱穴は撹乱を受けている。柱穴の埋土は灰黄色粘質土で、遺物は見られない。

ＳＢ６

ＳＢ５の東隣に位置する。規模は南北棟梁間１間桁行３間であるが、南西隅の柱穴と梁側の柱穴が１個ずつ欠如している。棟方向はＮ－21°－Ｅを示す。柱穴の掘り方は、円形ないし楕円形を呈し、径40～50㎝を測る。柱根跡も同様で、径20㎝前後を測る。柱根跡が楕円形を呈すものは柱の抜き取りが考えられる。また、柱穴の１個は扁平な河原石を礎盤として利用している。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は認められない。他の掘立柱建物に比べて、規模、柱穴共に大型である。また、屋敷Ａの中央部に位置しており、注目すべき建物址である。

ＳＢ７

ＳＥ１の西隣に位置する。規模は南北棟梁間１間桁行２間で、棟方向はＮ－17°－Ｅを示す。柱間距離は1.10～1.47ｍを測る。柱穴は円形を呈し、径20～60㎝を測る。柱根跡は１個しか見られないが、径16㎝を測る。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は見られない。他の建物に比べて小規模であり、ＳＥ１に関係する建物址であると考えられる。

ＳＢ８

ＳＢ６の東隣に位置する。柱穴からは南北棟梁間１間桁行１間の細長い建物であるが、実際はＳＢ５と同規模のものと考えられる。従って、南北棟梁間１間桁行２間の規模を有するものであろう。柱穴の掘り方は、円形ないし楕円形を呈し、径30～60㎝を測る。柱根跡も円形を呈し、径16～20㎝を測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質土で、遺物は見られない。

ＳＢ９

屋敷Ｂの北西部に位置する。欠如している柱穴が多いので、規模や構造を明確にすることはできないが、南北棟梁間２間桁行４間の建物を推定することができる。棟方向はＮ－18°－Ｅを示す。柱穴の掘り方は円形ないし楕円形であるが、南東隅のものは方形プランとなっている。柱根跡は円形を呈し、径15㎝内外を測る。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は見られない。

ＳＢ10

屋敷Ｂの北部に位置する。規模は東西棟梁間１間桁行２間で、棟方向はＮ－75°－Ｗを示す。南東隅の柱穴が１個欠如しているが、柱間距離は2.36～3.80ｍを測る。柱穴の掘り方は円形を呈し、径30㎝前後、柱根跡は径10㎝前後を測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質土で、遺物は見られない。

ＳＢ11

屋敷Ｂの中央部に位置する。規模は南北棟梁間２間桁行１間となっているが、桁側の柱穴が１個ずつ欠如しているものと考えられる。従って、２×２間の建物であろう。柱穴の掘り方は楕円形を呈し、長径40㎝前後を測る。柱根跡は径16㎝前後である。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は土師質土器皿・鍋の細片が出土している。

ＳＢ12

屋敷Ｂの南部に位置し、ＳＥ２に切られている。規模は東西棟梁間３間桁行４間で、間仕切り柱が梁方向、桁方向に一列走る。棟方向はＮ－71°－Ｗを示す。柱間距離は1.94～2.61ｍを測る。柱穴の掘り方は円形ないし楕円形を呈し、径30～60㎝、柱根跡は径20㎝内外を測る。柱

穴の埋土は茶褐色粘質土で、遺物は土師質土器皿の細片が出土している。

SB13

調査区の北端に位置する。規模は東西棟梁間1間桁行2間で、棟方向はN－17°－Eを示す。柱間距離は1.83～3.40mを測る。柱穴の掘り方は円形を呈し、径25cm前後、柱根跡は径10cm前後を測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質土で、遺物は土師質土器細片が少量出土している。

SB14

調査区の北東端に位置する。1×1間の掘立柱建物で、棟方向はN－18°－Eを示す。柱間距離は1.57～1.98mを測る。柱穴の掘り方は円形ないし楕円形を呈し、径20～30cm、柱根跡は径10cmを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質土で、遺物は見られない。

SB15

SB13の南に位置する。東西棟梁間2間桁行2間の掘立柱建物で、棟方向はN－16°－Eを示す。柱間距離は2.05～2.69mを測る。柱穴の掘り方はほぼ円形を呈し、径30cm前後、柱根跡は径12cmを測る。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は見られない。

SB16

SD1の東に位置する。規模は南北棟梁間2間桁行3間で、棟方向はN－21°－Eを示す。柱間距離は0.99～3.78mを測る。柱穴の掘り方は円形ないし楕円形を呈し、径25～30cm、柱根跡は径10cm前後を測る。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は土師質土器杯底部（60）の他、土師質土器鍋、陶器の細片が出土している。

SB17

SB16の南に位置する。規模は南北棟梁間1間桁行2間で、棟方向はN－20°－Eを示す。柱間距離は2.66～3.69mを測る。柱穴の掘り方はほぼ円形を呈し、径40～60cm、柱根跡は径10～20cmを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質土で、遺物は見られない。

SB18

調査区の南端に位置する。規模は1×1間で、南北棟である。棟方向はN－18°－Eを示す。柱間距離は1.29～2.20m、柱穴の掘り方は円形を呈し、径30～40cm、柱根跡は径12～16cmを測る。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は見られない。

土坑

ＳＫ１

調査区の北西端に位置する。円形の平面形を有し、径1.91ｍ、深さ0.34ｍを測る。底面は平坦で、断面形は逆台形を呈す。埋土は灰色粘質土単純一層であり、近世墓と考えられる。遺物は中世の土師質土器鍋（61）が出土しているが、流れ込みと考えられる。

ＳＫ２

ＳＫ１の東に位置する。長方形の平面形を有し、長径1.89ｍ、短径1.37ｍ、深さ0.53ｍを測る。底面は平坦で、断面形は箱形を呈す。長軸方向はＮ－27°－Ｅを示す。埋土はＳＫ１と同じで、遺物は須恵質土器甕（62）が出土しているが、混入と考えられる。近世墓と考えられる。

ＳＫ３

屋敷Ａを囲むＳＤ２を切っている。長方形の平面形を有し、長径2.09ｍ、短径1.31ｍ、深さ0.22ｍを測る。底面は平坦で、断面形は逆台形を呈す。長軸方向はＮ－21°－Ｅを示す。埋土は灰褐色粘質土で遺物は見られない。

ＳＫ４

調査区の西端に位置し、ＳＫ６と近接する。楕円形の平面形を有し、長径1.29ｍ、短径0.75ｍ、深さ0.41ｍを測る。長軸方向はＮ－81°－Ｗを示す。底面は平坦で、断面形は逆台形を呈す。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は備前甕、土師質土器皿底部、粘土塊、炭化物が出土しているが、図示できるものはない。粘土塊の中には焼けているものがあり、後述する鍛冶工房と関係がある土坑であると考えられる。

ＳＫ５

調査区の西端に位置する。長方形の平面形を有し、長径1.25ｍ、短径0.89ｍ、深さ0.44ｍを測る。底は平坦面をなし、断面形は箱形を呈す。長軸方向はＮ－69°－Ｗを示す。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は見られないが、底面に10～30㎝大の河原石を敷いている。

ＳＫ６

ＳＫ５の東に接する。鉤形の平面形を有し、長径2.43ｍ、短径1.79ｍ、深さ0.44ｍを測る。底は平坦面をなし、断面形は逆台形を呈す。長軸方向はＮ－22°－Ｅを示す。埋土は灰褐色粘質土であるが、埋土中に多量の炭化物を含む。遺物は土師質土器鍋の細片が出土しているが、図示できるものはない。底面には10～30㎝大の河原石を敷いている。工房址を思わせる土坑である。

SK7

ＳＫ５の南に位置する。長方形の平面形を有し、長径1.37ｍ、短径1.08ｍ、深さ0.50ｍを測る。底は平坦面をなし、断面形は箱形を呈す。長軸方向はＮ－68°－Ｗを示す。埋土は灰褐色粘質土単純一層で、遺物は見られない。

SK8

屋敷Ａの中央部に位置する。溝状の細長い土坑で、長径4.10ｍ、短径0.48ｍ、深さ0.12ｍを測る。底は西側半分がやや低くなっている。長軸方向はＮ－66°－Ｗを示す。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は見られない。

SK9

調査区の西端に位置する。縦に長い土坑で、南半分は方形、北半分は楕円形を呈す。長径2.24ｍ、短径0.76ｍ、深さ0.20ｍを測り、長軸方向はＮ－35°－Ｅを示す。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は鉄塊４点、鞴の羽口等が出土している。鍛治工房に関係する遺構と考えられる。

SK10

ＳＢ５の西に位置する。不整楕円形の平面形を有し、長径1.41ｍ、短径1.20ｍ、深さ0.14ｍを測る。底面は平坦で、断面形は逆台形を呈す。長軸はＮ－23°－Ｗを示す。埋土は黄灰褐色粘質土で、遺物は見られない。

SK11

屋敷Ａの中央部に位置し、ＳＢ６を切っている。不整円形の平面形を有し、長径1.08ｍ、短径1.07ｍ、深さ0.24ｍを測る。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈す。長軸方向はＮ－１°－Ｗを示す。

SK12

ＳＢ７の北に位置する。不定形の平面形を有し、長径1.06ｍ、短径0.59ｍ、深さ0.13ｍを測る。底面は平坦で、断面形は逆台形を呈す。長軸方向はＮ－11°－Ｅを示す。埋土は灰褐色粘質土で、土師質土器皿の細片が６点出土している。ＳＥ１、ＳＢ７に関係の深い土坑であろう。

SK13

ＳＢ５の南に位置する。不定形の平面形を有し、長径2.98ｍ、短径2.44ｍ、深さ0.55ｍを測る。長軸方向はＮ－８°－Ｅを示す。底面には凹凸が見られる。埋土は黄灰褐色粘質土で、遺物は土師質土器皿・鍋、瓦質土器の細片が出土している。

SK14

調査区の南西隅に位置する。長方形の平面形を有し、長径3.93m、短径0.83m、深さ8cmを測る。長軸方向はN－67°－Wを示す。底面は平坦で、浅い土坑である。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は見られない。

SK15

屋敷Aの南部に位置する。鉤形の平面形を有し、長径2.73m、短径2.17m、深さ0.29mを測る。長軸方向はN－21°－Eを示す。埋土は黄灰褐色粘質土で、遺物は土師質土器皿・鍋、瓦質土器鍋、青磁等の細片が出土した。

SK16

屋敷Aの南東隅に位置する。不整楕円形の平面形を有し、長径1.09m、短径0.82m、深さ0.18mを測り、長軸方向はN－71°－Eを示す。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は見られない。

SK17

SK16の南に位置する。不整楕円形の平面形を有し、長径1.21m、短径0.81m、深さ0.28mを測り、長軸方向はN－16°－Eを示す。底面は凹凸が見られる。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は見られない。

SK18

屋敷Aの南端に位置する。隅丸方形の平面形を有し、長径2.14m、短径1.88m、深さ0.25mを測る。長軸方向はN－22°－Eを示す。壁は一部段状に掘り込まれており、底面は平坦である。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は見られない。

SK19

屋敷Aの南西隅に位置し、一部が調査区外に出ている。隅丸方形の平面形を有し、長径1.08m、短径1.01m、深さ0.12mを測る。長軸方向はN－20°－Eを示す。底面は平坦で、浅い土坑である。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は見られない。

SK20

屋敷Aの南東隅に位置する。隅丸方形の平面形を有し、長径2.33m、短径1.91m、深さ0.19mを測る。長軸方向はN－82°－Wを示す。底面は平坦であるが、中央部に径36cmを測るピットを有する。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は見られない。

ＳＫ21

屋敷Ｂの北部に位置する。不定形の平面形を有し、長径2.17ｍ、短径0.94ｍ、深さ約0.10ｍを測る。長軸方向はＮ－81°－Ｅを示す。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は見られない。

ＳＫ22

ＳＫ21の南に位置する。不定形の平面形を有し、長径3.06ｍ、短径2.32ｍ、深さ約0.50ｍを測り、長軸方向はＮ－76°－Ｗを示す。埋土は灰色粘質土で、遺物は見られない。

ＳＫ23

屋敷Ｂの中央部に位置する。楕円形の平面形を有し、長径1.22ｍ、短径0.94ｍ、深さ0.16ｍを測る。長軸方向はＮ－40°－Ｗを示す。底面は平坦で、埋土は灰褐色粘質土である。遺物は見られない。

ＳＫ24

ＳＫ23の南に位置する。縦長の土坑で、長径2.94ｍ、短径1.06ｍ、深さ0.11ｍを測る。長軸方向はＮ－23°－Ｅを示す。埋土は灰褐色粘質土で、土師質土器皿・鍋、瓦質土器等の細片が出土している。

ＳＫ25

調査区の北東端に位置する。長方形の平面形を有し、長径1.08ｍ、短径0.75ｍ、深さ0.13ｍを測る。長軸方向はＮ－67°－Ｗを示す。底面は平坦で、埋土は灰褐色粘質土である。遺物は土師質土器皿の細片が出土している。

ＳＫ26

調査区の南端に位置する。長方形の平面形を有し、長径2.35ｍ、短径1.99ｍ、深さ約0.15ｍを測る。長軸方向はＮ－67°－Ｗを示す。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は備前焼、瓦質土器、土師質土器皿の細片が出土している。近世墓であると考えられる。

井戸

ＳＥ１

ＳＥ１は屋敷Ａの南東隅に位置する。内径約80㎝を測るが、円形よりも方形に近い平面形を有す。内部にも拳大から30～40㎝大の河原石が詰め込まれた状態で検出された。河原石が詰め込まれていたのは、検出面から30～40㎝程で、それより下は茶灰色粘質土が詰まっていた。検

出面から2.5m掘り下げたところで崩壊する危険が生じたので、作業を中止せざるを得なかった。埋土より、土師質土器小皿（63）・椀底部（64）、青磁碗（65）等が出土した。

ＳＥ２

屋敷Ｂの南東隅に位置する。まず4.8×5.6mの楕円形の掘り方を検出し、検出面から70cm掘り下げた所で、井戸の石積みの輪郭を検出した。深さは3.3mを測る。井筒には松材を刳り貫いたものが使われており、その直径は50cm、高さは40cmを測る。井戸が検出されるまでの掘り方上層から、土師質土器皿（66、67）・椀（68）・鍋（69）等、多量の遺物が出土した。掘り方下層より、時期を決定するものとして、高台をアーチ状に抉った白磁小皿が出土している。したがって、この井戸は15世紀以降に掘られたものである。

溝

ＳＤ１

ＳＤ１は屋敷Ｂを四方に囲む溝であり、西側においては屋敷Ａを画しており、両屋敷に共有されている。溝の規模は、南北方向に53.60m、東西方向に32.80mを測る。幅は広い所で4.30m、狭い所で2.72m、深さは0.70～0.80mを測る。溝の南辺は、南を通る道路建設の際にかなり削平を受けており、詳細をつかむことはできないが、上に述べた三辺よりもやや幅が狭く、深さも浅くなっている。埋土はおおむねⅠ～Ⅳ層の砂質及び粘質土からなり、一部地山の黄褐色シルトが地崩れによって堆積している。遺物はⅡ～Ⅳ層から土師質土器皿（70～81）・杯（82）・椀（83）・鍋（84～107）・羽釜（108、109）、土錘（110～121）、瓦質土器擂鉢（122～132）・鍋（133～145）、備前擂鉢（146～151）・甕（152～154、156）、常滑甕（155）、青磁碗（157～165、167～171）、白磁碗（166、177、178）、青磁皿（172、173）、白磁皿（174、175）・杯（176）、天目茶碗（179）等が出土している。

ＳＤ２

屋敷Ａを鉤状に囲む溝であり、溝の南辺は道路下に入っているために、存在の有無を把握することはできなかった。規模は南北方向に44.80m、東西方向に24.80mを測る。溝の幅は、広い所で1.10m、狭い所で0.32m、深さは0.50m前後を測る。埋土はⅠ～Ⅳ層の粘質土及び砂質土が堆積している。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。遺物は土師質土器鍋（184）、瓦質土器擂鉢（180、181）・鍋（182）、備前甕（185）、青磁碗（183）が出土している。

ＳＤ３

ＳＤ２の北辺の溝が西に廷びた部分であり、大部分は調査区外に出ている。ＳＤ２との切り

合い関係はなく、同時に存在したものと考えられる。幅約0.70m、深さ0.50m前後を測る。埋土はＳＤ２と同様であり、遺物は全く認められない。

柵列

ＳＡ１

屋敷Ａの西端中央部に位置する。３個の柱穴からなっており、柱間距離は1.42mと1.83mを測る。柱穴の掘り方は円形を呈し、径30cm、深さ20cmを測る。ＳＤ２の南北溝に平行しており、軸方向はＮ－16°－Ｅを示す。埋土は灰褐色粘質土である。

ＳＡ２

屋敷Ｂの南部に位置し、鉤状を呈す。掘立柱建物址の可能性も考えられるが、西・北辺に対応する柱穴が全く見られないため、柵列とした。柱間距離は1.86～2.22m、柱穴は円形を呈し、径30～40cm、深さ約20cmを測る。南北軸方向はＮ－24°－Ｅを示す。柱穴の埋土は灰褐色粘質土で、遺物は土師質土器皿・鍋等の細片が少量出土している。屋敷Ｂに属するものであろう。

ＳＡ３

ＳＢ16と同地点にあり、ＳＢ16とは先後関係にある。３個の小柱穴からなり、柱穴間は1.90mと2.32mを測る。柱穴は円形を呈し、径20～30cm、深さ10～20cmを測る。軸方向はＮ－20°－Ｅを示す。埋土は灰色粘質土で、遺物は見られない。

ＳＡ４

ＳＢ16の東隣に位置し、ＳＢ16の棟方向に平行している。３個の柱穴からなり、柱間距離は2.14mと2.16mを測る。柱穴は円形ないし楕円形を呈し、径16～30cm、深さ10～20cm、柱根跡は10cm弱を測る。軸方向はＮ－18°－Ｅを示す。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は見られない。

ＳＡ５

ＳＢ17の西に位置し、ＳＢ17の棟方向に平行している。４個の柱穴からなり、柱間距離は1.84～3.11mを測る。柱穴の掘り方は円形ないし楕円形を呈し、径44cm、深さ30cm、柱根跡は径約20cmを測る。軸方向はＮ－19°－Ｅを示す。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は見られない。

ＳＡ６

ＳＡ５の東に位置し、ＳＡ５に平行している。４個の柱穴からなり、柱間距離はＳＡ５と対応している。柱穴の掘り方は円形で、径50cm、深さ20cm、柱根跡は径15～20cmを測り、掘り方

の規模、柱根跡共にＳＡ５に類似している。軸方向はＮ－18°－Ｅを示す。埋土もＳＡ５と同様で、遺物は見られない。

ＳＡ７

ＳＢ17の東に位置する。４個の柱穴から成り、柱間距離は1.77～1.89ｍを測る。掘り方は円形ないし楕円形を呈し、径30～40㎝、深さ約20㎝、柱根跡は径20㎝を測る。棟方向はＮ－20°－Ｅを示す。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は見られない。

ピット

遺物が出土したピットは、観察表に示す通り28個である。これらのピットの出土遺物には中世のものが多いが、古代、近世に属するものも含まれる。古代に属するピットは、脚付杯（195、196）が出土したＰ119、長甕（206）が出土したＰ139である。また、椀（197、198、205）が出土したＰ133、及びＰ163も古代に属する可能性を有す。ここで注目すべきものはＰ119である。これから出土した（195、196）は共に完形品であり、重ねて置かれていた。このピットの規模は径16～24㎝、深さ20㎝を測る。地鎮のために敷設されたものと考えられる。

近世に属するピットは、瀬戸、唐津、伊万里、備前擂鉢が出土したＰ117・124・129である。

５．まとめ

以上、Loc.25の検出遺構及び出土遺物について述べた。Loc.25は溝に囲まれた屋敷Ａ・Ｂを中心にした遺構であるが、出土遺物によって３期に分けてこれを概述する。

Ⅰ期

上述した古代の遺物が出土したピットが該当するが、具体的にどのような遺構に対応するものかは不明である。

Ⅱ期

屋敷Ａ・Ｂが該当する。ここでＡとＢに分けて屋敷内の建物の配置等について考察したい。

屋敷Ａは、東を屋敷Ｂと共有する大溝ＳＤ１によって画され、北、西は細い溝ＳＤ２によって画されている。南の境は不明であるが、推定敷地面積は約1,111㎡を測り、長軸方向はＮ－21°－Ｅを示す。敷地内の遺構は、ＳＢ４～８、ＳＥ１、ＳＫ８・10～20他、多くのピットである。これらの遺構は、屋敷地の南半分に集中して配置されており、北半分にはほとんど存在しない。中央部にはＳＢ６が位置し、その両側にＳＢ５とＳＢ８が左右対称に配されている。ＳＢ６は屋敷Ａの中で中心的な建物であったと考えられる。ＳＢ７は他の建物に比べて小型であり、井戸の近くにあることから、井戸と関係の深い建物であると考えられる。また、ＳＢ６の南には多くのピットが集中しており、何棟かの建物があったであろう。これらの掘立柱建物

は、棟方向、柱穴埋土から、同時に存在していたということができる。また、土坑も同様であるが、出土遺物も少なく、その性格は判然としない。

屋敷Ｂは、敷地面積1,758㎡を測り、長軸方向は屋敷Ａと同様にＮ－21°－Ｅを示す。敷地内の遺構は、ＳＢ９～12、ＳＥ２、ＳＫ21～24、多くのピットである。屋敷Ａに比べて敷地面積は広いが、掘立柱建物数は少ない。その中で、ＳＢ12はＳＥ２に切られているので、同時に存在した建物は、ＳＢ９～11の３棟である。ＳＢ12は埋土と出土遺物から中世のものと考えられるが、やや時期が古く、ＳＤ１が掘られる以前のものと考えなければならない。ＳＥ２は、掘り方よりアーチ状の高台を有する白磁小皿が出土していることから、15世紀以降に掘られたものであるので、ＳＢ12はそれ以前の建物であることになる。ＳＤ１からは多量の遺物が出土しているが、これらは東西の溝から出土しており、南北の溝からは出土していない。これらの出土遺物は15世紀後半のものである。これはＳＥ２の掘り方から白磁が出土したこととも矛盾しない。この白磁小皿は15世紀初に初現を求めることができるものである。以上のことから、溝に囲まれた屋敷Ａ・Ｂは、15世紀初頃から15世紀末までに機能したものと考えることができよう。

次に溝外の遺構について見てみよう。掘立柱建物のうち、ＳＢ２～４・13～18は、棟方向や柱穴の埋土から屋敷Ａ・Ｂと同時期と考えられる。ＳＫ９は、出土遺物から同時期の鍛冶場と考えられる。ＳＫ４～７も、炭化物が出土していることから関連施設である可能性がある。とすれば、ＳＢ２～４は手工業生産者集団の住居と考えることができる。また、ＳＢ13～18は、後述するLoc.26の建物群と同様の性格を有するものであろう。

Ⅲ期

ＳＢ１、ＳＫ１～３・26が該当する。埋土から明らかに近世以降の遺構である。ＳＢ１は、ＳＤ１～３が埋没し、屋敷Ａ・Ｂが廃棄された後に建てられたものである。ＳＫ１～３・26は、出土遺物は特に見られなかったが、明らかに近世墓である。また、図示することはできなかったが、Loc.25にはこの他にも多くの近世墓が存在する。

第11表　掘立柱建物址計測表

挿図番号	遺構番号	規模			棟方向	面積 (m²)	備考
		梁(間)×桁(間)	梁 × 桁(m)	柱間距離(m)			
第 26 図	S B 1	1 × 3	4.20 × 7.28	1.90 ～ 3.57	N－11°－E	30.6	
〃	S B 2	1 × 2	2.41 × 2.73	1.18 ～ 2.15	N－21°－E	6.6	
第 27 図	S B 3	1 × 3	2.56 × 5.53	1.41 ～ 2.27	N－75°－W	14.2	
〃	S B 4	2 × 2	3.92 × 3.96	1.75 ～ 3.65	N－17°－E	15.5	
〃	S B 5	1 × 2	2.50 × 3.96	1.78 ～ 2.25	N－21°－E	9.9	
第 28 図	S B 6	1 × 3	4.13 × 5.82	1.78 ～ 3.73	N－21°－E	24.0	
〃	S B 7	1 × 2	1.63 × 3.01	1.10 ～ 1.47	N－17°－E	4.9	
〃	S B 8	1 × 2	1.18 × 4.12	1.78 ～ 3.82	N－24°－E	4.8	
〃	S B 9	2 × 4	4.20 × 5.72	1.08 ～ 4.33	N－18°－E	24.0	
第 29 図	S B 10	1 × 2	3.98 × 5.39	2.36 ～ 3.80	N－75°－W	21.4	
〃	S B 11	2 × 2	4.30 × 4.54	1.89 ～ 4.24	N－19°－E	19.5	
第 30 図	S B 12	4 × 5	7.03 × 9.46	1.94 ～ 2.61	N－71°－W	66.5	
第 31 図	S B 13	1 × 2	3.63 × 4.37	1.83 ～ 3.40	N－17°－E	15.8	
〃	S B 14	1 × 1	1.89 × 2.27	1.57 ～ 1.98	N－18°－E	4.3	
〃	S B 15	2 × 2	4.74 × 4.97	2.05 ～ 2.69	N－16°－E	23.6	
第 32 図	S B 16	2 × 3	4.11 × 6.72	0.99 ～ 3.78	N－21°－E	27.6	
〃	S B 17	1 × 2	3.19 × 6.87	2.66 ～ 3.69	N－20°－E	21.9	
〃	S B 18	1 × 1	1.60 × 2.48	1.29 ～ 2.20	N－18°－E	3.9	

第12表　土坑計測表

挿図番号	遺構番号	平面形	規模（m）			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第33図	SK 1	円形	1.91	1.90	0.34	N－70°－W	逆台形	
〃	SK 2	長方形	1.89	1.37	0.53	N－27°－E	箱形	
〃	SK 3	〃	2.09	1.31	0.22	N－21°－E	逆台形	
〃	SK 4	楕円形	1.29	0.75	0.41	N－81°－W	〃	
〃	SK 5	長方形	1.25	0.89	0.44	N－69°－W	箱形	
〃	SK 6	鉤形	2.43	1.79	0.44	N－22°－E	逆台形	
第34図	SK 7	長方形	1.37	1.08	0.50	N－68°－W	箱形	
〃	SK 8	長楕円形	4.10	0.48	0.12	N－66°－W	逆台形	
〃	SK 9	不整楕円形	2.24	0.76	0.20	N－35°－E	〃	
〃	SK 10	〃	1.41	1.20	0.14	N－23°－W	〃	
〃	SK 11	〃	1.08	1.07	0.24	N－ 1°－W	〃	
〃	SK 12	不定形	1.06	0.59	0.13	N－11°－E	〃	
〃	SK 13	〃	2.98	2.44	0.55	N－ 8°－E	〃	
第35図	SK 14	長楕円形	3.93	0.83	0.08	N－67°－W	皿形	
〃	SK 15	鉤形	2.73	2.17	0.29	N－21°－E	逆台形	
〃	SK 16	不整楕円形	1.09	0.82	0.18	N－71°－E	段状	
〃	SK 17	〃	1.21	0.81	0.28	N－16°－E	階段状	
〃	SK 18	隅丸方形	2.14	1.88	0.25	N－22°－E	〃	
〃	SK 19	〃	1.08	1.01	0.12	N－20°－E	逆台形	
第36図	SK 20	〃	2.33	1.91	0.19	N－82°－W	〃	
〃	SK 21	不整楕円形	2.17	0.94	0.10	N－81°－E	皿形	
〃	SK 22	不定形	3.06	2.32	0.50	N－76°－W	逆台形	
〃	SK 23	楕円形	1.22	0.94	0.16	N－40°－W	〃	
〃	SK 24	不整楕円形	2.94	1.06	0.11	N－23°－E	皿形	
〃	SK 25	長方形	1.08	0.75	0.13	N－67°－W	逆台形	
〃	SK 26	〃	2.35	1.99	0.15	N－67°－W	〃	

第13表　包含層出土土器観察表

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
1	第Ⅰ層	須恵器 蓋	—— (2.3) —— ——		全面ナデ調整。	

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
2	第Ⅲ層	土師質土器 杯	6.6 2.1 —— 4.6	体部は直線的に外方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	内外面横ナデ。底部糸切り。	
3	〃	土師質土器 皿	8.2 1.8 —— 4.8	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	〃	
4	第Ⅰ層	〃	9.6 2.1 —— 6.3	体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	底部外面に平行圧痕あり。糸切りか。	
5	第Ⅲ層	〃	13.2 3.0 —— 6.8	体部はわずかに内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	口縁部内外面横方向のナデ調整。体部下半に指頭圧痕が残っている。	
6	第Ⅱ層	〃	14.6 (2.5) —— ——	体部はわずかに内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁端部をつまみ出して横方向に強くナデる。	
7	第Ⅲ層	土師質土器 椀	14.7 (4.5) —— ——	体部は内湾して立ち上がり、口縁部は短く外反、端部は丸くおさめる。	内外面横方向のナデ調整。	
8	〃	土師質土器 釜	14.6 (5.4) —— ——	口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおさめる。口縁部下に径1.5cmの円孔を有す。	外面は横方向のハケ調整。	
9	〃	土師質土器 羽釜	16.5 (6.8) 21.0 ——	上胴部で内側に屈曲し、口縁部に到る。幅2.5cmのツバが水平に張り出す。	外面は横方向の丁寧なナデ調整。内面は粗いナデ調整。	ツバの上面がススけている。
10	〃	土師質土器 釜	15.4 (15.5) 24.6 ——	体部は直線的に外方に立ち上がり、肩部で内側に強く屈曲。口縁部は短く外反する。肩部に耳を有し、更に1.5cm大の円孔を有す。	底部外面に格子の叩目が見られる。	外面肩部以下ススける。
11	〃	土師質土器 鍋	43.2 (3.8) —— ——	口径が大きく、深さが浅い。口縁部は直線的に外方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。端部に近づくにつれて器壁が厚くなっている。	口縁部内外面横方向のナデ調整。	
12	第Ⅰ層	土師質土器 壺	13.3 (19.5) 22.1 ——	体部は直線的に外方に立ち上がり、肩で強く内側に屈曲。口縁部はわずかに外反、端部はやや肥厚する。	口縁部内面横方向のハケ調整。胴部内面に指頭圧痕あり。	
13	〃	土師質土器 不明	19.2 16.5 —— 11.0	内面下半に断面三角の突帯をめぐらす。直線的に立ち上がり、口縁端部は水平な面をなす。内面には4ケ所に突起を有す。	内外面ナデ調整。	内面上半はススけており、突起は火を受けて紅く変化。
14	第Ⅱ層	土錘	全長 3.5 直径 1.0 重量(g) 3.4			

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
15	第Ⅱ層	土錘	全長 3.7 直径 1.2 重量(g) 4.4			
16	第Ⅲ層	〃	全長 (4.6) 直径 1.2 重量(g) 4.8			
17	第Ⅱ層	〃	全長 (4.3) 直径 1.5 重量(g) 7.0			
18	第Ⅰ層	〃	全長 (4.7) 直径 1.6 重量(g) 13.7			
19	第Ⅲ層	〃	全長 5.7 直径 2.6 重量(g) 32.8			
20	〃	瓦質土器 擂鉢	26.3 (7.5) —— ——	体部は直線的に立ち上がるが、口縁部付近でわずかに内湾する。端部はわずかに凹状を呈す。	内面に5本単位の条線を入れる。	
21	〃	〃	25.0 (7.2) —— ——	体部は直線的に立ち上がり、端部はわずかに凹状を呈す。	〃	
22	〃	瓦質土器 鍋	20.5 (3.9) —— ——	内湾する体部に、直立気味の口縁部が付く。端部は凹状を呈す。	内外面ナデ調整。	
23	〃	瓦質土器 羽釜	19.2 (12.3) 25.1 ——	口縁部は体部から内湾気味に立ち上がる。幅広いツバがやや上方にそり気味に付いている。	口縁部には3条の凹線文を配す。口縁部内外面横ナデ。体部内面は縦方向のハケ調整。	ツバ以下は全面ススけている。
24	第Ⅰ層	瓦質土器 火舎	16.4 7.6 —— 15.8	口縁部が底部よりわずかに広い。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は肥厚する。瘤状の脚が3ケ所に付く。	外面は縄席文状の叩目があり、下端には櫛描直線文を配す。	
25	第Ⅱ層	擂鉢	24.0 (5.3) —— ——	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反して内傾する。	条線は10本単位である。	備前。
26	第Ⅲ層	〃	—— (2.7) —— 15.3		条線は7本単位である。	〃
27	第Ⅰ層	把手	全長 4.4 全幅 3.0 全厚 1.0	平面形は三角形で径1.1cmの円孔あり。	表面にうすく透明釉を施す。	
28	〃	青磁 稜花皿	—— (1.3) —— ——	口縁部はなめらかに外反し、端部は丸くおさめる。	淡青緑色の釉。 貫入が入る。	胎土は、灰白色で粗い。
29	〃	青磁 碗	14.4 (2.8) —— ——	口縁端部はわずかに肥厚する。	不透明なうすい緑色釉。片切彫りの蓮弁を配す。	胎土は灰白色で密。

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
30	第Ⅱ層	青磁 碗	—— (3.6) —— ——	畳付は丸くおさめる。	高台内面まで施釉。 緑色の釉を厚く施す。	胎土は白色で密。
31	第Ⅲ層	白磁 皿	10.1 2.4 —— 3.8	口縁部はわずかに外反する。高台にはアーチ状の抉りあり。	施釉されていない。	〃
32	第Ⅱ層	〃	—— (1.3) —— 3.6	高台にはアーチ状の抉りがある。	高台脇まで施釉。	胎土は白色でやや粗い。
33	〃	白磁 碗	—— (1.6) —— 5.9	高台は断面台形に削り取られている。畳付は水平な面をなす。	内面は全面、外面は腰部辺まで施釉。	胎土は乳灰色。
34	第Ⅲ層	〃	—— (2.9) —— ——	玉縁口縁で外面に1条の沈線あり。		胎土は白色で密。
35	〃	〃	15.6 (2.2) —— ——	玉縁口縁である。		胎土は灰白色で密。
36	〃	染付 皿	—— (1.8) —— ——	口縁部は稜花状である。	外面は渦巻唐草文。	胎土は白色で密。
37	第Ⅱ層	皿	14.2 3.0 —— 7.8		見込は、蛇目状に釉をかき取っている。体部内面に唐草文。	胎土は灰色で密。 伊万里。
38	第Ⅲ層	〃	—— (3.4) —— 8.0		外面腰部に1条、高台外面に2条、外底に1条、見込に1条の沈線を施す。	胎土は白色で密。 伊万里。
39	第Ⅰ・Ⅱ層	〃	12.9 (2.8) —— ——	内湾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。	外面ツル草文を配す。	胎土は灰色で密。 伊万里。
40	第Ⅰ層	小杯	—— (2.5) —— 4.6			〃
41	第Ⅲ層	紅猪口	4.9 1.3 —— 1.7	口縁は水平な面をなす。	外面は一部にのみ施釉。	胎土は白色で粗い。 伊万里。
42	第Ⅰ層	〃	—— (1.5) —— 1.3	41よりも深い。	釉は高台を越して外底にまで及んでいる。	胎土は白色で密。 伊万里。
43	第Ⅱ層	蓋	9.1 2.9 —— 3.4		全面に施釉。	胎土は白色で密。 伊万里系。
44	第Ⅲ層	広東茶椀	10.1 (3.3) —— ——		外面口縁部に2条の界線及び山水文。	胎土は黄灰色で密。

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
45	第Ⅰ層	香炉	14.0 (4.6) 14.5 ——	肩部で強く内側に屈曲し、直線的に立ち上がる。口縁部は水平に屈曲。		胎土は白色で密。 伊万里。
46	〃	碗	—— (1.9) —— 3.4	高台径が小さく、深く削っている。		胎土は淡黄色。 京焼き系。
47	第Ⅲ層	灯明皿	10.3 (1.8) —— ——		外面は全面横ナデ調整。内面全面施釉。外面は全面無釉。	外面にススが付着。 瀬戸。
48	第Ⅰ・Ⅱ層	筒型湯飲	7.2 (4.6) —— ——	体部は垂直に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	外面に半破菊、七宝文、氷裂文を配す。内面に四方襷文。	胎土は白色でやや粗い。 瀬戸系。
49	第Ⅲ層	碗	(12.8) (5.1) —— ——	体部は比較的直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。	透明な釉を薄く施釉。内面に2条の界線。陶胎呉須絵技法。	胎土は淡黄色でやや粗い。 瀬戸。
50	第Ⅰ層	広東茶椀	—— (2.5) —— 5.7		透明の釉を全面に施す。高台脇及び高台外面に界線を配す。見込に梅花あり。	〃
51	第Ⅰ・Ⅱ層	碗	—— (3.1) —— 3.7	断面長方形の貼付高台を有す。	体部下半に4条の細いカキ目あり。	胎土は淡黄色で密。 瀬戸系。
52	〃	鉢	—— (3.7) —— ——	口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおさめる。	内面櫛目文。	胎土は赤褐色。 唐津。
53	第Ⅲ層	〃	25.2 (4.6) —— ——	体部はわずかに内湾気味に立ち上がる。口縁部は外方に屈曲し、端部をやや肥厚させ丸くおさめる。	内面は全面施釉し、櫛目文を配す。外面下半は露胎。	唐津。
54	〃	〃	20.0 (6.6) —— ——	口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおさめる。	〃	〃
55	〃	土師質土器 杯	—— (1.6) —— 5.9		糸切り底。	
56	撹乱	灯明皿	10.8 2.1 —— 4.3		内面全面に施釉。外面は全面露胎。外面は横ナデ。	胎土は淡黄色で密。 瀬戸。
57	第Ⅰ層	皿	—— (1.3) —— 4.6	体部は一度直線的に外方に立ち上がり、内側に強く屈曲。	外面は露胎。内面施釉。	胎土は淡黄褐色で密。 瀬戸系。
58	第Ⅱ層	青磁 皿	—— (1.6) —— 4.2		全面に淡青緑色の釉を施す。胎土目。	胎土は灰色で密。 李朝。
59	第Ⅲ層	瓶	—— (5.1) —— 4.6	体部は直線的に外方に立ち上がる。		胎土は乳黄色で粗い。

第14表　遺構出土土器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
60	SB16	土師質土器 杯	— (1.8) — 5.0	体部はわずかに内湾気味に立ち上がる。	横ナデ調整。	
61	SK1	土師質土器 鍋	45.2 (5.1) — —	口径が大きくて浅い。口縁端部はやや凹状を呈す。	口縁部内外面及び口唇部は横ナデ調整。	全面ススけている。
62	SK2	須恵質土器 甕	36.4 (3.6) — —	口縁部は大きく外反し、口唇部は面をなす。	全面横ナデ調整。	
63	SE1	土師質土器 小皿	8.8 1.1 — 5.4	体部はわずかに外反して立ち上がる。端部はやや尖り気味。	底部糸切り。	
64	〃	土師質土器 椀	— (1.5) — 8.2	高台を有し、内湾気味に立ち上がる。		
65	〃	青磁 碗	— (2.5) — —		外底は蛇目状に釉をかき取っている。釉は灰色である。	二次的に火を受けて変色している。
66	SE2	土師質土器 皿	12.7 (2.9) — —	体部は一度屈曲して立ち上がる。底部は薄く口縁部にいくに従って厚さを増す。	内外面横方向のナデ調整。手捏ね。	
67	〃	〃	12.0 (3.1) — —	体部は比較的直線的に立ち上がり、口縁部は短く外反する。	〃	
68	〃	土師質土器 椀	— (3.6) — 6.6	厚い底部から体部は内湾して立ち上がる。	糸切り底。	ロクロは右回転。
69	〃	土師質土器 鍋	16.7 (2.9) — —	口縁部は内傾し、端部は丸くおさめる。肩は断面三角形を呈す。	外面は横ナデ調整。	肩部以下ススけている。
70	SD1	土師質土器 皿	10.2 (2.9) — 5.8	体部は直線的に立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。	内外面横ナデ調整。	
71	〃	〃	9.6 3.6 — 4.7	体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反し、肥厚する。		
72	〃	〃	9.9 3.5 — 5.5	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反、端部は丸くおさめる。	内外面ナデ調整。底部は静止糸切り。	
73	〃	〃	11.3 3.6 — 6.0	体部はわずかに内湾気味に立ち上がり、口縁部に到る。	内外面ナデ調整。	
74	〃	〃	12.0 (2.7) — —	体部上半で1度屈曲し、口縁部はわずかに外反する。	端部をつまみ出して、横方向に強くナデる。内外に指頭圧痕あり。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
75	SD1	土師質土器 皿	11.5 (2.8) —— ——	体部は内湾して立ち上がり、口縁部は短く外反する。	口縁端部をつまみ出して、横方向に強くナデる。	
76	〃	〃	13.2 (2.4) —— ——	体部は胴部下半で強く屈曲し、外反して立ち上がる。端部は丸くおさめる。	内外面ナデ調整。	
77	〃	〃	12.9 2.8 —— 5.8	体部は内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反。端部は丸くおさめる。	口縁端部をつまみ出して、外方に強くナデる。	
78	〃	〃	13.6 3.3 —— 6.9	体部は直線的に立ち上がり、口縁下で屈曲する。	口縁部内外面横方向の強いナデ調整。内外面に指頭圧痕が残る。	
79	〃	〃	12.9 3.4 —— 7.0	体部は内湾して立ち上がる。	〃	
80	〃	〃	15.4 2.6 —— 7.5	口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。	〃	
81	〃	〃	15.6 (3.2) —— ——	〃	〃	
82	〃	土師質土器 杯	—— (2.7) —— 6.7	体部は直線的に立ち上がる。	底部は回転糸切り。	
83	〃	土師質土器 椀	—— (1.2) —— 9.8	外方に張り出す高台を有す。		
84	〃	土師質土器 鍋	16.1 (8.8) 19.4 ——	体部は胴部中位で内側にカーブし、そのまま口縁部に到る。ツバはあまり張り出さない。	口縁部内外面ナデ調整。体部外面右上がりの平行叩目。	ツバ以下は全面ススけている。
85	〃	〃	16.0 (4.1) 19.2 ——	ツバは断面三角で強く張り出している。	〃	〃
86	〃	〃	18.0 (3.2) —— ——	口縁部は外反し、口唇部は内傾する面をなす。ツバは断面三角で強く張り出している。	口縁部内外面はナデ調整。	〃
87	〃	〃	19.0 (5.6) 21.9 ——	体部は内湾して立ち上がり、口縁部は短く外反。ツバは断面三角で太い。	体部外面は右上がりの平行叩目。内面粗いハケ調整。	〃
88	〃	〃	20.8 (6.1) 22.4 ——	体部は内湾して立ち上がり、口縁部に到る。口唇部は内傾する面をなす。ツバは丸味を持っている。	口縁部内外面横方向のナデ調整。	
89	〃	〃	20.6 (4.1) 24.2 ——	体部は内湾して立ち上がり口縁部に到る。口唇部は凹状をなす。	口縁部内外面横方向のナデ調整。内面は粗いハケ調整。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
90	SD1	土師質土器 鍋	18.4 (3.4) —— ——	口縁部は内傾し、端部は丸くおさめる。ツバは丸味をおびて、あまり張り出さない。	口縁部内外面は横方向のナデ調整。	ツバより下は全面ススけている。
91	〃	〃	22.0 (3.8) —— ——	口縁部は短く外反する。ツバは断面三角で強く張り出している。	〃	〃
92	〃	〃	20.7 (8.0) 23.7 ——	内傾して立ち上がり、口縁部に到る。ツバは丸味をおびている。	口縁部内外面は横方向のナデ調整。外面右上がりの叩目。	〃
93	〃	〃	20.2 (9.5) 24.2 ——	内傾して立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。ツバは丸くおさめ、やや下垂気味。	口縁内外面横方向のナデ調整。外面右上がりの叩目。	〃
94	〃	〃	21.0 (11.4) 24.4 ——	最大径を胴部中位に有す。胴部中位からそのまま内傾して立ち上がり、口縁部に至る。端部は肥厚し、内傾する面をなす。	口縁部内外面は横方向のナデ調整。外面右上がりの叩目。	〃
95	〃	〃	22.4 (6.0) 24.8 ——	内傾して立ち上がり、口縁部外面は外反り、口唇部は内傾する面をなす。ツバは丸くおさめるが、外方に強く張り出している。	〃	〃
96	〃	〃	22.0 (6.2) 26.8 ——	内傾して立ち上がり、口縁部外面は外反りする。ツバは断面三角で鋭く張り出す。	口縁部内外面及びツバの上下は横方向のナデ。外面は右上がりの叩目。	〃
97	〃	〃	24.6 (4.2) —— ——	内傾して立ち上がり、口縁部外面は外反り、ツバは断面三角で強く張り出す。	〃	〃
98	〃	〃	24.2 (4.7) —— ——	〃	口縁部内外面及びツバの上下は横方向のナデ調整。内面は粗いハケ調整。外面は右上がりの叩目。	〃
99	〃	〃	24.3 (4.3) —— ——	〃	〃	〃
100	〃	〃	22.3 (6.4) —— ——	内傾して立ち上がり、口縁部に到る。端部は丸くおさめる。ツバは丸くおさめ下垂している。	内外面ナデ調整。	〃
101	〃	〃	26.4 (4.8) —— ——	〃	〃	〃
102	〃	〃	23.7 (10.4) —— ——	〃	〃	内外全面がススけている。
103	〃	〃	27.4 (7.7) 28.4 ——	内傾して立ち上がり、口唇部は幅広く凹状をなす。	〃	外面は全面ススけている。 ×のヘラ記号あり。
104	〃	〃	25.6 (7.4) —— ——	体部は直立し、口縁部に到る。端部は丸くおさめる。ツバは丸くおさめ下垂気味。	〃	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
105	SD1	土師質土器 鍋	29.8 (10.7) —— (6.2)	口縁部は直線的に外反し、端部は肥厚する。丸底を呈す。	口縁部内外面ナデ調整。体部外面は右上がりの叩目。	体部外面は全面ススける。
106	〃	〃	40.3 (8.0) —— ——	直線的に外方に立ち上がる体部から、口縁部は更に外反。	内外面ナデ調整。	外面は全面ススけている。
107	〃	〃	—— (9.5) 28.2 ——	下胴部に太い脚が付く。体部は内傾気味に立ち上り、断面三角の小さなツバがつく。	〃	外面はツバ以下全面ススけている。
108	〃	土師質土器 羽釜	22.6 (7.3) 24.2 ——	口縁部は内傾し、外面に3条の凹線を配す。ツバは水平に張り出す。	口縁部に5㎜大の円孔を焼成前に穿つ。内面ハケ調整。	体部外面はススけている。
109	〃	〃	—— (3.5) —— ——	口縁部の形状は不明。ツバはやや上方に張り出す。	内面ハケ調整。外面ツバの上下はナデ調整。	〃
110	〃	土錘	全長 5.8 直径 1.8 重量(g) 16.7			
111	〃	〃	全長 6.0 直径 1.6 重量(g) 11.0			
112	〃	〃	全長 4.8 直径 1.8 重量(g) 12.1			
113	〃	〃	全長 4.8 直径 1.6 重量(g) 10.0			
114	〃	〃	全長 4.6 直径 1.7 重量(g) 10.4			
115	〃	〃	全長 (4.2) 直径 1.1 重量(g) 4.3			
116	〃	〃	全長 3.9 直径 1.1 重量(g) 3.2			
117	〃	〃	全長 4.4 直径 1.3 重量(g) 5.0			
118	〃	〃	全長 3.7 直径 1.1 重量(g) 3.9			
119	〃	〃	全長 (3.4) 直径 1.1 重量(g) 3.1			

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
120	SD1	土錘	全長 3.4 直径 1.2 重量(g) 3.7			
121	〃	〃	全長 (2.0) 直径 0.9 重量(g) 1.3			
122	〃	瓦質土器 擂鉢	32.2 (8.5) —— ——	わずかに内湾気味に立ち上がり、口縁部に到る。端部は凹状を呈す。	条線は6本を単位とする。	
123	〃	〃	31.8 (7.7) —— ——	直線的に立ち上がり、口縁下で外方に肥厚する。口唇部は凹状をなす。	条線の単位は不明。	
124	〃	〃	30.6 (5.6) —— ——	直線的に外方に立ち上がり、端部はやや肥厚し、口唇部は凹状をなす。	条線は8本を単位とする。	
125	〃	〃	27.8 (8.0) —— ——	〃	条線は6本を単位とする。	
126	〃	〃	27.2 (7.8) —— ——	〃	条線は5本を単位とする。	
127	〃	〃	26.8 (9.3) —— ——	内湾気味に立ち上がる。端部は下方に拡張され、口唇部は凹状をなす。	〃	
128	〃	〃	27.0 (9.0) —— ——	〃	条線は5本単位の楕原体を2条平行させ、10本単位としている。	
129	〃	〃	26.3 (4.7) —— ——	口縁部は内湾する。口唇部は水平な面をなす。	条線は6本を単位とする。	
130	〃	〃	27.6 (7.3) —— ——	直線的に立ち上がり、端部は上方に肥厚し、口唇部は凹状をなす。	〃	
131	〃	〃	25.3 (8.5) —— ——	口縁部はわずかに内湾する。口唇部は丸くおさめる。全体的に器壁に凹凸顕著。	〃	
132	〃	〃	23.3 (5.0) —— ——	内湾気味に立ち上がり、口唇部は凹状をなす。	条線は5本を単位とする。	
133	〃	瓦質土器 鍋	31.0 (5.5) 32.8 ——	上胴部で内湾し、口縁部に到る。口唇部は凹状をなす。	内外面ナデ調整。	
134	〃	〃	27.0 (7.5) 29.0 ——	胴部中位で内湾し、口縁部は直線的に立ち上がる。口唇部は丸くおさめる。	〃	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
135	SD1	瓦質土器 鍋	23.8 (9.2) 24.5 ——	胴部中位で内湾する。口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部は凹状をなす。	口縁部内外面ナデ調整。	
136	〃	〃	23.0 (6.3) 27.9 ——	胴部中位で大きく内湾。口縁部は短く、わずかに外反して立ち上がる。口唇部は凹状をなす。	〃	
137	〃	〃	25.1 (5.5) 28.5 ——	上胴部で内側に屈曲し、口縁部は直立気味に立ち上がる。口唇部は凹状をなす。	〃	
138	〃	〃	25.4 (5.8) 26.4 ——	胴部中位で内湾し、口縁部はわずかに外反する。端部は肥厚し、口唇部は凹状をなす。	〃	
139	〃	〃	24.0 (8.1) 26.5 ——	上胴部で内湾し、口縁部は直立。口唇部は凹状をなす。	〃	
140	〃	〃	23.6 (5.5) 26.0 ——	〃	〃	
141	〃	〃	18.4 (5.6) 21.0 ——	上胴部で内側に屈曲し、口縁部は直線的に立ち上がる。口唇部は丸くおさめる。	〃	
142	〃	〃	16.0 (6.9) 19.4 ——	胴部中位で内側に屈曲。口縁部は短く外反し、端部はわずかに肥厚する。	〃	
143	〃	〃	16.2 (4.7) 16.9 ——	胴部中位で内側に屈曲し、口縁部は外反し、口唇部は丸くおさめる。	〃	
144	〃	〃	23.1 (9.0) 25.3 ——	上胴部で内湾し、口縁部は直線的に外反する。口唇部は凹状をなす。	上胴部が厚くつくられている。胴部内面は横方向のハケ調整。	
145	〃	〃	23.6 (4.0) 26.5 ——	上胴部から内傾して口縁部に到る。口唇部は面をなす。口縁部外面に断面三角形のツバを有す。	内外面ナデ調整。	
146	〃	擂鉢	30.6 (5.1) —— ——	口縁部はわずかに上下に肥厚さす。口唇部は幅広くつくられ、凹状をなす。	内外面横ナデ調整。条線は7本まで見られる。	外面に重ね焼きの跡がみられる。備前。
147	〃	〃	28.0 10.9 —— 13.4	口縁部は上下に肥厚し、口唇部はわずかに凹状をなす。	内外面横ナデ調整。条線は細く11本まで見られる。	〃
148	〃	〃	26.0 (8.0) —— ——	〃	内外面横ナデ調整。条線は8本まで見られる。	〃
149	〃	〃	25.9 (6.2) —— ——	〃	内外面横ナデ調整。条線は6本単位である。	〃

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
150	SD1	擂鉢	— (7.6) — 14.1	底部から内湾気味に立ち上がる。	条線の単位は10本からなる。	備前。
151	〃	〃	— (3.5) — 12.0	〃	条線の単位は9本からなる。	内面は磨耗が著しい。 備前。
152	〃	甕	36.0 (7.2) — —	頸部は短く直立し、口縁部は玉縁状を呈す。		備前。
153	〃	〃	33.0 (10.7) — —	〃		〃
154	〃	〃	— (6.4) — —	頸部は直線的に立ち上がり、口縁部は玉縁状を呈すと思われる。		〃
155	〃	〃	— (7.6) — 14.1	内湾気味に立ち上がる。	内外面横ナデ調整。	常滑。
156	〃	〃	— (3.2) — 10.3	直線的に立ち上がる。	〃	断面茶褐色。 備前。
157	〃	青磁 碗	16.4 (5.6) — —	口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさめる。	外面は片切り彫りで、唐草文を配す。淡緑色の釉をやや厚くかける。	胎土は灰白色で壁緻。内面は使用痕が顕著。
158	〃	〃	18.6 (2.7) — —	〃	内面は唐草文、外面はラマ蓮弁を配する。淡緑色の釉をやや厚くかける。	〃
159	〃	〃	14.2 (5.6) — —	内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。端部は丸くおさめる。	内外面無文。緑褐色の釉をかける。	胎土は灰白色で堅緻。
160	〃	〃	— (2.9) — —	〃	内外面無文。淡緑色の釉をかける。	〃
161	〃	〃	— (2.9) — —	〃	内外面無文。淡緑色の釉をかける。内外面に貫入。	胎土は灰色で粗い。
162	〃	〃	— (1.8) — —	口縁部は強く外反し、端部は丸くおさめる。	内外面無文。淡緑色の釉をやや厚くかける。	胎土は灰白色で堅緻。
163	〃	〃	— (3.3) — —	内湾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。	外面に細蓮弁文を配す。緑褐色の釉をうすくかける。	胎土は灰色でやや粗い。
164	〃	〃	— (2.4) — 6.0	高台断面は逆台形を呈す。畳付は外側を斜めに削っている。	見込に印花文。釉は淡緑色を呈し、一部高台内面までかかる。	〃

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
165	SD1	青磁 碗	— (1.9) — 5.4	外底に兜幅あり。畳付外面を斜めに削っている。	見込みに印花文あり。淡緑色の釉を高台外面までかける。	胎土は灰色で堅緻。
166	〃	白磁 碗	— (2.1) — 6.2	高台は逆台形を呈し、畳付は水平。	見込に印花文あり。釉は一部高台外面までかかる。	〃
167	〃	青磁 碗	— (4.1) — 7.3	畳付は丸くおさめる。	内面に印花文をわずかに認める。濃緑色の釉が高台内面にまでかかる。断面に底部接合痕を認める。	胎土は黄白色でやや粗い。 貫入あり。
168	〃	〃	— (3.8) — 6.6	底部は厚い。畳付は丸味をおびている。	見込は丸く露胎しており、紅く発色。濃緑色の釉が高台内面まで施釉。	胎土は灰白色で堅緻。
169	〃	〃	— (4.2) — 5.6	高台は外方に張り出す。畳付は外方を大きく斜めに削っている。外底に兜幅を有す。	淡緑色の釉を高台外面までかける。	胎土は灰白色で堅緻。 二次的に火を受けている。
170	〃	〃	— (2.0) — 6.3	畳付は外面を大きく、内面を小さく削り取っている。	〃	胎土は灰色で堅緻。
171	〃	〃	— (1.9) — 6.6	外底には小さな兜幅がある。畳付は水平な面をなす。	見込は丸く露胎する。灰色の釉が高台内面までかかる。露胎部は紅く発色。	〃
172	〃	青磁 皿	— (1.9) — —	直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。	淡緑色の釉を薄くかける。	〃
173	〃	〃	— (1.9) — —	〃	〃	〃
174	〃	白磁 皿	12.0 (1.9) — —	内湾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。	内面は全面、外面は体部中位まで施釉。貫入あり。	胎土は白色で堅緻。
175	〃	〃	— (1.3) — 3.9	断面台形状の高台で、わずかに外に張り出す。	〃	〃
176	〃	白磁 杯	— (2.4) — —	外反して立ち上がり、端部は尖る。	外底以外全面に施釉。	灰白色で堅緻。
177	〃	白磁 碗	14.2 (2.2) — —	内湾して立ち上がり玉縁口縁を呈す。	釉は灰白色。	〃
178	〃	〃	— (1.3) — 3.6	高台は浅く削り出す。	灰白色の釉を一部高台脇までかける。	〃
179	〃	瓦質土器 天目	— (3.3) — 3.6	高台は浅く削り、体部は直線的に立ち上がる。下半に断面三角形の隆起帯がある。	内外面に漆を塗っている。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
180	SD2	瓦質土器 擂鉢	27.6 (3.4) —— ——	内湾して立ち上がり、口唇部は凹状をなす。	条線は4本を1単位とする。	
181	〃	〃	20.1 (4.6) —— ——	内湾して立ち上がり、口唇部は外傾斜する面をなす。	条線は5本を1単位とする。	
182	〃	瓦質土器 鍋	22.2 (3.5) 22.8 ——	上胴部で内湾し、口縁部はS字状を呈す。	内外面ナデ調整。	
183	〃	青磁 碗	14.8 (5.4) —— ——	直線的に立ち上がり、口縁部に到る。端部は丸くおさめる。	淡緑色の釉を厚くかける。	胎土は灰色で堅緻。
184	〃	土師質土器 鍋	20.7 (9.4) 26.0 ——	胴部下半で内湾し、口縁部は内傾の度を強める。断面三角形の大きなツバがつく。	胴部外面は右上がりの叩目。	ツバ以下全面ススける。
185	〃	甕	40.8 (7.5) —— ——	大きく張った肩に、短い頸部が付き、かなり長味をおびた玉縁状の口縁部を有す。		備前。
186	P65	白磁 皿	11.5 (2.3) —— ——	内湾して立ち上がり、口縁部は外反。端部は丸くおさめる。	釉は乳白色。	胎土は灰白色でやや粗い。
187	P68	土師質土器 杯	10.7 2.7 —— 6.6	底部から直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。	底部は糸切りと思われる。	きわめて磨耗が激しい。
188	P69	土師質土器 皿	9.4 1.6 —— 6.4	底径に比べて浅い皿である。外反して立ち上がり、端部は丸くおさめる。		〃
189	P71	土師質土器 杯	10.0 3.3 —— 6.6	体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反、端部は丸くおさめる。	ヘラ切り底と思われる。	〃
190	P74	青磁 碗	—— (3.3) —— ——	内外面に片切り彫りによる文様があるが不明。	濃緑色の釉をやや厚くかける。	胎土は灰色で堅緻。
191	P82	土師質土器 小皿	5.7 1.6 —— 1.8	平面形は楕円形。	手捏ね。内面ナデ調整。	
192	P104	土錘	全長 4.5 直径 1.5 重量(g) 5.0			
193	P110	土師質土器 皿	12.2 (2.3) —— ——	体部中位で屈曲し、口縁部は外反。端部は丸くおさめる。	口縁部内外面横方向のナデ調整。手捏ね。	
194	P117	土師質土器 椀	12.3 (3.1) —— ——	内湾して立ち上がり、口縁部は短く外反。	内外面横ナデ調整。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手法	備考
195	P119	土師器 杯	9.6 / 3.0 / —— / 5.3	内湾して立ち上がる浅い杯部に高い脚部が付く。	全面ナデ調整。	
196	〃	〃	9.5 / 3.0 / —— / 5.4	〃	〃	
197	P163	土師器 椀	14.6 / 5.9 / —— / 6.1	内湾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。高台は外方に張り出す。	〃	
198	〃	〃	—— / (1.5) / —— / 7.4	断面長方形のしっかりした高台が外方に張り出す。		乳白色の胎土。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
199	P165	土師質土器 小皿	8.5 / 1.5 / —— / 5.5	直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。	内外面ナデ調整。糸切り底。	磨耗が激しい。
200	P160	〃	8.5 / 2.2 / —— / 4.2	わずかに内湾気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。	〃	
201	P127	土師質土器 鍋	—— / (3.0) / (23.8) / ——	口縁部の形態は不明。ツバは断面三角形を呈す。	ツバの上下は横ナデ。胴部外面右上がりの叩目。	
202	P131	皿	12.0 / (1.2) / —— / ——	折り縁皿である。		瀬戸系。
203	P134	土師質土器 皿	7.8 / 1.4 / —— / 5.3	内湾して立ち上がる。口唇部は外傾する面をなす。	全面横ナデ調整。端部はわずかにつまみ上げる。糸切り底。	
204	P115	皿	19.1 / (2.1) / —— / ——	なめらかに内湾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。		胎土は黄白色でやや粗い。瀬戸系。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手法	備考
205	P133	土師器 椀	15.2 / (4.1) / —— / ——	内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。端部は丸くおさめる。	全面横ナデ。	乳白色の胎土を有す。
206	P139	土師器 甕	20.7 / (5.2) / —— / ——	口縁部は「く」の字に外反、端部は内側にまきこんでいる。	内面は横方向のハケ調整。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
207	P135	杯	8.8 6.5 —— 3.9	口縁部はわずかに外反する。	透明の釉を全面に施釉。	伊万里。
208	〃	皿	14.8 (2.3) —— ——	いわゆる溝渕皿である。	薄緑の釉を施釉。	胎土は灰白色。 唐津。
209	〃	碗	—— (2.4) —— 4.4		見込に鉄釉と思われるものが見られる。	
210	P140	土師質土器 皿	9.5 2.5 —— 2.7	丸底風、体部下半で屈曲して立ち上がり、口縁部はわずかに外反。端部は丸くおさめる。	内面にロクロ目が見られる。	
211	P141	〃	12.8 (4.1) —— ——	体部中位で強く屈曲して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	手捏ね土器。口縁部内外面は横方向のナデ調整。	
212	P142	〃	11.0 1.8 —— 9.2	わずかに外反して立ち上がる。	糸切り底。	
213	P144	擂鉢	30.2 11.9 —— 14.2	体部はわずかに内湾しながら立ち上がり、口縁部は直立気味。	口縁部外面に2条の沈線。条線は10本を1単位とする。	備前。
214	近世墓	杯	6.4 2.7 —— 2.1		外面に笹絵。 畳付に砂が付着。	伊万里。
215	〃	〃	7.4 4.0 —— 2.8		外面に花木文。 畳付に砂が付着。釉は灰白色。	〃
216	〃	土師質土器 小皿	8.3 1.8 —— 4.7	内湾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。	糸切り底。内外面横ナデ。	
217	〃	碗	7.6 4.2 —— 2.8	〃		焼成が悪い。 伊万里。
218	〃	湯のみ	7.6 5.4 —— 3.4	高台は外方に張り出す。底部で折れて直線的に外方に立ち上がり、口縁部は外反。	外面草文様。釉は乳白色。	胎土は白色で堅緻。 伊万里。
219	〃	碗	7.9 4.7 —— 3.0	内湾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。	釉は灰白色。畳付以外全面施釉。	伊万里。
220	〃	徳利	—— (2.6) —— 5.6		釉は透明。外面は畳付以外全面施釉。下胴部、高台脇に界線。	胎土は灰色で、堅緻。 伊万里。
221	〃	青磁 碗	—— (2.5) —— 5.7		淡青色の釉を高台外面まで施釉。貫入。	〃

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
222	近世墓	擂鉢	25.0 (4.0) —— ——	口縁部は外傾する幅広い面をなし、下方に拡張される。	条線は6本単位。	備前。
223	〃	壺	—— (4.9) —— 15.0	底部から直線的に外方に立ち上がる。		〃
224	〃	鉢	13.6 (5.0) —— ——	わずかに内傾して立ち上がり、口縁部は肥厚する。	透明の釉をかけ、貫入あり。	唐津。
225	〃	碗	—— (2.6) —— 4.5	高台付け根を抉っている。外底に兜幅あり。	高台外面まで施釉。	施釉陶器。
226	〃	擂鉢	—— (3.1) —— 7.0	厚い高台が付く。	胴部下半まで黒釉がかかっている。	胎土は赤茶色。薬味擂りか。施釉陶器。
227	〃	鉢	13.6 6.4 —— 6.2	内湾して立ち上がり、口縁は玉縁を呈す。	乳白色の釉をかけ、貫入が入る。	施釉陶器。
挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手法	備考
228	近世墓	弥生鉢	—— (8.1) 17.4 ——	内湾して立ち上がり、口縁部は「く」の字に外反する。		
229	〃	磁器 キセル	全長 4.0 直径 4.3 / 1.3 重量(g) 1.3 / 6.0 / 5.3			中間部分が腐食して欠如している。

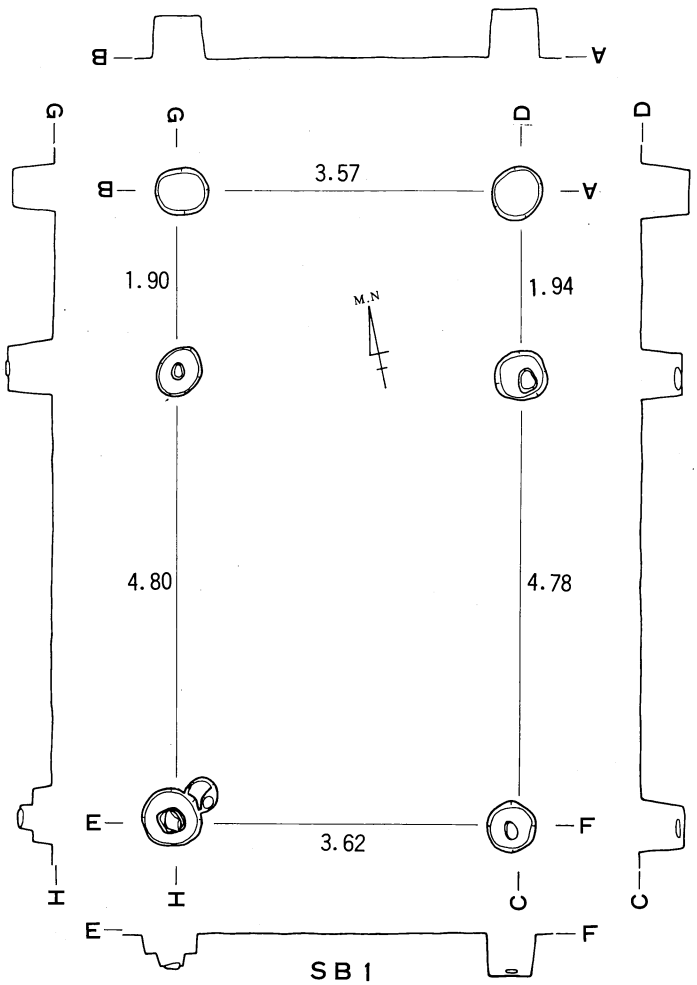
第15表　遺構出土石器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	計測値(cm, g) 最大長 / 最大幅 / 最大厚 / 重量	材質	特徴	備考
231	SD1	砥石	19.0 8.0 6.0 1875.0	砂岩	2面を使用している。	
232	P134	〃	5.0 5.5 4.0 117.5	〃	4面を使用している。	
233	〃	〃	8.5 8.0 3.0 257.5	〃	1面を使用している。	

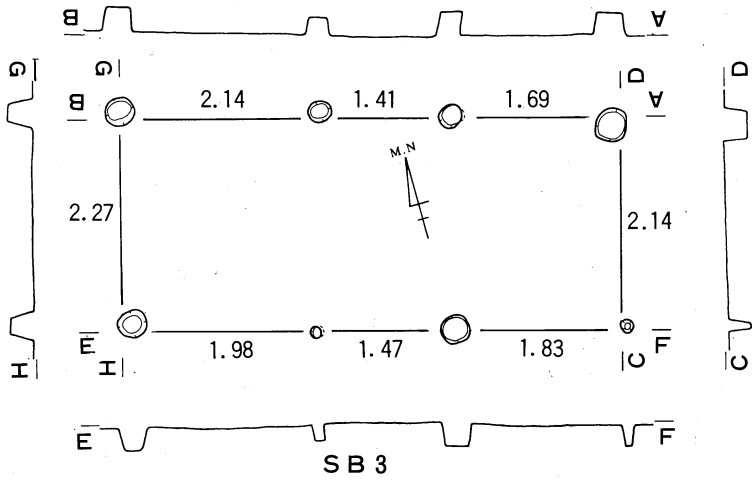
挿図番号	遺構番号	器　種	計測値(cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　考
234	ＳＤ１	砥石	18.5 9.0 5.0 926.0	砂　岩	２面を使用している。	
235	〃	〃	14.0 6.0 1.5 139.0	〃	１面を使用している。	
236	〃	〃	8.0 4.0 2.8 124.0	〃	他のものに比して扁平である。１面を使用している。	
237	〃	〃	18.6 9.0 5.3 1350.5	〃	４面を使用している。	

第16表　遺構出土金属器観察表

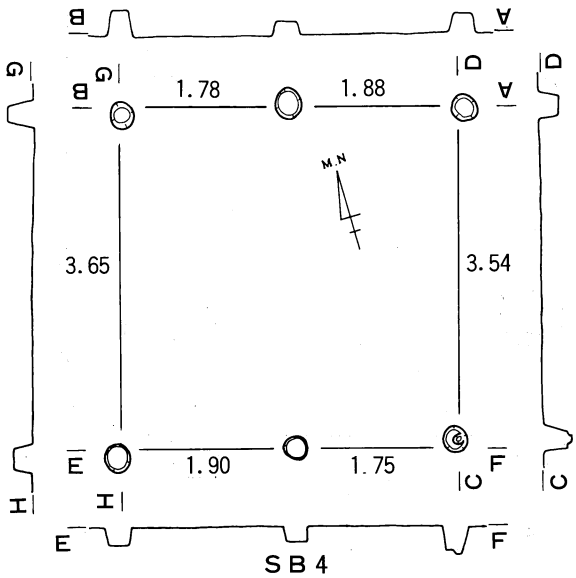
挿図番号	遺構番号	器　種	計測値(cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　考
230	近世墓	キセル	9.0 1.0 1.2 10.0	銅	木製の柄がわずかに残っている。	


B
A
G
G
D
D
3.57
1.90
1.94
M.N
4.80
4.78
E
F
3.62
H
I
C
C
SB1
2.15
1.19
1.18
1.28
1.30
2.12
SB2
DL=6.20m
0
4m

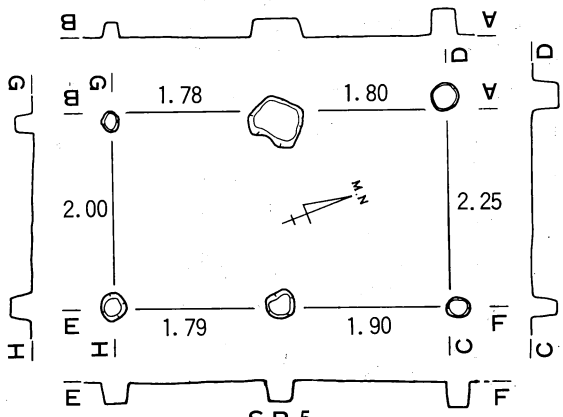
第26図　ＳＢ１・２



SB 3



SB 4

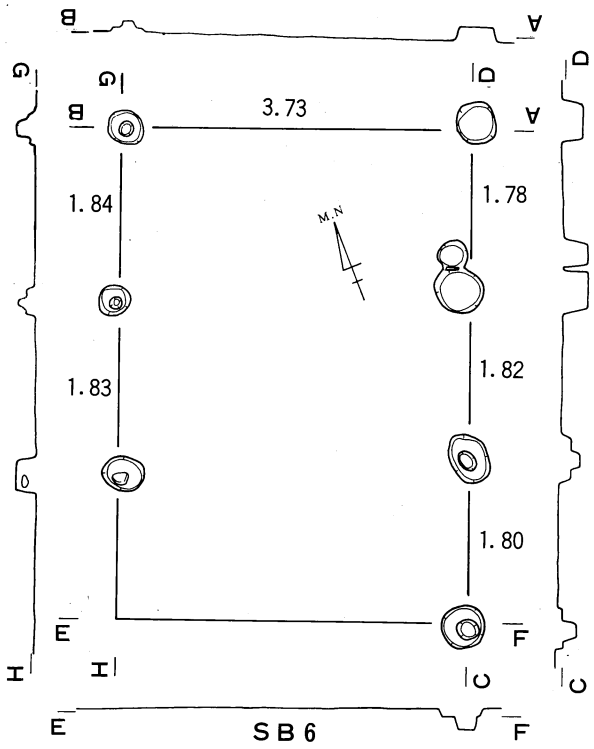


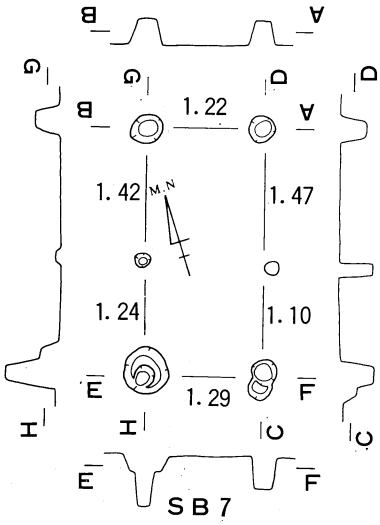
SB 5

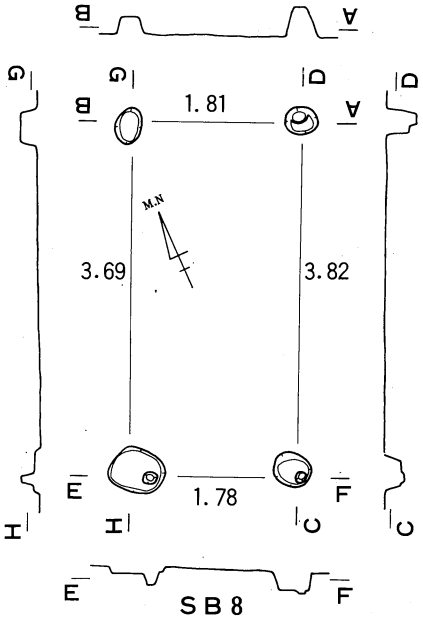
DL=6.20m

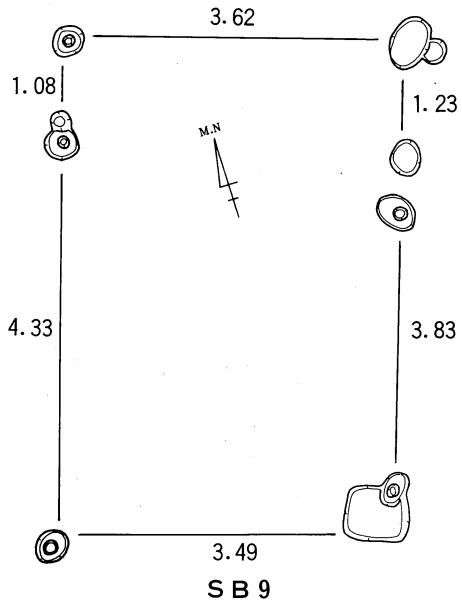
0 4m

第27図　SB 3～5



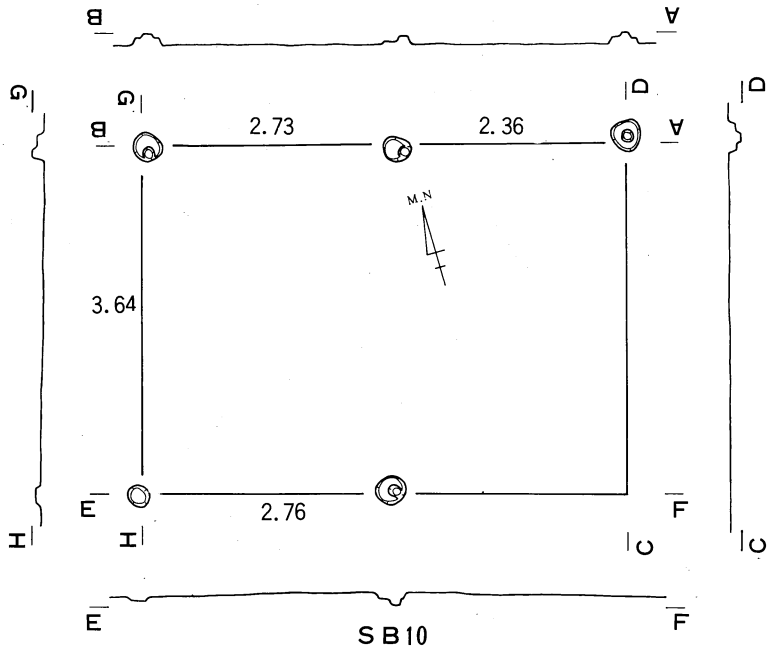




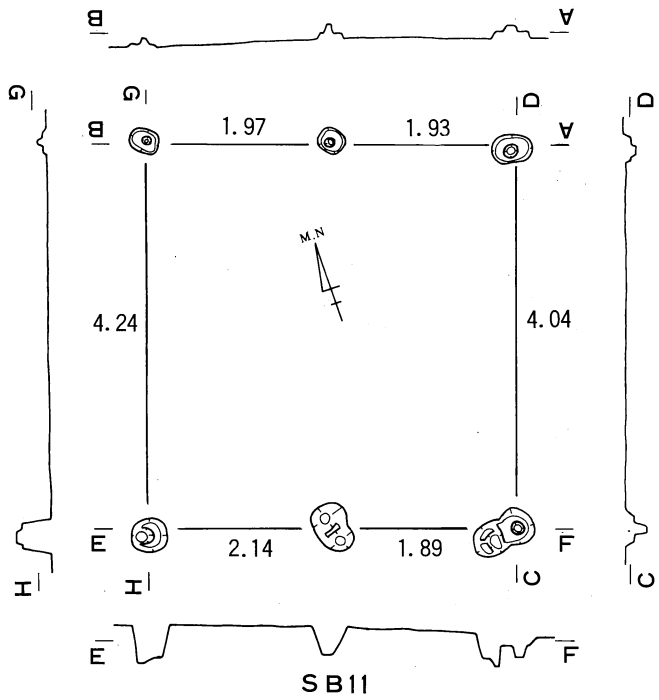


DL＝6.20m　0　4m

第28図　SB 6～9



SB10

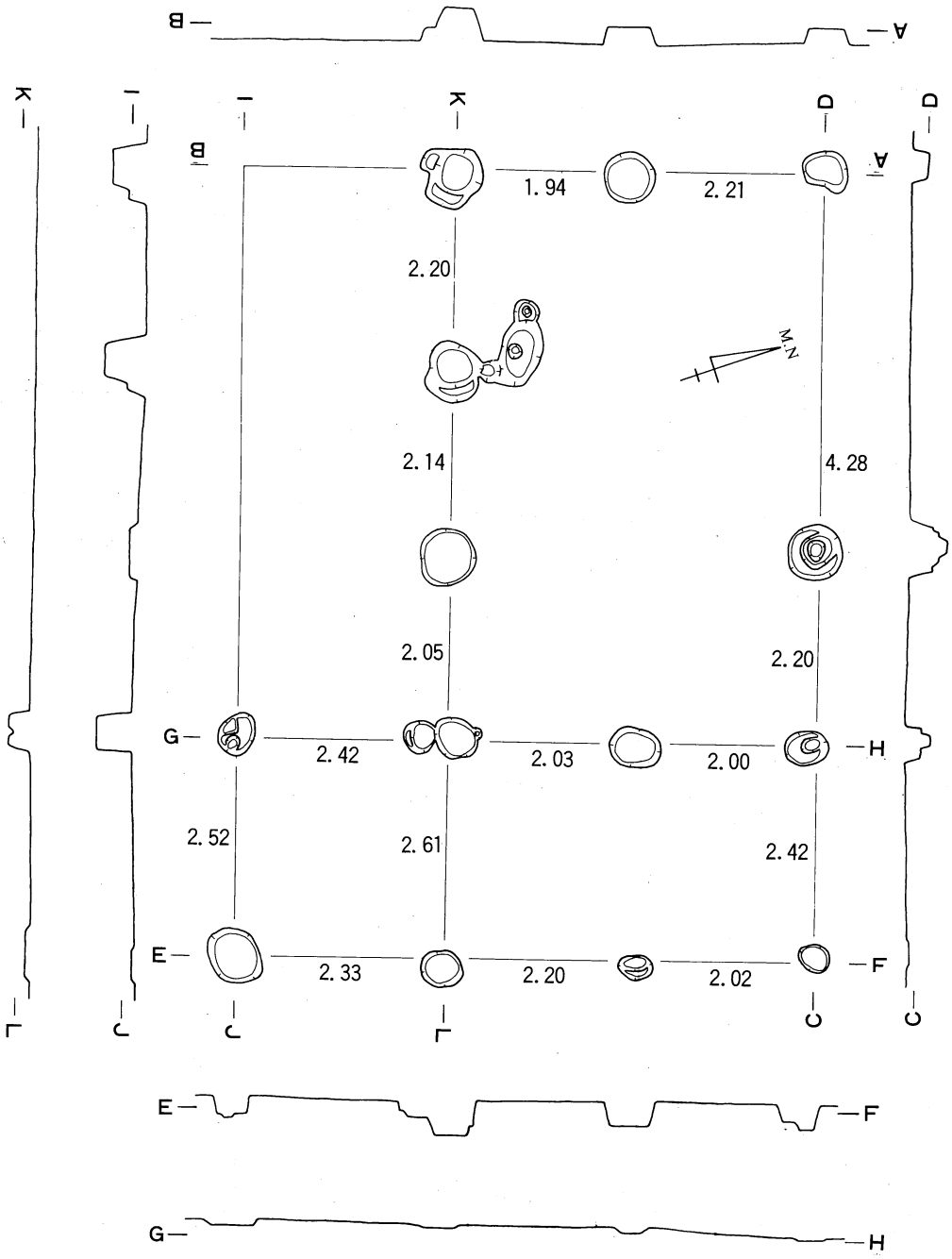


SB11

DL=6.20m

0 4m

第29図　SB10・11

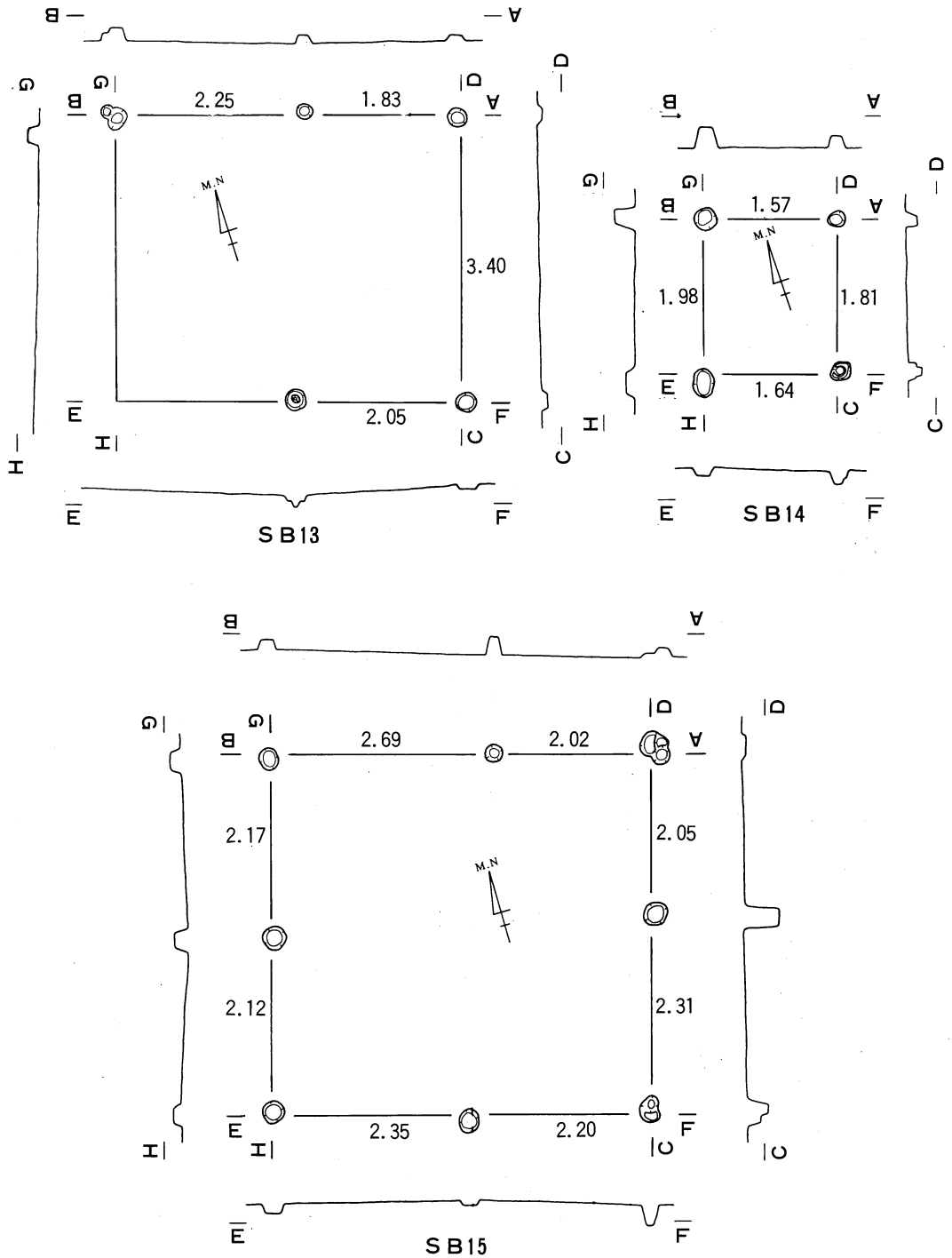


SB12

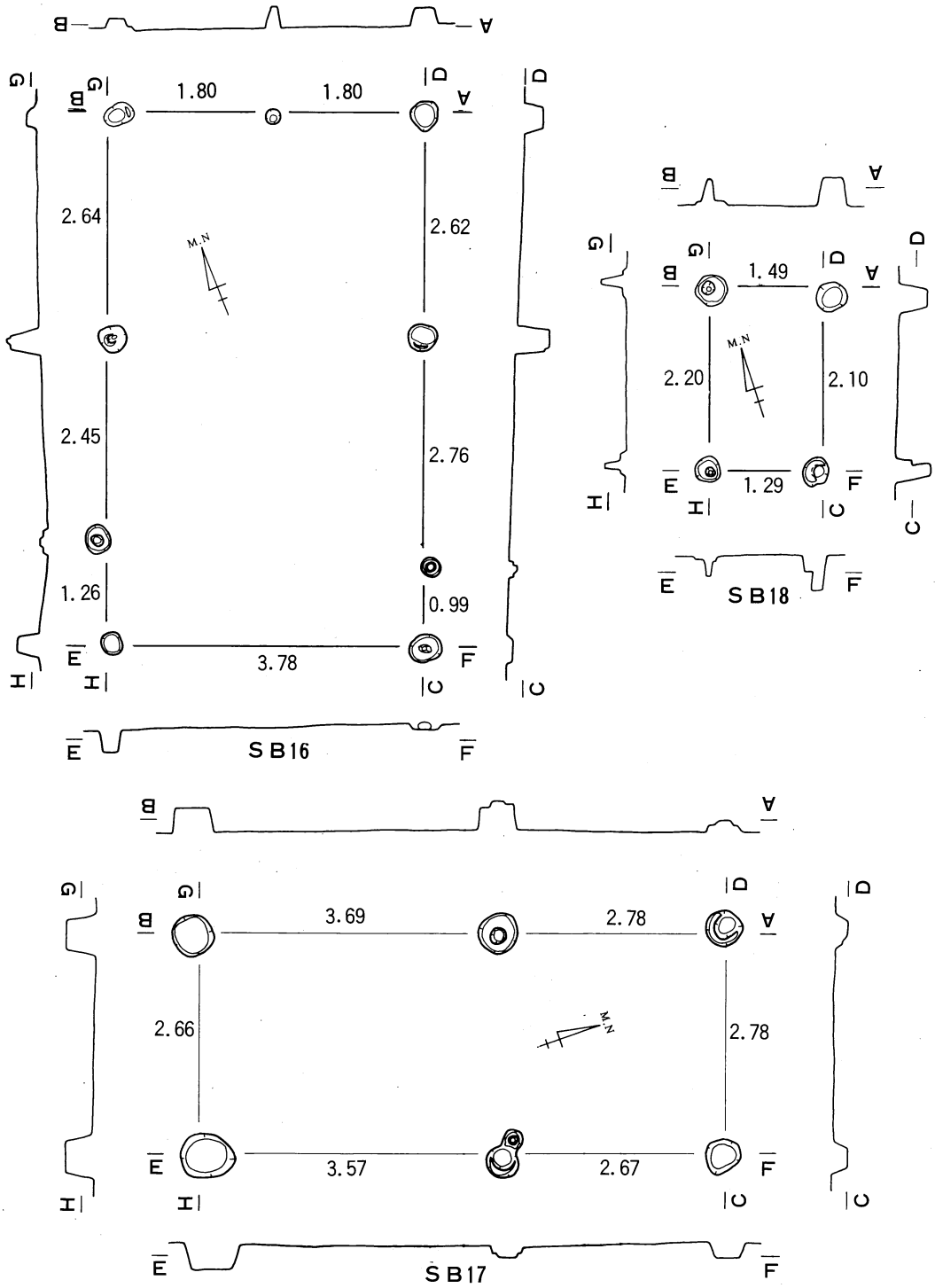
DL=6.20m

0 4m

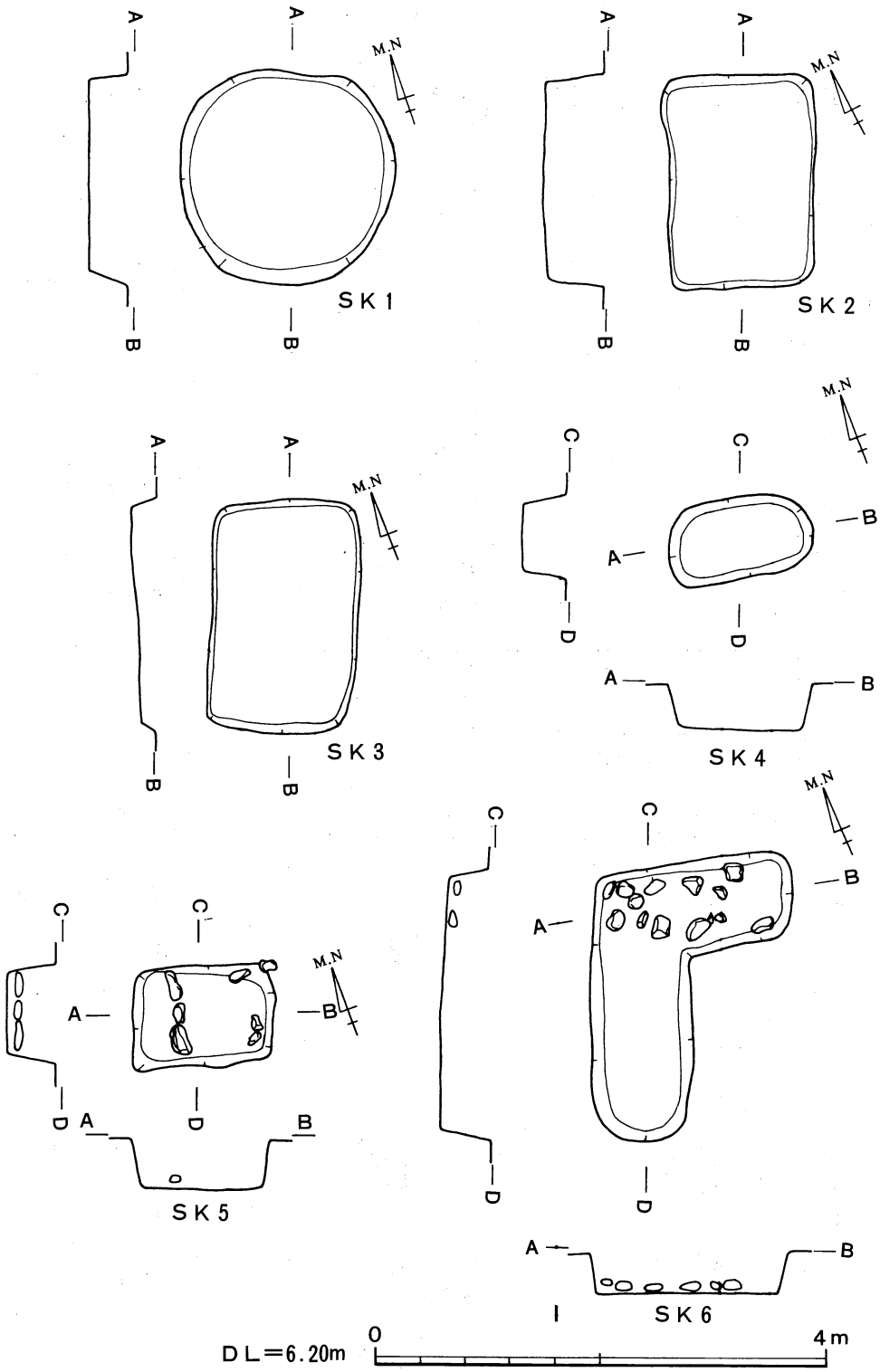
第30図　SB12


A
B
C
D
E
F
G
H
2.25
1.83
3.40
2.05
M.N
SB13
1.57
1.98
1.81
1.64
SB14
2.69
2.02
2.17
2.05
2.12
2.31
2.35
2.20
SB15
DL=6.20m
0
4m

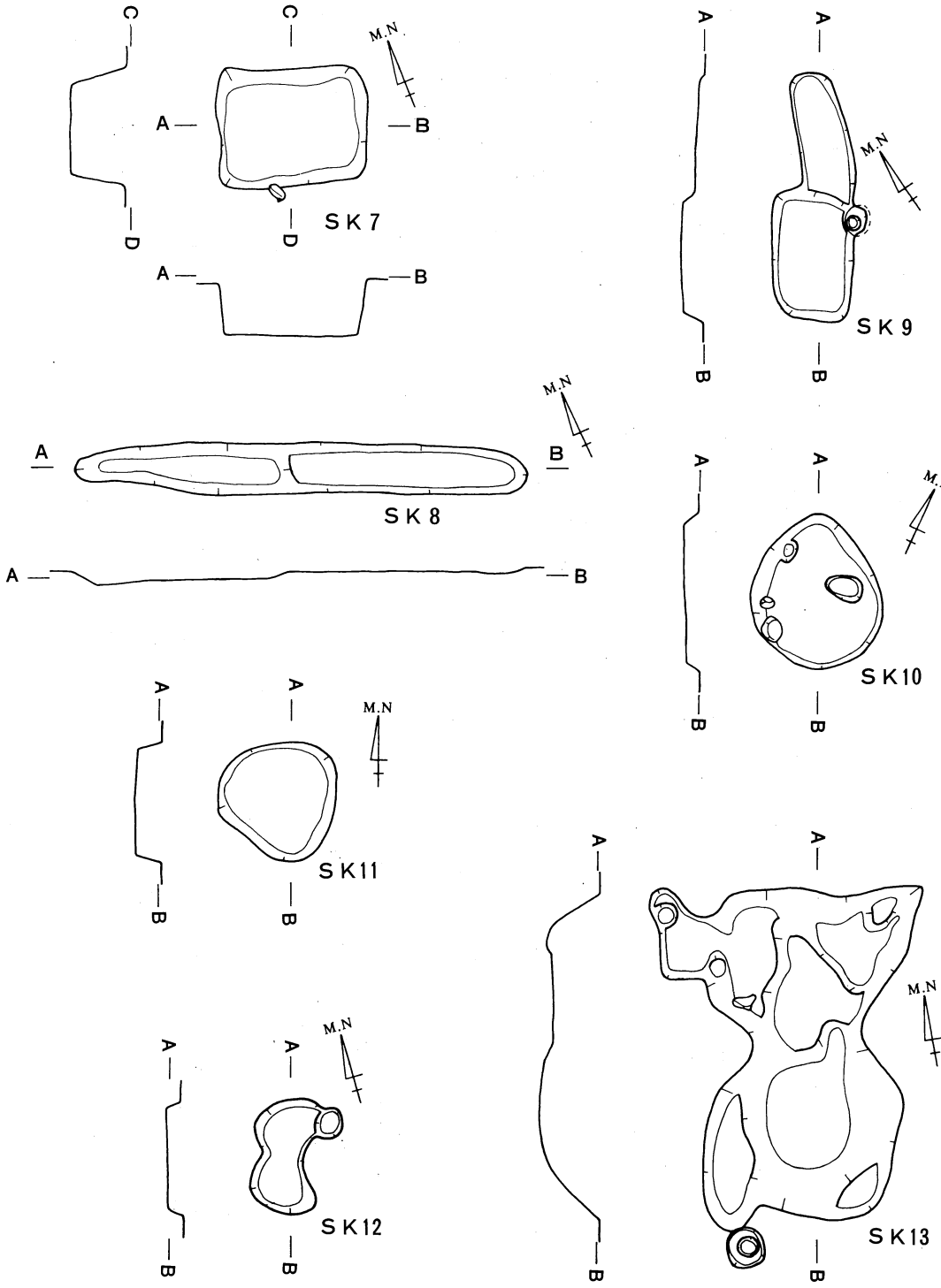
第31図　ＳＢ13～15


B
A
G
D
1.80
1.80
2.64
2.62
M.N
2.45
2.76
1.26
0.99
E
F
H
C
3.78
SB16
1.49
2.20
2.10
1.29
SB18
3.69
2.78
2.66
2.78
3.57
2.67
SB17
DL=6.20m
0
4m

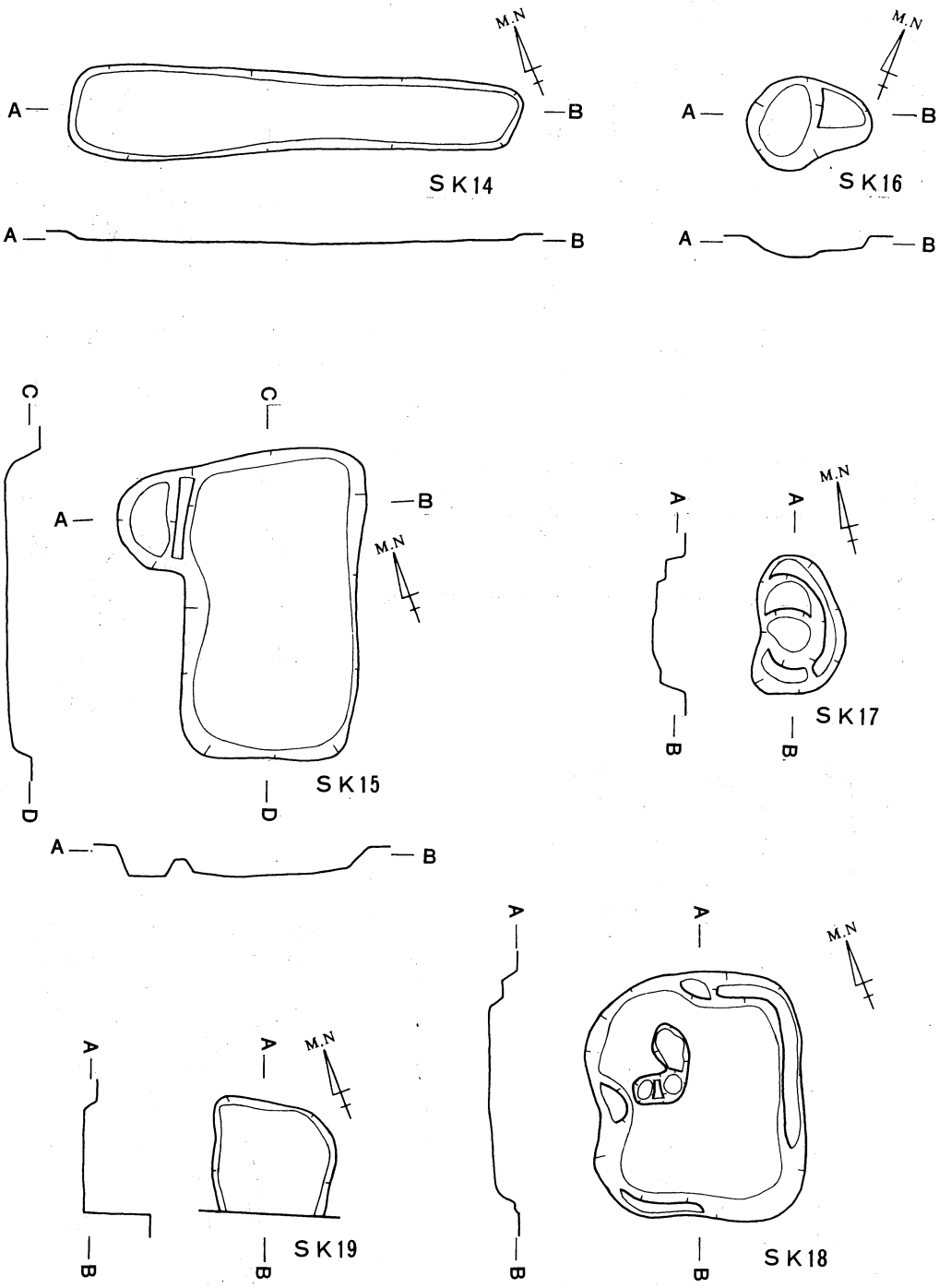
第32図　ＳＢ16～18



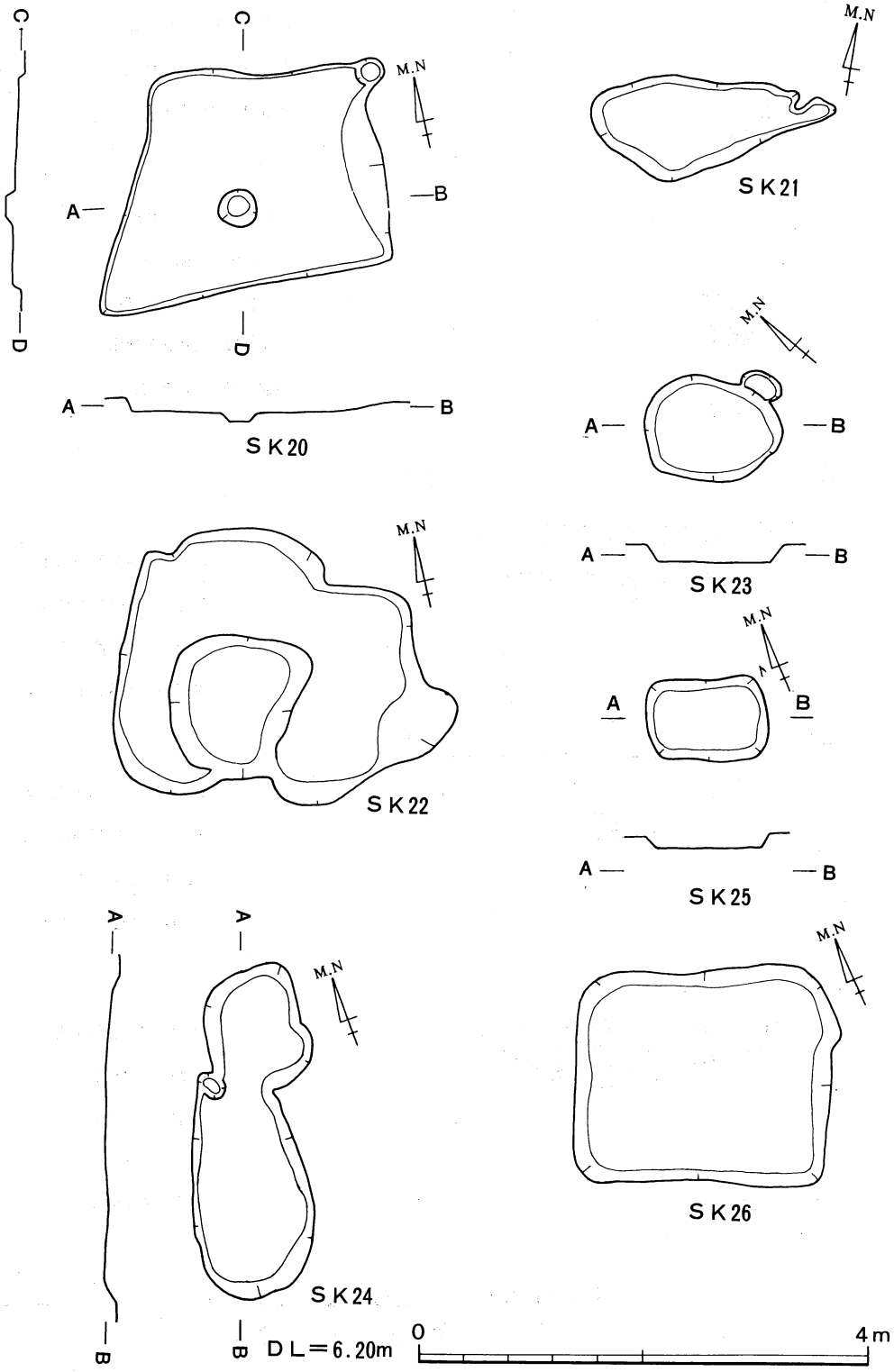
第33図　SK 1～6



第34図　SK 7～13

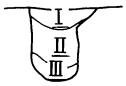


第35図　SK14～19



第36図　SK20～26

A—　　—B

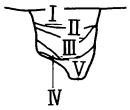


第Ⅰ層　茶灰色粘質土

第Ⅱ層　茶褐色粘質土

第Ⅲ層　薄茶色粘土

C—　　—D



SD 2

第Ⅰ層　黄灰色粘質土

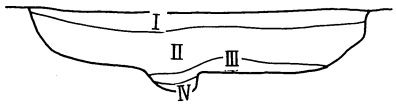
第Ⅱ層　茶褐色粘質土

第Ⅲ層　薄灰茶色粘質土

第Ⅳ層　灰茶色砂質土

第Ⅴ層　薄灰色粘土

E—　　—F



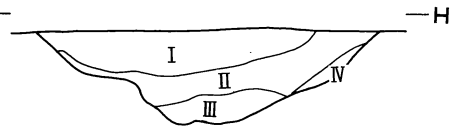
第Ⅰ層　淡茶色 砂質土

第Ⅱ層　暗茶褐色 粘質土

第Ⅲ層　暗灰色粘質土

第Ⅳ層　淡黄灰色粘質土

G—　　—H



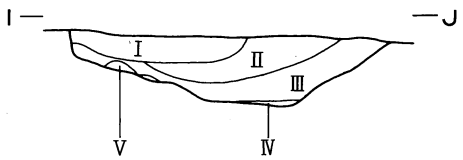
第Ⅰ層　淡黄褐色砂質土

第Ⅱ層　灰茶褐色粘質土

第Ⅲ層　灰色粘質土

第Ⅳ層　暗灰色シルト

I—　　—J



SD 1

第Ⅰ層　淡茶色砂質土

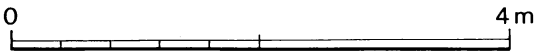
第Ⅱ層　淡黄褐色砂質土

第Ⅲ層　灰褐色粘質土

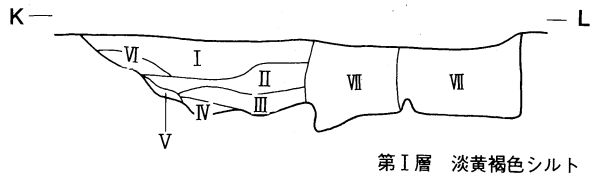
第Ⅳ層　淡黄色シルト

第Ⅴ層　黄褐色シルト

DL＝6.80m



第37図　SD 1 ・ 2

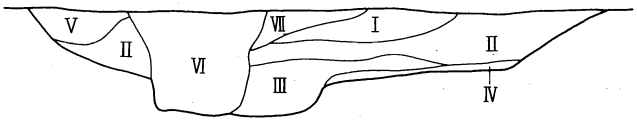


第Ⅰ層　淡黄褐色シルト　　第Ⅴ層　淡黄色シルト

第Ⅱ層　灰茶褐色粘質土　　第Ⅵ層　淡茶灰色砂質土

第Ⅲ層　灰褐色粘質土　　第Ⅶ層　撹乱

第Ⅳ層　黄灰色シルト



ＳＤ１

第Ⅰ層　灰黄色砂質土　　第Ⅴ層　現代撹乱

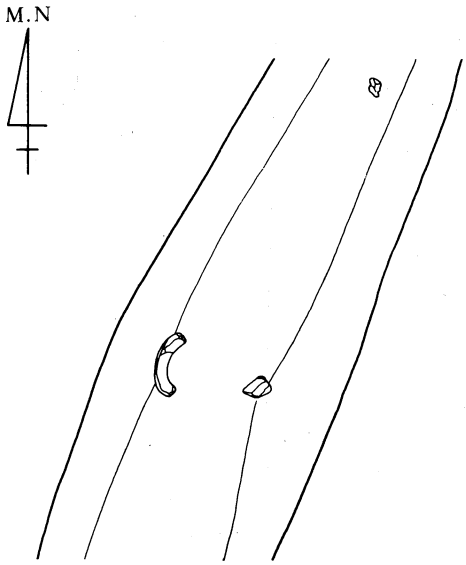
第Ⅱ層　灰茶褐色粘質土　　第Ⅵ層　近世墓掘り込み

第Ⅲ層　灰褐色粘質土　　第Ⅶ層　茶色砂

第Ⅳ層　淡黄褐色シルト

0　4m

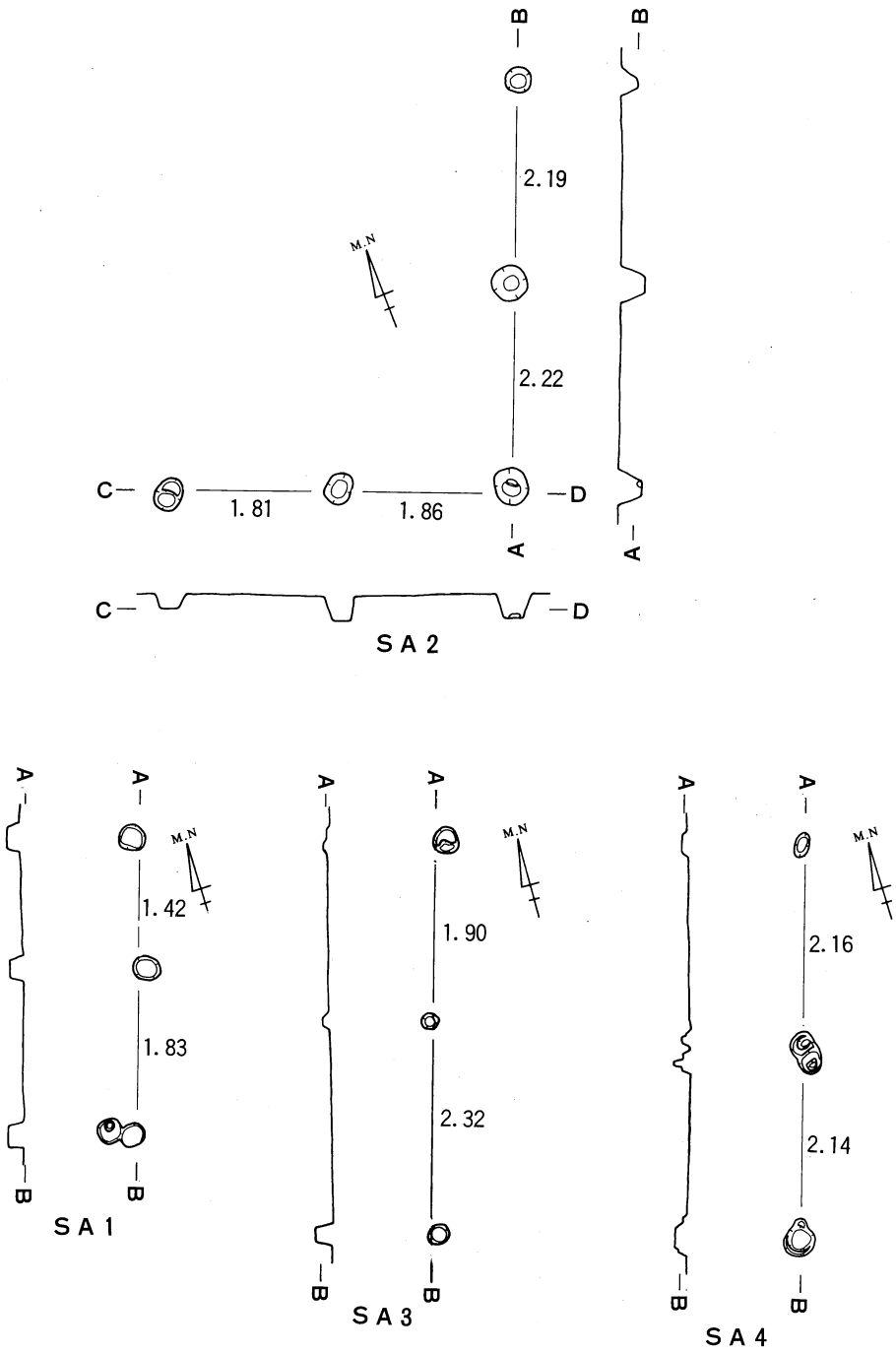
ＳＤ３土器検出状況



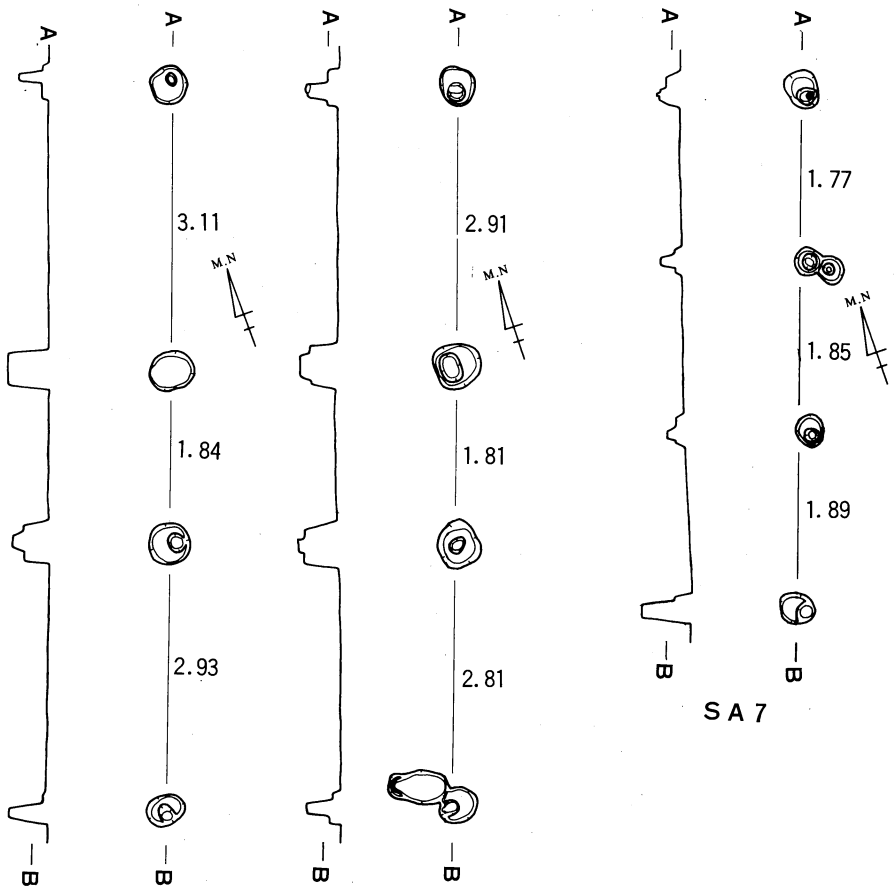
ＤＬ＝6.80m

0　2m

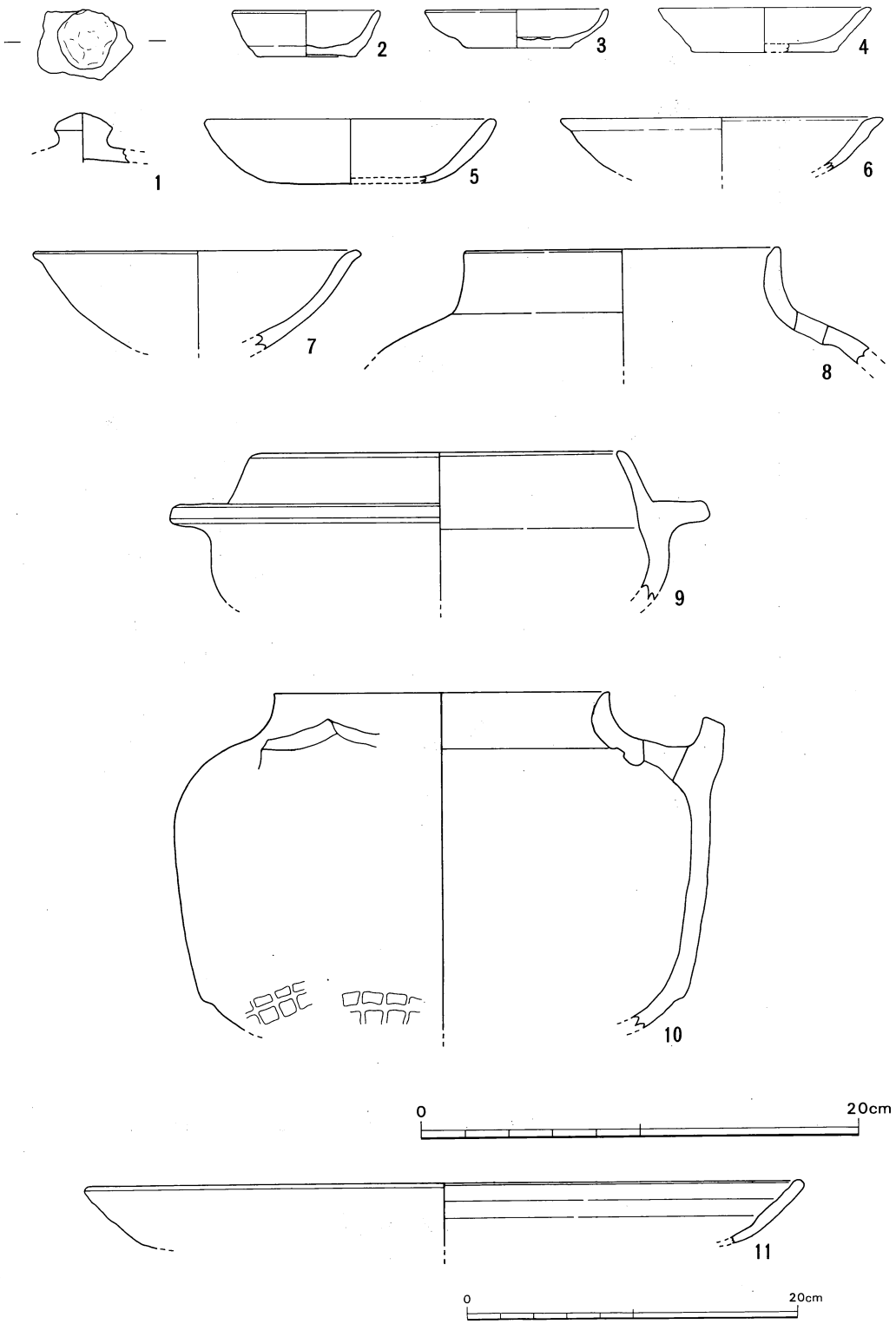
第38図　ＳＤ１・３


B
B
2.19
M.N
2.22
C
1.81
1.86
D
A
A
C
D
SA2
A
A
M.N
1.42
1.83
B
B
SA1
A
A
M.N
1.90
2.32
B
B
SA3
A
A
M.N
2.16
2.14
B
B
SA4
DL=6.20m
0
4m

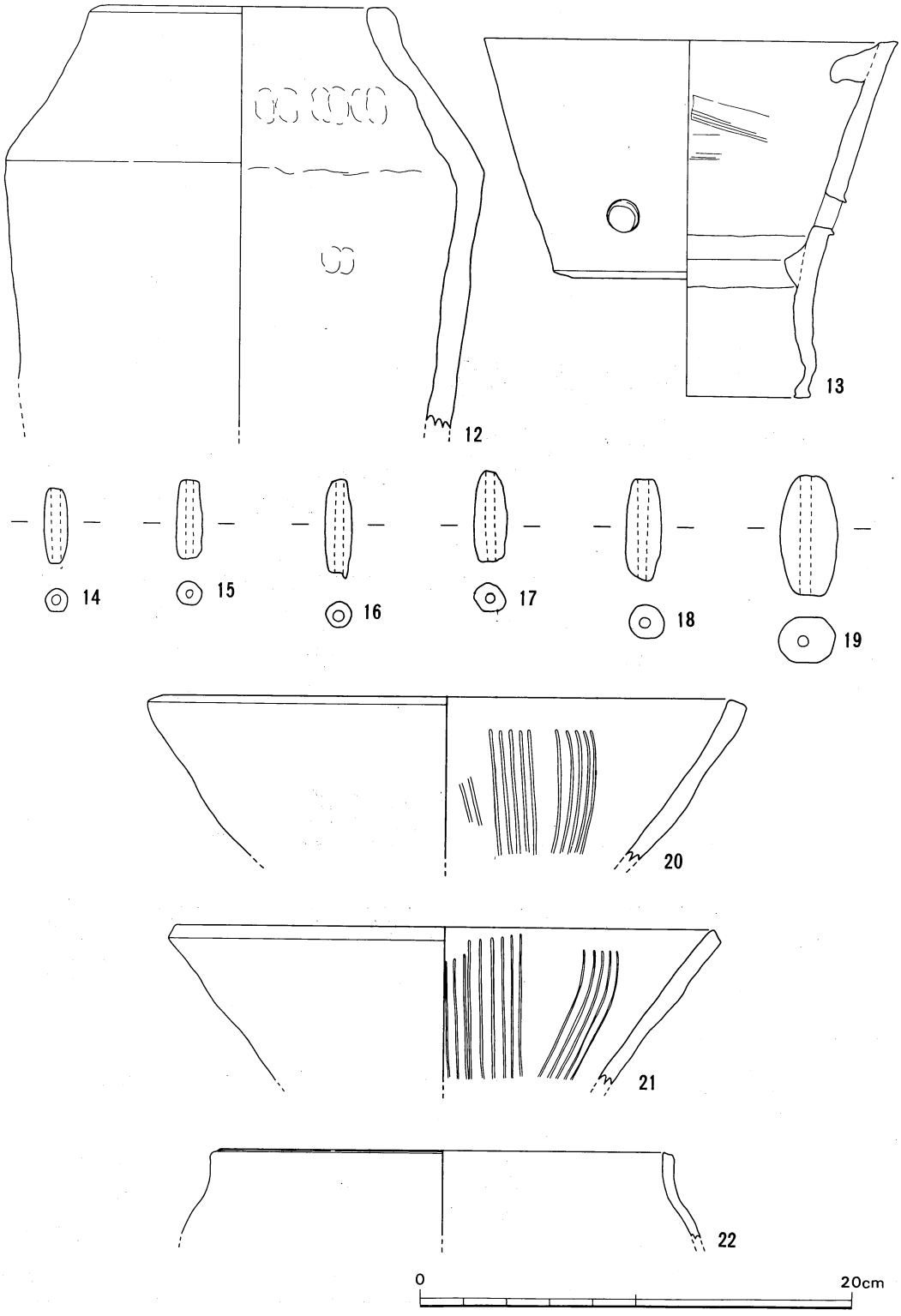
第39図　ＳＡ１～４



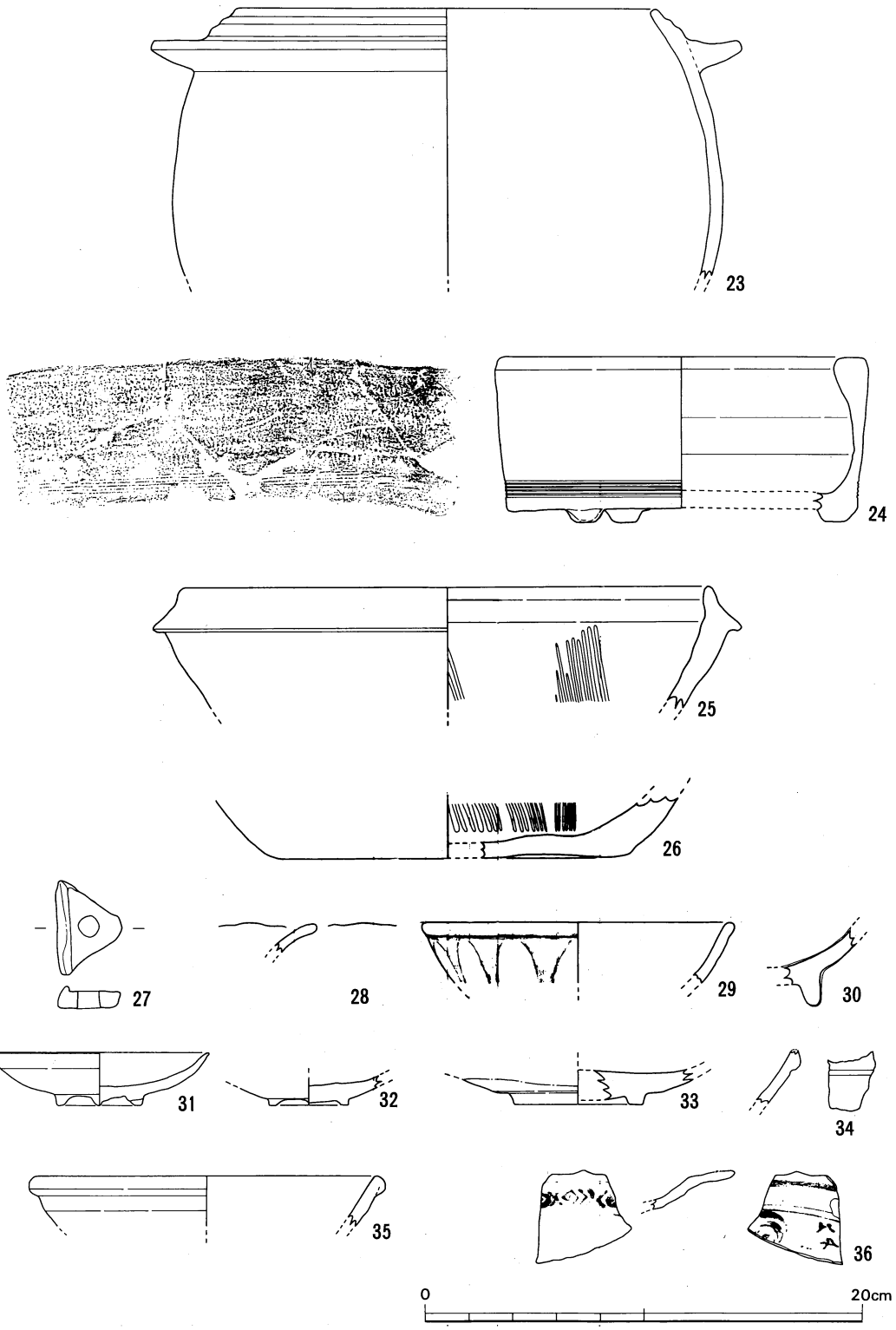
第40図　ＳＡ５～７



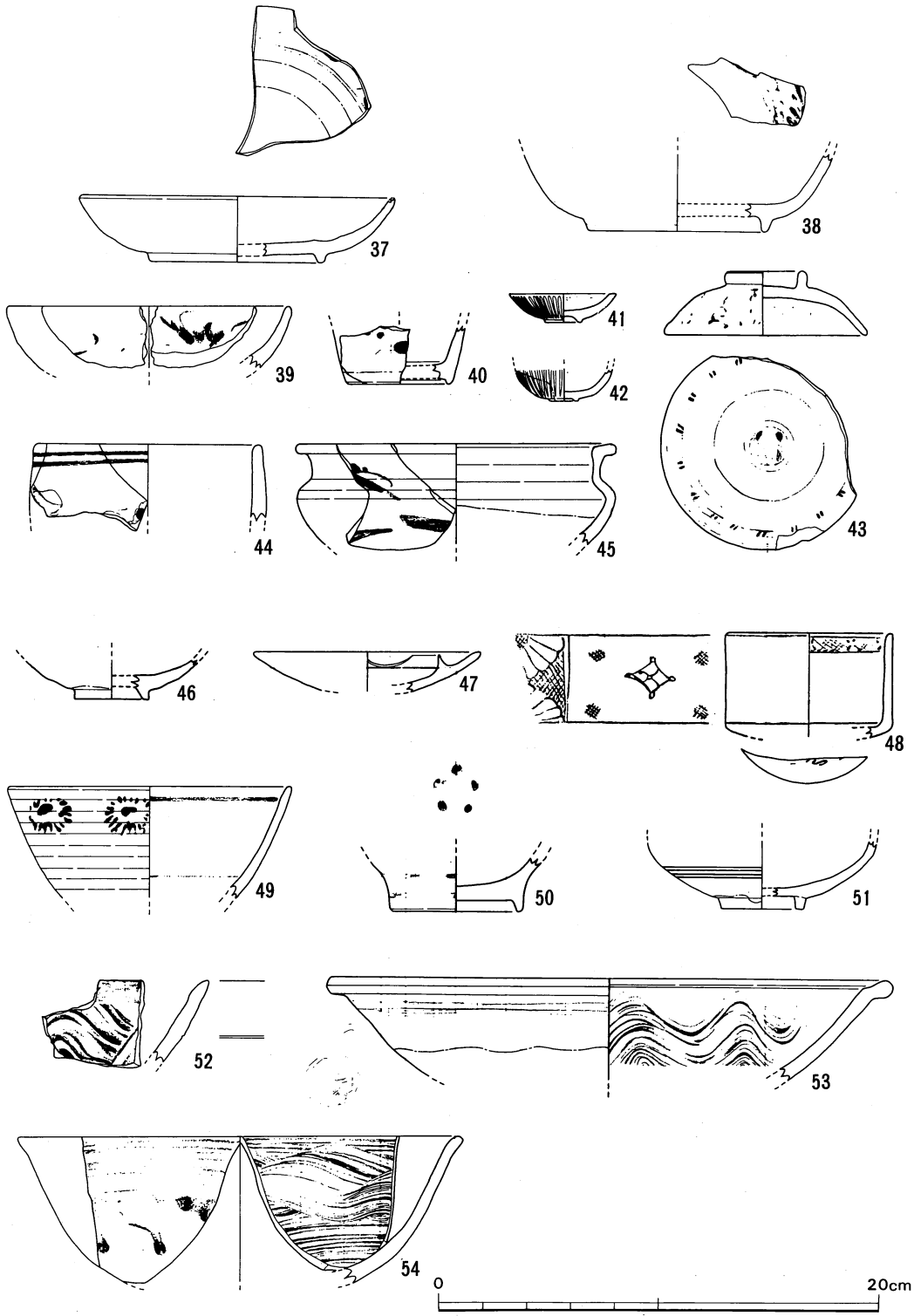
第41図　第Ⅰ～Ⅲ層出土遺物



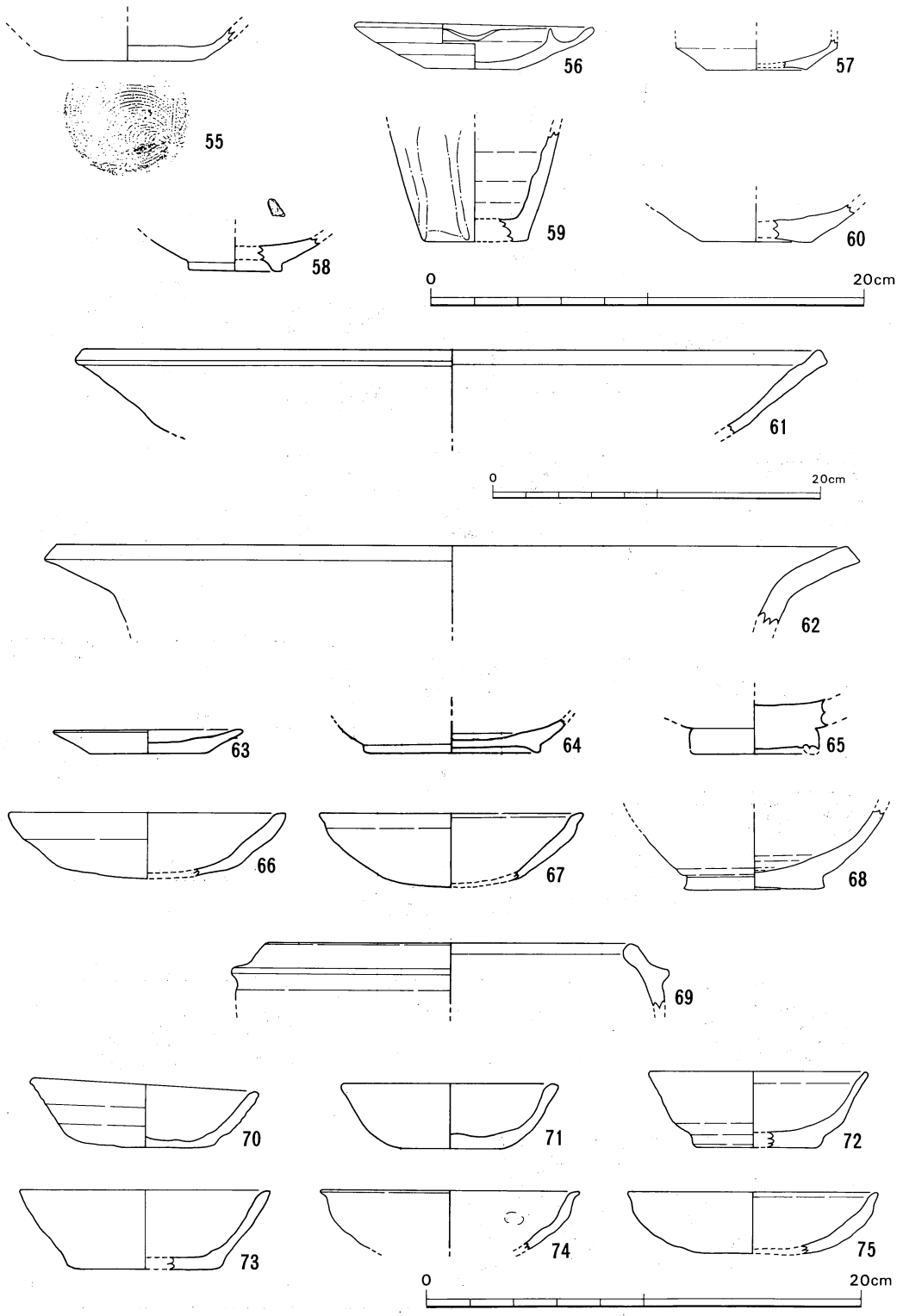
第42図　第Ⅰ～Ⅲ層出土遺物



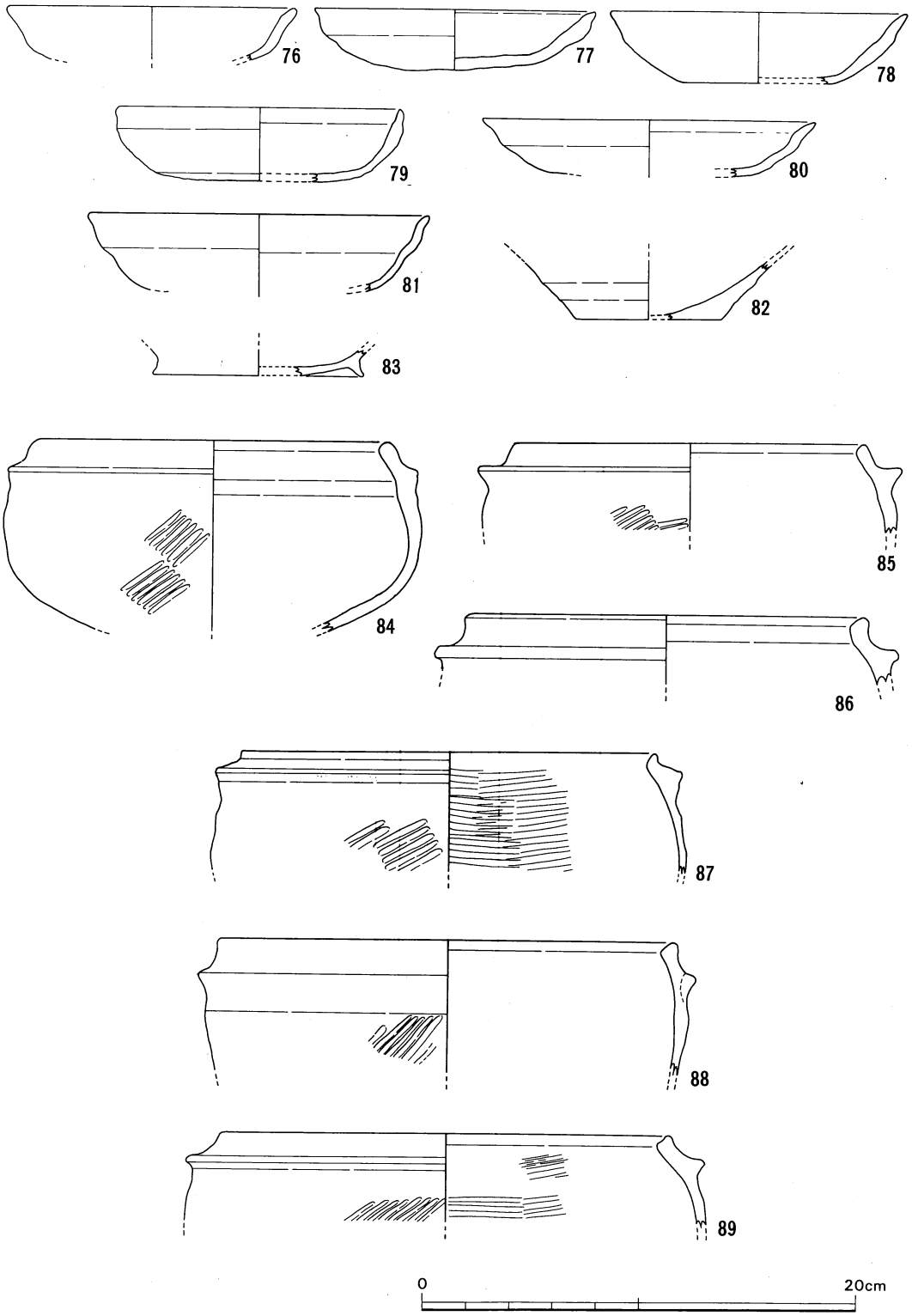
第43図　第Ⅰ～Ⅲ層出土遺物



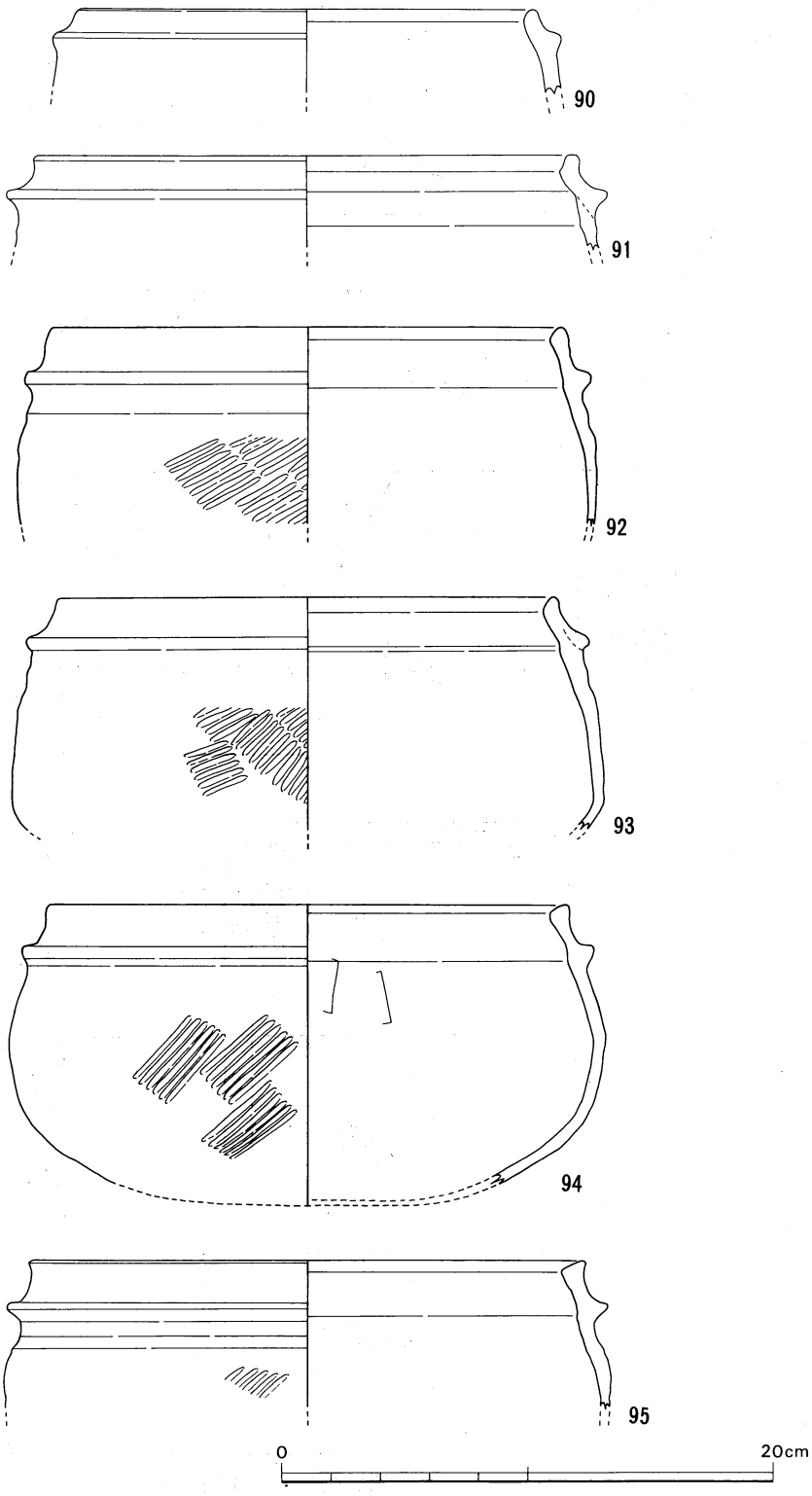
第44図　第Ⅰ～Ⅲ層出土遺物



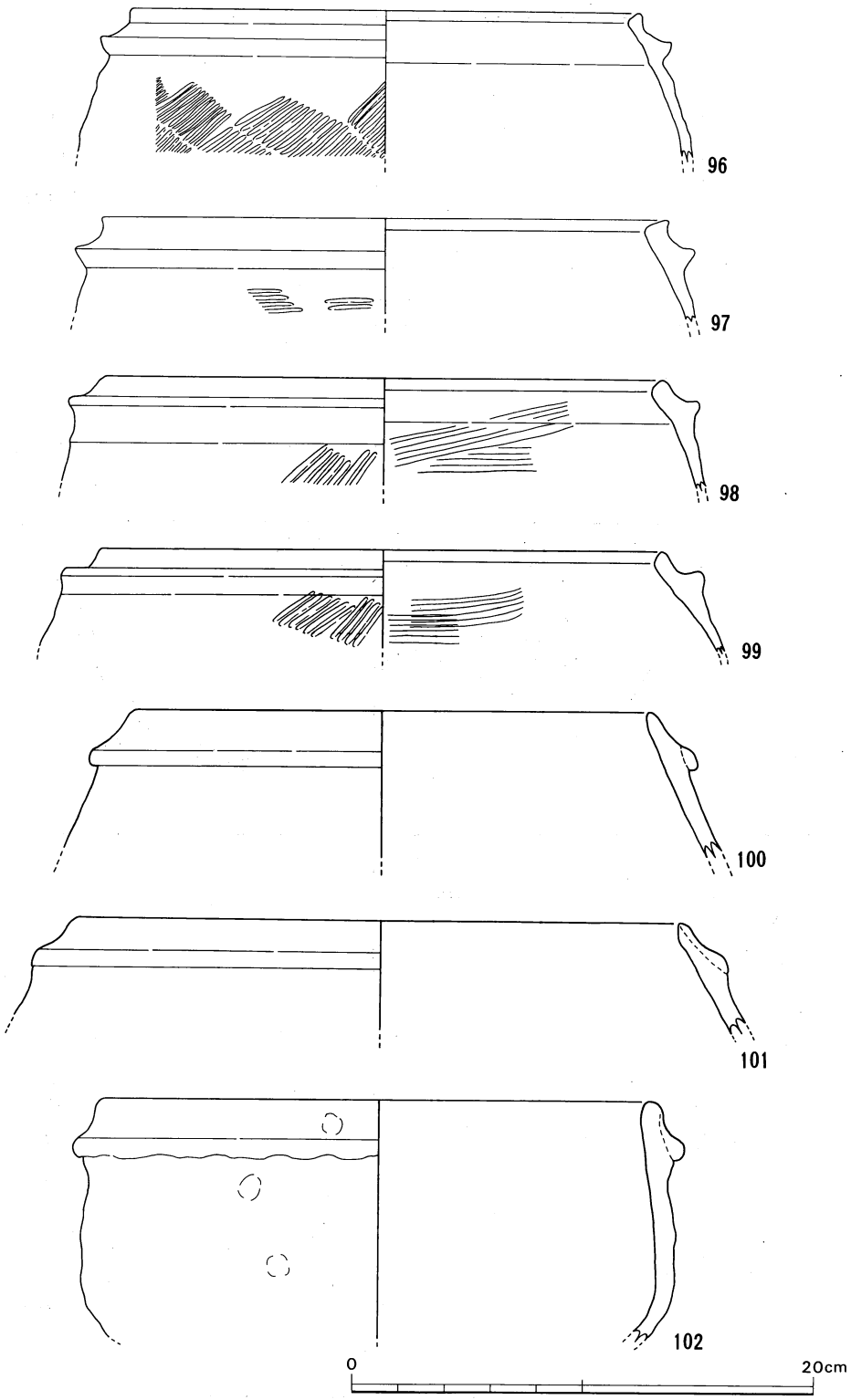
第45図　第Ⅰ～Ⅲ層、撹乱、ＳＢ16、ＳＫ１・２、ＳＥ１・２、ＳＤ１出土遺物



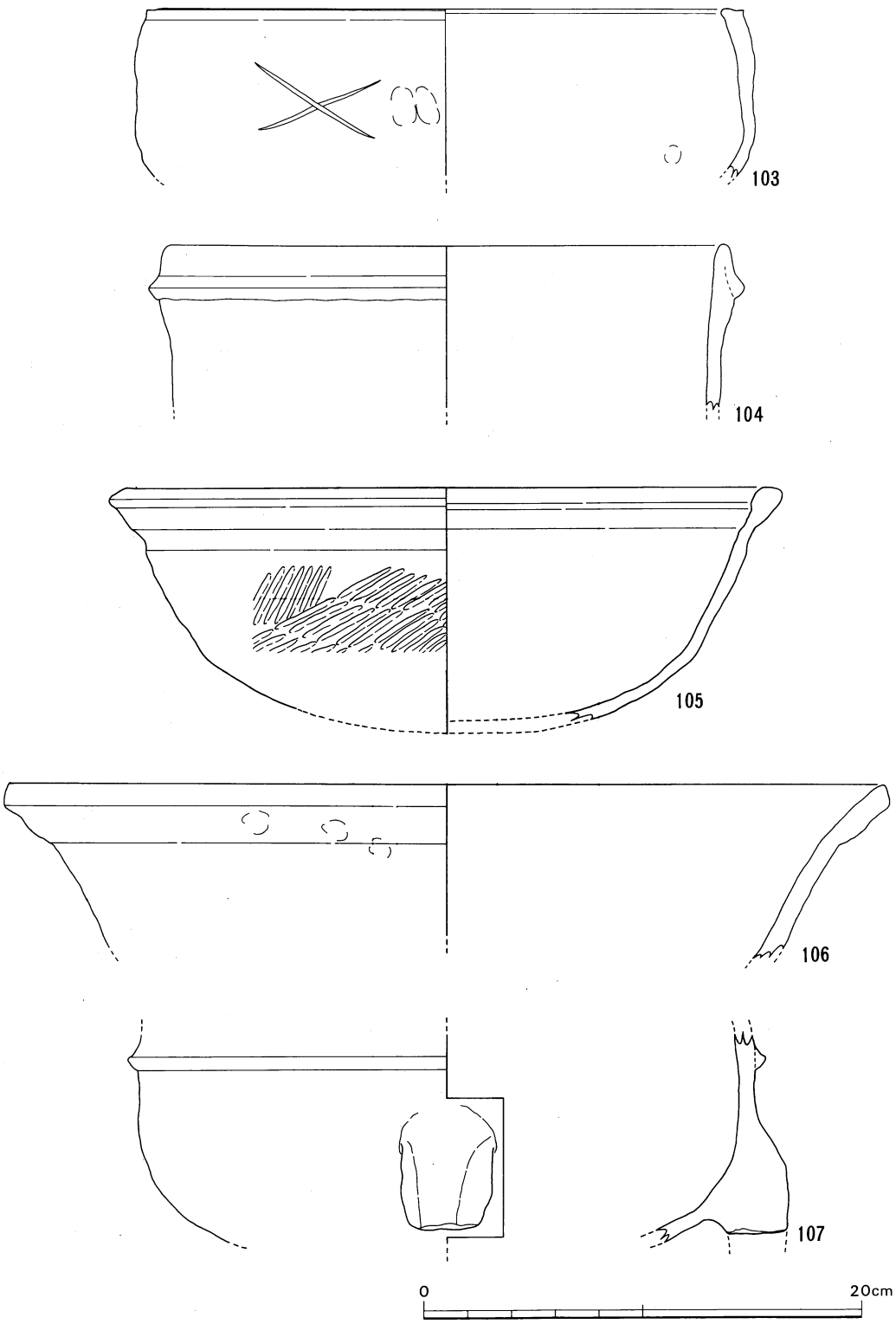
第46図　ＳＤ１出土遺物



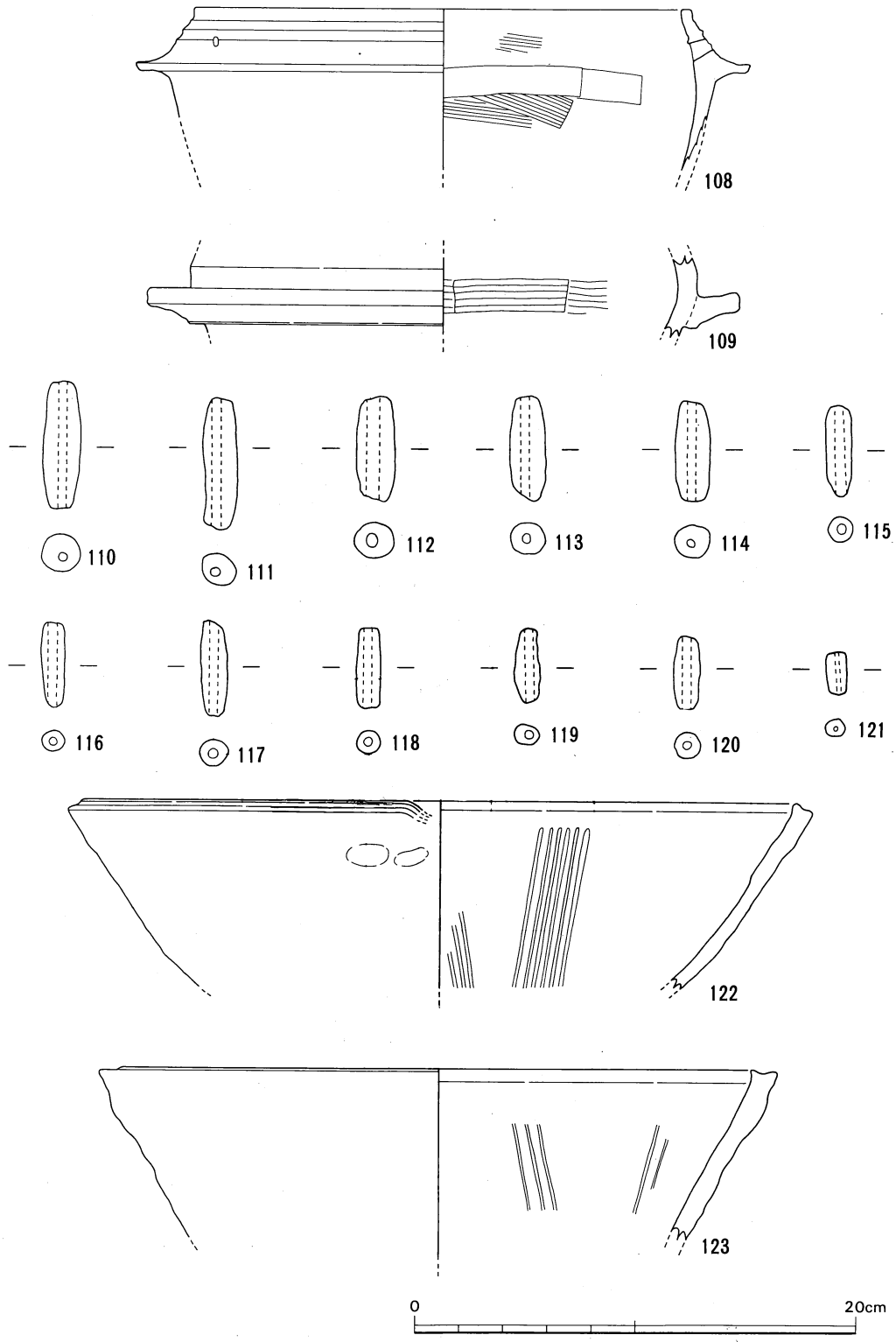
第47図　ＳＤ１出土遺物



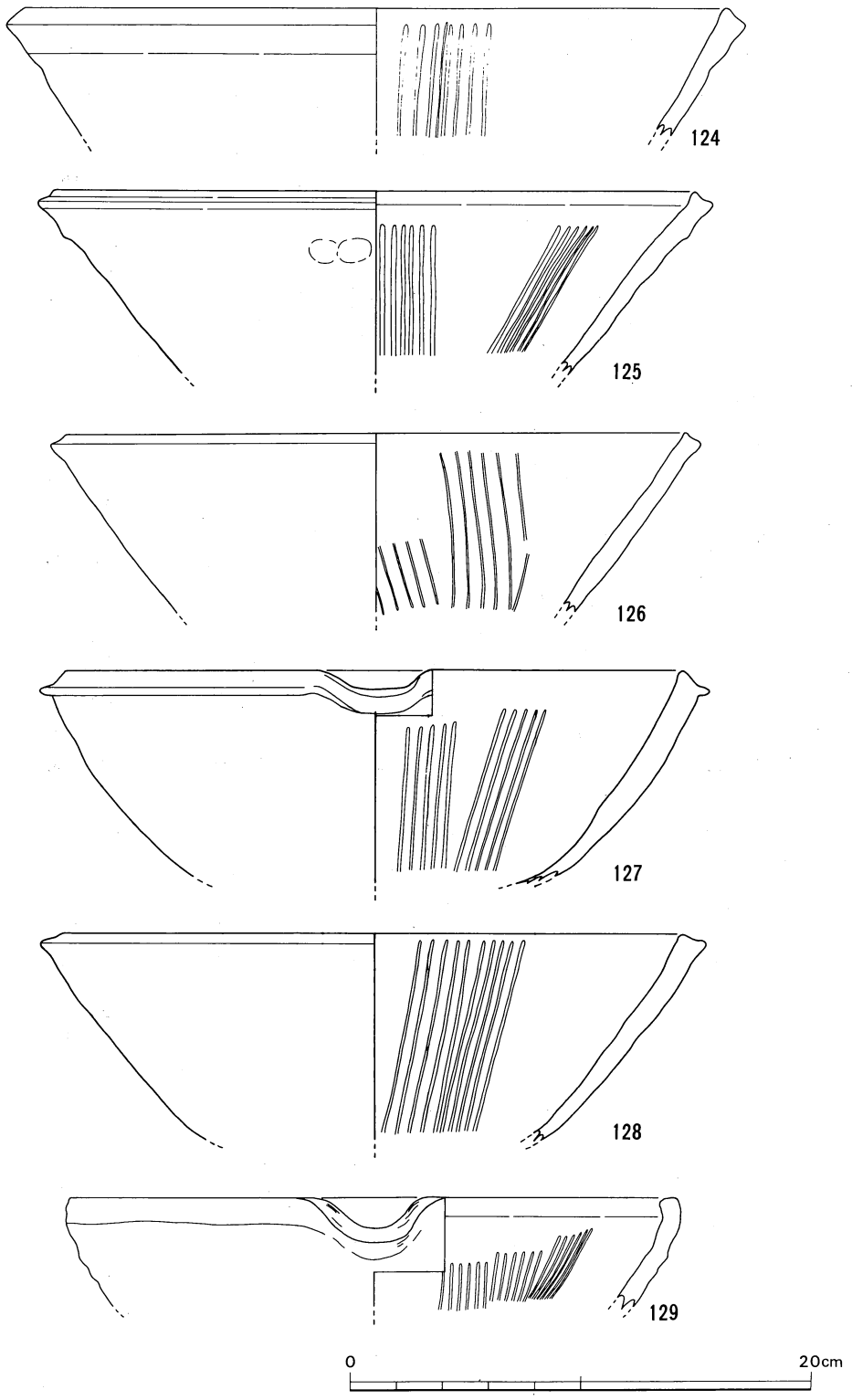
第48図　ＳＤ１出土遺物



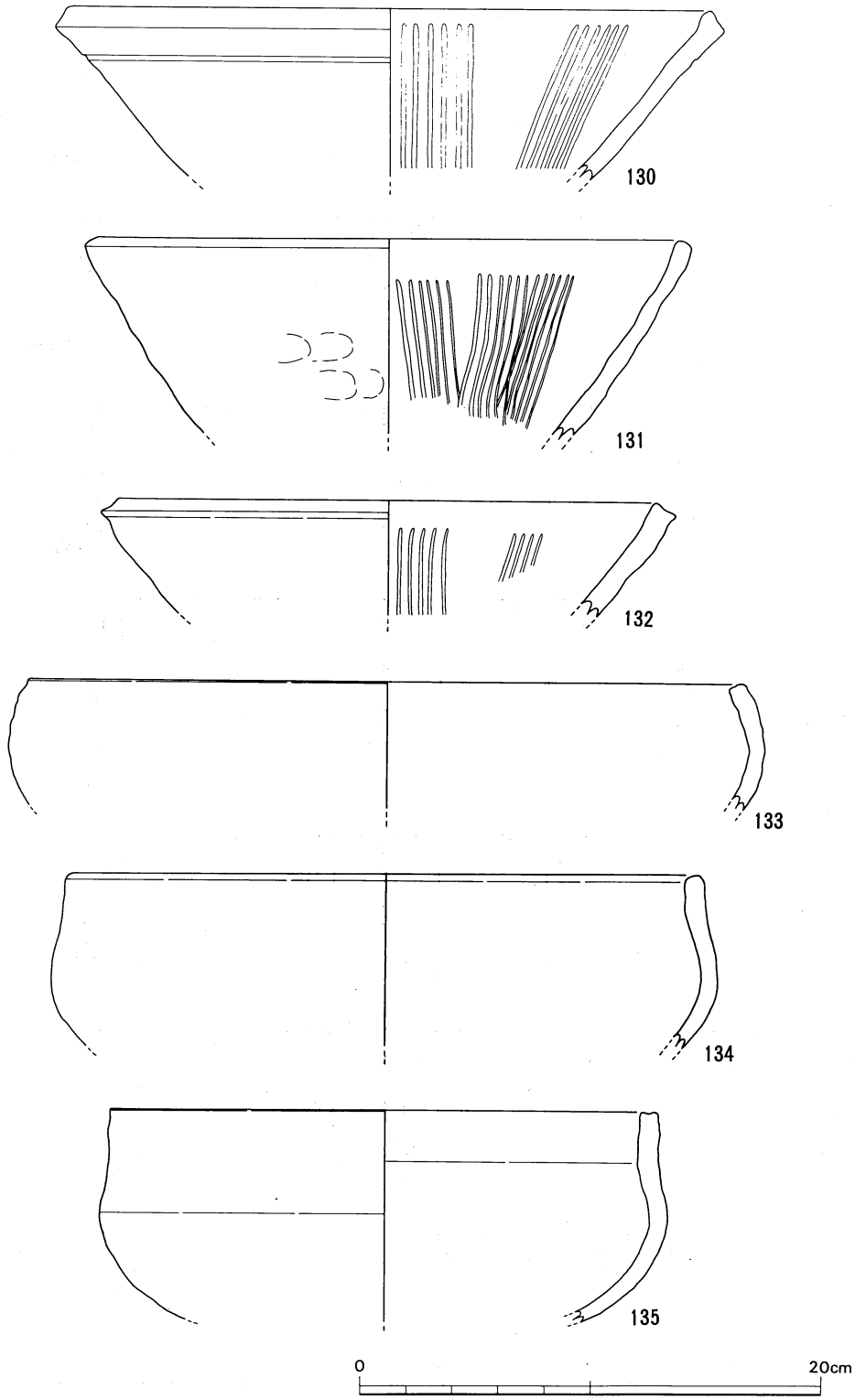
第49図　ＳＤ１出土遺物



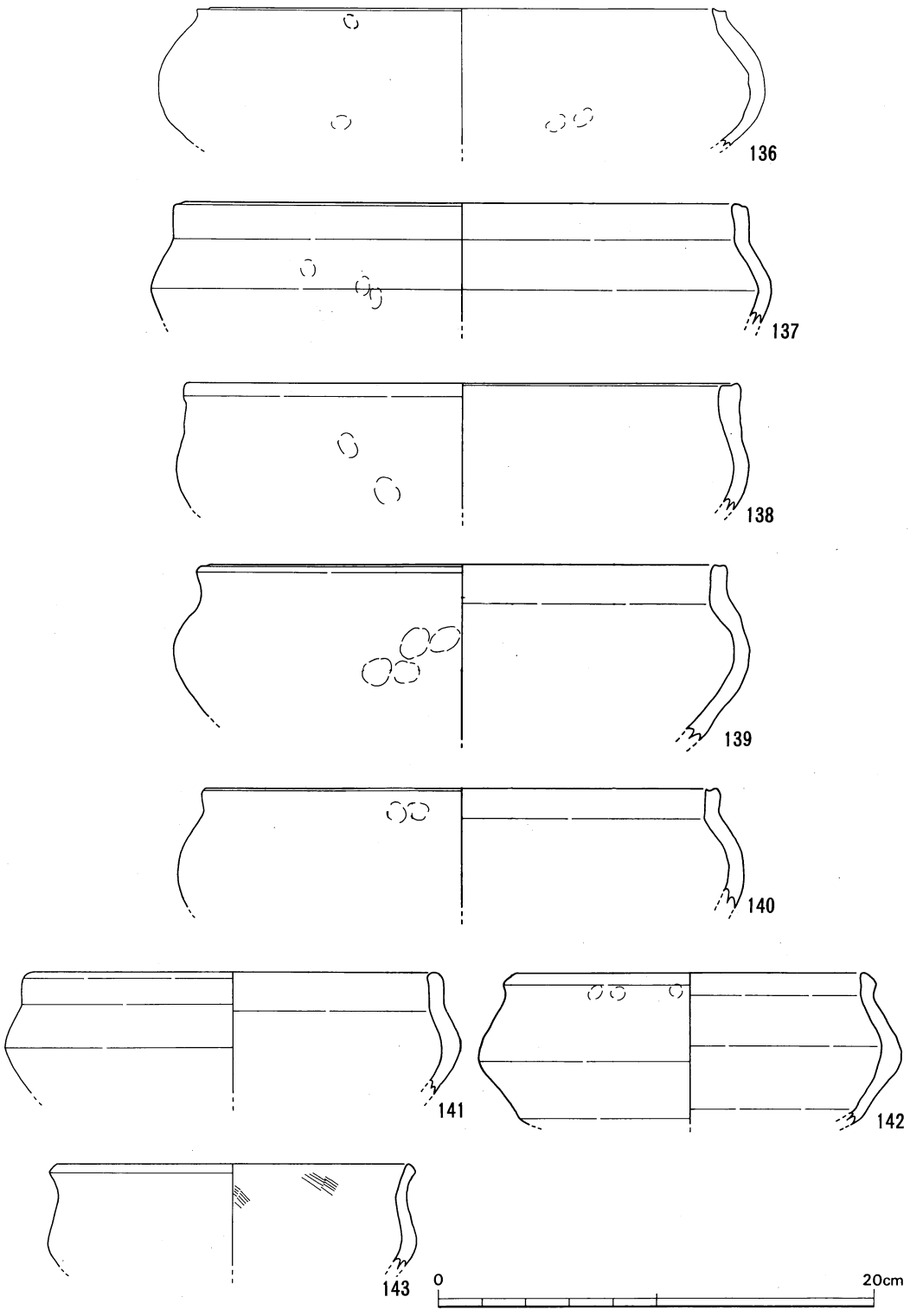
第50図　ＳＤ１出土遺物



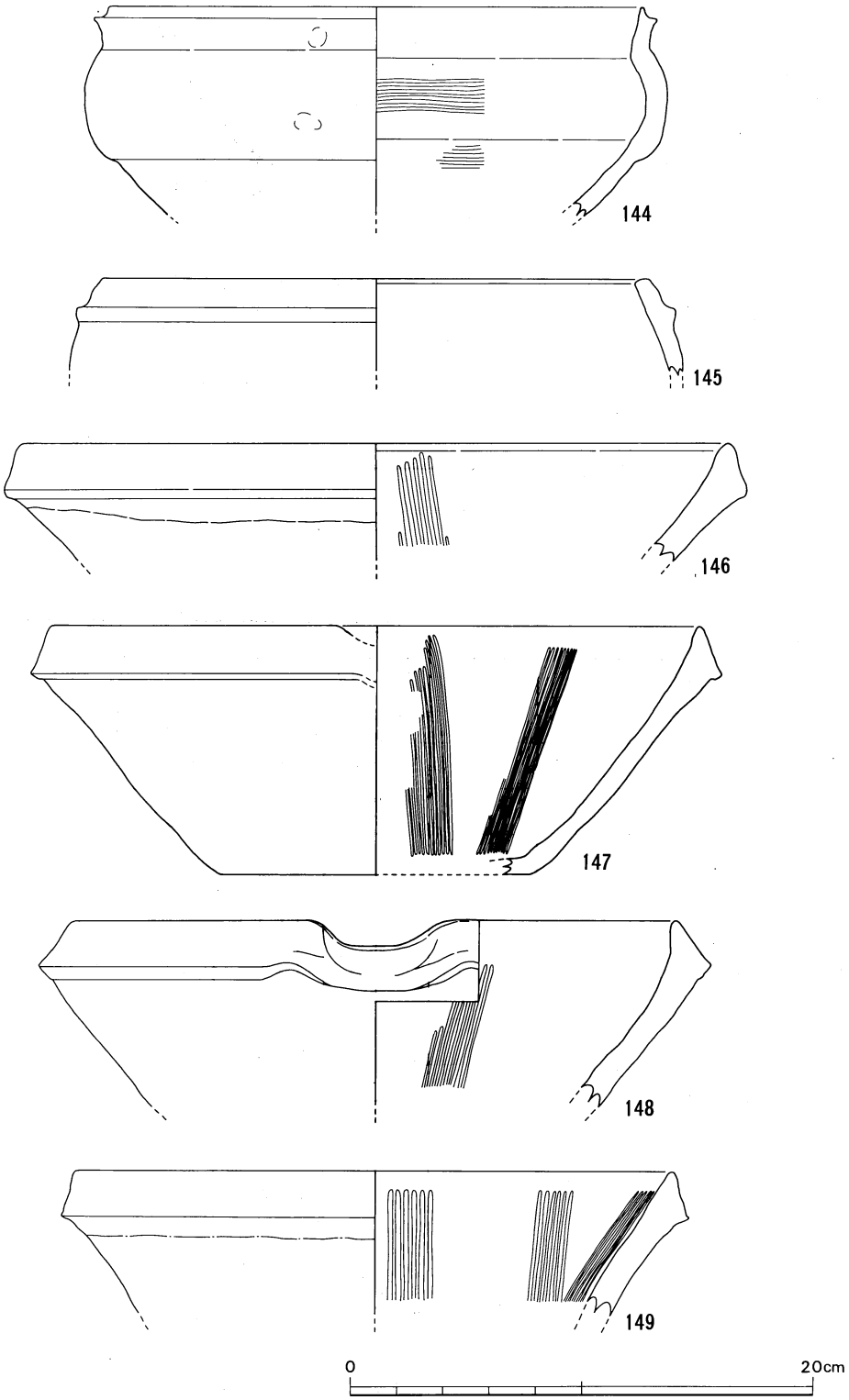
第51図　ＳＤ１出土遺物



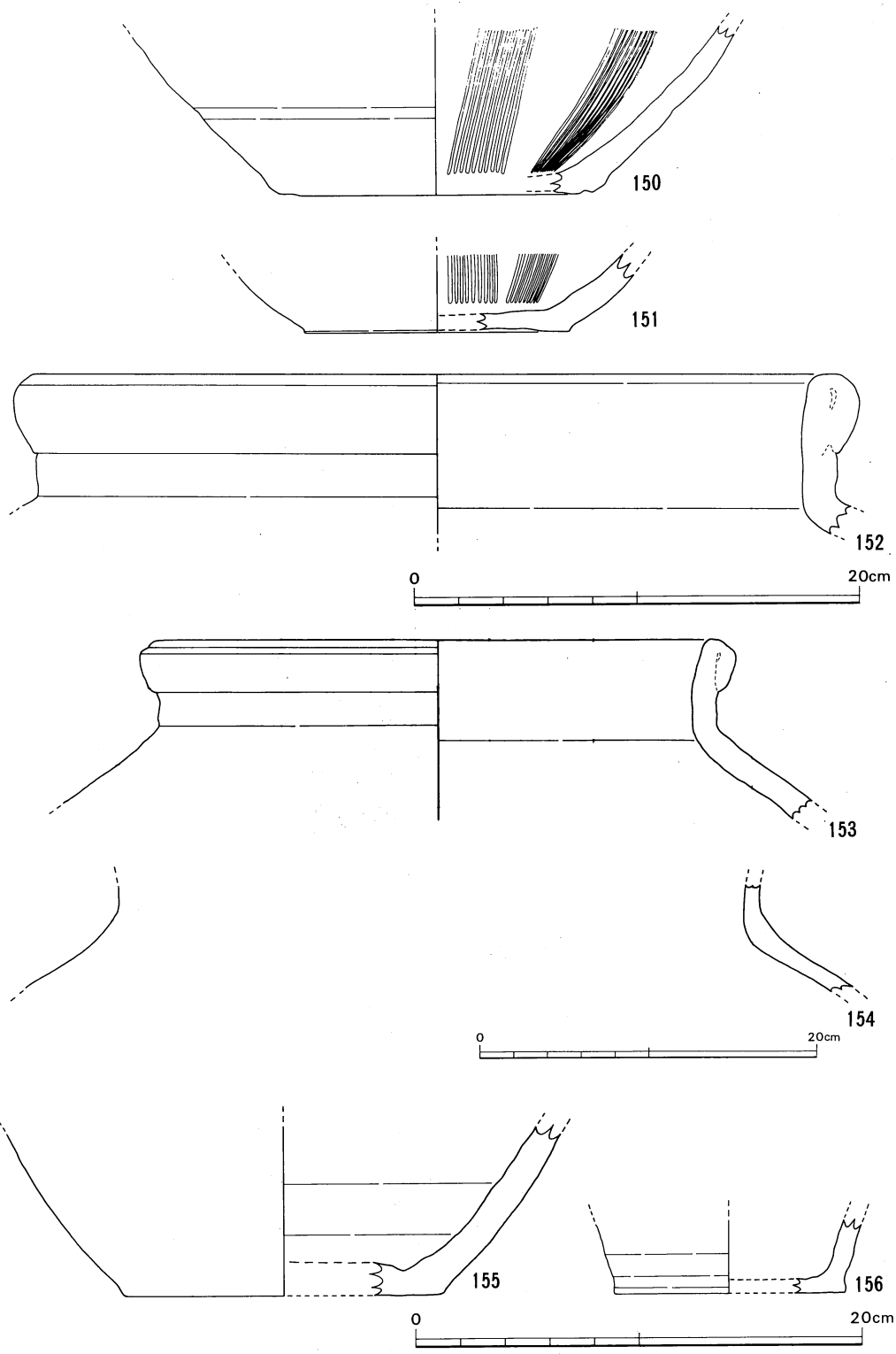
第52図　ＳＤ１出土遺物



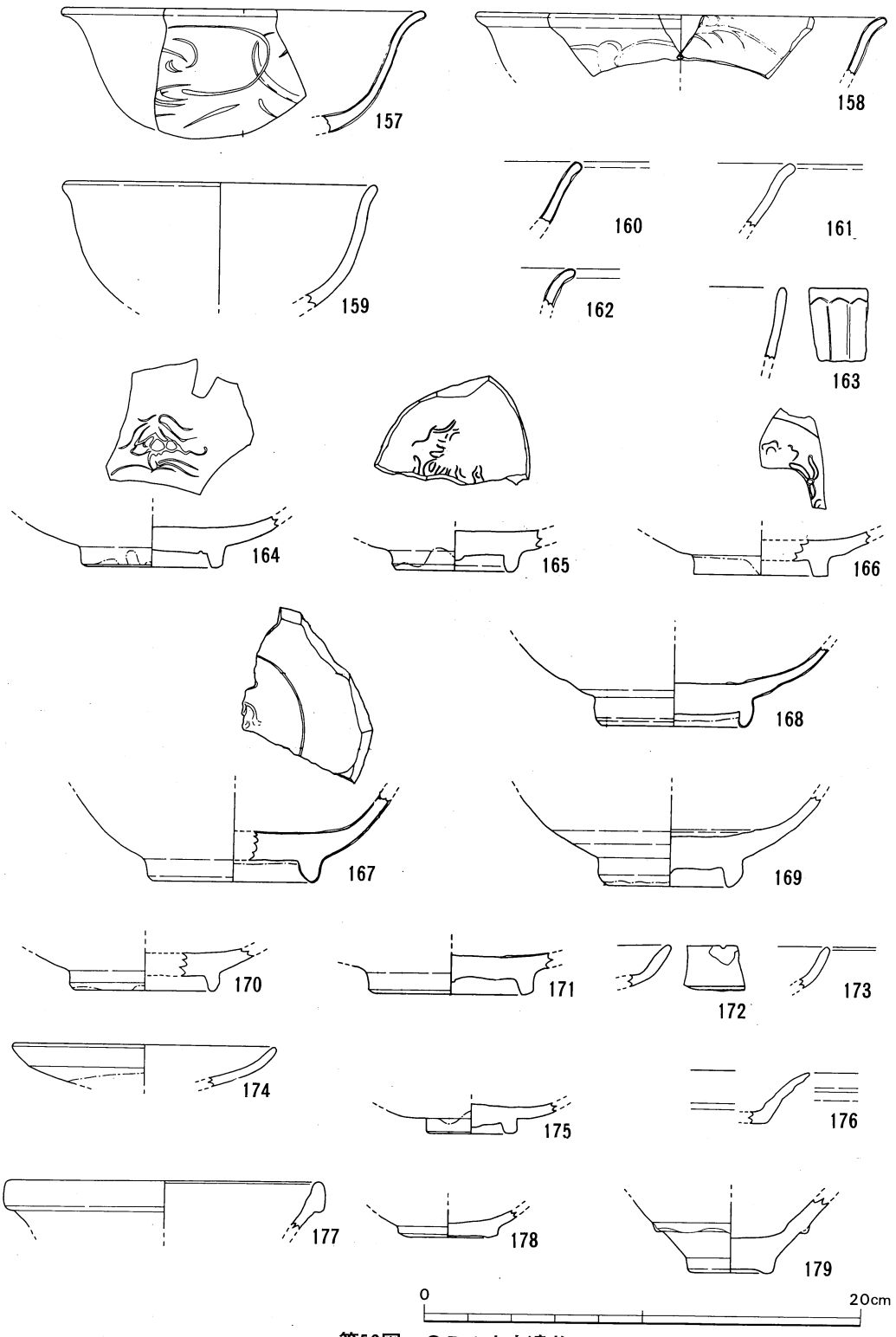
第53図　ＳＤ１出土遺物



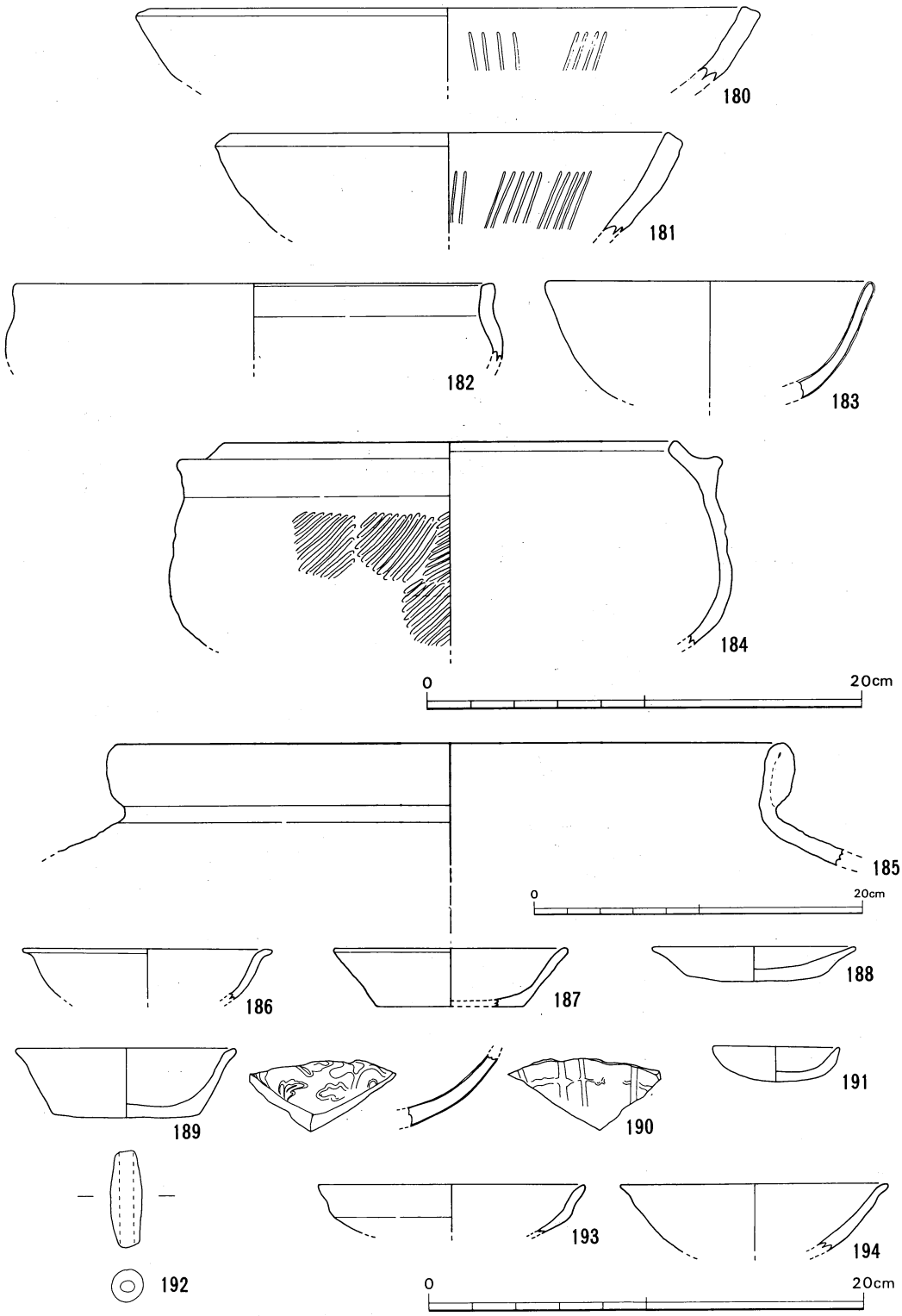
第54図　ＳＤ１出土遺物



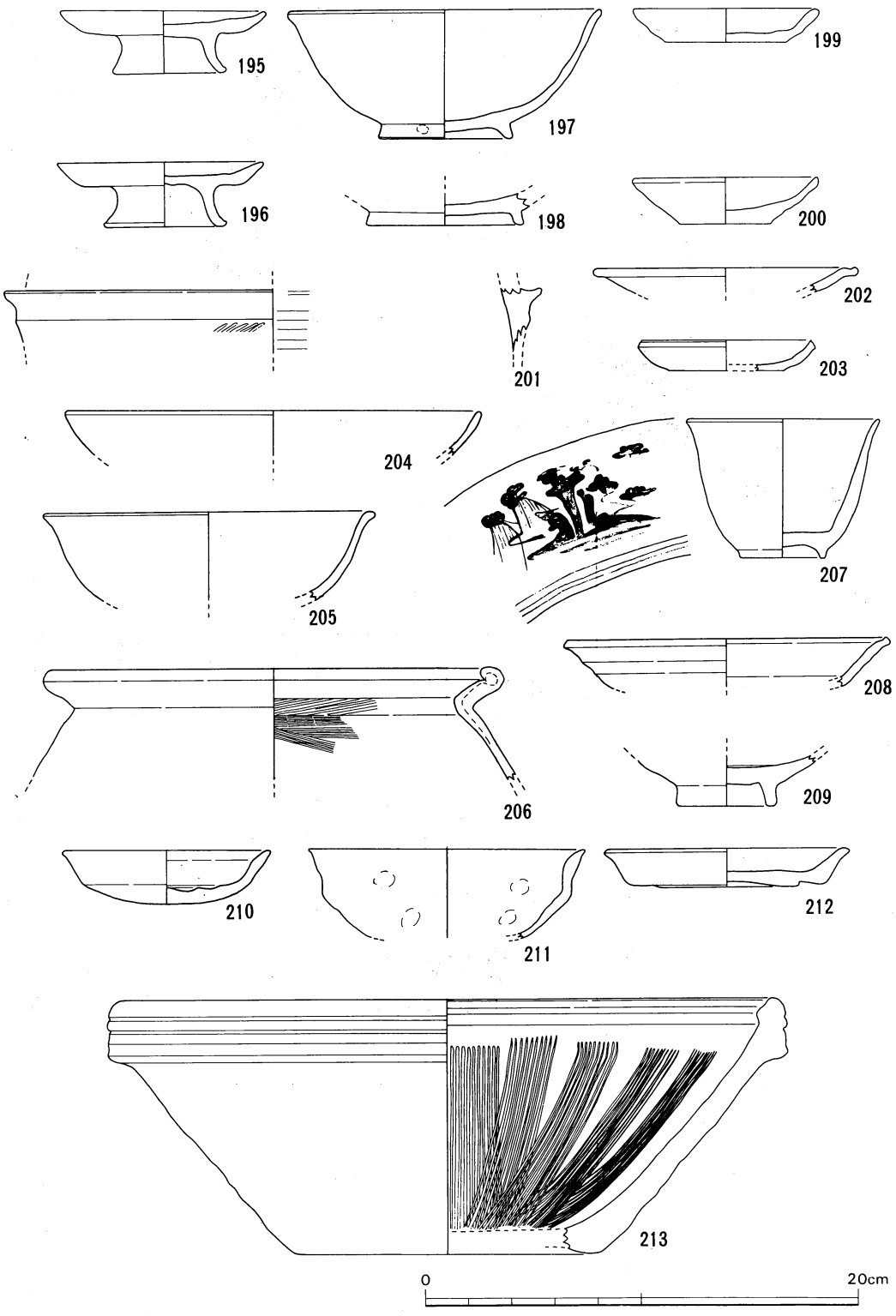
第55図　ＳＤ１出土遺物



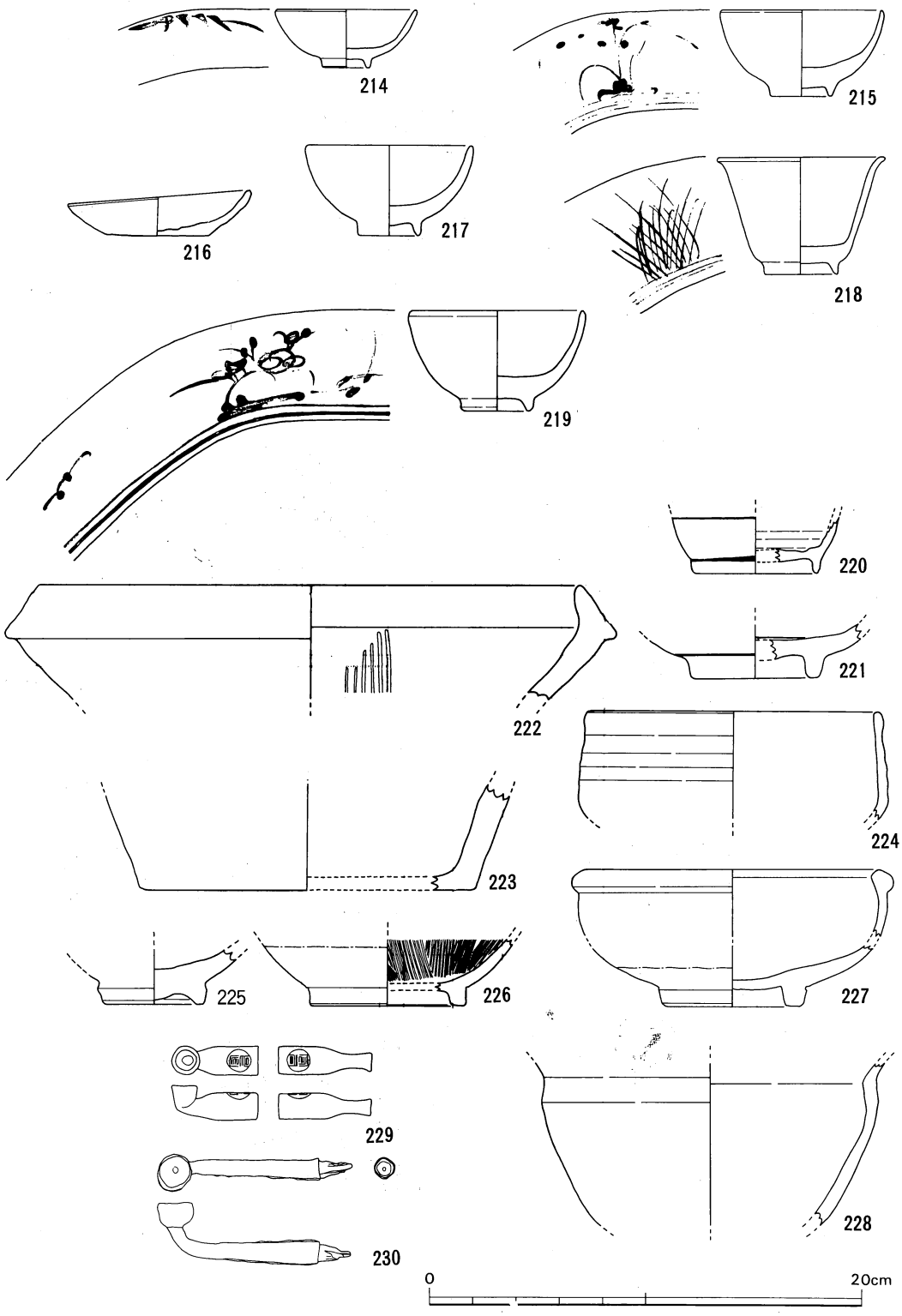
第56図　ＳＤ１出土遺物



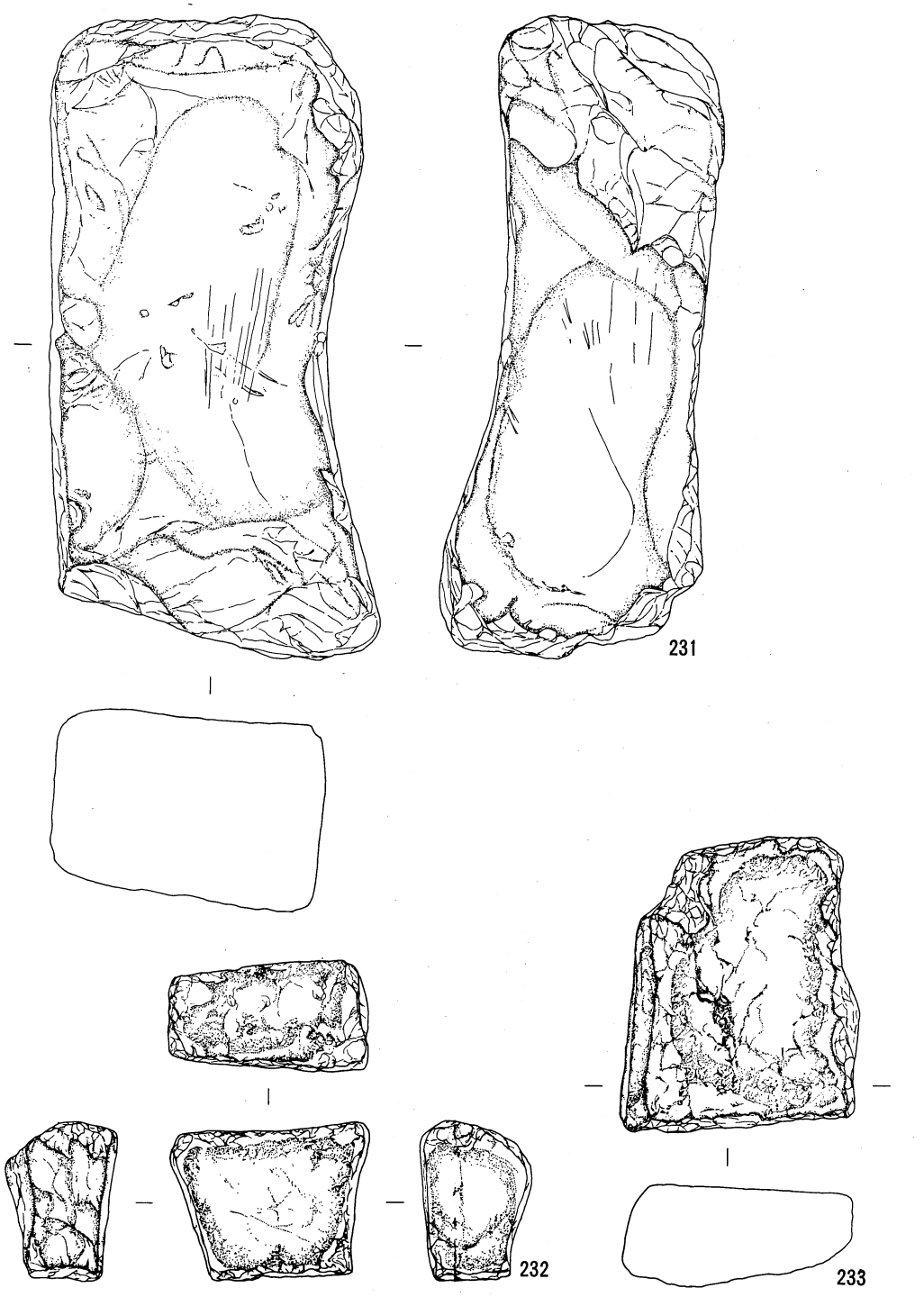
第57図　ＳＤ２、Ｐ65・68・69・71・74・82・104・110・117出土遺物



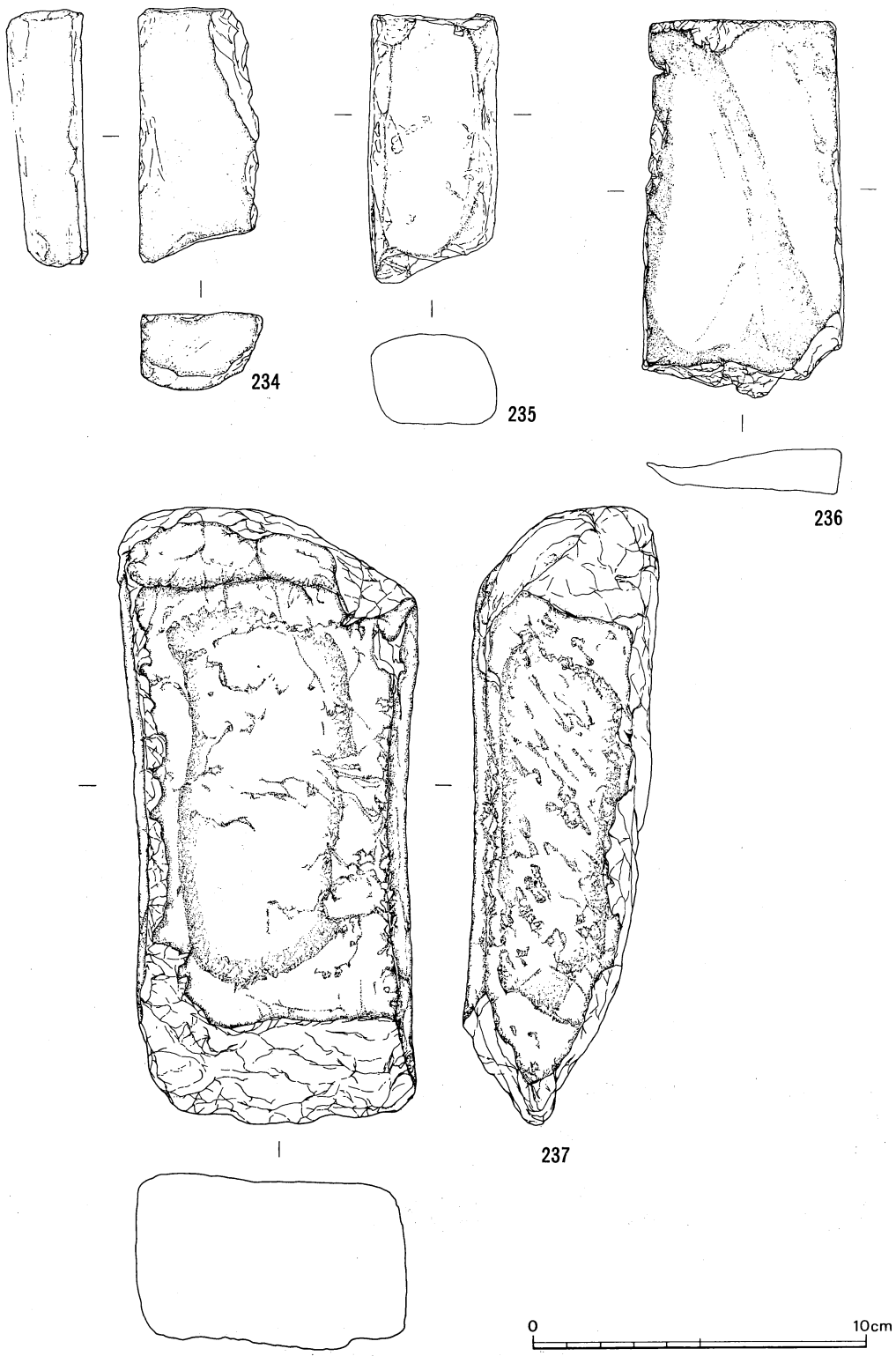
第58図　P115・119・127・131・133～135・139～142・144・160・163・165出土遺物



第59図　近世墓出土遺物



第60図　ＳＤ１、Ｐ134出土遺物



第61図　ＳＤ１出土遺物

4. Loc. 26

Loc. 26

1．位置と調査経過

Loc. 26は通称北屋敷と呼ばれている。調査区の南部にあたり、北側でLoc. 25と接している。調査は場周南側道路の建設に伴うものである。

2．調査概要

やや東西に長い調査区で、面積は885㎡を測る。検出遺構は、弥生後期の溝、古代の掘立柱建物址、中世の掘立柱建物址、土坑、ピットである。地目は水田であり、耕作土と床土を除けば遺構検出面である。弥生、古代、中世共に同一検出面であるので、本稿では弥生遺構も古代遺構も編を異にせず、中世編で記述する。

3．層序と出土遺物

第Ⅰ層　耕作土
第Ⅱ層　床土
第Ⅲ層　茶褐色砂質土層
第Ⅳ層　黒茶色砂質土層
第Ⅴ層　灰黄色砂質～粘質土層

基本層序は以上である。第Ⅲ・Ⅳ層は部分的な堆積で、床土を除いた第Ⅴ層が遺構検出面となっている。従って遺物包含層はほとんど形成されていないが、耕作土及び床土中より（1～21）の遺物が出土している。出土遺物は弥生土器から中・近世の陶磁器、及び第二次世界大戦時の銃弾にまで及ぶ。近世遺物の占める割合が多い（62%）ことから、近世遺構が削平されている可能性が考えられる。

4．遺構と遺物

a．弥生時代

溝

SD 1

調査区の西部に位置し、調査区を南西から北東方向に走る溝である。長さ14.00m、幅1.50～2.00m、深さ0.48mを測る。断面形はU字形をなす。埋土はⅠ～Ⅶ層が堆積しているが、すべて砂層である。遺物は弥生後期の細片が少量でみられた。底面の標高は北端、南端共に5.72mで、ほとんど水平である。弥生時代後期の溝である。

第62図　調査区設定図

SD 2

ＳＤ１の東を平行に走る溝である。長さ16ｍ、幅1.9～2.8ｍ、深さ約0.88ｍを測る。断面形は逆台形をなす。埋土はⅠ～Ⅵ層が堆積しているが、すべて砂層である。遺物は弥生後期土器（38、39）と土師質土器鍋（37）が出土しているが、土師質土器は後世の混入と考えられる。底面の標高は北端で5.80ｍ、南端で5.75ｍを測り、わずかに南へ下降している。弥生時代後期の溝である。

SD 3

調査区の東部を北西から南東に走る溝である。長さ22ｍ、幅1.3～2.5ｍ、深さ0.45～0.60ｍを測る。断面形は逆台形をなす。埋土はⅠ～Ⅸ層が堆積しているが、すべて砂層である。遺物は弥生後期土器（41～44）、及び能茶焼（45）、近世磁器（46）が出土しているが、後者の（45、46）は、検出面で出土しているために後世の混入と考えられる。底面の標高は西端で5.80ｍ、東端で5.60ｍであり、東に向って下っている。弥生後期の溝である。なお、ＳＤ３は方向、規模、埋土、出土遺物からLoc.15のＳＤ１につながる溝と考えられる。

b．古代

掘立柱建物址

SB 1

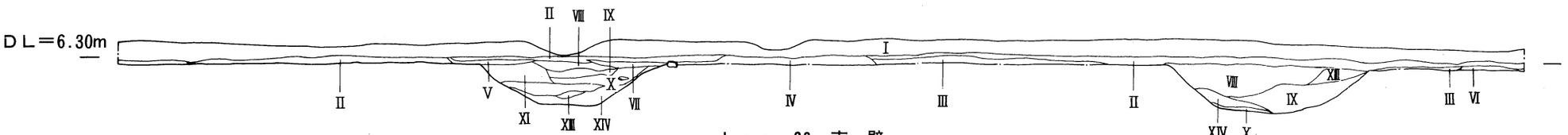
調査区の南東端で検出した。東西棟梁間２間桁行５間の掘立柱建物で、棟方向をＮ－70°－Ｗに取る。南側は撹乱と削平でとばされているが、全体の形状を復元することができる。掘り方は、Ｐ３以外は一辺70～80㎝内外の方形である。柱根跡は残っているものと不明のものとがあるが、概ね径20～25㎝の柱であったことがわかる。柱穴間の距離は1.78～2.42ｍを測り、平均2.05ｍである。埋土はすべて茶褐色粘質土単純一層で、Ｐ１には河原石が多数入っている。またＰ11は間仕切りの柱と考えられる。決め手となる遺物が出土していないので、細かい時期を決定することはできないが、掘り方の形から考えて、一応古代のものと考えられる。Ｐ11から弥生土器（29）が出土しているが、混入と考えられる。

c．中世

掘立柱建物址

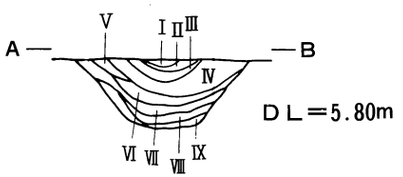
SB 2

調査区の西端に位置する１×１間の掘立柱建物で、棟方向をＮ－20°－Ｅに取る。掘り方は

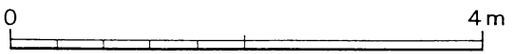


Ｌｏｃ．26　南　壁

ＳＤ１



ＳＤ３　西　壁



ＳＤ３　西　壁

第Ⅰ層　黄褐色砂質土

第Ⅱ層　灰褐色砂質土

第Ⅲ層　黄褐色～茶灰色砂質土

第Ⅳ層　茶灰色砂質土

第Ⅴ層　淡茶黄色砂

第Ⅵ層　淡茶色砂質土

第Ⅶ層　茶灰色砂質土～砂

第Ⅷ層　淡黄色粘質土

第Ⅸ層　茶褐色砂質土

Ｌｏｃ．26　南壁

第Ⅰ層　耕作土

第Ⅱ層　床土

第Ⅲ層　茶褐色砂質土

第Ⅳ層　黒茶色砂質土

第Ⅴ層　黄灰色砂質土

第Ⅵ層　暗灰色砂質土

第Ⅶ層　黄灰褐色砂質土

第Ⅷ層　暗黄灰褐色砂質土

第Ⅸ層　濃茶色砂

第Ⅹ層　暗灰色砂質土

第ⅩⅠ層　灰黄色砂質土

第ⅩⅡ層　黄灰褐色砂質土

第ⅩⅢ層　暗茶灰色砂質土

第ⅩⅣ層　茶褐色砂質土

第63図　調査区セクション

径平均35cm内外、深さ12～20cmを測る。柱根跡はＰ１のみに残っており、径15cmを測る。柱間距離はＰ１－２が1.72m、Ｐ２－３が1.85m、Ｐ３－４が1.76m、Ｐ４－１が1.87mを測る。埋土はすべて灰褐色粘質土である。時期は埋土から中世と考えられる。

ＳＢ３

調査区の西端に位置し、ＳＢ１と切り合っている。１×１間の掘立柱建物で、棟方向をＮ－38°－Ｅに取る。掘り方は、Ｐ１・３が円形の平面形で、径24～32cm、深さ８～20cmを測る。Ｐ２は40×28cmの楕円形の平面形で、深さ28cmを測る。柱根跡はＰ１とＰ３に見られ、径４cmと８cmである。柱間距離はＰ１－２が1.78m、Ｐ２－３が2.28m、Ｐ３－４が1.75m、Ｐ４－１が2.39mを測る。埋土はすべて灰褐色粘質土である。時期は埋土から中世と考えられる。

ＳＢ４

調査区のほぼ中央部で検出した。東西棟梁間１間桁行２間の掘立柱建物で、棟方向をＮ－67°－Ｗに取る。柱根跡の平面形は概ね円形であり、径32～36cm、深さ16～36cmを測る。柱根跡はＰ１に見られ、径24cmを測る。柱間距離はＰ１－２が1.90m、Ｐ２－３が1.98m、Ｐ３－４が3.33m、Ｐ４－５が1.99m、Ｐ５－６が1.97m、Ｐ６－１が3.28mを測る。埋土はすべて灰褐色粘質土である。埋土から中世のものと考えられる。

ＳＢ５

１×１間の掘立柱建物で、棟方向をＮ－36°－Ｅに取る。掘り方はＰ１～３が円形で、径24～32cm、深さ16～20cmを測る。Ｐ４は隅丸方形を呈し、32×20cm、深さ８cmを測る。柱間路離はＰ１－２が1.58m、Ｐ２－３が1.67m、Ｐ３－４が1.54m、Ｐ４－１が1.69mを測る。埋土はすべて灰褐色粘質土である。埋土から中世のものと考えられる。

ＳＢ６

ＳＢ４及びＳＢ７と切り合っている。東西棟梁間１間桁行２間の掘立柱建物で、棟方向をＮ－63°－Ｗに取る。掘り方の平面形はほぼ円形で、径28～60cm、深さ６～20cmを測る。柱根跡はＰ１・５・６に見られ、径15～16cm位の柱を推定することができる。埋土はすべて灰褐色粘質土である。遺物はＰ２より土師質土器皿（23～27）が集中して出土している。地鎮に関係するものであろう。遺物から15世紀後半のものと考えられる。

ＳＢ７

１×１間の掘立柱建物で、棟方向をＮ－20°－Ｅに取る。掘り方の平面形は円形、ないし楕円形で、径25～30cm、深さ10～30cmを測る。埋土はすべて灰褐色粘質土で、Ｐ４から土師質土

器皿（28）が出土している。ＳＢ５とほぼ同時期のものと考えられる。

ＳＢ８

１×１間の掘立柱建物で、棟方向をＮ－24°－Ｅに取る。掘り方の平面形は円形、ないし楕円形で、径20cm内外、深さ４～12cmを測る。柱間距離はＰ１－２が1.71ｍ、Ｐ２－３が1.92ｍ、Ｐ３－４が1.70ｍ、Ｐ４－１が1.93ｍである。埋土はすべて灰褐色粘質土である。遺物は出土していないが、埋土から中世のものと考えられる。

ＳＢ９

１×１間の掘立建物であると考えられるが、北東隅の柱穴は撹乱坑に切られている。棟方向をＮ－28°－Ｅに取る。各掘り方の平面形はほぼ円形で、径30cm内外、深さ約20cmを測る。柱間距離はＰ２－３が1.54ｍ、Ｐ３－１が1.68ｍを測る。埋土はすべて灰褐色粘質土である。遺物はＰ２より土師質土器皿の細片が１点出土している。中世のものである。

ＳＢ10

東西棟梁間１間桁行２間の掘立柱建物であると考えられるが、南東隅及びその西側の柱穴を確認することができない。棟方向をＮ－65°－Ｗに取る。掘り方の平面形は円形で、径25～30cm、深さ12～20cmを測る柱間距離はＰ１－２が1.81ｍ、Ｐ２－３が1.82ｍ、Ｐ４－１が1.80ｍである。埋土はすべて灰褐色粘質土で、遺物はＰ４より土師質土器皿の細片が１点出土している。中世の建物址である。

ＳＢ11

調査区の東端に位置する。南北棟梁間２間桁行２間の掘立柱建物で、棟方向をＮ－60°－Ｗに取る。掘り方の平面形は、Ｐ５以外はほぼ円形を呈し、径20～30cm、深さ12～28cmを測る。Ｐ５は30×40cmの楕円形で、深さ32cmを測る。柱穴間の距離はＰ１－２が1.68ｍ、Ｐ２－３が1.40ｍ、Ｐ３－４が1.60ｍ、Ｐ４－８が1.64ｍ、Ｐ８－７が3.08ｍ、Ｐ７－６が1.72ｍ、Ｐ６－１が1.72ｍである。柱根跡はＰ２とＰ５に残っており、径12cmと20cmを測る。

土坑

ＳＫ３

調査区の西端に位置し、一部が調査区外に出ている。不定形の平面形で、長軸をＮ－57°－Ｗに取り、深さは0.17ｍを測る。底は東側半分が８cm程低くなっており、東端には小ピットが付随している。埋土は灰褐色単純一層である。遺物は近世磁器の碗（32）の他、土師質土器皿・

鍋の細片が数点出土している。

ＳＫ５

調査区の中央部に位置する。長方形の平面形を有し、長径2.8ｍ、短径1.3ｍ、深さ４㎝を測る。長軸をＮ－29°－Ｅに取る。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は近世磁器の碗（33）が出土している。近世の土坑である。

ＳＫ６

ＳＫ５の南に位置し、ＳＫ５と同様の規模、性格を有すると考えられるＳＫ７に切られている。隅丸長方形の平面形を有し、長径1.5ｍ、短径1.1ｍ、深さ約８㎝を測る。長軸をＮ－73°－Ｗに取る。底面は平坦で、壁は斜めに立ち上がっているが、西壁の立ち上がりはほとんど残っていない。埋土は灰黄褐色粘質土である。遺物は土師質土器皿の細片が出土している。中世の土坑である。

ＳＫ８

調査区の中央部に位置する。隅丸長方形の平面形を有し、長径0.9ｍ、短径0.8ｍ、深さ0.12ｍを測る。長軸をＮ－58°－Ｗに取る。底面は平坦であり、壁は斜めに立ち上がっているが、西壁の立ち上がりはほとんど残っていない。埋土は灰褐色粘質土に黒褐色粘質土がブロックで入っている。遺物は土師質土器皿、瓦、須恵器等の細片が数点出土している。撹乱を受けているものと考えられる。

ＳＫ10

調査区の北東に位置する。楕円形の平面形を有し、長径1.9ｍ、短径1.4ｍ、深さ0.4ｍを測る。長軸をＮ－48°－Ｗに取る。底面は平坦で、壁は斜めに立ち上がっている。埋土は灰黄褐色粘質土で、遺物は青磁碗（35）の他に、土師質土器皿・鍋の細片が数点出土している。15世紀後半～16世紀前半の土坑である。

ＳＫ11

ＳＫ10の東に位置する。不整方形の平面形を有し、長径1.24ｍ、短径1.00ｍ、深さ8㎝を測る。長軸をＮ－75°－Ｗに取る。底面は平坦で、壁は斜めに立ち上がっている。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は土師質土器皿の細片が数点出土している。

ＳＫ12

調査区の北東隅に位置する。不整楕円形の平面形を有し、長径2.10ｍ、短径1.88ｍ、深さ0.24ｍ

を測る。長軸を北に取る。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は土師質土器皿(34)、備前擂鉢(36)の他、土師質土器鍋等の細片が出土している。

ＳＫ13

ＳＢ９の南に位置する土坑としたが、古代のＳＢ１と同様の柱穴である可能性が大きい。方形の平面形を呈し、長軸をＮ－12°－Ｅに取る。長径0.80ｍ、短径0.68ｍ、深さ３㎝を測る。中央部のピットは柱痕跡と考えられる。径20㎝、深さ８㎝を測る。埋土は茶色粘質土で、土師質土器の細片が出土している。

ＳＫ16

調査区の南東隅に位置し、古代のＳＢ１を切っている。楕円形の平面形を有し、長軸をＮ－10°－Ｅに取る。長径1.56ｍ、短径1.48ｍ、深さ0.52ｍを測る。底は平坦面をなし、壁は斜めに立ち上がる。埋土は灰色粘質土で、出土遺物は見られない。ＳＫ16は近・現代の撹乱である可能性がある。

５．まとめ

Loc.26は、11棟の掘立柱建物、16基の土坑、３条の弥生時代の溝からなっている。以下掘立柱建物と土坑について若干触れておきたい。

11棟の掘立柱建物の中でＳＢ１は古代に属するものであるが、他は埋土等から中世のものと考えられる。その中でもＳＢ５は出土遺物より15世紀代の建物とすることができる。これら10棟の建物は、規模から２つに分けることができる。すなわち１×１間のものとそれ以上の規模を有するものとである。前者をＡ群、後者をＢ群とすると、Ａ群はＳＢ２・３・５・７～９、Ｂ群はＳＢ４・６・10・11である。Ｂ群は棟方向がそれぞれ同様の方向を示しているところから、ほぼ同時期に存在したものと考えられる。Ａ群は、Ｂ群と切り合うだけでなく、Ａ群内でも切り合っており、短期間における建て替えが行われたものと考えられる。

これらの掘立柱建物址の詳細な時期を決定することは難しいが、ほぼ15世紀代におくことができる。そうすると北接するLoc.25の溝に囲まれた屋敷址とほぼ同時期ということになり、両者の関係に興味がもたれる。一方は住居を囲む大溝を有し、井戸も持っているが、他方は溝の外に存在し、井戸などの施設を持っていない。この両者の差異は15世紀における社会構造の一端を示すものであり、両者の階層差を反映したものであろう。

土坑は16基検出したが、詳細な時期は、ＳＫ10が15世紀後半から16世紀に該当する他は不明と言わざるを得ない。ただＳＫ３・５が近世、ＳＫ６が中世に属すると考えられ、ＳＫ５は近世墓であろう。

第17表　掘立柱建物址計測表

挿図番号	遺構番号	規模			棟方向	面積 (㎡)	備考
		梁(間)×桁(間)	梁 × 桁(m)	柱間距離(m)			
第 64 図	ＳＢ 1	2 × 5	4.60 × 9.45	1.78 ～ 2.42	N－70°－W	43.5	
第 65 図	ＳＢ 2	1 × 1	1.76 × 1.87	1.72 ～ 1.87	N－20°－E	3.3	
〃	ＳＢ 3	1 × 1	1.78 × 2.39	1.75 ～ 2.39	N－38°－E	4.3	
〃	ＳＢ 4	1 × 2	3.28 × 3.96	1.90 ～ 3.33	N－67°－W	13.0	
〃	ＳＢ 5	1 × 1	1.58 × 1.69	1.54 ～ 1.69	N－36°－E	2.7	
〃	ＳＢ 6	1 × 2	1.87 × ?.24	1.56 ～ 1.87	N－63°－W	6.1	
第 66 図	ＳＢ 7	1 × 1	1.60 × 1.81	1.56 ～ 1.81	N－20°－E	2.9	
〃	ＳＢ 8	1 × 1	1.71 × 1.93	1.70 ～ 1.93	N－24°－E	3.3	
〃	ＳＢ 9	1 × 1	1.54 × 1.68	1.54 ～ 1.68	N－28°－E	2.6	
〃	ＳＢ 10	1 × 2	1.80 × 3.63	1.80 ～ 1.82	N－65°－W	6.5	
〃	ＳＢ 11	2 × 2	3.12 × 3.46	1.40 ～ 3.08	N－60°－W	10.8	

第18表　土坑計測表

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第 67 図	ＳＫ 3	不定形	——	1.29	0.17	N－57°－W	逆台形	
〃	ＳＫ 5	長方形	2.80	1.30	0.04	N－29°－E	〃	
〃	ＳＫ 6	隅丸長方形	1.50	1.10	0.08	N－73°－W	〃	
〃	ＳＫ 8	〃	0.90	0.80	0.12	N－58°－W	皿形	
〃	ＳＫ 10	楕円形	1.90	1.40	0.40	N－48°－W	逆台形	
第 68 図	ＳＫ 11	不整方形	1.24	1.00	0.08	N－75°－W	〃	
〃	ＳＫ 12	不整楕円形	2.10	1.88	0.24	N	階段状	
〃	ＳＫ 13	方形	0.80	0.68	0.03	N－12°－E	逆台形	
〃	ＳＫ 16	楕円形	1.56	1.48	0.52	N－10°－E	〃	

第19表　包含層出土土器観察表

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手法	備考
1	第Ⅰ・Ⅲ層	甕	14.4 / (7.4) / 14.5 / ——	口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は面をなす。	上胴部及び口縁部外面は右上がり、中位以下は右下がりの叩き。口縁部内面は横方向、外面は縦方向のハケ調整。	
2	第Ⅲ層	壺	22.5 / (2.6) / —— / ——	口縁部は強く外反し、口唇部は面をなす。外面に3条の微隆起帯を貼付する。	内外面ナデ調整。	
3	〃	〃	19.1 / (3.8) / —— / ——	外反気味に立ち上がり、口縁下に断面三角の突帯を貼付する。	突帯下に指頭圧痕あり。	

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
4	第Ⅲ層	羽口	外径 7.5 / 内径 2.8	厚いつくりで、径2.8cmの空気孔がある。		熱を受けて赤く変色しており、一部が海綿状を呈す。
5	第Ⅰ・Ⅱ層	擂鉢	31.0 / (4.1) / —— / ——	口縁部は垂直に立ち上がる。	外面に2条の沈線を配す。内面には7本からなる条線が認められる。	外面に重ね焼きの痕を認める。備前。
6	第Ⅰ層	不明	32.0 / (4.0) / —— / ——	口縁部は直線的に立ち上がる。	横ナデ調整。	
7	第Ⅲ層	白磁碗	14.5 / (3.2) / —— / ——	玉縁口縁である。		胎土は淡灰色。
8	〃	青磁碗	—— / (2.5) / —— / 4.8	削り出し高台で、畳付は平坦。	見込は蛇目状に釉をかき取る。高台は無釉。	胎土は乳灰色。
9	第Ⅱ層	染付鉢	18.8 / (2.8) / —— / ——	口縁部は外方に屈曲する。	口縁部内面は波頭文を配す。	胎土は乳白色で精緻。
10	第Ⅲ層	碗	—— / (2.6) / —— / 4.9		見込は蛇目状に釉をかき取り、砂目が残っている。中央部にコンニャク判あり。外底及び高台外面に界線あり。	胎土は乳白色で精緻。伊万里。
11	第Ⅰ・Ⅱ層	皿	12.9 / 3.6 / —— / 7.9	平坦な広い底部から口縁部は内湾して立ち上がる。	見込中央部にコンニャク判、内面には五弁化を配す。外面及び外底には界線、中に渦福の銘あり。畳付には砂目が付着している。	胎土は淡灰色で精緻。伊万里。
12	〃	碗	—— / (2.0) / —— / 5.2	高台は断面三角で細い。	外面高台脇に界線あり。	〃
13	第Ⅰ層	紅猪口	4.5 / 1.4 / —— / 1.2	高台は細く、口縁端部は水平な面をなす。外面は全体に縦シノギ。	内面は全面施釉しているが、外面は露胎部が多く残る。	胎土は白色で精緻。伊万里。
14	第Ⅰ・Ⅱ層	碗	9.2 / 4.9 / —— / 3.8	口縁部はなめらかに外反する。高台は細くわずかに外開き気味。	外面は2本1対の縦線と5弁花を施文。内面には界線あり。	胎土は白色で精緻。

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
15	第Ⅲ層	瓶	—— (5.9) —— 5.6	ゆるやかに内湾しながら立ち上がる。	外面に2本の界線あり。外面は畳付以外全面施釉。	胎土は淡灰色で精緻。露胎部は紅く発色している。伊万里。
16	第Ⅰ層	碗	12.0 (5.0) —— ——	体部下半から直立気味に立ち上がる。	水玉模様が見られる。	焼成不良。
17	第Ⅱ層	〃	12.1 (5.9) —— ——	〃	透明な釉がかけられ、全体に貫入が入る。	胎土は乳黄色でやや粗い。
18	第Ⅲ層	箱茶椀	7.2 (4.8) —— ——	底部で強く屈曲し、口縁部まで直立する。	口縁部内面にタスキ文様。見込に2本の界線。内外面にカキワケ。	胎土は乳白色でやや粗い。 瀬戸。
19	第Ⅰ層	碗	20.2 (6.5) —— ——	内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	内面は櫛目文様。外面下半は露胎。	胎土は赤茶色で精緻。 唐津。

第20表　包含層出土金属器観察表

挿図番号	層位	器種	計測値(cm, g) 最大長 / 口径 / 重量	材質	特徴	備考
20	第Ⅰ・Ⅱ層	機関砲弾丸	6.0 1.27 40.0			12.7㎜機関砲。
21	〃	小銃弾丸	3.6 0.9 4.9			旧日本陸軍38式歩兵銃。

第21表　遺構出土土器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
22	ＳＢ６	土師質土器皿	12.6 2.3 —— 5.5	なめらかに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	口縁部内外面は指頭による横方向のナデ調整。体部内外面に指頭圧痕が残る。	
23	〃	〃	16.3 (2.0) —— ——	〃	〃	
24	〃	〃	12.5 2.7 —— ——	〃	〃	

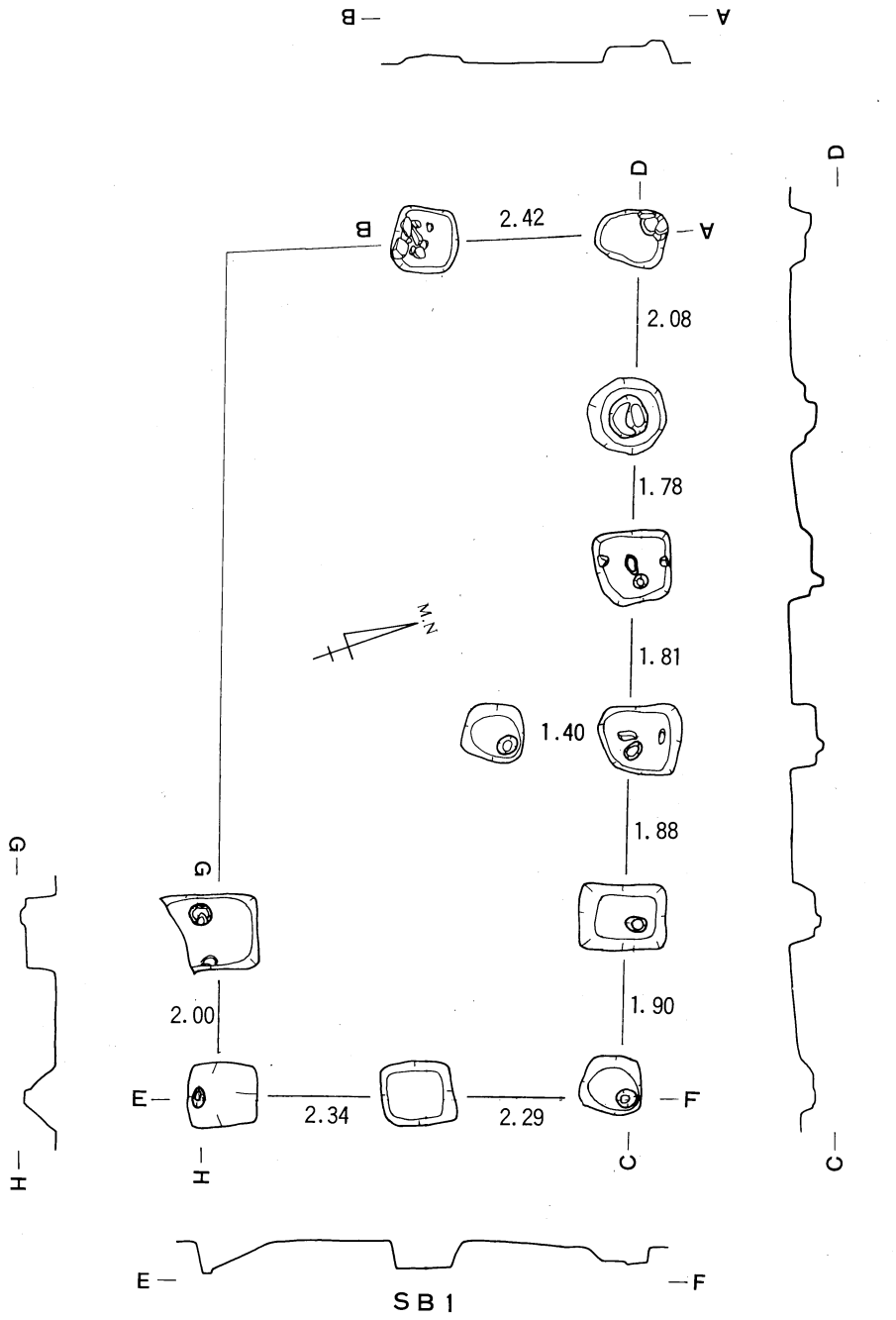
挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
25	SB6	土師質土器 皿	11.7 (2.1) —— ——	なめらかに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	口縁部内外面は指頭による横方向のナデ調整。体部内外面に指頭圧痕が残る。	
26	〃	〃	13.0 (2.1) —— ——	〃	〃	
27	〃	〃	12.6 (1.7) —— ——	〃	〃	
28	SB7	〃	12.0 (2.5) —— ——	体部中位で1度屈曲して立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。		

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
29	SB1	壺	17.0 (4.3) —— ——	ラッパ状に外反する口縁部で、端部は面をなす。	内外面ナデ調整。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
30	SK1	土師質土器 鍋	—— (3.5) —— ——	口縁下に断面台形のツバを有す。口唇部は内傾する。	内外面ナデ調整。	
31	〃	擂鉢	—— (5.5) —— ——	口縁部はわずかに外反気味。	外面に3条の弱い凹線を認める。内面に6条まで条線を認める。	外面に重ね焼き痕を認める。備前。
32	SK3	碗	13.1 (4.3) —— ——	内湾して立ち上がる。	口縁部内面に1条、外面に2条の界線あり。	
33	SK5	〃	—— (2.0) —— 2.2	厚手の底部から器壁の薄い体部が立ち上がる。		
34	SK12	土師質土器 皿	15.6 (2.8) —— (12.5)	底部から比較的直線的に立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。	内外面共にナデ調整。	
35	SK10	青磁 碗	—— (2.9) —— ——		外面に細蓮弁文を有す。(片刃彫)	
36	SK12	擂鉢	31.4 (6.4) —— ——	体部は口縁部下で外反する。口縁部はわずかに内傾して立ち上がる。	口縁部外面に2条の凹線を有す。内面には7条1単位の条線あり。	備前。
37	SD2	土師質土器 鍋	24.4 (5.9) —— ——	内湾気味に立ち上がり、口縁部に到る。口縁端部はわずかに凹状をなす。	内外面ナデ調整。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
38	SD2	壺	— (2.9) — 7.4		内外面ナデ調整。	
39	〃	甕	— (5.0) — —	口縁部は丸く外反する。	上胴部内面に指頭圧痕あり。内外面ナデ調整。	
40	SD3	壺	— (3.0) — 8.6	わずかに上げ底状を呈す。		
41	〃	甕	— (8.0) — (6.2)	直線的に立ち上がる。	外面ハケ調整。内面は指頭によるナデ調整。	
42	〃	高杯	— (7.5) — —	裾部は強く「ハ」の字状に開く。	6㎜大の円孔が4個穿たれている。外面は縦方向のハケ調整。	
43	〃	蓋	— (4.0) — 5.6	笠部は内湾気味に下降する。	内外面に指頭圧痕あり。	
44	〃	壺	— (3.9) — 7.6	安定した平底の底部を有す。		

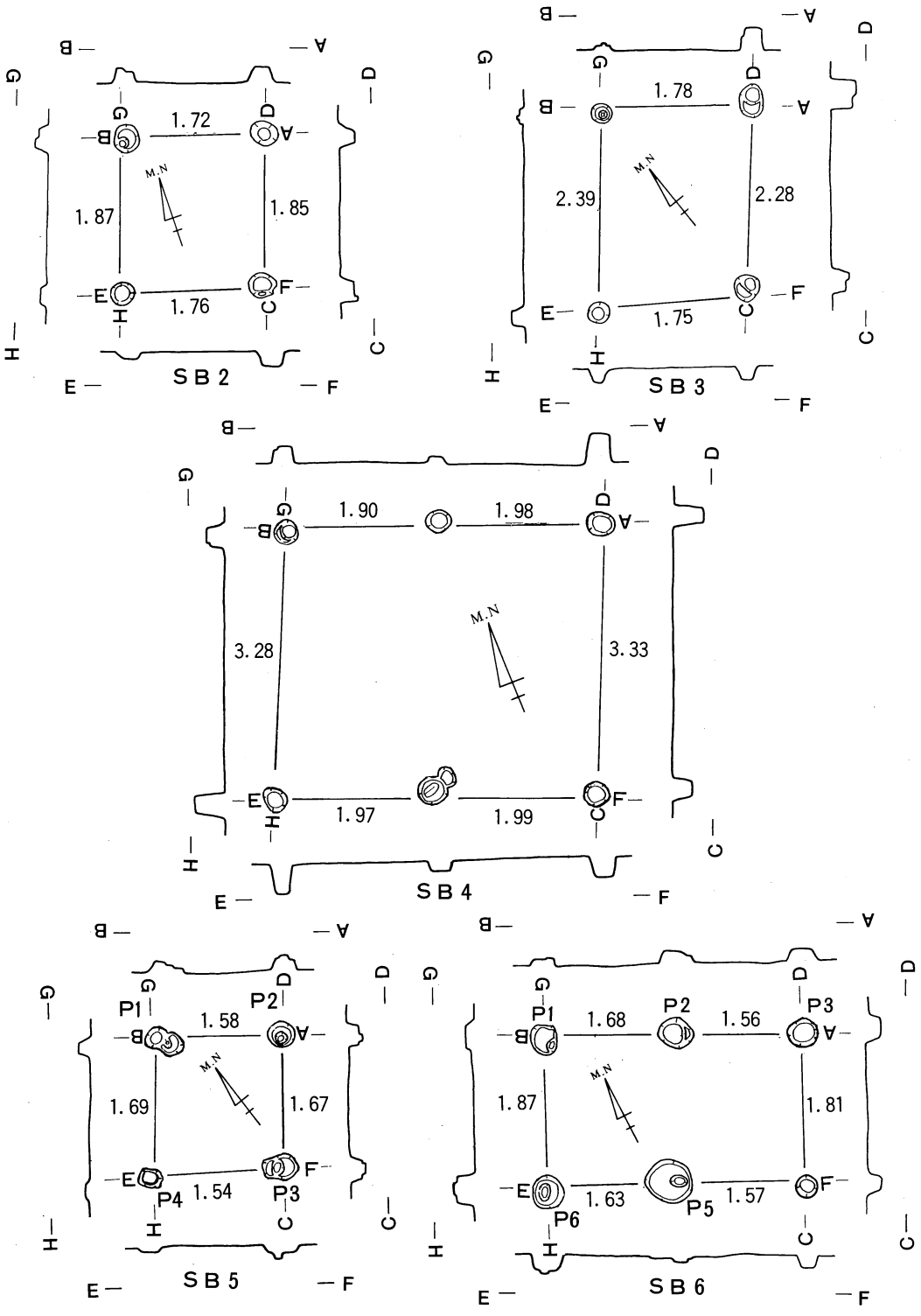
挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
45	SD3	碗	— (3.5) — 3.6	高台内の削りが深い。	畳付内外面の釉をけずる。見込に亀印あり。高台外面に2条、高台脇に1条、体部下位に1条の界線あり。外底にサの銘あり。	能茶焼。
46	〃	〃	13.6 (6.5) — —	腰部から直線的に立ち上がり、口縁部に到る。	全体にこまかな貫入が入る。	胎土は灰色で精緻。
47	P2	土師質土器 鍋	21.5 (5.5) 23.1 —	上胴部は内側に屈曲し、口縁部はわずかに外反する。口縁下に断面三角形のツバを有す。	胴部外面の屈曲部以下、右上がりの叩目。	外面は全面ススが付着。
48	P5	擂鉢	32.0 (5.8) — —	口縁部は断面三角形を呈す。	内面の条線は、一単位8条以上。	外面に重ね焼きの痕がみられる。備前。
49	P27	〃	— (5.4) — 13.5	体部は直線的に立ち上がる。	内面は一単位8条の条線を施す。	備前。
50	P1	土師質土器 鍋	— (6.8) — —	体部は内湾気味に立ち上がり、肩で内側に屈曲する。肩部には把手がついていたと考えられる。		



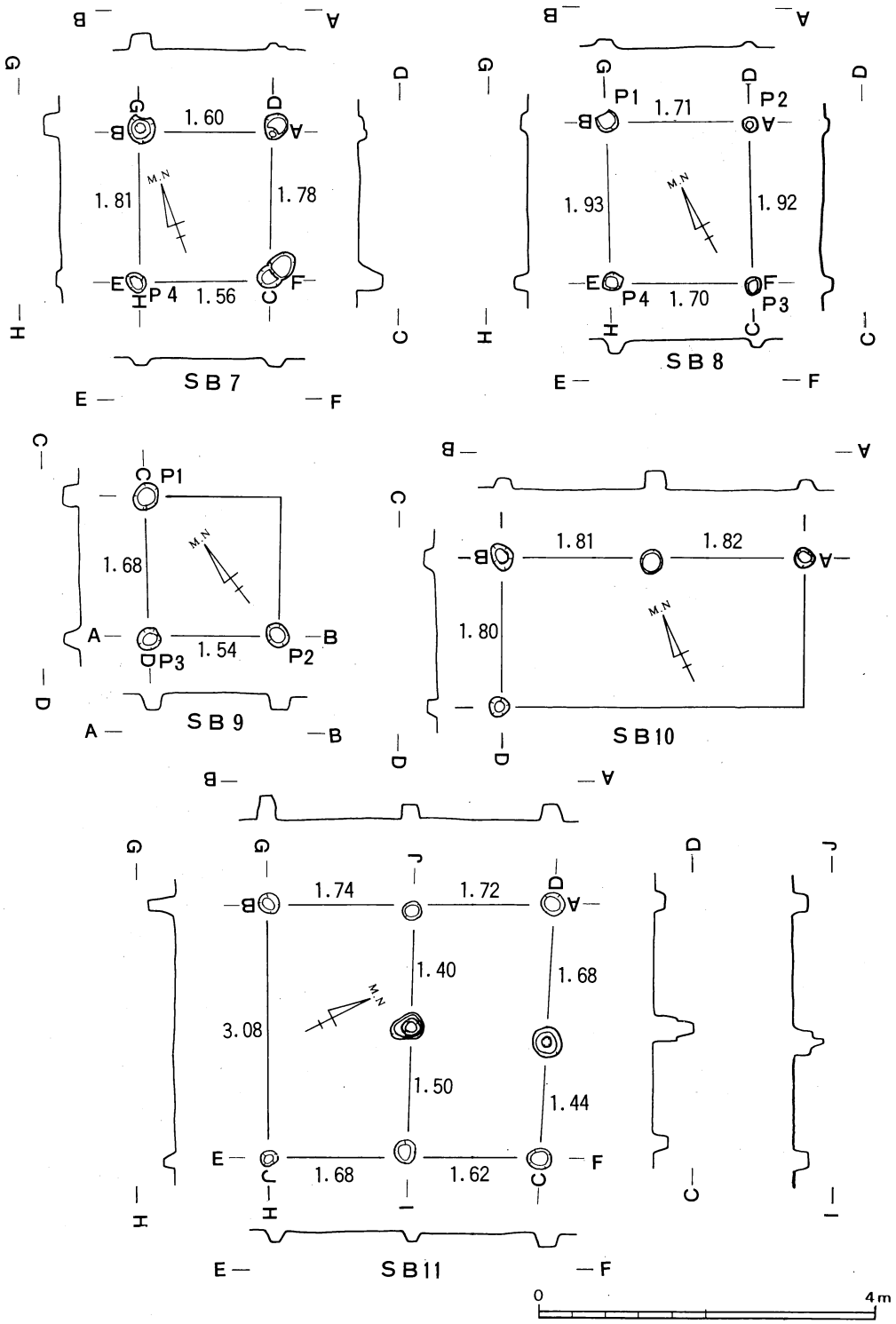
DL＝5.80m

0 4m

第64図　ＳＢ１

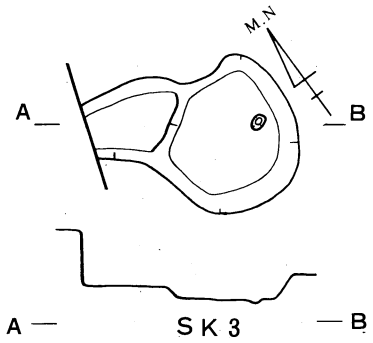

SB 2
1.72
1.87
1.85
1.76
SB 3
1.78
2.39
2.28
1.75
SB 4
1.90
1.98
3.28
3.33
1.97
1.99
SB 5
P1
P2
1.58
1.69
1.67
P4
1.54
P3
SB 6
P1
P2
P3
1.68
1.56
1.87
1.81
1.63
P5
1.57
P6
M.N
A
B
C
D
E
F
G
H
DL=5.80m
0
4m

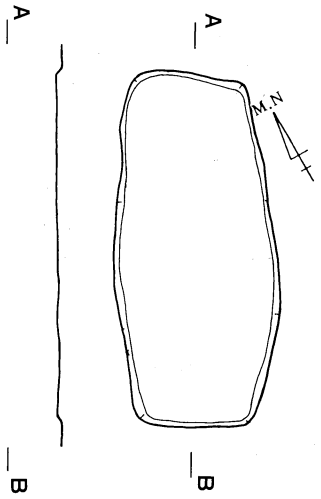
第65図　SB 2～6

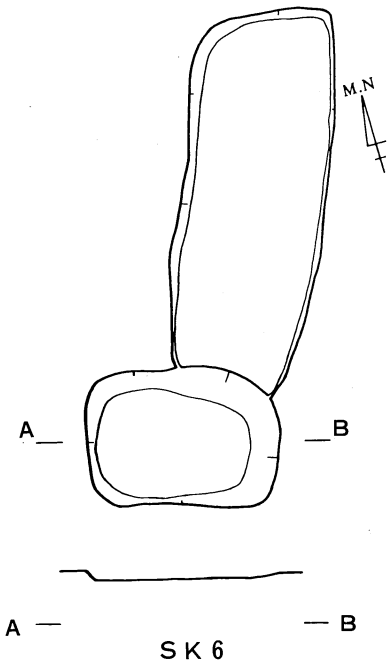


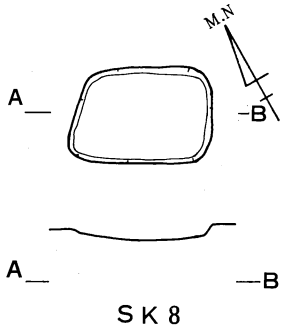
DL=5.80m

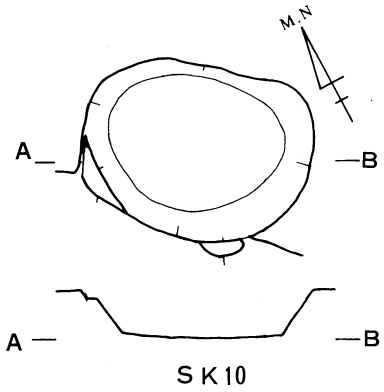
第66図　SB 7～11





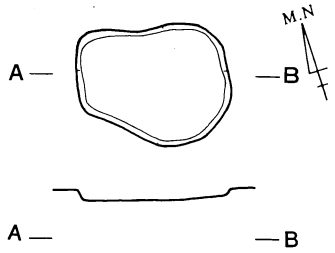




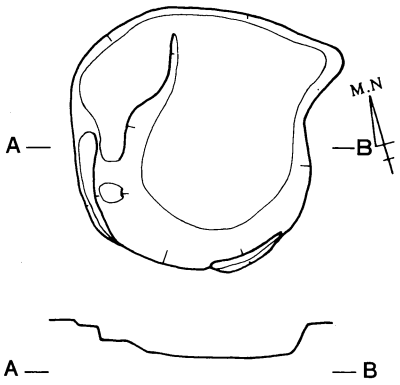


DL＝5.80m

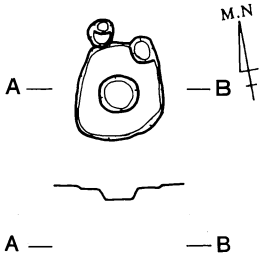
第67図　SK 3・5・6・8・10



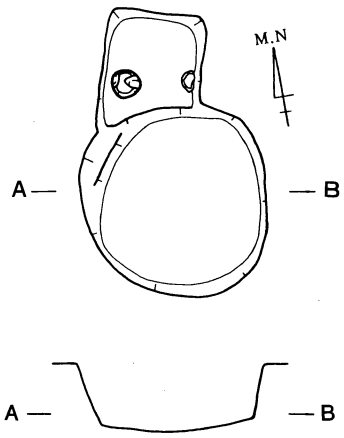
SK11



SK12

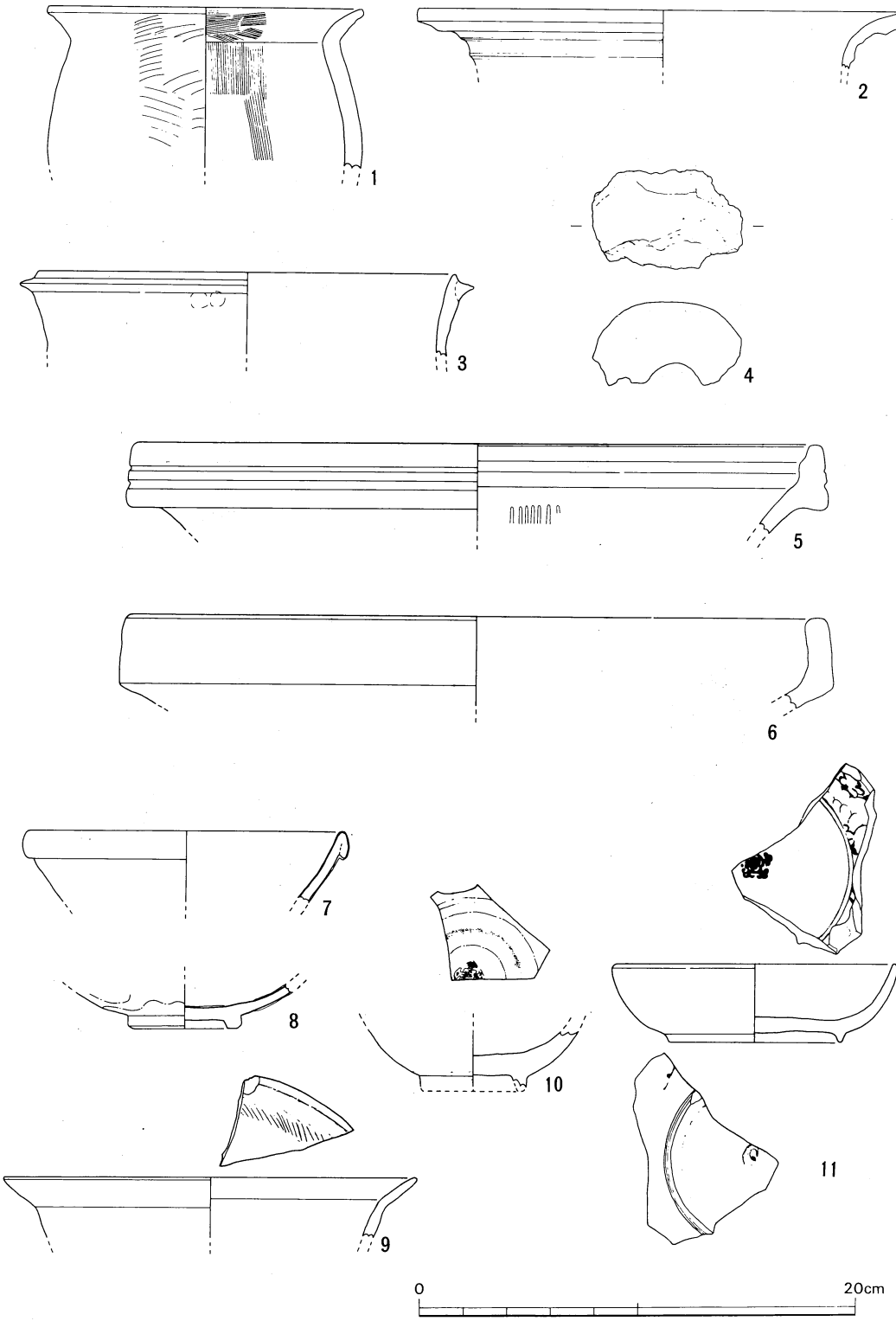


SK13

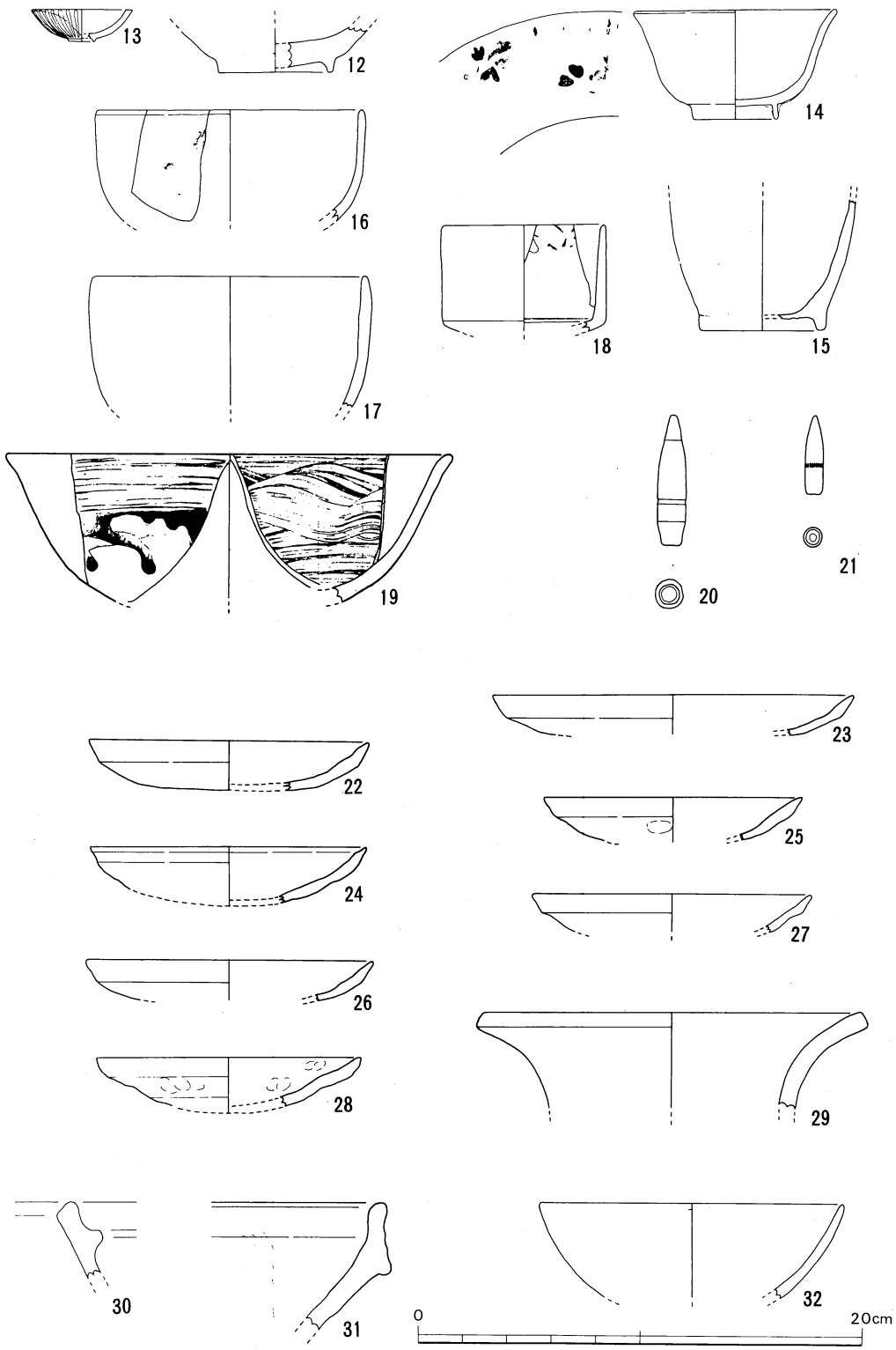


SK16

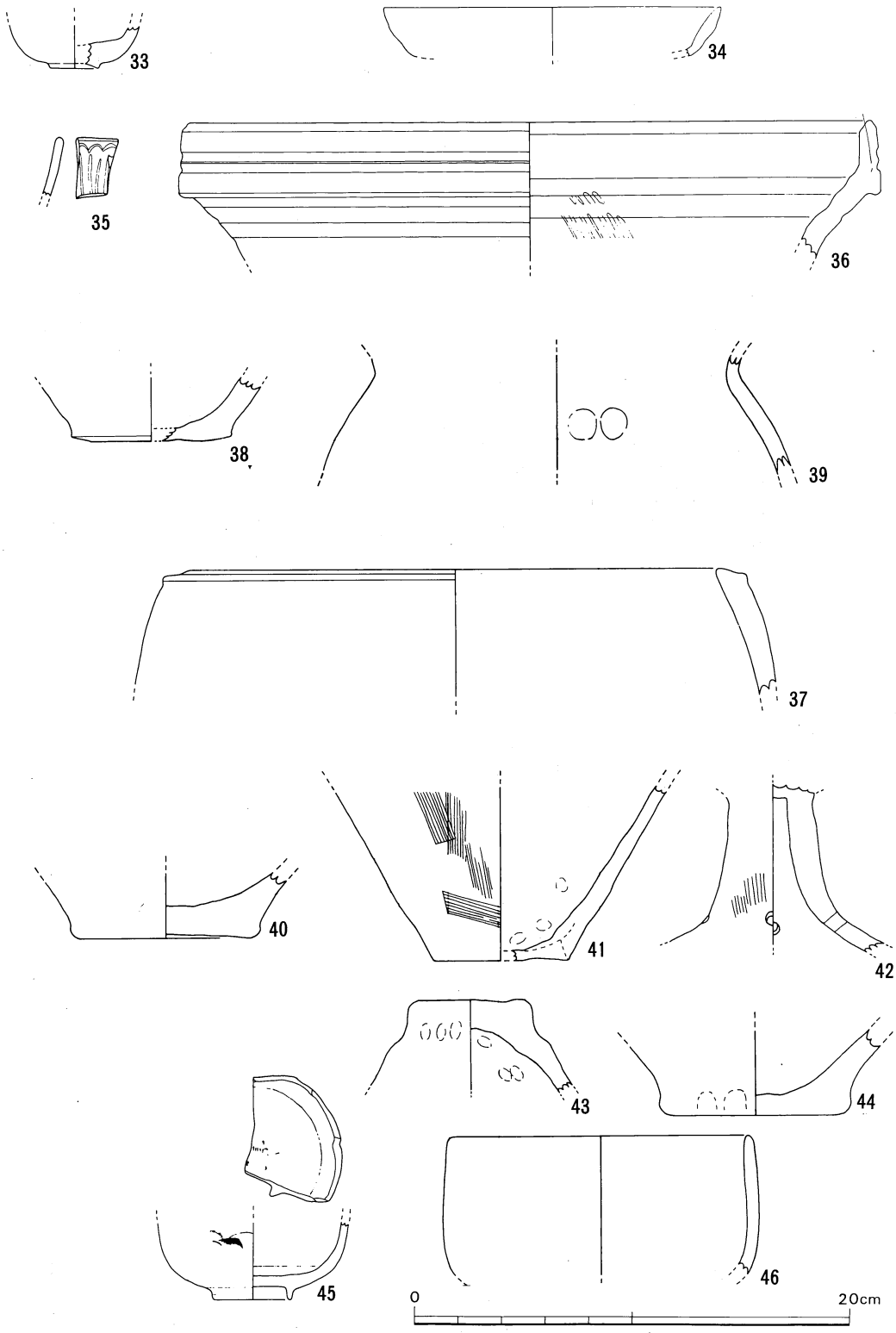
第68図　SK11～13・16



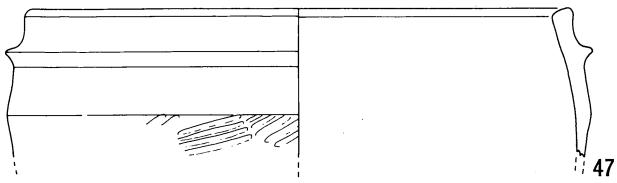
第69図　第Ⅰ～Ⅲ層出土遺物

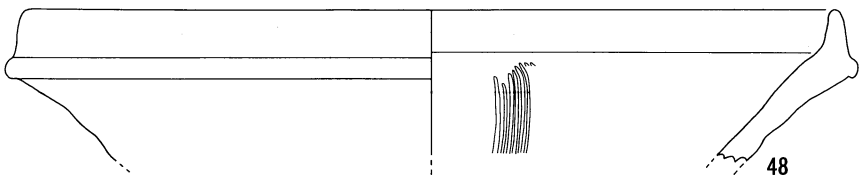


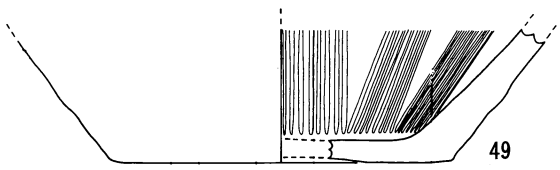
第70図　第Ⅰ～Ⅲ層、ＳＢ６・11、ＳＫ１・３出土遺物

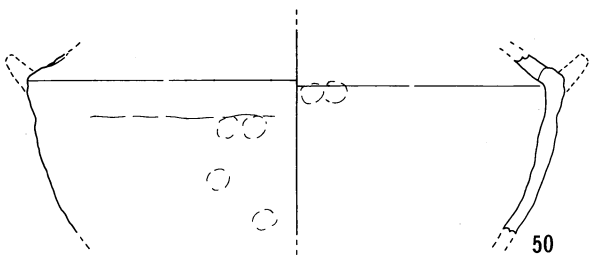


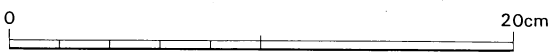
第71図　ＳＫ５・10・12、ＳＤ２・３出土遺物











第72図　P 1 ・ 2 ・ 5 ・27出土遺物

5. Loc. 28

Loc. 28

1．位置と調査経過

Loc. 28は、田村遺跡群の西南部に位置しており、小字は裏柿ノ木（ウラカキノキ）である。

当地点は、昭和56年度に、試掘調査を実施して遺構の分布状況を把握したあとに、西部と東部を拡張して調査した。

調査期間は、昭和56年11月９日から12月17日までの約40日間を要し、最終的な調査面積は約1,670㎡であった。

2．調査概要

Loc. 28は、場周の道路工事の関係で南端部に６本の試掘トレンチを設定して、遺物包含層の有無や遺構の分布状況を調べた。また、調査対象地がかなり広範囲にわたるため、不規則な試掘トレンチを延ばした結果、弥生時代から中世の遺構がLoc. 28の西部と東部に集中して存在することが判明した。そこで、Loc. 28の西部域をＡ地点（Loc. 28Ａ）とし、東部域をＢ地点（Loc.28Ｂ）として調査を進めた。

最初に、Loc. 28の西部域（Loc. 28Ａ）の調査を終了させてから、東部域（Loc. 28Ｂ）の調査に移った。

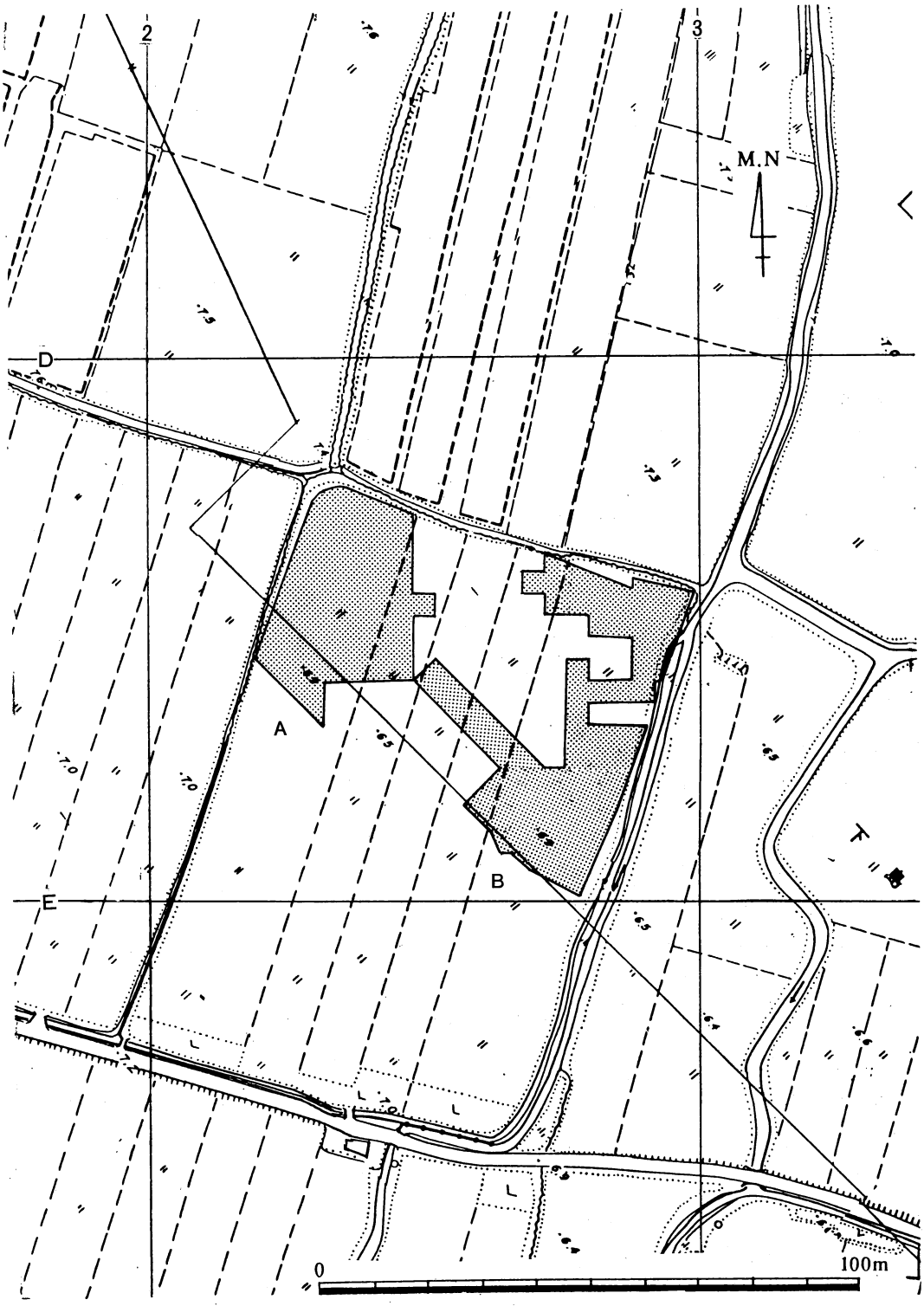
3．層序と出土遺物

Loc. 28の基本的な層序は以下の通りである。

第Ⅰ層　耕作土
第Ⅱ層　黄褐色粘質土層
第Ⅲ層　黄灰色粘質土層
第Ⅳ層　黒褐色粘質土層
第Ⅴ層　淡茶灰色粘質土層

第Ⅰ層の耕作土は、全域にみられ、ほぼ水平に堆積していた。第Ⅱ層の黄褐色粘質土層は、中近世の遺構検出面であり、無遺物層である。第Ⅱ層の黄褐色粘質土層は、Loc. 28Ａの北西部から西部にかけての部分には堆積がみられなかった。第Ⅲ層の黄灰色粘質土層は、無遺物層であるが、Loc. 28Ａの北西部から西部にかけての部分には堆積がみられなかった。第Ⅳ層の黒褐色粘質土層は、ほぼ全域に堆積がみられ、Loc. 28Ａの西半部では弥生時代から中世の遺構検出面であった。Loc. 28Ｂでは、第Ⅳ層の黒褐色粘質土層に弥生時代の遺物が包含されていた。第Ⅴ層の淡茶灰色粘質土層は、無遺物層でほぼ全域に堆積がみられ、弥生時代の遺構検出面であった。

Loc. 28では、基本的な層序に、中世から近世の遺物包含層は存在せず、包含層から出土した



第73図　調査区設定図

中近世の遺物は皆無であった。

4．遺構と遺物

Loc.28では、5棟の掘立柱建物址と7基の土坑、3条の溝の他、ピット10数個を検出したが、これらの遺構のうち、Loc.28Bで検出されたＳＢ１、ＳＫ１・２、また、Loc.28Aで検出されたＳＤ１・２は弥生時代の遺構であるため、弥生時代の項で触れた。

掘立柱建物址

ＳＢ２

ＳＢ２は、Loc.28A南端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は、２×５間の南北棟の掘立柱建物址で、棟方向はＮ－16°－Ｅであるが、西辺南部の柱穴１個は検出されなかった。梁間は3.73ｍを測り、柱間距離は1.76～1.91ｍである。桁行は9.08ｍを測り、柱間距離は1.70～1.88ｍである。柱穴は、直径24～36㎝、深さ16～28㎝を測り、不整円形及び、隅丸方形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。

ＳＢ３

ＳＢ３は、Loc.28B南部に位置し、第Ⅱ層で検出された。規模は、２×２間以上の東西棟の掘立柱建物址で、棟方向はＮ－89°－Ｗであるが、東部は調査区外に延びており桁行等は不明である。梁間は3.94ｍを測り、柱間距離は1.94～2.00ｍである。桁行の検出長は4.32ｍを測り、柱間距離は2.69～2.84ｍである。柱穴は直径24～48㎝、深さ30～36㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、Ｐ１からは土師質土器鍋の小破片が出土した。

ＳＢ４

ＳＢ４は、Loc.28B南部に位置し、第Ⅱ層で検出された。規模は、３×４間の東西棟の掘立柱建物址で、棟方向はＮ－67°－Ｗであるが、東辺北部の柱穴２個は検出されなかった。梁間は6.15ｍを測り、柱間距離は2.04～2.35ｍである。桁行は9.89ｍを測り、柱間距離は2.23～2.60ｍである。柱穴は、直径28～36㎝、深さ20～48㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、Ｐ１及びＰ４からは土師質土器鍋及び杯の小破片が出土した。また、Ｐ２からは土師質土器杯（７）が出土し、Ｐ３からは土師質土器杯（６）等の遺物が出土した。

ＳＢ４は、３×４間の母屋の南西隅に廂を有した建物址と考えられる。

ＳＢ５

ＳＢ５は、Loc.28B南端部に位置し、第Ⅱ層で検出された。規模は、２×４間の南北棟の掘

立柱建物址で、棟方向はＮ－17°－Ｅであるが、南西隅の柱穴１個は検出されなかった。梁間は4.20ｍを測り、柱間距離は2.08～2.25ｍである。桁行は8.96ｍを測り、柱間距離は1.66～2.48ｍである。柱穴は、直径16～40㎝、深さ10～48㎝を測り、円形及び不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、かなり多量の遺物が出土した。Ｐ１からは土師質土器椀（４）及び鍋の小破片等の遺物が出土し、Ｐ２からは土師質土器杯（２）及び鍋（５）等の遺物が出土した。また、Ｐ３からは青磁の細片、土師質土器杯及び鍋の破片等の遺物が出土し、Ｐ４からは土師質土器椀（１）が、Ｐ５からは土師質土器杯底部（３）等の遺物が出土した。

ＳＢ５から出土した遺物をみると、土師質土器椀（４）には高台があり、しかも土師質土器鍋（５）はかなり器高のある大きな鍋である。ＳＢ５は出土遺物等から14世紀の掘立柱建物址と考えられる。

ＳＢ５は、北西隅及び北東隅の２個の柱穴の直径が小さく、２×４間の母屋の南北両面に廂を有した建物址かもしれない。

土坑

ＳＫ３

ＳＫ３は、Loc.28Ａ北部に位置し、第Ⅳ層で検出された。平面形は長楕円形を呈し、長径1.78ｍ、短径0.52ｍ、深さ0.15ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－73°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。

ＳＫ４

ＳＫ４は、Loc.28Ｂ北西端部に位置し、第Ⅱ層で検出された。北部は調査区外に延びているため、長径等は不明である。平面形は長楕円形を呈し、長径の検出長2.40ｍ、短径0.28ｍ、深さ0.12ｍを測る。断面形は浅いＵ字形を呈し、長軸方向はＮ－36°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＫ５

ＳＫ５は、Loc.28Ｂ北西端部に位置し、第Ⅱ層で検出された。北部は調査区外に延びているため、短径等は不明である。平面形は隅丸方形を呈し、長径1.64ｍ、短径の検出長1.24ｍ、深さ0.12ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－75°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＫ６

ＳＫ６は、Loc.28Ｂ北部に位置し、第Ⅱ層で検出された。平面形は隅丸方形を呈し、長径

1.44m、短径1.42m、深さ0.27mを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はN－63°－Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SK7

SK7は、Loc.28B南部に位置し、第Ⅱ層で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.47m、短径0.68m、深さ0.11mを測る。断面形は浅い逆台形を呈し、長軸方向はN－78°－Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器の細片が出土した。

溝

SD3

SD3は、Loc.28B北東部に位置し、第Ⅱ層で検出された溝で、北部から南部に向かって縦走する。検出長15.52m、幅0.67m、深さ0.15mを測り、断面形は逆台形を呈す。埋土は淡灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SD3の時期及び性格等は全く不明である。

柱穴

P1

P1は、Loc.28A北端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、直径約60cm、深さ17cmを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、須恵器甕口縁部（8）等の遺物が出土した。

5．まとめ

Loc.28では、14世紀の掘立柱建物址4棟と土坑5基等の遺構を検出したが、これらの遺構から出土した遺物は非常に少なかった。しかし、Loc.28B南部で検出されたSB4・5の柱穴から少量の遺物（1～7）が出土している。前記のように、SB5の柱穴から出土した土師質土器椀（4）及び鍋（5）は、14世紀に位置づけられる遺物であり、SB5はこの時期の掘立柱建物址と考えられる。東西棟の掘立柱建物址（SB3・4）の棟方向は、N－67°－W～N－89°－Wで、南北棟の掘立柱建物址（SB2・5）の棟方向は、N－16°－E～N－17°－Eである。また、これらの掘立柱建物址（SB2～5）は切り合い関係が全くなく、しかも、規模及び棟方向が酷似しており、13～14世紀の屋敷跡群と考えられる。

SK4～6は、Loc.28A北部にやや集中する傾向がみられるが、出土遺物は皆無であり、時期及び性格等は全く不明である。しかし、SK7は、SB4・5の南東側に位置しており、墓坑的な性格を有した土坑と考えられる。

第22表　掘立柱建物址計測表

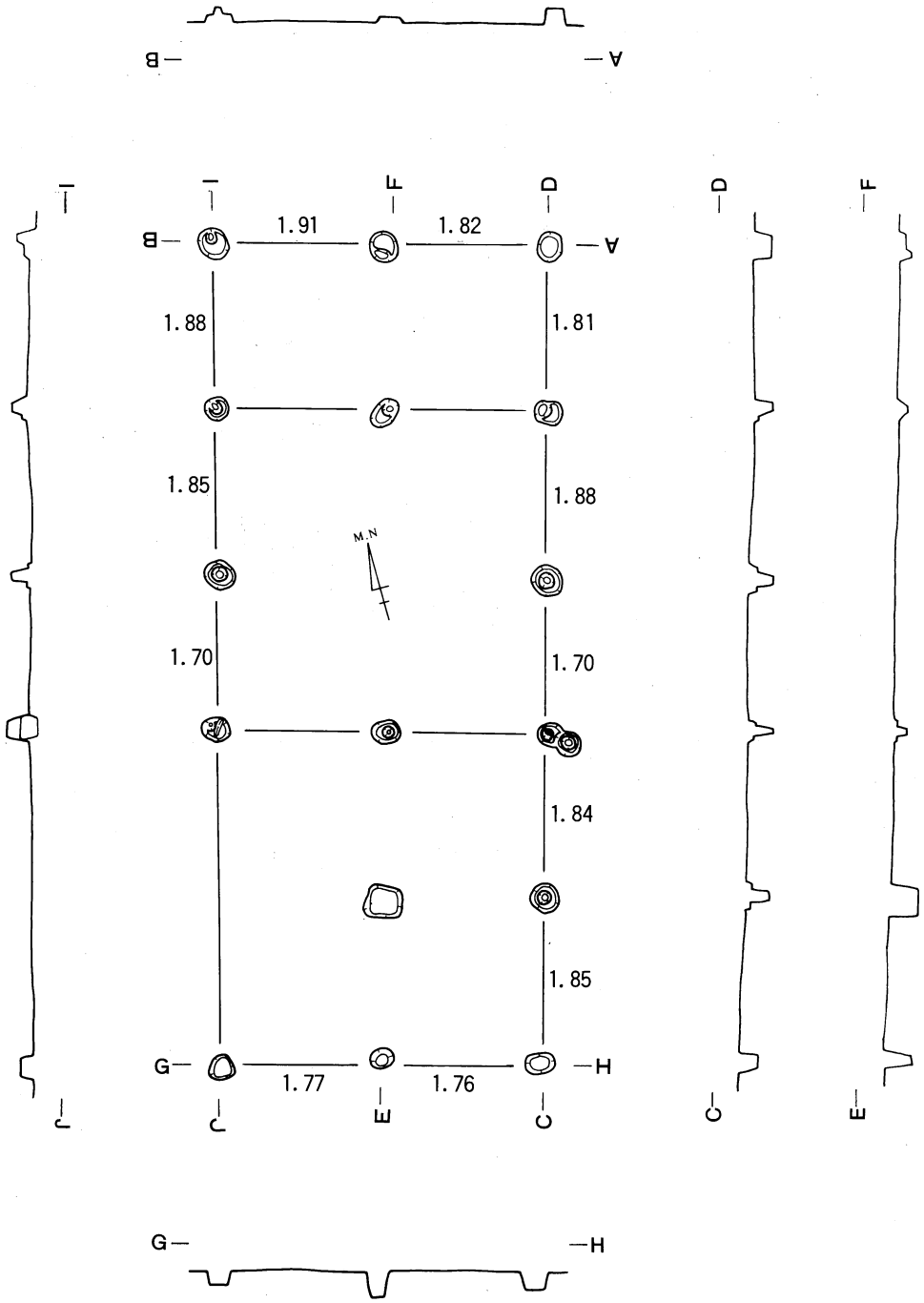
挿図番号	遺構番号	規模			棟方向	面積 (㎡)	備考
		梁(間)×桁(間)	梁 × 桁(m)	柱間距離(m)			
第 74 図	ＳＢ 2	2 × 5	3.73 × 9.08	1.70 ～ 1.91	N－16°－E	33.9	
第 77 図	ＳＢ 3	2 × 2	3.94 ×(4.32)	1.94 ～ 2.84	N－89°－W	(17.0)	
第 75 図	ＳＢ 4	3 × 4	6.15 × 9.89	2.05 ～ 2.60	N－67°－W	60.8	
第 76 図	ＳＢ 5	2 × 4	4.20 × 8.96	1.66 ～ 2.48	N－17°－E	37.6	

第23表　土坑計測表

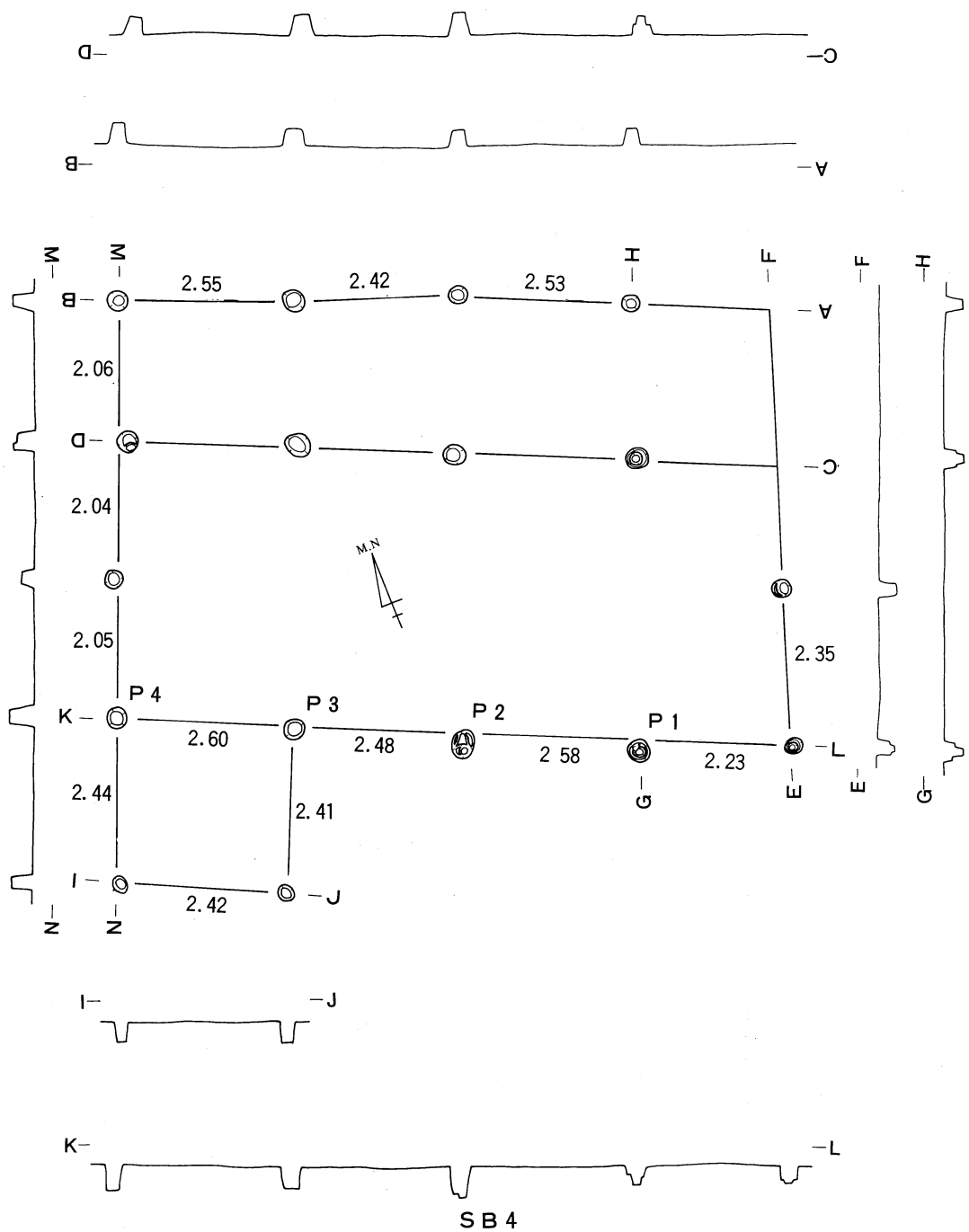
挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第 77 図	ＳＫ 3	長楕円形	1.78	0.52	0.15	N－73°－W	逆台形	
——	ＳＫ 4	〃	(2.40)	0.28	0.12	N－36°－E	浅いU字形	
第 77 図	ＳＫ 5	隅丸方形	1.64	(1.24)	0.12	N－75°－W	逆台形	
〃	ＳＫ 6	〃	1.44	1.42	0.27	N－63°－W	擂鉢形	
〃	ＳＫ 7	楕円形	1.47	0.68	0.11	N－78°－W	浅い逆台形	

第24表　遺構出土土器観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態	文様・手法	備　考
1	SB5	土師質土器 椀	17.4 (4.5) —— ——	体部に続く口縁部はゆるく外反する。	ロクロナデ。	乳白色。
2	〃	土師質土器 杯	10.2 4.9 —— 5.7	体部に続く口縁部は外上方に直線状にのびる。	〃	完形。
3	〃	〃	—— (2.4) —— 8.0	底径はかなり大きい。	ロクロナデか？ 底部は回転糸切りである。	乳白色を呈す。
4	〃	土師質土器 椀	—— (2.4) —— 4.6	高台は外側に八の字状にふんばる。	高台は貼付高台である。器表面が磨耗し、調整は不明である。	乳白色。
5	〃	土師質土器 鍋	33.5 (20.8) 29.3 ——	直線状にのびる体部に続く口縁部は、鋭く外反する。	体部外面はタテハケで仕上げ、底部外面はヨコハケである。体部内面に輪積み成形痕が残る。	
6	SB4	土師質土器 杯	14.6 (3.8) —— ——	体部に続く口縁部は直線状にのびる。口唇部は丸くおさめる。	ロクロナデ。	
7	〃	〃	14.2 (3.0) —— ——	〃	〃	
挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
8	P1	須恵器 甕	25.0 (4.2) —— ——	口縁部はかなり鋭く外反する。	回転ナデ。	


B
A
I
F
D
B
A
1.91
1.82
1.88
1.81
1.85
1.88
M.N
1.70
1.70
1.84
1.85
G
H
1.77
1.76
J
E
C
G
H
SB2
DL=6.80m
0
4m

第74図　ＳＢ２

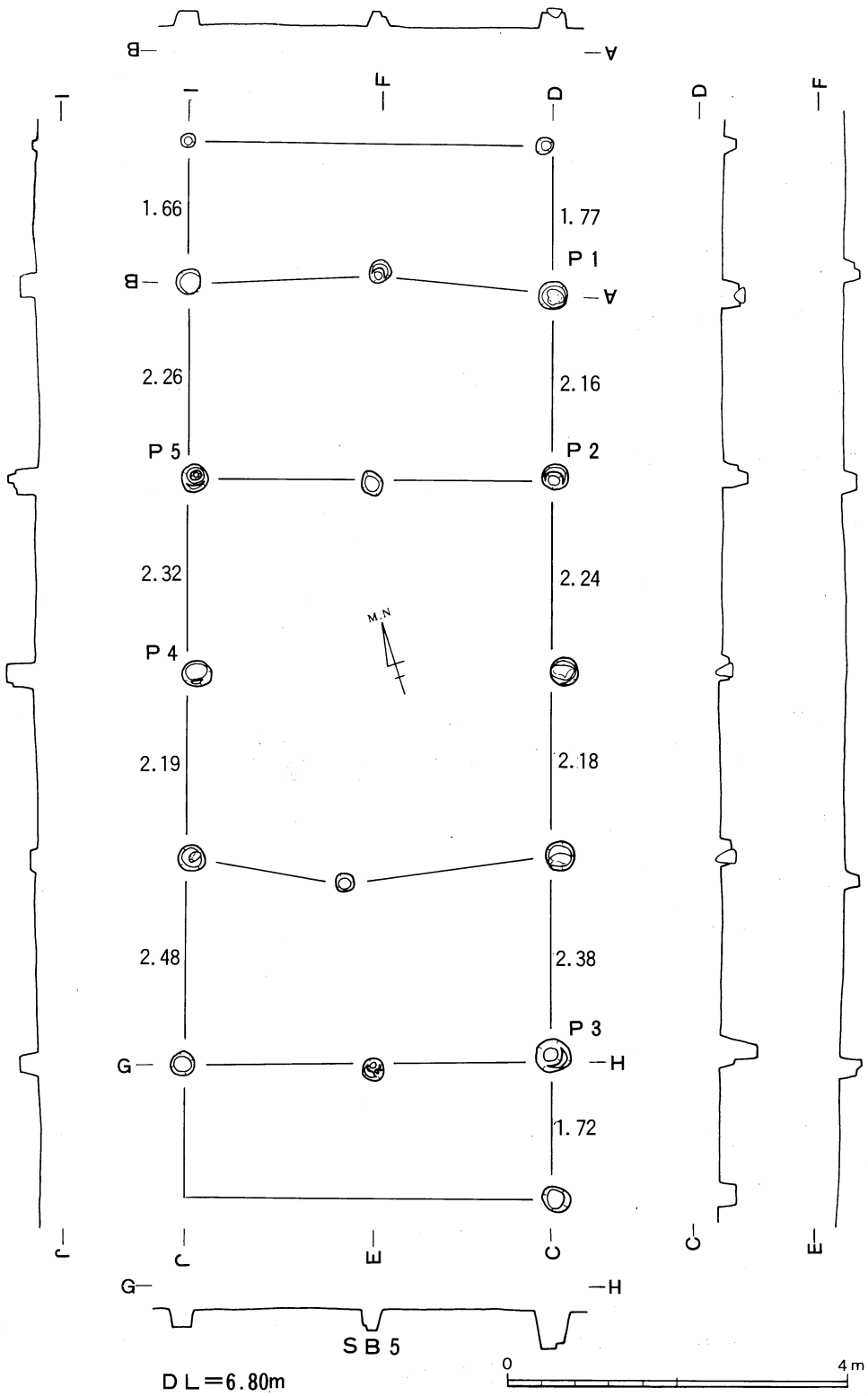


SB 4

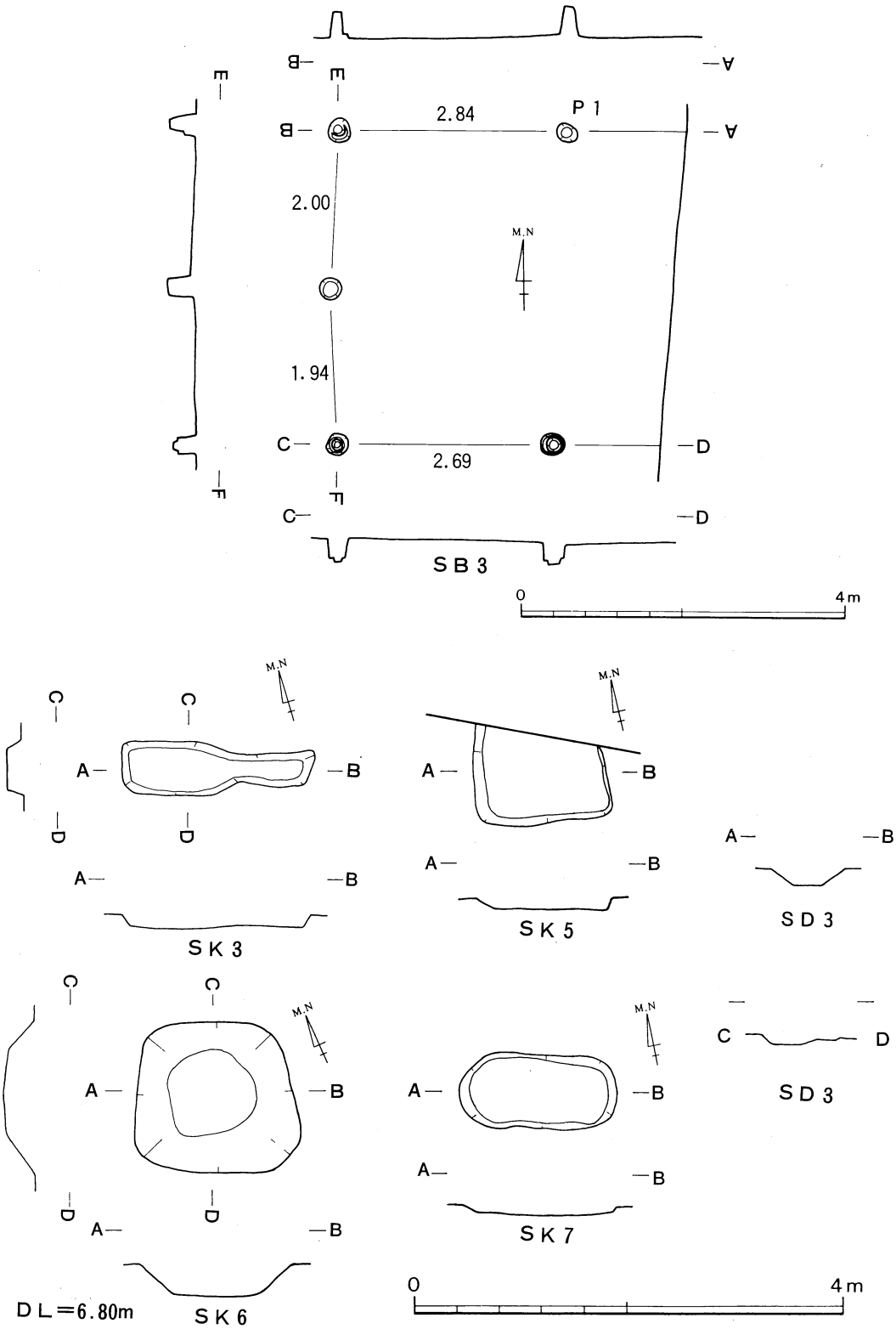
DL=6.80m

0 4m

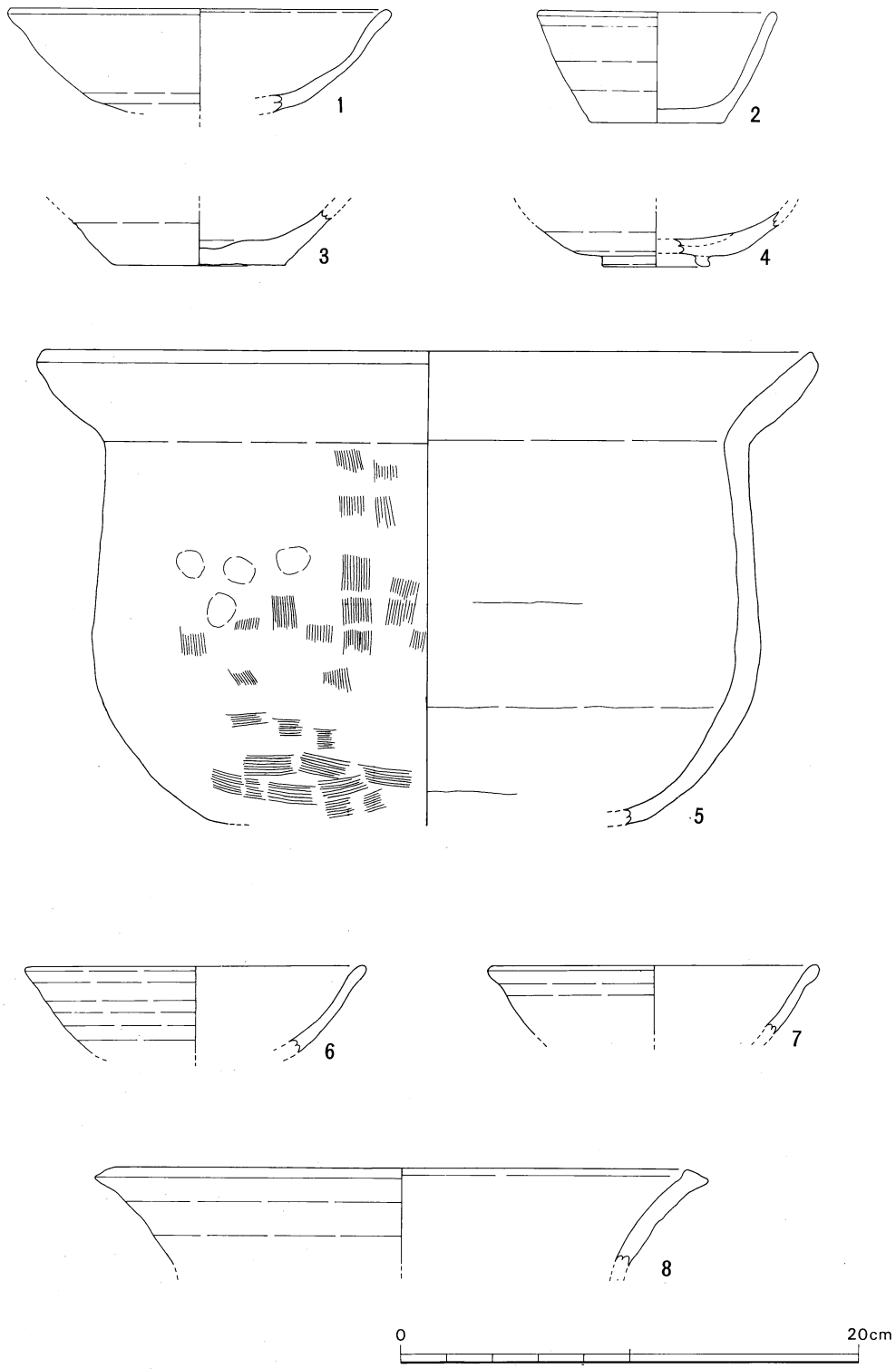
第75図　SB 4


B
A
I
F
D
1.66
1.77
P 1
2.26
2.16
P 5
P 2
2.32
2.24
M.N
P 4
2.19
2.18
2.48
2.38
P 3
G
H
1.72
C
E
SB 5
DL=6.80m
0
4m

第76図　ＳＢ５



第77図　ＳＢ３、ＳＫ３・５～７、ＳＤ３



第78図　ＳＢ４・５、Ｐ１出土遺物

6. Loc. 30

Loc. 30

1. 位置と調査経過

Loc. 30は、田村遺跡群の西端で、空港拡張区域内を南北に走る田村川の西部に位置する。小字は柿の木である。本調査区の北側にはLoc. 41、南側にはLoc. 28が位置しており、両調査区とも中世の掘立柱建物址等を検出している。

当調査区を対象とした試掘調査は、昭和56年度から、A～Jの10ヶ所のトレンチをグリッドラインに沿って設定して実施した。その結果、各トレンチにおいて、中世の土坑、ピット等を検出した。また、古代～中世にかけての遺物も多量に出土した。しかし、調査対象区の南西部では、溝2条を検出したのみで、遺物も若干出土するのみであった。そのため、調査区の南西部を除いて全面発掘を実施した。

2. 調査概要

Loc. 30は、調査対象区の南西部を除いて全面発掘を実施した。その結果、掘立柱建物址45棟、土坑122基、溝24条、柵列4基、ピット群多数を検出した。中世の遺構、遺物が大部分であるが、弥生、古代の遺物も若干検出した。弥生時代の遺構としては、調査区を南北に縦走する溝、SD4・6がみられ土坑は、SK22・46・60がある。古代と考えられるものは、SK53・112、SB18・22・33・34・36・38である。古代は掘立柱建物址、土坑のみで、調査区中央部から南部にかけて検出した。中世の遺構は、調査区北部と中央部に集中しており、SD12を境にして北部と南部とに集中している。SD12の周辺には遺構は少ない。本調査区北側のLoc. 31では、溝に囲まれた屋敷を検出したが、本調査区では良好な屋敷の検出はなく、逆L字状の細い溝（SD13）の南側付近を屋敷として考えることができるのみである。

調査は、昭和56年4月23日から7月24日、9月24日から10月2日の期間に実施し、最終的な調査面積は4,536㎡である。

3. 層序と出土遺物

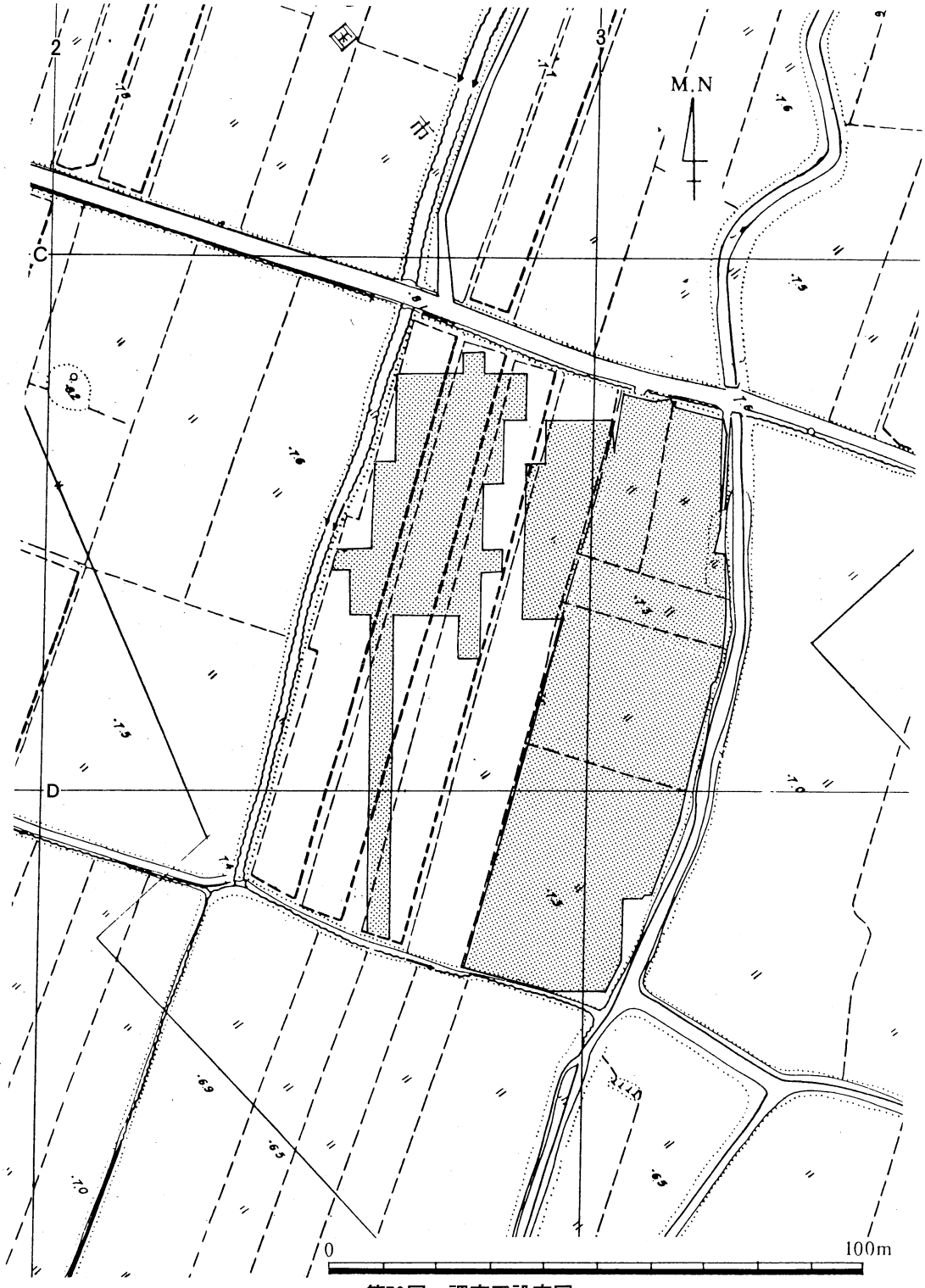
Loc. 30の基本的な層序は、以下の通りである。

第Ⅰ層　耕作土

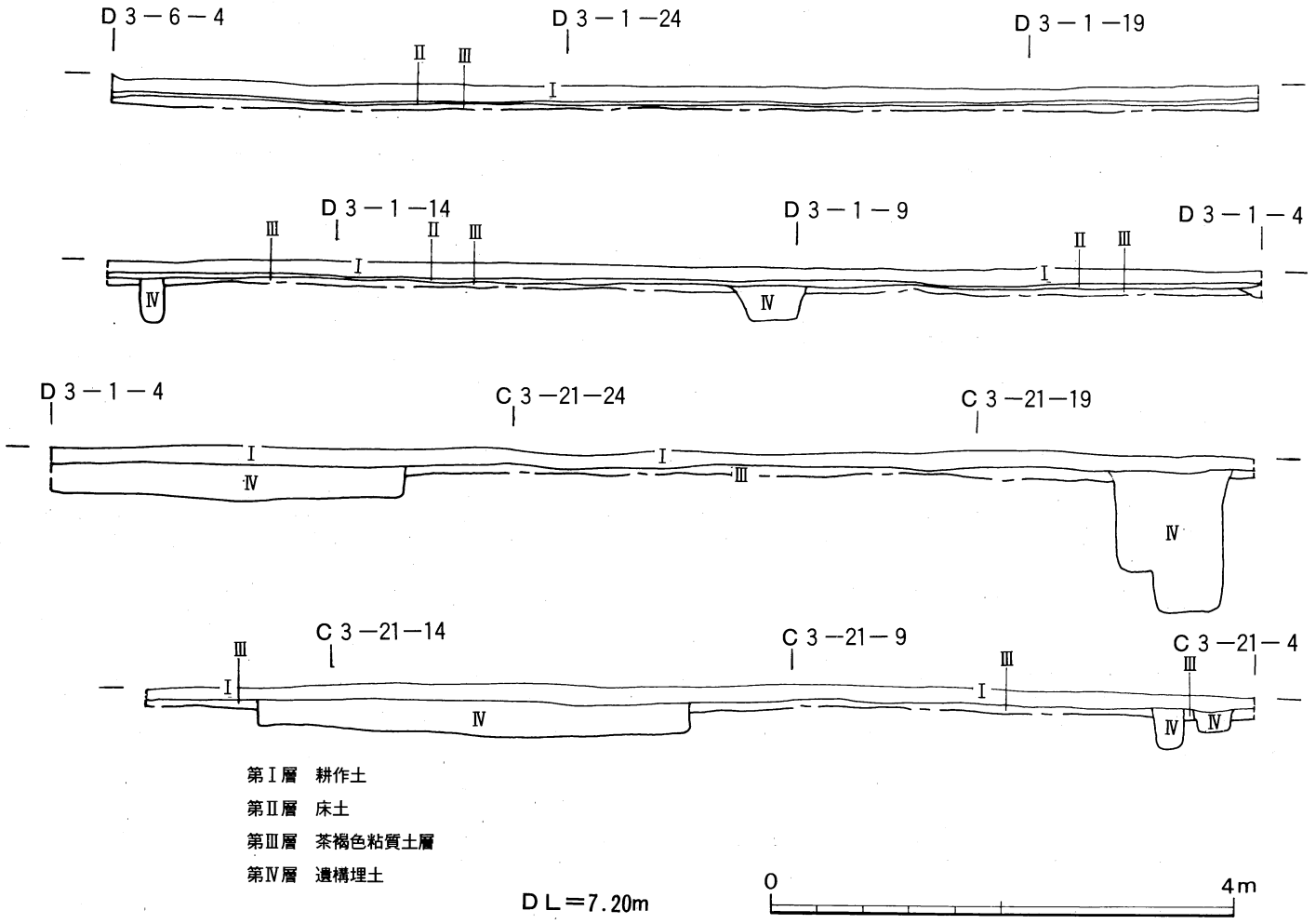
第Ⅱ層　床土

第Ⅲ層　茶褐色粘質土層

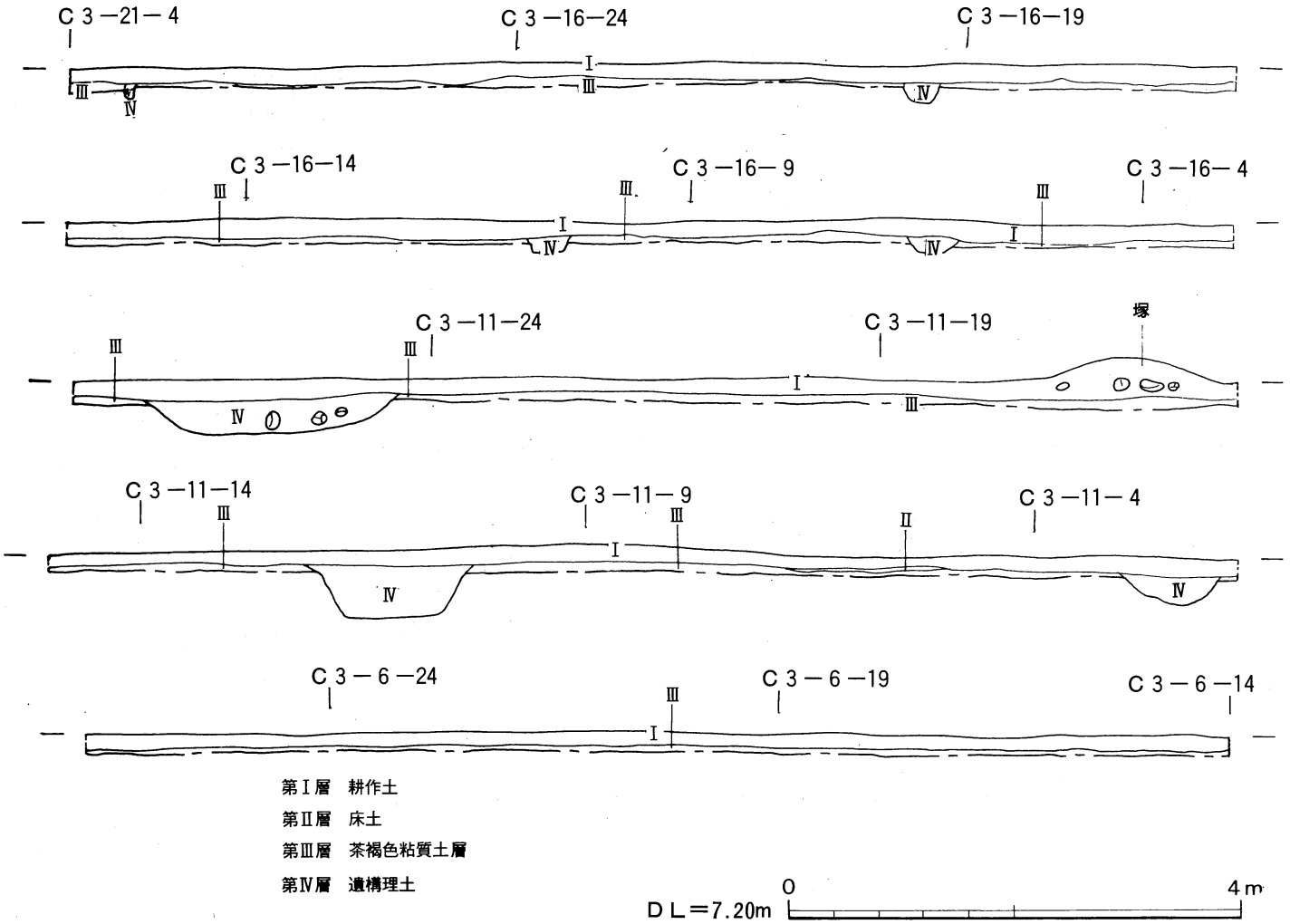
第Ⅰ・Ⅱ層を除去した段階ですべての遺構を検出しており、遺構の大分部は上部を削平されていた。第Ⅰ・Ⅱ層から出土した遺物は、1～7である。第Ⅲ層上面から出土したものは、8～92で、第Ⅲ層下は、無遺物層である。弥生から近世に至る遺物が出土しており、詳細は観察表を参照されたい。



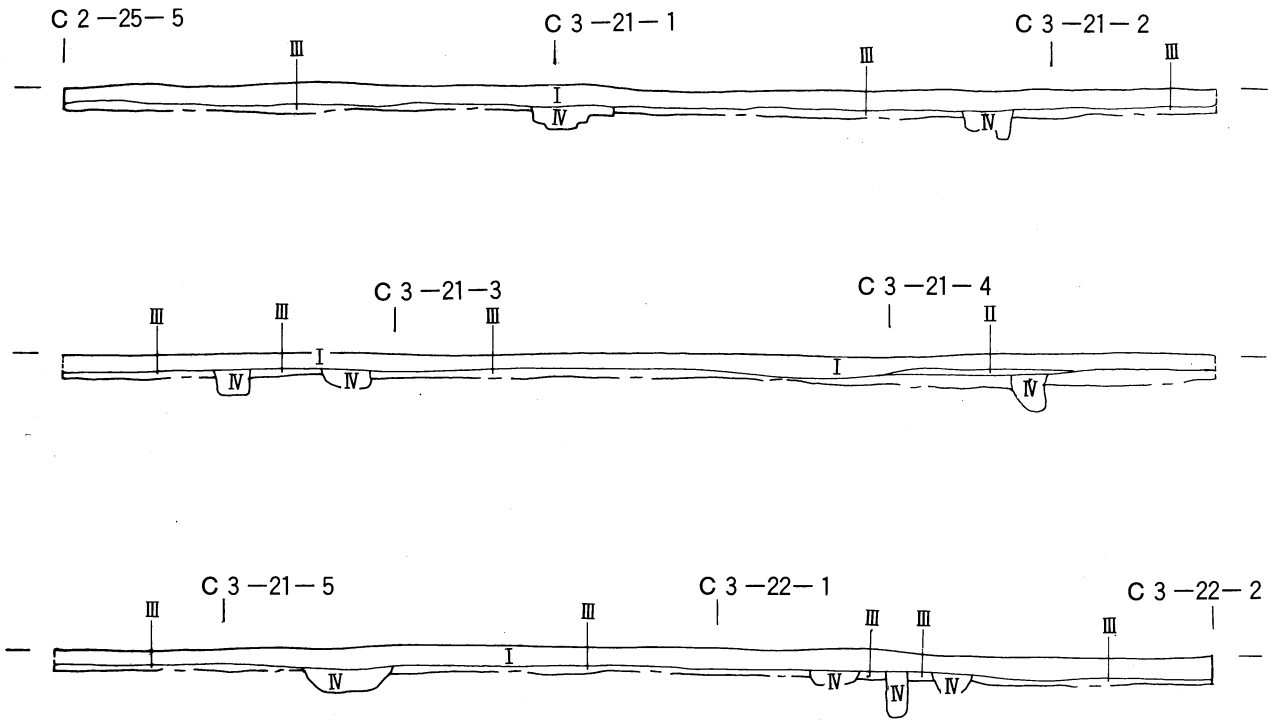
第79図　調査区設定図



第80図　調査区セクション



第181図　調査区セクション

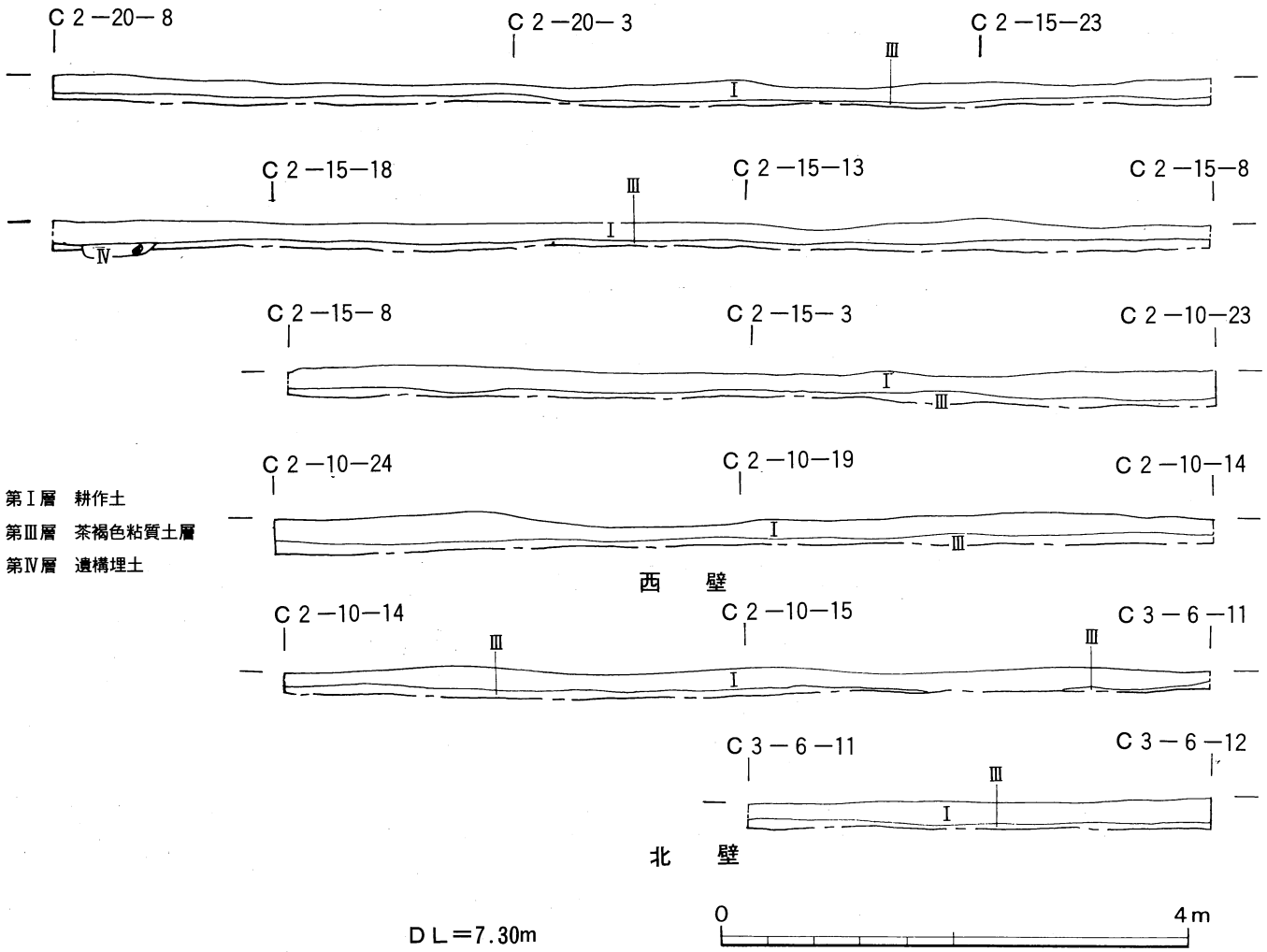


第Ⅰ層　耕作土
第Ⅱ層　床土
第Ⅲ層　茶褐色粘質土層
第Ⅳ層　遺構埋土

DL＝7.20m

0　4m

第82図　調査区セクション



第83図　調査区セクション

4．遺構と遺物

掘立柱建物址

ＳＢ１

ＳＢ１は、調査区の北端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×４間の南北棟で、梁間（東西）3.05ｍ、桁行（南北）5.40ｍを測る。棟方向はＮ－22°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径16～40㎝、検出面からの深さ５～50㎝を測る。基底面の標高は6.50～6.80ｍである。柱間距離は、梁間1.50ｍ、桁行0.60～1.80ｍを測る。桁行の柱間距離に統一がなく北部が狭い。埋土は灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＢ２

ＳＢ２は、調査区の北端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×２間の東西棟で、梁間（南北）3.65ｍ、桁行（東西）5.25ｍを測る。棟方向はＮ－73°－Ｗである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径28～40㎝、検出面からの深さ５～32㎝を測る。基底面の標高は6.50～6.75ｍである。柱間距離は、梁間1.50～2.10ｍ、桁行1.85～3.35ｍを測る。桁行東部は柱間距離が狭く、また、西部が広いことを考えると、柱穴が１個欠けている可能性が強い。建物の規模が、２×３間とも考えられる。埋土は灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。ＳＢ４と重複関係が認められるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ３

ＳＢ３は、調査区の北東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×１間の南北棟で、梁間（東西）2.60ｍ、桁行（南北）4.10ｍを測る。棟方向はＮ－21°－Ｅである。柱穴の平面形は、やや他と比べると大きいが円形を呈する。規模は、直径35～56㎝、検出面からの深さ３～15㎝を測る。上部は削平されているため、全体的に浅目である。基底面の標高は6.60～6.80ｍである。埋土は灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＢ４

ＳＢ４は、調査区の北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×２間の南北棟で、梁間（東西）3.60ｍ、桁行（南北）5.45ｍを測る。棟方向はＮ－16°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径45～60㎝、検出面からの深さ12～30㎝を測る。基底面の標高は6.50～6.80ｍである。柱間距離は、梁間3.60ｍ、桁行2.70～2.85ｍを測る。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器片が若干出土しているが、

実測不可能である。重複関係は、ＳＤ５、ＳＢ２・５とに見られるが、いずれも新旧関係は不明である。

ＳＢ５

ＳＢ５は、調査区の北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×３間の南北棟で、梁間（東西）3.95ｍ、桁行（南北）4.70ｍを測る。棟方向はＮ－21°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径21～33㎝、検出面からの深さ10～34㎝を測る。基底面の標高は6.50～6.80ｍである。柱間距離は、梁間3.80～3.95ｍ、桁行1.45～2.05ｍを測る。梁間は１間で3.95ｍと広く、柱穴が１個欠けている可能性があり、規模が２×３間になるとも考えられる。東辺の柱穴が１個欠けている。埋土は灰色粘質土である。遺物は、Ｐ１から唐津焼皿（94）が出土している。重複関係は、ＳＢ４、ＳＫ24・36とに認められるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ６

ＳＢ６は、調査区の北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×１間の東西棟で、梁間（南北）2.20ｍ、桁行（東西）2.75ｍを測る。棟方向はＮ－64°－Ｗである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径26～38㎝、検出面からの深さ６～35㎝を測る。基底面の標高は6.50～6.80ｍである。埋土は灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係はＳＫ35に切られている。

ＳＢ７

ＳＢ７は、調査区の北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×２間の南北棟で、梁間（東西）1.80ｍ、桁行（南北）3.75ｍを測る。棟方向はＮ－14°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径25～35㎝、検出面からの深さ10～17㎝を測る。基底面の標高は6.67～6.72ｍである。柱間距離は、梁間1.80ｍ、桁行1.85～1.90ｍを測り、統一がとれている。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器片が若干出土したが、細片のため実測不可能である。

ＳＢ８

ＳＢ８は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×３間の南北棟で、梁間（東西）3.85ｍ、桁行（南北）4.95ｍを測る。棟方向はＮ－14°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径22～38㎝、検出面からの深さ10～33㎝を測る。基底面の標高は6.70～6.90ｍである。柱間距離は、梁間1.65～2.15ｍ、桁行1.60～1.90ｍを測る。東辺の柱穴が１個欠けている。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物

は皆無である。重複関係は、ＳＡ１、ＳＢ９とに認められるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ９

ＳＢ９は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×２間の東西棟で、梁間（南北）3.80ｍ、桁行（東西）4.90ｍを測る。棟方向はＮ－76°－Ｗである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径35～50㎝、検出面からの深さ32～38㎝を測る。基底面の標高は6.57～6.65ｍである。柱間距離は、梁間3.80ｍ、桁行2.50ｍを測る。梁間は広く3.80ｍであるが、柱穴が１個欠けている可能性があり、規模も２×２間になるとも考えられる。また、南辺の柱穴が１個欠けている。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器片が若干出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、ＳＢ８とに認められるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ10

ＳＢ10は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×２間の南北棟で、梁間（東西）2.25ｍ、桁行（南北）3.20ｍを測る。棟方向はＮ－14°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径22～35㎝、検出面からの深さ10～45㎝を測る。基底面の標高は6.53～6.87ｍである。柱間距離は、梁間2.25ｍ、桁行1.60～1.70ｍを測る。南西隅の柱穴が欠けている。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＢ８の南東隅の柱穴と切り合っているが、埋土が類似するため新旧関係は不明である。

ＳＢ11

ＳＢ11は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×２間の南北棟で、梁間（東西）1.55ｍ、桁行（南北）3.85ｍを測る。棟方向はＮ－16°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径27～36㎝、検出面からの深さ10～30㎝を測る。基底面の標高は6.70～6.82ｍである。柱間距離は、梁間1.50～1.55ｍ、桁行1.90～1.95ｍを測り、桁行の柱間距離は等間隔である。埋土は灰褐色粘質土である。

遺物は、土師質土器片が若干出土しているが、細片のため実測不可能である。重複関係は、梁間の柱穴が切り合っており、また、桁行の中間柱もラインに沿っていることから、建替えが行われたと考えられる。

ＳＢ12

ＳＢ12は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×３間の南北棟で、梁間（東西）3.5ｍ、桁行（南北）5.7ｍを測る。棟方向はＮ

－19°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径24～40㎝、検出面からの深さ８～26㎝を測る。基底面の標高は6.72～6.87ｍである。柱間距離は、梁間1.55～1.95ｍ、桁行1.10～2.20ｍを測る。北西隅の柱穴がＳＫ３に切られているため欠けている。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、Ｐ１から土師器椀（95）が出土している。その他土師質土器、備前焼片が出土しているが実測不可能である。重複関係は、北西部でＳＫ３に切られている。ＳＫ４とは切り合いが認められず、さらにＳＢ14との関係は、ピットが切り合っているが、埋土が類似しているため明確に出来なかった。

ＳＢ13

ＳＢ13は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×２間の南北棟で、梁間（東西）2.50ｍ、桁行（南北）3.65ｍを測る。棟方向はＮ－19°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径10～23㎝、検出面からの深さ10～23㎝を測る。基底面の標高は6.77～6.91ｍである。柱間距離は、梁間2.50ｍ、桁行1.80～1.85ｍを測る。北東隅の柱穴が欠けている。埋土は灰褐色粘質土である。

遺物は、Ｐ１から土師質土器杯（96）、土錘（97）が出土した。その他の土師質土器片、備前焼片が出土しているが、細片のため実測不可能である。重複関係は、ＳＫ６とに認められるが、切り合いがなく新旧関係は不明である。

ＳＢ14

ＳＢ14は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×３間の南北棟で、梁間（東西）2.55ｍ、桁行（南北）5.10ｍを測る。棟方向はＮ－21°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径25～50㎝、検出面からの深さ10～35㎝を測る。基底面の標高は6.62～6.86ｍである。柱間距離は、梁間2.50～2.55ｍ、桁行1.50～1.90ｍを測る。桁行南部が1.90ｍとやや広い。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器片が若干出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、ＳＢ12とに認められるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ15

ＳＢ15は、調査区の中央部よりやや北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×３間の東西棟で、梁間（南北）2.50ｍ、桁行（東西）4.50ｍを測る。棟方向はＮ－80°－Ｗである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径10～25㎝、検出面からの深さ６～20㎝を測る。基底面の標高は6.69～6.81ｍである。柱間距離は、梁間1.00～1.50ｍ、桁行1.40～1.65ｍを測る。東妻の中間柱が欠けている。また、西の部分は、１×２間の区画とも考えられる。埋土は灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＤ13とに認め

られるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ16

ＳＢ16は、調査区の中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×１間で、全長は東西2.80ｍ、南北2.40ｍを測る。棟方向は、東西棟と推定されＮ－80°－Ｗである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径25～38㎝、検出面からの深さ13～25㎝を測る。基底面の標高は6.62～6.75ｍである。埋土は灰色粘質土である。遺物は、土師質土器片が若干出土しているが、細片のため実測不可能である。重複関係は、ＳＢ18を切っている。ＳＫ61との新旧関係は不明である。

ＳＢ17

ＳＢ17は、調査区中央部の西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×２間の南北棟で、梁間（東西）1.65ｍ、桁行（南北）3.10ｍを測る。棟方向はＮ－10°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径15～20㎝、検出面からの深さ10～15㎝を測る。基底面からの標高は6.83～6.97ｍである。柱間距離は、梁間1.30～1.65ｍ、桁行1.30～1.80ｍを測る。南妻がやや広い。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土しているが、細片のため実測不可能である。

ＳＢ18

ＳＢ18は、調査区の中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×３間の東西棟で、梁間（南北）4.60ｍ、桁行（東西）6.15ｍを測り総柱である。棟方向はＮ－71°－Ｗである。柱穴の平面形は、大型の円形や方形を呈する。規模は、円形のものは、直径43～70㎝、方形のものは、一辺50～60㎝を測る。検出面からの深さは10～21㎝、基底面の標高6.67～6.78ｍである。柱間距離は、梁間2.25～2.35ｍ、桁行1.95～2.15ｍを測る。北辺の柱穴が２個欠けている。埋土は黄茶色粘質土である。

遺物は、Ｐ１より須恵器皿（98）、Ｐ２より土師器杯（99）が出土している。その他土師器、須恵器細片が出土しているが、実測不可能である。重複関係は、ＳＢ16、ＳＫ66に切られており、ＳＤ14との新旧関係は不明である。

ＳＢ19

ＳＢ19は、調査区の中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×３間の南北棟で、梁間（東西）3.55ｍ、桁行（南北）4.55ｍを測る。棟方向はＮ－15°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径16～60㎝、検出面からの深さ５～37㎝を測る。基底面の標高は6.52～7.02ｍである。柱間距離は、梁間1.50～1.90ｍ、桁

行0.50～2.10ｍを測り、桁行の柱間距離は不揃いである。埋土は灰褐色粘質土である。

遺物は、土師質土器が若干出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、ＳＢ21・22、ＳＤ６・17とに認められる。柱穴の切り合いはないが、本遺構は、ＳＢ21を除いた他のものより新しい時期と考えられる。

ＳＢ20

ＳＢ20は、調査区の中央部やや西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×３間の東西棟で、梁間（南北）3.00ｍ、桁行（東西）4.70ｍを測る。棟方向はＮ－77°－Ｗである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径25～50㎝、検出面からの深さ10～20㎝を測る。基底面の標高は6.68～6.87ｍである。柱間距離は、梁間2.80～3.00ｍ、桁行0.80～2.50ｍを測り、桁行の柱間距離は不揃いである。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土しているが、細片で実測不可能である。

ＳＢ21

ＳＢ21は、調査区の中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×２間の東西棟で、梁間（南北）2.90ｍ、桁行（東西）4.80ｍを測る。棟方向はＮ－67°－Ｗである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径20～40㎝、検出面からの深さ13～40㎝を測る。基底面の標高は6.51～6.93ｍである。柱間距離は、梁間2.75～2.90ｍ、桁行2.20～2.45ｍを測る。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器、瓦質土器が出土しており、実測可能なものは、Ｐ１から出土した須恵器杯（100）のみである。しかし、本遺構は、埋土、柱穴の形態から中世の時期のものであり、Ｐ１から出土した須恵器は混入したものと考えられる。重複関係は、ＳＢ19・23、ＳＤ17とに認められるが、ピットの切り合いがなく新旧関係は不明である。

ＳＢ22

ＳＢ22は、調査区の中央部のやや東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×３間と推定される南北棟で、梁間（東西）4.40ｍ、桁行（南北）6.80ｍを測る。棟方向はＮ－16°－Ｅである。柱穴の平面形は方形を呈する。規模は、一辺0.60～1.00ｍ、検出面からの深さ11～38㎝を測る。基底面の標高は6.53～6.78ｍである。柱間距離は、梁間2.20ｍ、桁行2.10ｍを測る。しかし、東辺の柱穴３個と西辺の柱穴１個が欠けているため、全体の柱間距離は明確でない。埋土は黄茶色粘質土である。

遺物は、Ｐ１より土師質土器皿（102）、Ｐ２より土師器甕（101）、Ｐ３より土師器羽釜（103）が出土した。102は混入品と考えられる。その他土師器、須恵器片が出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、ＳＤ６を切っている。その他、ＳＫ79・80・81、ＳＤ15～18、

ＳＢ19と重複しているがすべて中・近世のものである。

ＳＢ23

ＳＢ23は、調査区の中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、３×３間の南北棟で、梁間（東西）4.60ｍ、桁行（南北）5.60ｍを測る。棟方向はＮ－19°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径14～40㎝、検出面からの深さ11～50㎝を測る。基底面の標高は6.36～6.79ｍである。柱間距離は、梁間1.40～1.55ｍ、桁行1.60～2.00ｍを測る。南妻の柱穴１個が欠けている。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器、瓦質土器、青磁片が若干出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、ＳＫ70・71・72を切っている。

ＳＢ24

ＳＢ24は、調査区中央部やや西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×４間の東西棟で、梁間（南北）3.40ｍ、桁行（東西）5.80ｍを測る。棟方向はＮ－72°－Ｗである。柱穴の平面形は、大小さまざまであるが円形を呈する。規模は、直径15～53㎝、検出面からの深さ５～53㎝を測る。基底面の標高は6.39～6.86ｍである。柱間距離は、梁間1.30～1.80ｍ、桁行1.25～2.50ｍを測る。しかし、西妻と北辺の柱穴が１個ずつ欠けている。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、Ｐ１から須恵器杯（104）が出土している。その他土師器片、須恵器が出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、ＳＤ19に認められるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ25

ＳＢ25は、調査区の中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×５間の南北棟で、梁間（東西）1.60ｍ、桁行（南北）6.70ｍを測る。棟方向はＮ－18°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径15～50㎝、検出面からの深さ10～31㎝を測る。基底面の標高は6.60～6.83ｍである。柱間距離は、梁間1.60ｍ、桁行1.15～1.50ｍを測る。北東隅の柱穴が欠けている。埋土は灰褐色粘質土である。

遺物は、Ｐ１から土師質土器鍋（105）、瓦質土器鍋（106）、Ｐ２から備前焼壺（107）が出土している。その他土師質土器の細片が出土しているが、実測不可能である。重複関係は、ＳＫ74に切られている。

ＳＢ26

ＳＢ26は、調査区の中央部やや東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×３間の東西棟で、梁間（南北）2.00ｍ、桁行（東西）5.45ｍを測る。棟方向は

N－73°－Wである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径20～35cm、検出面からの深さ12～26cmを測る。基底面の標高は6.54～6.74mである。柱間距離は、梁間1.50～2.00m、桁行1.60～2.10mを測る。南辺の柱穴が2個欠けている。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器の細片が出土しているが、実測不可能である。重複関係は、ＳＫ95～97、ＳＤ6・7とに認められ、その中でＳＤ6を切っている。

ＳＢ27

ＳＢ27は、調査区の中央部やや西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、1×1間の東西棟で、梁間（南北）1.50m、桁行（東西）2.20mを測る。棟方向はN－65°－Wである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径16～30cm、検出面からの深さ10～25cmを測る。基底面の標高は6.72～6.93mである。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土しているが、実測不可能である。重複関係は、ＳＤ19を切っている。

ＳＢ28

ＳＢ28は、調査区の中央部よりやや南西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、1×2間の南北棟で、梁間（東西）2.75m、桁行（南北）3.80mを測る。棟方向はN－25°－Eである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径24～50cm、検出面からの深さ11～30cmを測る。基底面の標高は6.57～6.77mである。柱間距離は、梁間2.60～2.75m、桁行1.70～2.00mを測る。南妻がやや広くなっている。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器、瓦質土器が若干出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、ＳＫ98・99とに認められるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ29

ＳＢ29は、調査区の中央部よりやや南東部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

建物は、2×2間の南北棟で、梁間（東西）4.00m、桁行（南北）4.05mを測る。棟方向はN－14°－Eである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径17～40cm、検出面からの深さ10～40cmを測る。基底面の標高は6.43～6.74mである。柱間距離は、梁間1.80～2.10m、桁行1.75～2.25mを測る。南妻がやや広くなっている。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器片が若干出土しているが、実測不可能である。

ＳＢ30

ＳＢ30は、調査区の南部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

建物は、2×4間の東西棟で、梁間（南北）3.65m、桁行（東西）7.25mを測る。棟方向はN－75°－Wである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径15～35cm、検出面からの深

さ９～40cmを測る。基底面の標高は6.41～6.75ｍである。柱間距離は、梁間1.70～1.95ｍ、桁行1.50～2.40ｍを測る。建物内の西と東で、１×２間の区画を有する。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、Ｐ１より土錘（108）が出土している。その他図示できないが、土師質土器、瓦質土器、備前焼の細片が出土している。

ＳＢ31

ＳＢ31は、調査区の南西部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×４間の東西棟で、梁間（南北）3.10ｍ、桁行（東西）6.40ｍを測る。棟方向はＮ－70°－Ｗである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径15～40cm、検出面からの深さ９～43cmを測る。基底面の標高は6.38～6.75ｍである。柱間距離は、梁間1.45～1.60ｍ、桁行1.30～2.30ｍを測る。北辺列の柱穴を１個欠いているが、総柱の建物である。

遺物は、Ｐ１より土師質土器鍋（109）が出土している。その他図示できないが土師質土器、瓦質土器、備前焼の細片が出土している。重複関係は、ＳＫ104に認められるが、ピットの切り合いがなく、新旧関係は不明である。

ＳＢ32

ＳＢ32は、調査区の南部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×２間の南北棟で、梁間（東西）2.25ｍ、桁行（南北）2.70ｍを測る。棟方向はＮ－16°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径22～62cm、検出面からの深さ18～40cmを測る。基底面の標高は6.45～6.65ｍである。柱間距離は、梁間2.25ｍ、桁行0.80～1.85ｍを測り、桁行北部の柱間距離が狭くなっている。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器、瓦質土器が若干出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、ＳＢ31とに認められるが、ピットの切り合いがなく、新旧関係は不明である。

ＳＢ33

ＳＢ33は、調査区の南部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×２間の東西棟で、梁間（南北）2.25ｍ、桁行（東西）4.10ｍを測る。棟方向はＮ－76°－Ｗである。柱穴の平面形は、大型の円形及び隅丸方形を呈する。規模は円形のものが直径50cm、隅丸方形のものが一辺35～65cm、検出面からの深さ８～42cmを測る。基底面の標高は6.41～6.67ｍである。北西隅の柱穴が浅い。柱間距離は、梁間2.25ｍ、桁行2.00～2.10ｍを測る。北東隅の柱穴が欠けている。埋土は黄茶色粘質土である。

遺物は、Ｐ１から須恵質土器椀（110）、Ｐ２から須恵器杯（111）が出土している。その他土師器片が出土しているが、細片で図示できなかった。重複関係は、ＳＫ112に認められるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ34

ＳＢ34は、調査区の南東端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

建物は、東端が調査区外に延びるため全体の規模は不明であるが、２×２間以上の東西棟と考えられる。棟方向はＮ－75°－Ｗである。柱穴の形態は方形を呈するものが多い。規模は、一辺0.50～1.00ｍ、検出面からの深さ26～39㎝を測る。基底面の標高は6.51～6.63ｍである。南西隅の柱穴埋土上層に20㎝大の河原石が投棄されている。柱間距離は、南北が2.00～2.20ｍ、東西が2.15～2.30ｍを測る。埋土は黄茶色粘質土である。

遺物は、Ｐ１より須恵器杯（113)、土師器杯（114)、Ｐ２より須恵器蓋（112）が出土した。その他土師器片が多数出土したが、細片で実測不可能である。重複関係は、ＳＤ35とに見られるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ35

ＳＢ35は、調査区の南東端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×３間の南北棟で、梁間（東西）5.55ｍ、桁行（南北）6.70ｍを測る。棟方向はＮ－13°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径25～60㎝、検出面からの深さ16～45㎝を測る。基底面の標高は6.48～6.65ｍである。柱間距離は、梁間2.40～3.15ｍ、桁行1.85～2.70ｍを測る。東辺列の柱穴１個が欠けている。埋土は灰褐色粘質土である。

遺物は、Ｐ１より土師質土器小皿（115)・杯（116)、土師器椀（117)、Ｐ２より土師質土器杯（118)、Ｐ３より土錘（119）が出土している。117は、混入と考えられる。重複関係は、ＳＢ34、ＳＫ118とに認められるが、ピットの切り合いがなく、新旧関係は不明である。

ＳＢ36

ＳＢ36は、調査区の南端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×３間の南北棟で、梁間（東西）4.40ｍ、桁行（南北）6.50ｍを測る。棟方向はＮ－17°－Ｅである。柱穴の平面形は、大型の楕円形及び方形を呈する。規模は、方形のもので一辺0.70～1.00ｍ、検出面からの深さ21～70㎝を測る。基底面の標高は6.23～6.79ｍである。柱間距離は、梁間3.95～4.40ｍ、桁行1.80～2.60ｍを測る。梁間は、柱間距離が広く１個柱穴が欠けているとみられ、規模も２×３間の可能性を有する。東辺の柱穴が１個欠けている。埋土は黄茶色粘質土である。

遺物は、Ｐ１から須恵器壺（120)、土師器杯（121、122)、甕（123～125)、白磁碗（126）が出土している。126は混入と考えられる。重複関係は、ＳＫ116・117に切られており、ＳＤ22との新旧関係は不明である。

ＳＢ37

ＳＢ37は、調査区の南西部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×３間の南北棟で、梁間（東西）2.55ｍ、桁行（南北）5.90ｍを測る。棟方向はＮ－10°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径20～50㎝、検出面からの深さ17～42㎝を測る。基底面の標高は6.43～6.80ｍである。柱間距離は、梁間2.30～2.55ｍ、桁行1.80～2.15ｍを測る。北妻がやや広い。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器片が出土したが、細片で図示できなかった。重複関係は、ＳＤ22に認められるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ38

ＳＢ38は、調査区の南端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×３間の南北棟で、梁間（東西）3.2ｍ、桁行（南北）5.00ｍを測る。棟方向はＮ－15°－Ｅである。柱穴の平面形は、大型の円形及び方形を呈する。規模は、円形のものが直径50～60㎝、方形のものが一辺40～60㎝、検出面からの深さ16～44㎝を測る。基底面の標高は6.41～6.80ｍである。柱間距離は、梁間1.50～1.70ｍ、桁行1.55～1.75ｍを測る。西辺の柱穴が欠けている。遺物は、土師器が若干出土しているが、細片で実測不可能である。

ＳＢ39

ＳＢ39は、調査区の南東部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×１間の正方形を呈し、東西1.80～1.85ｍ、南北1.85ｍを測る。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径25～36㎝、検出面からの深さ７～21㎝を測る。基底面の標高は6.65～6.78ｍである。埋土は灰色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土しているが、細片で実測不可能である。

ＳＢ40

ＳＢ40は、調査区の北西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、３×４間の南北棟で、梁間（東西）5.75ｍ、桁行（南北）6.25ｍを測り、総柱と考えられる。棟方向はＮ－23°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径20～42㎝、検出面からの深さ７～40㎝を測る。基底面の標高は6.62～6.89ｍである。柱間距離は、梁間1.80～2.00ｍ、桁行1.30～1.80ｍを測り、北妻及び西辺の柱穴が欠けている。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、北東隅のＰ１より瓦質土器鍋（93）が出土した。その他土師質土器片が若干出土しているが、実測不可能である。重複関係は、ＳＢ41とに認められるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ41

ＳＢ41は、調査区の北西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×３間の東西棟で、梁間（南北）1.80ｍ、桁行（東西）5.80ｍを測る。棟方向はＮ－70°－Ｗである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径15～32㎝、検出面からの深さ７～32㎝を測る。基底面の標高は6.70～6.88ｍである。柱間距離は、梁間1.70～1.80ｍ、桁行1.55～2.20ｍを測る。北辺の柱穴が１個欠けている。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＢ40とに認められるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ42

ＳＢ42は、調査区の北西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×２間の南北棟で、梁間（東西）3.00ｍ、桁行（南北）4.90ｍを測る。棟方向はＮ－20°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径22～45㎝、検出面からの深さ９～40㎝を測る。基底面の標高は6.59～6.89ｍである。柱間距離は、梁間1.30～1.70ｍ、桁行2.10～2.75ｍを測る。南妻の中間柱が欠けている。埋土は灰褐色粘質土である。

遺物は、瓦質土器片が若干出土しているが、細片のため実測不可能である。重複関係は認められないが、東側に隣接してＳＢ43、西側にＳＡ３が存在する。これらＳＢ43、ＳＡ３は、棟方向も一致しており同時期に隣接して存在したと考えられる。

ＳＢ43

ＳＢ43は、調査区の北西端に位置し、ＳＢ42の東側に隣接する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×３間の南北棟で、梁間（東西）1.85ｍ、桁行（南北）5.15ｍを測る。棟方向はＮ－18°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径21～30㎝、検出面からの深さ10～22㎝を測る。基底面の標高は6.73～6.84ｍである。柱間距離は、梁間1.80～1.85ｍ、桁行1.40～1.80ｍを測る。南妻の柱間距離が広くなっている。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器、瓦質土器が若干出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は認められないが、西側に隣接するＳＢ42、東側に隣接するＳＡ４との関連性も考えられる。

ＳＢ44

ＳＢ44は、調査区の北西端に位置し、ＳＡ４の東側に隣接する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×１間の南北棟で、梁間（東西）3.60ｍ、桁行（南北）3.90ｍを測る。棟方向はＮ－17°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径25～32㎝、検出面からの深さ10～15㎝を測る。基底面の標高は6.81～6.86ｍである。柱間距離は、梁間3.45～3.60ｍ、桁

行3.90ｍを測る。なお、桁行の柱間距離が広く、中間柱が欠損している可能性もあり、それによれば１×２間の規模とも考慮される。埋土は灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＢ45

ＳＢ45は、調査区の中央部西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、３×４間で南北棟の総柱である。全長は、梁間（東西）5.70ｍ、桁行（南北）6.20ｍを測る。棟方向はＮ－20°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径20～45㎝、検出面からの深さ10～40㎝を測る。基底面の標高は6.68～6.85ｍである。柱間距離は、梁間1.30～2.55ｍ、桁行1.40～1.80ｍを測る。南妻の柱穴２個を確認できなかった。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器片が若干出土しているが、細片で実測不可能である。

土坑

ＳＫ１

ＳＫ１は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整楕円形を呈する。規模は、長径1.10ｍ、短径0.75ｍ、深さ0.22ｍを測る。長軸方向はＮ－37°－Ｗである。壁は、垂直に立ち上がり、底面は平坦である。底面の標高は6.74ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。出土遺物は、埋土中より瓦質土器片が出土しているが、細片で実測不可能である。また、若干の河原石が出土している。重複関係は、北部をピットに切られている。

ＳＫ２

ＳＫ２は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径2.65ｍ、短径0.95ｍ、深さ0.39ｍを測る。長軸方向はＮ－46°－Ｗである。壁は、急傾斜で立ち上がるが、北側、東側に段差をもつ。西側底面は平坦である。浅い平坦面を有する部分は、別の土坑の可能性があるが、埋土が類似しており、同一土坑として取り扱った。底面の標高は、最深部で6.60ｍを測る。埋土は１層で灰褐色粘質土である。遺物は、石斧（277）が出土している。その他瓦質土器も出土しており、277は混入と考えられる。

ＳＫ３

ＳＫ３は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整楕円形を呈する。規模は、長径1.46ｍ、短径0.97ｍ、深さ７㎝を測る。長軸方向はＮ－３°－Ｅである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、断面形は逆台形状である。底面は、

平坦で標高6.91ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。底面直上に15～20㎝大の河原石を配しているが、上部を削平されており、非常に浅い土坑である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＢ12を切っている。

ＳＫ４

ＳＫ４は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径1.02ｍ、短径0.78ｍ、深さ0.35ｍを測る。長軸方向はＮ－15°－Ｅである。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦で標高6.78ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。

遺物は、瓦質土器鍋が若干出土しているが、細片で実測不可能である。本遺構は、ＳＢ12と長軸方向が同一で、位置からみてＳＢ12に伴うものと考えることができる。しかし、性格は不明である。

ＳＫ５

ＳＫ５は、調査区北部の中央の位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径2.83ｍ、短径1.30ｍ、深さ0.25ｍを測る。長軸方向はＮ－８°－Ｅである。壁は、垂直に立ち上がり、底面は水平である。底面の標高は6.75ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。埋土を除去すると、底面直上より10～20㎝大の河原石を多量に検出した。遺物は、埋土中から土師質土器片が少量出土したが、細片のため実測不可能である。

ＳＫ６

ＳＫ６は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径0.93ｍ、短径0.80ｍ、深さ0.17ｍを測る。長軸方向はＮ－65°－Ｗである。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦で標高6.82ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。埋土中に10～15㎝大の河原石を少量検出した。本遺構は、ＳＢ13内に位置し、方向もほぼ同じであり、ＳＢ13に伴う可能性がある。出土遺物は皆無である。

ＳＫ７

ＳＫ７は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径0.60ｍ、深さ0.13ｍを測る。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦で標高6.84ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ８

ＳＫ８は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径1.23ｍ、短径0.82ｍ、深さ0.22ｍを測る。長軸方向はＮ－66°－Ｗである。壁は、急傾斜で立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦で標高6.73ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。

遺物は、土師質土器、瓦質土器鍋（127）が出土している。本遺構は、ＳＢ14内に位置しており、梁間の方向と長軸方向が一致していることなどから考えると、ＳＢ14に伴っている可能性がある。

ＳＫ９

ＳＫ９は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出された。

平面形は不整方形を呈する。規模は、長径0.80ｍ、短径0.70ｍ、深さ９㎝で、非常に浅い土坑である。長軸方向はＮ－80°－Ｗである。壁は、緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。底面の標高は6.85ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。埋土中に若干の河原石を検出した。遺物は、伊万里系鉢（128）が出土している。

ＳＫ10

ＳＫ10は、調査区北部の中央に位置している。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は大型の方形を呈する。規模は、長径3.53ｍ、短径2.00ｍ、深さ0.38ｍを測る。長軸方向はＮ－23°－Ｅである。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。底面は、平坦で標高は6.60ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、魚住焼捏鉢（129）が出土している。

ＳＫ11

ＳＫ11は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形はほぼ円形を呈する。規模は、直径1.10ｍ、深さ0.50ｍを測る。壁は、垂直に立ち上がり、断面形はＵ字形を呈する。底面は、平坦で標高6.41ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。ＳＫ11～14までは、南北方向に一列に並んでおり、その中で本土坑は、北端に位置し規模も大きいものである。出土遺物は皆無である。

ＳＫ12

ＳＫ12は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径0.75ｍ、深さ0.50ｍを測る。壁は、垂直に立ち上がり、断面形箱形を呈する。底面は、南側が一段高い平坦部を有し、北側は水平な面をなす。底面の

標高は、北側で6.46m、南側で6.52mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SK13

SK13は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径0.70m、深さ0.50mを測り、SK12と同規模を有す。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。底面は、平坦で標高6.46mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SK14

SK14は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径0.70m、深さ0.50mを測り、SK12・13と同規模を有す。壁は、垂直に立ち上がり、断面断はU字形を呈する。底面は、平坦で標高は6.47mである。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。

遺物は、土師質土器杯（130）が出土している。石器は砥石（270）である。SK12～14は、同規模を呈し、等間隔に並んでおり、同一目的で掘削され同性格を有するものと考えられる。また、出土遺物から見ると同一時期の可能性もある。

SK15

SK15は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径1.20m、短径0.93m、深さ0.23mを測る。長軸方向はN－19°－Eである。壁は、急傾斜で立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦で標高6.83mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、須恵器壺（131）が出土している。

SK16

SK16は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整方形を呈する。規模は、長径3.28m、短径1.36m、深さ0.42mを測る。長軸方向はN－80°－Wである。壁は、東側は急傾斜で、西側は緩やかに立ち上がる。底面は、東側が緩やかに落ちこんでいる。標高は、東側で6.72m、西側は6.85mを測る。底面直上より若干の河原石が出土している。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器鍋が1点出土しているが、細片で実測不可能である。

ＳＫ17

ＳＫ17は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径1.40ｍ、深さ0.63ｍを測る。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。底面は、水平で標高は6.35ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器杯や瓦質土器が若干出土しているが、細片のため実測不可能である。

ＳＫ18

ＳＫ18は、調査区の北端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。本遺構の北及び西の部分は、調査区外で完掘していない。

平面形は、円形を呈すると考えるが、全体の形状は不明である。規模は、検出した範囲で長径1.25ｍ、短径0.65ｍ、深さ0.51ｍを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.49ｍを測る。埋土は、１層で灰茶色粘質土である。遺物は、近世陶磁器と土師質土器片が出土しているが、実測不可能である。

ＳＫ19

ＳＫ19は、調整区北端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整円形を呈する。規模は、直径0.90ｍ、深さ0.30ｍを測る。壁は、垂直に立ち上がり、底面は、平坦で標高6.56ｍを測る。埋土は、１層で灰茶色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土した他は、外面に叩目の残る弥生土器が出土している。弥生時代の土器は、混入と考えられる。細片で実測不可能である。

ＳＫ20

ＳＫ20は、調査区の北端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出したが、本遺構の北端は、調査区外で完掘していない。

平面形は不整方形を呈する。規模は、検出した範囲で長径1.08ｍ、短径0.90ｍ、深さ0.59ｍを測る。壁は、北側を除いて急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.56ｍを測る。埋土は１層で灰茶色粘質土である。

遺物は、埋土を若干掘り下げると集石を検出し、その集石に混入して砥石（272、284）や石臼の破片を再利用した砂岩質の石製品が出土した。その他、土師質土器、備前焼が出土しているが、実側不可能である。

ＳＫ21

ＳＫ21は、調査区の北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径1.10ｍ、深さ0.24ｍを測る。壁は、傾斜して立ち上が

り、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦で標高6.63ｍを測る。埋土は、１層で灰茶色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、南北に縦走するＳＤ４を切っている。

ＳＫ22

ＳＫ22は、調査区の北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径1.00ｍ、短径0.80ｍ、深さ0.16ｍを測る。長軸方向はＮ－２°－Ｅである。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦で標高6.69ｍを測る。埋土は、１層で灰茶色粘質土である。遺物は、弥生土器の小片と炭化物が若干出土しているが、実測不可能である。本遺構は、弥生時代のものと考えられる。

ＳＫ23

ＳＫ23は、調査区の北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整楕円形を呈する。規模は、長径0.85ｍ、短径0.75ｍ、深さ0.15ｍを測る。長軸方向はＮ－20°－Ｗである。壁は、急傾斜で立ち上がり、底面は、平坦で標高は6.69ｍを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は、１層で褐灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ24

ＳＫ24は、調査区の北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は、楕円形を呈する。規模は、長径1.13ｍ、短径0.90ｍ、深さ0.22ｍを測る。長軸方向はＮ－69°－Ｅである。壁は、垂直に立ち上がり、底面は平坦である。標高は6.68ｍを測る。埋土は、１層で灰茶色粘質土である。出土遺物は皆無である。本遺構は、ＳＢ５の北西部に位置しており、ＳＢ５に伴うものと考えられる。

ＳＫ25

ＳＫ25は、調査区の北端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。北側は、調査区外で完掘していない。

平面形は、検出した範囲内で推定すると円形を呈する。規模は、直径1.52ｍ、深さ0.77ｍを測る。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦で標高6.24ｍを測る。埋土は、１層で灰白色粘質土である。遺物は、須恵器片や唐津焼が出土している。須恵器片は混入とみられる。唐津焼から考えると本遺構は、近世初頭の時期と考えられる。重複関係は、南北に縦走するＳＤ５を切っている。

ＳＫ26

ＳＫ26は、調査区の北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径1.80m、短径0.85m、深さ7cmを測る。非常に浅く明瞭でない。長軸方向はN－80°－Wである。壁は浅いが、垂直に立ち上がる。底面は、平坦で標高6.72mを測る。埋土は、1層で灰色シルトである。出土遺物は皆無である。重複関係は、南北に縦走するＳＤ５を切っている。

ＳＫ27

ＳＫ27は、調査区の北東部に位置し、ＳＫ26の東側に隣接する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整の円形を呈する。規模は、直径2.80m、深さ0.22mを測る。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦で標高6.57mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、西側に位置するＳＫ28を切っている。

ＳＫ28

ＳＫ28は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は、ＳＫ27に切られているため全形は不明だが、不整円形を呈するものと思われる。規模は、残存している部分で、長径1.30m、短径0.55m、深さ0.17mを測る。壁は、急傾斜で立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦で標高6.62mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ29

ＳＫ29は、調査区の北東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。西側をＳＫ28に切られているため全体の規模は不明だが、残存している部分で、長径1.15m、短径1.00m、深さ0.11mを測る。上部を削平されており非常に浅い。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦で標高6.66mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。

出土遺物は皆無である。重複関係は、東西に位置するＳＫ28・30に切られているが、ＳＤ６を切っている。ＳＫ27～30までの土坑で新旧関係を確認したが、その中でＳＫ29は一番古い土坑である。

ＳＫ30

ＳＫ30は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径0.70m、深さ0.27mを測る。壁は、急傾斜で立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、水平で標高6.52mである。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。埋土中には20～30cm大の河原石を若干集中して検出した。遺物は、砥石（274）、

石臼（286）が出土している。その他、白磁、近世陶磁器片が出土しているが、実測不可能である。

ＳＫ31

ＳＫ31は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径1.10ｍ、短径0.75ｍ、深さ0.13ｍを測る。長軸方向はＮ－54°－Ｗである。壁は、急傾斜で立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦で標高6.70ｍである。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ32

ＳＫ32は、調査区の北東端に位置し、ＳＫ31の東側に隣接する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整方形を呈する。規模は、長径1.15ｍ、短径0.90ｍ、深さ0.15ｍを測る。長軸方向はＮ－80°－Ｗである。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高は6.71ｍである。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、南側に位置するＳＫ34に切られており、本遺構の中央部は、直径30㎝のピットを切っている。

ＳＫ33

ＳＫ33は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整方形を呈する。規模は、長径1.27ｍ、短径1.03ｍ、深さ８㎝を測る。長軸方向はＮ－89°－Ｗである。壁は、急傾斜で立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦で標高6.73ｍである。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ34

ＳＫ34は、調査区の北東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径1.00ｍ、深さ0.23ｍを測る。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦で標高6.58ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。埋土中に20～30㎝大の集石を検出した。

遺物は、集石中に石臼（287）と、埋土中より須恵器、弥生土器片、近世陶磁器類が出土した。須恵器、弥生土器片は混入と考えられ、本遺構は、陶磁器類の出土より近世の時期と考えられる。

ＳＫ35

ＳＫ35は、調査区の北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径3.52ｍ、短径3.23ｍ、深さ0.24ｍを測る。壁は緩や

かに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.73ｍを測る。埋土は、１層で灰白色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ36

ＳＫ36は、調査区の北部に位置し、ＳＫ35の東側に隣接する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は、東西に細長い不整形を呈する。規模は、長径4.20ｍ、短径0.70ｍ、深さ0.25ｍを測る。長軸方向はＮ－81°－Ｗである。壁は垂直に立ち上がる。底面は、平坦で標高6.61ｍを測る。埋土は、１層で灰白色粘質土である。本遺構の西側に集石を検出したが一部のみで、底面直上からである。遺物は、近世陶磁器が出土した。伊万里系猪口（132）である。

ＳＫ37

ＳＫ37は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径1.10ｍ、短径0.82ｍ、深さ５㎝を測る。長軸方向は、Ｎ－85°－Ｗである。上部は削平されており非常に浅い。壁は、垂直に立ち上がり、底面は、平坦で標高6.82ｍを測る。埋土は、１層で灰白色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ38

ＳＫ38は、調査区の北部中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は大型の不定形を呈する。規模は、長径5.70ｍ、短径2.50ｍ、深さ0.40ｍを測る。長軸方向はＮ－24°－Ｗである。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.60ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、南側に隣接するＳＫ39、東側に位置するＳＤ10に切られている。

ＳＫ39

ＳＫ39は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径1.96ｍ、短径1.57ｍ、深さ0.47ｍを測る。壁は傾斜して立ち上がる。底面は、水平で標高6.30ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。底面直上より、20～30㎝大の河原石が比較的集中して検出された。遺物は、集石に混入して砥石（268、280）と、その他近世陶磁器類が出土した。伊万里系猪口（133）・椀（134）である。重複関係は、北側に位置するＳＫ38を切っている。本遺構は、出土遺物から近世の時期である。

ＳＫ40

ＳＫ40は、調査区の北部中央に位置し、ＳＫ39の南側に隣接している。第Ⅰ層を除去した段

階で検出した。

平面形は不整の円形を呈する。規模は、直径1.60m、深さ0.45mを測る。壁は傾斜して立ち上がる。底面は舟底状を呈し、中央部は緩やかに落ちこむ。底面の標高は中央部で6.37m、両端で6.46mを測る。埋土は、1層で灰白色粘質土である。遺物は、土錘（135）が出土している。その他土師質土器、白磁が存在するが、実測不可能である。

SK41

SK41は、調査区の北部中央で、SK40の東側1.00mの所に位置している。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径1.10m、短径1.00m、深さ0.38mを測る。長軸方向はN－1°－Eで、ほぼ磁北を示す。壁は、北及び西側が垂直に立ち上がり、その他は緩やかに立ち上がる。底面は一部平坦であるが、北側に緩やかに立ち上がる。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。底面直上から人頭大の礫が密集して検出された。遺物は、砥石（271、279）が出土している。

SK42

SK42は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径2.60m、短径1.70m、深さ0.30mを測る。長軸方向はN－82°－Wである。壁は、南側が垂直に立ち上がり北側は緩やかである。底面は、やや凹凸がみられるが平坦である。埋土は、1層で茶灰色粘質土である。東西に並んだ人頭大の集石を検出したが、この集石はSD10に伴うものである。遺物は、唐津焼皿（136）、砥石（278）が出土している。重複関係は、東西に走るSD10に切られている。また、南北に走るSD6を切っている。

SK43

SK43は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は、南北に細長い方形を呈する。規模は、長径2.20m、短径0.83m、深さ0.25mを測る。長軸方向はN－6°－Eである。壁は、急傾斜で立ち上がり、断面形はU字形を呈する。底面は、平坦で標高6.61mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、弥生土器の細片と土師質土器が出土したが、実測不可能である。弥生土器は、混入と考えられる。重複関係は、東西に走るSD10を切っている。

SK44

SK44は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径1.42m、短径1.02m、深さ0.38mを測る。長軸方向はN－4°－Eである。壁は、比較的緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦で標高6.47mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、東西に走るSD6を切っている。

SK45

SK45は、調査区の北東部に位置し、SK44の南側に隣接する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径1.25m、深さ0.38mを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、ほぼ平坦で、標高6.47mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器や近世陶磁器が出土した。伊万里系皿（137）である。

SK46

SK46は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径1.30m、短径0.87m、深さ0.26mを測る。長軸方向はN－35°－Wである。壁は垂直に立ち上がる。底面は、東側が一段高い平坦部を有している。底面の標高は、西側で6.53m、東側で6.68mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、弥生土器の細片と近世陶磁器が出土しているが、近世陶磁器は混入と考えられる。本遺構は、弥生時代のものとみられる。重複関係は、南北に走る弥生時代のSD6に切られている。

SK47

SK47は、調査区の北東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径2.30m、短径1.47m、深さ0.10mを測り、非常に浅い土坑である。長軸方向はN－85°－Wである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、東側に向け緩やかに高くなる。底面の標高は、西側で6.74m、東側で6.70mを測る。埋土は、1層で灰茶色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SK48

SK48は、調査区の北東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径1.30m、深さ0.55mを測り、深く掘削されている。壁は垂直に立ち上がる。底面は、平坦で標高6.15mを測る。埋土は、1層で灰色シルトである。底面直上に人頭大の礫が密集して投棄されている。出土遺物は皆無である。埋土の状態から近世の遺構と考えられる。

ＳＫ49

ＳＫ49は、調査区の北東端に位置し、ＳＫ48の南に隣接している。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径1.40ｍ、深さ0.60ｍを測る。壁は、垂直に近い傾斜で立ち上がり、断面形はＵ字形を呈する。底面は、平坦で標高6.15ｍを測る。ＳＫ48と平面形、掘り方も類似しており、集石の有無のみに差がある。埋土は、１層で灰色シルトである。出土遺物は皆無である。埋土の状態より近世の遺構と考えられる。

ＳＫ50

ＳＫ50は、調査区の北部中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径2.00ｍ、短径1.85ｍ、深さ0.28ｍを測る。長軸方向はＮ－10°－Ｅである。壁は垂直に立ち上がる。底面は、凹凸があり、南側がやや深い。標高は東側で6.58ｍ、西側で6.70ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。底面直上から20～40㎝大の河原石が、北側に集中して出土した。遺物は、土師質土器釜（138）が出土している。重複関係は、南北に縦走するＳＤ４を切っている。

ＳＫ51

ＳＫ51は、調査区中央の北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径2.20ｍ、短径1.68ｍ、深さ0.39ｍを測る。長軸方向はＮ－９°－Ｅである。壁は、南側が垂直に、北側が緩やかに立ち上がる。底面は、北側が一段高くなっている。底面の標高は、南側が6.40ｍ、北側が6.66ｍを測る。埋土は、１層で灰茶色粘質土である。南側の埋土上層において、人頭大の礫が１個投棄された状態で検出した。出土遺物は皆無である。

ＳＫ52

ＳＫ52は、調査区の中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径2.27ｍ、短径1.98ｍ、深さ0.25ｍを測る。長軸方向はＮ－12°－Ｅである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は西側、南側が一段高くなっている。底面の標高は、南側で6.60ｍ、北側で6.58ｍを測る。埋土は、１層で灰茶色粘質土である。本土坑の中央部では、ＳＫ50と同様人頭大の河原石が密集する。遺物は、土師質土器釜（139）と、釘（290）が出土している。重複関係は、南側に位置するＳＤ12を切っている。

ＳＫ53

ＳＫ53は、調査区の北東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径3.30m、短径1.45m、深さ0.25mを測る。長軸方向はN－70°－Wである。壁は、東側が急傾斜で立ち上がり、西側は浅く緩やかに立ち上がる。底面は、東側が深く、西側に向け緩やかに高くなる。底面の標高は東側で6.65m、西側で6.81mを測る。埋土は、1層で灰白色粘質土である。本土坑の南東隅には、数個の人頭大の河原石を検出した。遺物は、多量に出土しており土師器、須恵器が主である。須恵器杯（140、141）、壺（142）である。本遺構は、出土遺物からみて、古代に属するものと考えられる。

SK54

SK54は、調査区中央部の北寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径1.00m、短径0.67m、深さ0.40mを測る。上部は、削平されており浅い。長軸方向はN－10°－Eである。壁は、垂直に立ち上がり、底面は平坦である。標高は6.82mを測る。埋土は、1層で灰茶色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SK55

SK55は、調査区中央の北西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径0.80m、短径0.63m、深さ0.13mを測る。長軸方向はN－36°－Wである。壁は傾斜して立ち上がる。底面は、平坦で標高6.74mを測る。埋土は、1層で灰茶色粘質土である。遺物は、土師質土器片が数点出土しているが、細片で実測不可能である。

SK56

SK56は、調査区中央の北西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径0.56m、深さ9cmを測り、上部は削平されており非常に浅い。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦で標高6.78mを測る。埋土は、1層で灰茶色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SK57

SK57は、調査区中央の北西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、一辺0.62m、深さ6cmを測る。壁は、急傾斜で立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦で標高6.91mを測る。埋土は、1層で灰茶色粘質土である。遺物は、土師質土器、瓦質土器、備前焼が出土しているが、細片で実測不可能である。

SK58

SK58は、調査区中央部の北寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は、南北に長い方形を呈する。規模は、長径1.63m、短径0.80m、深さ0.18mを測る。長軸方向はN－13°－Eである。壁は、垂直に近く立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦で標高6.71mを測る。埋土は、1層で灰茶色粘質土である。出土遺物は、須恵器蓋（143）、瓦質土器鍋（144）等である。本遺構は、付近に建物址は確認できなかったが、SD13に囲まれた屋敷内の遺構と考えられる。

SK59

SK59は、調査区の中央部北寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径1.69m、短径1.06m、深さ0.25mを測る。長軸方向はN－70°－Wである。SB18と同方向をさしている。壁は垂直に立ち上がる。底面は、平坦で標高6.60mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。東隅の底面直上に、10～20cmの大の礫が若干出土した。出土遺物は、須恵器杯（145）、白磁等が出土している。

SK60

SK60は、調査区の中央部やや北寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は、不整の楕円形を呈する。規模は、長径1.60m、短径1.40m、深さ6cmを測り、非常に浅い。長軸方向はN－70°－Wである。壁は垂直に立ち上がる。底面は、平坦で標高6.80mを測る。埋土は、1層で灰白色粘質土である。遺物は、須恵器、土師器の他、弥生土器も少量出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、若干のピットに切られている。

SK61

SK61は、調査区の中央やや北寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径0.67m、短径0.57m、深さ0.16mを測る。長軸方向はN－5°－Eである。壁は、急傾斜で立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦で標高6.71mを測る。埋土は、1層で灰茶色粘質土である。出土遺物は皆無である。本遺構は、SB16内の南側に位置しており、SB16と関連のある土坑とも考えられる。

SK62

SK62は、調査区の中央部東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径2.78m、短径2.19m、深さ0.21mを測る。壁は垂直に立ち上がる。底面は、中央部が深く落ちこみ、東側が一段高い平坦面を有す。標高は中央部で6.64m、東端で6.77mを測る。埋土は、1層で灰茶色粘質土である。遺物は、須恵器、土師質土器、弥生土器が混在している。細片で実測不可能である。重複関係は、南側に位置するSD16を切っている。

ＳＫ63

ＳＫ63は、調査区中央部の西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は細長い不整形を呈する。規模は、長径1.15ｍ、短径0.23ｍ、深さ0.15ｍを測る。長軸方向はＮ－37°－Ｗである。壁は垂直に近く立ち上がる。底面は、平坦で標高6.86ｍを測る。埋土は、１層で灰茶色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ64

ＳＫ64は、調査区中央部の西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径1.08ｍ、短径0.75ｍ、深さ0.18ｍを測る。長軸方向はＮ－82°－Ｗである。壁は垂直に近く立ち上がる。底面は、東側が一段高く平坦面を有す。標高は、西側で6.80ｍ、東側で6.85ｍを測る。埋土は、１層で灰茶色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ65

ＳＫ65は、調査区の中央部西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径2.65ｍ、短径1.75ｍ、深さ0.40ｍを測る。長軸方向はほぼ磁北をさしＮ－１°－Ｅである。壁は、西側が垂直に立ち上がり、その他は緩やかに立ち上がる。底面は舟底状を呈し、最深部の標高は6.53ｍである。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、須恵器、土師質土器、瓦質土器、砥石等が出土している。須恵器は、混入と考えられるが、実測可能な遺物は、砥石（283）のみである。

ＳＫ66

ＳＫ66は、調査区の中央部やや北寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径1.00ｍ、短径0.85ｍ、深さ0.10ｍを測る。上部は削平されており非常に浅く、壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.80ｍを測る。埋土は、１層で灰色砂質土である。遺物は、土師器皿（146）、砥石（282）が出土している。重複関係は、ＳＢ18を切っている。146は混入と考えられる。

ＳＫ67

ＳＫ67は、調査区中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径1.43ｍ、短径1.15ｍ、深さ９㎝を測る。長軸方向はＮ－12°－Ｅである。上部は削平されており、非常に浅い土坑である。壁は垂直に立ち上がる。底面は、平坦で標高6.98ｍを測る。埋土は、特殊な色調を呈しており、固く締った褐色マンガン土である。遺物は、瓦質土器、土師質土器が出土しているが、細片で実測不可能である。重

複関係は、南西隅でピットを切っている。

ＳＫ68

ＳＫ68は、調査区のほぼ中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は、東西に細長い帯状を呈する。規模は、長径1.35ｍ、短径0.28ｍ、深さ0.10ｍを測り、非常に浅い土坑である。壁は、西側が急傾斜で、東側は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.85ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ピットに切られている。

ＳＫ69

ＳＫ69は、調査区中央部の西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は、細長い溝状を呈する。規模は、長径2.08ｍ、短径0.43ｍ、深さ0.14ｍを測る。長軸方向はＮ－18°－Ｗである。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.79ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、瓦質土器鍋、青磁、備前焼が出土しているが、実測不可能である。

ＳＫ70

ＳＫ70は、調査区の中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は、ＳＫ71に切られているため、全形は不明だが方形を呈するものと考えられる。規模は、残存している部分で長径1.90ｍ、短径1.40ｍ、深さ0.35ｍを測る。壁は、比較的緩やかな傾斜で立ち上がる。底面は平坦で標高6.80ｍを測る。埋土は、１層で灰茶色粘質土である。遺物は、土師質土器、青磁、白磁が若干出土している。実測可能な遺物は、青磁椀（147）のみである。重複関係は、東側のＳＫ71、ＳＢ23に切られている。

ＳＫ71

ＳＫ71は、調査区の中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は、南北に細長い舟形を呈する。規模は、長径4.35ｍ、短径1.50ｍ、深さ0.54ｍを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.45ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器鍋（148）・鉢（149）、瓦質土器鍋（150）が出土している。重複関係は、西側に位置するＳＫ70を切っている。

ＳＫ72

ＳＫ72は、調査区中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径0.90ｍ、深さ９㎝で、上部は削平されており、非常に

浅い。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.87ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＢ23の柱穴に切られている。

ＳＫ73

ＳＫ73は、調査区の中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は細長い帯状を呈する。規模は、長径1.75ｍ、短径0.38ｍ、深さ７㎝を測る。長軸方向はＮ－74°－Ｗである。壁は浅いが垂直に立ち上がる。底面は、平坦で標高6.85ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＢ23とに認められるが、新旧関係は不明である。

ＳＫ75

ＳＫ75は、調査区の中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は、不整形で数基の土坑が重複しているとも考えられるが、埋土がすべて同一であり、各土坑の平面形を確認することができなかった。北側は、円形及び方形を呈しており、中央部では、長さ2.30ｍ、幅0.70ｍの溝状で西方に延びている。壁は垂直に立ち上がる。底面は、北側から緩やかに落ちこみ、南側が最も深い。標高は、北端で6.47ｍ、南端で6.40ｍを測る。埋土は、１層で茶灰色シルトである。遺物は、土師質土器皿（151）、瓦質土器鍋（152）が出土している。重複関係は、西側に位置するＳＫ74、南部に位置するＳＫ91・92を切っている。

ＳＫ76

ＳＫ76は、調査区中央部やや東寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径1.63ｍ、短径0.98ｍ、深さ0.15ｍを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.80ｍを測る。埋土は、１層で灰色砂である。出土遺物は皆無である。重複関係は、南北に走るＳＤ６を切っている。本土坑は、埋土が砂質土で近世の時期と考えられる。

ＳＫ77

ＳＫ77は、調査区中央部やや東寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整楕円形を呈する。規模は、長径1.02ｍ、短径0.57ｍ、深さ８㎝を測る。長軸方向はＮ－31°－Ｅである。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.78ｍを測る。埋土は、１層で灰色粘質土である。遺物は、埋土中より瓦質土器鍋（153）が出土している。

ＳＫ78

ＳＫ78は、調査区中央より東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径1.87m、短径1.00m、深さ0.31mを測る。長軸方向はN－41°－Eである。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.70mを測る。埋土は、1層で灰色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、南北に走るSD6を切っており、遺構の中央部においてピットに切られている。

SK79

SK79は、調査区中央部東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。方形の土坑が切り合っている可能性が強いが、埋土が1層で明確にできなかった。規模は、長径2.00m、短径1.70m、深さ0.20mを測る。壁は垂直に立ち上がる。底面は、北側が一段高く、南側は緩やかに落ちこんでいる。底面の標高は、北側で6.93m、南側で6.64mを測る。埋土は、1層で灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、SD16、SK80・81を切っている。

SK80

SK80は、調査区中央部の東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は、SK79に切られているため全形は不明だが、方形を呈するものと考えられる。規模は、残存している部分で、長径1.20m、短径0.80m、深さ0.10mを測る。SK79～81の中で最も浅い土坑である。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.85mを測る。埋土は、1層で茶灰色シルトである。出土遺物は皆無である。重複関係は、SK79に切られているが、SK81との新旧関係は不明である。

SK81

SK81は、調査区中央部の東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は、SK79に切られているため全形は不明だが、方形を呈するものと考えられる。規模は、残存している部分で、長径1.45m、短径1.05m、深さ0.20mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底部は、平坦で標高6.76mを測る。埋土は、1層で灰茶色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、SK79に切られているが、SK80との新旧関係は不明である。

SK82

SK82は、調査区中央部南東寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径1.40m、短径1.15m、深さ0.18mを測る。壁は、比較的急傾斜で立ち上がり、底面は、北側に緩やかに傾斜している。最深部の標高は6.73mを測る。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ83

ＳＫ83は、調査区中央部の西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

規模は、長径3.95ｍ、短径2.75ｍ、深さ0.75ｍを測る。長軸方向はＮ－23°－Ｅである。壁は緩やかに立ち上がり、北壁と西壁に段部を有す。底面は、ほぼ平坦で標高6.13ｍを測る。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、須恵器杯蓋（155)、その他土師質土器、瓦質土器が出土しており、古代と中世の遺物が混入している。

ＳＫ84

ＳＫ84は、調査区中央部の西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径1.50ｍ、短径1.27ｍ、深さ７㎝を測る。長軸方向は、Ｎ－16°－Ｅである。壁は、緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.81ｍを測る。上部は削平されており、非常に浅い。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、須恵器、土師質土器片が若干出土したが、細片で実測不可能である。

ＳＫ85

ＳＫ85は、調査区の中央部西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整楕円形を呈する。規模は、長径1.50ｍ、短径1.20ｍ、深さ0.34ｍを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、狭く平坦であり標高6.55ｍを測る。底面直上に直径15～20㎝大の河原石が投棄されていた。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、砥石（276)、その他、須恵器の細片が、若干出土しているが実測不可能である。

ＳＫ86

ＳＫ86は、調査区中央部よりやや西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は、東側をＳＫ88に切られており全形は不明であるが、方形を呈するものと考えられる。規模は、残存している部分で、長径2.10ｍ、短径1.50ｍ、深さ0.10ｍを測る。非常に浅い土坑である。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、西側が一段高く平坦面を有す。標高は、西側で6.85ｍ、東側で6.80ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器、瓦質土器、須恵器片等が出土しているが、須恵器片は混入と考えられる。いずれも細片で実測不可能である。重複関係は、東西に走るＳＤ20を切っており、ＳＫ88に切られている。

ＳＫ87

ＳＫ87は、調査区中央部よりやや西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は、ＳＫ88に切られており全形は不明だが、不整方形を呈する。規模は残存している部分で、長径3.70ｍ、短径1.90ｍ、深さ0.10ｍと大型で浅い土坑である。壁は、緩やかに立ち

上がる。底面は、平坦で標高6.84ｍを測る。埋土は、１層で茶灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は南に位置するＳＫ88及びピットに切られている。

ＳＫ88

ＳＫ88は、調査区中央部よりやや西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は大型の方形を呈する。規模は、長径2.80ｍ、短径2.10ｍ、深さ0.35ｍを測る。長軸方向はＮ－70°－Ｅである。壁は、急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.56ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、青磁碗（156）、その他に、土師質土器片が出土しているが、実測不可能である。重複関係は、ＳＫ86・87を切っている。

ＳＫ89

ＳＫ89は、調査区のほぼ中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径1.10ｍ、短径0.83ｍ、深さ８㎝を測る。上部を削平されており非常に浅い土坑である。長軸方向はＮ－16°－Ｅである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.84ｍを測る。埋土は、１層で茶灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。本遺構の西側に１×５間のＳＢ25が接しているが、この建物に関連するものは不明である。

ＳＫ91

ＳＫ91は、調査区のほぼ中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は、ＳＫ75に切られているため全形は不明だが、方形を呈するものと考えられる。規模は、残存している部分で、長径1.70ｍ、短径1.00ｍ、深さ0.20ｍを測る。壁は、緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.77ｍを測る。埋土は、１層で灰茶色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＫ75に切られているが、南に位置するＳＫ92との新旧関係は不明である。

ＳＫ92

ＳＫ92は、調査区のほぼ中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は、ＳＫ75に切られており全形は不明だが、方形を呈するものと考えられる。規模は、残存している部分で、長径4.60ｍ、短径1.90ｍ、深さ0.20ｍを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、北西端が一段高い平坦面を有す。標高は北西端で6.77ｍ、南側で6.69ｍを測る。埋土は、１層で灰茶色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ94

ＳＫ94は、調査区中央よりやや東寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は細長い帯状を呈する。規模は、長径1.95m、短径0.30m、深さ5cmで非常に浅い土坑である。長軸方向はN－16°－Eである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.86mを測る。埋土は、1層で灰白色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SK95

SK95は、調査区中央より東寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は、SK96に東側を切られているが、不整方形を呈する。規模は、残存している部分で長径0.90m、短径0.70m、深さ8cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.79mを測る。埋土は、1層で灰色砂である。遺物は、土師質土器が若干出土した。細片のため実測不可能である。重複関係は、SD7を切っており、SK96の撹乱に切られている。

SK97

SK97は、調査区中央部の東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径0.90m、短径0.58m、深さ0.20mを測る。長軸方向はN－17°－Eである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は北側が緩やかに落ち込んでおり、標高は、北端で6.69m、南端で6.72mを測る。埋土は、1層で灰茶色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SK98

SK98は、調査区の中央部やや西寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、一辺0.75m、深さ0.25mを測る。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦で標高6.66mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、瓦質土器が若干出土しているが、実測不可能である。本遺構は、SB28の北東端に位置しSB28に伴うものとも考えられる。

SK99

SK99は、調査区中央の西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整楕円形を呈する。規模は、長径0.64m、短径0.50m、深さ0.15mを測る。壁は、傾斜して立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦で標高6.69mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。本遺構も、SB28内に位置しているが、遺物が皆無のため、SB28との関連は不明である。

SK100

SK100は、調査区中央の西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整方形を呈する。規模は、一辺0.80m、深さ7cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.83mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SK101

SK101は、調査区中央部やや南寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径1.97m、短径1.60m、深さ0.59mを測る。長軸方向はN－76°－Wである。比較的深く掘り込まれている。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。底面は、平坦で標高6.29mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中より備前焼、白磁、瓦質土器、土師質土器等が出土しているが、細片で実測不可能である。本遺構の南側には、SB30が存在しており、この建物と方向も一致しており関連性を考えることができる。

SK102

SK102は、調査区のほぼ中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径1.10m、深さ0.50mを測り、非常に深く掘り込まれている。壁は垂直に立ち上がる。底部は舟底状を呈し、最深部の標高は6.31mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中より土師質土器等が出土しているが、細片のため実測不可能である。

SK103

SK103は、調査区中央部の東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整楕円形を呈する。規模は、長径0.93m、短径0.63m、深さ0.12mを測る。長軸方向はN－2°－Wである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.92mを測る。埋土は、1層で灰茶色粘質土である。遺物は、瓦質土器、土師質土器等が出土しているが、細片のため実測不可能である。重複関係は、SD6、SK121を切っている。

SK104

SK104は、調査区の南西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径1.82m、短径0.63m、深さ0.20mを測り、浅目の土坑である。長軸方向はN－25°－Eである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.70mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、瓦質土器、土師質土器が出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、北側の部分がピットに切られている。

ＳＫ105

ＳＫ105は、調査区の南西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不定形を呈する。規模は、長径0.90ｍ、短径0.80ｍ、深さ0.20ｍを測る。壁は垂直に立ち上がる。底面は、平坦で標高6.66ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器鍋（157）が出土している。重複関係はＳＫ106を切っている。

ＳＫ106

ＳＫ106は、調査区の南西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。ＳＫ105に切られているため規模は推定になるが、長径1.50ｍ、短径0.70ｍ、深さ0.10ｍで非常に浅い土坑である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＫ105、ピットに切られている。

ＳＫ107

ＳＫ107は、調査区の南東部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径1.00ｍ、短径0.80ｍ、深さ0.14ｍを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、浅目ながら中央部がやや凹んで２段の掘り込みを有す。底面の標高は、中央部で6.71ｍを測る。遺物は、須恵器、土師質土器が出土しているが、細片のため実測不可能である。

ＳＫ108

ＳＫ108は、調査区の南西部に位置し、ＳＢ31の南東端に隣接する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整方形を呈する。規模は、一辺0.60ｍ、深さ0.20ｍを測る。壁は垂直に立ち上がる。底面は、平坦で標高6.59ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器、瓦質土器が出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、北部をピットに切られている。

ＳＫ109

ＳＫ109は、調査区の南西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、一辺0.65ｍ、深さ0.16ｍを測る。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は、箱形を呈する。底面は、平坦で標高6.67ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ110

ＳＫ110は、調査区の南部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は、北部をＳＫ111に切られているため全形は不明であるが、細長い長方形を呈するものと考えられる。規模は、残存している部分で、長径1.30ｍ、短径0.60ｍ、深さ0.12ｍを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.72ｍを測る。埋土は、１層で茶灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ111

ＳＫ111は、調査区の南部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径1.18ｍ、深さ0.26ｍを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.60ｍを測る。埋土は、１層で茶灰色粘質土である。遺物は、須恵器杯（158）、その他、瓦質土器鍋、土師質土器の細片が出土している。重複関係は、ＳＫ110を切っている。

ＳＫ112

ＳＫ112は、調査区の南東部のＳＢ33内に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、一辺1.20ｍ、深さ0.38ｍを測る。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。底面は、平坦で標高6.46ｍを測る。埋土は、１層で茶灰色粘質土である。底面直上から、人頭大の河原石が出土している。遺物は、土師器杯（159、162、164）・椀（160）・小皿（163）、内黒土師器椀（165）、須恵器杯（161）が出土している。

ＳＫ113

ＳＫ113は、調査区の南東部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、ＳＫ114に切られているため全形は不明であるが、残存している部分で、長径0.90ｍ、短径0.70ｍ、深さ0.20ｍを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.60ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器片が若干出土したが、実測不可能である。

ＳＫ114

ＳＫ114は、調査区南東部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、一辺0.65ｍ、深さ0.23ｍを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.58ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、須恵器蓋（166）、土師器杯（167）が出土した。その他に土師質土器、瓦質土器片も含む。重複関係は、ＳＫ113を切っている。

SK115

SK115は、調査区の南西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径1.58m、短径1.00m、深さ0.15mを測る。長軸方向はN－1°－Eである。壁は垂直に近く立ち上がる。底面は段差があり、東側が落ち込んでいる。標高は、西側が6.87m、東側が6.81mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、土師器杯（168）が出土している。その他、土師質土器を若干含む。

SK116

SK116は、調査区南部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整方形を呈する。規模は、長径1.57m、短径0.80m、深さ0.39mを測る。長軸方向はN－19°－Eである。壁は、垂直に近く立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦で標高6.60mを測る。遺物は、須恵器杯（169）、その他、須恵器、瓦質土器が若干出土している。重複関係は、SB36の柱穴を切っている。

SK117

SK117は、調査区の南部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径2.47m、短径1.33m、深さ0.10mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、ピットに掘り込まれているが、他の部分は平坦で、標高6.74mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、須恵器、土師質土器が出土したが、細片で実測不可能である。重複関係は、SB36の北東隅柱穴を切っている。

SK118

SK118は、調査区の南東端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は、東端が調査区外で全形は不明だが、不整形を呈する。規模は、残存している部分で長径1.80m、短径0.95m、深さ0.33mを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦であるが、東部分のみ一段高くなっている。中央部の標高は6.50mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器小皿（170）・杯（171）、瓦質土器鍋（172）が出土している。

SK119

SK119は、調査区の南部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径0.90m、短径0.68m、深さ0.42mを測る。長軸方向はN－79°－Wである。断面形は箱形を呈する。標高6.43mを測る。埋土は、1層で黄灰色粘質土である。遺物は、土師質土器鍋、須恵器片が出土しているが、実測不可能である。

ＳＫ121

ＳＫ121は、調査区中央部の南東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、東部が調査区外のため全容は不明だが、確認部の径南北1.90ｍ、東西1.70ｍ、深さ0.30ｍを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、西側が一段高く平坦部を有し、東に向けて落ち込んでいる。底面の標高は、西側で6.67ｍ、東側で6.58ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。遺物は、埋土中より、土師質土器杯（173)、瓦質土器鍋（174、175)、土錘（176、177）が出土している。重複関係は、ＳＤ６・18・21、ＳＫ103と切り合っているが、溝の合流地点が染み状になっており、ＳＤ21、ＳＫ103が溝を切っているのが確認できるのみである。

ＳＫ122

ＳＫ122は、調査区南部の中央に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径0.90ｍ、短径0.75ｍ、深さ0.42ｍを測る。長軸方向はＮ－２°－Ｗである。壁は、急傾斜で立ち上がり、断面形はＵ字形を呈する。底面は、平坦で標高6.85ｍを測る。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ74・90・93・96・120

ＳＫ74・90・93・96・120は、現代の撹乱として取り扱ったもので、一括して説明する。

これらの土坑は、すべて埋土中より丸太棒、鉄釘等が出土しており、埋土も境のない黄褐色粘質土である。これらは、最近の誘蛾灯施設の一部で、誘蛾灯のひかえの棒を埋め込んだものと考えられる。

溝

ＳＤ１

ＳＤ１は、調査区の南西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅0.30～0.50ｍ、深さ0.15～0.25ｍ、長さ10.20ｍを測る。幅は、北端部が広く南に延びるに縦って狭くなる。底面の標高は、北部が6.72ｍ、南部が6.78ｍで、北部がやや低くなっている。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器、瓦質土器等が出土しているが、細片で実測不可能である。本遺構は、西側に位置するＳＢ40・42と同様な方向を示しており、ＳＢ40・42との関連性が考えられる。

ＳＤ２

ＳＤ２は、調査区の南西端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

調査区の南西端は、トレンチ調査のため、ＳＤ２の全貌は明らかにできなかった。規模は、検出した範囲で、幅0.50～0.70ｍ、深さ0.20～0.25ｍ、長さ4.20ｍを測る。底面の標高は、東部が6.80ｍ、西部が6.78ｍで、やや西部に傾斜している。断面形は逆台形を呈する。埋土は茶褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＤ３

ＳＤ３は、調査区の南西端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。ＳＤ２同様、トレンチ調査のため、ＳＤ３の全貌は明らかにできなかった。

規模は、検出した範囲で、幅0.50～0.70ｍ、深さ0.20～0.25ｍ、長さ4.50ｍを測る。底面の標高は、東部が6.80ｍ、西部が6.70ｍで、やや西部に傾斜している。断面形は逆台形を呈する。埋土は茶褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。本遺構は、北側に位置するＳＤ２とほぼ平行に走っている。

ＳＤ４

ＳＤ４は、調査区の北部中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

本遺構は、南北に走る溝で幅0.45～0.80ｍ、深さ0.13～0.35ｍ、長さ44.00ｍを測る。調査区北端のＳＫ21より、やや西側にカーブを描きながら存在するが、西側調査区外にさらに延びている。底面の標高は、北部が6.59ｍ、南部が6.80ｍで、北部に傾斜している。断面形はＵ字状を呈する。埋土は暗灰色砂質土である。出土遺物は、弥生土器が比較的多く出土した。その中で、図示できたものは、壺（178）、壺底部（179）、甕（180、181）、甕底部（182、183）である。重複関係は、北部からＳＫ21、ＳＤ９、ＳＫ50に切られている。

ＳＤ５

ＳＤ５は、調査区の北部東寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

本遺構は、南北に走る溝で幅0.30～0.50ｍ、深さ８～10㎝、長さ16.00ｍを測る。北端部は、ＳＫ25に切られているが、さらに調査区外に延びると考えられる。南部は、徐々に浅くなってＳＫ41の付近で消滅する。底面の標高は、北部で6.76ｍ、南部で6.68ｍである。断面形は、逆台形状を呈する。埋土は灰白色粘質土である。出土遺物は、弥生土器片が若干出土しているが、細片のため実測不可能である。重複関係は、ＳＫ25・26、ＳＤ10に切られ、ＳＤ６を切っている。

ＳＤ６

ＳＤ６は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

本遺構は、南北に走る溝で、調査区の北東端から中央部まで延びるが、中程で一旦溝が切れ

る。規模は、幅0.40～0.60m、深さ５～18cm、長さ60.00mを測る。南端部では、ＳＫ96付近でＳＤ７に分岐する。底面の標高は、北部で6.70m、南部で6.94mである。断面形は逆台形状を呈する。埋土は茶褐色粘質土である。遺物は、弥生土器が主流を占め、実測可能なものは、弥生土器甕（184～186）、土師質土器小皿（187）、瓦質土器鍋（188）である。重複関係は、北部からＳＫ29・42、ＳＤ12・14、ＳＢ22、ＳＫ76・78・95・96、ＳＤ７、ＳＫ103・121に切られており、ＳＫ46のみを切っている。

ＳＤ７

ＳＤ７は、調査区中央部の南東寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

本遺構は、ＳＫ95付近でＳＤ６から分岐する溝で、やや西側にカーブして存在する。規模は、幅0.50～0.90m、深さ８～12cm、長さ7.50mを測る。南端部は、ＳＤ21の位置する地点で消滅している。底面の標高は7.23mである。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰白色粘質土である。出土遺物は、弥生土器、須恵器、土師質土器が混在しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、ＳＫ95・96に切られており、ＳＤ６を切っている。

ＳＤ８

ＳＤ８は、調査区の北東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅0.15～0.20m、深さ１～２cm、長さ2.00mを測る。東北部は、やや北側にカーブを描き調査区外へ延びる。底面の標高は6.78mである。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰白色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＤ９

ＳＤ９は、調査区の北部中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

本遺構は、ＳＫ38に切られた地点から西側に延び、途中で分岐している。また、ＳＤ４を切った地点で終結している。規模は、幅0.20～0.40m、深さ１～５cm、長さ7.00mを測る。底面の標高は6.79～6.85mである。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰白色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＫ38に切られ、ＳＤ４を切っている。

ＳＤ10

ＳＤ10は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

本遺構は、東西に走る溝で、幅0.20～0.90m、深さ６～７cm、長さ9.80mを測る。東端部は広く、西に延びるに従い狭くなる。しかし、両端とも底面が緩やかに立ち上がり消滅している。底面の標高は6.73～6.78mである。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰白色粘質土である。ＳＫ42に切られている部分の底面には、列状に集石が残在している。遺物は、近世陶磁器片が

若干出土している。重複関係は、ＳＫ38・42、ＳＤ５・６を切っており、ＳＫ43に切られている。

ＳＤ11

ＳＤ11は、調査区北部の東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅0.15～0.45ｍ、深さ６～16㎝、長さ11.80ｍを測る。南端部は、ＳＤ12に切られており、北端は、11.80ｍ延びた地点で終結する。底面の標高は、北部が6.71ｍ、南部が6.66ｍで、南部に傾斜している。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰茶色粘質土である。遺物は、土師質土器、瓦質土器、陶器類が出土したが、細片で実測不可能である。重複関係は、ＳＤ12に切られている。

ＳＤ12

ＳＤ12は、調査区中央部の北寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

本遺構は、調査区の中央部から東に走る東西溝で、一部ＳＫ52から南北に走る。東端は、調査区外となっているが、田村川に落ち込んで行くものと考えられる。また、現形図では、このＳＤ12と田の畦畔が重複しており、現代の水田区画に伴う溝とみられる。規模は、幅0.40～1.60ｍ、深さ３～22㎝、長さ1.90ｍを測る。西端から東に延びるにしたがって、徐々に幅も広くなってくる。東端では、肩に10～20㎝大の河原石が列状に密集している。底面の標高は、西端で6.80ｍ、確認部分の東端で6.70ｍである。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰白色粘質土である。遺物は、須恵器、青磁等が出土しているが、これらは流れ込みと考えられ、細片で実測不可能である。重複関係は、南北に走るＳＤ６・11を切っている。ＳＤ12を境にして、北はすべて中世末～近世の遺構群で、南が中世のものと考えられる。また、柱穴群も、北と南のブロックに分れ、ＳＤ12付近では柱穴を検出できなかった。

ＳＤ13

ＳＤ13は、調査区中央部のやや北寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

Loc.30では、中世の屋敷に伴うと考えられる明瞭な溝は検出できなかったが、このＳＤ13は、逆Ｌ字状に屈曲しており、意識的に何かを囲むべく掘削されたものともみられる。規模は、幅0.30～0.50ｍ、深さ４～12㎝、長さ約30.00ｍを測る。底面の標高は、東部で6.75ｍ、南部で6.85ｍを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰茶色粘質土である。遺物は、土師質土器鍋（191）、魚住焼捏鉢（192）、土錘（193）が出土した。重複関係は、ＳＢ15に認められるが、切り合いがなく新旧関係は不明である。

ＳＤ14

ＳＤ14は、調査区中央の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅0.30～0.80ｍ、深さ９～13㎝、長さ8.60ｍを測る。溝の東端は調査区外へ延び、西端はＳＢ16の付近で消滅している。幅は東部に延びるに従い広くなっている。底面の標高は、東端で6.71ｍ、西端で6.85ｍである。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰白色粘質土である。遺物は、土師質土器片が若干出土しており、実測可能なものは、土師質土器小皿（194）のみである。重複関係は、南北に走るＳＤ６に切られており、ＳＫ62を切っている。

ＳＤ15

ＳＤ15は、調査区中央部の東寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅0.30～0.60ｍ、深さ３～６㎝、長さ3.00ｍを測り、南北に走る溝である。本遺構は、長さも短く、南端は、底面が緩やかに立ち上がり消滅していき、形態から細長い土坑と考えることもできる。底面の標高は7.02ｍを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰褐色シルトである。遺物は、土師質土器が若干出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、ＳＢ22とに認められるが、新旧関係は不明である。

ＳＤ16

ＳＤ16は、調査区中央部の東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅0.30～0.40ｍ、深さ７～10㎝、長さ6.60ｍを測り、南北に走る溝である。しかし、北端部はＳＫ62に切られており、南端部もＳＫ79に切られているため、全長は不明である。北側に位置し、東西に走るＳＤ14との関連性を考えることができる。底面の標高は、北部が6.97ｍ、南部が6.99ｍを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰褐色シルトである。出土遺物は皆無である。

ＳＤ17

ＳＤ17は、調査区中央の東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅0.20～0.40ｍ、深さ６～７㎝、長さ7.80ｍを測り、東西に走る溝である。西端部は、ＳＢ21内で消滅し、東端部は、ＳＤ16に切られているため不明である。底面の標高は、6.80ｍを測る。断面形は、逆台形を呈する。埋土は、赤褐色砂質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＤ６を切っており、ＳＤ16に切られている。

ＳＤ18

ＳＤ18は、調査区中央部の東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅0.40～1.80ｍ、深さ８～16㎝、長さ16.00ｍを測り、南北方向に走る溝である。

北端部は、染み状に広がり東部に深く落ち込む。南端は、ＳＫ121の北側で消滅する。底面の標高は6.75～6.95ｍで、北部に向けて傾斜している。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＤ19

ＳＤ19は、調査区中央部のやや西寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅0.20～0.40ｍ、深さ３～６㎝、長さ8.00ｍを測り、南北に走る溝である。北端部は、ＳＢ20の南西端の柱穴から掘削されており、南端部はＳＢ27の地点で消滅する。底面の標高は、北部で6.85ｍ、南部で7.04ｍを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰白色粘質土である。出土遺物は皆無である。

重複関係は、ＳＢ24とに認められるが、新旧関係は不明である。本遺構は、ＳＤ13の南端とほぼ同じ所から、１ｍ程東に寄った地点から南下するものである。位置的な面から、ＳＤ13と19が屋敷を囲むという同性格を有していたとするならば、両溝の間隙が出入口部である可能性が生じてくる。

ＳＤ20

ＳＤ20は、調査区中央の南西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅0.30～0.40ｍ、深さ８～12㎝、長さ4.40ｍを測り、東西に走る溝である。西端部は、ＳＫ83を切っており、東端部は底面が緩やかに立ち上がり消滅している。底面の標高は6.77ｍである。断面形は逆台形状を呈する。埋土は茶褐色シルトである。出土遺物は皆無である。

ＳＤ21

ＳＤ21は、調査区中央部の南端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

本遺構は、調査区中程から東部に向かって走り、調査区外へさらに延びると考えられる。東西方向の溝である。確認部分の規模は、幅0.80～1.30ｍ、深さ３～６㎝、長さ15.50ｍを測る。底面の標高は、西部で6.83ｍ、東部で6.74ｍである。全体的に浅い溝であるが、東部に緩やかに傾斜している。断面形は逆台形状を呈する。埋土は暗灰色砂質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＫ121、ＳＤ７を切っている。また、現形図では、ＳＤ21と重複する部分に旧畦畔があり、ＳＤ21はこれに伴う溝の可能性がある。しかし、図面上に線として残っているのみで、調査前の時点ですでに消滅していた。

ＳＤ22

ＳＤ22は、調査区の南部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

本遺構は、調査区を横断する形で存在する東西方向の溝である。確認部分での規模は、幅0.30～0.40m、深さ3～6cm、長さ21.40mを測る。小型で浅くSK116付近で一端切れるが、東方向に調査区外まで延びている。底面の標高は、西端で6.94m、東端で6.70mと、東部に緩やかに傾斜している。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰白色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土しているが、実測可能なものは、土錘（195）のみである。重複関係は、SB36・37とに認められ、新旧関係は、SB37は不明であるが、SB36は古代の建物であり、本遺構が新しい。また、SD22を境にして、ピットは、北部に集中しており、南部では散在している。北部のSD13に囲まれた屋敷の南限の溝である可能性が考えられる。

SD23

SD23は、調査区の南端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

本遺構は、溝と呼称してよいかどうか不明である。また、遺構の南部は調査区外に延びており、全貌を確認できなかった。規模は、検出した範囲で幅3.00m、深さ0.20～0.30m、長さ23.40mを測る。北壁には、1～3段にわたり河原石を積み上げており、底面はほぼ平坦で、南に行くにしたがい深くなっている。底面の標高は、最深部で6.34mを測る。埋土は灰色粘質土である。遺物は、中世から近世に至るものが混在して出土したが、実測可能なものは、瓦質土器擂鉢（196）・鍋（197）、土錘（198）、伊万里系碗（199、200）・皿（203、204）、瀬戸・美濃系おとし蓋（201）、土笛（202）、陶器把手（205）である。

SD24

SD24は、調査区の南東端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

規模は、大部分が調査区外になるため全貌を明らかにできなかった。検出した範囲で幅2.00m、深さ1.10m、長さ10.50mを測る。調査区の東部には田村川が流れており、本遺構の底面は、田村川の方へ落ち込んでいるとみられる。このSD24は田村川の旧肩とも考えられ、後世に埋めたてられ水田に化していたものと考えられる。埋土は灰色粘質土である。遺物は、須恵器片、土師質土器片、近世陶磁器類が混在しているが、細片のため実測不可能である。

柵列

SA1

SA1は、調査区の北西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

柵列は、3間の東西列である。柵方向はN－75°－Wである。全長は5.90m、柱間距離は1.75～2.10mを測る。柱穴の形態は円形を呈する。規模は、直径20～30cm、深さ10～20cmである。全体的に柱穴は浅く、上部は削平されているものと考えられる。埋土は灰褐色粘質土であ

る。出土遺物は皆無である。西端の柱穴がＰ１に切られている。

ＳＡ２

ＳＡ２は、調査区中央部の北寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

柵列は、逆Ｌ字状に南北４間、東西に３間存在する。柵方向は、南北でＮ－15°－Ｅである。全長は、南北6.50ｍ、東西5.30ｍを測る。柱穴は、やや大型の円形を呈する。規模は、直径20～50㎝、深さ10～30㎝である。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＡ３

ＳＡ３は、調査区の北西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

柵列は、３間の南北列である。柵方向はＮ－18°－Ｅである。全長は5.10ｍ、柱間距離は1.60～1.80ｍを測る。柱穴の形態は円形を呈する。規模は、直径10～30㎝、深さ５～10㎝である。全体的に柱穴は浅く、上部は削平されているものと考えられる。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。本遺構はＳＢ42・43と方向が一致しており、関連性を考えることができる。

ＳＡ４

ＳＡ４は、調査区の北西端部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

柵列は、２間の南北列である。柵方向はＮ－19°－Ｅである。全長は4.75ｍ、柱間距離は2.30～2.45ｍを測る。柱穴の形態は円形を呈する。規模は、直径10㎝、深さ10～15㎝を測る。全体的に柱穴は浅い。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ピット

Ｐ１～10

ピット群は、掘立柱建物址の集中している調査区の北部と中央部に存在する。調査区中央部の北寄りを東西に走るＳＤ12をはさんで、北側と南側に位置する。北側に集中しているピット群は、埋土が灰色粘質土で直径20～30㎝、深さ10～30㎝を測るものが多い。出土遺物は、Ｐ１から土師質小皿(206)、Ｐ２から台石(289)、Ｐ３から叩石(266)、Ｐ４から土師質土器鍋(207)、茶臼(288)、Ｐ８から伊万里系碗(211)、Ｐ９から砥石(273)が出土している。北側に位置するピット群からは、比較的近世の遺物が多く出土しており、周囲に存在する掘立柱建物址も出土遺物は少ないが、近世のものが多いと考えられる。

P10～53

ＳＤ12の南側の調査区中央部に位置するピット群は、その多くが逆Ｌ字状のＳＤ13と調査区南部に位置し、東西に走るＳＤ22との間に存在する。これらピット群は、埋土が灰褐色粘質土で規模は、直径20～40㎝、深さ10～30㎝を測るものが多い。出土遺物は、Ｐ10から土師質土器杯（212）、Ｐ11から土師質土器杯（213）、Ｐ12から土錘（214）、Ｐ13から瓦質土器鍋（215）、Ｐ14から土錘（216）、Ｐ15から砥石（275）、Ｐ16から土師器杯（217）、Ｐ17から土錘（218）、Ｐ18から土師質土器杯（219）、Ｐ19から土錘（220）、Ｐ20から瓦質土器鍋（221）、Ｐ21から青磁瓶（222）、Ｐ22から土師質土器皿（223、224）、Ｐ23から瓦質土器鍋（225）、Ｐ24から瓦質土器鍋（226）、Ｐ25から土師質土器皿（227）、Ｐ26から瓦質土器鍋（228）、Ｐ27から瓦質土器鍋（229）、Ｐ28から須恵器蓋（230）、Ｐ29から土師質土器小皿（231）、Ｐ30から土師質土器杯（232）、Ｐ31から土錘（233）、Ｐ32から瓦質土器鍋（234）、Ｐ33から土錘（235）、Ｐ34から瓦質土器鍋（236）、Ｐ35から砥石（267）、Ｐ36から須恵器蓋（237）、Ｐ37から土師器甕（238）、Ｐ38から土錘（239）、Ｐ39から須恵器蓋（240）、Ｐ40から土師器杯（241、242）・蓋（243）、Ｐ41から土師器椀（244）、土師質土器皿（245）・小皿（246）、Ｐ42から土師質土器台付小皿（247、248）・小皿（249）、Ｐ43から土師器台付小皿（250）・椀（251）、土師質土器小皿（252）・杯（253、254）、Ｐ44から土師質土器杯（255）、Ｐ45から土師質土器杯（256）、Ｐ46から土錘（257）、Ｐ47から瓦質土器鍋（258）、Ｐ48から土師質土器椀（259）、Ｐ49から須恵器甕（260）、Ｐ50から土師質土器杯（261）、Ｐ51から土師質土器小皿（262）、土錘（263）、Ｐ52から内黒土師器椀（264）、Ｐ53から土師質土器皿（265）が出土している。調査区中央部のピット群の周囲には中世の掘立柱建物址の他、古代の建物址も検出しており、ピット群から出土する遺物も古代から中世にかけてのものが多い。

５．まとめ

Loc.30で検出した遺構は、掘立柱建物址45棟、土坑122基、溝24条、柵址４基である。その中で弥生時代の遺構と考えられるものは、調査区を南北に走るＳＤ４・６とＳＫ22・46・60の３基である。出土遺物は、ＳＤ４から出土した、180、181、182の甕を見ると弥生時代後期の所産である。また、ＳＤ６出土の184、185の甕も同時期と考えられる。土坑出土のものは、いずれも細片で時期を明確にできない。しかし、ＳＫ46の新旧関係をみると、ＳＤ６に切られており、これらの事実からＳＤ６の時期より古く位置付けねばならない。弥生時代のLoc.30の様相は、あまり遺構も存在しておらず、また、ＳＤ４・６の溝は自然流路的な流れである。

次に古代に関しては、調査区の中央部から南部にいたる部分で、掘立柱建物址を６棟確認した。また、土坑もＳＫ53・112の２基が存在している。ＳＫ53は不整形を呈する土坑であるが、出土遺物では、140、141の須恵器杯は、８世紀後半に位置付けできる。ＳＫ112は、ＳＢ33内に位置しており、出土遺物から、ＳＫ53よりやや新しい時期とみることができる。なお、ＳＢ

33から出土した遺物は、細片で時期を決めがたいが、位置からみてＳＫ53との関連性を考えることができる。掘立柱建物址は、ＳＢ18・22・33・34・36・38が認められる。柱穴の平面形は、いずれも大型の方形、円形を呈するものである。棟方向はＮ－71°－ＷからＮ－76°－Ｗのものとの範中におさまっており、棟方向はほぼ同一方向を指している。これら掘立柱建物址からの出土遺物を見ると、ＳＢ22の土師器甕（101）、ＳＢ34の須恵器蓋（112）、ＳＢ36の土師器甕（123～125）が出土しており、８世紀後半～９世紀にかけての時期に機能したものと考えられる。

中世～近世にかけては、掘立柱建物址39棟、土坑118基、溝22条、柵址４基である。この中で土坑４基は現代の撹乱である。逆Ｌ字状のＳＤ13より南側、ＳＤ22より北側に位置する中世の遺構群は、小規模な屋敷と考えられる。屋敷内の建物址は、ＳＢ17・23・25・26・29・30を考えることができる。しかし、出土遺物は、ＳＢ25・30においてのみ検出されており、これら２棟の遺物からでは屋敷址全体の時期を決めがたいが、あえて時期を求めるならば、ＳＤ13出土の遺物（191～193）、ＳＢ25出土の遺物（105～107）から14世紀後半～15世紀後半と推考してよかろう。

第25表　掘立柱建物址計測表

挿図番号	遺構番号	規模			棟方向	面積 (㎡)	備考
		梁(間)×桁(間)	梁 × 桁(m)	柱間距離(m)			
第 84 図	S B 1	2 × 4	3.05 × 5.40	0.60 ～ 1.80	N－22°－E	16.5	
〃	S B 2	2 × 2	3.65 × 5.25	1.50 ～ 3.35	N－73°－W	19.2	
第 85 図	S B 3	1 × 1	2.60 × 4.10	2.30 ～ 4.10	N－21°－E	10.7	
〃	S B 4	1 × 2	3.60 × 5.45	2.70 ～ 3.60	N－16°－E	19.6	
第 86 図	S B 5	1 × 3	3.95 × 4.70	1.45 ～ 3.95	N－21°－E	18.6	
〃	S B 6	1 × 1	2.20 × 2.75	2.10 ～ 2.75	N－64°－W	6.1	
第 87 図	S B 7	1 × 2	1.80 × 3.75	1.80 ～ 1.90	N－14°－E	6.8	
〃	S B 8	2 × 3	3.85 × 4.95	1.60 ～ 2.15	N－14°－E	19.1	
第 88 図	S B 9	1 × 2	3.80 × 4.90	2.50 ～ 3.80	N－76°－W	18.6	
〃	S B 10	1 × 2	2.25 × 3.20	1.60 ～ 2.25	N－14°－E	7.2	
第 89 図	S B 11	1 × 2	1.55 × 3.85	1.50 ～ 1.95	N－16°－E	6.0	
〃	S B 12	2 × 3	3.50 × 5.70	1.10 ～ 2.20	N－19°－E	20.0	
第 90 図	S B 13	1 × 2	2.50 × 3.65	1.80 ～ 2.50	N－19°－E	9.1	
〃	S B 14	1 × 3	2.55 × 5.10	1.50 ～ 2.55	N－21°－E	13.0	
第 91 図	S B 15	2 × 3	2.50 × 4.50	1.40 ～ 1.65	N－80°－W	11.3	
〃	S B 16	1 × 1	2.40 × 2.80	2.40 ～ 2.80	N－80°－W	6.7	
〃	S B 17	1 × 2	1.65 × 3.10	1.30 ～ 1.80	N－10°－E	5.1	
第 92 図	S B 18	2 × 3	4.60 × 6.15	1.95 ～ 2.35	N－71°－W	28.3	
〃	S B 19	2 × 3	3.55 × 4.55	0.50 ～ 2.10	N－15°－E	16.2	
第 93 図	S B 20	1 × 3	2.80 × 4.70	0.80 ～ 3.00	N－77°－W	13.2	
〃	S B 21	1 × 2	2.90 × 4.80	2.20 ～ 2.90	N－67°－W	13.9	
第 94 図	S B 22	2 × 3	4.40 × 6.80	2.20 ～ 4.70	N－16°－E	29.9	
〃	S B 23	3 × 3	4.60 × 5.60	1.40 ～ 2.00	N－19°－E	25.8	
第 95 図	S B 24	2 × 4	3.40 × 5.80	1.25 ～ 2.05	N－72°－W	19.7	
〃	S B 25	1 × 5	1.60 × 6.70	1.15 ～ 1.60	N－18°－E	10.7	
〃	S B 26	1 × 3	2.00 × 5.45	1.50 ～ 2.10	N－73°－W	10.9	
第 96 図	S B 27	1 × 1	1.50 × 2.20	1.50 ～ 2.20	N－65°－W	3.3	
〃	S B 28	1 × 2	2.75 × 3.80	1.70 ～ 2.75	N－25°－E	10.5	
〃	S B 29	2 × 2	4.00 × 4.05	1.75 ～ 2.25	N－14°－E	16.2	
第 97 図	S B 30	2 × 4	3.65 × 7.25	1.50 ～ 2.40	N－75°－W	26.5	

挿図番号	遺構番号	規模			棟方向	面積 (㎡)	備考
		梁(間)×桁(間)	梁 × 桁(m)	柱間距離(m)			
第 97 図	S B 31	2 × 4	3.10 × 6.40	1.30 ～ 2.30	N－70°－W	19.8	
第 98 図	S B 32	1 × 2	2.25 × 2.70	0.80 ～ 2.25	N－16°－E	6.1	
〃	S B 33	1 × 2	2.25 × 4.10	2.00 ～ 2.25	N－76°－W	9.2	
〃	S B 34	2 × 2	2.30 × 4.20	2.00 ～ 2.30	N－75°－W	9.7	
第 99 図	S B 35	2 × 3	5.55 × 6.70	1.85 ～ 3.15	N－13°－E	37.2	
第 100 図	S B 36	1 × 3	4.40 × 6.50	1.80 ～ 4.40	N－17°－E	28.6	
〃	S B 37	1 × 3	2.55 × 5.90	1.80 ～ 2.55	N－10°－E	15.1	
第 101 図	S B 38	2 × 3	3.20 × 5.00	1.50 ～ 1.75	N－15°－E	16.0	
〃	S B 39	1 × 1	1.80 × 1.85	1.80 ～ 1.85	―――	3.3	
第 102 図	S B 40	3 × 4	5.75 × 6.25	1.30 ～ 2.00	N－23°－E	35.9	
〃	S B 41	1 × 3	1.80 × 5.80	1.55 ～ 2.20	N－70°－W	10.7	
第 103 図	S B 42	2 × 2	3.00 × 4.90	1.30 ～ 2.75	N－20°－E	14.7	
第 104 図	S B 43	1 × 3	1.85 × 5.15	1.40 ～ 1.85	N－18°－E	9.1	
第 103 図	S B 44	1 × 1	3.45 × 3.90	3.45 ～ 3.90	N－17°－E	14.0	
第 104 図	S B 45	3 × 4	5.70 × 6.20	1.30 ～ 2.55	N－20°－E	35.3	

第26表　土坑計測表

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第 105 図	S K 1	不整楕円形	1.10	0.75	0.22	N－37°－W	不明	
〃	S K 2	不整形	2.65	0.95	0.39	N－46°－W	〃	
〃	S K 3	不整楕円形	1.46	9.70	0.07	N－ 3°－E	逆台形状	
〃	S K 4	方形	1.02	0.78	0.35	N－15°－E	〃	
〃	S K 5	〃	2.83	1.30	0.25	N－ 8°－E	不明	
第 106 図	S K 6	〃	0.93	0.80	0.17	N－65°－W	逆台形状	
〃	S K 7	円形	0.60	――	0.13	―――	〃	
〃	S K 8	方形	1.23	0.82	0.22	N－66°－W	〃	
〃	S K 9	不整方形	0.80	0.70	0.09	N－80°－W	不明	
〃	S K 10	大型方形	3.53	2.00	0.38	N－23°－E	箱形	

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第107図	SK 11	円形	1.10	——	0.50	———	U字形	
〃	SK 12	〃	0.75	——	0.50	———	箱形	
〃	SK 13	〃	0.70	——	0.50	———	〃	
〃	SK 14	〃	0.70	——	0.50	———	U字形	
〃	SK 15	方形	1.20	0.93	0.23	N－19°－E	逆台形状	
第108図	SK 16	不整方形	3.28	1.36	0.42	N－80°－W	不明	
〃	SK 17	円形	1.40	——	0.63	———	箱形	
第107図	SK 18	〃	1.25	0.65	0.51	———	不明	全形不明。
第108図	SK 19	不整円形	0.90	——	0.30	———	〃	
〃	SK 20	不整方形	0.90	——	0.59	———	〃	
〃	SK 21	円形	1.10	——	0.24	———	逆台形状	
〃	SK 22	楕円形	1.00	0.80	0.16	N－2°－E	〃	
第109図	SK 23	不整楕円形	0.85	0.75	0.15	N－20°－W	不明	
〃	SK 24	楕円形	1.13	0.90	0.22	N－69°－E	〃	
〃	SK 25	円形	1.52	——	0.77	———	逆台形状	推定。
〃	SK 26	楕円形	1.80	0.85	0.07	N－80°－W	不明	
〃	SK 27	不整円形	2.80	——	2.20	———	逆台形状	
〃	SK 28	〃	1.30	0.55	0.17	———	〃	全形不明。
〃	SK 29	方形	1.15	1.00	0.11	———	〃	〃
〃	SK 30	円形	0.70	——	0.27	———	〃	
第110図	SK 31	不整形	1.10	0.75	0.13	N－54°－W	〃	
〃	SK 32	不整方形	1.15	0.90	0.15	N－80°－W	不明	
〃	SK 33	〃	1.27	1.03	0.08	N－89°－W	逆台形状	
〃	SK 34	円形	1.00	——	0.23	———	〃	
第111図	SK 35	不整形	3.52	3.23	0.24	———	不明	
第110図	SK 36	細長い不整形	4.20	0.70	0.25	N－81°－W	〃	
第111図	SK 37	方形	1.10	0.82	0.05	N－85°－W	〃	
〃	SK 38	大型不定形	5.70	2.50	0.40	N－24°－W	〃	
〃	SK 39	不整形	1.96	1.57	0.47	———	〃	
第112図	SK 40	不整円形	1.60	——	0.45	———	〃	

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第112図	SK 41	隅丸方形	1.10	1.00	0.38	N－1°－E	不明	
〃	SK 42	方形	2.60	1.70	0.30	N－82°－W	〃	
〃	SK 43	細長い方形	2.20	0.83	0.25	N－6°－E	U字形	
第113図	SK 44	方形	1.42	1.02	0.38	N－4°－E	逆台形状	
〃	SK 45	隅丸方形	1.25	——	0.38	———	〃	
〃	SK 46	楕円形	1.30	0.87	0.26	N－35°－W	不明	
〃	SK 47	不整形	2.30	1.47	0.10	N－85°－W	〃	
第114図	SK 48	隅丸方形	1.30	——	0.55	———	〃	
〃	SK 49	〃	1.40	——	0.60	———	U字形	
〃	SK 50	方形	2.00	1.85	0.28	N－10°－E	不明	
〃	SK 51	隅丸方形	2.20	1.68	0.39	N－9°－E	〃	
第115図	SK 52	楕円形	2.27	1.98	0.25	N－12°－E	〃	
〃	SK 53	不整形	3.30	1.45	0.25	N－70°－W	〃	
〃	SK 54	〃	1.00	0.67	0.40	N－10°－E	〃	
〃	SK 55	楕円形	0.80	0.63	0.13	N－36°－W	〃	
第116図	SK 56	円形	0.56	——	0.09	———	逆台形状	
〃	SK 57	方形	0.62	——	0.06	———	〃	
〃	SK 58	南北に長い方形	1.63	0.80	0.18	N－13°－E	〃	
〃	SK 59	方形	1.69	1.06	0.25	N－70°－W	不明	
〃	SK 60	不整の楕円形	1.60	1.40	0.06	N－70°－W	〃	
〃	SK 61	隅丸方形	0.67	0.57	0.16	N－5°－E	逆台形状	
第117図	SK 62	不整形	2.78	2.19	0.21	———	不明	
〃	SK 63	細長い不整形	1.15	0.23	0.15	N－37°－W	〃	
〃	SK 64	方形	1.08	0.75	0.18	N－82°－W	〃	
〃	SK 65	〃	2.65	1.75	0.40	N－1°－E	〃	
〃	SK 66	隅丸方形	1.00	0.85	0.10	———	〃	
第118図	SK 67	〃	1.43	1.15	0.09	N－12°－E	〃	
〃	SK 68	細長い帯状	1.35	0.28	0.10	———	〃	
〃	SK 69	細長い溝状	2.08	0.43	0.14	N－18°－W	〃	
〃	SK 70	方形	1.90	1.40	0.35	———	〃	推定。

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第118図	SK 71	細長い舟形	4.35	1.50	0.54	———	不明	
第119図	SK 72	円形	0.90	——	0.09	———	〃	
〃	SK 73	細長い帯状	1.75	0.38	0.07	N－74°－W	〃	
第120図	SK 75	不整形	——	——	——	———	〃	
第119図	SK 76	楕円形	1.63	0.98	0.15	———	〃	
〃	SK 77	不整楕円形	1.02	0.57	0.08	N－31°－E	〃	
〃	SK 78	不整形	1.87	1.00	0.31	N－41°－E	〃	
第121図	SK 79	〃	2.00	1.70	0.20	———	〃	
〃	SK 80	方形	1.20	0.80	0.10	———	〃	推定。
〃	SK 81	〃	1.45	1.05	0.20	———	〃	〃
〃	SK 82	〃	1.40	1.15	0.18	———	〃	
〃	SK 83	不整形	3.95	2.75	0.75	N－23°－E	〃	
第122図	SK 84	方形	1.50	1.27	0.07	N－16°－E	〃	
〃	SK 85	不整楕円形	1.50	1.20	0.34	———	〃	
〃	SK 86	方形	2.10	1.50	0.10	———	〃	推定。
〃	SK 87	不整方形	3.70	1.90	0.10	———	〃	
〃	SK 88	大型の方形	2.80	2.10	0.35	N－70°－E	〃	
第123図	SK 89	隅丸方形	1.10	0.83	0.08	N－16°－E	〃	
第120図	SK 91	方形	1.70	1.00	0.20	———	〃	推定。
〃	SK 92	〃	4.60	1.90	0.20	———	〃	〃
第123図	SK 94	細長い帯状	1.95	0.30	0.05	N－16°－E	〃	
〃	SK 95	不整方形	0.90	0.70	0.08	———	〃	
〃	SK 97	楕円形	0.90	0.58	0.20	N－17°－E	〃	
〃	SK 98	方形	0.75	——	0.25	———	逆台形状	
第124図	SK 99	不整楕円形	0.64	0.50	0.15	———	〃	
〃	SK100	不整方形	0.80	——	0.07	———	不明	
〃	SK101	方形	1.97	1.60	0.59	N－76°－W	箱形	
〃	SK102	円形	1.10	——	0.50	———	不明	
〃	SK103	不整楕円形	0.93	0.63	0.12	N－ 2°－W	〃	
第125図	SK104	楕円形	1.82	0.63	0.20	N－25°－E	〃	

挿図番号	遺構番号	平面形	規模（m）			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第125図	SK105	不定形	0.90	0.80	0.20	———	不明	
〃	SK106	不整形	1.50	0.70	0.10	———	〃	
〃	SK107	楕円形	1.00	0.80	0.14	———	〃	
〃	SK108	不整方形	0.60	——	0.20	———	〃	
〃	SK109	方形	0.65	——	0.16	———	箱形	
第126図	SK110	細長い長方形	1.30	0.60	0.12	———	不明	推定。
〃	SK111	円形	1.18	——	0.26	———	〃	
〃	SK112	方形	1.20	0.38	——	———	箱形	
〃	SK113	不整形	0.90	0.70	0.20	———	不明	
〃	SK114	方形	0.65	——	0.23	———	〃	
〃	SK115	楕円形	1.58	1.00	0.15	N－1°－E	〃	
〃	SK116	不整方形	1.57	0.80	0.39	N－19°－E	逆台形状	
第127図	SK117	不整形	2.47	1.33	0.10	———	不明	
〃	SK118	〃	1.80	0.95	0.33	———	〃	推定。
〃	SK119	方形	0.90	0.68	0.42	N－79°－W	〃	
〃	SK121	不整形	1.90	1.70	0.30	———	〃	
——	SK122	方形	0.90	0.75	0.42	N－2°－W	U字形	

第27表　包含層出土土器観察表

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
1	第Ⅰ層	須恵器 杯	— (1.3) — 8.1	断面長方形で、外方に開いた形状の高台を有す。	回転ナデ調整。	
2	〃	須恵器 台付皿	16.2 2.5 — 11.8	内湾して外上方に開く高台を有す。体部は腰部で屈曲して、直線的に外上方へ立ち上がる。	〃	
3	〃	須恵器 盤	— (1.7) — 12.7	底部が水平。高い貼付高台をもつ。	高台内外面ヨコナデ。	
挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
4	第Ⅰ層	擂鉢	25.2 (3.8) — —	体部は直線的。口縁部は拡張して面をなす。	内外面共ロクロナデ。	備前焼。
5	〃	皿	11.8 3.1 — 5.0	底い高台から内湾気味に外上方に立ち上がる。	見込に段を有す。口縁部一部指押え。内面と口縁部外面まで施釉。見込に砂目が残る。	明褐灰色釉。にぶい橙色。唐津焼。
挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
6	第Ⅱ層	須恵器 杯	14.1 3.0 — 8.1	体部直線的に立ち上がり、口縁部にいたる。	回転ナデ調整。	磨滅が著しく不明。
挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
7	第Ⅱ層	土師質土器 杯	14.0 (2.8) — —	内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	ロクロナデ。	
挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
8	第Ⅲ層	弥生土器 鉢	9.0 6.5 — 6.0	体部から口縁にかけて直線的。底部やや上げ底。	不明。	磨滅が著しい。黒灰色。
9	〃	土師器 杯	— (1.7) — 6.6	体部外上方に立ち上がる。	回転ナデ調整。 貼付高台。	
10	〃	〃	— (1.3) — 6.0		〃	磨滅が著しく不明。
11	〃	〃	— (2.2) — 9.0	体部内湾気味に立ち上がる。	〃	〃

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手法	備考
12	第Ⅲ層	土師器 杯	—— (1.4) —— 7.3	ハの字形に開く高台。	回転ナデ調整。	磨滅が著しい。
13	〃	〃	—— (1.3) —— 6.6		回転ナデ調整。 貼付高台。	内外面磨滅が著しい。
14	〃	〃	13.3 3.6 —— ——	口縁部やや外反。	回転ナデ調整。	磨滅が著しい。 胎土薄手。
15	〃	土師器 皿	11.5 2.4 —— 5.9		貼付高台。 調整不明。	磨滅が著しい。
16	〃	土師器 台付皿	—— (4.0) —— 5.2	高い高台をもつ。	調整不明。	
17	〃	土師器 椀	—— (2.4) —— 7.2	比較的高い高台をもつ。	〃	磨滅のため不明。
18	〃	土師器 甕	18.3 —— (4.7) ——	口縁部外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面荒いハケ目？	
19	〃	〃	29.2 (6.0) —— ——	口縁部大きく外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面タテナデ、内面ヨコナデ。	外面暗褐色。 内面明褐色。
20	〃	〃	8.7 (3.0) —— ——	口縁部外反。	内面荒いハケ目の後ヨコナデ。 外面ヨコナデ。	
21	〃	〃	23.4 (3.6) —— ——	口縁部は外反。	口縁端部ヨコナデ。 内面横ハケ。 外面縦ハケ。	
22	〃	須恵器 蓋	15.3 (2.6) —— ——	天井部から外下方に下り、端部が肥厚し折り曲げる。	回転ナデ調整。	
23	〃	〃	14.1 (1.2) —— ——	天井部が窪む。	回転ナデ調整。一部天井部内面に叩きが認められる。	
24	〃	〃	14.5 (1.5) —— ——	天井部に自然釉が部分的にかかり平坦である。	回転ナデ調整。	
25	〃	須恵器 杯	—— (1.6) —— 6.0	削り出し高台。	見込に浅い凹線。淡緑色釉が薄く施釉する。	淡緑色釉。
26	〃	〃	—— (2.7) —— 6.8	ハの字形の貼付高台。	回転ナデ調整。	

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
27	第Ⅲ層	須恵器 杯	— (1.4) — 9.0	ハの字形の貼付高台。	回転ナデ調整。	磨滅で不明。
28	〃	〃	— (1.3) — 9.0	〃	〃	
29	〃	〃	— (1.0) — 7.9	高台逆台形状を呈する。 底部平坦。	〃	磨滅が著しく不明。
30	〃	〃	— (1.3) — 8.6	高台がハの字形に開く。	〃	
31	〃	〃	— (1.5) — 8.8		回転ナデ調整。 貼付高台。	磨滅が著しい。
32	〃	〃	— (1.3) — 6.0	高台はハの字形に外に開く。	回転ナデ調整。	
33	〃	〃	— (1.4) — 6.7	〃	〃	
34	〃	〃	— (1.3) — 7.3		底部回転ヘラ削り。 貼付高台。	
35	〃	〃	— (1.5) — 3.8	板状の底部を有す。	底部回転糸切り。 内外面回転ナデ調整。	
36	〃	〃	14.6 3.6 — 9.7	体部直線的に外上方に立ち上がる。	回転ナデ調整。	
37	〃	〃	14.3 3.4 — 7.8	体部から直線的に口縁部にいたる。	〃	磨滅が著しく不明。
38	〃	〃	13.3 4.3 — —	外傾して立ち上がる。	回転ナデ調整。 底部にロクロ痕が残る。	
39	〃	須恵器 皿	15.1 (2.5) — —	口縁部外傾して外上方に立ち上がる。	回転ナデ調整。	
40	〃	須恵器 壺	17.4 (3.4) — —	頸部から外反して口縁部にいたる。端部は拡張され面を成す。	〃	灰白色。
41	〃	〃	— — — —	頸部で外反。口縁部は外上方に立ち上がる。	外面格子目の叩き。 内面青海波文の叩きが施されている。	

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
42	第Ⅲ層	土師質土器 小皿	6.8 1.7 —— 4.8	体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり、端部を丸くおさめた口縁部にいたる。	不明。	磨滅が著しい。 浅黄橙色。
43	〃	〃	8.5 1.3 —— 5.6	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、端部を丸くおさめた口縁部にいたる。	内面にロクロ痕あり。	磨滅が著しい。 橙色。
44	〃	〃	9.0 1.3 —— 6.0	〃	不明。	磨滅が著しい。 浅黄橙色。
45	〃	〃	9.4 1.4 —— 3.5	体部は内湾して外上方へ立ち上がる。	体部内外面ロクロナデ。 底部回転糸切り。	浅黄橙色。
46	〃	土師質土器 Ⅲ	12.1 1.5 —— 8.3	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、端部を丸くおさめた口縁部にいたる。	不明。	磨滅が著しい。 浅黄橙色。
47	〃	〃	15.0 1.7 —— 10.2	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、やや外反した口縁部にいたる。	〃	磨滅が著しい。 橙色。
48	〃	〃	15.7 (2.5) —— ——	体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部はヨコナデのため外反する。	手捏ねである。 口縁部内外面ヨコナデ。	橙色。
49	〃	〃	15.8 4.0 —— ——	〃	手捏ねである。 体部内外面指頭圧痕あり。	
50	〃	〃	15.7 4.0 —— ——	〃	〃	
51	〃	土師質土器 杯	—— (2.9) —— 7.1	高台状の底部から、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。	内外面ロクロナデ。 底部回転糸切り。	磨滅が著しい。 橙色。
52	〃	〃	—— (2.3) —— 7.7	〃	底部回転糸切り。	浅黄橙色。
53	〃	〃	—— (2.5) —— 6.8	僅かにくびれた底部から、体部は内湾して外上方へ立ち上がる。	不明。	磨滅が著しい。 橙色。
54	〃	〃	—— (2.0) —— ——	高台状の底部を有す。	内面ロクロ痕。	内面浅黄橙色。 外面淡橙色。 焼成極めて良好。
55	〃	〃	—— (2.5) —— 5.5	高台状の底部から、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。	内面ロクロ痕。 底部回転糸切り。	灰白色。
56	〃	土師質土器 鍋	26.0 (5.0) —— ——	口縁部は内傾した立ち上がりを示し、端部は内傾した面を成す。外面に断面三角形の鍔を有す。	内外面ともヨコナデ。 外面に叩目あり。	外面に煤付着。 橙色。

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
57	第Ⅲ層	土師質土器 鍋	26.8 (3.3) —— ——	口縁部は内傾した立ち上がりを示し、端部は内傾した面を成す。外面に退化した鍔を有す。	内外面ともヨコナデ。	橙色。
58	〃	〃	18.1 (3.1) —— ——	体部は内湾気味に立ち上がり、ナデのため屈曲して内傾した口縁部にいたる。端部は内傾した面を成す。外面に退化した鍔。	〃	外面に煤付着。 橙色。
59	〃	〃	19.6 (4.8) —— ——	体部は内湾して、口縁部は上方に立ち上がる。端部は水平面を成し、ナデのため僅かに凹状を呈する。	口縁端部ヨコナデ。	磨滅が著しい。 灰白色。
60	〃	瓦質土器 擂鉢	24.9 (4.1) —— ——	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、端部は水平面を成す。	条線が観察されるが単位は不明。	〃
61	〃	〃	—— (6.1) —— 14.0	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	条線の単位は不明。	〃
62	〃	瓦質土器 鍋	20.9 (4.3) —— ——	体部は内湾気味に上方へ立ち上がり、わずかに外反気味の口縁部にいたる。端部は水平面を成す。	口縁端部に一条の凹線が施される。口縁部内面ヨコナデ、外面指頭圧痕あり。	〃
63	〃	〃	19.2 (4.8) —— ——	体部は内湾して上方に立ち上がり、口縁部にいたる。口縁端部は内傾した面を成し、内側に拡張される。外面に退化した鍔あり。	不明。	灰色。 磨滅が著しい。
64	〃	〃	22.2 (4.1) —— ——	体部は内湾気味に上方へ立ち上がり、わずかに外反気味の口縁部にいたる。端部は水平面を成す。	〃	〃
65	〃	〃	22.8 (5.1) —— ——	体部は内湾し、僅かに屈曲した後、直立した口縁部にいたる。	〃	〃
66	〃	〃	21.0 (6.0) —— ——	体部は内湾して上方に立ち上がり、僅かに屈曲して、直立した口縁部にいたる。端部は丸くおさめる。	外面に指頭圧痕あり。	磨滅が著しい。 灰白色。
67	〃	〃	20.7 (7.5) —— ——	体部は内湾して上方に立ち上がり、内傾した口縁部にいたる。端部は僅かに内傾した面を成す。	体部外面に指頭圧痕あり。	淡黄橙色。
68	〃	〃	15.0 (4.7) —— ——	体部は内湾して上方に立ち上がり、僅かに屈曲して、直立した口縁部にいたる。端部は丸くおさめる。	外面に指頭圧痕あり。	磨滅が著しい。 灰白色。
69	〃	〃	19.0 (4.5) —— ——	口縁部は直立し、端部は水平面を成す。	口縁端部に浅い一条の凹線が施される。	磨滅が著しい。 灰色。
70	〃	甕	—— (6.6) —— 27.3	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	内面にハケ目。外面にヨコナデあり。	備前焼。
71	〃	〃	—— (6.6) —— 15.2	〃	外面にカキ目、内面にヘラナデが観察される。	常滑焼？

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
72	第Ⅲ層	壺	— (5.2) — 14.0	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	外面にヘラ削り。	常滑焼？
73	〃	〃	5.5 (3.3) — —	頸部は外反気味に上方へ立ち上がり、玉縁状の口縁部にいたる。	ロクロナデ。	
74	〃	青磁 碗	— (3.0) — 5.0	断面長方形の高台を有し、高台内の削りは浅い。高台外面端部は面取られ、畳付を狭くする。	内外面無文。	青緑色釉。
75	〃	染付 皿	11.3 (3.2) — 5.5	高台は断面逆台形状を呈する。体部は内湾して外上方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。	高台外面まで施釉され、畳付及び外底は露胎。口縁部、見込に各々二重の界線。見込に玉取獅子が淡い青色に発色する。	淡青灰色釉。
76	〃	〃	— (1.2) — 7.9	底部は碁笥底で、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。	見込に一重の界線が淡い青色に発色する。	灰白色釉。 胎土、乳白色。
77	〃	土錘	全　長(4.5) 直　径 1.2 重量(g) 6.3	土師質の土錘で円筒形を呈し、ほぼ中央に直径0.5㎜の円孔を穿つ。		灰白色。
78	〃	〃	全　長(4.3) 直　径 1.3 重量(g) 7.1	〃		〃
79	〃	〃	全　長 2.9 直　径 1.7 重量(g) 8.1	〃		〃
80	〃	〃	全　長 3.8 直　径 1.0 重量(g) 2.9	〃		〃
81	〃	〃	全　長 2.8 直　径 1.4 重量(g) 4.3	〃		
82	〃	皿	— (2.1) — 6.2	やや内傾した断面逆台形状の高台を有す。体部は内湾気味に外上方へ大きく開く。	見込に線描きの梅文が青色に発色する。	青味がかった白色釉。
83	〃	猪口	6.8 3.6 — 2.1	高台は断面三角形で、やや内傾する。体部は直線的に外上方に立ち上がり、やや外反した口縁部にいたる。	高台外面が一部露胎し、それ以外の全面に釉が施される。 畳付に砂溶着。	
84	〃	盃	5.6 2.3 — 2.6	断面逆台形の高台を有す。体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	畳付のみ釉が削り取られる。体部外面に笹文が濃青色に発色する。	淡黄灰色釉。 伊万里焼。
85	〃	碗	12.5 (4.6) — —	口縁部は僅かに内湾気味に上方に立ち上がる。	内外面に貫入あり。	緑灰色釉。
86	〃	〃	— (2.2) — 4.8	高台は断面三角形で、体部は内湾気味に立ち上がる。	見込に二重の界線と高台外面に一重の界線が、あせた青色に発色する。	白濁色釉。 焼成不良。 伊万里焼。

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
87	第Ⅲ層	擂鉢	—— (4.5) —— 9.8	体部はやや内湾気味に外上方へ立ち上がる。	外面にロクロ痕あり。条線は11本1単位である。	暗赤褐色。 備前焼。
88	〃	平瓦	—— —— —— ——	大部分が欠損している。	斜格子叩き。	灰色。

第28表　包含層出土石器観察表

挿図番号	層位	器種	計測値(cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重量	材質	特徴	備考
89	第Ⅲ層	石斧	7.2 5.3 1.7 125.0	泥岩	遍平片刃石斧で、刃部は丁寧に磨いて作り出している。全体的によく研磨している。	
90	〃	〃	19.7 5.0 3.5 610.0	〃	柱状片刃石斧で完形品である。全体形は長方形で断面形は横長長方形を呈し、刃部は片刃の直線刃である。全体的によく研磨されている。基部の一部に約幅4cm深さ0.5cmの抉りが入る。	
91	〃	砥石	(7.9) 6.9 3.75 350.0	砂岩	大部分欠損している。断面長方形で3面使用している。	

第29表　包含層出土金属器観察表

挿図番号	層位	器種	計測値(cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重量	材質	特徴	備考
92	第Ⅲ層	煙管	6.3 1.4 0.1 ——	銅	雁首が欠損している。	

第30表　遺構出土土器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
93	SB40	瓦質土器 鍋	23.2 (5.0) —— ——	体部は内湾して立ち上がり、口縁部は内傾する。端部は水平面を成す。外面に退化した鍔が貼付される。	調整不明。	灰白色。
94	SB5	皿	13.2 (2.8) —— ——	体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	ロクロ成形。	内面暗緑色釉。 外面にぶい黄橙色釉。 唐津焼。
挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手法	備考
95	SB12	土師器 椀	—— (2.6) —— 4.9	体部外上方に立ち上がる。	貼付高台。	磨滅が著しい。 橙色。
挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
96	SB13	土師質土器 杯	—— (2.6) —— 4.9	高台状の底部を有し、体部は外上方に立ち上がる。	底部回転糸切り。	磨滅が著しい。 淡黄色。
97	〃	土錘	全長 2.2 直径 0.8 重量(g) 1.4	土師質の土錘で円筒形を呈し、ほぼ中央に直径3㎜の円孔を穿つ。		
挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手法	備考
98	SB18	須恵器 皿	14.6 (2.8) —— ——	口縁部外傾して立ち上がる。底部平底。	口縁部内外面回転ナデ。	
99	〃	土師器 杯	12.8 (2.9) —— ——	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	ロクロナデ。	
100	SB21	須恵器 杯	—— (1.8) —— 10.7	ハの字形に開く高台を有す。	ロクロ水挽き調整。	
101	SB22	土師器 甕	21.8 —— (2.8) ——	口縁部は外傾して立ち上がり、端部は垂直な面を成す。	内面にハケ目が残る。 口縁部内外面ヨコナデ。	
挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
102	SB22	土師質土器 皿	—— 2.7 —— 6.2	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	調整不明。	磨滅が著しい。 淡橙色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手法	備考
103	S B22	土師器 釜	27.7 (6.5) —— ——	体部はわずかに外傾しながら口縁部にいたる。端部はわずかに肥厚し、外傾した面を成す。鍔は湾曲して外上方に立ち上がる。	口縁部内外面ヨコナデ。	
104	S B24	須恵器 杯	—— (2.1) —— 5.7	ハの字状に開く貼付高台を有す。	ロクロナデ。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
105	S B25	土師質土器 鍋	21.5 (7.1) —— ——	胴部上位から口縁部にかけて、内傾した立ち上がりを示す。断面三角形の退化した鍔が外面に貼付される。	胴部外面に斜位の叩目が残り、その上に指頭圧痕がみられる。口縁部内外面ヨコナデ。	
106	〃	瓦質土器 鍋	17.5 (3.1) —— ——	頸部でわずかに屈曲し、口縁部は上方に立ち上がる。端部はやや内傾した面を成す。	調整不明。	磨滅が著しい。
107	〃	壺	17.7 (4.3) —— ——	口縁部は外傾し、玉縁状を呈する。	ロクロナデ。	備前焼。
108	S B30	土錘	全長 4.6 直径 1.7 重量(g) 12.5	土師質の土錘で円筒形を呈し、ほぼ中央部に直径約5㎜の円孔を穿孔する。		
109	S B31	土師質土器 鍋	18.6 (2.5) —— ——	口縁部は内傾し、端部は内傾する面を成す。断面三角形の鍔がやや外上方に突出する。	内外面ともヨコナデ。	橙色。
110	S B33	須恵質土器 碗	6.5 (1.7) —— ——	底部は高台状を呈する。	底部回転糸切り。	磨滅が著しい。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手法	備考
111	S B33	須恵器 杯	14.6 (3.7) —— 9.6	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。端部は丸くおさめる。	ロクロナデ。	灰色。
112	S B34	須恵器 蓋	—— (1.4) —— 11.0	口縁部は緩やかに外下方に下り、端部は下方に屈曲する。	〃	〃
113	〃	須恵器 杯	—— (1.0) —— 6.8	貼付高台を有す。	〃	灰白色。
114	〃	土師器 杯	9.8 (3.1) —— (5.5)	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、端部を丸くおさめた口縁部にいたる。	底部回転ヘラ切り。	磨滅が著しい。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
115	S B35	土師質土器 小皿	7.4 2.3 —— 3.9	底部は高い高台状を呈し、体部は大きく開く高台付小皿である。	内面にロクロ痕が残る。 底部回転糸切り。	
116	〃	土師質土器 杯	18.2 (3.3) —— ——	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、端部がわずかに肥厚し、やや外反した口縁部にいたる。	調整不明。	磨滅が著しい。
117	〃	土師質土器 椀	—— (4.0) —— 6.2	高台は貼付高台で、やや外方に開いた形状である。体部は内湾して外上方に立ち上がる。	高台脇にヘラ削りがみられ、体部外面にヘラ磨きが一部残る。 ロクロナデ。	
118	〃	土師質土器 杯	—— (2.0) —— 7.3	体部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。	底部回転糸切り。	磨滅が著しい。
119	〃	土錘	全長 3.2 直径 1.6 重量(g) 5.5	土師質の土錘で円筒形を呈し、ほぼ中央に直径3.5㎜の円孔を穿つ。		

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手法	備考
120	S B36	須恵器 壺	—— (3.3) —— 9.7	ハの字形に開く高台を有し、体部はやや内湾気味に立ち上がる。	ロクロナデ。	内面にぶい橙色。 外面にぶい黄橙色。焼成不良。
121	〃	土師器 杯	13.9 3.9 —— ——	体部はやや内湾気味に外上方へ立ち上がり、端部を丸くおさめた口縁部にいたる。	ロクロナデ。 底部回転ヘラ切り。	
122	〃	〃	14.6 (3.3) —— ——	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、端部を丸くおさめた口縁部にいたる。	外面に一部ヘラ磨きが施される。	
123	〃	土師器 甕	18.4 (11.0) —— ——	胴部は内湾して上方に立ち上がり、頸部でくの字状に屈曲した後、口縁部は外反する。端部外面は外傾した面を成す。	口縁部内面にハケ目、外面にヨコナデがみられる。胴部内面に指頭圧痕が残る。	
124	〃	〃	20.8 (6.5) —— ——	頸部でくの字状に屈曲した後、口縁部は外反する。端部は肥厚し外傾した面を成す。	口縁部内面及び胴部外面にハケ目あり。口縁部外面はヨコナデで仕上げる。	
125	〃	〃	19.6 (8.3) —— ——	〃	〃	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
126	S B36	白磁 碗	16.5 (4.0) —— ——	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は玉縁状を呈する。		灰白色釉。 胎土、灰白色。
127	S K 8	瓦質土器 鍋	19.8 (6.5) —— ——	胴部は内湾して立ち上がり、内傾した口縁部にいたる。断面三角形の鍔が貼付される。	内外面指頭圧痕が残る。	灰白色。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形　態	文　様　・　手　法	備　考
128	ＳＫ９	鉢	— (2.6) — 8.0	高台逆三角形を呈する。	見込、蛇ノ目状に釉をかきとる。	青緑色釉。 灰白色。 唐津焼。
129	ＳＫ10	捏鉢	20.2 (3.0) — —	口縁部は肥厚し、外傾する面を成す。	ロクロナデ。	魚住焼。
130	ＳＫ14	土師質土器 杯	10.0 3.2 — —	体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	底部回転糸切り。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形　態　・　文　様	手　法	備　考
131	ＳＫ15	須恵器 壺	— (4.5) — 9.3	ハの字形に開く高台を有し、端部は水平になる。胴部は外上方へやや内湾気味に立ち上がる。	ロクロナデ。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形　態	文　様　・　手　法	備　考
132	ＳＫ36	猪口	5.9 (2.2) — —	口縁部がやや外反する。	内外面無文。	伊万里系。
133	ＳＫ39	〃	6.6 4.0 — 3.0	断面三角形の高台を有し、底部の器壁は厚い。体部は内湾気味に立ち上がり口縁部は外反する。	畳付以外全面に施釉される。 体部外面に笹文。	オリーブ灰白色釉。 胎土、灰白色。 伊万里系。
134	〃	碗	— (3.8) — 5.0	断面三角形の高台を有し、体部は内湾して立ち上がる。	畳付以外の外面全面に施釉される。内面は無釉。	〃
135	ＳＫ40	土錘	全　長　4.1 直　径　1.4 重量(g)　2.9	土師質の土錘で円筒形を呈する。中央に0.5㎜の円孔を穿つ。		
136	ＳＫ42	皿	12.3 3.6 — 4.0	断面逆台形状の高台を有す。体部は、内湾気味に大きく開いて立ち上がり、端部を丸くおさめた口縁部にいたる。	見込、蛇の目状釉ハギ。 釉は一部高台外まで施される。	淡青緑色釉。 淡黄灰色。 唐津焼。
137	ＳＫ45	〃	13.4 3.6 — 7.2	断面三角形の高台を有す。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。	畳付を除き、全面に施釉される。	明緑灰白色釉。 胎土、灰白色。 伊万里、Ⅲ期。
138	ＳＫ50	土師質土器 釜	— (4.6) — —	胴部は内湾して外上方へ立ち上がる。胴部中位には鍔を有し、鍔は僅かに上向きに外方へ突出する。	ロクロナデ。	
139	ＳＫ52	〃	13.0 (6.0) — —	内湾した胴部が肩部で内傾し、頸部で屈曲した後、口縁部は上方へ立ち上がる。	〃	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手法	備考
140	SK53	須恵器 杯	—— (1.4) —— 8.5	やや外方に開いた高台を有す。	回転ナデ調整。	
141	〃	〃	—— (1.5) —— 8.4	ハの字形に開く高台を有す。	ロクロナデ。	青灰色。
142	〃	須恵器 壺	20.1 (4.0) —— ——	口縁部は外反する。	〃	〃
143	SK58	須恵器 蓋	—— (1.5) —— ——	擬宝珠形のつまみを有す。	〃	〃

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
144	SK58	瓦質土器 鍋	26.2 (5.5) —— ——	胴部は内湾気味に外上方へ立ち上がり、やや内傾した口縁部にいたる。端部は水平面を成し、外面に退化した鍔。	胴部に指頭圧痕あり。	磨滅が著しい。灰白色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手法	備考
145	SK59	須恵器 杯	14.9 2.6 —— 9.0	体部は外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。端部は丸く収める。	ロクロナデ調整。	灰白色
146	SK66	土師器 皿	13.0 2.2 —— ——	体部は内湾気味に外方へ開いて立ち上がり、口縁部は外反する。端部は丸くおさめられ、器壁は全体に厚めである。	内面にロクロ痕あり。 底部回転ヘラ切り。	浅黄橙色

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
147	SK70	青磁 碗	—— (2.2) —— 5.7	断面逆台形状の高台を有し、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。	外面畳付まで釉が施され、外底は露胎する。	青緑色釉。胎土、灰白色。
148	SK71	土師質土器 鍋	14.6 (2.7) —— ——	口縁部は内傾し、端部は内傾した面を成す。外面に断面三角形の鍔が貼付される。	口縁部内外面ヨコナデ。	内面にぶい赤褐色。外面、口縁にぶい赤褐色、胴部黒赤褐色。外面鍔以下に煤付着。
149	〃	土師質土器 鉢	—— (5.5) —— 13.0	体部は外上方に立ち上がる。	外面に指頭圧痕あり。	焼成良好。
150	〃	瓦質土器 鍋	22.0 (3.4) —— ——	頸部でくの字状に屈曲し、口縁部は外反する。端部は水平面を成す。	外面に指頭圧痕あり。	磨滅が著しい。灰色。
151	SK75	土師質土器 皿	12.9 (2.4) —— ——	体部は内湾して外上方へ立ち上がる。口縁部はやや肥厚する。	〃	にぶい橙色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
152	SK75	瓦質土器 鍋	21.8 (3.5) —— ——	口縁部は内傾し、端部は面取られ水平面を成す。	外面に指頭圧痕あり。	灰白色。
153	SK77	〃	20.4 (7.0) —— ——	胴部は球形に張り、頸部で屈曲して、口縁部は上方に立ち上がる。	〃	〃

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手法	備考
154	SK82	土師器 鍋	34.6 (5.2) —— ——	口縁部は上方に立ち上がり、端部は水平に面取られる。鍔は水平に大きく突出する。	胴部外面、縦方向のハケ目。口縁部内面ヨコナデ。	にぶい赤褐色
155	SK83	須恵器 杯蓋	—— (1.5) —— 14.3	口縁端部はわずかに下方に屈曲する。	ロクロナデ。	灰白色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
156	SK88	青磁 碗	—— (2.3) —— 6.3	高台は逆台形状を呈する。端部外面は面取られ、畳付を狭くする。	見込に印花文。釉は高台内まで施され、一部外底にもかかる。貫入あり。	濃青緑色釉。胎土、灰白色。露胎部は淡赤橙色。
157	SK105	土師質土器 鍋	18.8 (3.0) —— ——	口縁部は内傾し、端部はわずかに肥厚し内傾した面を成す。断面三角形の鍔がやや上向きに突出する。	内外面ともヨコナデ。	にぶい赤褐色。外面に煤付着。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手法	備考
158	SK111	須恵器 杯	12.4 (1.3) —— ——	断面台形状の低い貼付高台を有する。	回転ナデ調査。	にぶい赤褐色
159	SK112	土師器 杯	—— (1.5) —— 8.2	ハの字形に開く貼付高台を有す。	不明。	磨滅が著しい。淡黄橙色。
160	〃	土師器 椀	—— (2.4) —— 9.8	高い貼付高台を有す。	〃	〃
161	〃	須恵器 杯	13.8 (3.6) —— ——	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、端部を丸くおさめた口縁部にいたる。	ロクロナデ。	灰色。
162	〃	土師器 杯	—— (1.2) —— 7.8	体部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。	調整不明。	淡黄橙色。磨耗が著しい。
163	〃	土師器 小皿	9.2 (0.9) —— 8.0	口縁部外上方に立ち上がる。	不明。	橙色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手法	備考
164	S K112	土師器 杯	—— (2.4) —— 6.8	体部内湾気味に外上方に立ち上がる。	不明。	にぶい橙色。
165	〃	内黒土師器 椀	12.5 (4.2) —— ——	体部は内湾して外上方に立ち上がり、端部を丸くおさめた口縁部にいたる。	ロクロナデ。	内面黒色。 外面口縁部黒色。 体部淡黄橙色。
166	S K114	須恵器 蓋	—— (2.4) —— 17.4	天井部から外下方に下り口縁部にいたる。端部は面取る。	回転ナデ調整。	
167	〃	土師器 杯	16.0 (2.7) —— 10.0	体部から直線的に外上方に立ち上がり口縁部にいたる。	調整不明。	淡黄橙色。
168	S K115	土師器 杯	6.0 (1.0) —— ——	貼付高台をもつ。		灰白色。
169	S K116	須恵器 杯	—— (1.2) —— (9.3)	底部は平底。	回転ナデ調整。	〃

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
170	S K118	土師質 小皿	7.6 (1.3) —— 5.7	体部直線的に外上方に立ち上がる。	ロクロナデ。	赤橙色。
171	〃	土師質 杯	16.4 (3.0) —— ——	体部内湾して外上方に立ち上がり、口縁部外反して肥厚する。	外面ロクロ痕が残る。	淡黄橙色。
172	〃	瓦質土器 鍋	27.0 (3.2) —— ——	口縁部上方に立ち上がる。	頸部に指頭圧痕。 調整不明。	灰色。
173	S K121	土師質土器 杯	—— (1.5) —— 5.3	底部平底である。	調整不明。	淡黄橙色。
174	〃	瓦質土器 鍋	26.0 (3.5) —— ——	胴部から内湾して口縁部にいたる。	口縁端部ナデ。 外面に指頭圧痕。	
175	〃	〃	22.0 (4.8) —— ——	口縁部外反する。	外面に指頭圧痕。	灰白色。
176	〃	土錘	全　長 2.9 直　径 1.6 重量(g) 7.6	円筒形を呈する。中央に直径5㎜の円孔を穿つ。		
177	〃	〃	全　長 3.0 直　径 1.1 重量(g) 2.6	円筒形を呈すが、上部が欠損。		

挿図番号	遺構	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手法	備考
178	ＳＤ４	弥生土器 壺	23.8 (1.6) —— ——	大きく外反し、端部が肥厚し、端面は拡張される。	端面に凹線が施される。 ヨコナデ。外面はタテハケ。	にぶい橙色。
179	〃	〃	—— (2.9) —— 5.6	底部は平底。	内外面指頭圧痕。	
180	〃	弥生土器 甕	15.0 (4.0) —— ——	口縁部くの字状に外反し、端部はさらに上方に拡張された面を成す。	調整不明。 胴部内面に一部指頭圧痕。	明褐色。
181	〃	〃	14.8 (3.9) —— ——	くの字状に口縁部が外反する。	口縁部外面ヨコナデ。 端面に浅い一条の沈線。	内外面淡黄橙色。
182	〃	〃	—— (3.2) —— 4.8	平底で胴部外上方へ立ち上がる。	外面叩目。 内面指頭押圧。	赤褐色。
183	〃	〃	—— (4.7) —— 4.7	底部は平底。 胴部は外上方に立ち上がる。	外面一部にタテハケ。	
184	ＳＤ６	〃	16.9 (4.9) —— ——	口縁部くの字状に外反し、端部が肥厚し、拡張され面を成す。	口縁部内外面ヨコナデ。 胴部外面タテハケ。 内面指頭圧痕。	にぶい褐色。
185	〃	〃	12.8 (2.4) —— ——	口縁部くの字状に外反し、端部は肥厚し面を成す。	口縁部内外面ヨコナデ。 胴部外面タテハケ。	外面明褐色。 内面橙色。
186	〃	土師器 甕	18.2 (4.1) —— ——	口縁部外反する。 端部やや肥厚する。	外面ヨコナデの後タテハケ。 内面横、斜位のハケ。 頸部に指頭圧痕。	外面明黄褐色。 内面にぶい黄橙色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
187	ＳＤ６	土師質土器 小皿	6.5 1.4 —— 4.8	体部直線的に外上方に立ち上がる。	ロクロ成形。 底部回転糸切り。	
188	〃	瓦質土器 鍋	23.2 (6.5) —— ——	体部内湾して立ち上がり、口縁部はやや内傾する。	調整不明。	
189	ＳＤ10	擂鉢	—— (5.0) —— ——	口縁部拡張され上方に延びる。	内外面ロクロナデ。	備前焼。
190	〃	皿	—— (1.5) —— 3.7	削り出し高台。 体部は大きく開く。	外面無釉。 見込釉ハギ取り。	青緑色釉。 灰白色。 唐津焼。
191	ＳＤ13	土師質土器 鍋	20.5 13.5 —— ——	口縁内傾して立ち上がる。端部も内傾する面をもつ。鍔は水平に突出。胴部内湾して球胴形を呈する。	内外面ヨコナデ。胴部外面斜位の叩き。底部外面は叩きの後ヘラナデ。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　　態	文　様　・　手　法	備　　考
192	ＳＤ13	捏鉢	22.4 (3.3) —— ——	体部から大きく開き、口縁部にいたる。口縁部は肥厚する。	内外面ロクロナデ。	灰色。 魚住焼。
193	〃	土錘	全　長　3.2 直　径　1.8 重量(g) 10.3	楕円形を呈し、5㎜の円孔を穿つ。		
194	ＳＤ14	土師質土器 小皿	8.1 1.6 —— ——	体部直線的に外上方に立ち上がる。	調整不明。	淡橙色。
195	ＳＤ22	土錘	全　長　4.0 直　径　1.0 重量(g)　4.1	楕円形を呈し、中央部に直径5㎜の円孔を穿つ。		乳灰色。
196	ＳＤ23	瓦質土器 擂鉢	32.5 (6.0) —— ——	体部直線的に外上方に立ち上がる。	外面指頭圧痕が残る。 内面条線が施される。	外面磨滅が著しい。 灰色。
197	〃	瓦質土器 鍋	16.4 (3.3) —— ——	口縁部は直立して上方に立ち上がる。	端部ナデでやや窪む。 口縁部内面ヨコナデ。	〃
198	〃	土錘	全　長　4.6 直　径　1.7 重量(g) 11.7			褐灰色。
199	〃	碗	7.8 (5.0) —— ——	腰部で屈曲し、体部からやや内傾して立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部内面に四方襷文が、コバルトブルーに発色。	内面、灰色釉 外面､薄青緑色釉。 胎土、灰白色。 伊万里系。
200	〃	〃	13.2 (4.0) —— ——	体部内湾して外上方に立ち上がる。口縁部やや外反。	口縁部外面に二重、内面に一重の界線が施される。	白灰色釉。 胎土、乳白色。 伊万里系。
201	〃	落し蓋	9.8 (2.4) —— ——	口縁部が水平に延びる。	内面及び口縁部外面に釉が施される。貫入あり。	明緑灰色釉。 胎土、黄灰色。 瀬戸系。
202	ＳＤ24	土師質土器 土笛	全　長　6.1 全　幅　2.0 全　厚　2.7	下端部に直径5㎜の円孔が穿たれる。		
203	〃	皿	9.3 2.4 —— ——	体部内湾して立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部内面のみ文様が施される。濃緑色に発色。見込蛇の目状に釉をハギ取る。全面に施釉。	灰白色釉。 胎土、灰白色。
204	〃	〃	—— (1.6) —— 7.8	削り出しの断面三角形を呈する高台をもつ。体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。	見込二重の界線中にコンニャク判手法による五弁花が施される。外底も文様が施されるが不明確である。淡い青色に発色。見込砂溶着。	明青灰色釉。 胎土、灰白色。 伊万里系。
205	〃	把手	全　長　8.4 全　幅　3.4 全　厚　1.5	把手部は断面長方形を呈する。	外面に叩きが施される。	陶器。
206	Ｐ２	土師質土器 小皿	8.6 1.7 —— 4.0	口縁部やや外反する。	内外面ロクロナデ。 底部回転糸切り。	淡黄色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
207	P 4	土師質土器 鍋	29.0 (4.0) —— ——	体部から直線的に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	内外面ヨコナデ。 口縁部下から煤付着。	口縁部、にぶい橙色。 体部、内面灰褐色。
208	P 2	皿	—— (1.5) —— 4.5	削り出し高台。 体部内湾して大きく開く。	見込釉ハギ。	唐津焼。
209	P 5	〃	11.9 3.2 —— 4.7	削り出し高台で底部外面は高く削りだされる。体部は内湾して外上方に立ち上がる。	外面高台脇まで施釉。	
210	P 6	土師質土器 小皿	8.1 1.3 —— (5.0)	体部は内湾気味で外上方に立ち上がる。	ロクロ成形。 底部回転糸切り調整。	浅黄橙色。
211	P 8	碗	11.7 (4.4) —— ——	口縁部は上方に立ち上がる。	口縁部外面に二重の界線と体部外面に草花文がにぶい青色に発色。貫入あり。	淡青灰色釉。 半磁器質。
212	P10	土師質土器 杯	14.0 4.1 —— (6.8)	体部直線的で口縁部にいたる。	ロクロ痕が残る。 底部回転糸切り調整。	橙色。
213	P11	〃	—— (3.5) —— 5.7	底部は平底で、体部直線的に外上方に立ち上がる。	内外面ロクロ痕。	底部は磨滅が著しい。
214	P12	土錘	全長 3.3 直径 1.0 重量(g) 3.0	円筒形を呈する。 直径5㎜の円孔を穿つ。		
215	P13	瓦質土器 鍋	22.7 (4.7) —— ——	口縁部直立して立ち上がる。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部内面ナデ。	
216	P14	土錘	全長 3.9 直径 1.4 重量(g) 6.2	円筒形を呈する。 直径5㎜の円孔を穿つ。		黄橙色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手法	備考
217	P16	土師器 杯	—— (1.7) —— 7.2	貼付高台をもつ。	調整不明。	磨滅が著しい。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
218	P17	土錘	全長 4.6 直径 1.2 重量(g) 6.8	下端部が欠損する。 円筒形を呈する。 直径6㎜の円孔を穿つ。		乳白色。
219	P18	土師質土器 杯	—— (1.8) —— 6.9	貼付底部で器壁が厚い。体部は直線的に外上方に立ち上がる。	内外面ロクロナデ。	

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形　態	文様・手法	備　考
220	P19	土錘	全長 4.7 直径 1.4 重量(g) 9.0	下端部が欠損する。 円筒形を呈し、直径5㎜の円孔を穿つ。		
221	P20	瓦質土器 鍋	20.7 (3.5) —— ——	口縁部上方に立ち上がる。	外面に指頭圧痕が残る。	外面 灰色。 内面 灰白色。
222	P21	青磁 瓶	—— (6.0) —— ——	頸部は直立して上方に立ち上がる。	ロクロ痕が内外面に残る。	淡青灰色釉。 胎土、灰白色。
223	P22	土師質土器 皿	14.1 (2.4) —— ——	体部内湾して外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面指頭圧痕。手捏ね。	外面 にぶい橙色。 内面 灰褐色。
224	〃	〃	10.9 (1.8) —— ——	口縁部やや肥厚し外反する。	調整不明。	橙色。 磨滅が著しい。
225	P23	瓦質土器 鍋	22.3 (5.5) —— ——	口縁部上方に立ち上がる。 体部内湾する。	口縁部内外面ヨコナデ。	
226	P24	〃	25.0 (4.5) —— ——	口縁部やや内湾気味に上方に立ち上がる。肩部に一条の隆起帯が貼付される。	〃	灰白色。
227	P25	土師質土器 皿	15.2 (2.5) —— ——	体部内湾して外上方に立ち上がる。口縁部やや肥厚。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面指頭圧痕。手捏ね。	にぶい橙色。
228	P26	瓦質土器 鍋	21.2 (3.2) —— ——	口縁部上方に立ち上がる。	頸部に右上がり斜位の刻目。内外面共ヨコナデ。	
229	P27	〃	21.2 (4.3) —— ——	〃		磨滅が著しい。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手　法	備　考
230	P28	須恵器 蓋	—— (1.4) —— ——	擬宝珠形のつまみを有す。天井部は平坦である。	回転ナデ調整。	磨滅が著しい。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形　態	文様・手法	備　考
231	P29	土師質土器 小皿	8.5 1.4 —— 4.5	体部直線的に外上方に立ち上がり、口縁部外反する。	内外面ロクロナデ。 底部回転糸切り。	
232	P30	土師質土器 杯	—— (2.0) —— 6.8	平底で体部内湾して外上方に立ち上がる。	内外面ロクロ痕が残る。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
233	P31	土錘	全長 3.5 直径 1.2 重量(g) 4.2	円筒形を呈し、中央部に直径5㎜の円孔を穿つ。		
234	P32	瓦質土器 鍋	24.5 (4.7) —— ——	口縁部上方に立ち上がる。		磨滅が著しく不明。
235	P33	土錘	全長 4.0 直径 1.3 重量(g) 6.4	円筒形を呈し、中央部に直径4㎜の円孔を穿つ。		黒色。
236	P34	瓦質土器 鍋	17.2 (3.3) —— ——	口縁部上方に立ち上がる。		磨滅が著しい。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
237	P36	須恵器 蓋	—— (1.6) —— 13.6	天井部は平坦で外下方に下り、口縁端部はやや肥厚する。	天井部回転ヘラ削り。 口縁部内外面回転ナデ調整。	
238	P37	土師器 甕	23.8 (4.0) —— ——	口縁部外反し端部はやや窪む。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面横方向のナデ。端部はヨコナデで窪む。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
239	P38	土錘	全長 5.0 直径 1.5 重量(g) 7.1	円筒形を呈し、直径5㎜の円孔が穿たれる。		

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
240	P39	須恵器 蓋	—— (117) —— 13.1	口縁端部がやや肥厚。	回転ナデ調整。	
241	P40	土師器 杯	13.0 4.3 —— ——	底部で屈曲し、体部は直線的に外上方に立ち上がる。口縁部はやや外反。	ロクロ成形。	磨滅が著しい。
242	〃	〃	11.7 3.5 —— ——	底部が厚く、内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部は肥厚して外反する。	内面にロクロ痕が残る。	〃
243	〃	土師器 蓋	11.7 1.6 —— ——	天井部は平坦で、口縁部は緩やかに外下方に下る。	内外面にロクロ痕。 回転ナデ調整。	
244	P41	土師器 椀	—— (2.3) —— 5.5	体部内湾気味に外上方に立ち上がる。	貼付高台。	磨滅が著しい。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
245	P41	土師質土器 皿	8.8 / 1.8 / —— / 5.4	底部は平坦で、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はやや肥厚する。	底部は回転糸切り調整。	
246	〃	土師質土器 小皿	8.5 / 1.3 / —— / 5.5	体部直線的。	底部回転糸切り。	磨滅が著しい。
247	P42	〃	7.5 / 2.5 / —— / 4.0	高い高台をもち、口縁部は大きく開く。口縁端部はやや肥厚。	ロクロナデ。	〃
248	〃	〃	6.9 / 1.9 / —— / 4.1	高い高台をもち、体部は大きく開く。	〃	〃
249	〃	〃	8.2 / 1.3 / —— / 5.3	口縁部はやや外反。	底部回転糸切り。 ロクロナデ。	全体的に磨滅が著しい。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手法	備考
250	P43	土師器 小皿	7.9 / 4.8 / —— / 7.2	ハの字形に開く高い高台を有し、皿部は浅い。		磨滅が著しい。
251	〃	土師器 椀	—— / 2.0 / —— / 6.6	貼付高台をもち、体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。		〃

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
252	P43	土師質土器 小皿	8.8 / 1.0 / —— / 6.2	口縁部はやや外反。	ロクロナデ。	磨滅して不明。
253	〃	土師質土器 杯	12.6 / (3.2) / —— / ——	体部直線的に外上方に立ち上がる。口縁部は折りまげる。	〃	〃
254	〃	〃	—— / (2.6) / —— / 5.6	器壁の厚い底部。体部直線的に外上方に立ち上がる。	内面底部にロクロ痕残る。	磨滅が著しい。
255	P44	〃	15.8 / 4.0 / —— / 8.0	口縁部外反、口縁端部やや肥厚。体部内湾気味に外上方に立ち上がる。	外面にロクロ痕。	底部磨滅不明。
256	P45	〃	15.0 / (3.0) / —— / ——	口縁部やや肥厚し外反する。 体部直線的。	〃	
257	P46	土錘	全長 4.5 全幅 1.1 重量(g) 5.7	円筒形を呈し、中央部に直径4㎜の円孔を穿つ。		

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
258	P47	瓦質土器 鍋	25.3 (5.7) —— ——	口縁部上方に立ち上がり、やや肥厚する。	調整不明。	磨滅している。
挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
259	P48	土師器 椀	—— (1.3) —— 5.7	貼付高台を有す。 体部は大きく開く。	調整不明。	磨滅が著しい。
260	P49	須恵器 甕	29.0 3.3 —— ——	口縁部は外反する。	内外面とも回転ナデ調整。	
挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
261	P50	土師質土器 杯	13.3 4.5 —— 6.4	体部から口縁部にかけて大きく外上方に立ち上がる。厚い高台がつく。	ロクロナデ。 底部回転糸切り。	
262	P51	土師質土器 小皿	6.6 1.3 —— 4.0	口縁部やや外反。	ロクロナデ。	
263	〃	土錘	全長 5.2 直径 3.8 重量(g) 50.9	楕円形を呈する。 中央に直径1.5㎜の円孔が穿たれる。		
挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
264	P52	内黒土師器 椀	16.1 3.8 —— ——	体部内湾して外上方に立ち上がる。端部は丸くおさめる。	口縁部外面ヨコナデ。体部は不定方向ナデ。内面は横方向のヘラ磨き。	
挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
265	P53	土師質土器 皿	8.0 1.3 —— 5.2	体部直線的に立ち上がる。	体部内外面ロクロナデ。 底部回転糸切り。	

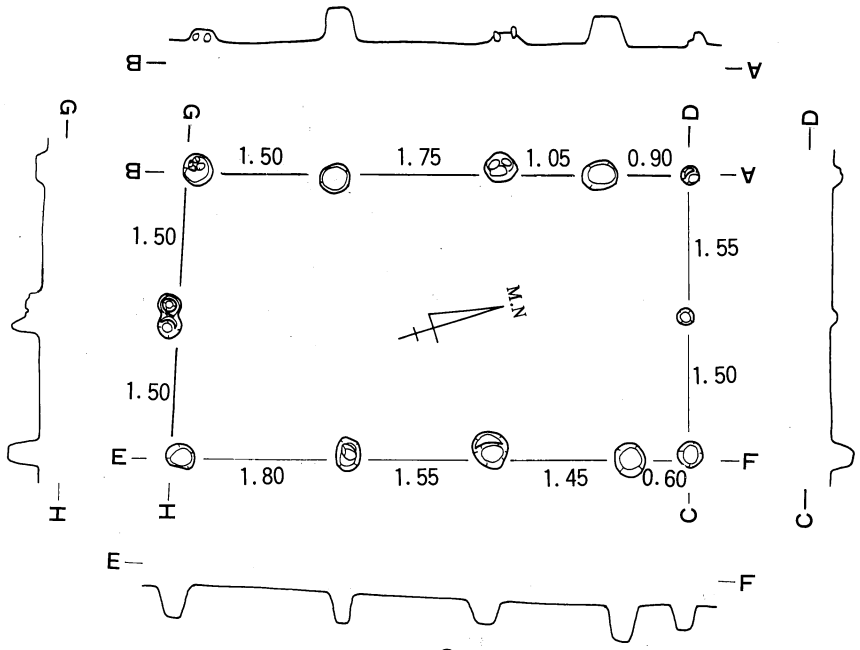
第31表　遺構出土石器観察表

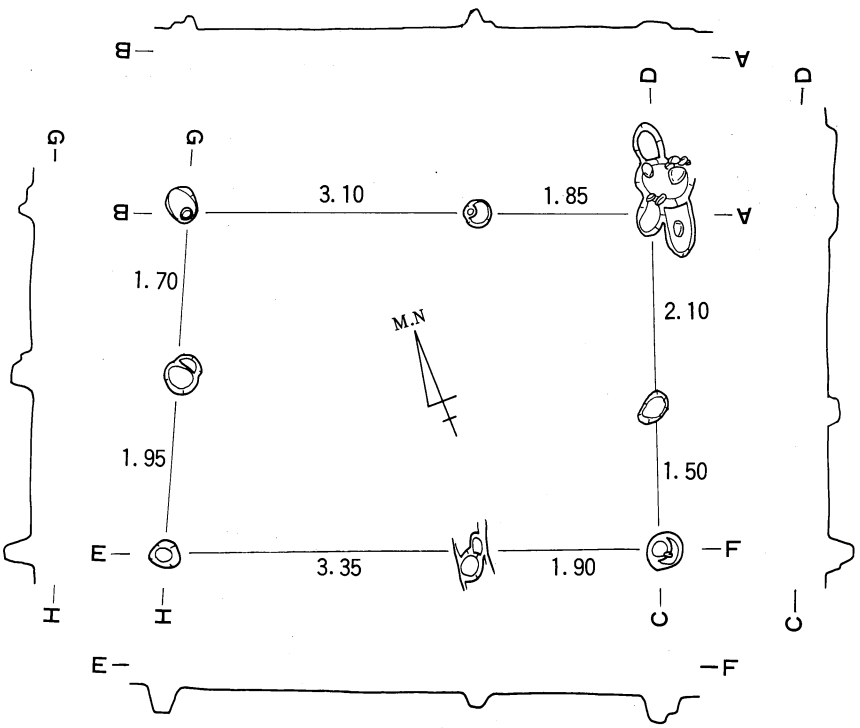
挿図番号	遺構番号	器　種	計測値(cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　考
266	P 3	叩　石	13.4 11.3 4.6 1070.0	砂　岩	楕円形を呈し、中央部に敲打痕がみられる。	
267	P35	砥石	(3.8) 3.8 2.9 48.0	結晶片岩	断面方形を呈して、4面共使用している。 大部分が欠損している。	
268	SK39	〃	(12.7) 5.4 4.1 410.0	砂　岩	断面方形を呈し、一部欠損している。	
269	SD 6	〃	(8.7) (3.1) 4.8 140.0		大部分が欠損している。 2面使用している。	
270	SK14	〃	(4.6) 3.3 0.5 17.5	泥　岩	表面のみ使用しており、裏面は欠損している。側面垂直に切る。	
271	SK41	〃	(8.9) 5.8 3.1 260.0	砂　岩	断面長方形で3面使用している。 欠損部分が少なくほぼ完形品。	
272	SK20	〃	21.1 (10.1) 6.5 1993.0		3面使用している。 大型品である。	
273	P 9	〃	(4.8) (1.8) 4.5 5.3		大部分が欠損している。 断面扁平な長方形を呈する。両面使用。	
274	SK30	〃	(10.6) (7.8) 5.3 470.0	砂　岩	大部分が欠損している。 断面長方形を呈し、2面使用している。	
275	P15	〃	(8.6) (2.8) 4.7 180.0	〃	断面長方形を呈し、3面使用している。	
276	SK85	〃	(5.1) 2.9 2.0 39.0	流紋岩	大部分が欠損している。 表裏の2面を使用している。 断面は長方形を呈する。	
277	SK 2	石斧	(6.8) (3.1) 1.4 50.1	砂質片岩	片刃石斧で、刃部は丁寧に研磨され作りだされている。 基部は欠損している。	
278	SK42	砥石	(3.5) (4.2) 0.9 20.0	泥　岩	断面は長方形を呈し、表裏の2面を使用している。 欠損している部分が多い。	
279	SK41	〃	(6.5) 4.5 3.3 137.0	流紋岩	4面とも使用している。 断面方形を呈し、表裏面に擦痕を有す。	
280	SK39	〃	(10.2) (3.9) 3.0 85.0		断面方形を呈する。 1面のみ使用している。	

挿図番号	遺構番号	器　種	計測値(cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　考
281	ＳＫ71	砥石	(9.5) (4.9) 3.5 240.0		表面と右側面を使用している。 断面は長方形を呈する。	
282	ＳＫ66	〃	(8.3) (5.3) 4.2 238.0		大部分が欠損している。 １面のみ使用している。	
283	ＳＫ65	〃	(3.3) (1.7) 0.9 7.5		小型の砥石で大部分が欠損している。 １面のみ使用している。	
284	ＳＫ20	〃	(11.6) (11.4) 5.6 1035.0	砂　岩	断面方形を呈する。 １面のみ使用している。	
285	Ｐ７	石臼	(24.6) (15.0) 6.0 3050.0	〃	下臼で約⅔が欠損している。 摺目は磨滅している。	
286	ＳＫ30	〃	(24.5) (15.0) 9.0 4000.0	〃	上臼で上面約24cm(復元径)の間を窪ませている。 摺目は磨滅している。約¼が残存している。	
287	ＳＫ34	〃	(22.3) (10.6) 7.9 2500.0		上臼で下端の摺目は磨滅が著しい。	
288	Ｐ４	茶臼	(21.0) (8.5) (3.5) 792.0		茶臼の破片である。大部分が欠損している。	
289	Ｐ２	台石	(18.1) 13.3 7.4 3000.0	砂　岩	大部分が欠損している。 中央部がやや窪む。	

第32表　遺構出土金属器観察表

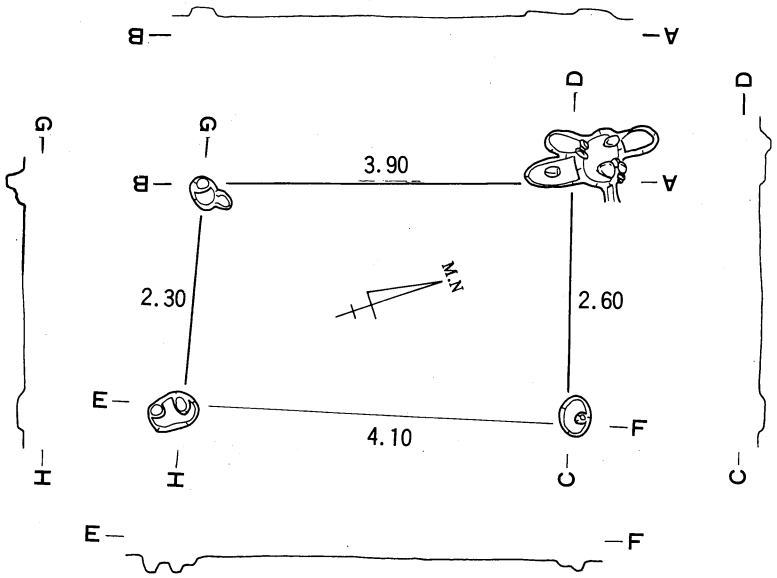
挿図番号	遺構番号	器　種	計測値(cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　考
290	ＳＫ52	釘	8.1 1.1 0.4 8.5	鉄	上下端部が欠損している。	



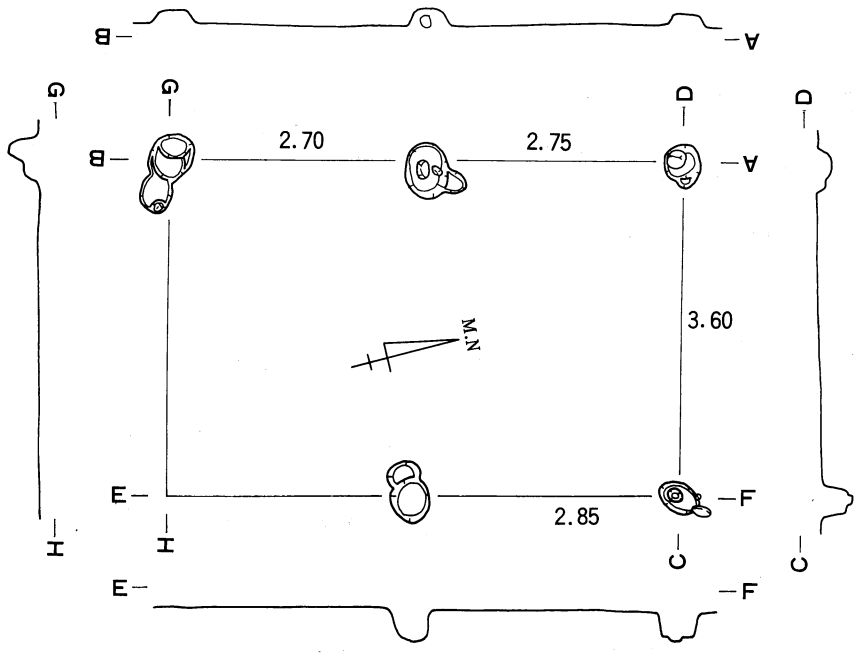


DL=7.10m 0 4m

第84図　SB1・2



SB 3

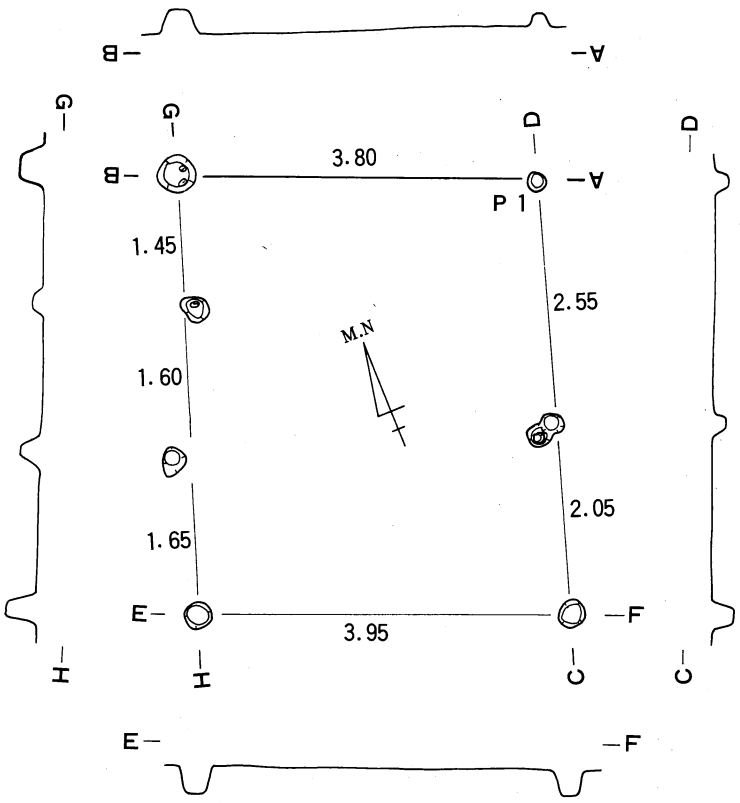


SB 4

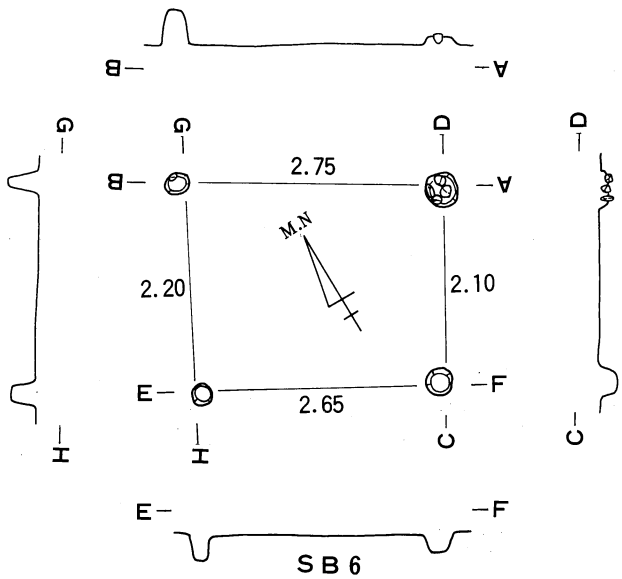
DL=7.00m

0 4m

第85図　SB 3・4



SB 5

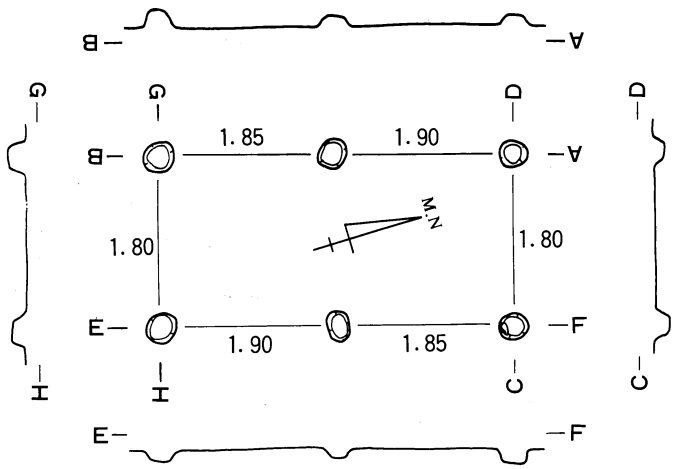


SB 6

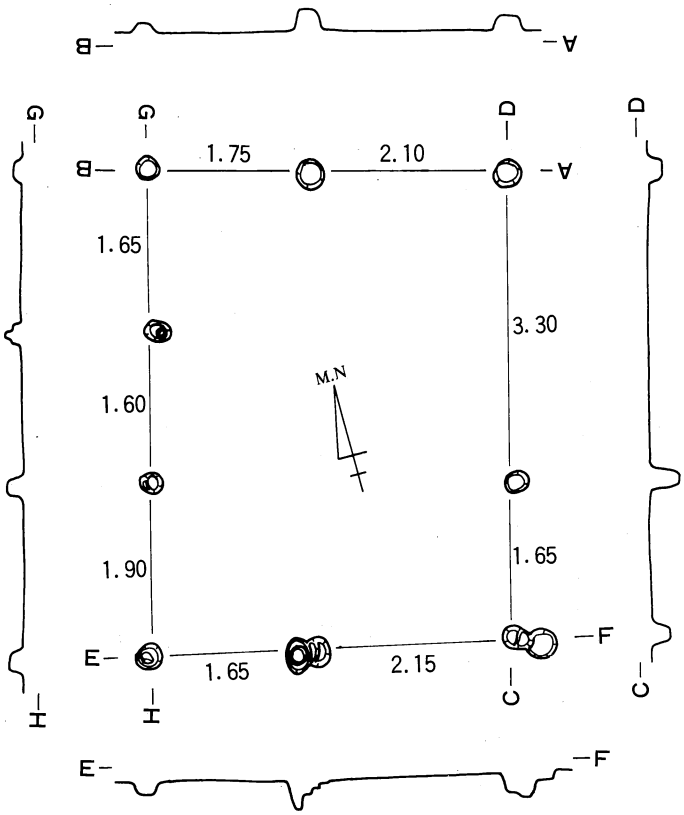
DL=7.10m

0 4m

第86図　SB 5・6



SB7

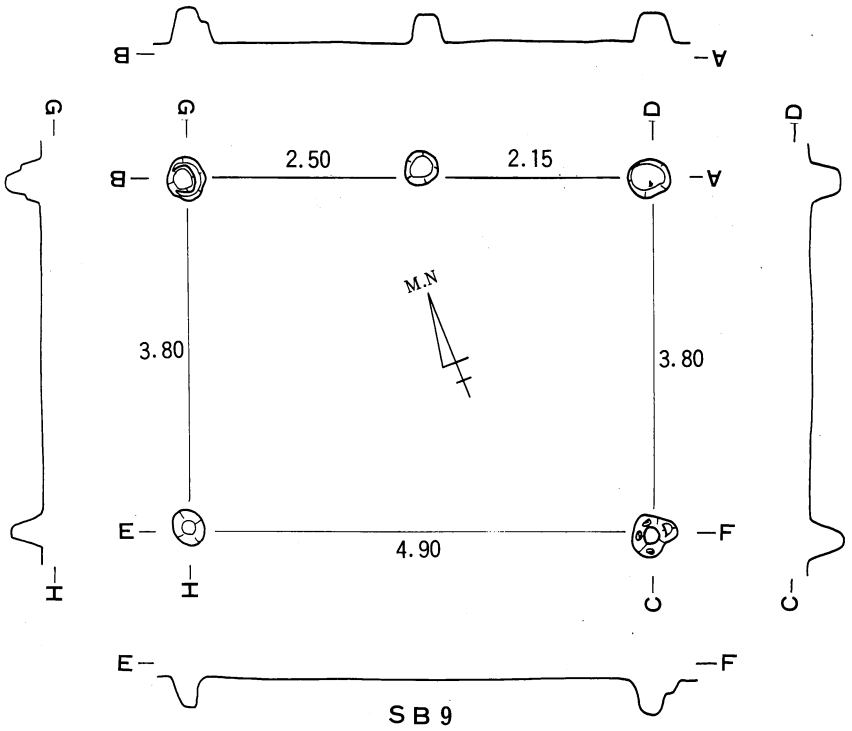


SB8

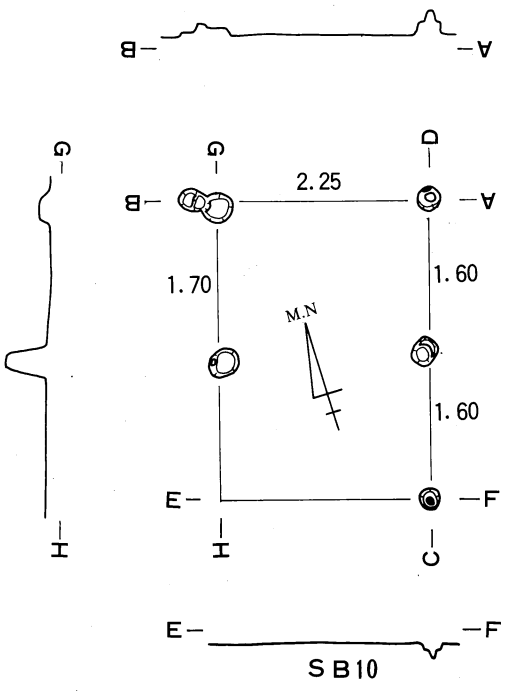
DL=7.10m

0 4m

第87図　SB7・8



SB 9

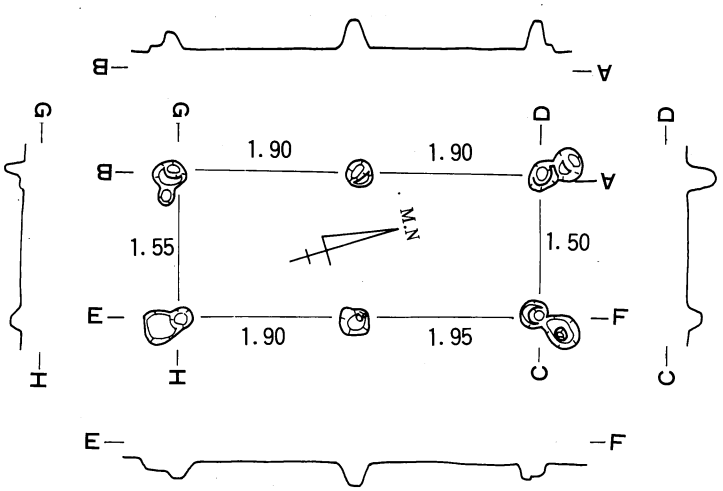


SB10

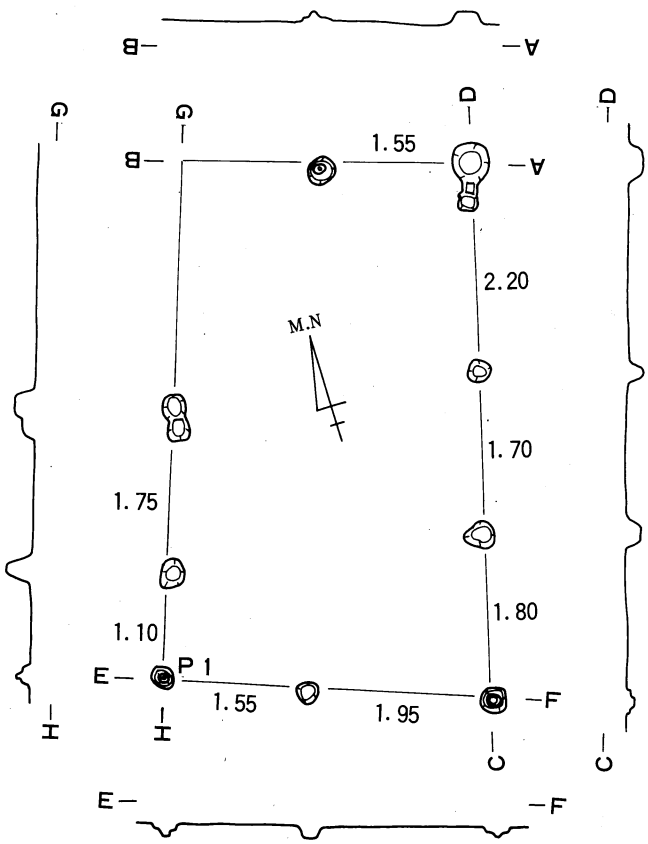
DL=7.10m

0 4m

第88図　SB 9 ・10



SB11

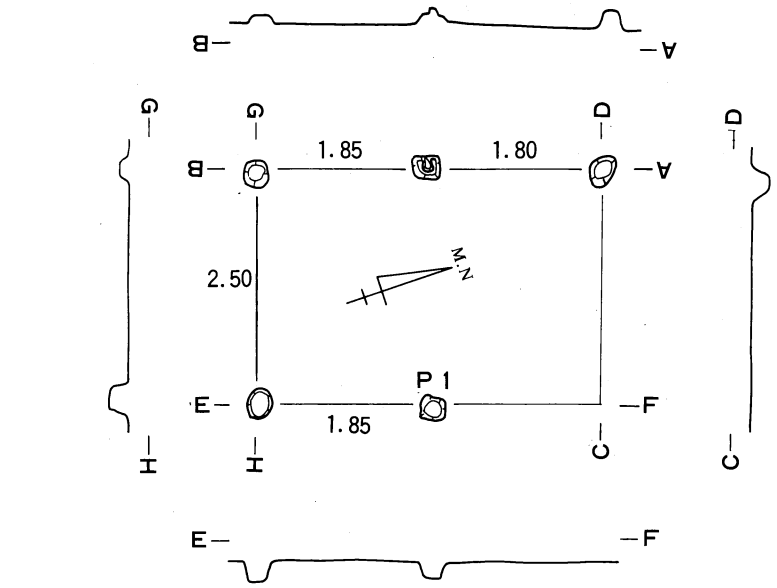


SB12

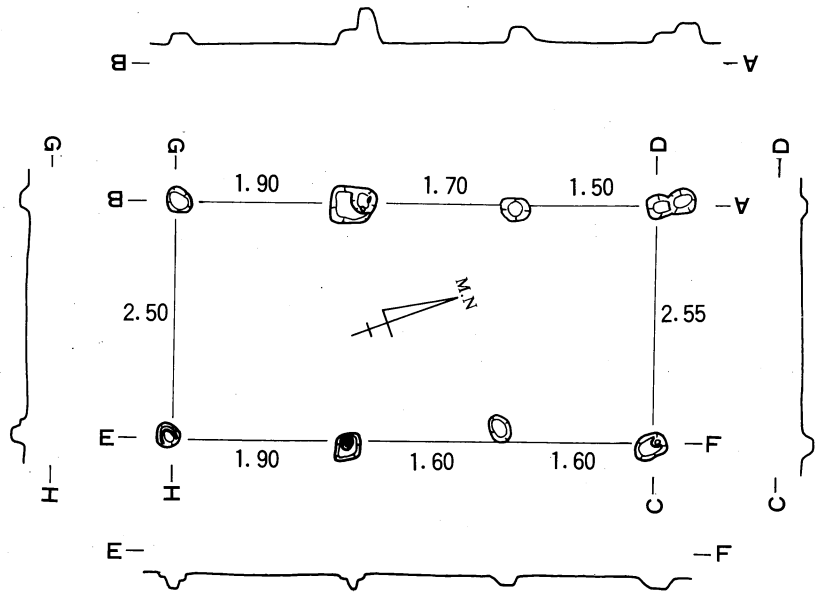
DL=7.20m

0 4m

第89図　SB11・12



SB13

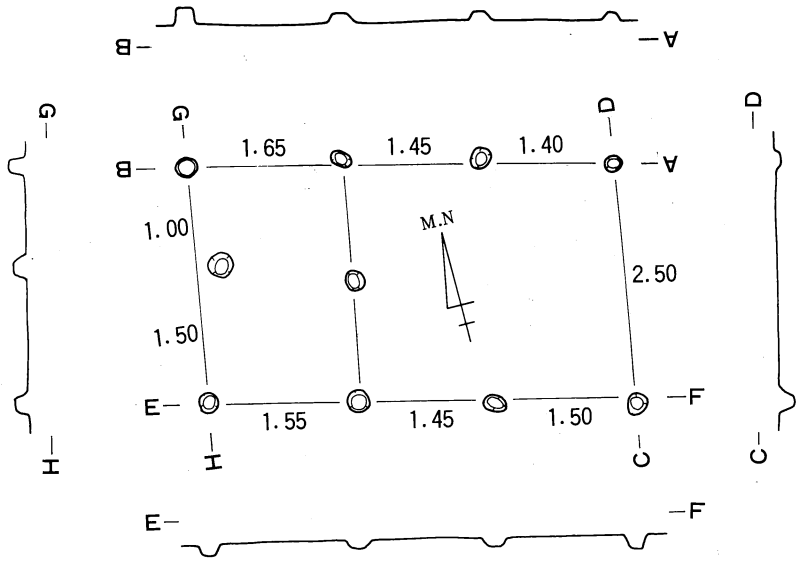


SB14

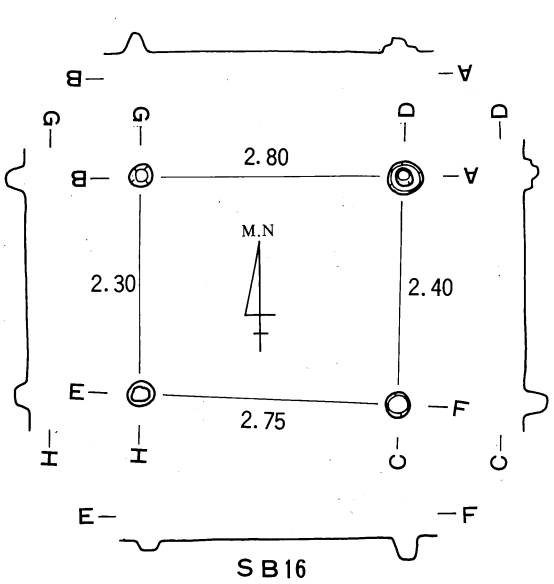
DL=7.20m

0 4m

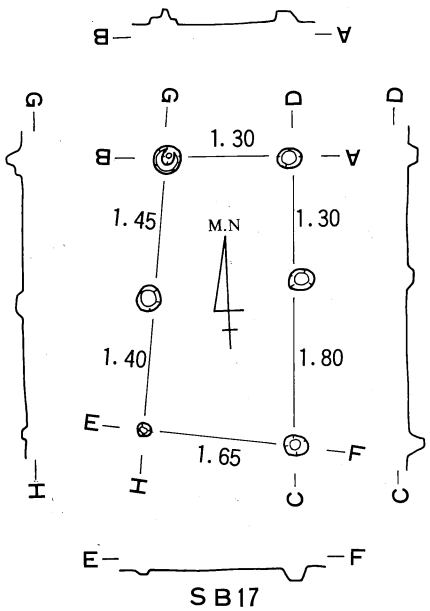
第90図　SB13・14



SB15



SB16

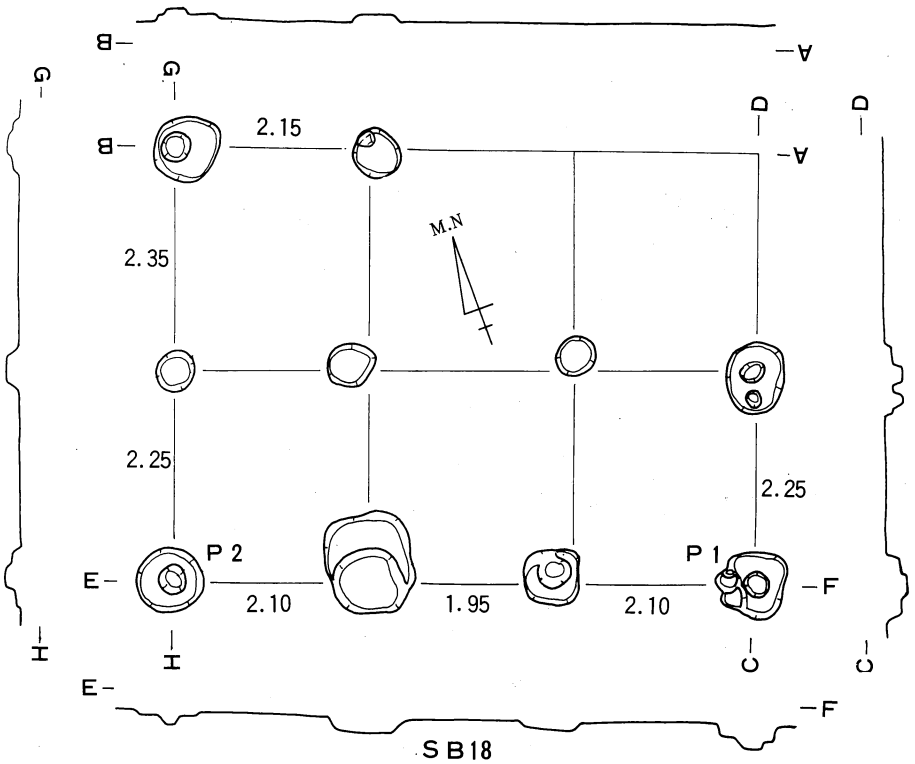


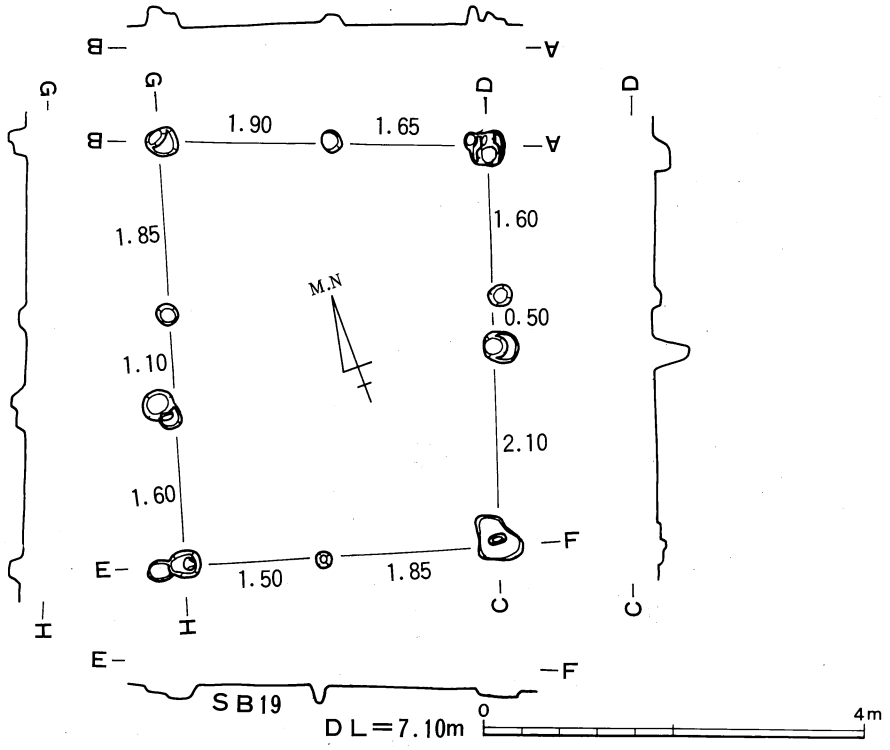
SB17

DL=7.10m

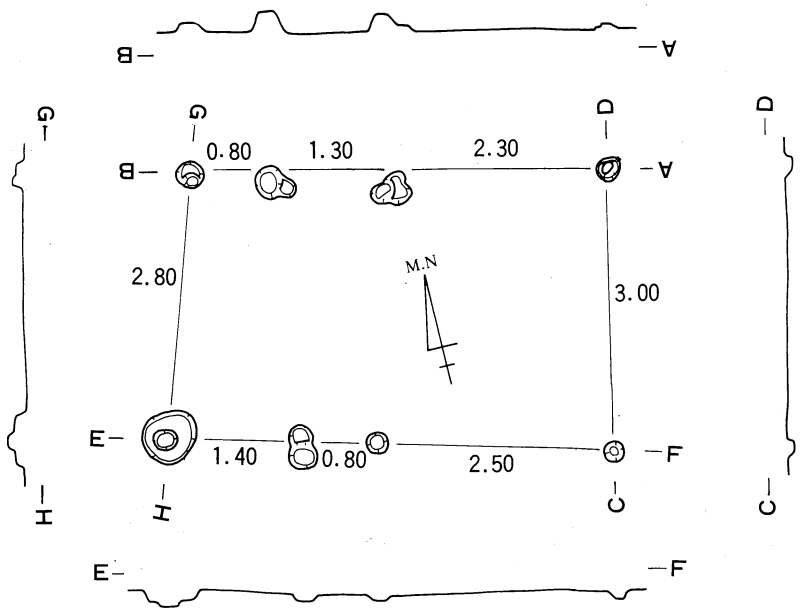
0 4m

第91図　SB15～17

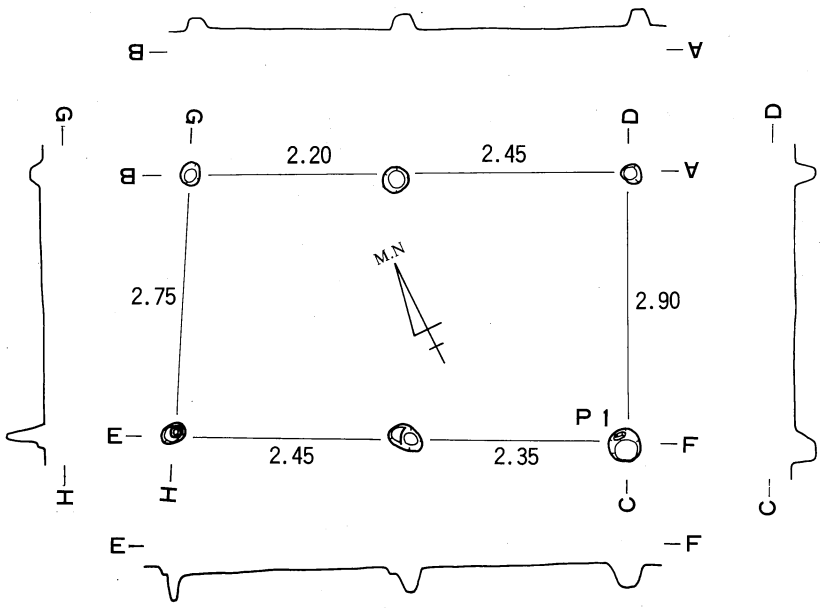

B
A
G
D
2.15
M.N
2.35
2.25
2.25
P 2
P 1
E
F
2.10
1.95
2.10
H
I
C
SB18


B
A
G
D
1.90
1.65
1.85
1.60
M.N
0.50
1.10
2.10
1.60
E
F
1.50
1.85
H
I
C
SB19
DL=7.10m
0
4m

第92図　ＳＢ18・19



SB20

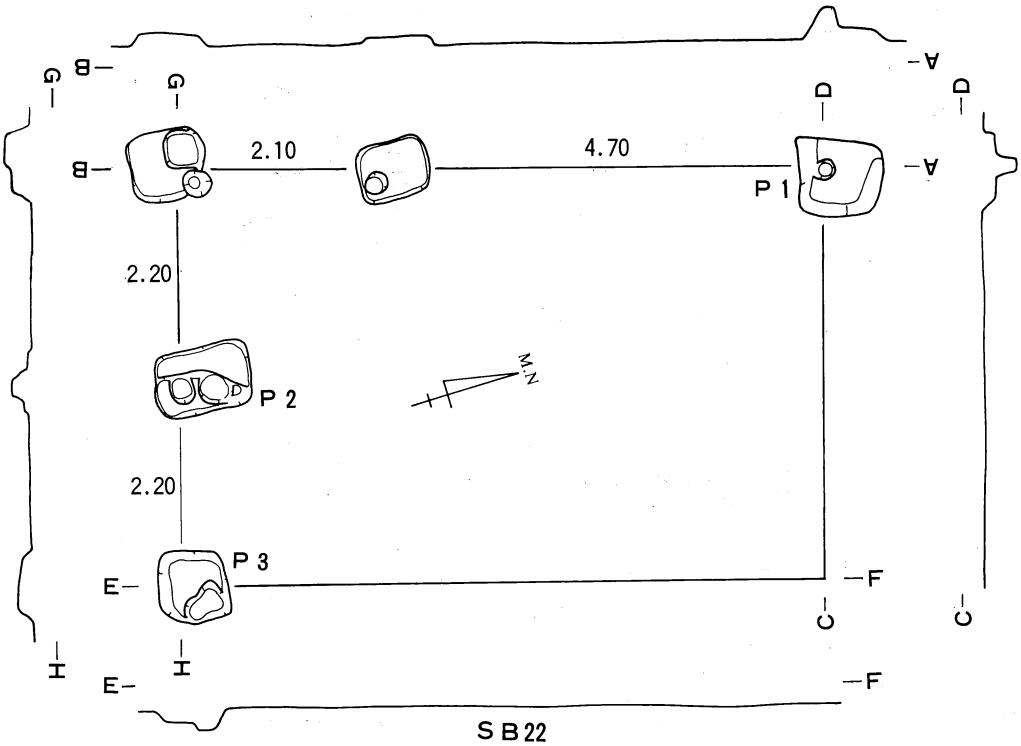


SB21

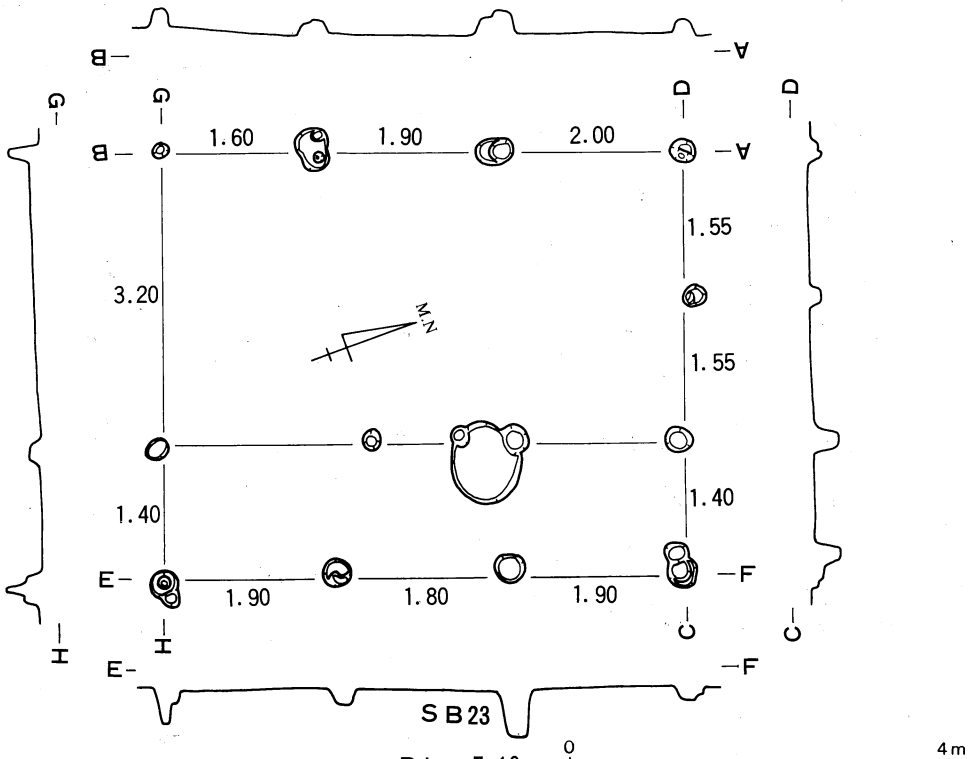
DL=7.10m

0 4m

第93図　SB20・21



SB22

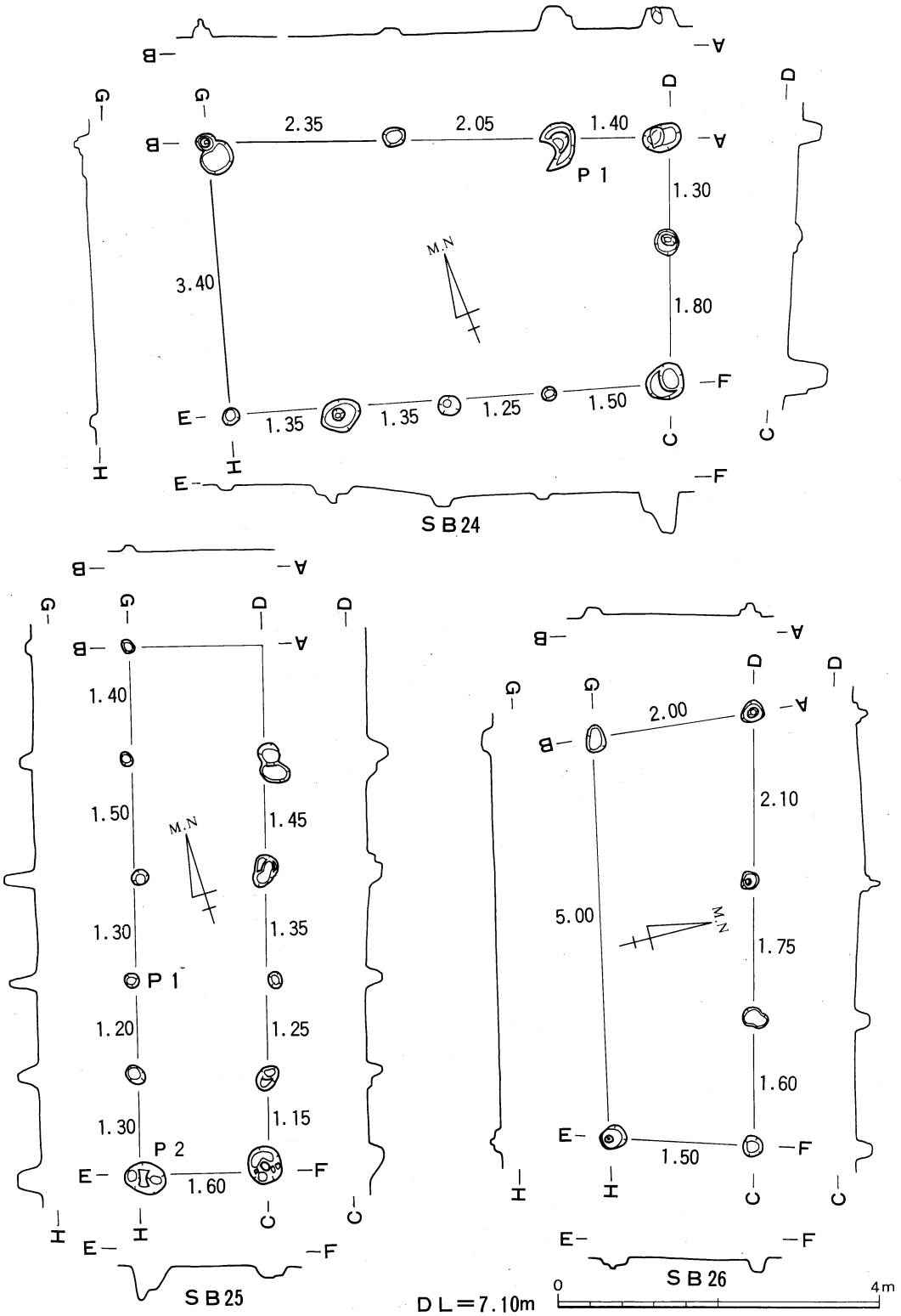


SB23

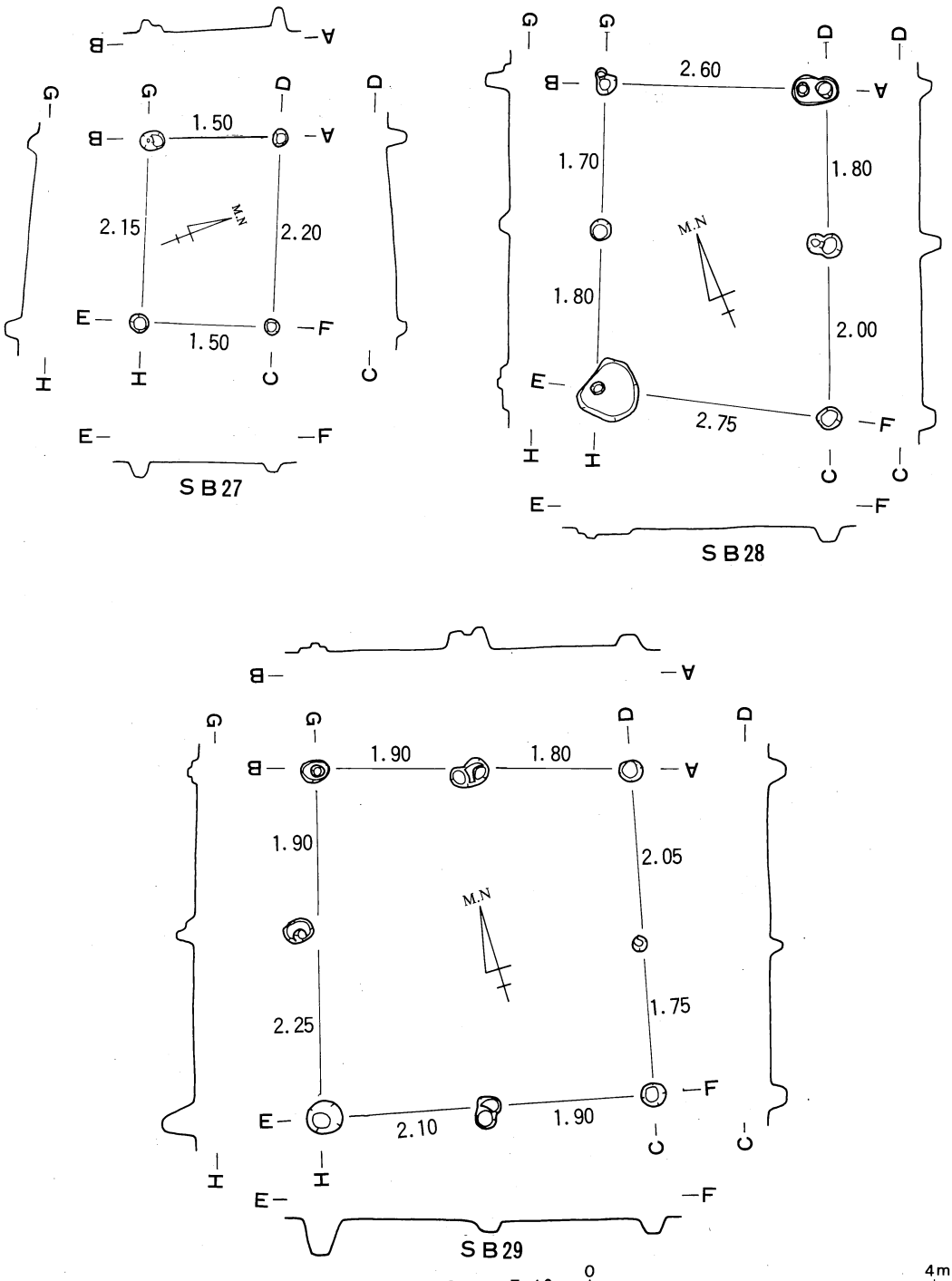
DL＝7.10m

0 4m

第94図SB22・23


SB24
2.35
2.05
1.40
P1
1.30
1.80
3.40
1.35
1.35
1.25
1.50
M.N
SB25
1.40
1.50
1.30
1.20
1.30
1.45
1.35
1.25
1.15
P2
1.60
SB26
2.00
2.10
5.00
1.75
1.60
1.50
DL=7.10m
0
4m

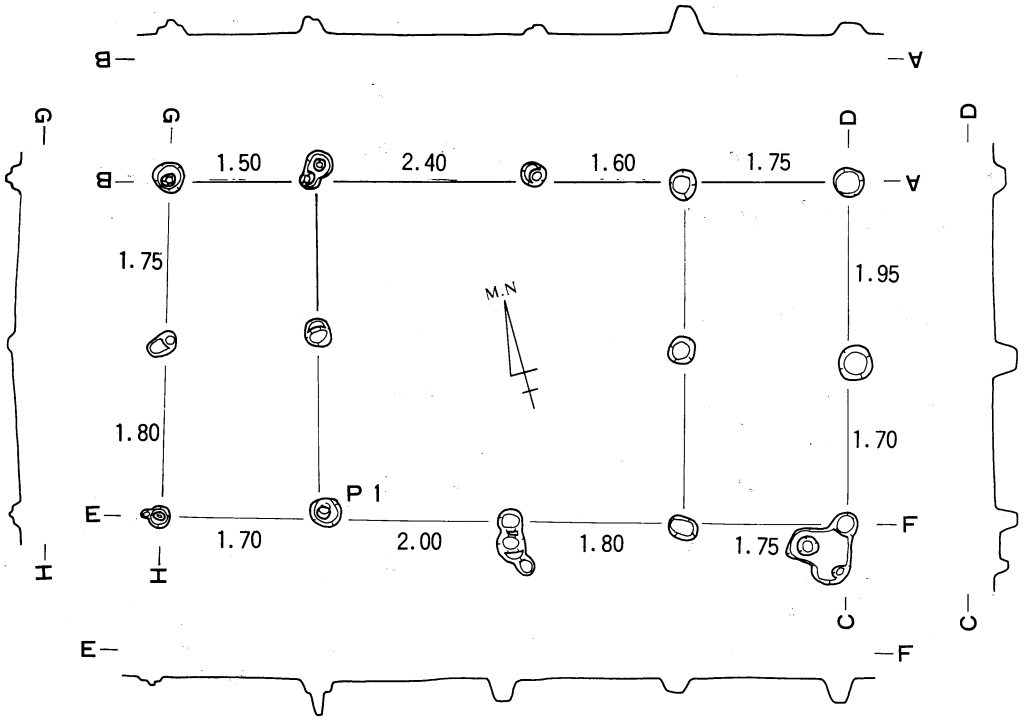
第95図　SB24～26



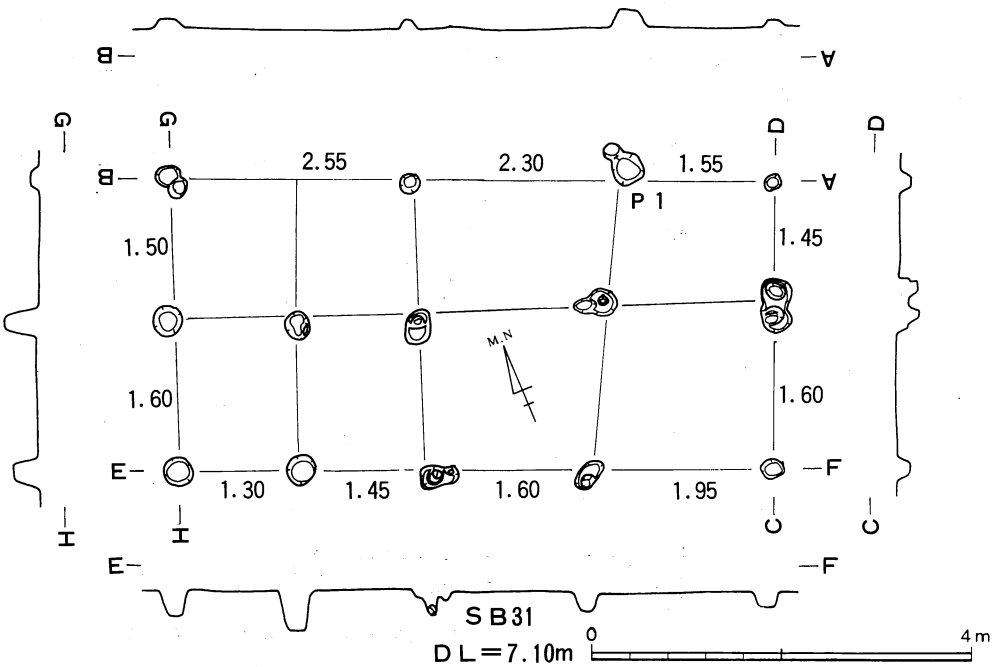
DL＝7.10m

0 4m

第96図　SB27～29



SB30

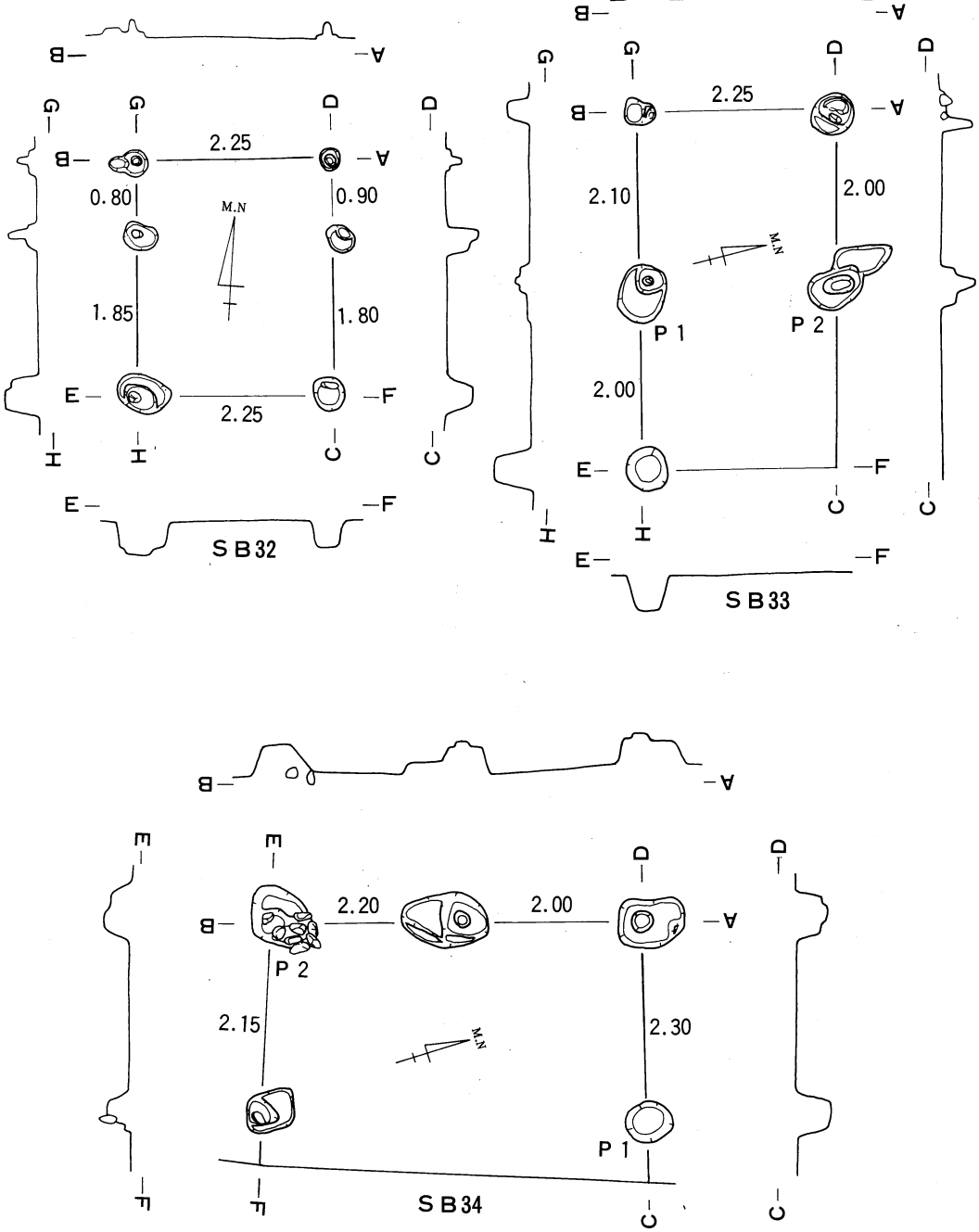


SB31

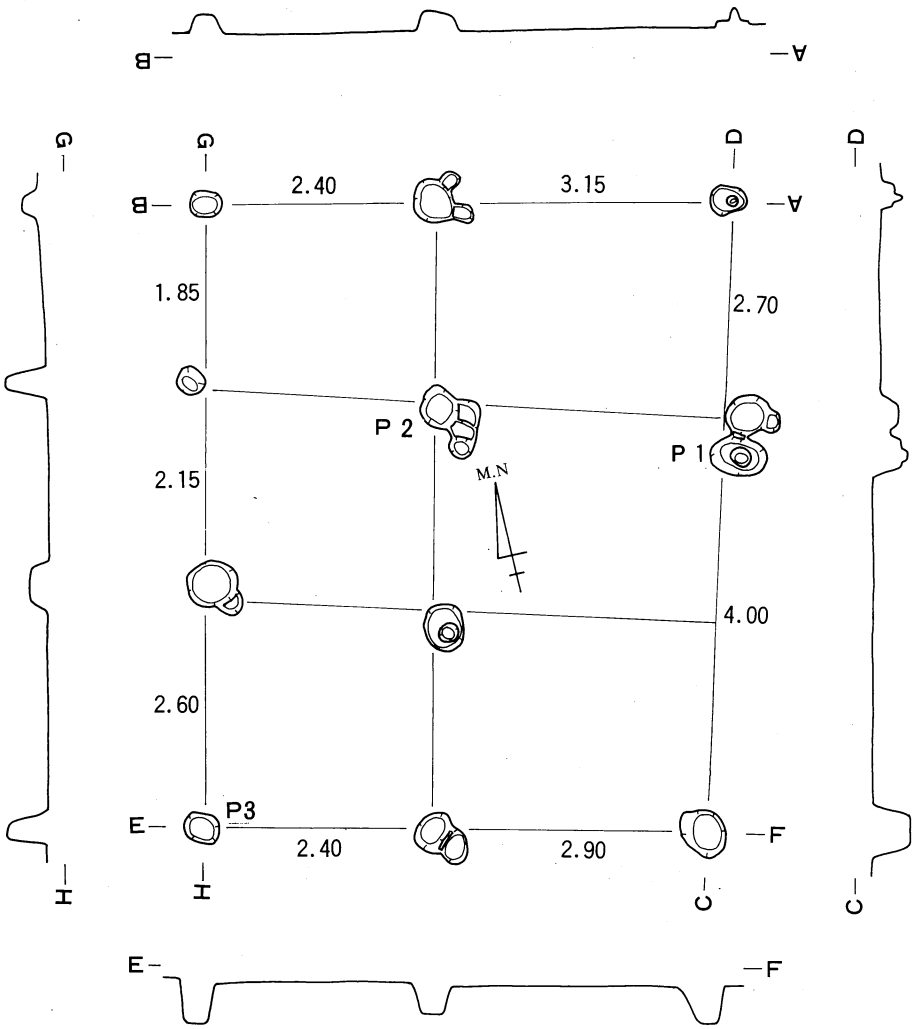
DL＝7.10m

0 4m

第97図　SB30・31


SB32
SB33
SB34
M.N
2.25
0.80
0.90
1.85
1.80
2.10
2.00
P1
P2
2.20
2.15
2.30
DL=7.00m
0
4m

第98図　ＳＢ32～34

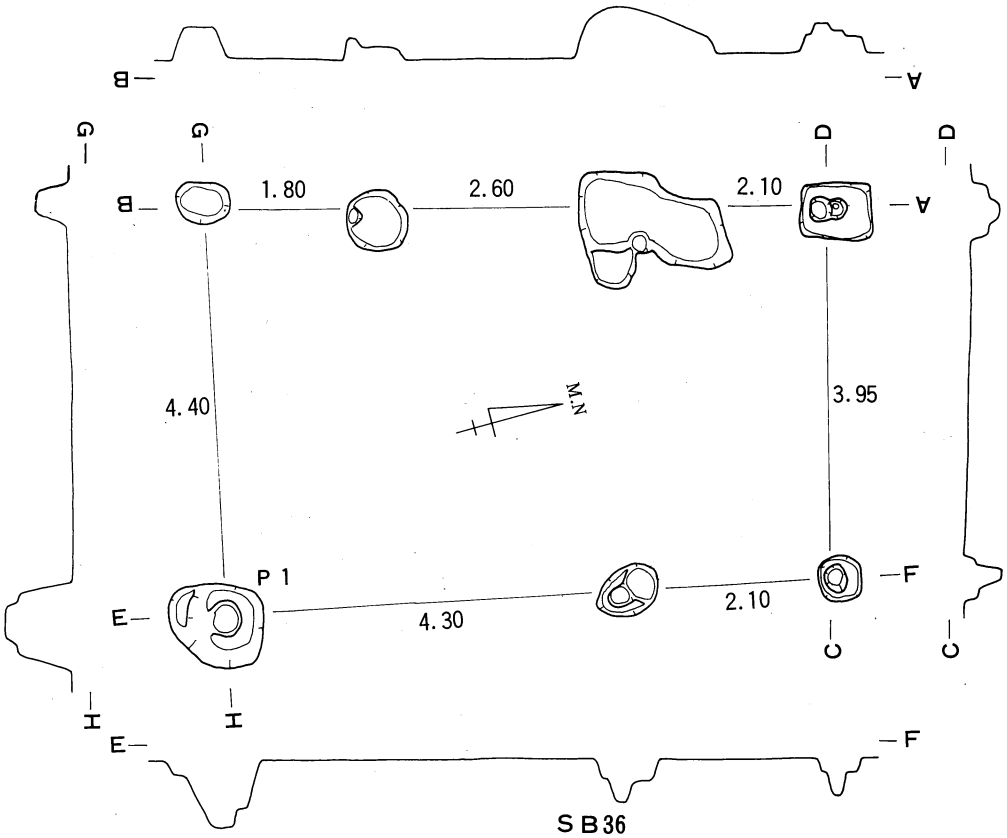


SB35

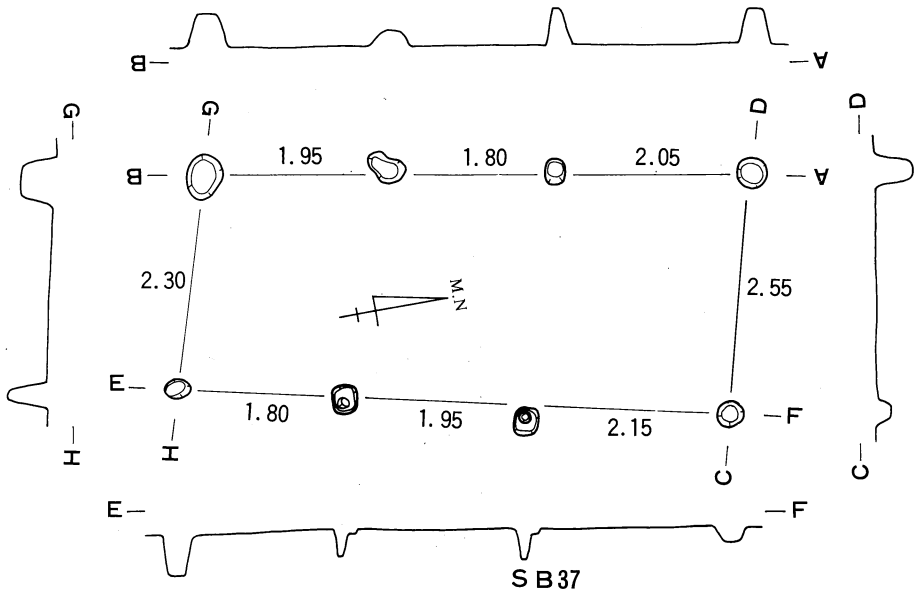
DL＝7.10m

0 4m

第99図　SB35



SB36

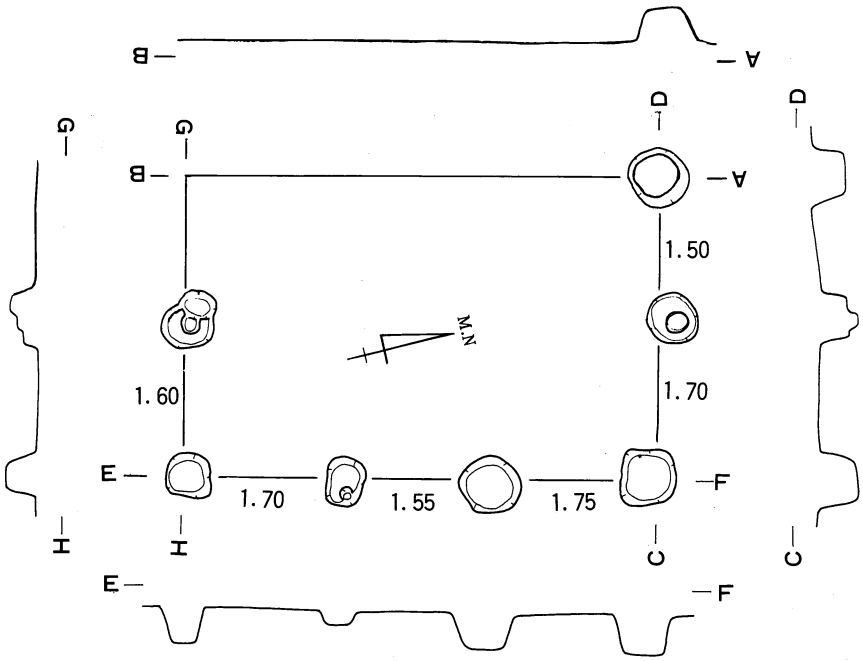


SB37

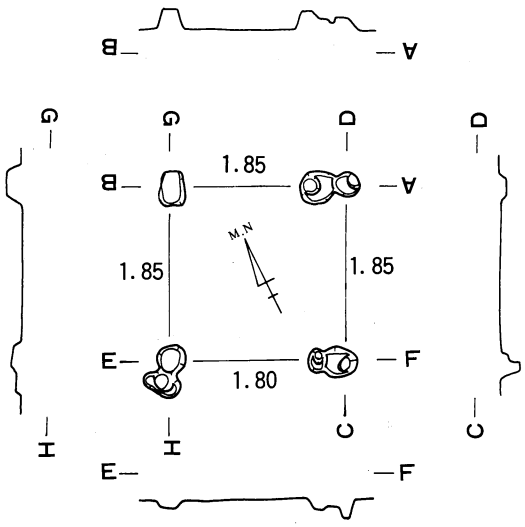
DL=7.10m

0 4m

第100図　SB36・37



SB38

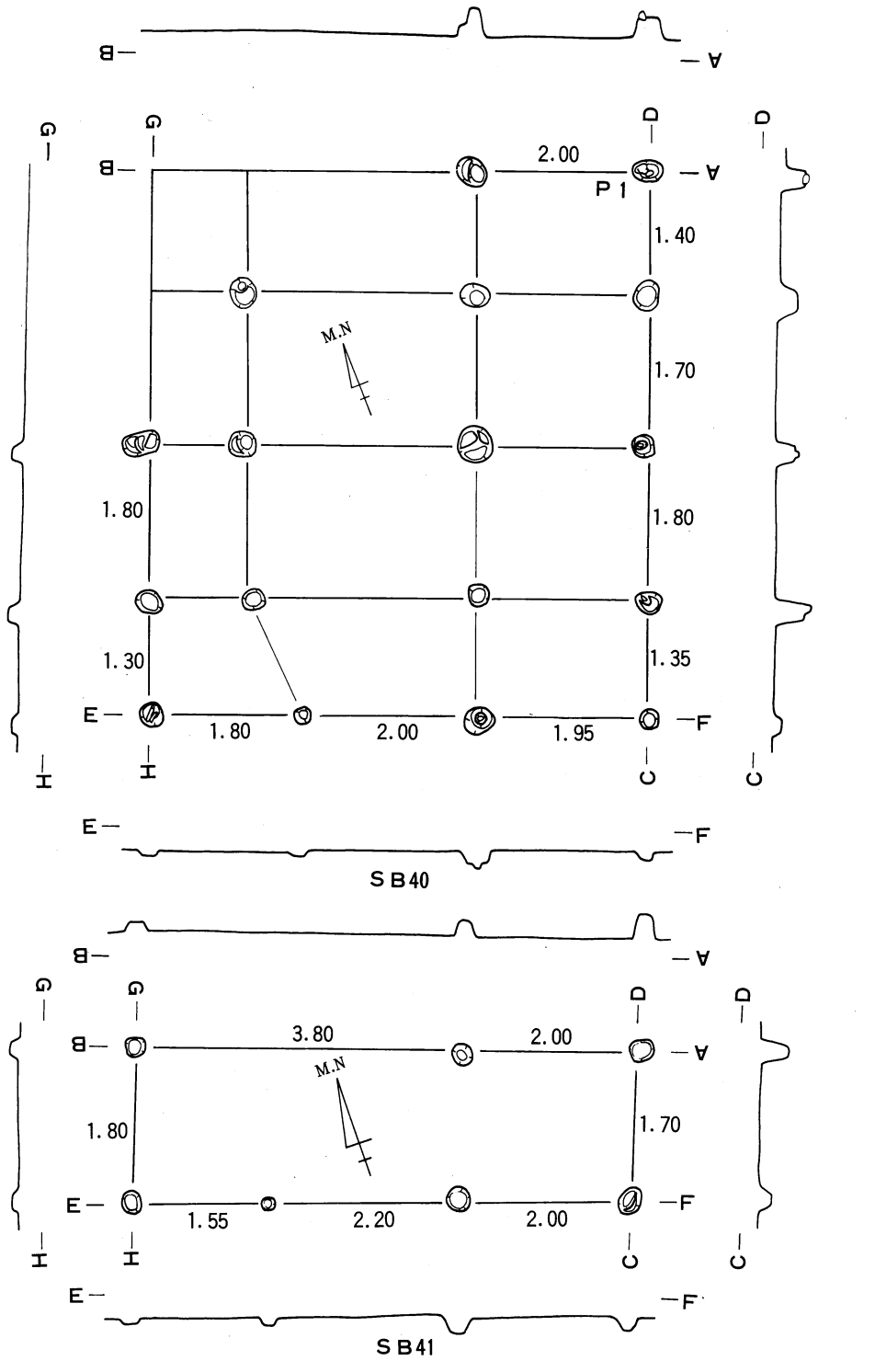


SB39

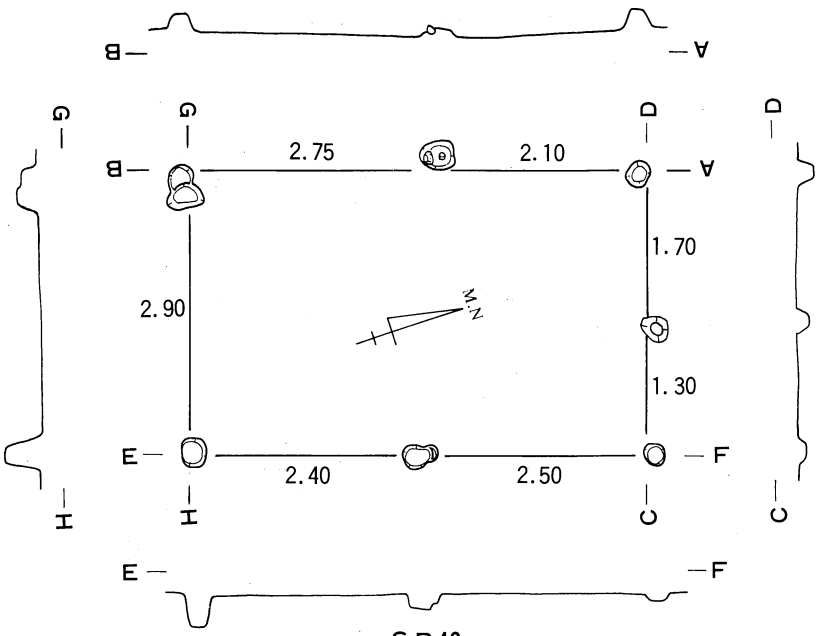
DL=7.10m

0 4m

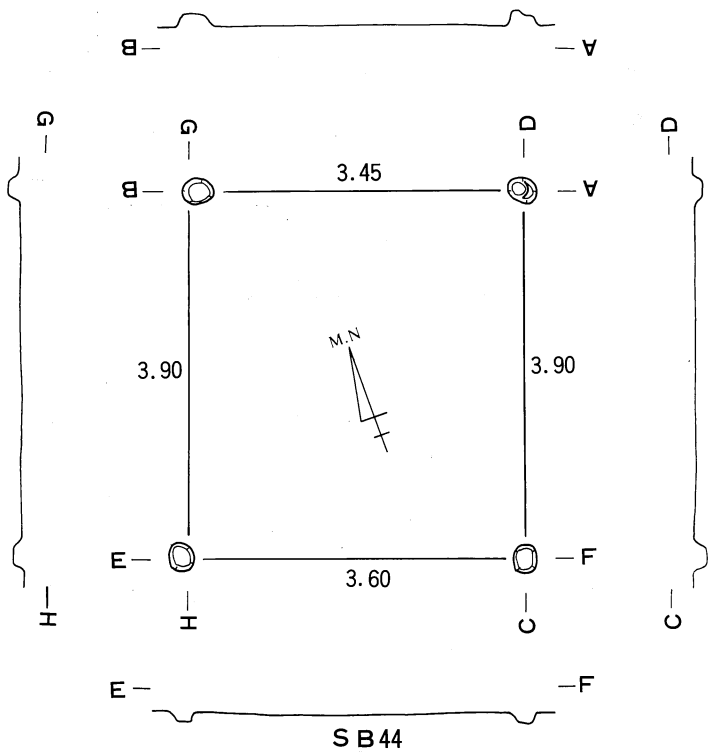
第101図　SB38・39



第102図　ＳＢ40・41



SB42

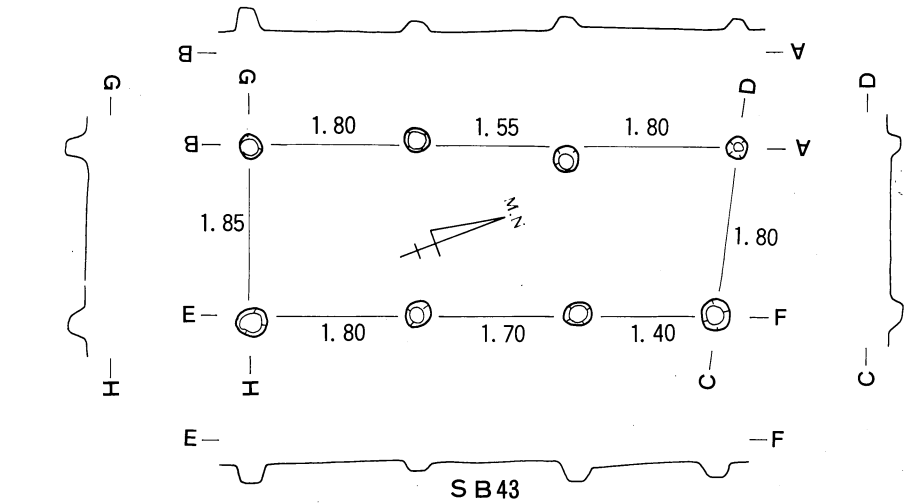


SB44

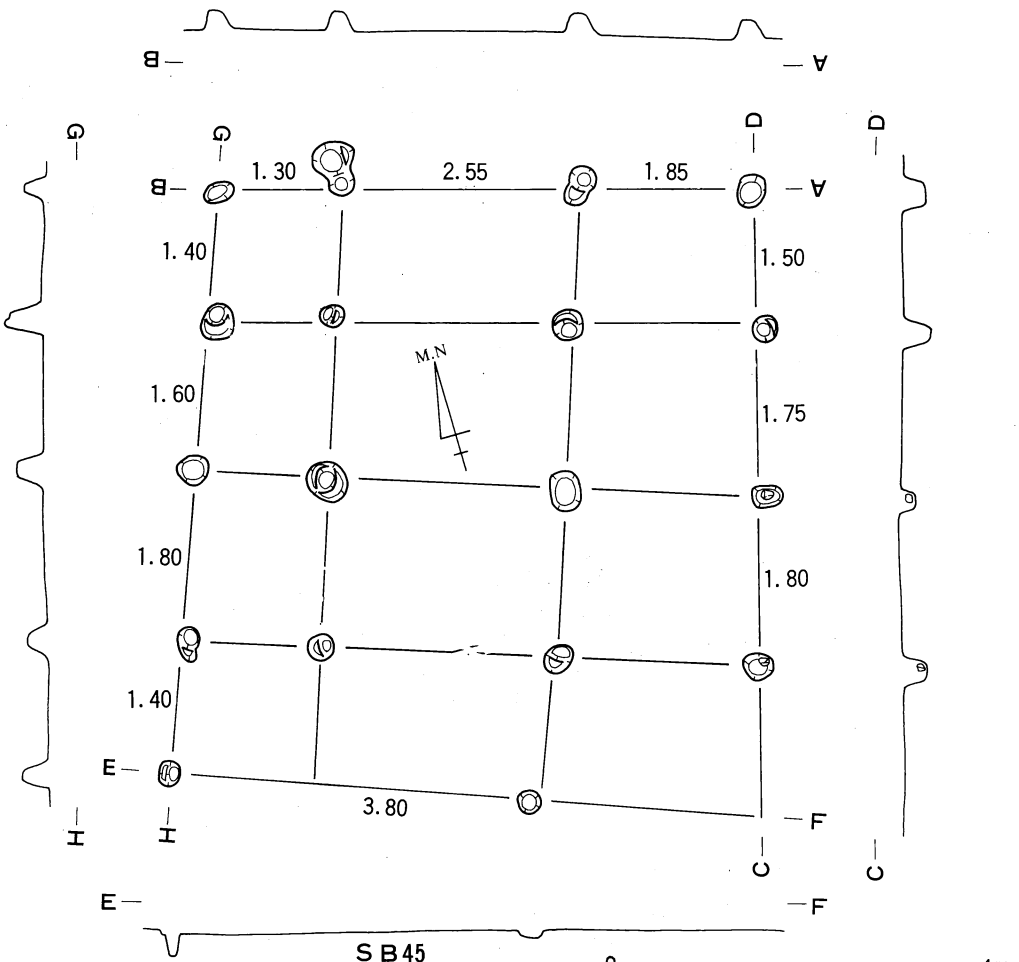
DL=7.20m

0 4m

第103図　SB42・44



SB43

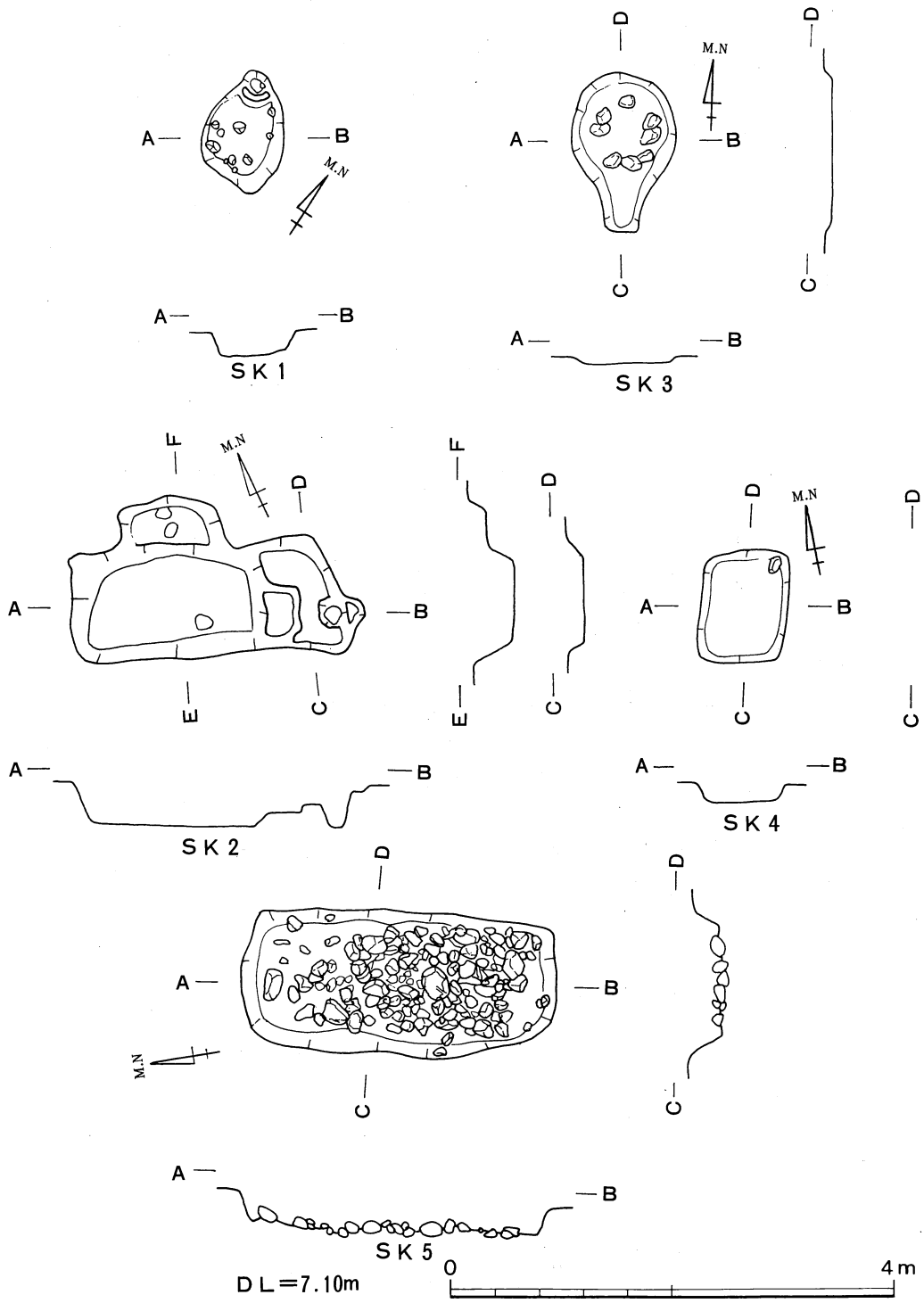


SB45

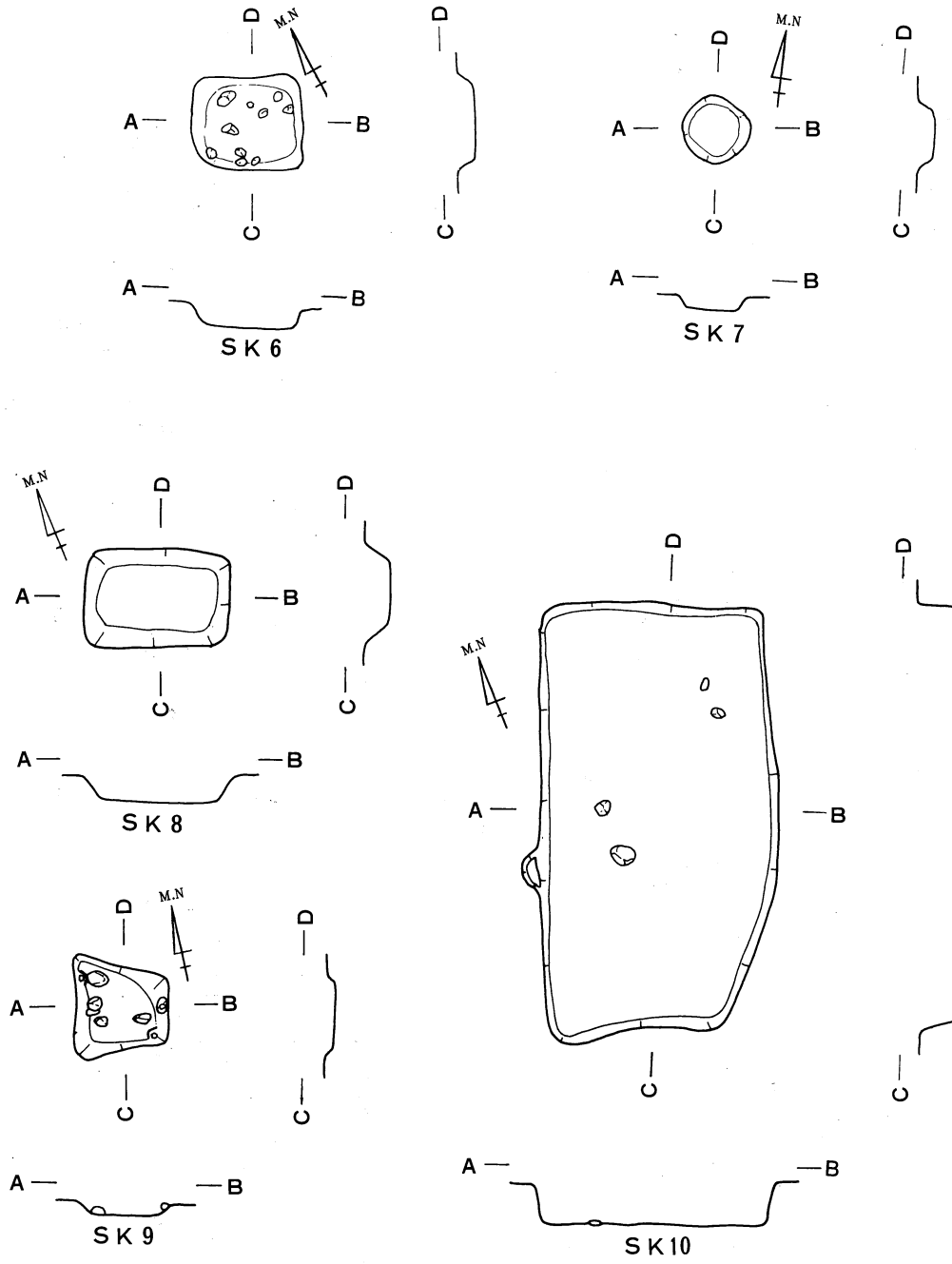
DL=7.20m

0 4m

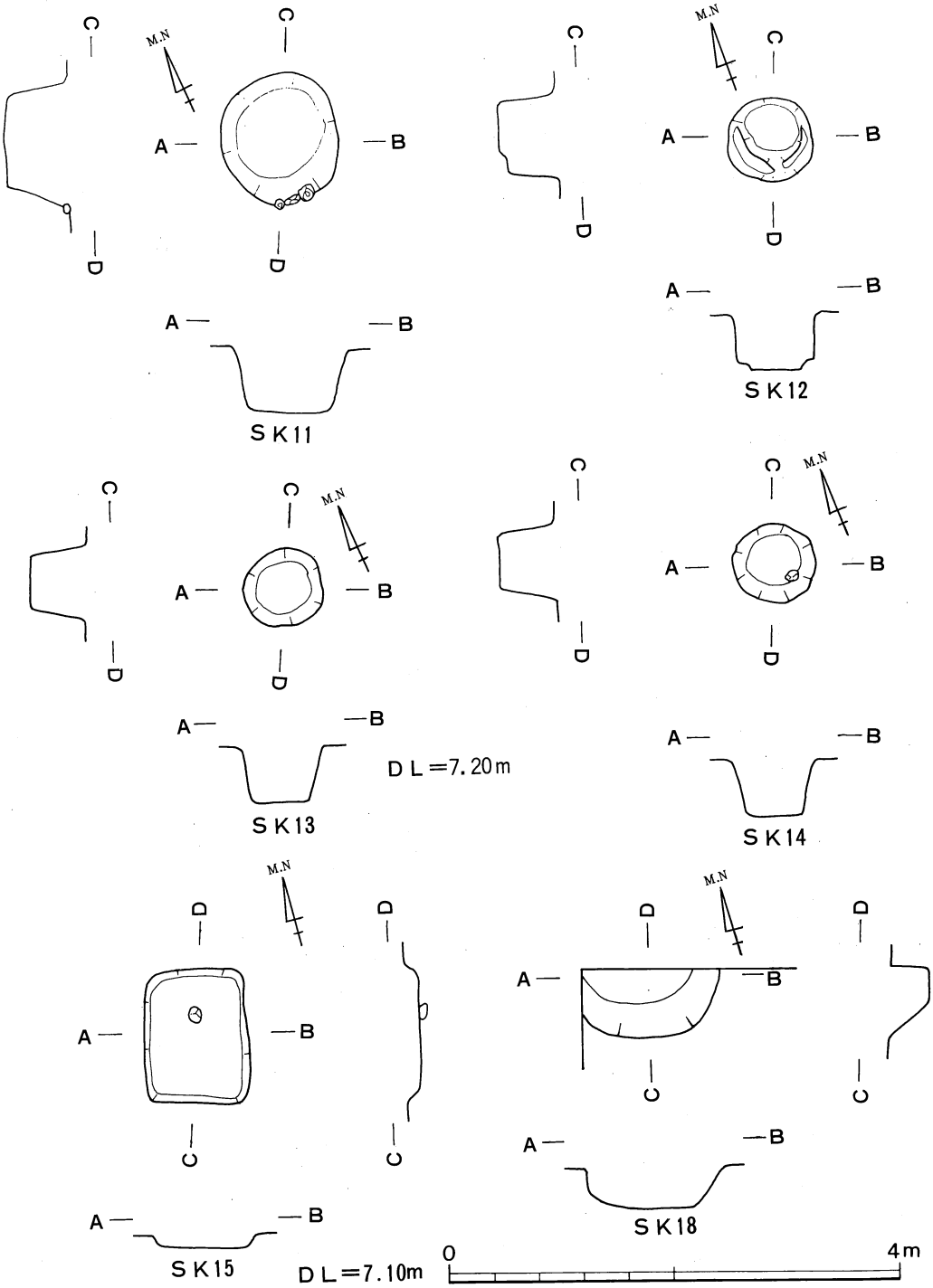
第104図　SB43・45



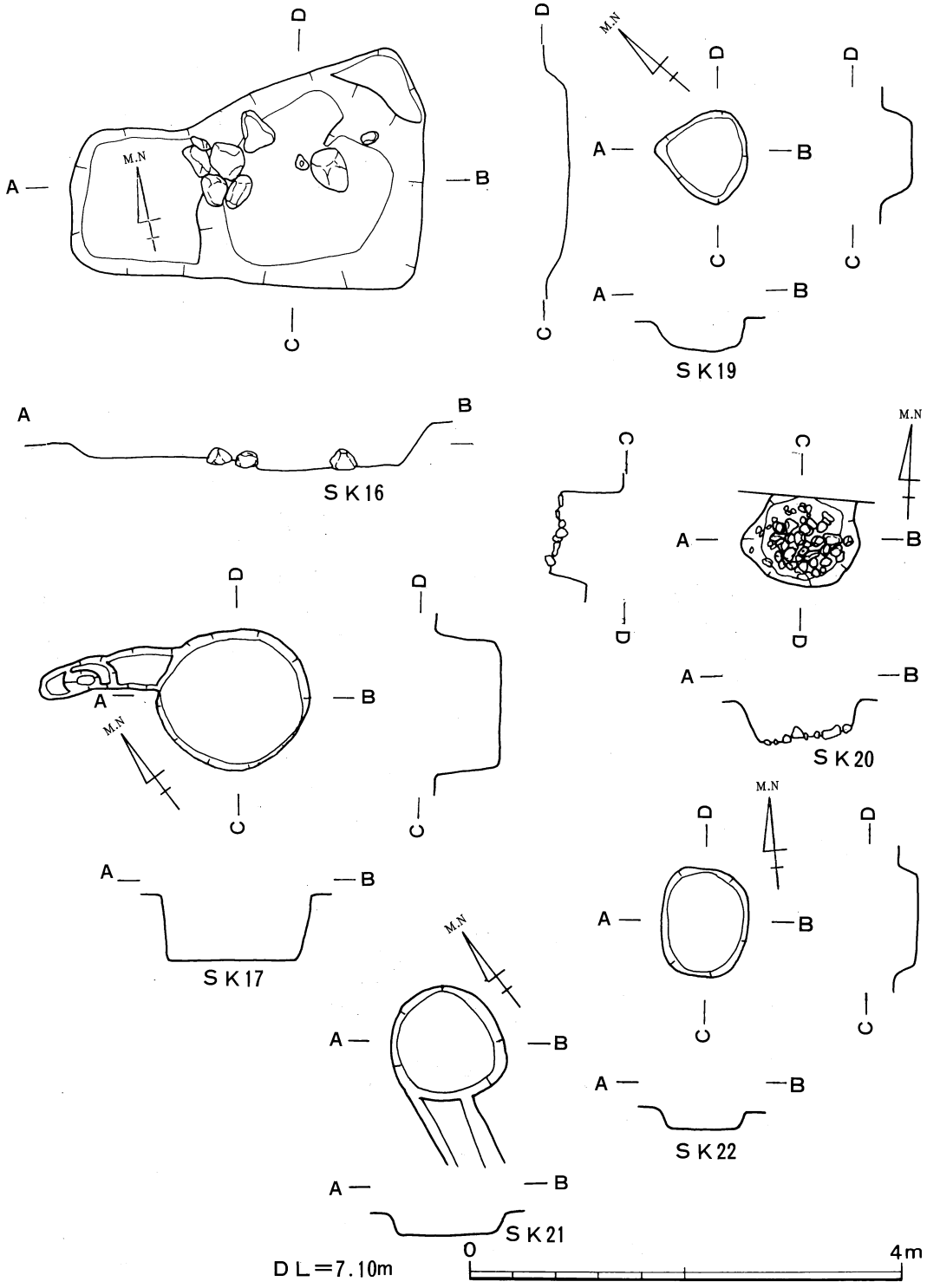
第105図　ＳＫ１～５



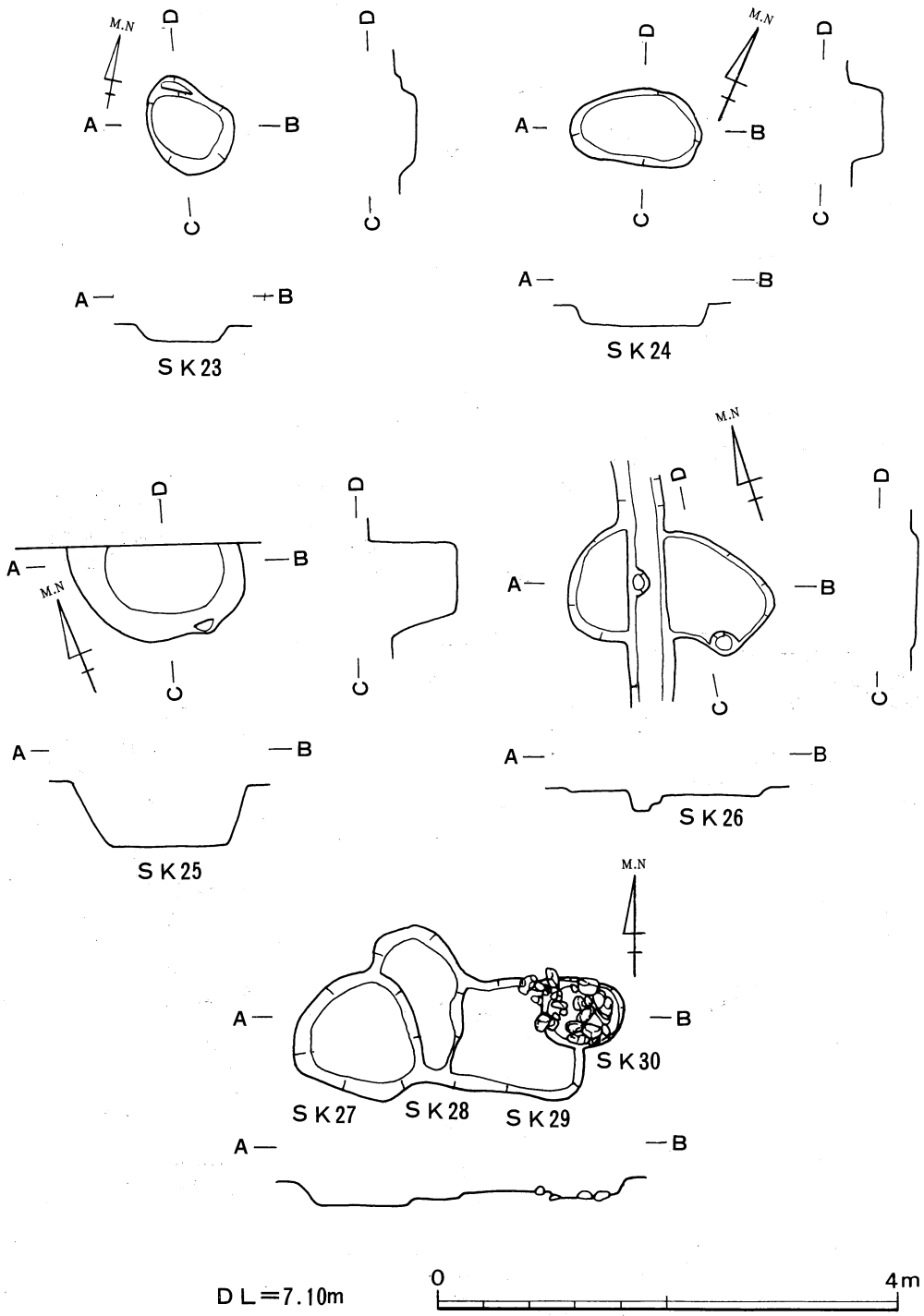
第106図　SK 6～10



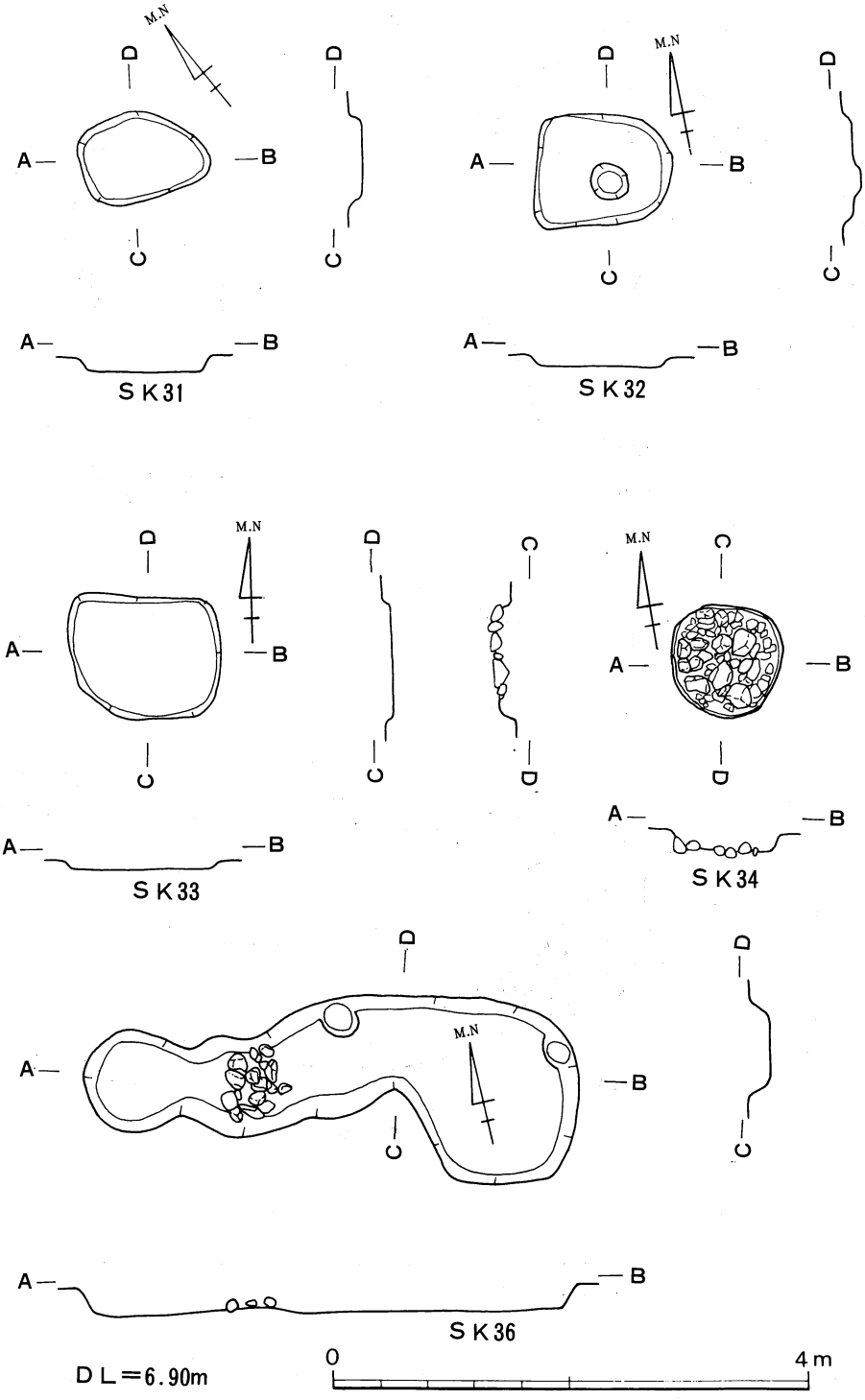
第107図　SK11～15・18



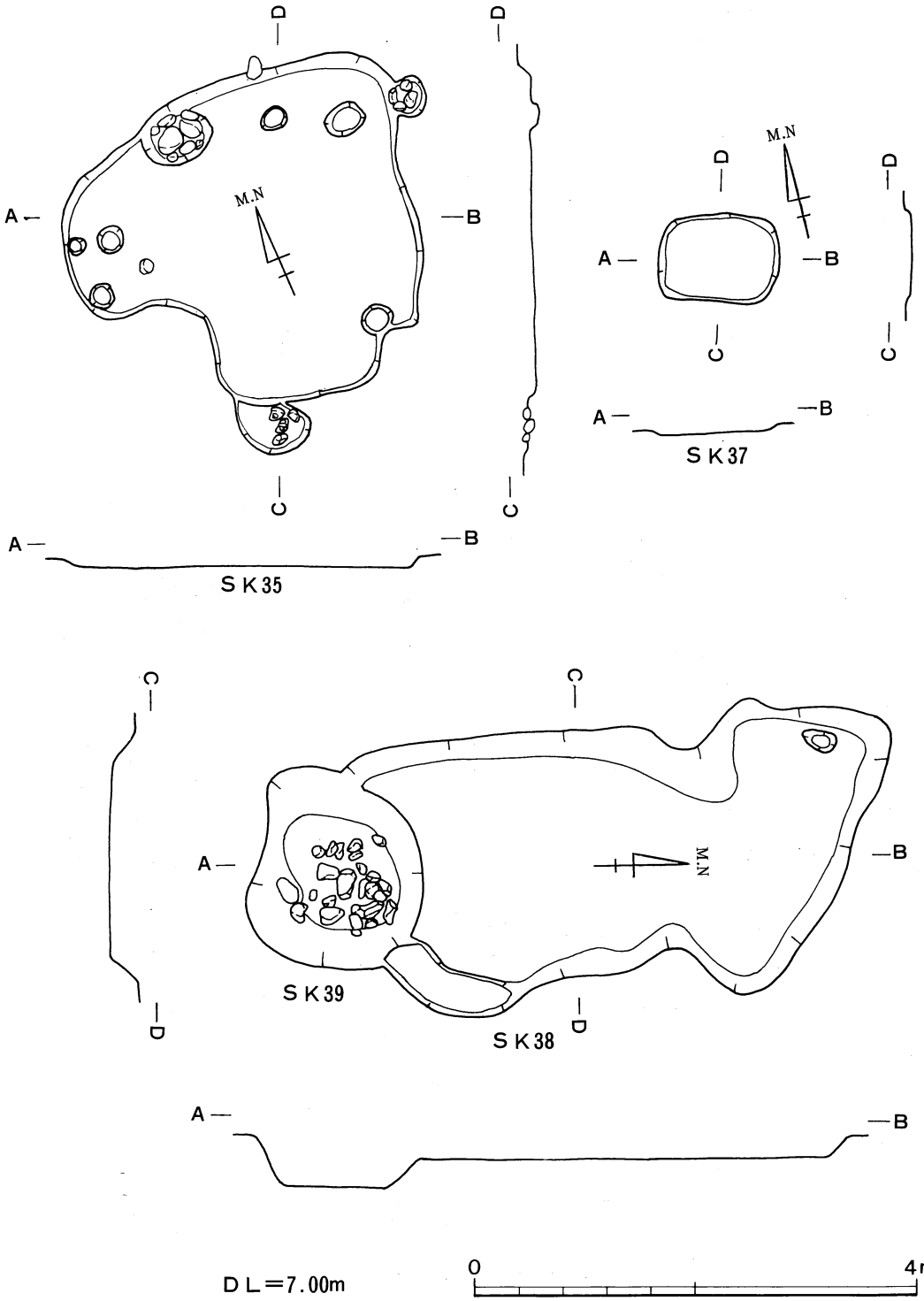
第108図　SK16・17・19～22



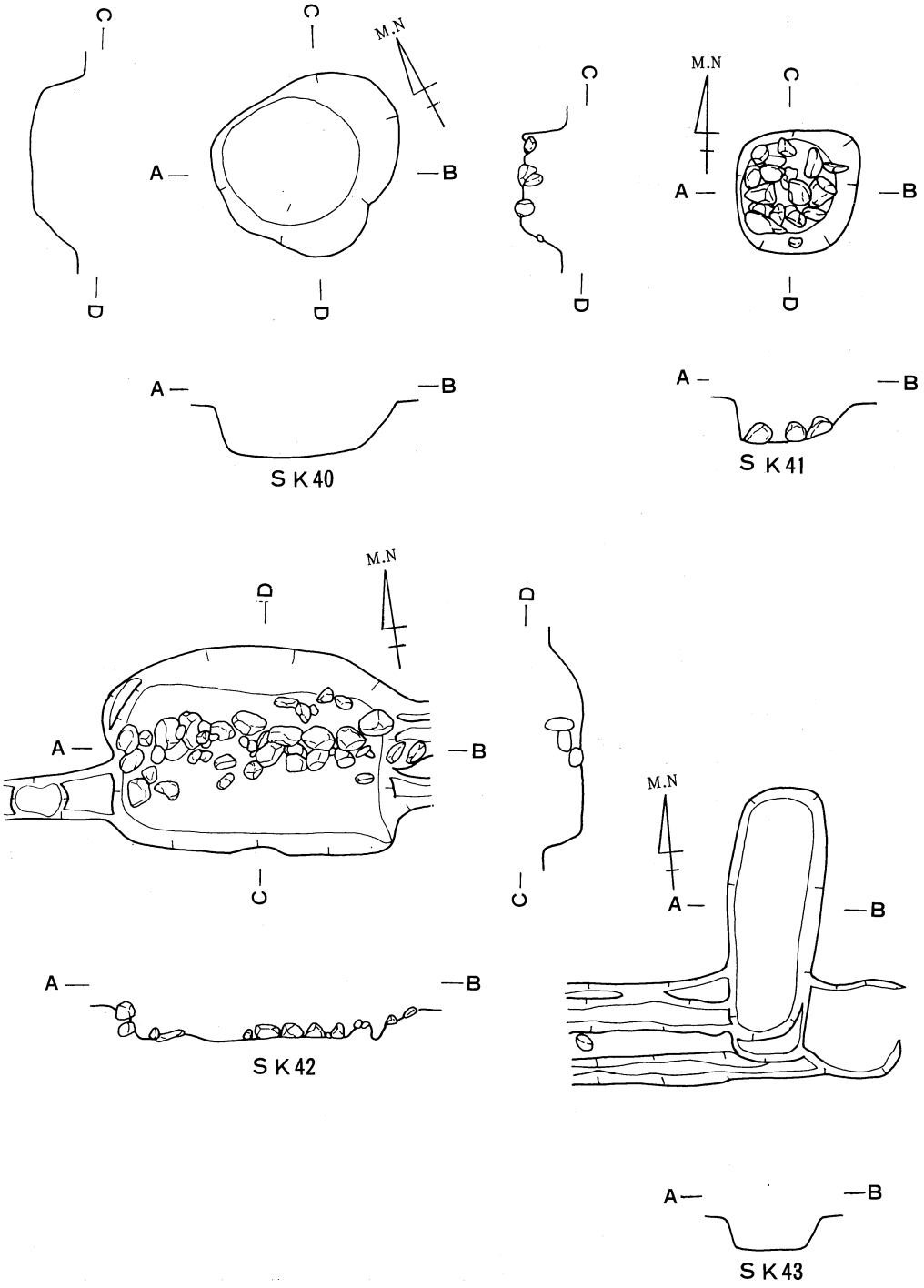
第109図　SK23～30



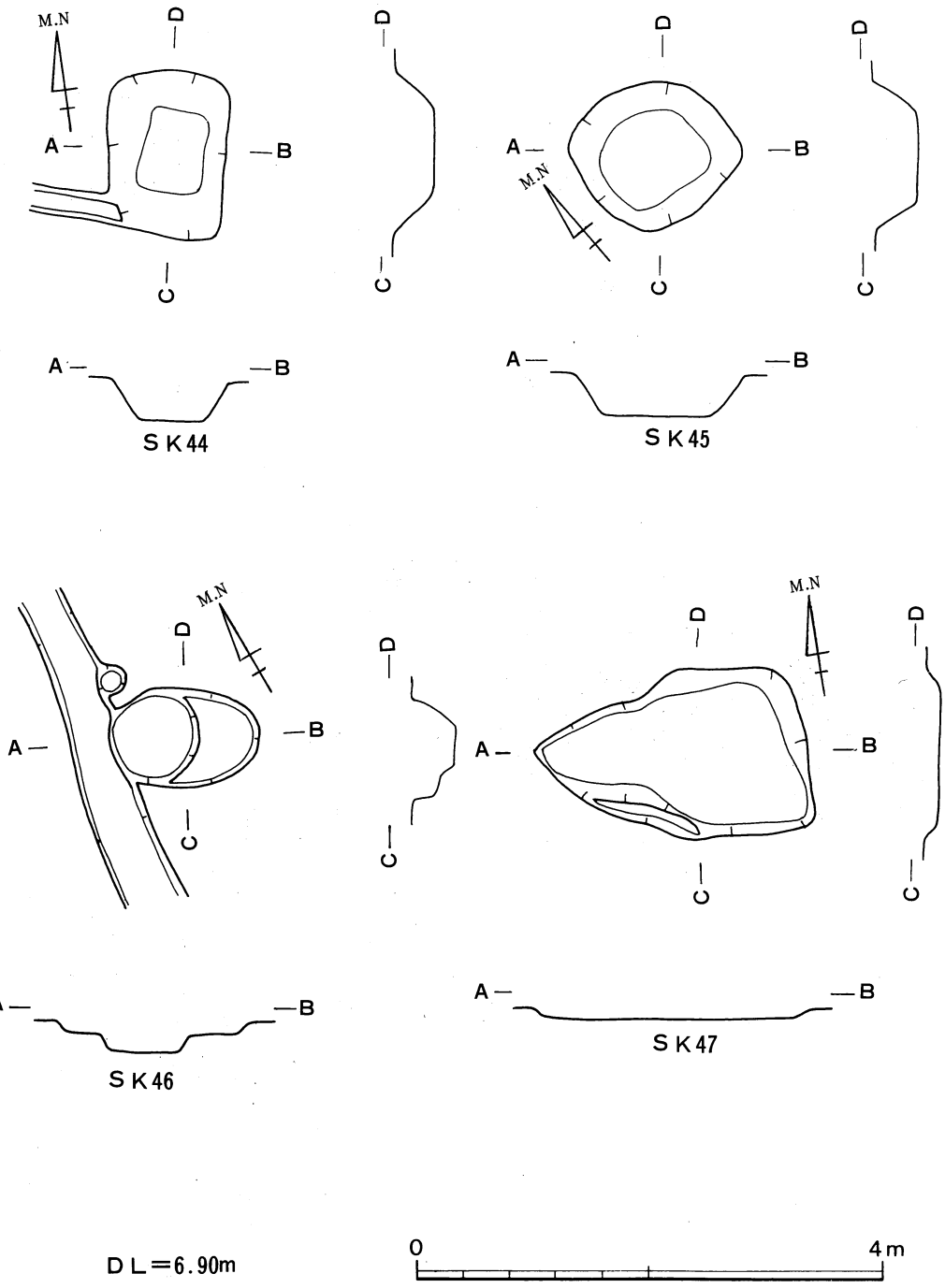
第110図　SK31～34・36



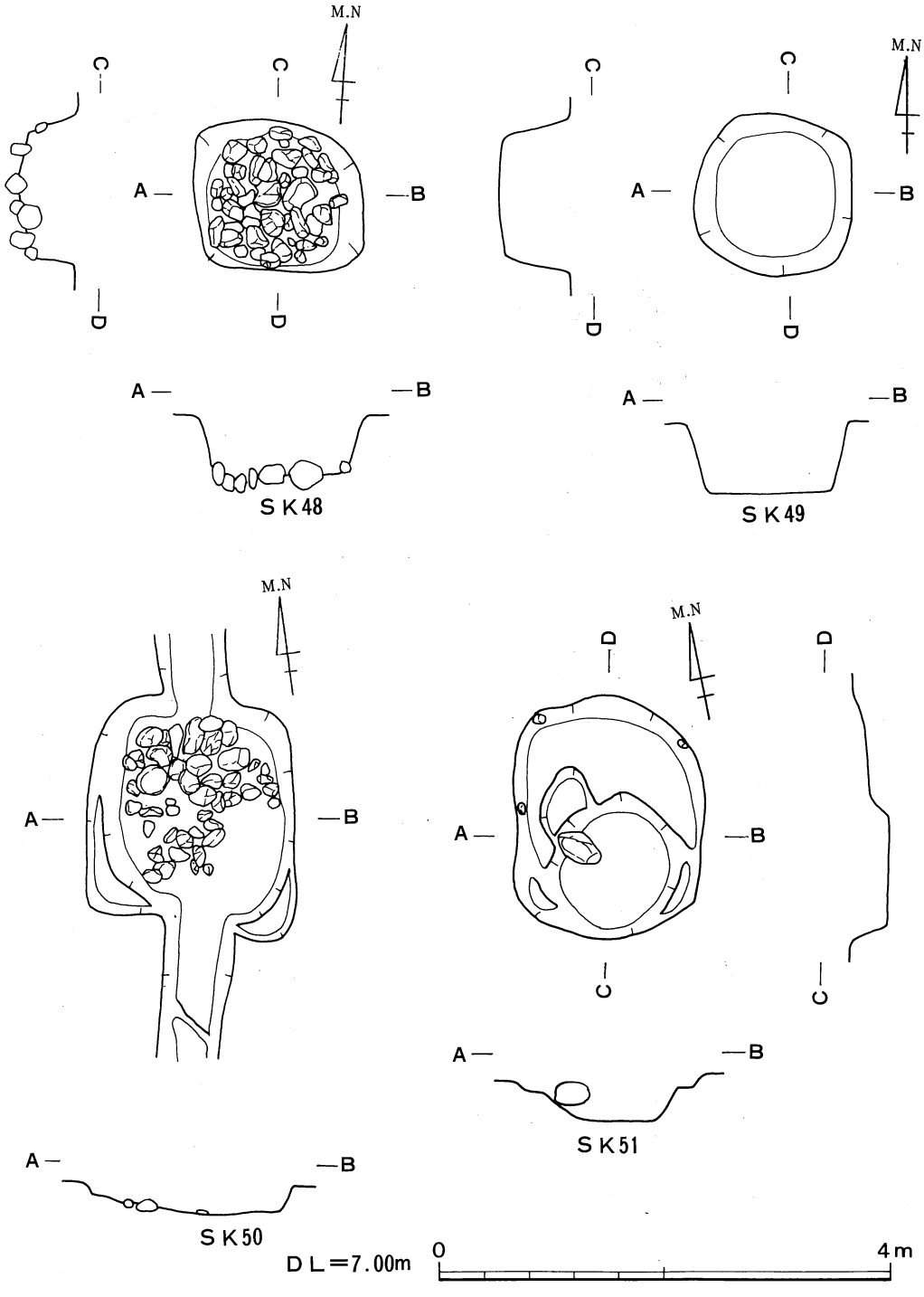
第111図　SK35・37～39



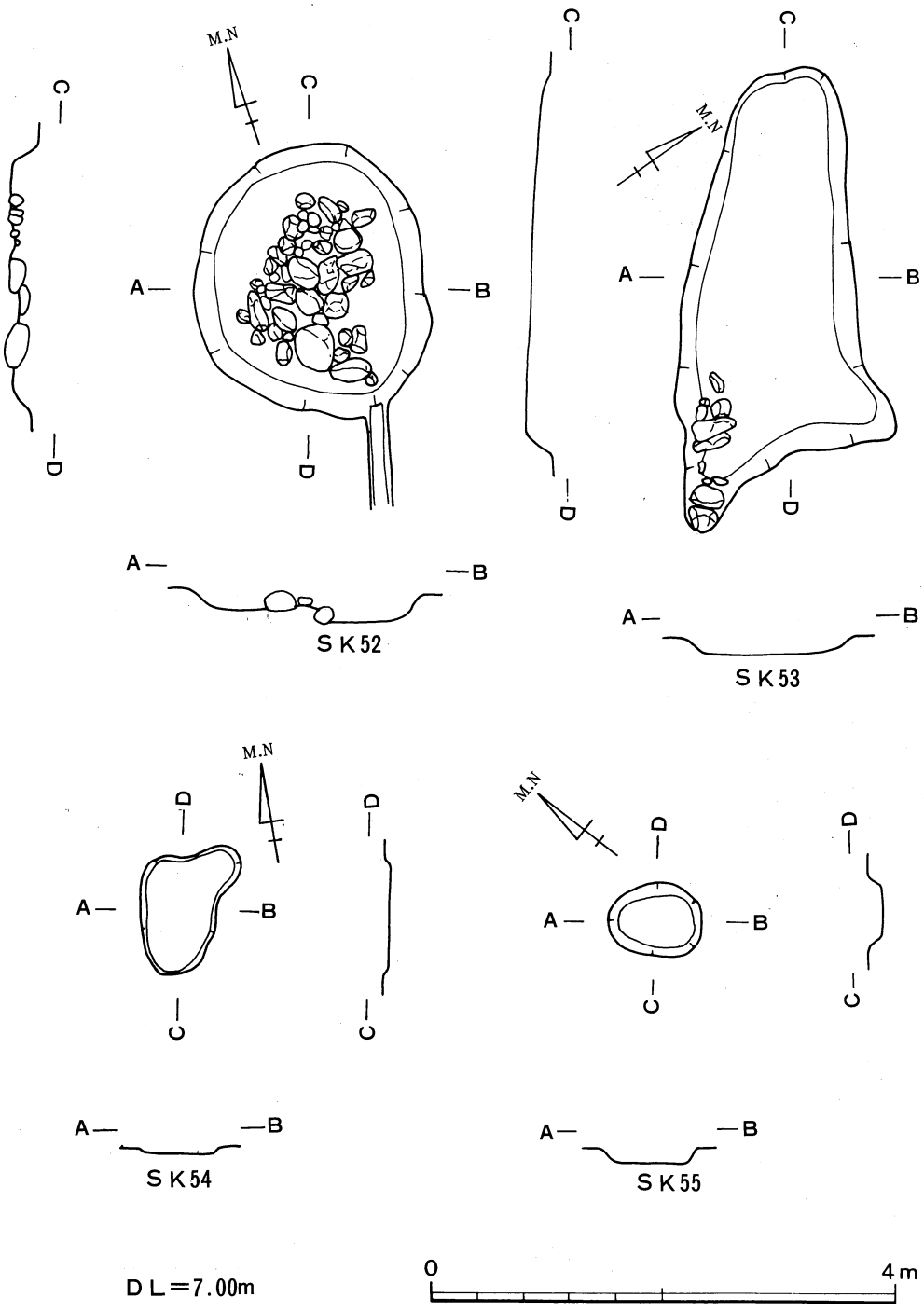
第112図　SK40～43



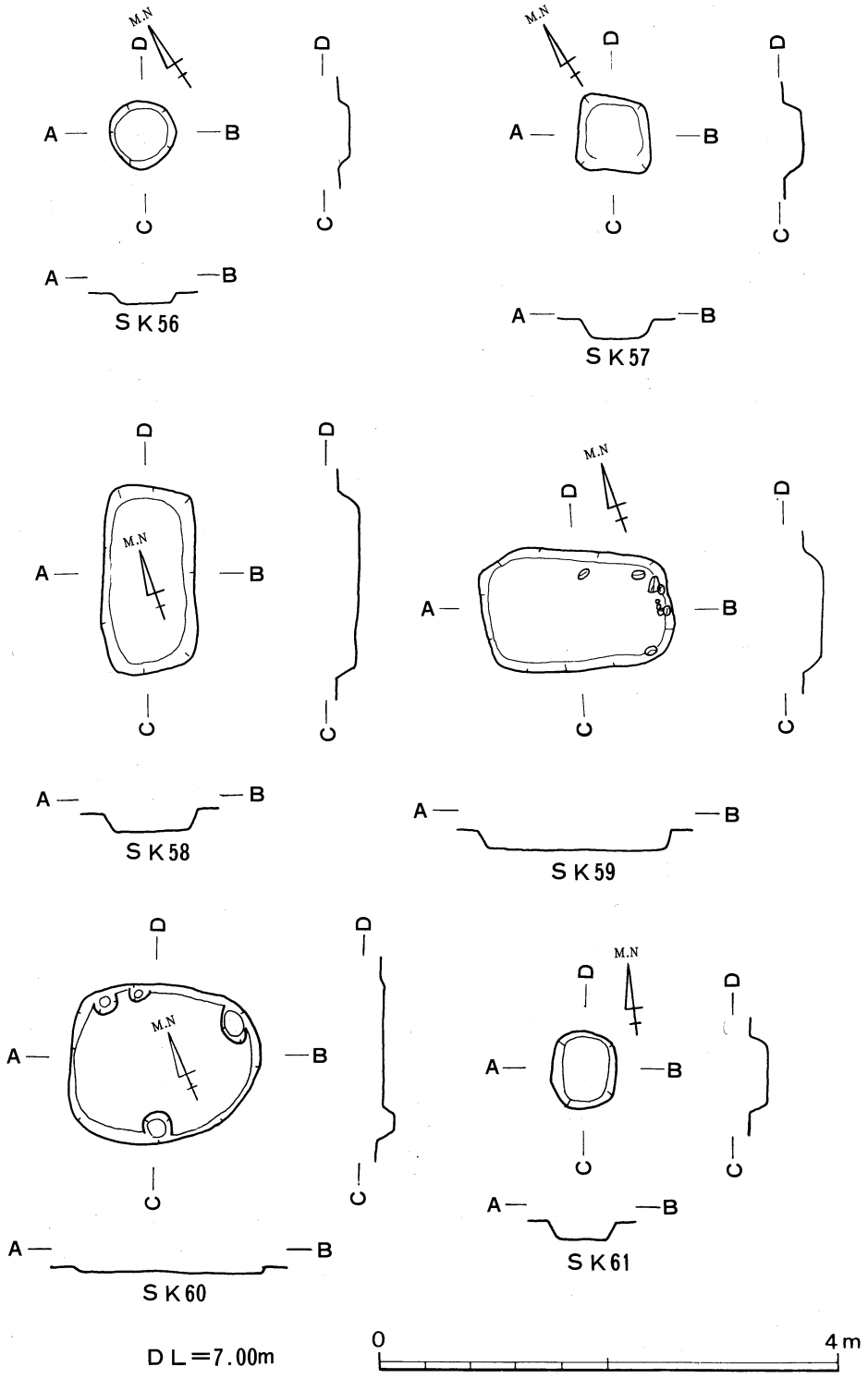
第113図　SK44～47



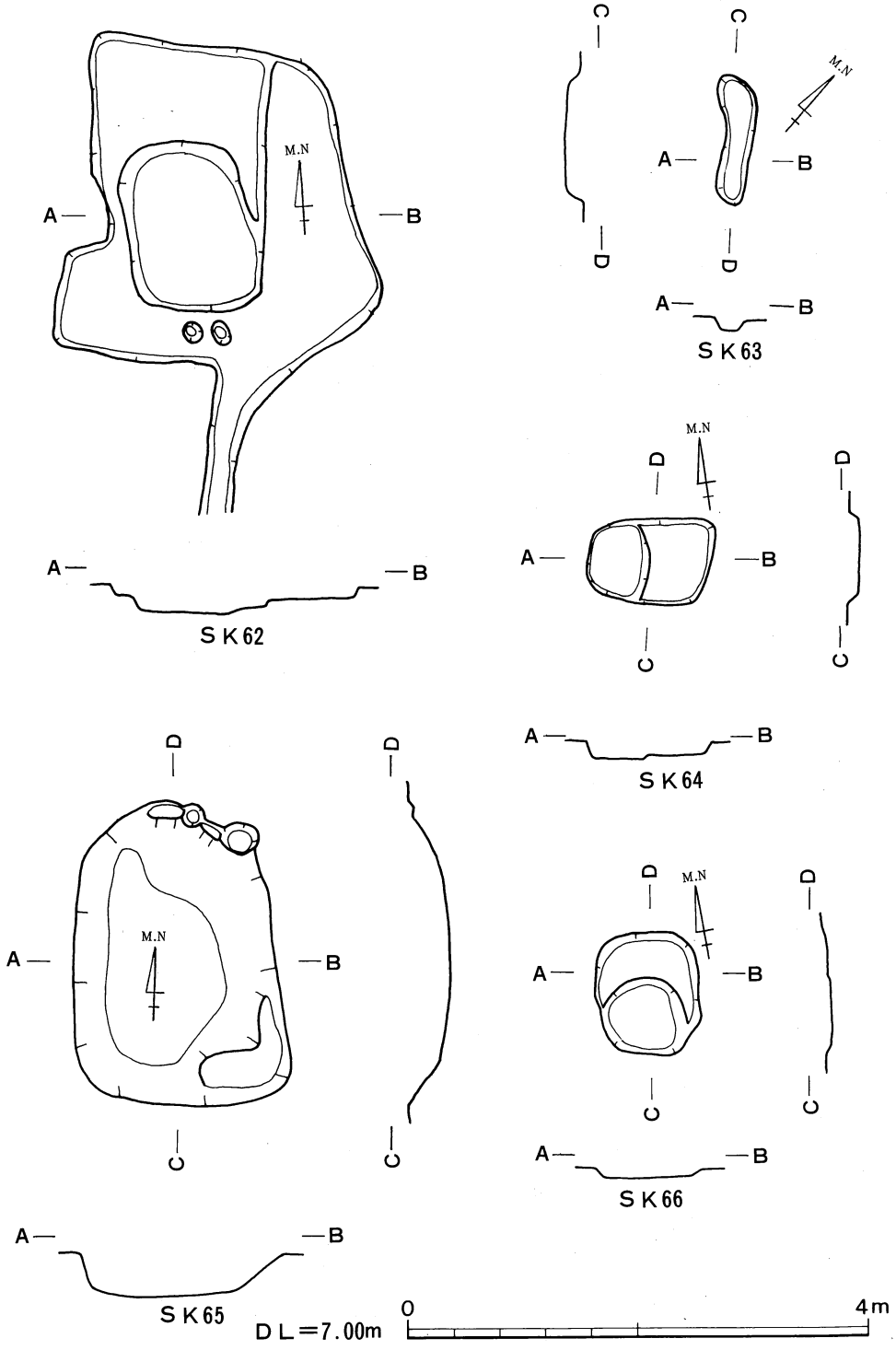
第114図　SK48～51



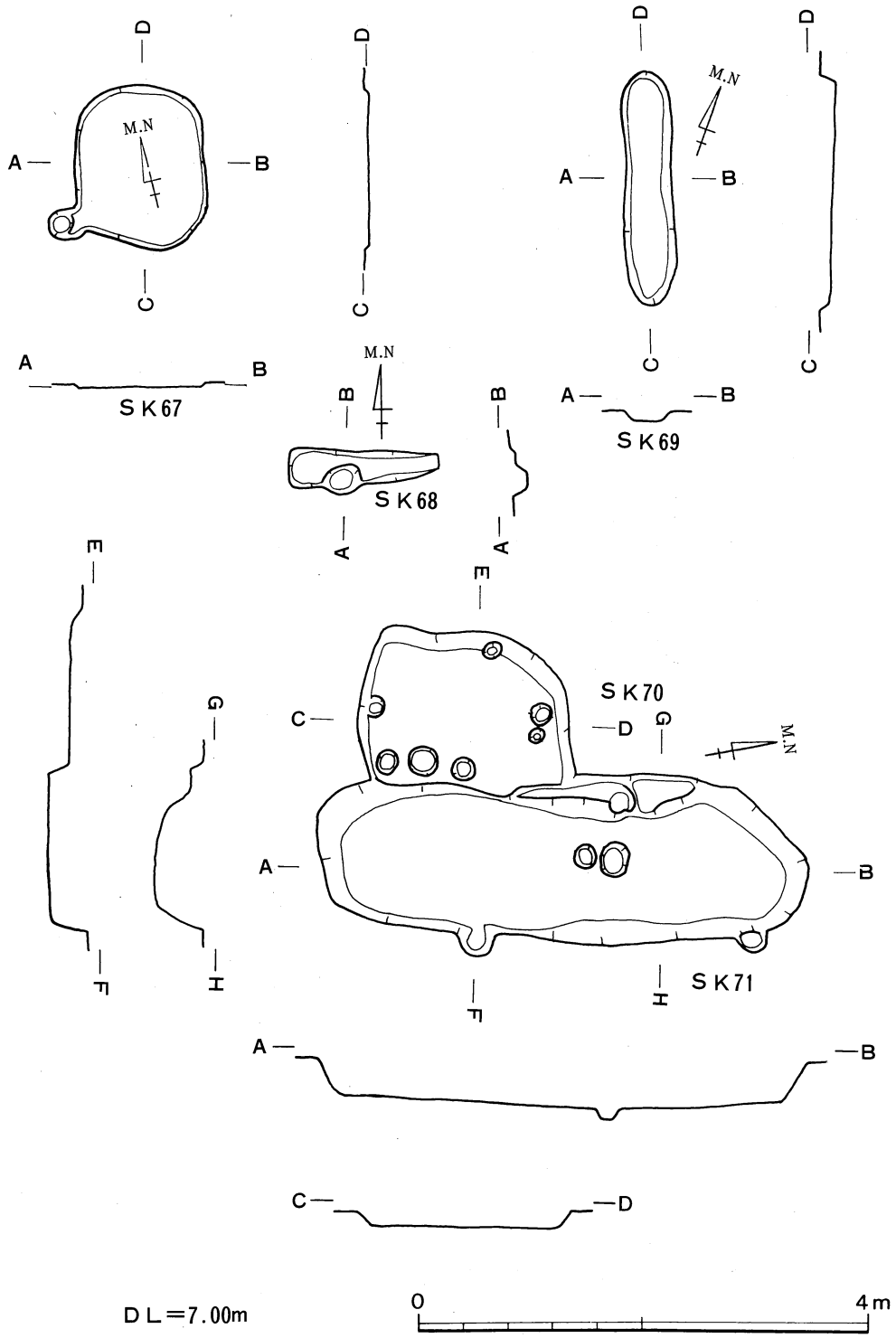
第115図　SK52～55



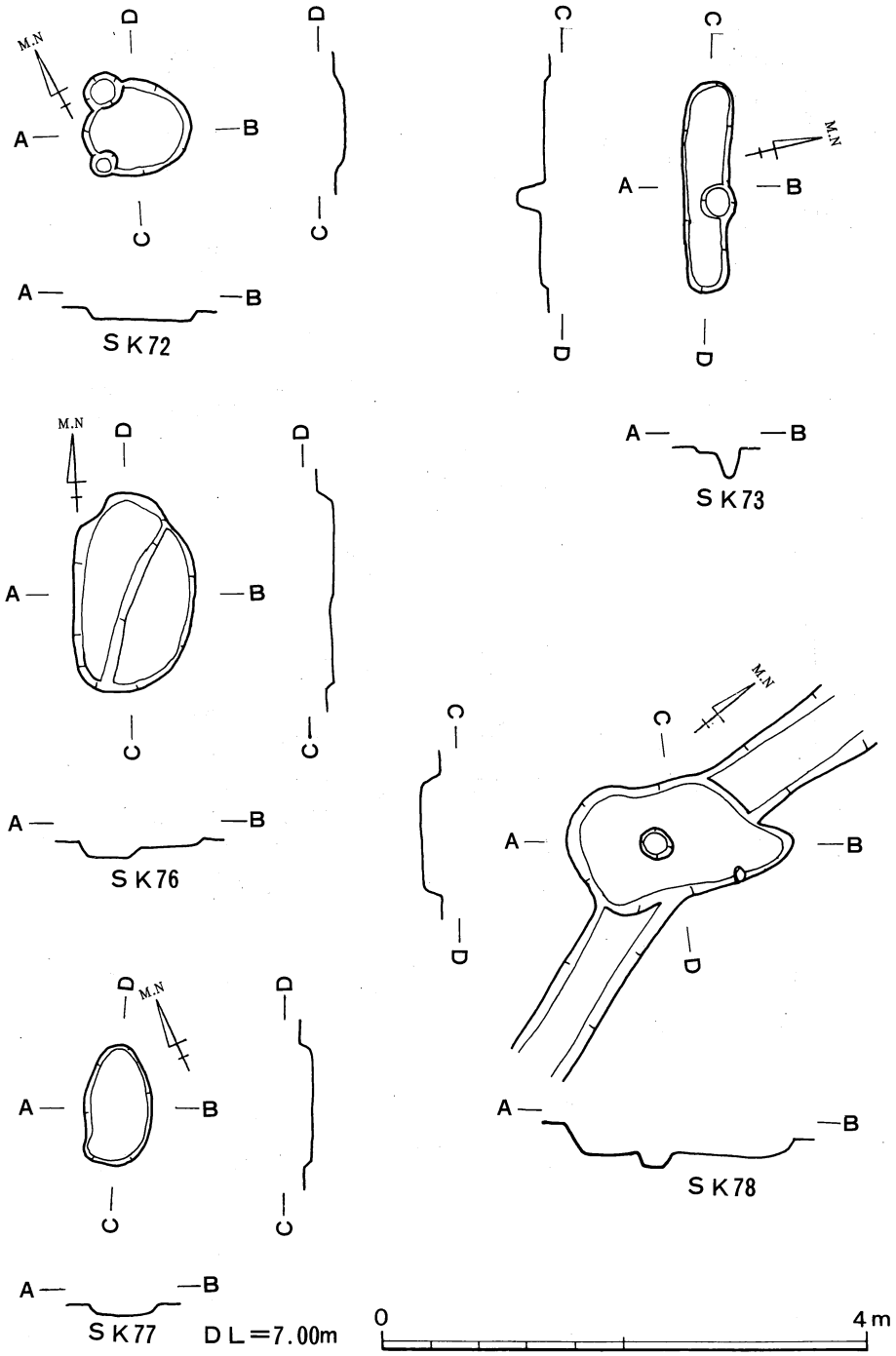
第116図　SK56～61



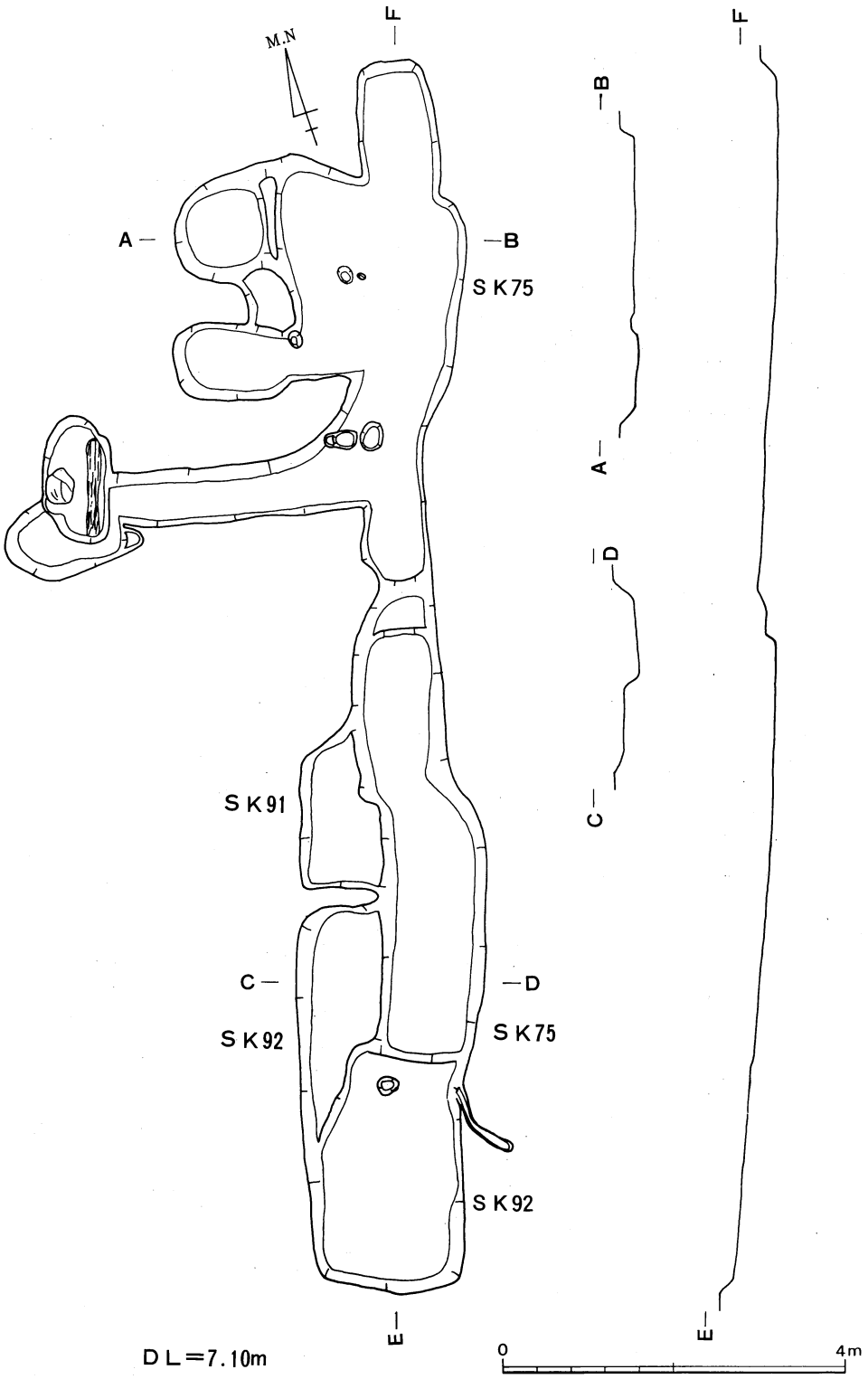
第117図　SK62～66



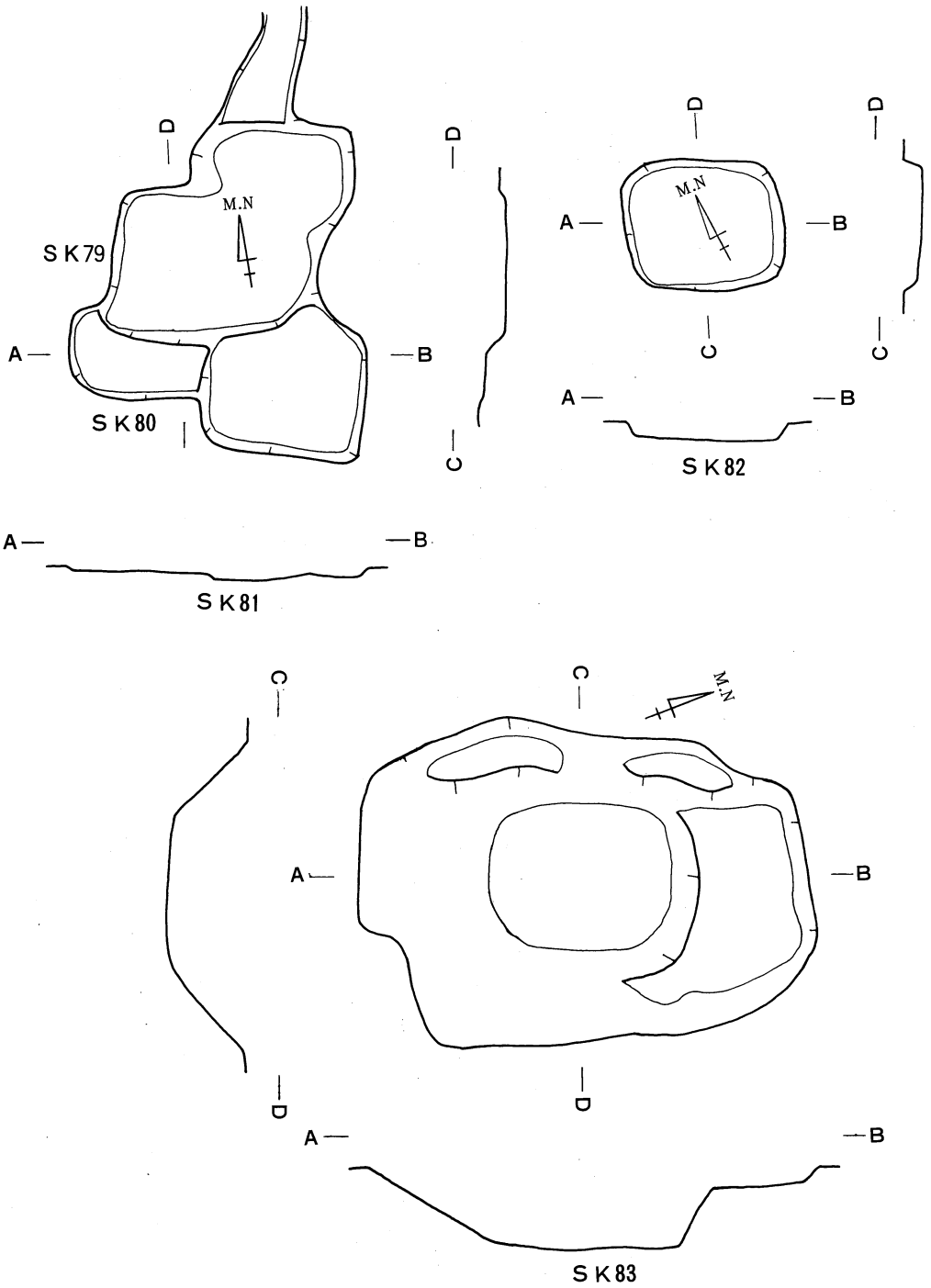
第118図　SK67～71



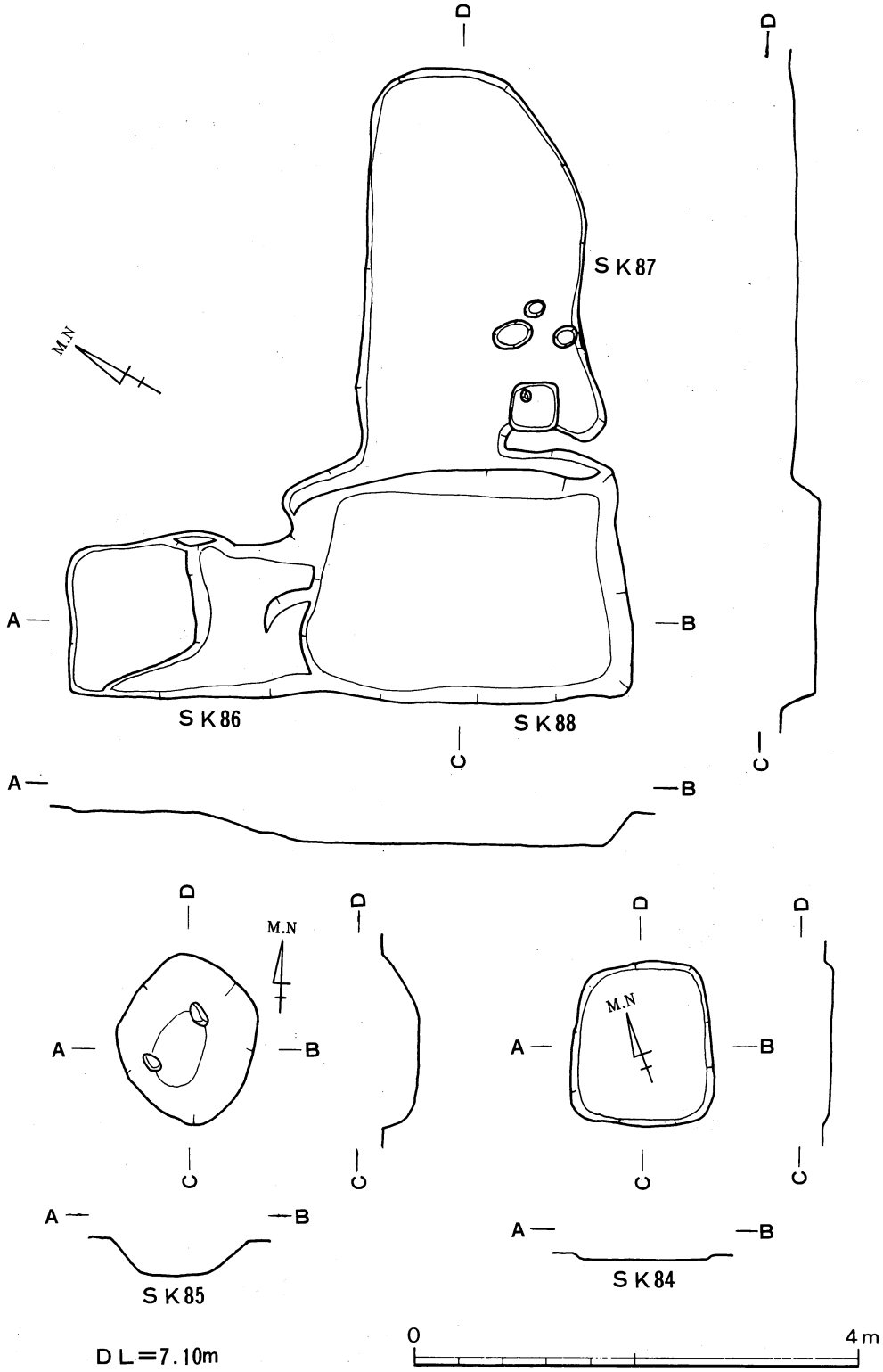
第119図　SK72・73・76～78



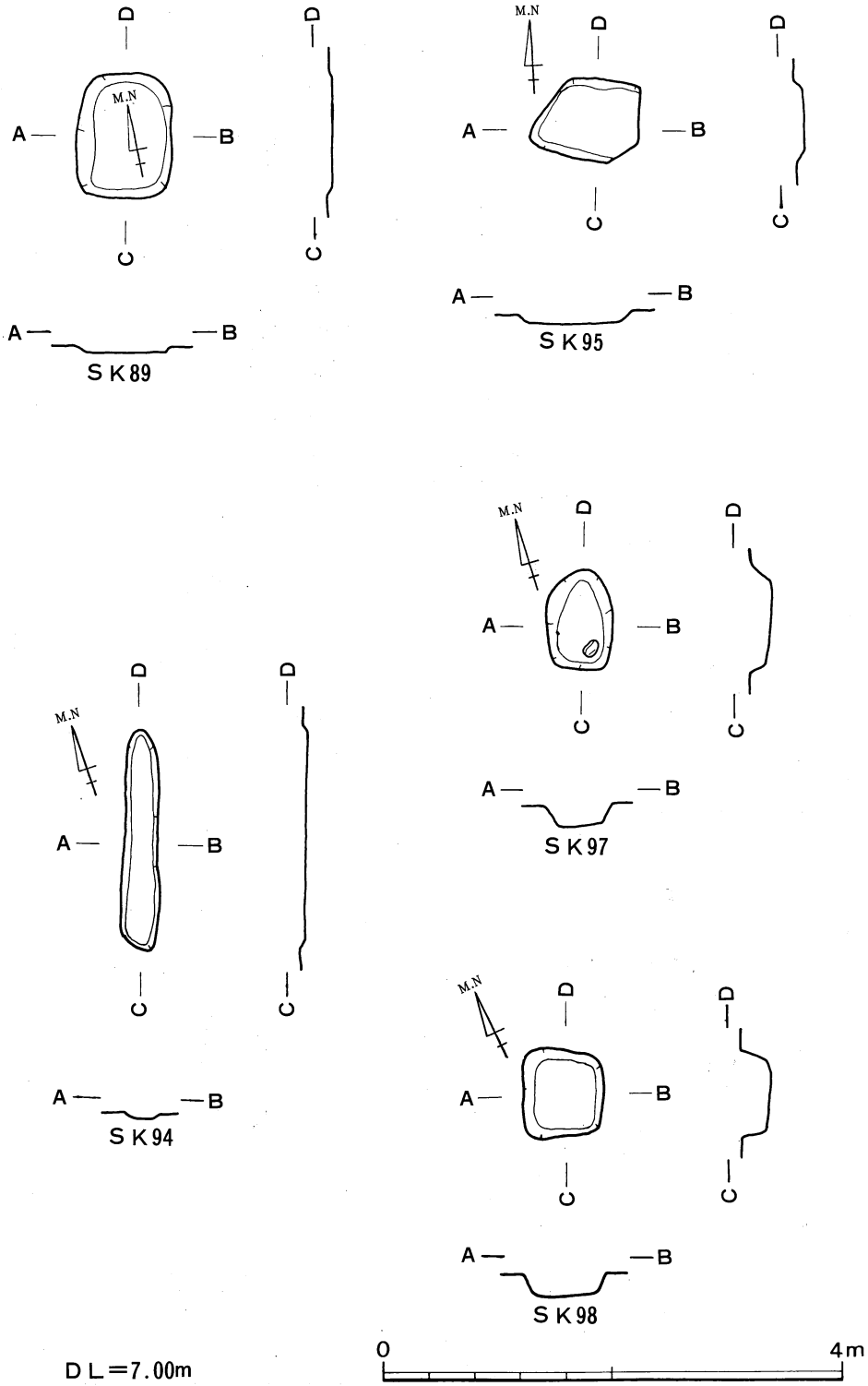
第120図　SK75・91・92



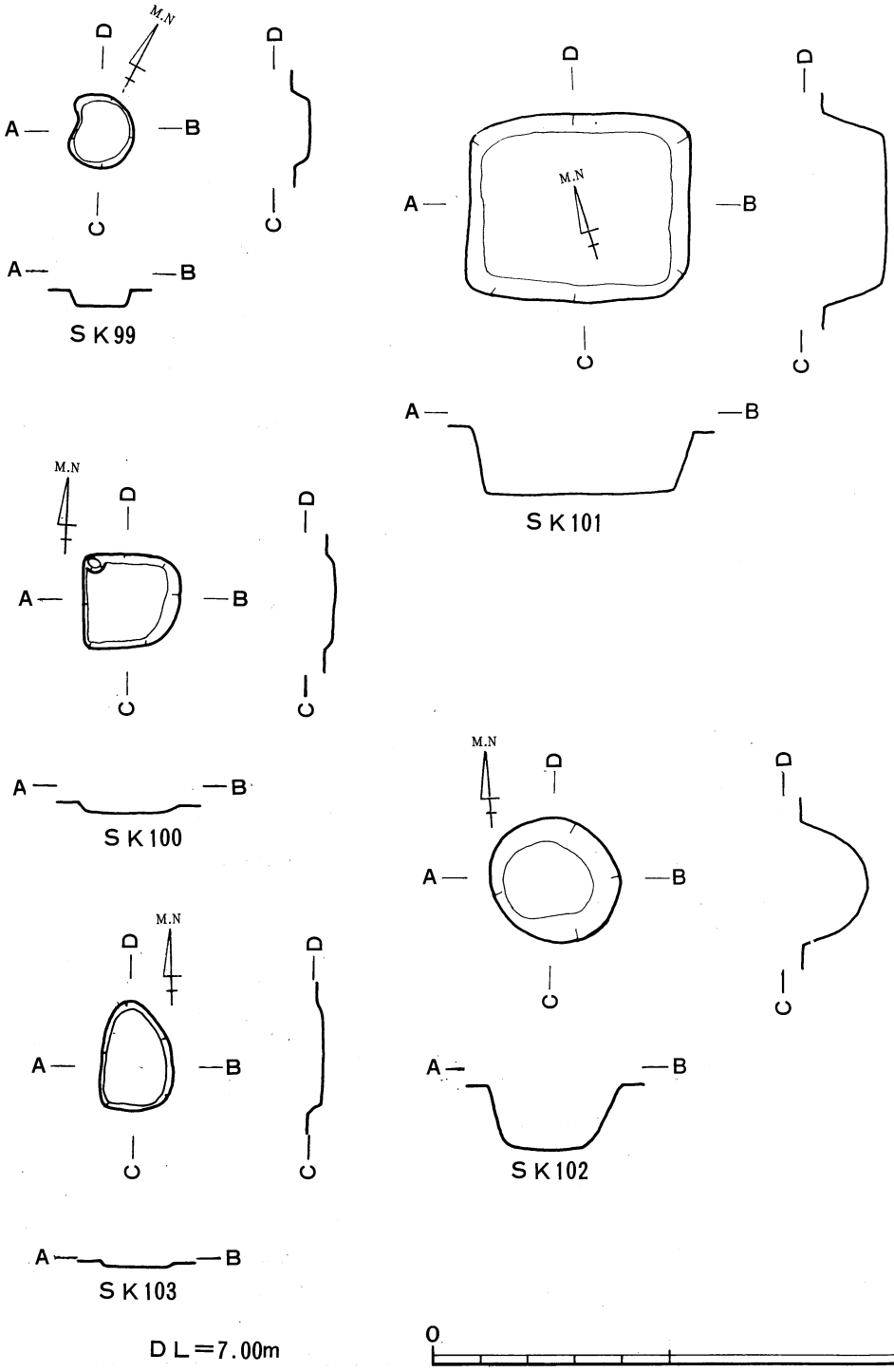
第121図　SK79～83



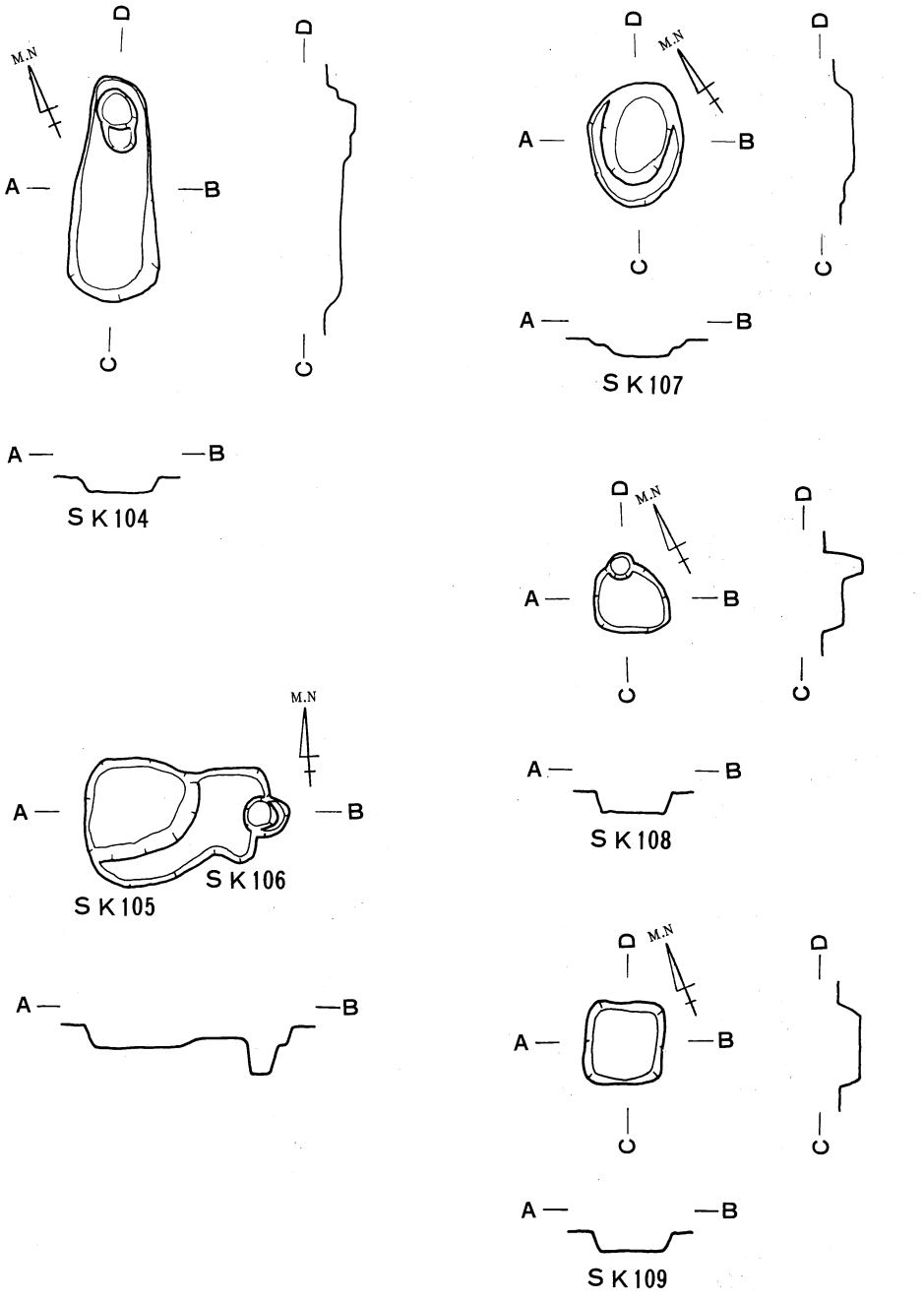
第122図　SK84～88



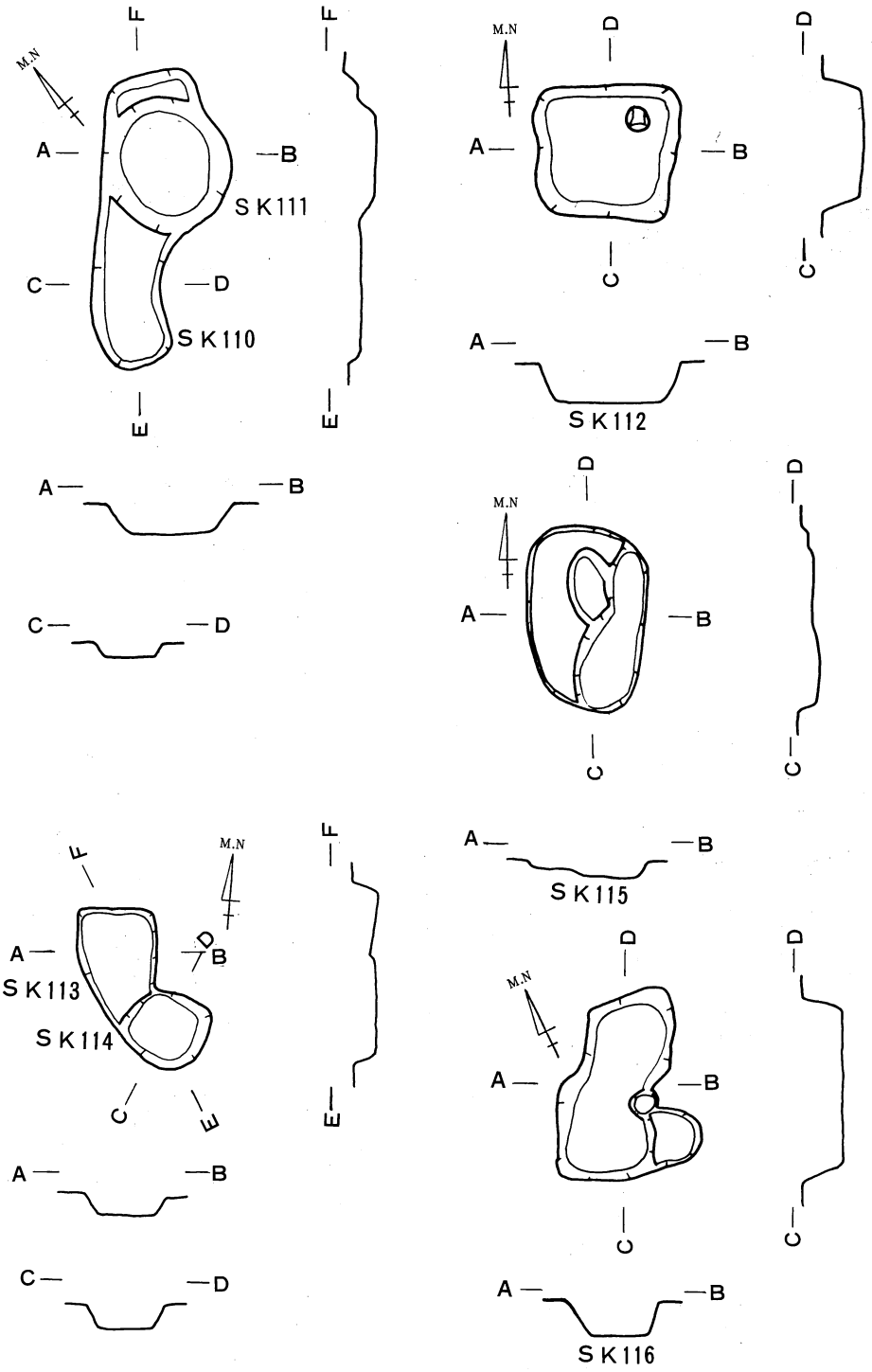
第123図　SK89・94・95・97・98



第124図　SK99～103



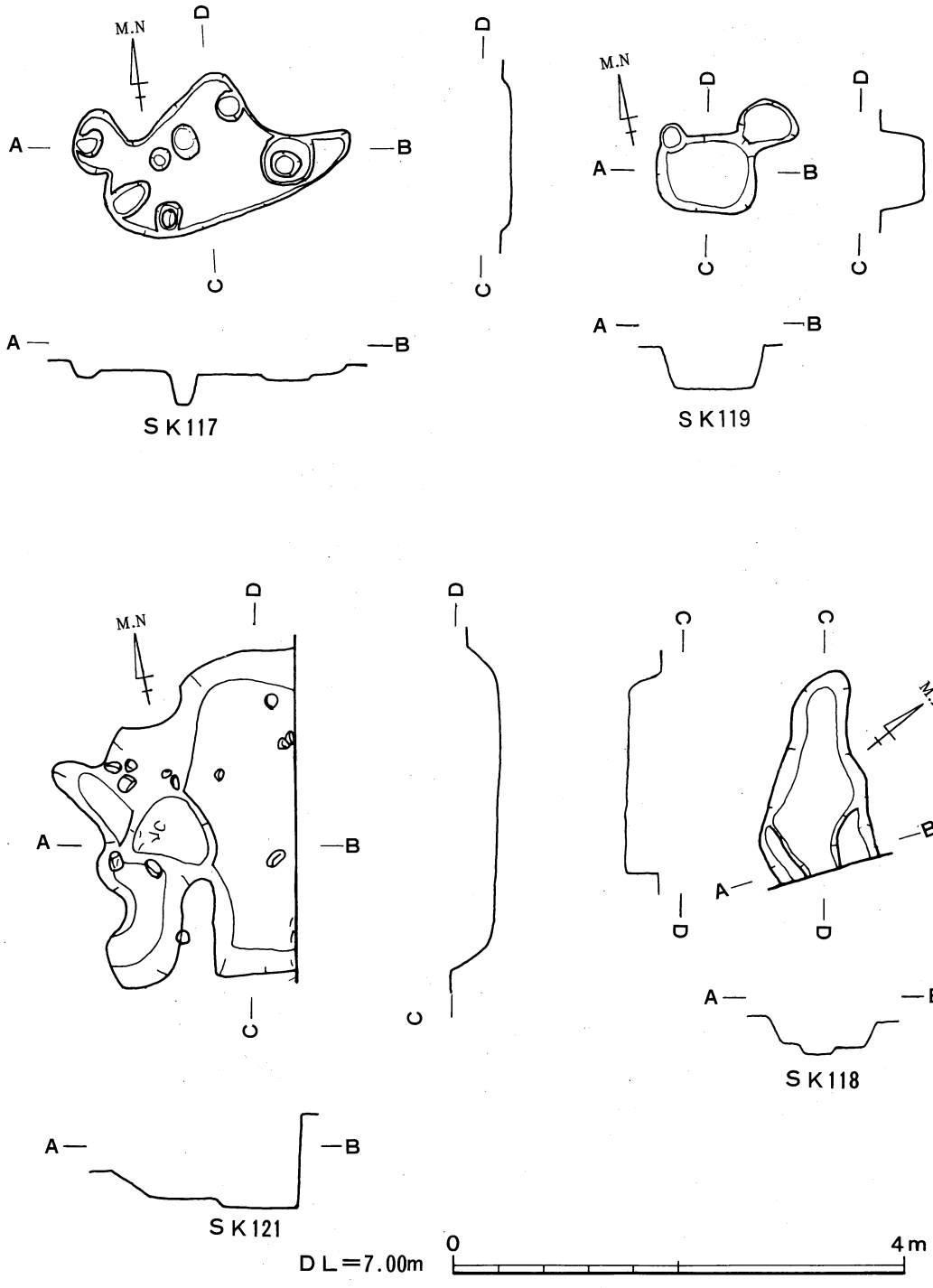
第125図　SK104～109



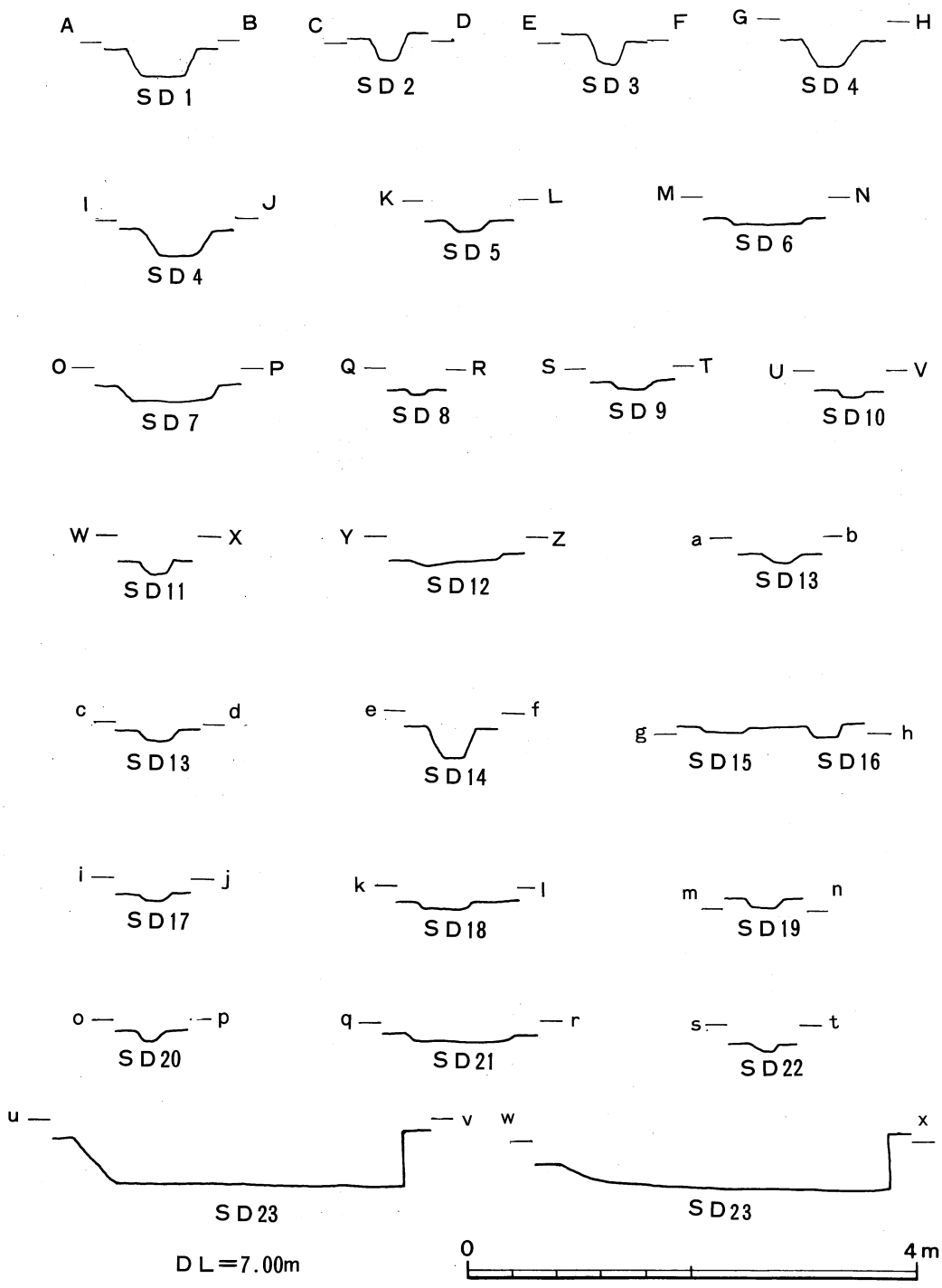
DL=7.00m

0 4m

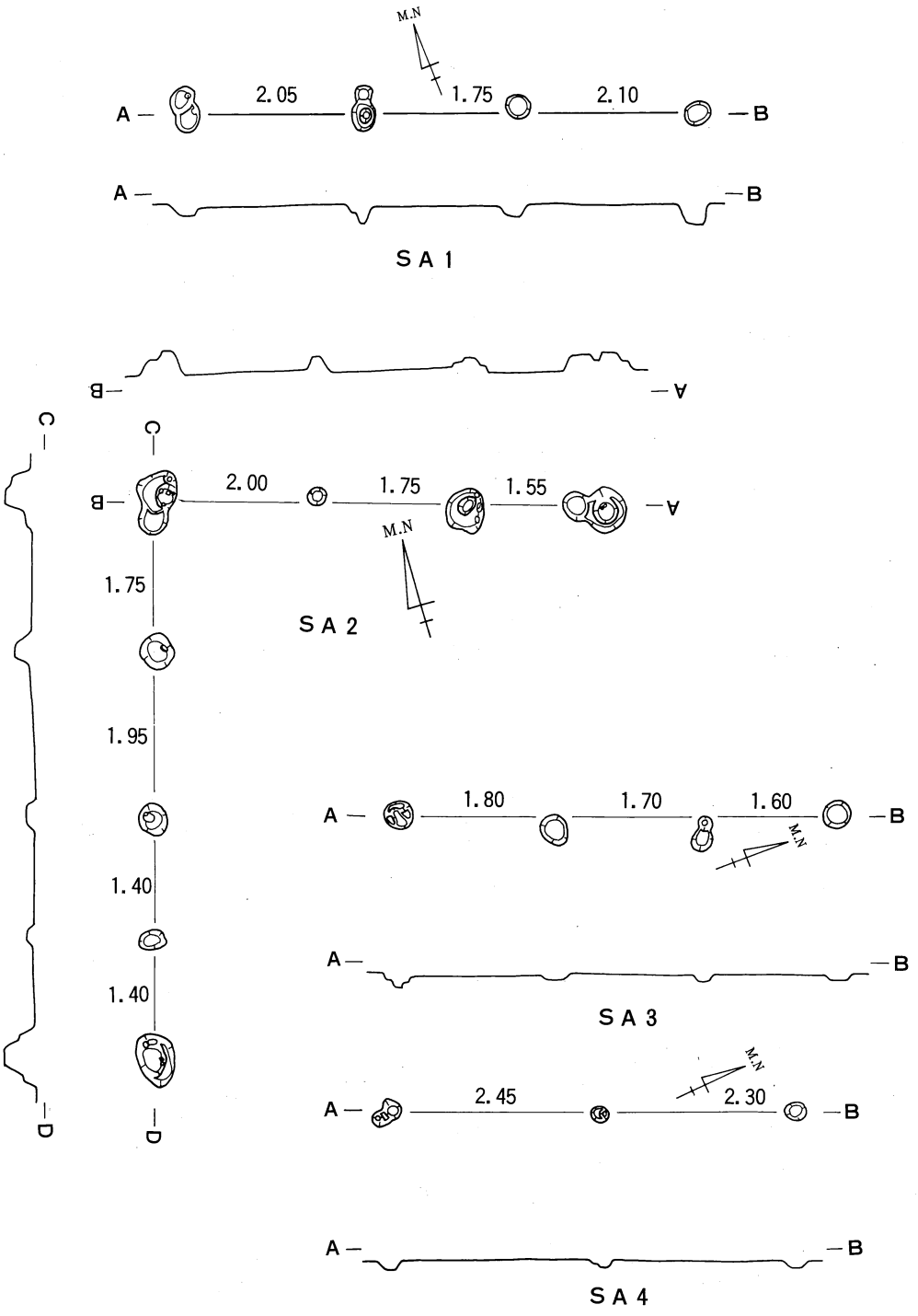
第126図　SK110～116



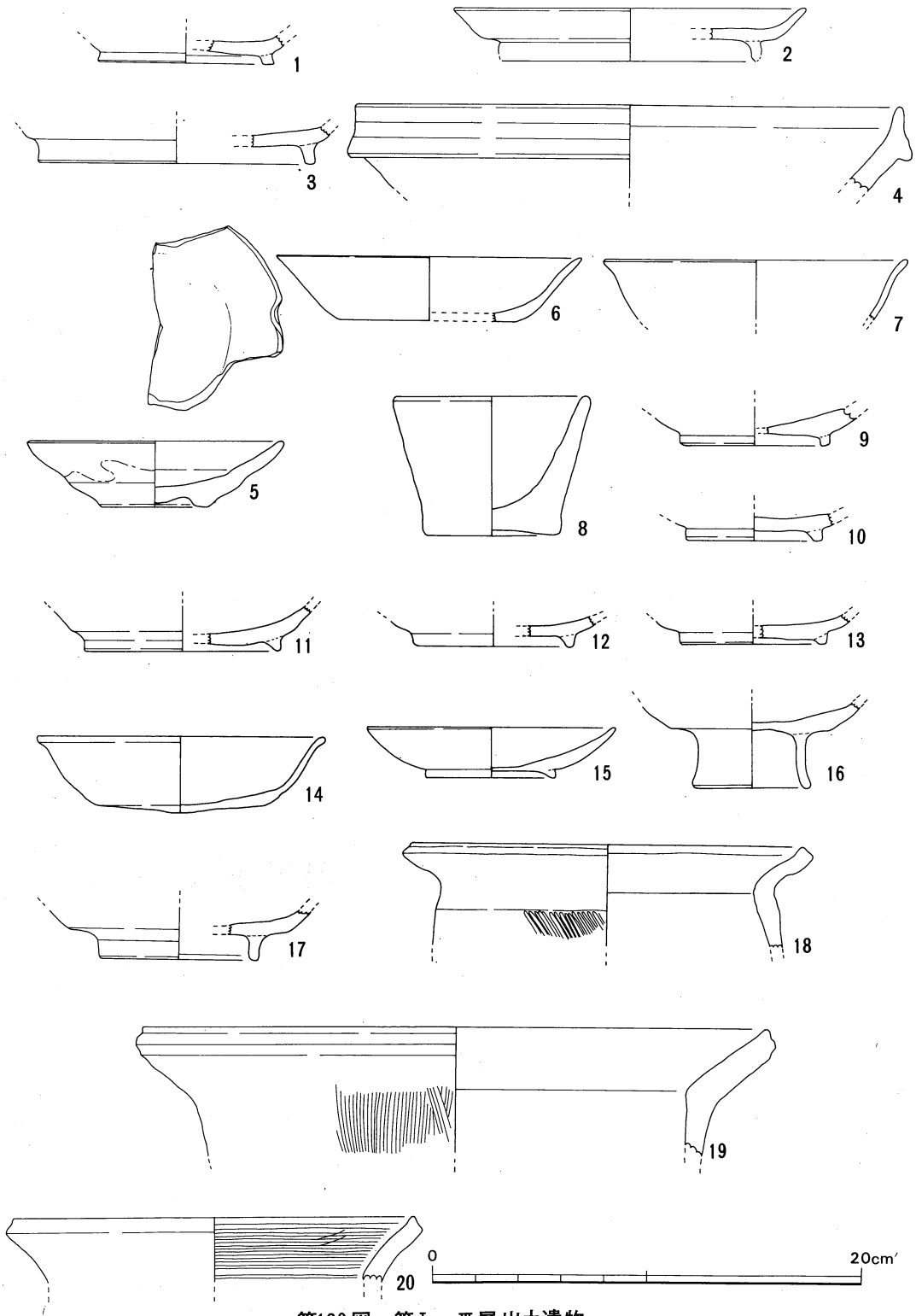
第127図　SK117～119・121


A
B
SD 1
C
D
SD 2
E
F
SD 3
G
H
SD 4
I
J
SD 4
K
L
SD 5
M
N
SD 6
O
P
SD 7
Q
R
SD 8
S
T
SD 9
U
V
SD10
W
X
SD11
Y
Z
SD12
a
b
SD13
c
d
SD13
e
f
SD14
g
h
SD15
SD16
i
j
SD17
k
l
SD18
m
n
SD19
o
p
SD20
q
r
SD21
s
t
SD22
u
v
SD23
w
x
SD23
DL=7.00m
0
4m

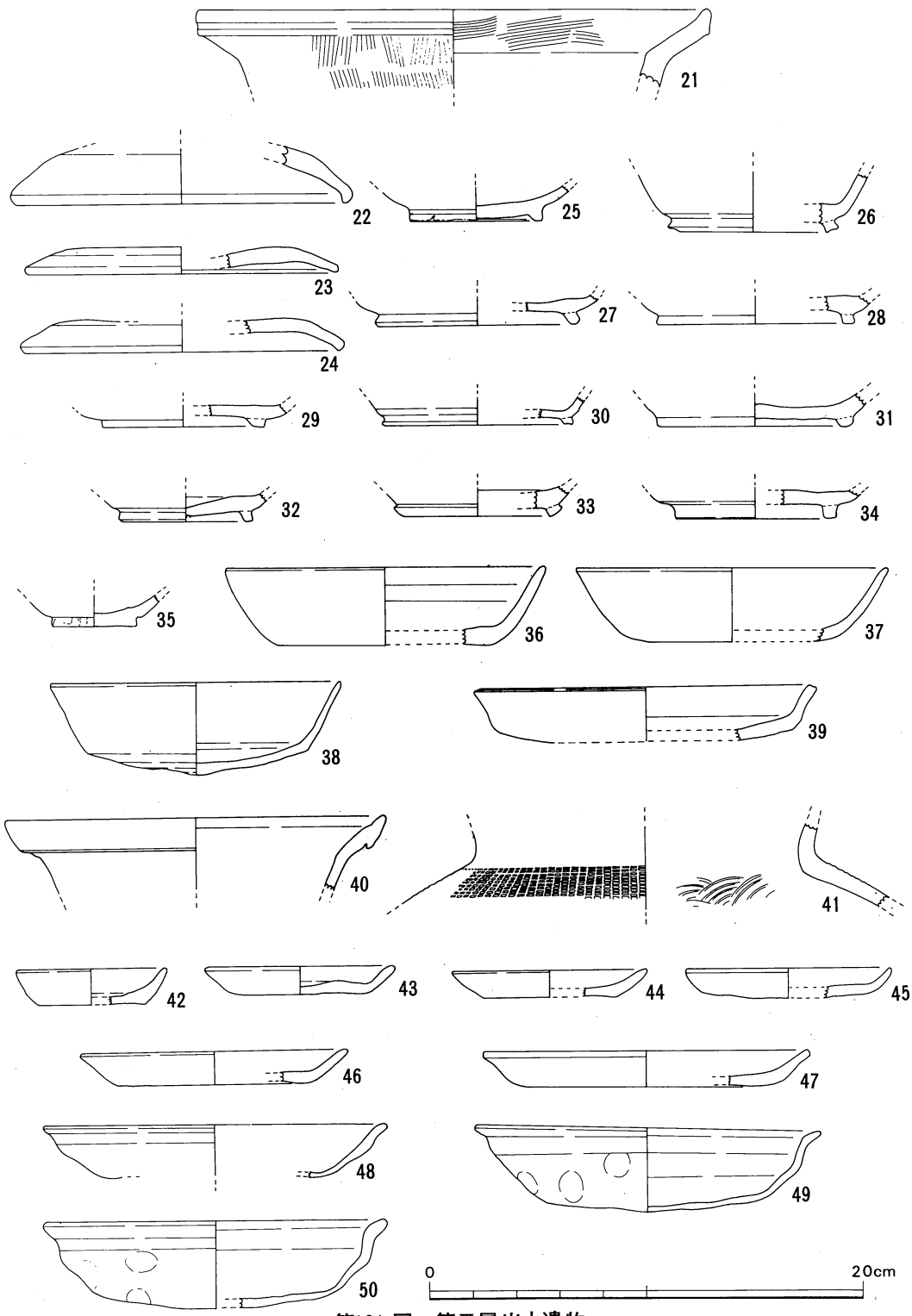
第128図　SD 1～23


M.N
A
B
2.05
1.75
2.10
SA 1
C
D
2.00
1.55
SA 2
1.95
1.40
1.80
1.70
1.60
SA 3
2.45
2.30
SA 4
DL=7.00m
0
4m

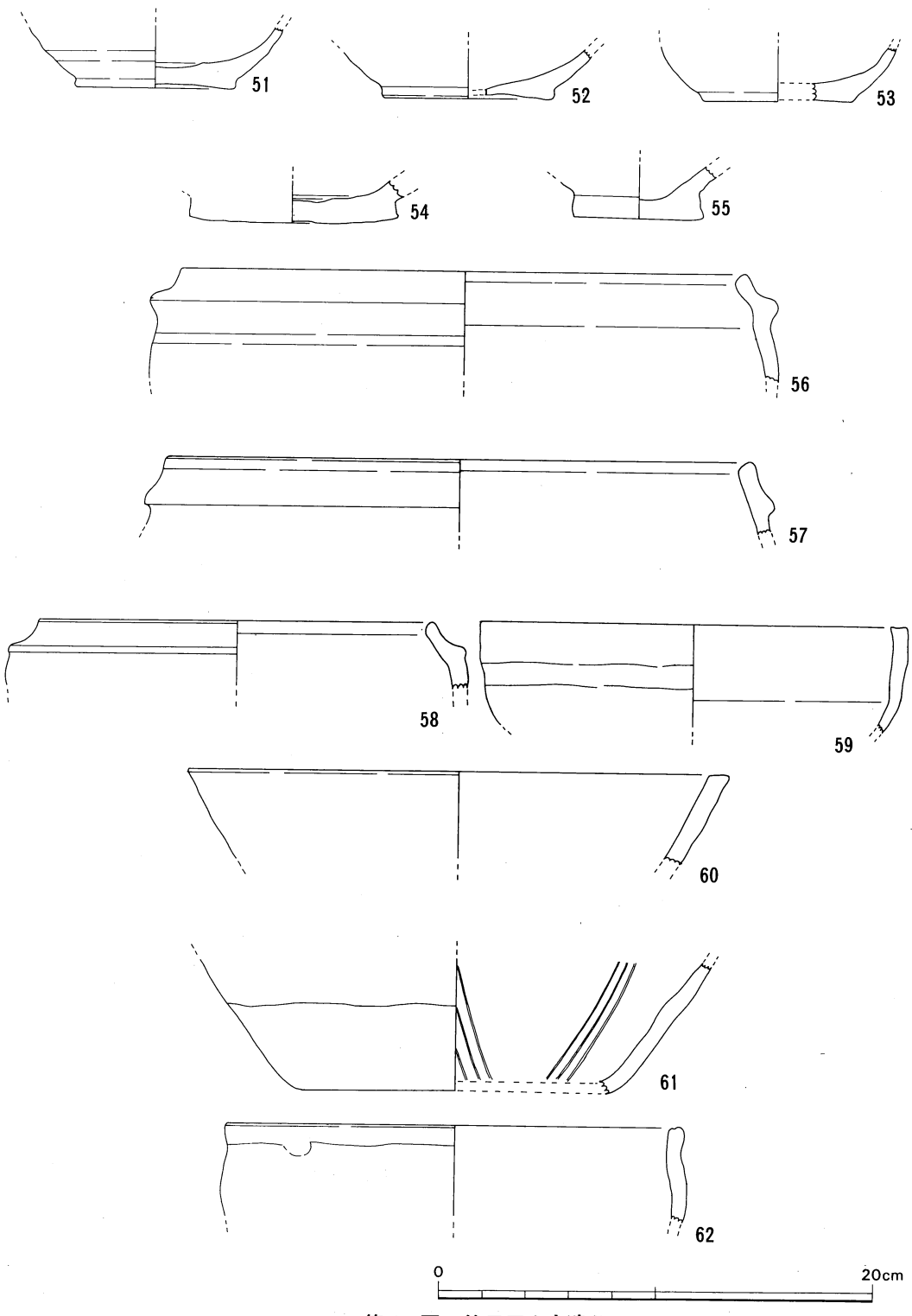
第129図　SA 1～4



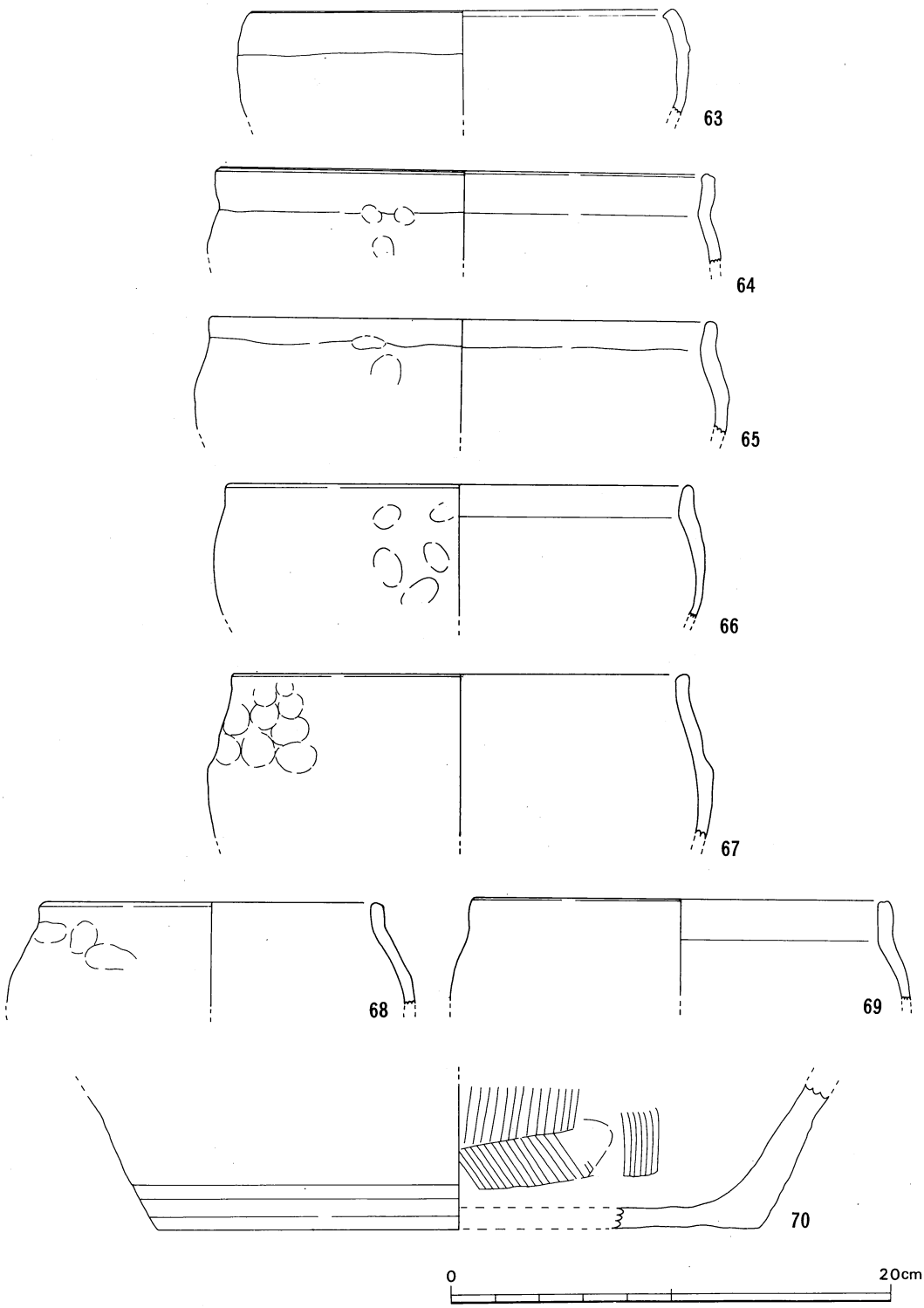
第130図　第Ⅰ～Ⅲ層出土遺物



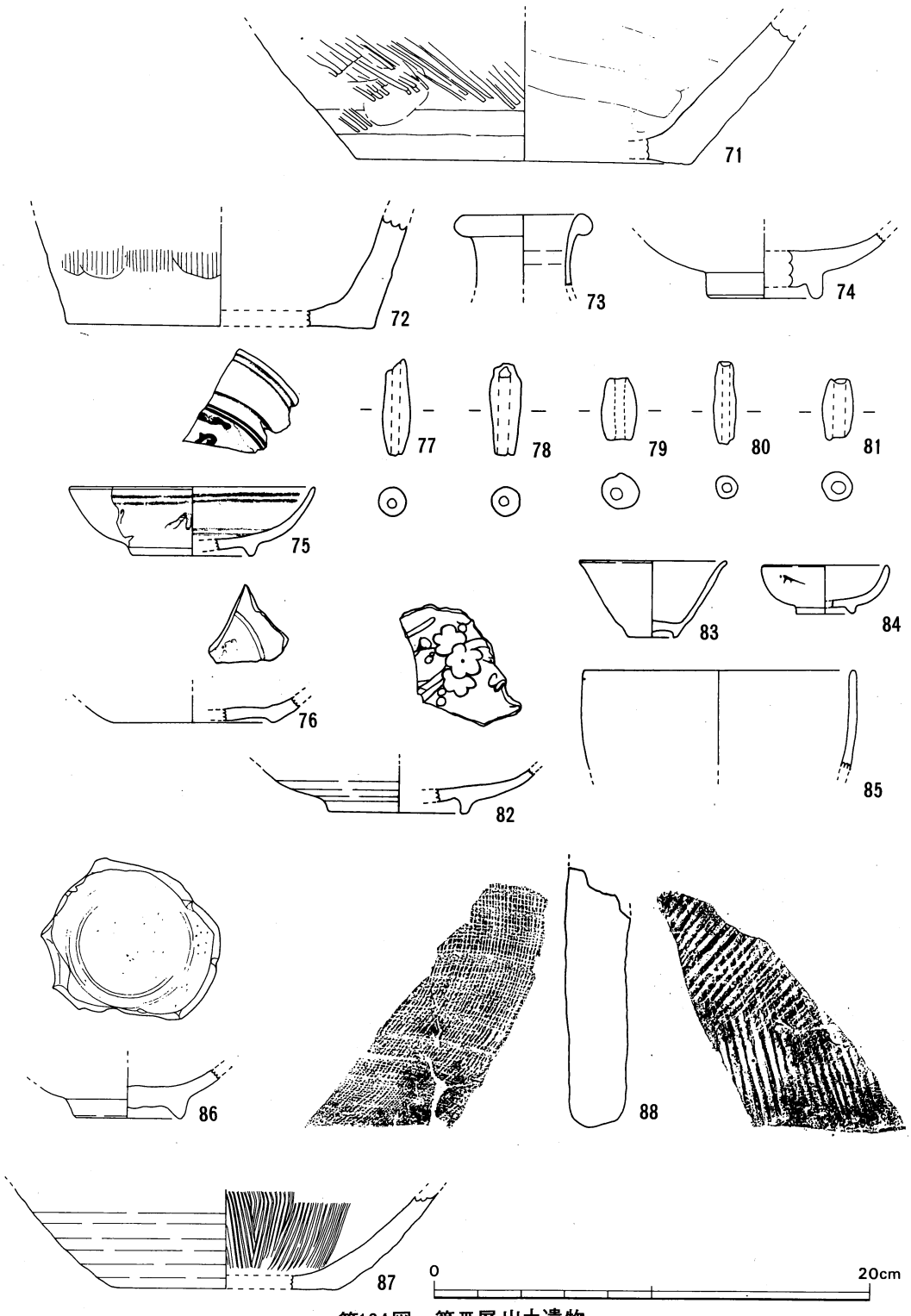
第131 図　第Ⅲ層出土遺物



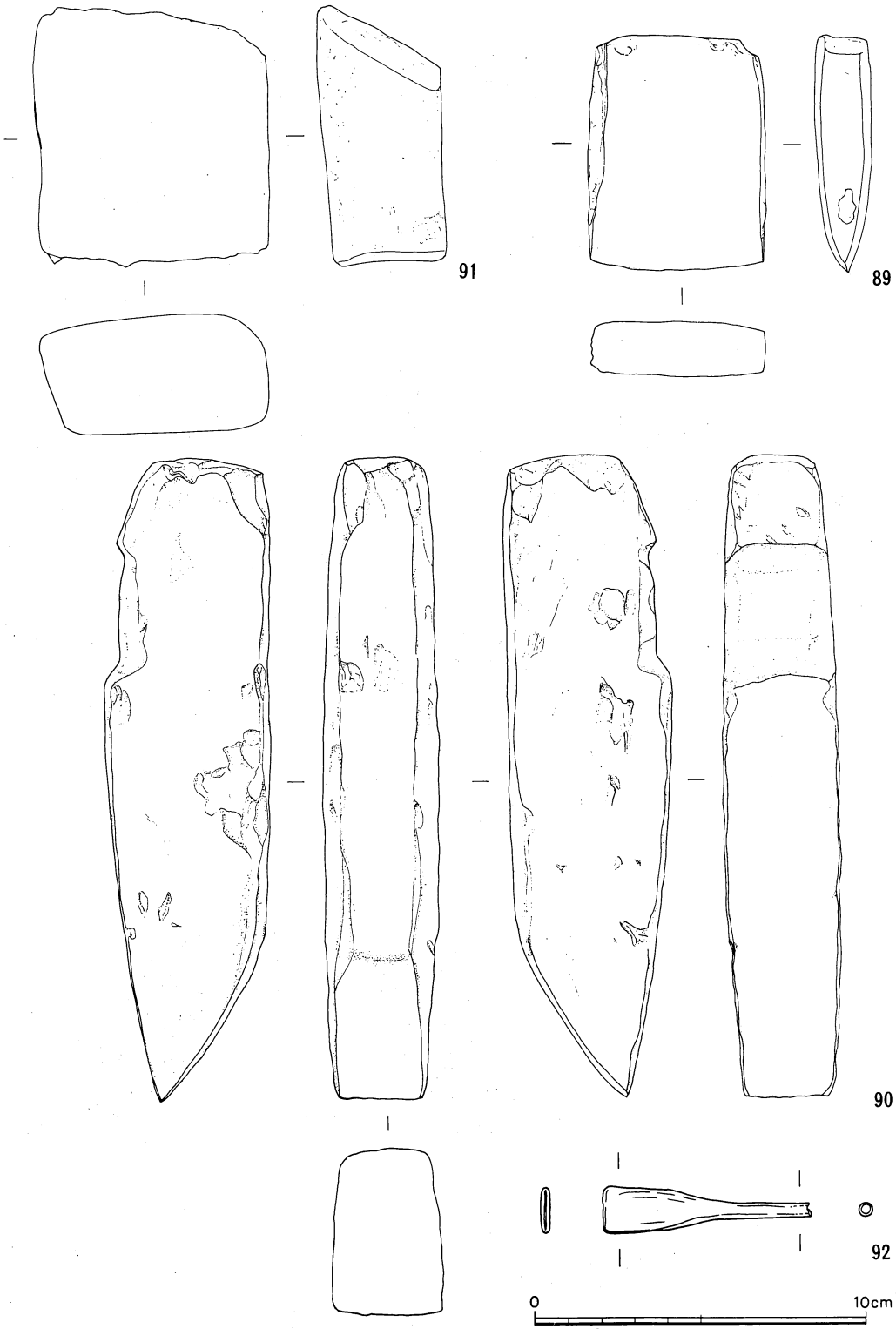
第132 図　第Ⅲ層出土遺物



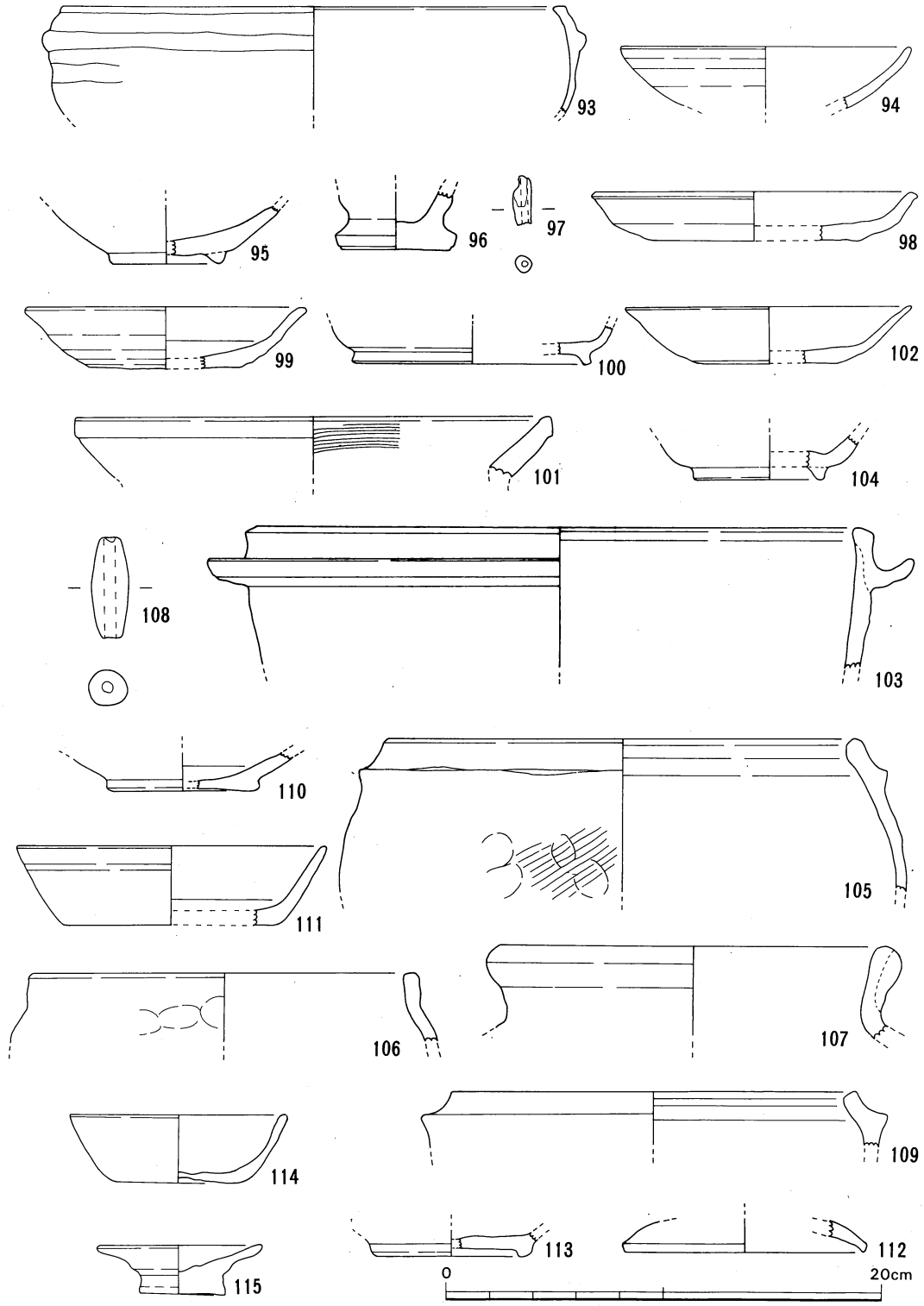
第133図　第Ⅲ層出土遺物



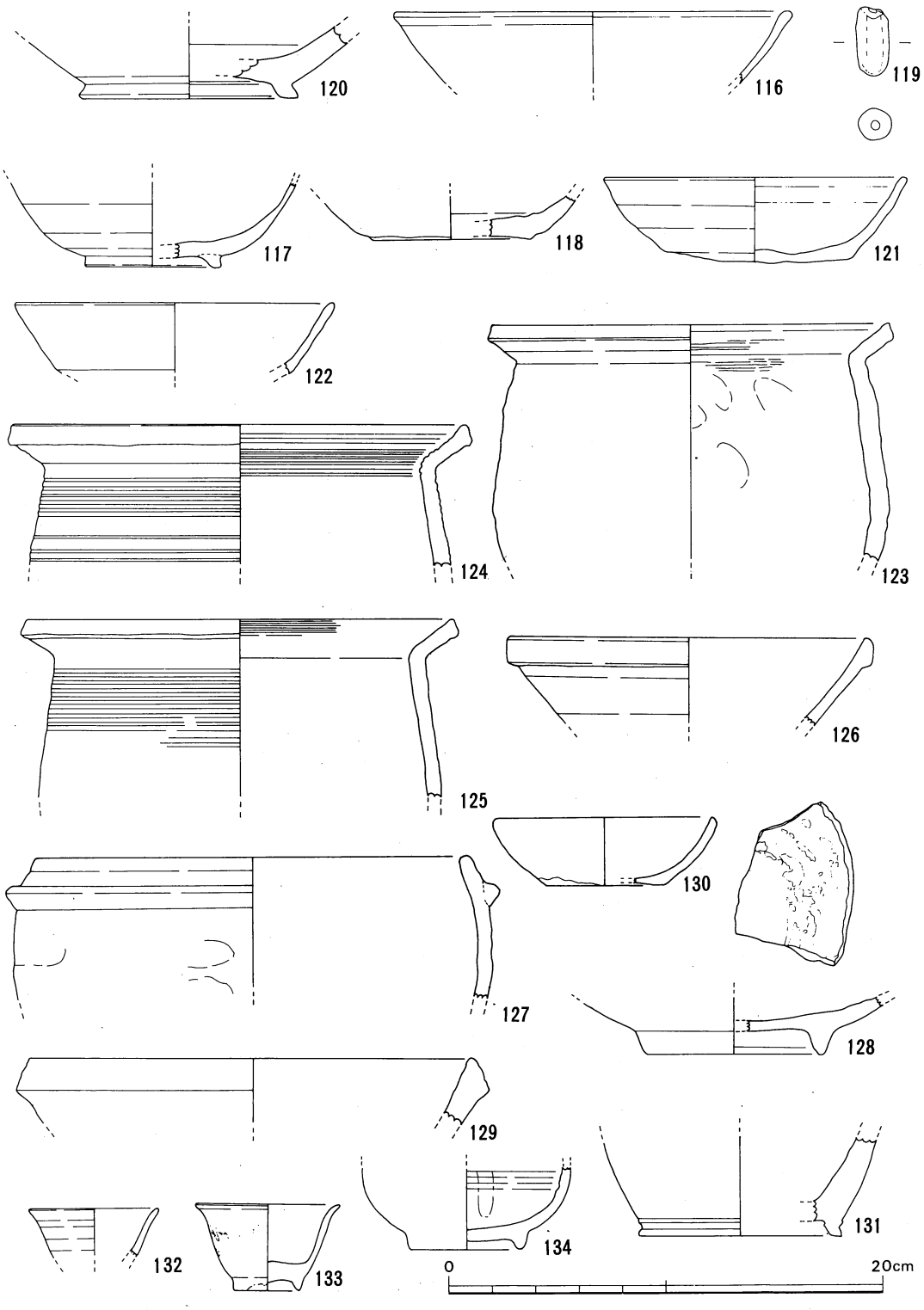
第134図　第Ⅲ層出土遺物



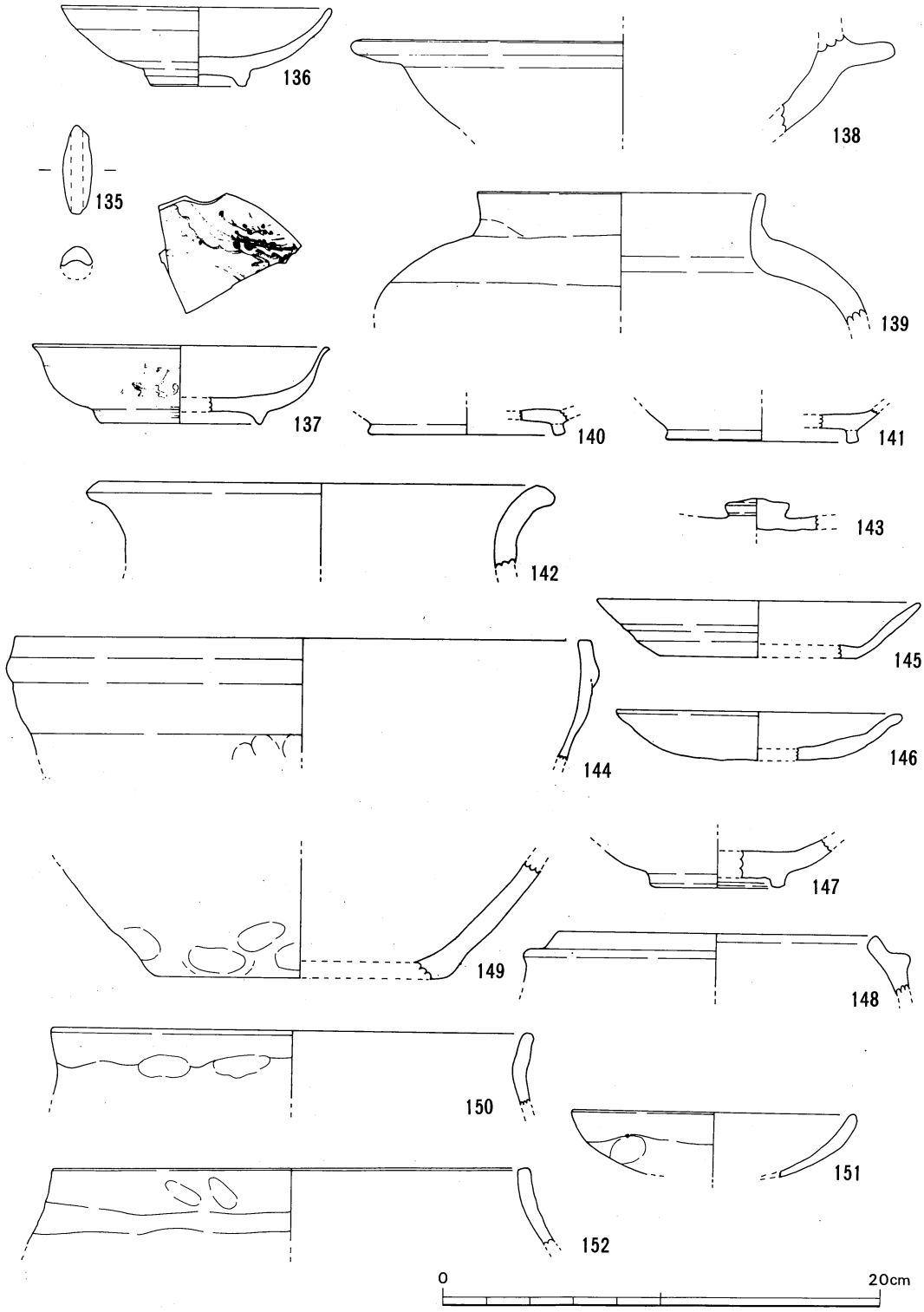
第135図　第Ⅲ層出土遺物



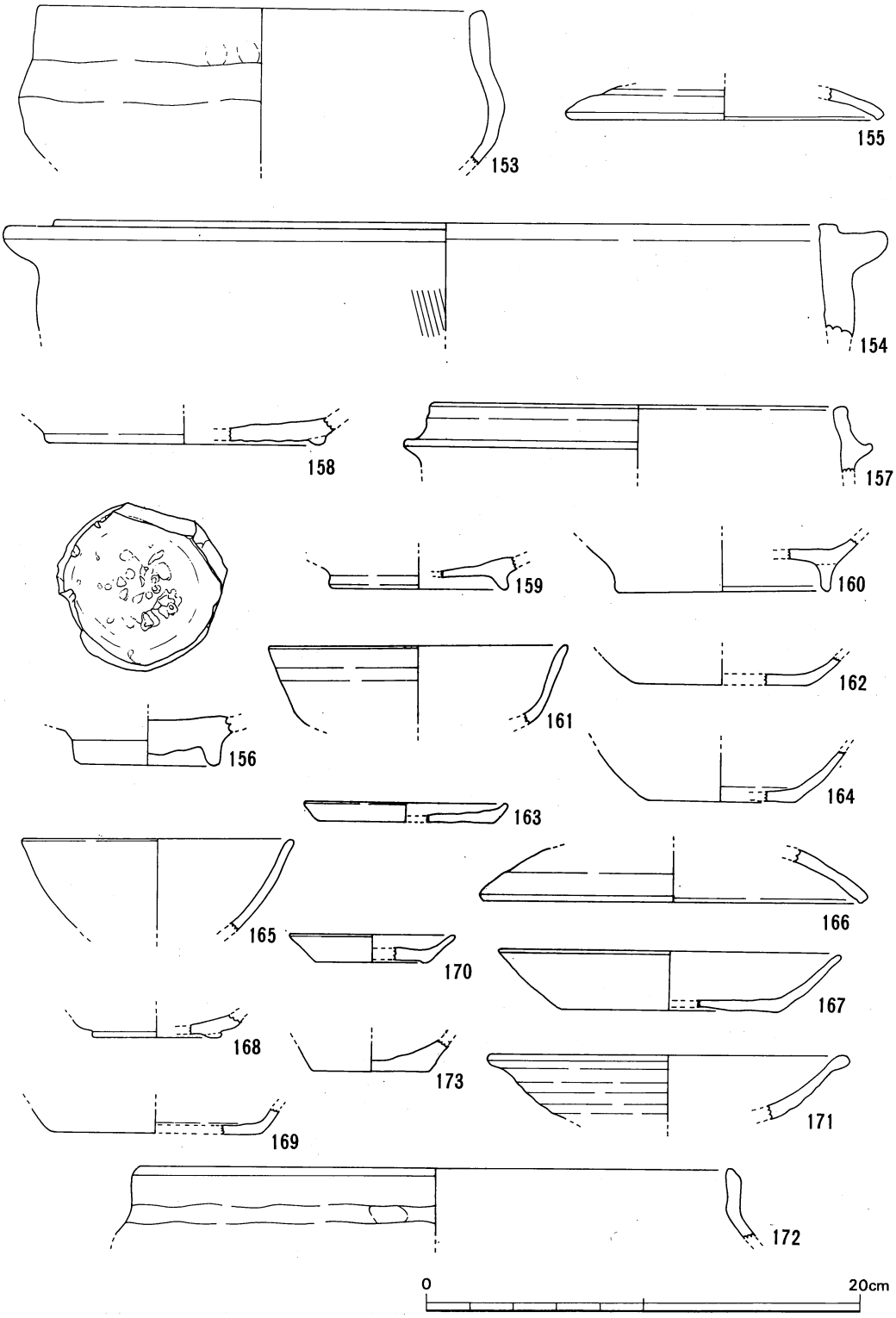
第136図　ＳＢ５・12・13・18・21・22・24・25・30・31・33～35・40出土遺物



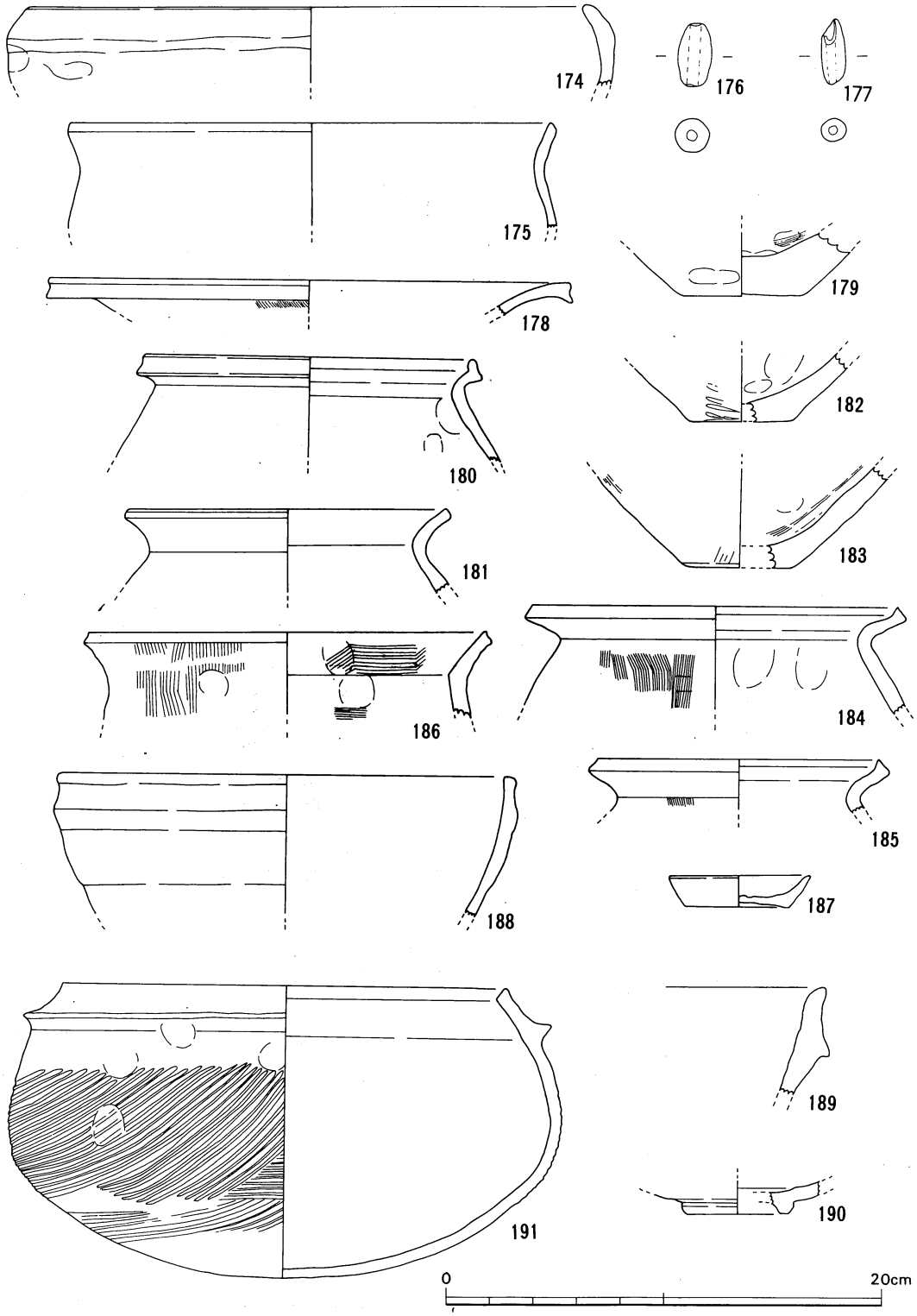
第137図　ＳＢ35・36、ＳＫ８～10・14・15・36・39出土遺物



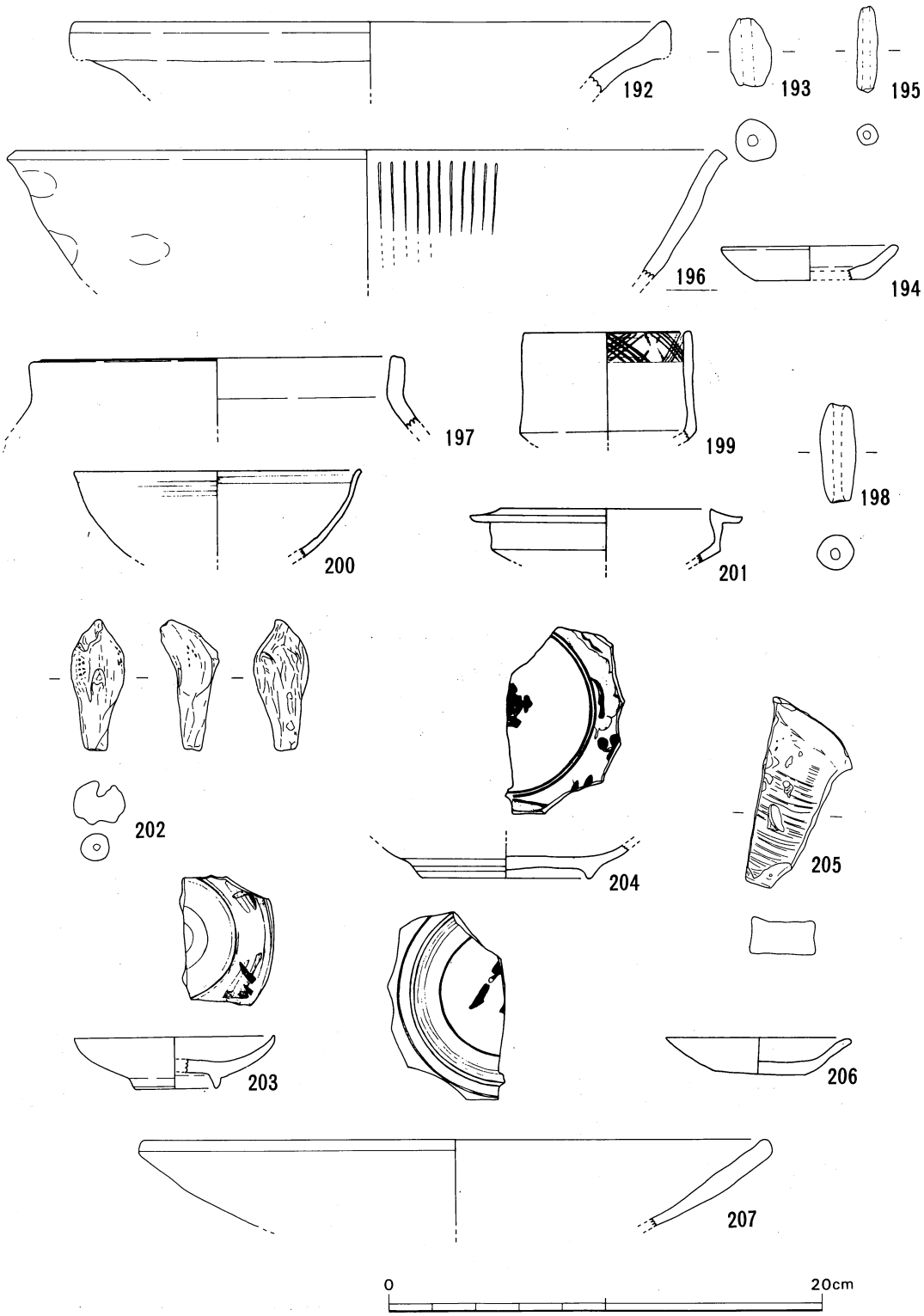
第138図　ＳＫ40・42・45・50・52・53・58・59・66・70・71・75出土遺物



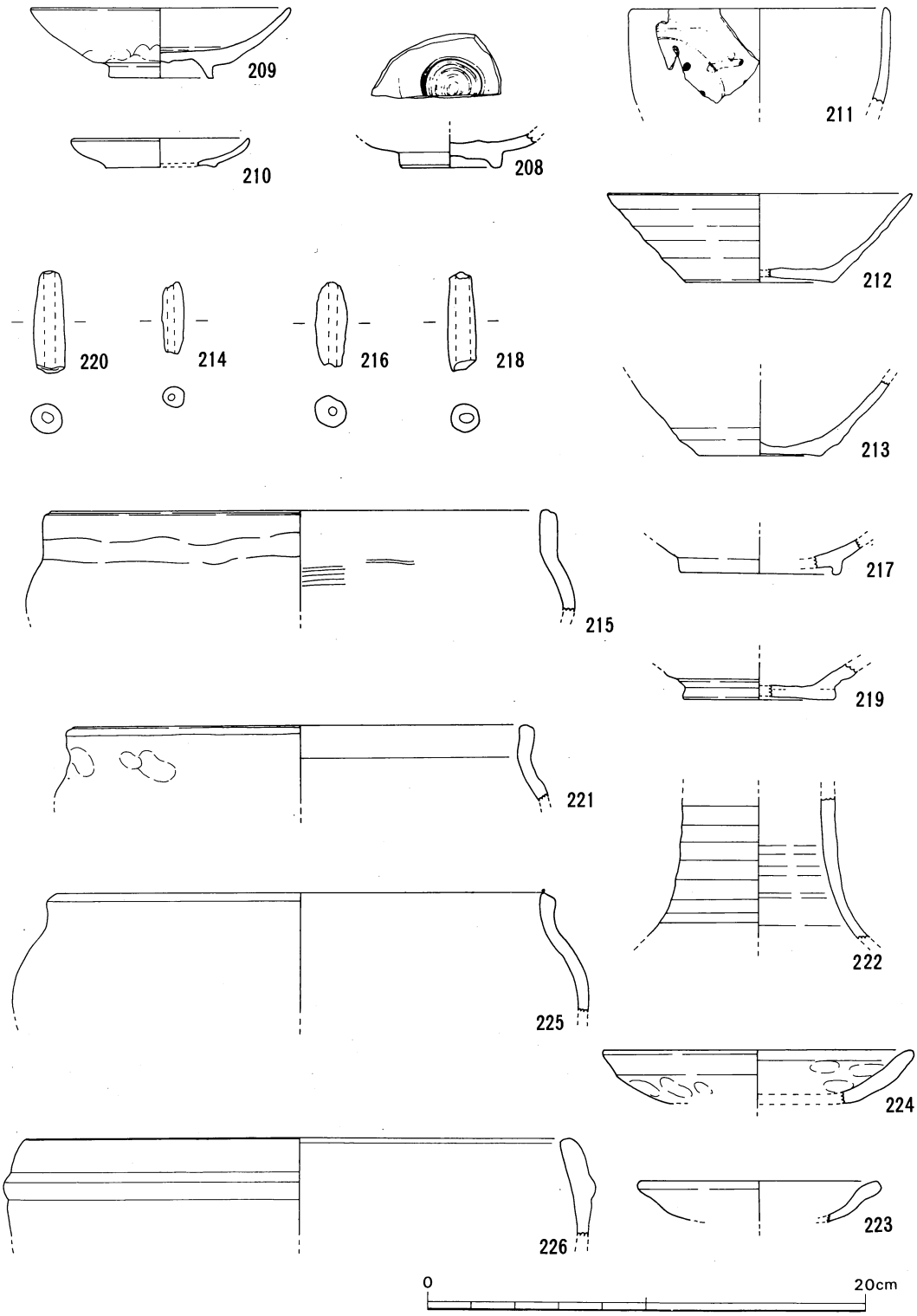
第139図　ＳＫ77・82・83・88・105・111・112・114～116・118・121出土遺物



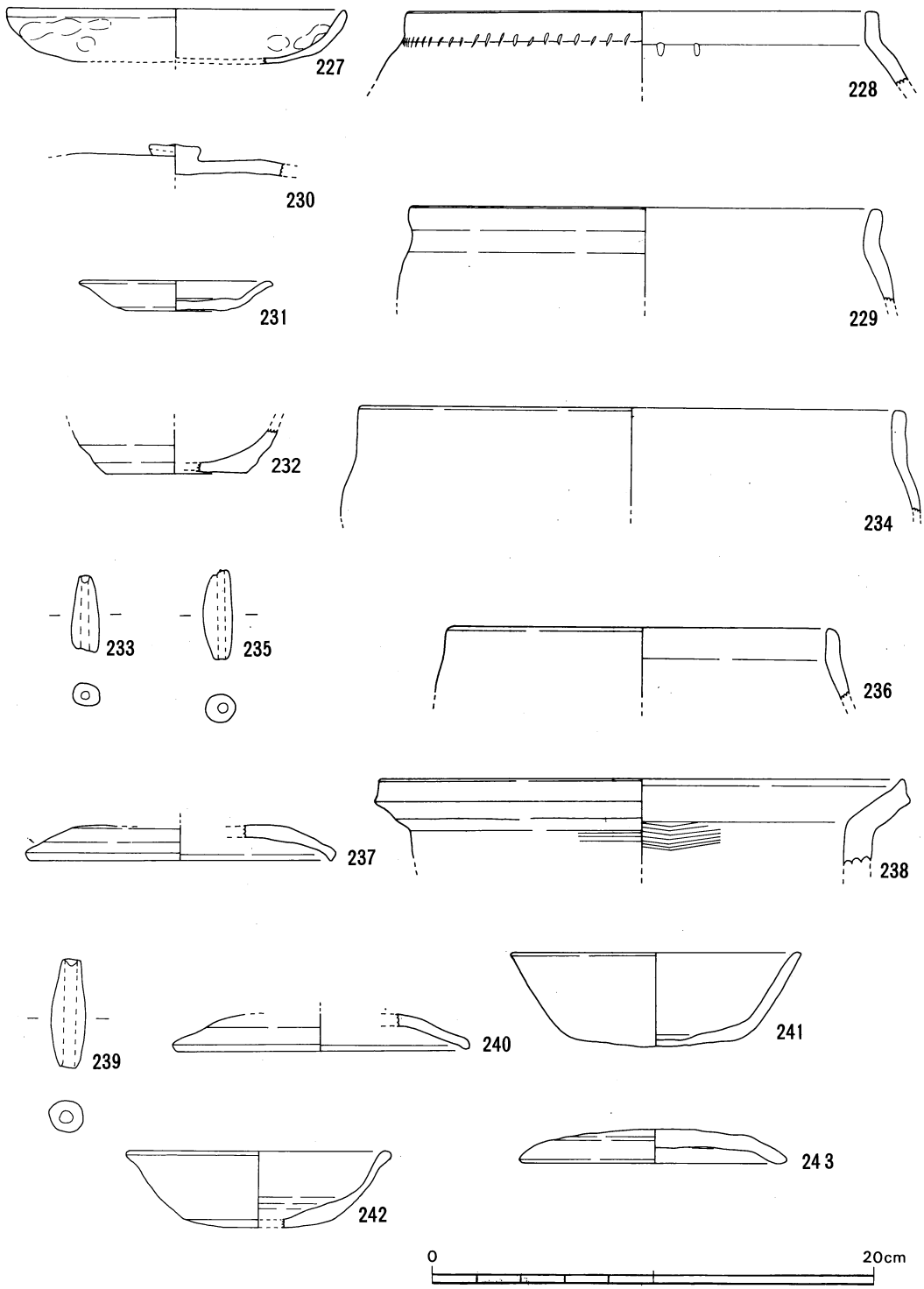
第140図　ＳＫ121、ＳＤ４・６・10・13出土遺物



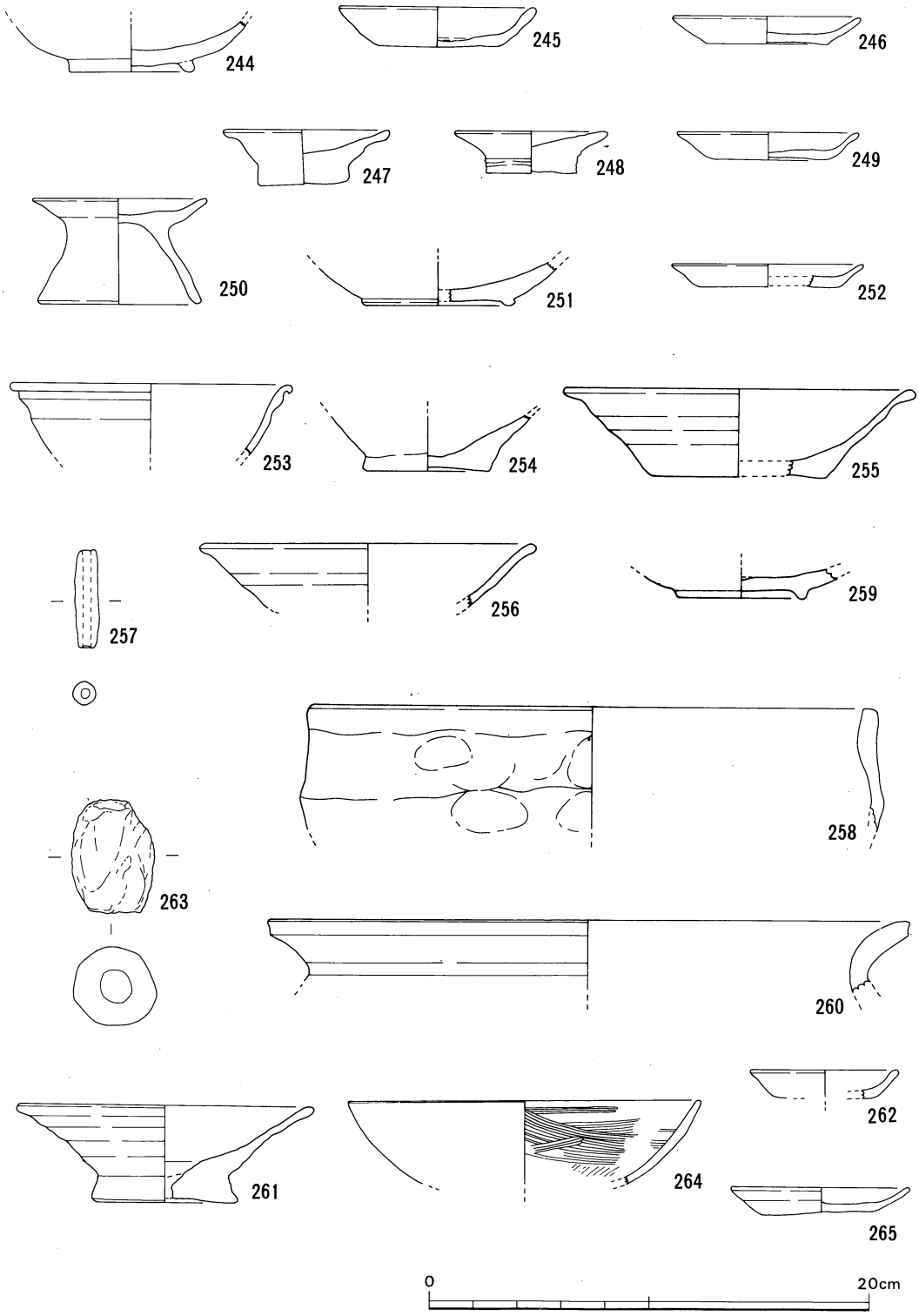
第141図　ＳＤ13・14・22～24、Ｐ２・４出土遺物



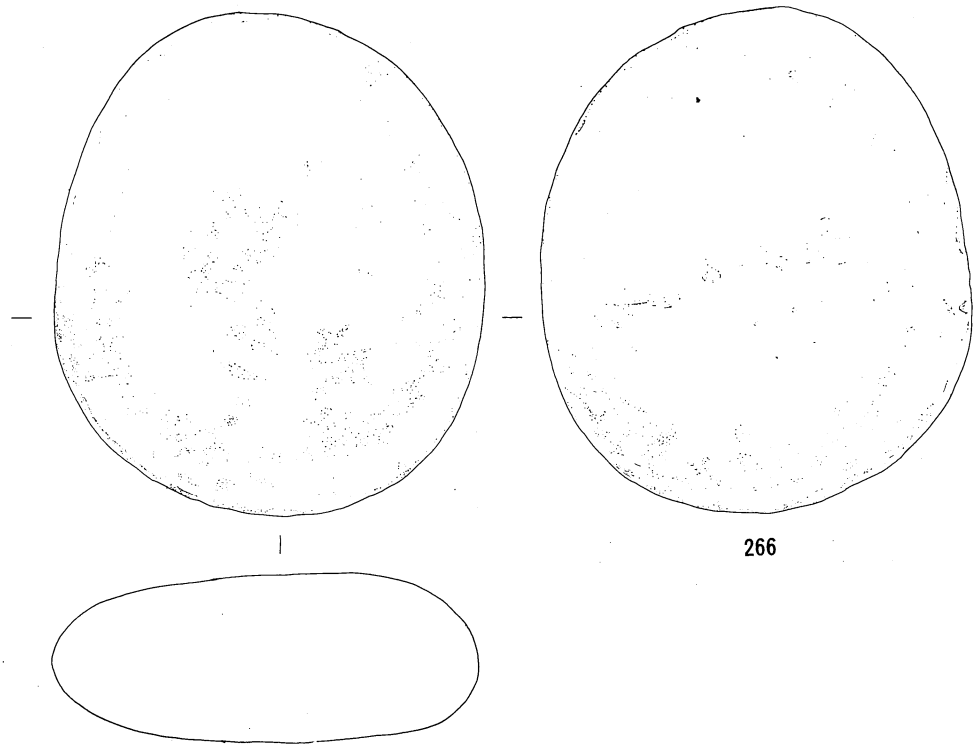
第142図　P 2 ・ 5 ・ 6 ・ 8 ・10～14・16～24 出土遺物

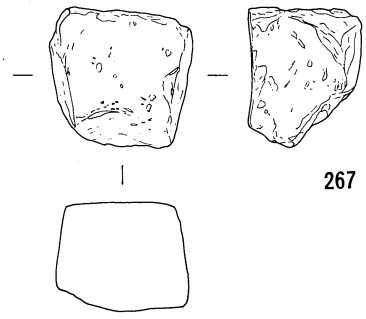


第143図　P25～34・36～40出土遺物

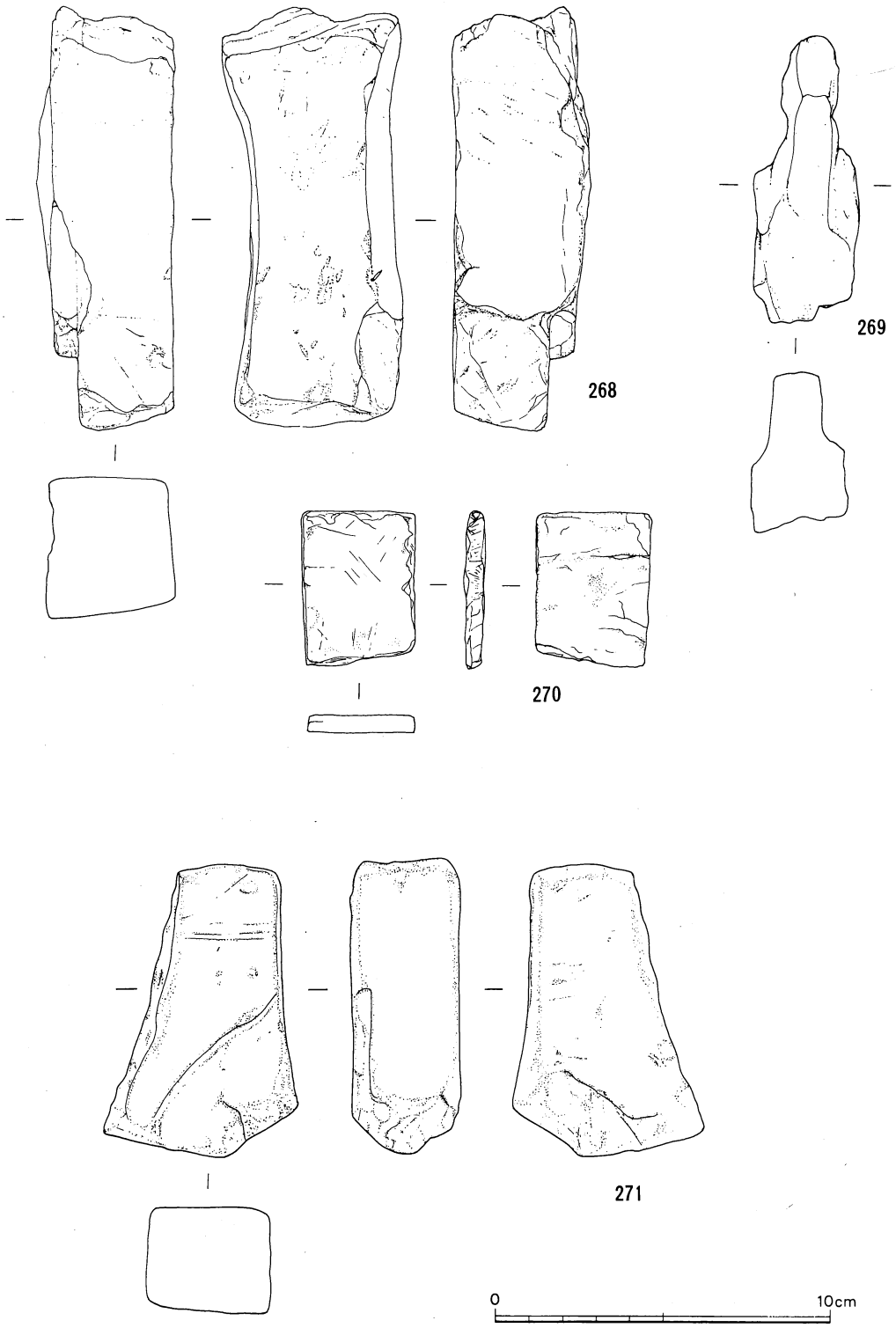


第144図　P41～53出土遺物

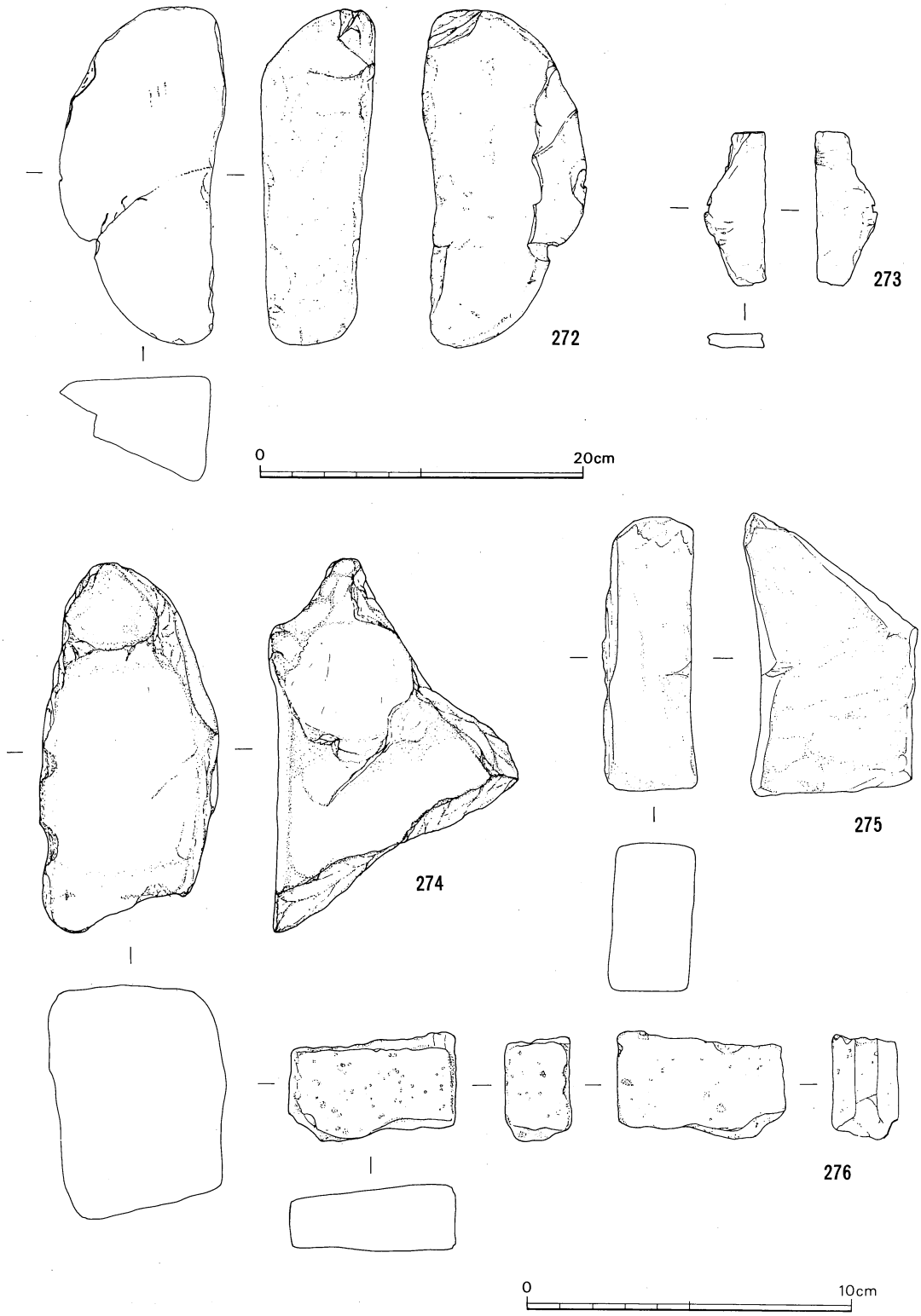




第145図　P３・35出土遺物

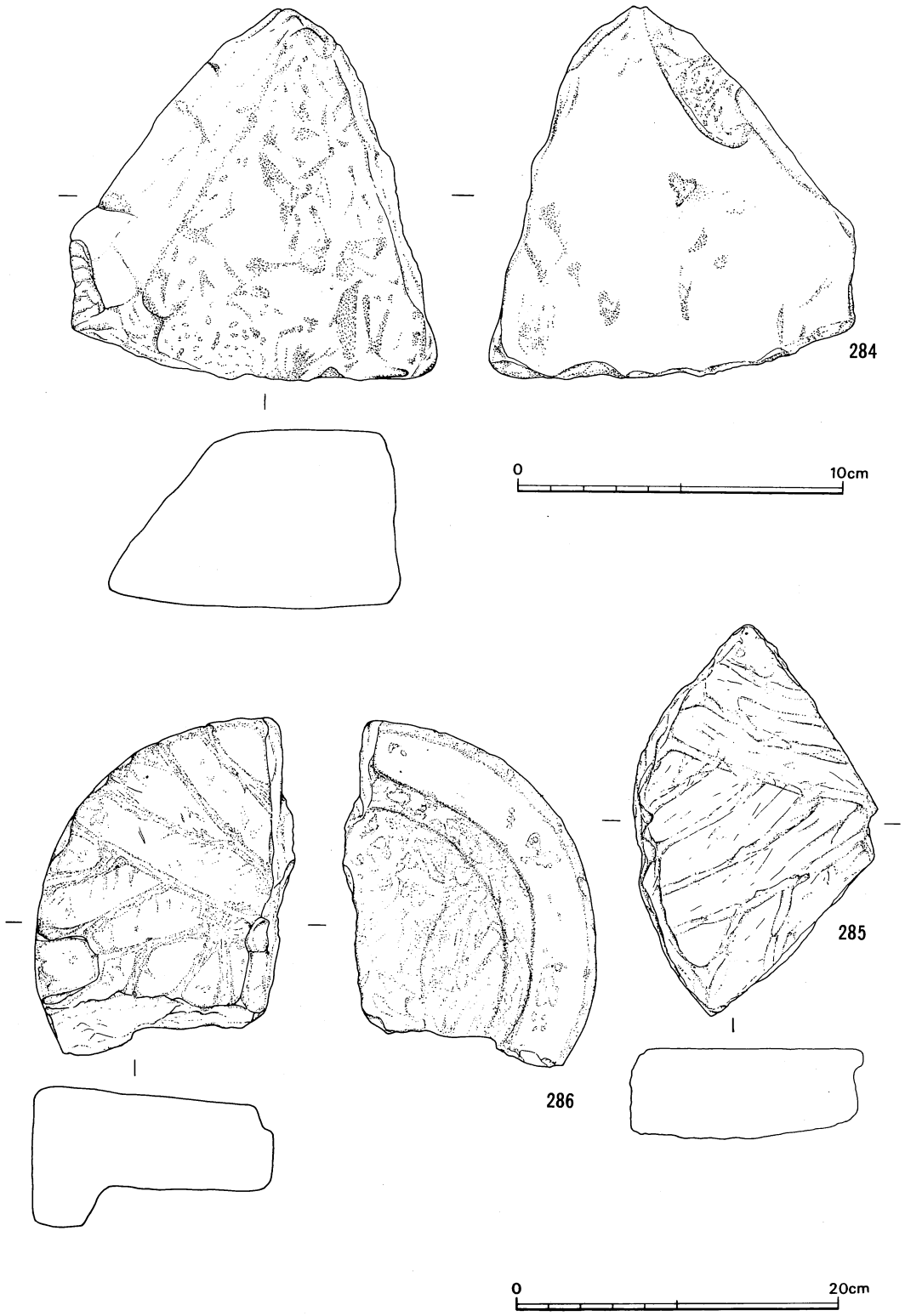


第146図　ＳＫ14・39・41、ＳＤ６出土遺物

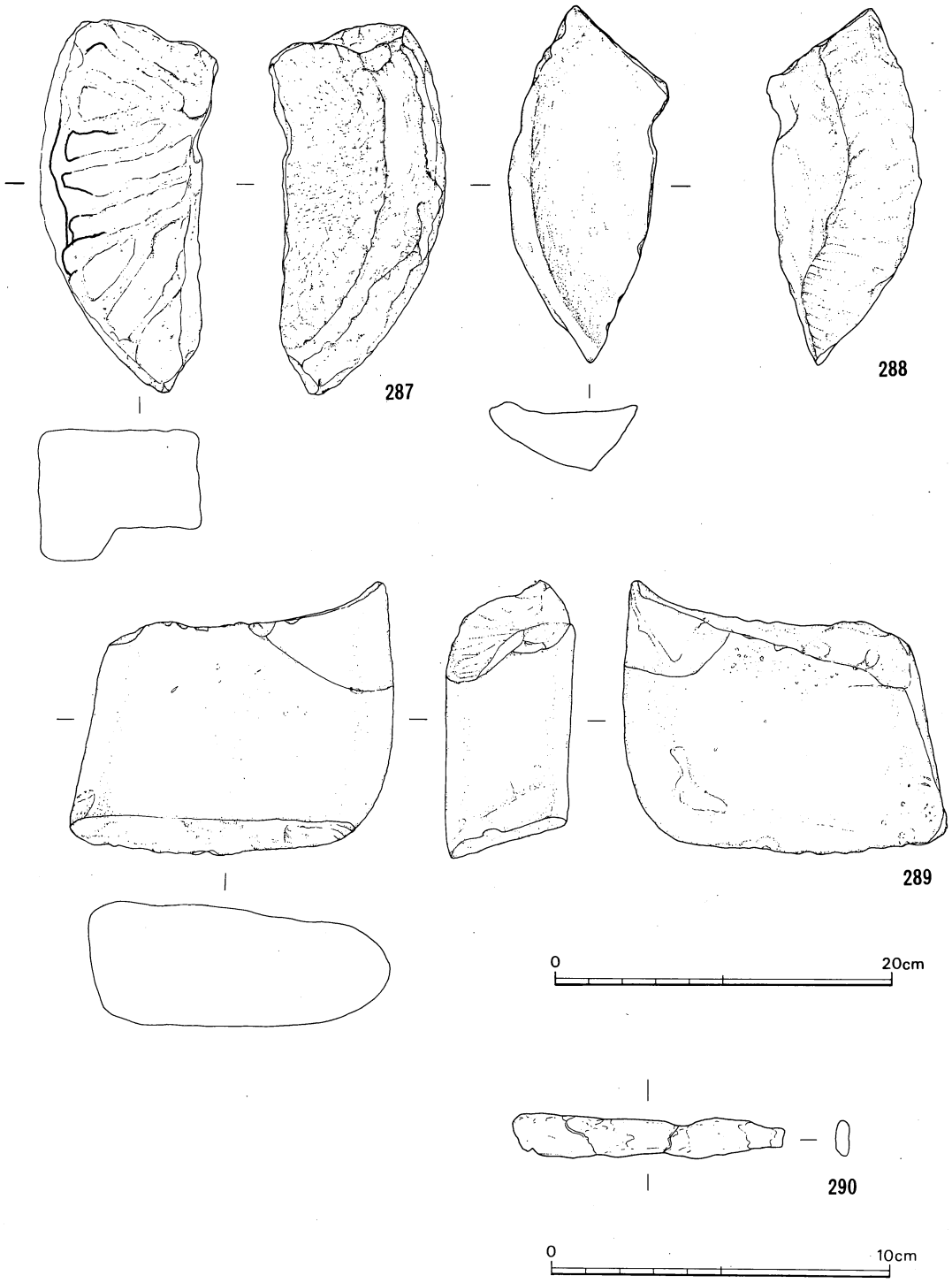


第147図　ＳＫ20・30・85、Ｐ９・15出土遺物

第148図　ＳＫ２・39・41・42・65・66・71出土遺物



第149図　ＳＫ20・30、Ｐ７出土遺物



第150図　ＳＫ34・52、Ｐ２・４出土遺物

7. Loc. 31

Loc. 31

1．位置と調査経過

Loc. 31は、田村遺跡群の南西端で、小字コキガ内の地点にあたる。当調査の北部は、Loc. 32、東部は、Loc. 30であり、両調査区とも中世の掘立柱建物群を検出している。当調査区を対象とした試掘調査は、昭和56年度より着手し、1,557㎡を行った。試掘トレンチは、グリッドラインに沿ってA～Eの5ヶ所を設定し遺構の検出にあたった。試掘調査において、中世の掘立柱建物址、溝、土坑等を検出し、また、中世の遺物も多量に出土したため、全面を拡張し発掘調査を実施した。中世の遺構面を調査している段階で、下層に弥生時代の溝を確認した。上層の中世遺構面を終了したのち下層の弥生時代遺構面の調査を実施した。

2．調査概要

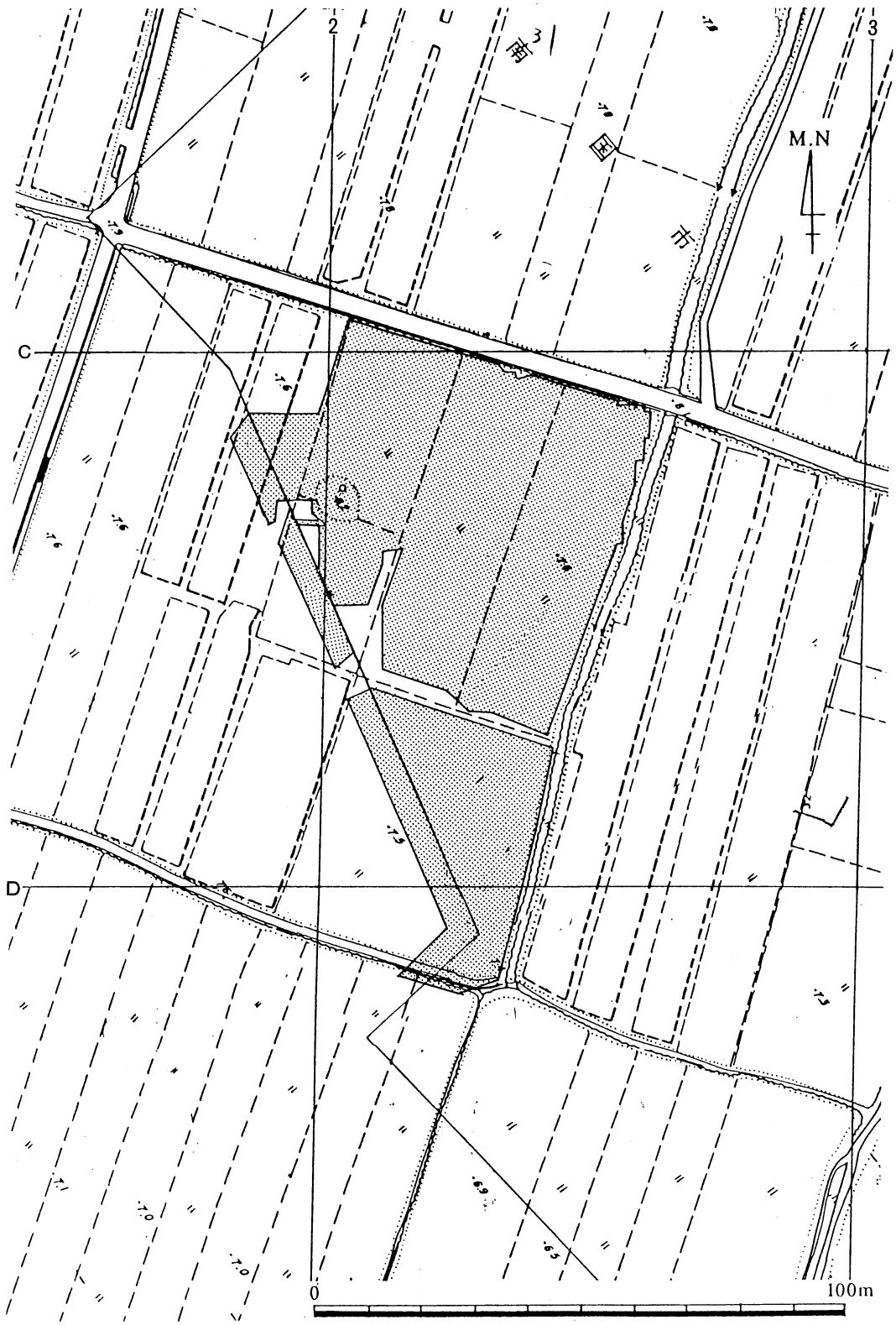
Loc. 31A・Bは、小字コキガ内にあたる調査区であるが、調査面積が広く便宜的に、北部をLoc. 31A、南部をBと呼称した。また、遺構と遺物の項は、Loc. 31A・Bに分けて説明を加えていく。Loc. 31A上層の遺構は、掘立柱建物址36棟、土坑54基、溝14条、井戸1基、柵列2基、ピット群等で、溝に囲まれた屋敷址を検出している。下層では、土坑2基、溝5条、自然流路を検出したが、下層の遺構は、『弥生編』、『古墳編』で触れている。Loc. 31Bでは、掘立柱建物址6棟、土坑38基、溝9条、水溜り状遺構1基、ピット群等で、溝に囲まれた屋敷址を検出している。調査は、昭和56年7月25日から9月23日、10月3日から12月11日と昭和57年1月22日から3月11日まで実施した。最終的な調査面積は4,728㎡である。

3．層序と出土遺物

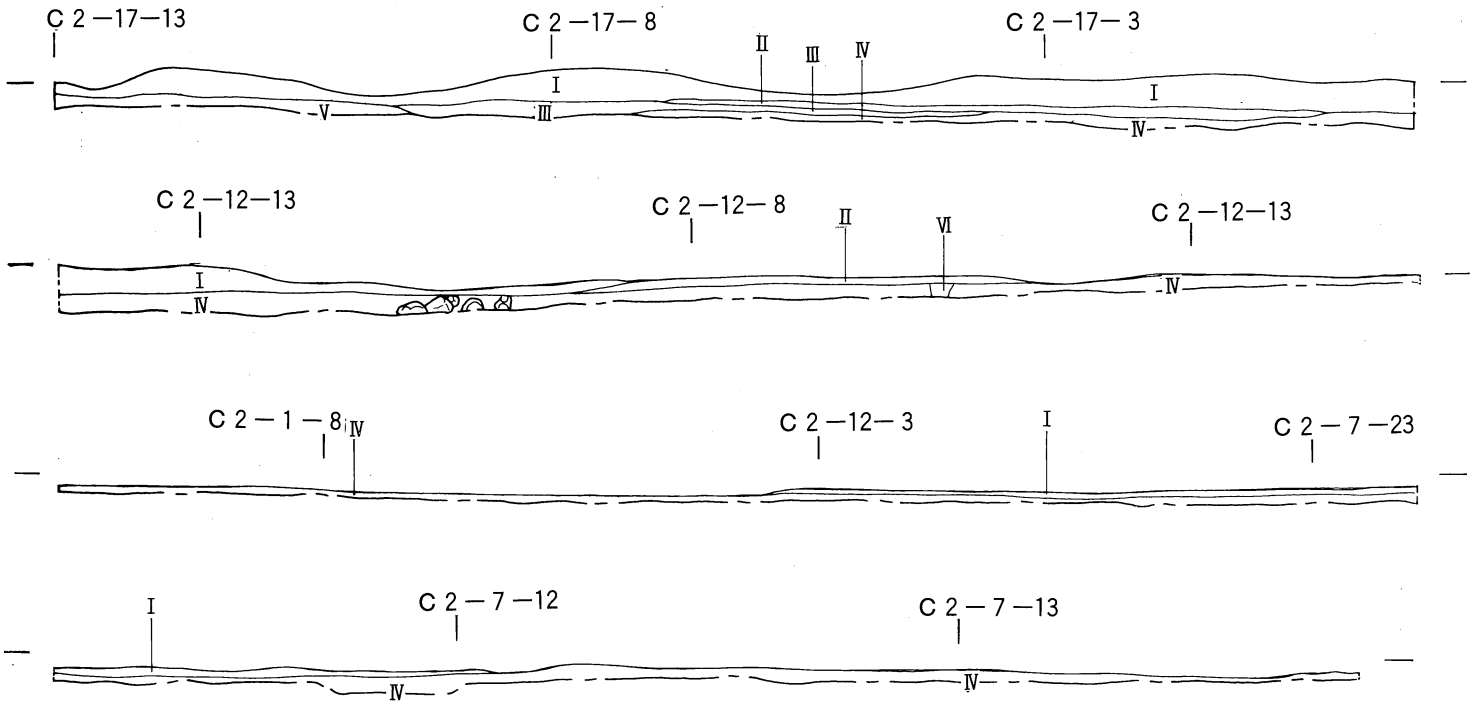
Loc. 31の基本的な層序は以下の通りである。

第Ⅰ層　耕作土
第Ⅱ層　床土
第Ⅲ層　茶褐色粘質土層
第Ⅳ層　黄茶褐色粘質土層
第Ⅴ層　灰褐色粘質土層

Loc. 31Aは、主に第Ⅰ層を除去した段階で中世遺構を検出した。第Ⅱ・Ⅲ層は部分的に堆積しているのみである。第Ⅳから第Ⅴ層にかけては、弥生・古墳時代の遺構が掘り込まれている。出土遺物は主にⅠ～Ⅲ層から出土しており、弥生時代と中・近世にいたるものは、弥生土器、瓦質土器、土師質土器、備前焼、天目茶碗、唐津焼、尾戸焼で、石製品は、石斧、凹石等が出土している。Loc. 31Bは、第Ⅲ層を除去した段階で中世の遺構を検出した。遺物は、第Ⅰ～Ⅲ層から出土しており、青磁、白磁、備前焼、唐津焼、伊万里焼、土師質土器、土錘等で16世紀



第151図　調査区設定図



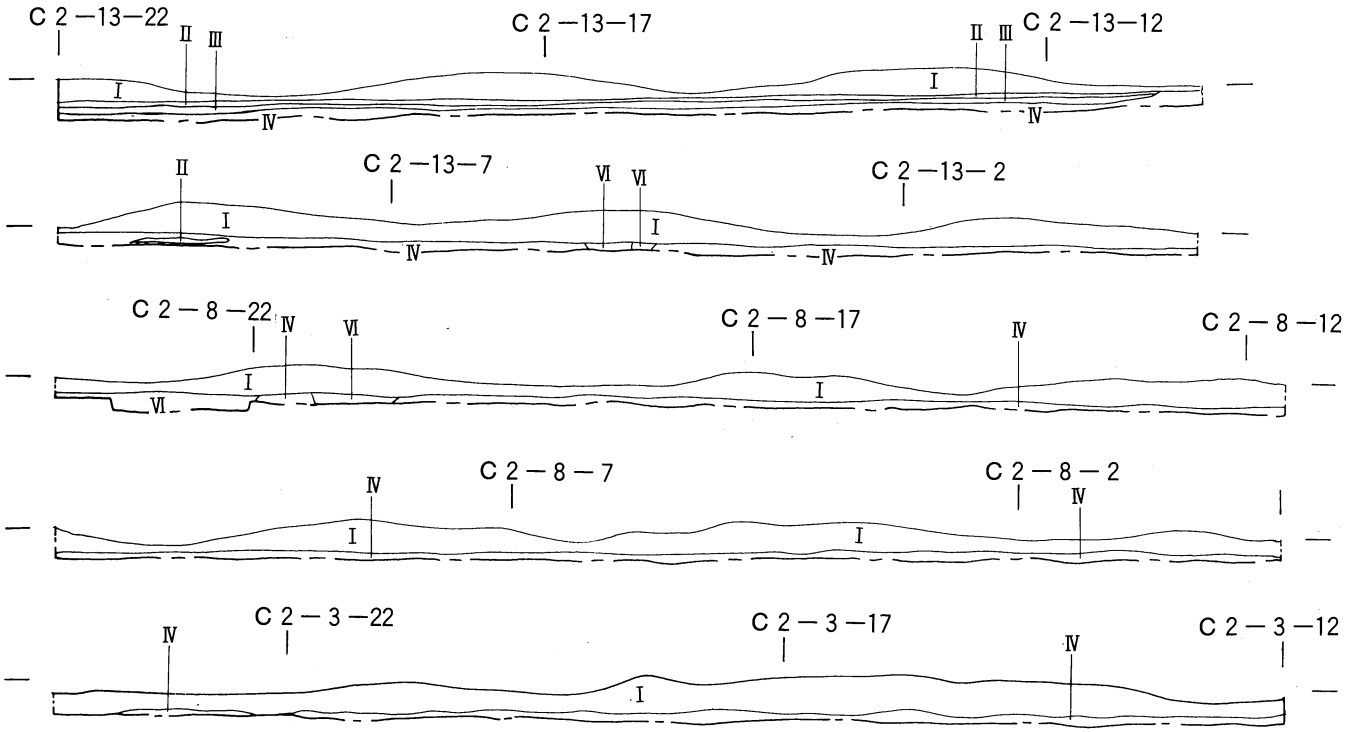
Bトレンチ　西壁

第152図　調査区セクション

第Ⅰ層　耕作土
第Ⅱ層　床土
第Ⅲ層　茶褐色粘質土層
第Ⅳ層　黄茶褐色粘質土層
第Ⅴ層　灰褐色粘質土 層
第Ⅵ層　遺構埋土

ＤＬ＝7.30m

0　4m



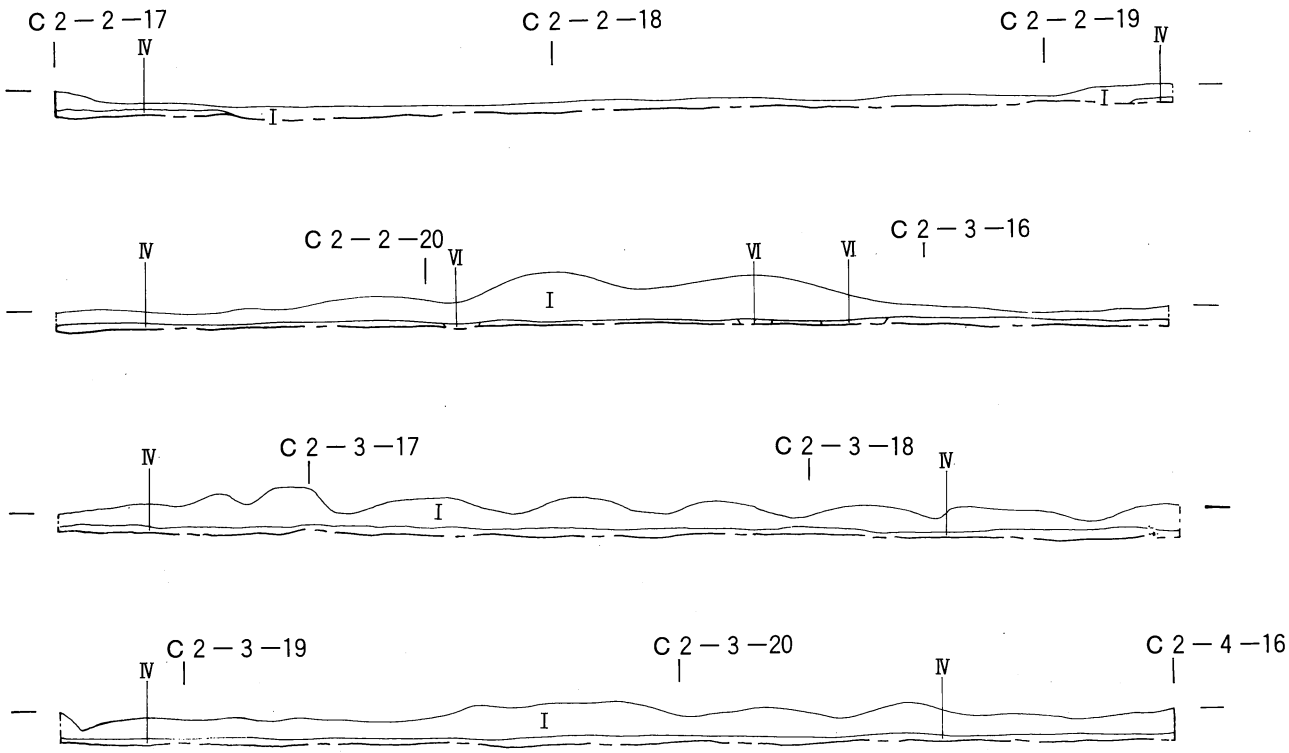
Cトレンチ　西壁

第Ⅰ層　耕作土
第Ⅱ層　床土
第Ⅲ層　茶褐色粘質土層
第Ⅳ層　黄茶褐色粘質土層
第Ⅵ層　遺構埋土

DL＝7.30m

0　4m

第153図　調査区セクション



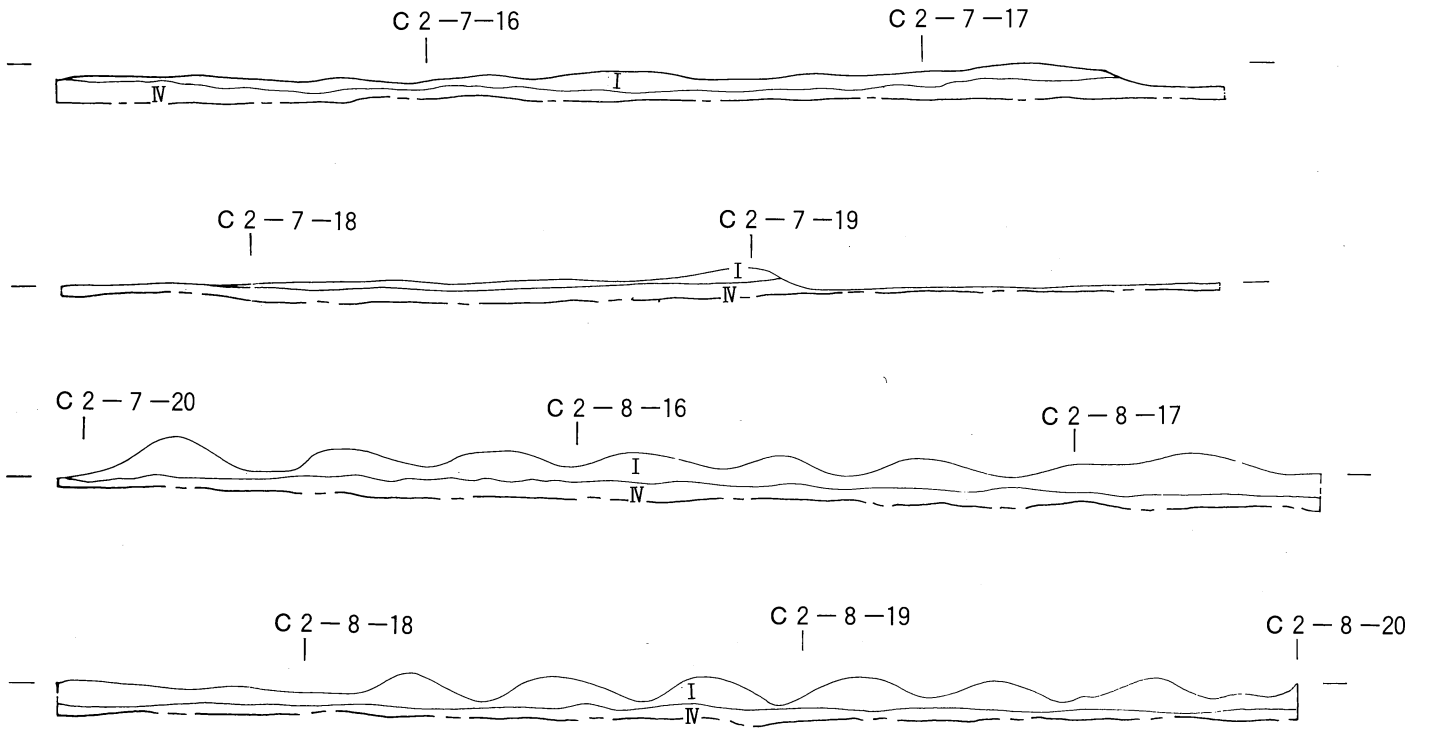
Dトレンチ　北壁

第Ⅰ層　耕作土
第Ⅳ層　黄茶褐色粘質土層
第Ⅵ層　遺構埋土

DL＝7.30m

0　4m

第154図　調査区セクション



Eトレンチ　北壁

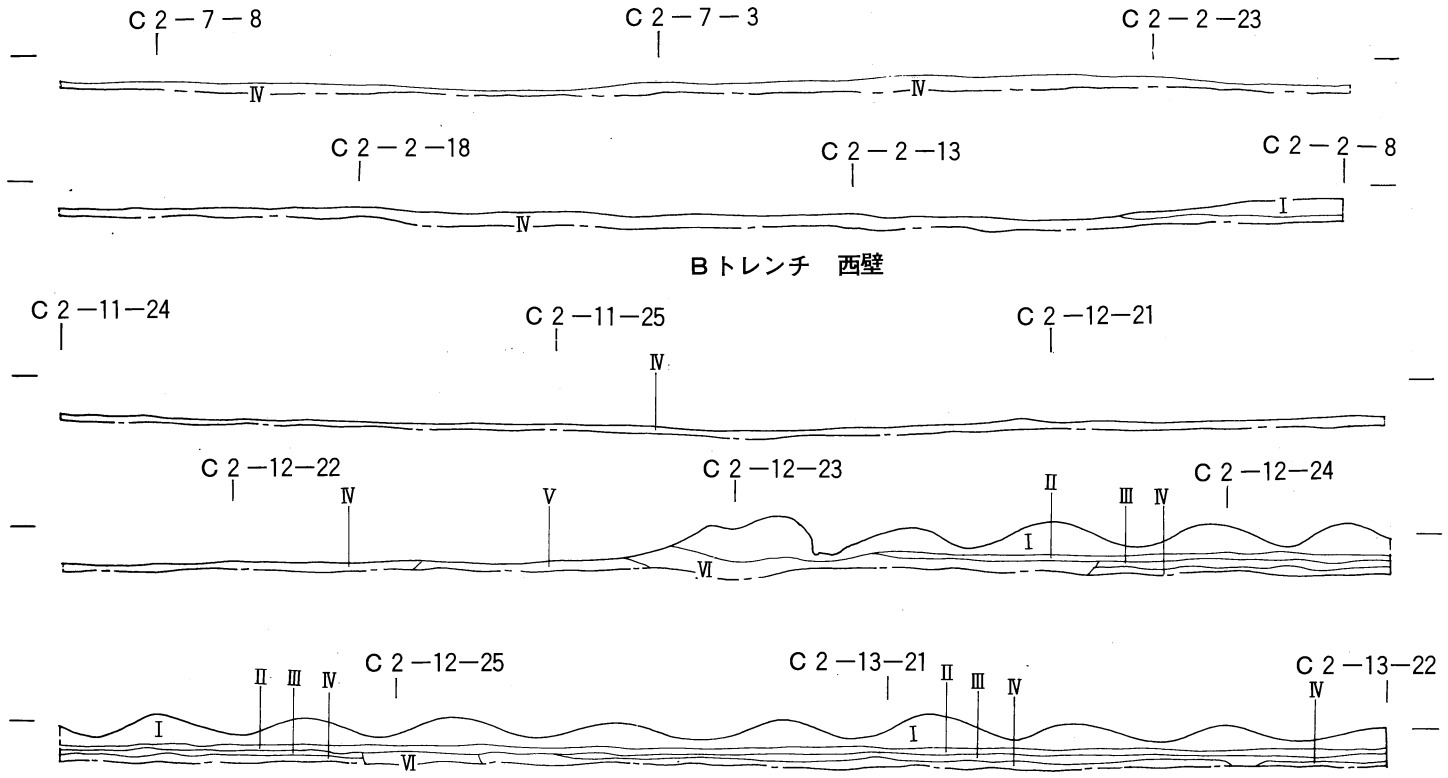
第Ⅰ層　耕作土

第Ⅳ層　黄茶褐色粘質土層

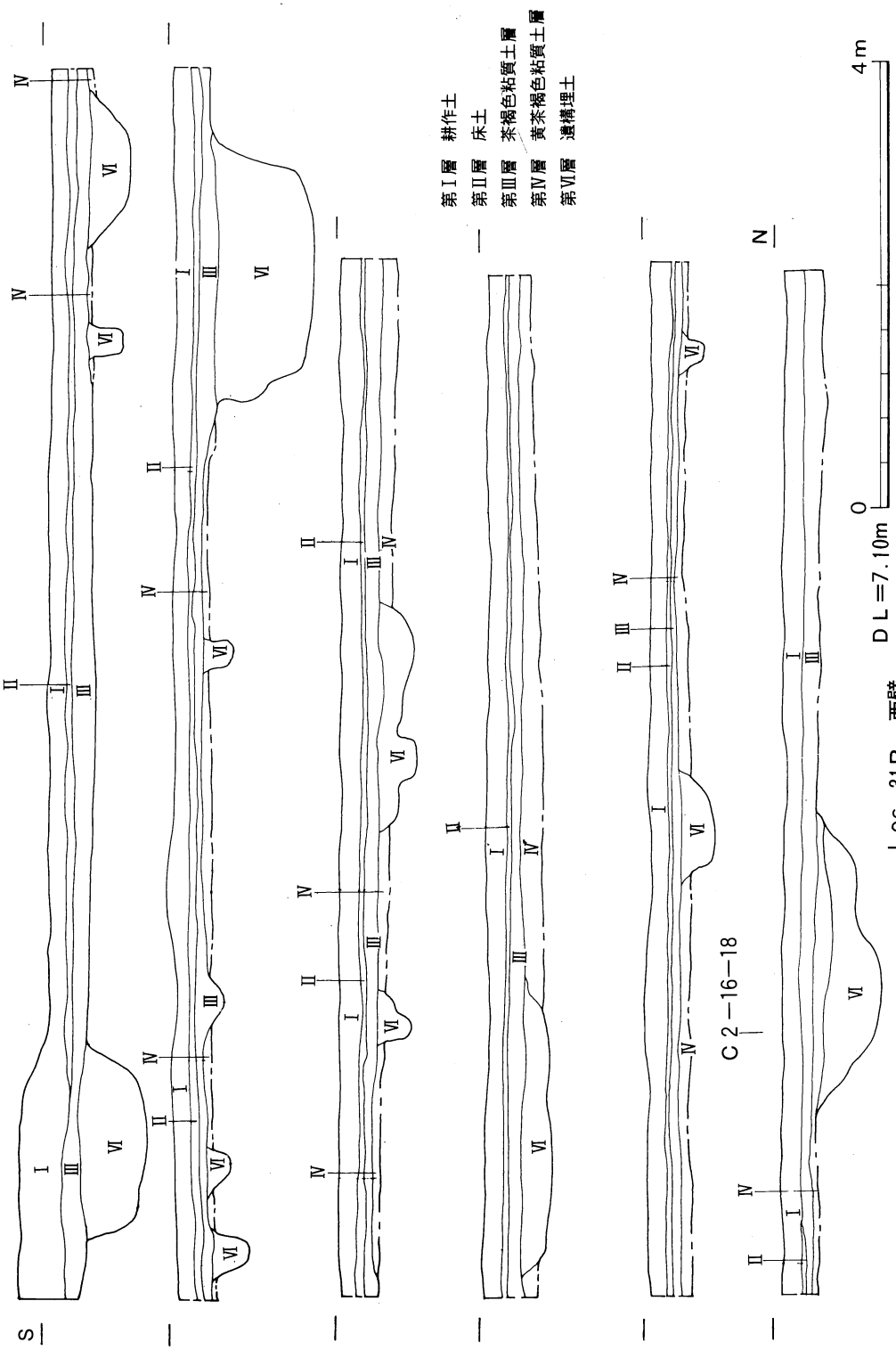
DL＝7.30m

0　4m

第155図　調査セクション



第156図　調査区セクション



第157図　調査区セクション

後半以降のものが大半である。なお、詳細は観察表を参照。

4．遺構と遺物

Loc. 31 A

掘立柱建物址

ＳＢ１

ＳＢ１は、調査区の北部で、溝に囲まれた屋敷内に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×２間の東西棟で、梁間（南北）1.40ｍ、桁行（東西）4.80ｍを測る。棟方向はＮ－75°－Ｗである。柱穴の平面形は円形で、規模は、直径20～30㎝、検出面からの深さ25～60㎝を測る。基底面の標高は6.40～6.80ｍである。柱間距離は、梁間1.30～1.40ｍ、桁行2.05～2.60ｍである。東妻の柱間距離が狭い。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、瓦質土器、土師質土器が若干出土しているが、細片のため実測不可能である。重複関係は、北側に位置するＳＫ４に切られている。

ＳＢ２

ＳＢ２は、調査区北部で、溝に囲まれた屋敷内に位置し、第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×３間の東西棟で、梁間（南北）3.05ｍ、桁行（東西）4.45ｍを測る。棟方向はＮ－79°－Ｗである。柱穴の平面形は円形で、規模は、直径10～20㎝、検出面からの深さ14～40㎝を測る。基底面の標高は6.56～6.86ｍである。柱間距離は、梁間1.35～1.60ｍ、桁行0.80～1.85ｍである。西妻の中間柱、北辺列の柱穴が欠損している。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＢ３にみられ、ピットの切り合いがなく不明である。

ＳＢ３

ＳＢ３は、調査区の北部で、溝に囲まれた屋敷内に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×２間の南北棟で、梁間（東西）2.15ｍ、桁行（南北）3.20ｍを測る。棟方向はＮ－15°－Ｅである。柱穴の平面形は、円形と小型方形を呈する。規模は、直径20～30㎝、検出面からの深さ10～30㎝を測る。基底面の標高は6.70～6.90ｍである。柱間距離は、梁間2.05～2.15ｍ、桁行1.40～1.80ｍであり、北妻が狭い。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、ＳＢ２・４・５にみら

れるが、ピットの切り合いがなく新旧関係は不明である。

ＳＢ４

ＳＢ４は、調査区の北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×２間の南北棟で、梁間（東西）1.75ｍ、桁行（南北）3.60ｍを測る。棟方向はＮ－18°－Ｅである。柱穴の形態は、円形と小型方形を呈する。規模は、直径20～30㎝、検出面からの深さは15～25㎝を測る。基底面の標高は6.75～6.85ｍである。柱間距離は、梁間1.75ｍ、桁行1.60～1.95ｍであり、南妻が狭い。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、ＳＢ３・５にみられるが、ピットの切り合いがなく新旧関係は不明である。

ＳＢ５

ＳＢ５は、調査区の北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×２間の東西棟で、梁間（東西）2.75ｍ、桁行（南北）3.45ｍを測る。棟方向はＮ－75°－Ｗである。柱穴の平面形は円形で、規模は、直径20～30㎝、検出面からの深さ12～35㎝を測る。基底面の標高は6.60～6.90ｍである。柱間距離は、梁間1.20～1.55ｍ、桁行1.60～1.80ｍである。西妻の中間柱が欠損している。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器、瓦質土器、備前焼が若干出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、ＳＢ３・４にみられるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ６

ＳＢ６は、調査区の北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×３間の東西棟で、梁間（南北）4.60ｍ、桁行（東西）5.15ｍを測り総柱である。棟方向はＮ－77°－Ｗである。柱穴の平面形は、円形と小型方形を呈する。規模は、直径20～30㎝、検出面からの深さ10～35㎝を測る。基底面の標高は6.68～6.95ｍである。柱間距離は、梁間2.20～2.40ｍ、桁行0.80～2.20ｍである。西妻の中間柱は、ＳＫ７に切られており検出することができなかった。東妻が西妻に比べ広く、また、桁行の西部の柱間距離が狭い。埋土は灰色粘質土である。遺物は、Ｐ１より備前焼擂鉢（26、27）が出土している。その他若干土師質土器が出土している。重複関係は、ＳＢ７とにみられるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ７

ＳＢ７は、調査区の北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×２間の東西棟で、梁間（南北）3.05ｍ、桁行（東西）4.25ｍを測る。棟方向はＮ－78°－Ｗである。柱穴の平面形は、小型の方形を呈する。規模は、一辺20㎝、検出面から

の深さ17～40cmを測る。基底面の標高は6.60～6.87ｍである。柱間距離は、梁間1.45～1.55ｍ、桁行2.05～2.15ｍである。西妻の北辺柱穴が欠損している。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器が１片のみ出土している。細片で実測不可能である。重複関係は、ＳＢ６とにみられるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ８

ＳＢ８は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×３間の南北棟で、梁間（東西）5.05ｍ、桁行（南北）4.85ｍを測り総柱である。北東側に１間四方の張り出し部を作る。棟方向はＮ－18°－Ｅである。柱穴の平面形は、円形及び小型の方形を呈する。規模は、円形の柱穴直径20cm、方形が一辺20cm、検出面からの深さ20～55cmを測る。基底面の標高は6.46～6.80ｍである。柱間距離は、梁間2.40～2.55ｍ、桁行1.50～1.90ｍである。南妻の柱間距離がやや広い。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、Ｐ１より28の土師質土器杯が出土している。重複関係は認められない。

ＳＢ９

ＳＢ９は、調査区の中央よりやや北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、３×３間の東西棟で、梁間（南北）4.85ｍ、桁行（東西）5.25ｍを測る。棟方向はＮ－80°－Ｗである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径20cm、検出面からの深さ15～70cmを測る。基底面の標高は6.19～6.84ｍである。柱間距離は、梁間1.50～1.75ｍ、桁行1.70～1.85ｍである。西妻北辺の柱穴を確認することができなかった。北辺列は、３回に渡り柱穴の切り合いがあり、建替えが想定できる。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土しているが、細片で実測不可能である。ＳＢ９周辺は、ＳＤ１に囲まれた屋敷内の主屋とみられる部分で、ＳＢ11・12と重複している。しかし、ピットの切り合い関係等がなく新旧関係は不明である。

ＳＢ10

ＳＢ10は、調査区中央よりやや北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×３間の東西棟で、梁間（南北）1.65ｍ、桁行（東西）4.55ｍを測る。棟方向はＮ－80°－Ｗである。柱穴の平面形は、円形及び小型の方形を呈する。規模は、円形の柱穴が直径20～50cm、方形が一辺30cm、検出面からの深さ20～75cmを測る。基底面の標高は6.26～6.81ｍである。柱間距離は、梁間1.50～1.65ｍ、桁行1.30～1.65ｍである。南辺列の柱穴１個が、ＳＫ16に切られているため欠損している。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、ＳＫ16に切られている。

SB11

SB11は、調査区中央やや北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、3×3間の東西棟で、梁間（南北）6.55m、桁行（東西）7.55mを測り総柱である。棟方向はN－73°－Wである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径20～40cm、検出面からの深さ10～70cmを測る。基底面の標高は6.30～6.80mである。柱間距離は、梁間1.65～2.90m、桁行1.70～3.00mである。北辺列の柱穴1個がSK16に切られており欠損している。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器片が出土しているが、細片で実測不可能である。SB9・11・12は、SD1に囲まれた屋敷内の主屋とみられる部分で、SB9・12と重複している。しかし、柱穴の切り合いを確認することができず新旧関係は不明である。

SB12

SB12は、調査区中央やや北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、3×3間の東西棟で、梁間（南北）5.30m、桁行（東西）7.20mを測る総柱である。棟方向はN－79°－Wである。柱穴の平面形は、円形及び小型の方形を呈する。規模は、円形の柱穴が直径20cm、方形の柱穴が一辺40～60cm、検出面からの深さ10～50cmを測る。基底面の標高は6.45～6.95mである。柱間距離は、梁間1.45～1.80m、桁行1.80～2.85mである。北辺の東隅の柱穴が欠ける。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、SK15に切られており、SB9・11とも重複しているが、これらSBの新旧関係は不明である。

SB13

SB13は、調査区の中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、1×2間の南北棟で、梁間（東西）2.65m、桁行（南北）4.25mを測る。棟方向はN－15°－Eである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径25～45cm、検出面からの深さ10～40cmを測る。南東隅の柱穴が浅い。基底面の標高は6.48～6.86mである。柱間距離は、梁間2.65m、桁行2.00～2.25mである。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土したが、細片で実測不可能である。重複関係は、SB14に切られているが、SB15との関係は明確にできなかった。

SB14

SB14は、調査区中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、2×3間の南北棟で、梁間（東西）3.50m、桁行（南北）4.65mを測る。棟方向はN－13°－Eである。柱穴の平面形は、円形及び小型の方形を呈する。規模は、円形の柱穴が直径25～75cm、方形の柱穴が一辺20cm、検出面からの深さ10～55cmを測る。基底面の標高は6.37～6.84mである。柱間距離は、梁間1.20～2.20m、桁行1.20～1.95mである。桁行の柱間

距離が不統一である。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土したが、細片で実測不可能である。重複関係は、ＳＢ13を切っているが、ＳＢ15との関係は不明である。

ＳＢ15

ＳＢ15は、調査区の中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×４間の東西棟で、梁間（南北）4.65ｍ、桁行（東西）6.15ｍを測る。棟方向はＮ－80°－Ｗである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径16～42㎝、検出面からの深さ５～60㎝を測る。南辺柱穴列が浅い。基底面の標高は6.26～6.92ｍである。柱間距離は、梁間2.10～2.40ｍ、桁行1.10～2.15ｍである。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、Ｐ１より29の土師質土器杯が出土している。重複関係は、ＳＢ13・14とに見られるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ16

ＳＢ16は、調査区中央より西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×２間の南北棟で、梁間（東西）3.60ｍ、桁行（南北）4.60ｍを測る。棟方向はＮ－16°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径25～35㎝、検出面からの深さ５～20㎝を測る。基底面の標高は6.70～6.90ｍである。柱間距離は、梁間1.80ｍ、桁行2.25～2.30ｍで、南妻の中間柱と東辺の中間柱が欠損している。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＢ17とにみられるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ17

ＳＢ17は、調査区中央より西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×１間の東西棟で、梁間（南北）1.60ｍ、桁行（東西）1.75ｍを測る。棟方向はＮ－80°－Ｗである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径23～27㎝、検出面からの深さ17～40㎝を測る。北西隅の柱穴が浅い。基底面の標高は6.54～6.80ｍである。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。ＳＢ17は、ＳＢ16内に位置し重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ18

ＳＢ18は、調査区中央より東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×２間のほぼ正方形を呈する総柱である。一辺は2.95ｍを測る。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径20～30㎝を測り、基底面の標高は6.54～6.90ｍである。柱間距離は、北辺柱穴列で1.35～1.60ｍ、東辺柱穴列で1.25～1.70ｍを測る。南西隅の柱穴が欠損している。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土しているが、細片で実測不

可能である。重複関係は、ＳＫ26、ＳＢ19に認められるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ19

ＳＢ19は、調査区中央より東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×４間の東西棟で、梁間（南北）3.50ｍ、桁行（東西）5.70ｍを測る。棟方向はＮ－75°－Ｗである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径15～32㎝、検出面からの深さ10～45㎝を測る。基底面の標高は6.47～6.87ｍである。柱間距離は、梁間3.20～3.50ｍ、桁行1.40～1.45ｍで桁行が統一されている。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土しているが、細片で実測不可能である。本遺構は、ＳＢ18、ＳＤ１と重複しているが、その新旧関係を明確にすることができなかった。

ＳＢ20

ＳＢ20は、調査区の東部で、溝に囲まれた屋敷内に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×３間で東西棟の総柱である。梁間（南北）3.65ｍ、桁行（東西）6.30ｍを測る。棟方向はＮ－75°－Ｗである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径18～31㎝、検出面からの深さ10～50㎝を測る。基底面の標高は6.51～6.90ｍである。柱間距離は、梁間1.80～1.85ｍ、桁行1.60～2.40ｍを測る。東妻の中間柱、南辺列の中間柱が欠損している。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。ＳＢ21と重複しているが、柱穴の切り合いが認められず、新旧関係は不明である。

ＳＢ21

ＳＢ21は、調査区の東部で、溝に囲まれた屋敷内に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×３間で東西棟の総柱である。梁間（南北）4.05ｍ、桁行（東西）6.55ｍを測る。棟方向はＮ－76°－Ｗである。柱穴の平面形は円形を呈するものが多い。規模は、直径20～40㎝、検出面からの深さ10～55㎝を測る。基底面の標高は6.42～6.91ｍである。柱間距離は、梁間1.95～2.05ｍ、桁行1.20～2.80ｍを測る。桁行東部の柱間距離が狭い。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。本遺構は、西側に位置するＳＢ20と重複しているが、柱穴の切り合い関係が認められず、新旧関係は不明である。しかし、ＳＢ20との棟方向が、ほぼ一致しており、規模も同様なことから時期差はほとんどないものとみられる。

ＳＢ22

ＳＢ22は、調査区の西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、3×4間で東西棟の総柱である。梁間（南北）5.35m、桁行（東西）7.90mを測る。棟方向はN－71°－Wである。柱穴の平面形は円形を呈するものが多い。規模は、直径20～45cm、検出面からの深さ14～53cmを測る。基底面の標高は6.36～6.78mである。柱間距離は、梁間1.60～2.05m、桁行1.15～2.80mを測る。桁行西部の柱間距離が狭く廂とも考えられる。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器片が若干出土しているが、細片のため実測不可能である。本遺構は、ＳＢ23・24と重複しているが、柱穴の切り合い関係がなく新旧関係は不明である。しかし、重複している建物の中で一番広い面積を有しており、2度の建替えが行われた中でも新しい時期に置くことができると考えられる。

ＳＢ23

ＳＢ23は、調査区の西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、3×4間の東西棟で、梁間（南北）5.45m、桁行（東西）6.10mを測る。棟方向はN－75°－Wである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径20～50cm、検出面からの深さ12～56cmを測る。基底面の標高は6.28～6.78mである。柱間距離は、梁間1.75～1.85m、桁行1.10～2.25mを測る。北辺列の中間柱が1個欠損している。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。本遺構は、ＳＢ22同様溝に囲まれた屋敷外に位置し、ＳＢ22・24と重複している。新旧関係は不明であるが、建替えが行われており、ＳＢ22と同様な性格を有するとみられる。

ＳＢ24

ＳＢ24は、調査区の西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、2×2間で東西棟の総柱である。梁間（南北）3.55m、桁行（東西）4.70mを測る。棟方向はN－75°－Wである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径22～35cm、検出面からの深さ18～57cmを測る。基底面の標高は6.30～6.74mである。柱間距離は、梁間1.70～1.85m、桁行2.05～2.65mを測る。桁行の東部が狭くなっている。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

本遺構は、ＳＢ22・23と同様な位置に重複して存在する。新旧関係は不明であるが、その中で面積は最も狭い。また、棟方向は、ＳＢ23と同様で北辺柱穴列は同ラインに位置する。これらは、本遺構が最も古く存在し、それを拡幅してＳＢ23とし、さらに大きくＳＢ22を築造したものとみられる。これらＳＢ22～24には、建物内、外にＳＫ2・44～46が存在する。位置からみて有機的な関連性が考えられる。

ＳＢ25

ＳＢ25は、調査区南西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×３間の東西棟で、梁間（南北）1.75ｍ、桁行（東西）5.10ｍを測る。棟方向はＮ－83°－Ｗである。柱穴の平面形は円形を呈し、直径25～40㎝、検出面からの深さ12～64㎝を測る。基底面の標高は6.28～6.79ｍである。柱間距離は、梁間1.50～1.75ｍ、桁行0.85～2.50ｍを測る。桁行東部の柱間距離が広く、柱穴が１個欠けていると考えられ、１×４間になる可能性がある。東妻はやや広い。埋土は灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、南北に縦走するＳＤ11を切っている。

ＳＢ26

ＳＢ26は、調査区中央よりやや東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×１間の東西棟で、梁間（南北）1.95ｍ、桁行（東西）2.20ｍを測る。棟方向はＮ－73°－Ｗである。柱穴の平面形は円形及び小型の方形を呈する。規模は、円形の柱穴が直径25㎝、方形が一辺30㎝、検出面からの深さ32～40㎝を測る。基底面の標高は6.50～6.64ｍである。埋土は灰色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、東西に縦走するＳＤ６を切っている。

ＳＢ27

ＳＢ27は、調査区の南東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×２間の南北棟で、梁間（東西）2.45ｍ、桁行（南北）2.75ｍを測る。棟方向はＮ－17°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径16～40㎝、検出面からの深さ11～47㎝を測る。基底面の標高は6.46～6.88ｍである。柱間距離は、梁間1.05～1.40ｍ、桁行1.30～1.45ｍを測る。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＢ28・29とにみられるが、ピットの切り合いが認められず、新旧関係は不明である。

ＳＢ28

ＳＢ28は、調査区の南東部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×３間の東西棟で、梁間（南北）3.80ｍ、桁行（東西）5.35ｍを測る。棟方向はＮ－75°－Ｗである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径25～36㎝、検出面からの深さ20～41㎝を測る。基底面の標高は6.56～6.78ｍである。柱間距離は、梁間1.85～1.95ｍ、桁行1.70～1.85ｍを測る。南東隅の柱穴が欠けている。また、桁行の東部が狭くなっている。埋土は灰色粘質土である。遺物は土師質土器片が１点出土しているのみである。重複関係は、ＳＢ27・29とにみられるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ29

ＳＢ29は、調査区の南東部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

建物は、４×４間の東西棟で、梁間（南北）6.10ｍ、桁行（東西）9.25ｍを測る。棟方向はＮ－75°－Ｗである。ＳＢ28と同一方向を指している。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径16～55㎝、検出面からの深さ10～57㎝を測る。基底面の標高は6.35～6.90ｍである。柱間距離は、梁間1.10～2.40ｍ、桁行1.70～3.50ｍを測る。しかし、桁行中央では５間の柱間が存在し、規模が４×５間になる可能性がある。また、柱間距離も統一されていない。北西部では、１×３間の空間分を欠く。埋土は灰色粘質土である。遺物は、Ｐ１より土錘（30）、Ｐ２より台石（104）、その他、土師質土器、備前焼片が出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、ＳＢ27・28・33に認められるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ30

ＳＢ30は、調査区の南東端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

建物は、３×３間の南北棟で、梁間（東西）6.10ｍ、桁行（南北）6.50ｍを測る。棟方向はＮ－20°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径15～58㎝、検出面からの深さ10～46㎝を測る。基底面の標高は6.52～6.90ｍである。柱間距離は、梁間1.20～2.70ｍ、桁行1.40～3.15ｍを測る。北妻の柱穴が１個欠けている。なお、桁行北部が広くなっており、これらのことは、柱穴が１個欠けている可能性が強く、３×４間の規模とも考えられる。埋土は灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、南西部に位置するＳＫ33を切っており、ＳＢ31・32も重複がみられるが柱穴の切り合いが認められず新旧関係は不明である。なお、ＳＢ31・32と棟方向が一致しており近接した時期での建替えとみられる。

ＳＢ31

ＳＢ31は、調査区の南東端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×２間を呈するが、桁行の中央柱が欠けているため規模は、２×２間の南北棟と考えられる。梁間（東西）2.70ｍ、桁行（南北）3.70ｍを測る。棟方向はＮ－14°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径15～31㎝、検出面からの深さ11～41㎝を測る。基底面の標高は6.54～6.85ｍである。柱間距離は、梁間1.15～1.50ｍ、桁行3.70ｍを測る。桁行中央柱が欠けている。埋土は灰色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、ＳＢ30・32に認められるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ32

ＳＢ32は、調査区の南東端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×３間の東西棟で、梁間（南北）1.85ｍ、桁行（東西）4.15ｍを測る。棟方向はＮ－85°－Ｗである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径25～40㎝、検出面からの深さ18～55㎝を測る。基底面の標高は6.39～6.76ｍである。柱間距離は、梁間1.80ｍ、桁行0.90

～1.75ｍを測る。北辺の柱穴が１個欠けている。埋土は灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＢ30・31に認められるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ33

ＳＢ33は、調査区の南東部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×２間の正方形を呈する。しかし、東西列の中間柱が欠けている可能性があるので、２×２間の規模ともみられる。一辺は、2.85ｍを測る。南北を棟方向とするならばＮ－67°－Ｗである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径18～35㎝、検出面からの深さ４～43㎝を測る。基底面の標高は6.65～6.85ｍである。柱間距離は、東西2.85ｍ、南北1.20～1.55ｍを測る。埋土は灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＢ29、ＳＤ７に認められるが、新旧関係は不明である。

ＳＢ34

ＳＢ34は、調査区の南東部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×１間の東西棟である。梁間2.35ｍ、桁行2.70ｍを測る。棟方向はＮ－77°－Ｗである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径20～30㎝、検出面からの深さ20～40㎝を測る。基底面の標高は6.50～6.65ｍである。埋土は灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＫ37に切られている。

ＳＢ35

ＳＢ35は、調査区の南東端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×２間の南北棟で、梁間（東西）2.70ｍ、桁行（南北）2.95ｍを測る。棟方向はＮ－11°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径19～42㎝、検出面からの深さ10～52㎝を測る。基底面の標高は6.45～6.84ｍである。柱間距離は、梁間1.25～1.60ｍ、桁行1.35～1.60ｍである。柱間距離の統一がとれていない。埋土は灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＫ38・39を切っている。

ＳＢ36

ＳＢ36は、調査区の南東端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×２間の南北棟で、梁間（東西）3.50ｍ、桁行（南北）3.75ｍを測る。棟方向はＮ－12°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径25～55㎝、検出面からの深さ５～45㎝を測る。南西隅の柱穴が極端に浅い。基底面の標高は6.48～6.94ｍである。埋土は灰色粘質土である。遺物は、Ｐ１より土師質土器杯（31）が出土している。重複関係は、ＳＤ８とに見られるが、新旧関係は不明である。

土坑

ＳＫ１

ＳＫ１は、調査区の北端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

北端が調査区外のため全形は明確ではないが、平面形は楕円形を呈するとみられる。規模は、検出した範囲で南北1.90ｍ、東西2.00ｍ、深さ1.29ｍを測る。壁は、垂直に近く立ち上がるが、東西壁は段部を有す。底面は、平坦で標高5.71ｍを測る。埋土は、１層で明灰色粘質土である。遺物は、土師質土器鍋（32)、伊万里系皿（33)・碗（34)、京焼系碗（35)、木製品（107、111、117、118)、寛永銭（70）が出土している。

ＳＫ２

ＳＫ２は、調査区の西端、ＳＢ22の北東側に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整方形を呈する。規模は、長径0.96ｍ、短径0.85ｍ、深さ0.29ｍを測る。長軸方向はＮ－27°－Ｅである。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.61ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。遺物は、土師質土器片が数点出土しているが、細片で実測不可能である。

ＳＫ３

ＳＫ３は、調査区の中央よりやや西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径0.90ｍ、短径0.68ｍ、深さ0.36ｍを測る。長軸方向はＮ－13°－Ｅである。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦であるが東部に段部を有す。標高は6.65ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。遺物は、土師質土器片数点が出土しているが、細片で実測不可能である。

ＳＫ４

ＳＫ４は、調査区の北部で、溝に囲まれた屋敷内に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整楕円形を呈する。規模は、長径1.28ｍ、短径0.83ｍ、深さ0.51ｍを測る。長軸方向はＮ－21°－Ｅである。壁は垂直に立ち上がる。底面は、平坦で北東部に段部を有す。標高は6.47ｍを測る。埋土は、１層で灰茶色粘質土である。遺物は、弥生土器が若干出土しており、その他の遺物は認められない。重複関係は、南側に位置するＳＢ１を切っている。

ＳＫ５

ＳＫ５は、調査区北部で、溝に囲まれた屋敷内に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出し

た。

平面形は円形を呈する。規模は、直径0.85m、深さ0.40mを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、南東部に段部を有す。底面は、平坦で標高6.56mを測る。埋土は、1層で灰茶色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土しているが、細片で実測不可能である。SB1の中に位置しており、関連性があるものとみられる。

SK6

SK6は、調査区北部で、溝に囲まれた屋敷内に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は、不整楕円形を呈する。規模は、長径1.60m、短径0.55m、深さ8cmを測る。長軸方向はN－78°－Wである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.95mを測る。埋土は、1層で灰茶色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SK7

SK7は、調査区の北部で、溝に囲まれた屋敷内に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径0.63m、短径0.54m、深さ0.14mを測る。長軸方向はN－72°－Wである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.88mを測る。埋土は、1層で灰茶色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SK8

SK8は、調査区の北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整円形を呈する。規模は、直径1.00m、深さ0.22mを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.79mを測る。埋土は、1層で黄灰色粘質土である。遺物は、土師質土器、青磁、瓦片が若干出土したが、細片で実測不可能である。重複関係は、SD5とSK11とに認められるが、埋土が類似しており明確にできなかった。

SK9

SK9は、調査区の中央部北寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径1.30m、短径0.80m、深さ0.11mを測る。長軸方向はN－18°－Eである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.86mを測る。埋土は、1層で黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ10

ＳＫ10は、調査区の中央部北寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は、南北に細長い溝状を呈しており、ＳＤともみられる。規模は、長径3.55ｍ、短径0.40ｍ、深さ0.33ｍを測る。長軸方向はＮ－18°－Ｅである。壁は、急傾斜で立ち上がり、底面は平坦である。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土したが、細片で実測不可能である。

ＳＫ11

ＳＫ11は、調査区の中央北部に位置し、ＳＫ８の南側に隣接する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整楕円形を呈する。規模は、長径1.30ｍ、短径1.10ｍ、深さ0.30ｍを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦であるが南部は一段高くなっている。最深部の標高は6.65ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＫ８とに認められるが、埋土が類似しているため不明である。

ＳＫ12

ＳＫ12は、調査区の中央北部に位置し、ＳＫ11の南側に隣接する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整方形を呈する。規模は、長径2.05ｍ、短径1.00ｍ、深さ0.58ｍを測る。長軸方向はＮ－16°－Ｅである。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は平坦でなく、南東部が深く落込んでおり凹凸がある。最深部の標高は6.70ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。遺物は、布目瓦が１片出土した。この瓦片は、ＳＫ８出土のものと接合できた。これらは、ＳＫ８・11・12の土坑群の同時性を証明する手掛りとなる。

ＳＫ13

ＳＫ13は、調査区の中央よりやや北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は、北西部に位置するＳＫ10と同形態を呈しており細長いプランを有している。規模は、長径2.80ｍ、短径0.40ｍ、深さ７㎝を測り、非常に浅い遺構である。長軸方向はＮ－11°－Ｅである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.95ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ14

ＳＫ14は、調査区中央の西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径1.08ｍ、短径0.65ｍ、深さ0.10ｍを測る。上部は、

削平されており浅い土坑である。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.86ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。遺物は、36の土師質土器皿が出土している。本遺構の北西４ｍの地点にＳＫ３が存在し、また、東側には、掘立柱建物址が存在している。これらとの関連性が想定できる。

ＳＫ15

ＳＫ15は、調査区の中央やや北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は小型の方形を呈する。規模は、長径0.80ｍ、短径0.54ｍ、深さ0.47ｍを測る。長軸方向はＮ－25°－Ｅである。壁は垂直に立ち上がる。底面は、北部が深く掘り込まれている。北部分の掘り込みは、ＳＢ12の柱穴の可能性がある。しかし、埋土が類似しているため、新旧関係は明確にできなかった。底面最深部の標高は6.53ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。埋土上層に、20～30㎝大の河原石が投棄されている。出土遺物は皆無である。

ＳＫ16

ＳＫ16は、調査区の中央やや北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は大型の方形を呈する。規模は、長径2.45ｍ、短径0.97ｍ、深さ0.38ｍを測る。長軸方向はＮ－87°－Ｅである。壁は垂直に近く立ち上がる。底面は、平坦で標高6.58ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。遺物は、土師質土器小皿（37）が出土している。その他、瓦質土器、備前焼が存在するが実測不可能である。重複関係は、ＳＢ10・11を切っている。

ＳＫ17

ＳＫ17は、調査区中央北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整楕円形を呈する。規模は、長径1.85ｍ、短径0.76ｍ、深さ0.10ｍを測る。上部は削平されており、非常に浅い。長軸方向はＮ－69°－Ｗである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.92ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ18・19

ＳＫ18・19は、調査区中央の北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整楕円形を呈する。ＳＫ18と19は、一部連結しており埋土は、黄灰色粘質土で類似している。そのため新旧関係は明確でない。ＳＫ11・12・18同様に同時期の可能性がある。規模は、ＳＫ18が長径1.30ｍ、短径0.90ｍ、深さ0.35ｍ、ＳＫ19は長径1.35ｍ、短径0.80ｍ、深さ0.10ｍを測る。ＳＫ18の方が、深くて掘り方はしっかりしている。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、ＳＫ19が平坦で、ＳＫ18は東部が一段高い。底面の標高は、ＳＫ18の最深部で6.67ｍ、

ＳＫ19は6.91ｍを測る。出土遺物は皆無である。

ＳＫ20・21

ＳＫ20・21は、調査区中央の北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

本遺構は、２個連結の土坑とみられるので一括して説明する。

平面形は円形を呈する。規模は、直径0.90ｍ、深さ0.10～0.20ｍを測る。ＳＫ20・21の間隔は、0.40ｍを測る。壁は垂直に立ち上がる。底面は、平坦でＳＫ20は6.84ｍ、ＳＫ21は6.92ｍで、ＳＫ20がやや深い。埋土は、１層でいずれも黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ22

ＳＫ22は、調査区中央の北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径2.10ｍ、短径0.87ｍ、深さ７㎝を測る。長軸方向はＮ－15°－Ｅである。上部は削平されており非常に浅い。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.91ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、中央部東側部分でピットに切られている。

ＳＫ23

ＳＫ23は、調査区の中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は溝状の不整形を呈する。規模は、長径3.70ｍ、深さ0.15ｍを測る。壁は垂直に立ち上がる。底面は、平坦で標高6.82ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。本遺構は、プラン確認段階で染み状になっており、ＳＤ１の染み出しとみてもよい。

ＳＫ24

ＳＫ24は、調査区の中央に位置するが、溝に囲まれた屋敷外である。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整円形を呈する。規模は、直径0.90ｍ、深さ0.11ｍを測る。上部は削平されており浅い土坑である。埋土の黄灰色粘質土を除去すると、一面に炭化物の集中がみられた。土坑墓である可能性を有するが、骨片等は検出できず、厚さ５㎝の炭化物を取り上げると底面となる。壁は直立して立ち上がる。底面は、平坦で標高6.88ｍを測る。出土遺物は皆無である。

ＳＫ25・26

ＳＫ25・26は、調査区中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

ＳＫ25・26は、一連の土坑と考えられ、形態、規模も類似しているので一括して説明する。

ＳＫ８・11・12・18～21・25・26は、南北に並ぶ土坑群で、一連の同じ性格を有するものと考えられる。その中でＳＫ25・26は、最南端に位置するものである。また、平面形は、ＳＫ20・21同様独立した円形の土坑である。規模は、直径0.85ｍ、深さ0.10～0.20ｍを測る。壁は垂直に立ち上がる。底面は、平坦で標高は6.88ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＫ26の南側でピットと切り合っているが、新旧関係は明確にすることができなかった。

ＳＫ27

ＳＫ27は、調査区の東部に位置する。溝に囲まれた屋敷内の東南隅である。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径0.65ｍ、短径0.50ｍ、深さ0.38ｍを測る。長軸方向はＮ－６°－Ｗである。壁は垂直に立ち上がる。底面は、平坦で標高6.62ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ28

ＳＫ28は、調査区の東端に位置する。溝に囲まれた屋敷内の東南隅である。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径1.45ｍ、短径1.08ｍ、深さ0.33ｍを測る。長軸方向はＮ－11°－Ｅである。壁は垂直に立ち上がる。底面は、北部に一段高い平坦面を有し、南部は緩やかに傾斜する。最深部の標高は6.71ｍを測る。埋土は、上層の５～６㎝に黄灰色土が堆積し、以下は一面炭化物である。上層に河原石が２個投棄されている。本土坑は、屋敷墓と考えられ、屋敷内の東南隅で、ＳＢ20・21の南側に隣接している。どちらかの建物と同時期に存在した可能性がある。炭化物中より、骨片や38の土師質土器小皿が出土している。

ＳＫ29

ＳＫ29は、調査区の中央東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径0.80ｍ、短径0.50ｍ、深さ0.15ｍを測る。壁は垂直に立ち上がる。底面は、平坦で標高6.86ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ピットに切られている。

ＳＫ30

ＳＫ30は、調査区の中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は大型の楕円形を呈する。規模は、長径2.78ｍ、短径1.63ｍ、深さ0.24ｍを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、西部が一部高い平坦部を有す。標高は6.70ｍを測る。埋土は、

1層で黄灰色粘質土である。プランを確認する段階で、集石の上部を検出したが、掘り下げると20～30cm大の河原石が中央部に密集して出土した。遺物は、集石中より瓦質土器鍋（39、40、41）が出土しており、その他土師質土器、備前焼等が存在する。重複関係は、屋敷を囲む溝ＳＤ１を切っている。ＳＤ６とも重複しているが、新旧関係は不明である。ＳＤ１よりＳＤ６は新しい。

ＳＫ31

ＳＫ31は、調査区中央やや西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

西側は、調査区外で、全形は明確でないが円形を呈するものとみられる。規模は、直径1.80ｍ、深さ0.47ｍを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.45ｍを測る。埋土は、１層で灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。埋土の状況から近世の遺構とみられる。

ＳＫ32

ＳＫ32は、調査区の南東部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整方形を呈する。規模は、長径0.90ｍ、短径0.60ｍ、深さ６cmを測る。長軸方向はＮ－20°－Ｅである。上部は削平されており浅い。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.91ｍを測る。埋土は、１層で灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ33

ＳＫ33は、調査区の南東部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整楕円形を呈する。規模は、長径2.70ｍ、短径1.08ｍ、深さ0.34ｍを測る。長軸方向はＮ－55°－Ｅである。壁は、南部は緩やかに傾斜するが、北部は急傾斜である。底面は、北部がやや落ち込んでいる。北部底面の標高は6.61ｍを測る。埋土は、１層で灰色粘質土である。北部に、10～20cm大の河原石が若干投棄されている。遺物は、河原石に混入して、砥石（101、102）、その他、土師質土器、瓦質土器が出土している。重複関係は、ＳＢ30に切られている。

ＳＫ34

ＳＫ34は、調査区の中央東端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径1.10ｍ、短径1.00ｍ、深さ0.50ｍを測る。長軸方向はＮ－75°－Ｗである。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.46ｍを測る。埋土は、１層で灰色粘質土である。埋土中に、20～30cm大の河原石が投棄されている。出土遺物は皆無である。

ＳＫ35

ＳＫ35は、調査区の南端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は長方形を呈する。規模は、長径2.35ｍ、短径0.85ｍ、深さ0.67ｍを測る。長軸方向はＮ－17°－Ｅである。第Ⅰ層を除去した段階で、ＳＫ35の上部集石が現われ、平面プランも長方形を呈することから墓と判断した。この集石を除去し埋土を掘り下げると、岡本益亀名の卒塔婆を検出した。以上のことから、集石は最近投棄されたもので、追悼供養も新しいものとみられる。

本遺構は近世墓であるが掘り方内に２個体の木棺を埋納していることや、長さも短いこと等から、幼児の墓ともみられる。北部は、現代の改葬のため撹乱を受けているが、南部は、棺の蓋が埋没しており棺底も残存している。南部木棺の規模は、長径1.15ｍ、短径0.50ｍである。出土遺物は、北端より寛永銭と人歯が出土している。

ＳＫ36

ＳＫ36は、調査区南部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は大型の不整形を呈する。規模は、長径3.20ｍ、短径2.20ｍ、深さ0.43ｍを測る。壁は、北、南、西は垂直に立ち上がり、東部は緩やかに立ち上がる。底面は、西部が平坦で標高6.48ｍを測る。埋土は、１層で灰色粘質土である。遺物は、伊万里系皿（42）が出土した。その他、土師質土器、備前焼片も存在するが実測不可能である。

ＳＫ37

ＳＫ37は、調査区の南部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形はＳＫ36と同様不整形を呈する。規模は、長径3.20ｍ、短径2.18ｍ、深さ0.38ｍを測る。長軸方向はＮ－32°－Ｅである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.56ｍを測る。埋土は、１層で灰白色砂質土である。遺物は、染付碗（43）、唐津焼碗（44）が出土している。その他、土師質土器、備前焼片が見られるが、細片で実測不可能である。

ＳＫ38

ＳＫ38は、調査区の南部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、一辺0.90ｍ、深さ0.21ｍを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高は6.69ｍを測る。埋土は、１層で灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、南のＳＢ35に切られており、北側ピットを切っている。

ＳＫ39

ＳＫ39は、調査区の南部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形はやや不整だが長方形を呈する。規模は、長径2.00m、短径0.50m、深さ0.10mを測る。長軸方向はN－29°－Eである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、南部が一段高く平坦面を有す。北部の低い底面の標高は6.69mを測る。埋土は、1層で灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、SB35に切られている。いずれも近世の遺構と考えられる。

SK40

SK40は、調査区の南部に位置し、SK39の東側に隣接する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整楕円形を呈する。規模は、長径1.90m、短径1.15m、深さ0.19mを測る。長軸方向はN－17°－Eである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦面が少なく凹凸を有す。最深部の標高で6.75mを測る。埋土は、1層で灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SK41

SK41は、調査区の南端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径1.65m、短径1.40m、深さ0.54mを測る。長軸方向はN－7°－Eである。壁は垂直に立ち上がる。底面は、平坦で標高6.42mを測る。埋土は、1層で灰色粘質土である。遺物は、土師質土器、鉄製品が出土しているが、実測不可能である。

SK42

SK42は、調査区の南端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は大型の長方形を呈する。規模は、長径6.32m、短径3.15m、深さ0.40mを測る。長軸方向はN－70°－Wである。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.58mを測る。埋土は、1層で灰色粘質土である。本遺構の西半分は、20～30cm大の集石が認められ、この中でも石列で囲むが如き様相を呈するものがある。この集石は、底面直上出土であり、土坑本来の機能に関連するものとみられる。また、東半分には集石は認められない。遺物は、備前焼擂鉢（45、46）、青磁碗（47）、唐津焼碗（49）・蓋（50）、京焼系碗（51）、および土錘（48）が出土している。重複関係は、SD8・9を切っている。

SK43

SK43は、調査区の西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径0.90m、短径0.65m、深さ0.10mを測る。上部は削平されており浅い。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.85mを測る。埋土は、1層で黄灰色粘質土である。北壁付近の埋土上層に10～20cm大の河原石が出土した。出土遺物は皆無である。

ＳＫ44

ＳＫ44は、調査区の西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径1.30ｍ、短径0.73ｍ、深さ0.19ｍを測る。長軸方向はＮ－14°－Ｅである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.77ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。本遺構の重複する部分では、ＳＢ22～24の３期に渡る建物の建て替えがあり、３棟中のどれかに伴うものとみられる。

ＳＫ45

ＳＫ45は、調査区の西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径1.40ｍ、短径0.85ｍ、深さ0.46ｍを測る。長軸方向はＮ－23°－Ｅである。壁は、急傾斜で立ち上がり、断面はＵ字形を呈する。底面は、平坦で標高6.47ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＢ24の柱穴を切っている。また、ＳＢ22の柱穴と重複しているが、新旧関係は明確にできなかった。以上のことから、本土坑が伴うとみられる建物はＳＢ23となる。

ＳＫ46

ＳＫ46は、調査区の西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径1.15ｍ、短径0.70ｍ、深さ0.12ｍを測る。長軸方向はＮ－37°－Ｗである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.79ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。遺物は、埋土中より白磁が１点出土している。重複関係は認められないが、位置的な面からＳＢ22との関連がみられる。

ＳＫ47

ＳＫ47は、調査区の北西部で、溝に囲まれた屋敷内に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径0.80ｍ、短径0.60ｍ、深さ0.12ｍを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、東部に一段高い平坦面を有す。一段落ちた西部の標高は6.79ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＫ53を切っている。

ＳＫ48

ＳＫ48は、調査区の北西部で、溝に囲まれた屋敷内に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径1.00ｍ、深さ0.18ｍを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。

底面は、平坦で標高6.69ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。本遺構も、ＳＫ47同様周囲に柱穴群が残存せず独立した土坑である。

ＳＫ49

ＳＫ49は、調査区の西部で、溝に囲まれた屋敷内の南西隅に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径0.90ｍ、深さ0.70ｍを測る。柱痕状に２段に掘り込まれている。壁は垂直に立ち上がる。底面は、平坦で標高6.21ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ50

ＳＫ50は、調査区の西部で、溝に囲まれた屋敷内の南西隅に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径1.20ｍ、短径0.80ｍ、深さ0.50ｍを測る。長軸方向はＮ－12°－Ｗである。壁は、東西で狭い段部を有し急傾斜で立ち上がる。底面は、北部が深く南部は浅い平坦面を有す。標高は、北部で6.35ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ51

ＳＫ51は、調査区の西部で、溝に囲まれた屋敷内の南西隅に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径1.00ｍ、短径0.65ｍ、深さ0.50ｍを測る。壁は垂直に近く立ち上がる。底面は、３段に形成されており西部が深くなっている。最深部の標高で6.20ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。遺物は、瓦質土器片が出土している。重複関係は、ＳＤ１と切り合っているが、新旧関係を明確にすることはできなかった。

ＳＫ52

ＳＫ52は、調査区の中央よりやや西部で、溝に囲まれた屋敷内に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径1.00㎝、短径0.75ｍ、深さ0.50ｍを測る。壁は北部が垂直に、その他は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.41ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。遺物は、52の土師質土器が出土している。重複関係は、ＳＤ１に切られている。

ＳＫ53

ＳＫ53は、調査区の北西部で、溝に囲まれた屋敷内の北西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は、ＳＫ47に切られているため全形は不明だが、楕円形を呈するものとみられる。規模は、残存している部分で、短径0.60ｍ、深さ0.10ｍを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦で、ＳＫ47よりは浅く標高6.85ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ54

ＳＫ54は、調査区の中央よりやや西部で、溝に囲まれた屋敷内に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径1.00ｍ、短径0.60ｍ、深さ0.15ｍを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.66ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、南側においてピットを切っている。ＳＤ１に隣接しているが、切り合い関係は認められない。

溝

ＳＤ１

ＳＤ１は、調査区の北部で、屋敷を長方形に囲むように位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

本遺構は、ＳＢ８・11・12・20・21を中心とした掘立柱建物址全体を囲む溝であるが、ここでは便宜上屋敷を長方形に囲むものをＡ溝、中央の南北に走る溝をＢ溝として説明していく。

規模は、Ａ溝の北辺幅2.10～4.00ｍ、深さ0.48～0.69ｍ、長さ51ｍ、東辺幅2.00～2.90ｍ、深さ0.46～0.53ｍ、長さ26.50ｍ、西辺幅1.20～2.10ｍ、深さ0.40～0.58ｍ、長さ31ｍ、南東辺幅1.50～1.90ｍ、深さ0.37～0.44ｍ、長さ25ｍ、南西辺幅1.30～2.40ｍ、深さ0.50～0.60ｍ、長さ22.50ｍを測る。Ｂ溝は、幅0.60～1.40ｍ、深さ0.50～0.60ｍ、長さ24ｍを測る。全体的にＡ溝は、幅が2.00～4.00ｍで北辺がやや広く掘削されている。しかし、南東辺のみは狭くなっている。Ａ溝は、本来屋敷を囲む性格を有しており、Ｂ溝は、屋敷内を区画するため掘削されたような様相を呈している。Ａ溝とＢ溝の切り合い関係は認められない。Ａ溝の幅がやや広く掘削されていることや、南東辺の溝が狭いことなどを考えると、北辺部をかなり意識していると考える。また、西辺溝の壁上部では、杭状の跡ではないかと考えられる小穴が壁に対して斜めに掘り込まれており、西辺の外側に位置する掘立柱建物址ＳＢ22・23・24との往来に利用した橋が存在した可能性もある。Ａ溝の南中央部で、南東辺溝と南西辺溝の間に６ｍの空間が

存在しており、出入口部を想定することもできる。A溝のコーナー部4点は、90°に屈曲している。埋土は、ほぼ同一で灰茶色粘質土であるが、底面直上の5～6㎝には、灰色粘質土の滞水層が推積している。これらのことから、水も若干は底面に溜っていた状況ではあるが、ほぼ空堀のような様相を呈していたものとみられる。遺物は、土師質土器杯（53～59）・鍋（60）、瓦質土器鍋（61～72）、魚住焼捏鉢(73)、唐津焼皿（74）、渡来銭（71）が出土している。重複関係は、ＳＫ52を切っておりＳＫ30に切られている。その他ＳＤ３・４、ＳＢ18・19との関係は、埋土が類似しているため不明である。

ＳＤ２

ＳＤ２は、調査区の北端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅0.20～0.30ｍ、深さ0.12～0.20ｍ、長さ4.40ｍを測る。東西両端とも調査区外へ延びているため全貌は明確でない。底面の標高は6.78～6.84ｍを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は黄灰色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土しているが、細片のため実測不可能である。

ＳＤ３

ＳＤ３は、調査区の北端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅0.30～0.40ｍ、深さ0.30～0.34ｍ、長さ2.40ｍを測る。南側はＳＤ１と北端はＳＤ２と重複して終結している。新旧関係は不明である。底面の標高は6.66ｍを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は黄灰色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土しているが、細片で実測不可能である。

ＳＤ４

ＳＤ４は、調査区の北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

本遺構は、ＳＤ１に囲まれた屋敷内を南北に走る構である。規模は、幅0.50～0.60ｍ、深さ0.15～0.30ｍ、長さ31ｍを測る。北端は、ＳＤ２の位置する所で終結し、南端はＳＤ１の南東辺の溝を約２ｍ程南に延びた所で切れている。底面の標高は6.72～6.85ｍを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は黄灰色粘質土である。遺物は、75の常滑焼甕、その他土師質土器、備前焼等が出土しているが、いずれも細片である。重複関係は、ＳＤ１とに認められるが、埋土が類似しているため新旧関係は不明である。

ＳＤ５

ＳＤ５は、調査区の北部中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅0.25～0.60ｍ、深さ0.10～0.14ｍ、長さ5.80ｍを測る。幅は、北端がやや広く掘

削されている。底面の標高は、北端で6.87ｍ、南端で6.89ｍを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰茶色粘質土である。出土遺物は皆無である。本遺構は、南北に走る溝で北側はＳＤ１と、南側はＳＫ８と連結して残存しているが新旧関係は不明である。

ＳＤ６

ＳＤ６は、調査区の中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

本遺構は、西端部でＳＫ30、ＳＤ１と重複しており、ＳＤ１を切っているが、ＳＫ30は埋土が類似しているため新旧関係は不明である。東西に走る溝であるが、ＳＫ23の南側で約２ｍ程空間部を有しさらに西方に延びている。東端部は、南部に屈曲するものと東部に広く掘削される溝とに分岐する。規模は、幅0.30～0.80ｍ、深さ0.70～0.22ｍ、長さ21ｍを測る。底面の標高は6.64～6.79ｍを測る。埋土は黄灰色粘質土である。遺物は、瓦質土器鍋（76）、その他土師質土器片が若干出土しているが、細片で実測不可能である。本遺構を境にして、南側は近世の遺構が多く残存する。

ＳＤ７

ＳＤ７は、調査区の南東部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅0.30～0.60ｍ、深さ0.15～0.30ｍ、長さ17.60ｍを測る。東西方向に走る溝であるが、意図的に掘削されたというより、浅い自然流路的な様相を呈する。基底面の標高は6.75～6.79ｍを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は黄灰色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土しているが実測不可能である。

ＳＤ８

ＳＤ８は、調査区の南東端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

本遺構は、長方形の空間を囲む形で存在する溝である。規模は、幅0.20～0.60ｍ、深さ４～10㎝、長さ北辺11ｍ、東辺２ｍ、南辺９ｍを測る。基底面の標高は6.86～6.92ｍを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＢ36と南北に走るＳＤ９とに認められるが、いずれも新旧関係は不明である。

ＳＤ９

ＳＤ９は、調査区の南東端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

本遺構は、南北に走る溝でＳＤ８と直交している。また、ＳＫ42に切られているため南北端のみを検出した。規模は、幅0.25ｍ、深さ0.20ｍ、長さ5.80ｍを測る。底面の標高は6.88～6.90ｍである。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＤ10

ＳＤ10は、調査区の南端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

本遺構は、南北に走る溝であるが、南側部分が調査区外へ延びるため全長は不明である。検出した範囲の規模は、幅0.30ｍ、深さ８㎝、長さ４ｍである。底面の標高は6.87～6.89ｍを測る。断面形は、浅いが逆台形状を呈する。埋土は灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＤ11

ＳＤ11は、調査区の南西端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅1.40～2.20ｍ、深さ0.17～0.25ｍ、長さ19.20ｍを測る。しかし、南端は、調査区外に延びるため全長は不明である。北端は、ＳＤ１に切られた地点で終結している。幅は、中央部がやや広く掘削されており南北部がやや狭い。底面の標高は北部が6.70ｍ、南部が6.63ｍを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は黄茶色砂である。遺物は、弥生土器片が若干出土した。重複関係は、ＳＤ１・12に切られている。本遺構は、埋土が砂質土であり、弥生時代の自然流路とみることもできる。

ＳＤ12

ＳＤ12は、調査区の南西部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

本遺構は、ＳＤ11を切って掘り込まれている溝である。また、ＳＤ11の西側で十字に交差している。規模は、幅0.20～0.40ｍ、深さ６～10㎝、東西の長さ8.20ｍ、南北の長さ3.10ｍを測る。しかし、東西に走る溝の両端は、調査区外へ延びるため全長は不明である。底面の標高は6.83～6.85ｍでほぼ水平である。断面形は逆台形状を呈する。埋土は黄灰色粘質土である。遺物は、土師質土器片が若干出土しているが、細片で実測不可能である。

ＳＤ13

ＳＤ13は、調査区の中央部に位置し、ＳＤ６の北側に隣接する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅0.30～0.40ｍ、深さ0.12～0.15ｍ、長さ4.40ｍを測る。非常に浅く短い溝である。底面の標高は7.24～7.79ｍを測る。埋土は黄灰色粘質土である。遺物は、土師質土器、瓦質土器が若干出土しているが、細片で実測不可能である。

ＳＤ14

ＳＤ14は、調査区の中央東部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

本遺構は、東西に走る溝で、ＳＤ13と同様な規模を有す。規模は、幅0.20～0.30ｍ、深さ0.14～0.22ｍ、長さ9.60ｍを測る。底面の標高は、東端で6.77ｍ、西端で6.85ｍを測る。断面

形は逆台形状を呈する。埋土は黄灰色粘質土である。遺物は、須恵器片、弥生土器片が若干出土しているが、細片で実測不可能である。

井戸

ＳＥ１

ＳＥ１は、調査区の中央部で、ＳＤ１に囲まれた屋敷の南側に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で集石を確認した。この集石は、井戸の上部石組を破壊されたものであり、また、井戸の上部掘り方内も直径3.50ｍ、深さ0.70ｍの範囲で撹乱されていた。撹乱部分を除去すると、直径1.10～1.50ｍを測る石組を検出した。石組は、20～30㎝の河原石を1.80ｍの高さに積み上げている。石組の下部では、井筒と桶を検出した。上部の井筒は、刳貫き木製で石組と同径の大きさで、深さは1.10ｍである。しかし、木の厚さは薄く、一部の破片しか取り上げることができなかった。中間部の桶は、矢板状の板を竹紐で組合せた箍で固定されている。直径が0.70ｍ、深さ0.60ｍを測り、31枚板からなる。下部の桶は、中間部の桶と同様、矢板状の板を竹紐で組合わせた箍で固定されており、中間部桶内側に密着して配置されている。直径は、0.60ｍでやや小さく、深さ0.60ｍを測り、21枚板からなる。掘り方は、上端径3.50ｍ、下端径0.80ｍを測る。掘り方内埋土は、３層に区別でき第Ⅰ層黄褐色土、第Ⅱ層黄灰色土、第Ⅲ層灰褐色土である。第Ⅲ層中には、10～20㎝大の礫が多量に裏込めされている。出土遺物は、弥生土器甕（77）・壺（78）、土師質土器杯（79）、瓦質土器鍋（80～85）、備前焼擂鉢（86）、常滑焼甕（87、88）、青磁碗（89）、伊万里系皿（90）であり、木製品は、板材（105、106、112、113）、曲物の底板（109、110、114）、不明木製品（115、116）である。77、78、90を除いて、すべて屋敷に伴う時期のものと考えらる。

柵列

ＳＡ１

ＳＡ１は、調査区北部のＳＤ１に囲まれた屋敷内の西寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

柵列は３間の東西列である。柵方向はＮ－77°－Ｗである。全長は5.50ｍ、柱間距離は1.60～2.00ｍ、柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径25～50㎝、検出面からの深さ12～40㎝である。基底面の標高は6.51～6.81ｍである。柱穴はいずれも２個単位で共存しており、切り合い関係は不明だが、建替えが行われている。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＡ２

ＳＡ２は、調査区の南西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

柵列は、７間の南北列である。柵方向はＮ－33°－Ｅである。全長は4.54ｍ、柱間距離0.45～0.80ｍを測る。柱穴の平面形は、円形から楕円形を呈する。規模は、直径20～43㎝、検出面からの深さ５～15㎝である。基底面の標高は6.78～6.89ｍを測る。柱間距離は非常に狭く、深さも浅く上部は削平されているものとみられる。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

柱穴

ピット群

ピット群は、ＳＤ１の溝に囲まれた屋敷内の掘立柱建物址群の周囲と、調査区南東部に集中して存在する。規模は、直径20～30㎝、検出面からの深さ10～30㎝を測る。屋敷内に存在するピットは中世のものである。また、調査区の南東側でＳＤ８以南に位置するピット群は、埋土の状況や掘立柱建物址との関連で近世の時期に掘り込まれたものと考えられる。

遺物は、Ｐ１より弥生土器壺（91）、Ｐ２より土師質土器皿（92）、Ｐ３～５より土師質土器杯（93～95）、Ｐ６より魚住焼捏鉢（96）、Ｐ７・８より瓦質土器鍋（97、98）、Ｐ９より青磁碗（99）、Ｐ10より土錘（100）、Ｐ11より砥石（103）、Ｐ12より不明木製品（108）、Ｐ13・14より柱根（120、121）が出土している。

Loc. 31Ｂ

掘立柱建物址

ＳＢ１

ＳＢ１は、調査区の北東端に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×２間の東西棟で、梁間（南北）2.75ｍ、桁行（東西）4.35ｍを測る。棟方向はＮ－69°－Ｗである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径20～30㎝、検出面からの深さ８～27㎝を測る。基底面の標高は6.39～6.60ｍである。柱間距離は、梁間2.75ｍ、桁行2.10～2.25ｍを測る。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＤ３を切っており、ＳＤ３に囲まれた屋敷との関連性は認められない。

ＳＢ２

ＳＢ２は、調査区中央部の北寄りに位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×２間の東西棟で、梁間（南北）3.25ｍ、桁行（東西）4.10ｍを測る。棟方向はＮ－72°－Ｗである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径20～35㎝、検出面からの深さ11～70㎝を測る。基底面の標高は6.07～6.58ｍである。柱間距離は、梁間1.50～1.75ｍ、桁行2.05ｍである。北東隅の柱穴、北辺中間柱、東妻中間柱が、ＳＫ４・５に切られているため欠けている。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＫ３～５に切られている。

ＳＢ３

ＳＢ３は、調査区中央部の西端に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×２間の東西棟で、梁間（南北）2.85ｍ、桁行（東西）3.40ｍを測る。棟方向はＮ－65°－Ｗである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径20～25㎝、検出面からの深さ10～20㎝を測る。基底面の標高は6.33～6.42ｍである。柱間距離は、梁間2.85ｍ、桁行1.10～2.10ｍである。北辺が狭い。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＫ13に見られるが、柱穴の切り合いがなく新旧関係は不明である。

ＳＢ４

ＳＢ４は、調査区の中央部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

建物は、３×３間の南北棟で、梁間（東西）5.70ｍ、桁行（南北）8.30ｍを測る。しかし、規模は、北辺の柱穴間が広く、柱穴が１個欠けている可能性があり、３×４間とも考えられる。棟方向はＮ－17°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径25～55㎝、検出面からの深さ６～62㎝を測る。基底面の標高は6.04～6.58ｍである。柱間距離は、梁間2.00～2.95ｍ、桁行2.20～3.70ｍである。北西隅の柱穴は、ＳＫ15に切られているため欠けている。また、西辺の中間柱も欠けており、全体的に桁行柱間距離の統一がない。北妻が３間で南妻が２間である。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＫ25・26を切っている。

ＳＢ５

ＳＢ５は、調査区中央部の西端に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

建物は、西部が調査区外へ延びるため全体の規模は明確にできないが、２×３間以上になると考えられる。全長は、検出した範囲で東西3.80ｍ、南北4.90ｍを測る。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径15～34㎝、検出面からの深さ12～36㎝を測る。基底面の標高は6.24～6.36ｍである。柱間距離は、東西1.80～2.00ｍ、南北1.00～2.10ｍである。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。本遺構は、すべての柱穴が切り合っており、建替えが行われている。

ＳＢ６

ＳＢ６は、調査区の南部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

建物は、西部が調査区外へ延びるため全体の規模は明確にできないが、３×３間以上になると考えられる。全長は、検出した範囲で東西4.55ｍ、南北4.80ｍを測る。柱穴の平面形は円形を呈する。規模は、直径25～40㎝、検出面からの深さ19～44㎝を測る。基底面の標高は6.23～6.61ｍである。柱間距離は、推定東西2.20～2.35ｍ、南北1.30ｍである。南北は、柱穴が１個ＳＫ34に切られているため欠けている。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＫ33・34に切られている。

土坑

ＳＫ１

ＳＫ１は、調査区の北西部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径1.16ｍ、短径0.95ｍ、深さ0.27ｍを測る。長軸方向はＮ－30°－Ｅである。壁は、急傾斜で立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦で標高6.43ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。遺物は、埋土中より少量の火葬骨片、土師質土器杯（18）・皿（17）が出土した。重複関係は、ＳＤ４を切っている。

ＳＫ２

ＳＫ２は、調査区の北西部に位置する。調査前段階で、直径1.00～1.50ｍ程の低いマウンドをもつ塚が存在した。この塚の盛土を除去すると、20～30㎝大の河原石の石組を検出した。この石組は、三方を囲むコの字形を呈する。コの字形の中央部は、乱雑に積み上げられている。しかし、中央部の集石は、もともと存在したものが破壊されたかのようであり、集石の原形は四方を囲むものであったと考えられる。この石組を除去した段階で、隅丸長方形の平面プランを確認した。規模は、長径1.95ｍ、短径1.00ｍ、深さ0.74ｍを測る。長軸方向はＮ－10°－Ｅである。底面は平坦で、標高6.94ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。埋土を掘り下げていく段階で木棺を掘り出したことにより、近世の木棺墓であることを確認した。木棺の残存状況は悪いが、規模は確認できた。長さ1.80ｍ、幅0.30ｍを測る。幅は、棺の長さに比して非常に狭く、横臥させていたものと考えられる。

出土遺物は、木棺墓の副葬品として、底面北部より寛永銭（73、74）、煙管（67）、櫛が出土した。また成人のものとみられる歯も15本程出土した。その他、備前焼（19、20）、白磁（21）、伊万里系（22、23）、唐津焼（24～30）等は、ＳＤ３からの流れ込みと考えられる。石製品は、石包丁（61）、砥石（63）、墓標（66）で、61は混入したものである。重複関係は、ＳＤ３を切っている。

ＳＫ３

ＳＫ３は、調査区の北部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径2.10ｍ、短径0.85ｍ、深さ６㎝を測る。上部は、削平されており非常に浅い。長軸方向はＮ－19°－Ｅである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.69ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＢ２、ＳＫ５を切っている。

ＳＫ４

ＳＫ４は、調査区の北部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整方形を呈する。規模は、長径2.80ｍ、短径1.89ｍ、深さ0.14ｍを測る。長軸方向はＮ－19°－Ｅである。壁は、急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.50ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器や弥生土器片が出土しているが、弥生土器は混入と考えられる。重複関係は、南側に位置するＳＢ２、ＳＫ５を切っている。

ＳＫ５

ＳＫ５は、調査区の北部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径3.50ｍ、短径2.58ｍ、深さ0.56ｍを測る。長軸方向はＮ－19°－Ｅである。壁は比較的緩やかに立ち上がる。断面形はＵ字形を呈する。底面は、平坦で標高6.13ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。底面直上に、10～20㎝大の河原石が若干投棄されている。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＫ３・４に切られており、ＳＢ２を切っている。

ＳＫ６

ＳＫ６は、調査区の北部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は大型の方形を呈する。ＳＫ７に切られているため全形は不明だが、残存している部分で、長径3.60ｍ、短径1.40ｍ、深さ５㎝を測る。ＳＫ７よりも浅く、上部は削平されているものと考えられる。長軸方向はＮ－12°－Ｅである。壁は、緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。標高は6.67ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＫ７に切られている。

ＳＫ７

ＳＫ７は、調査区の北部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は大型の方形を呈する。規模は、長径5.70ｍ、短径2.20ｍ、深さ0.30ｍを測る。ＳＫ６と比較するとやや深い。長軸方向はＮ－12°－Ｅである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、

平坦で標高6.41ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。遺物は、若干近世陶磁器が出土しているが、実測不可能である。重複関係は、北側に隣接するＳＫ６を切っている。

ＳＫ８

ＳＫ８は、調査区の北辺に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径1.21ｍ、短径1.00ｍ、深さ0.27ｍを測る。長軸方向はＮ－６°－Ｗである。壁は、急傾斜で立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦で標高6.42ｍを測る。埋土は、１層で灰茶色粘質土である。北・南壁の底面直上から、20～40㎝大の河原石が出土し、また、遺物は、土師質土器鍋（31）、その他、瓦質土器が若干出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、ＳＫ９を切っている。

ＳＫ９

ＳＫ９は、調査区の北部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、西部でＳＫ８に切られているため全形は不明だが、残存している部分で、長径0.90ｍ、短径0.85ｍ、深さ0.15ｍを測る。長軸方向はＮ－76°－Ｗである。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.55ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＫ８に切られている。

ＳＫ10・11

ＳＫ10は、調査区の北東部において、第Ⅱ層上面で検出された。

平面形は、長方形を呈するが、現代の撹乱によるものである。

ＳＫ11は、ＳＫ10の東側で、第Ⅲ層を除去した段階で検出された。

平面形は不整長方形を呈する。埋土は、ＳＫ３・10同様染み状に浅く広がっている。規模は、長径4.70ｍ、短径1.46ｍ、深さ0.15ｍを測る。長軸方向はＮ－19°－Ｅである。壁は緩やかに立ち上がる。底面の標高は、中央部で6.47ｍを測る。埋土は、１層で灰白色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ12

ＳＫ12は、調査区中央部の西端に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は、西部が調査区外のため全形は不明であるが、長方形を呈すると考えられる。規模は、検出した範囲で、長径2.60ｍ、短径1.70ｍ、深さ0.20ｍを測る。非常に浅い土坑である。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦であるが北東部がやや深くなっている。底面北東部の標高は6.40ｍである。埋土は、１層で灰茶色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＫ13を切っている。

ＳＫ13

ＳＫ13は、調査区中央部やや西寄りに位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形であるが、北部は方形、南部は半円形を呈し、２基の土坑が重複していたとも考えられる。規模は、方形を呈する部分で東西3.00ｍ、南北1.40ｍ、半円形の部分は南北2.50ｍ、深さ0.20ｍを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.48ｍを測る。埋土は、１層で灰白色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＫ12に切られている。

ＳＫ14

ＳＫ14は、調査区の中央部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は大型の方形を呈する。規模は、長径5.20ｍ、短径3.00ｍ、深さ0.35ｍを測る。長軸方向はＮ－82°－Ｗである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.30ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、南側に位置するＳＰ１を切っている。

ＳＫ15

ＳＫ15は、調査区の中央部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径1.50ｍ、短径1.30ｍ、深さ0.10ｍを測る。上部は削平されており浅い。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.61ｍを測る。埋土は、１層で灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＢ４を切っている。

ＳＫ16

ＳＫ16は、調査区の中央部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径1.80ｍ、短径0.80ｍ、深さ0.17ｍを測る。長軸方向はＮ－89°－Ｅである。壁は垂直に立ち上がる。底面は、平坦で標高6.50ｍを測る。埋土は、１層で灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、底面においてピットを検出したが、本遺構がピットを切っている。

ＳＫ17

ＳＫ17は、調査区の中央部で、ＳＫ16の南側に隣接して位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径0.50ｍ、短径0.38ｍ、深さ0.11ｍを測る。長軸方向はＮ－16°－Ｅである。壁は、急傾斜で立ち上がり、断面はＵ字形を呈する。底面は、平坦で標高6.55ｍを測る。埋土は、１層で灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ18

ＳＫ18は、調査区の東寄りに位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径2.00ｍ、短径1.70ｍ、深さ0.56ｍを測る。壁は、急傾斜で立ち上がり、断面は逆台形状を呈する。底面は平坦であるが、周囲に幅10㎝の溝が回る。正円形の樽状桶を据えた痕跡と考えられる。底面の標高6.12ｍを測る。埋土は、１層で灰色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、ＳＤ３を切っており近世の遺構と考えられる。

ＳＫ19

ＳＫ19は、調査区の東端に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整円形を呈する。規模は、東西1.20ｍ、南北1.40ｍ、深さ0.45ｍを測る。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈す。底面は、平坦であるが周囲に幅15㎝の溝が回る。ＳＫ18同様、桶状木製品を据えた痕跡と考えられる。底面の標高6.21ｍを測る。埋土は、１層で灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＤ６を切っている。

ＳＫ20

ＳＫ20は、調査区の中央部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径0.80ｍ、深さ0.23ｍを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、東部が一段落ち込んでおり、標高6.41ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＰ１を切っている。

ＳＫ21

ＳＫ21は、調査区の東部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径1.75ｍ、短径1.30ｍ、深さ0.31ｍを測る。長軸方向はＮ－４°－Ｗである。壁は、急傾斜で立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面は、平坦で標高6.33ｍを測る。埋土は、１層で灰色粘質土である。遺物は、備前焼１点が出土しているが、細片で実測不可能である。本土坑は、ＳＫ18・19と同様に、位置からみて、ＳＫ22とセット関係にある可能性を有す。また、出土遺物も近世のものであり、底面状況は相違するが、同様な性格を有するものと考えられる。

ＳＫ22

ＳＫ22は、調査区の東部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は、円形を呈すると考えられる。規模は、直径1.65ｍ、深さ0.40ｍを測る。壁は急傾斜で立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦であるが、南西部分は明確にでき

なかった。底面平坦部の標高は6.28ｍを測る。埋土は、１層で灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＤ３を切っている。近世の遺構と考えられる。

ＳＫ23

ＳＫ23は、調査区中央部の西端に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は、西部の調査区外へ延びるため全形は不明である。規模は、検出した範囲で南北1.10ｍ、東西0.45ｍ、深さ0.20ｍを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.41ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器片が若干出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、ＳＫ24を切っている。

ＳＫ24

ＳＫ24は、調査区中央部の西端に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は、西部の調査区外へ延びていたり、ＳＫ23に切られているため、全形は不明である。規模は、検出した範囲で南北1.10ｍ、東西0.45ｍ、深さ0.27ｍを測る。壁は急傾斜に立ち上がる。底面は、中央部が一段落ち込んでいる。底面中央部の標高は6.34ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器が出土しているが、細片のため実測不可能である。重複関係は、ＳＫ23に切られている。

ＳＫ25

ＳＫ25は、調査区の中央部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は、プラン確認段階で埋土が染み状になり、浅く広がる不整形を呈する。規模は、長径5.50ｍ、短径2.00ｍ、深さ0.10ｍを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.56ｍを測る。埋土は、１層で灰白色粘質土である。遺物は、埋土中より近世陶磁器が出土したが、細片のため実測不可能である。重複関係は、ＳＫ26と連結しているが、切り合い関係は不明であるが、ＳＢ４に切られている。

ＳＫ26

ＳＫ26は、調査区の中央部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径2.45ｍ、短径1.85ｍ、深さ0.33ｍを測る。長軸方向はＮ－69°－Ｗである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.51ｍを測る。埋土は、１層で灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＫ25と切り合い関係にあるが、埋土が類似しているため新旧関係は不明である。東部で、ＳＢ４の柱穴に切られている。

ＳＫ27

ＳＫ27は、調査区中央部のやや東寄りに位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径1.80ｍ、短径1.00ｍ、深さ0.21ｍを測る。長軸方向はＮ－72°－Ｗである。壁は、急傾斜で立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦で標高6.42ｍを測る。埋土は、１層で灰色粘質土である。遺物は、埋土中から土師質土器や砥石（64）が出土している。本遺構の北側には、ＳＢ４が存在しており、位置からみて、関連性を考えることができる。

ＳＫ28

ＳＫ28は、調査区中央のやや南寄りに位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は、北部をＳＤ９に切られているため全形は不明であるが、楕円形を呈すると考えられる。規模は、残存している部分で長径1.40ｍ、短径0.72ｍ、深さ0.12ｍを測る。長軸方向はＮ－12°－Ｅである。壁は、急傾斜で立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面は、平坦で標高6.55ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＤ９およびピットに切られている。

ＳＫ29

ＳＫ29は、調査区中央部の南寄りに位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は、遺構の西半分が調査区外のため全形は不明だが、円形を呈するものと考えられる。規模は、検出した範囲で南北2.80ｍ、東西1.30ｍ、深さ0.95ｍを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、東部が一段高く平坦である。標高は、中央部で5.74ｍを測る。埋土は、１層で灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ30

ＳＫ30は、調査区の南部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径2.95ｍ、短径1.20ｍ、深さ0.30ｍを測る。長軸方向はＮ－18°－Ｅである。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.55ｍを測る。ＳＫ31よりも底面の標高は高い。埋土は、１層で灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＫ31を切っている。

ＳＫ31

ＳＫ31は、調査区の南部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は大型の長方形を呈する。規模は、長径7.30ｍ、短径2.70ｍ、深さ0.40ｍを測る。長軸方向はＮ－73°－Ｗである。壁は垂直に立ち上がる。底面は、平坦で標高6.44ｍを測る。埋

土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、唐津焼皿（32）その他、伊万里焼、備前焼が出土するが、細片のため実測不可能である。重複関係は、ＳＫ30およびピットに切られている。

ＳＫ32

ＳＫ32は、調査区の南部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径1.20ｍ、短径0.75ｍ、深さ0.43ｍを測る。長軸方向はＮ－68°－Ｗである。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。底面は、平坦で標高6.51ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、直径20㎝を測る円形のピットに切られている。

ＳＫ33

ＳＫ33は、調査区の南部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は、西部が調査区外のため全形は明確でないが、楕円形を呈するものと考えられる。規模は、検出した範囲で東西1.70ｍ、南北1.38ｍ、深さ0.44ｍを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.18ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。底面直上に直径20～30㎝大の河原石を投棄している。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＢ６を切っている。

ＳＫ34

ＳＫ34は、調査区の南部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整方形を呈する。規模は、長径2.05ｍ、短径1.40ｍ、深さ0.39ｍを測る。長軸方向はＮ－83°－Ｗである。壁は垂直に立ち上がる。底面は、中央部が窪み舟底形を呈する。底面中央部での標高は6.27ｍを測る。埋土は、１層で黄茶色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、北部でピットに切られており、ＳＢ６を切っている。

ＳＫ35

ＳＫ35は、調査区の南部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整方形を呈する。規模は、長径1.12ｍ、短径1.02ｍ、深さ0.20ｍを測る。長軸方向はＮ－60°－Ｗである。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。底面は、平坦で標高6.48ｍを測る。埋土は、１層で黄茶色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、東端部において、ピットを切っている。

ＳＫ36

ＳＫ36は、調査区の南部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径0.70m、深さ0.20mを測る。本土坑は、上部が削平されているためか、非常に浅い。壁は、急傾斜で立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は、平坦で標高6.49mを測る。埋土は、1層で黄茶色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SK37

SK37は、調査区の南部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は小型の楕円形を呈する。規模は、長径0.78m、短径0.60m、深さ0.15mを測る。SK36と同様、浅い土坑である。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は凹凸が激しい。底面最深部の標高は6.48mを測る。埋土は、1層で黄茶色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SK38

SK38は、調査区の南端に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は小型の方形を呈する。規模は、一辺0.50m、深さ0.30mを測る。壁は垂直に立ち上がる。底面は、西部が円形状に落ち込んでおり、また、南・北部は、一段高い平坦面を有す。底面中央部での標高は6.38mを測る。埋土は、1層で黄茶色粘質土である。遺物は、近世陶磁器類が出土しているが、実測可能なものは、33の唐津焼碗のみである。

溝

SD1

SD1は、調査区の北西端に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅0.60～0.80m、深さ6～10cm、長さ4.60mを測る。幅は、南北の両端がやや広く中央部が狭い。断面形は逆台形状を呈する。底面の標高は、北部で6.65m、南部で6.58mを測る。埋土は灰茶色粘質土である。遺物は、71の寛永銭が出土している。重複関係は、屋敷を囲むSD3に切られている。

SD2

SD2は、調査区の北西端に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅0.20～0.50m、深さ0.10～0.25m、長さ4.60mを測る。幅は、南部がやや広くなっている。断面形はU字状を呈する。底面の標高は、北部が6.64m、南部は6.47mを測り、南部に傾斜している。埋土は灰茶色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、SD3とに認められるが、埋土が類似しているため、新旧関係は明確でない。

ＳＤ３

ＳＤ３は、調査区全体を長方形に囲む溝である。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅1.50～2.00ｍ、深さ0.10～0.60ｍ、長さは、北辺29ｍ、東辺41ｍ、西辺２ｍである。しかし、西辺は、調査区外に延びているため、全長は不明である。南辺は、ＳＤ３を切る溝のＳＤ８が存在しており、現状では南辺のみ開くコの字状の溝になる。ＳＤ３内には、ＳＢ４を中心に遺構が分布しており、ＳＤ３は屋敷を囲む溝である。底面の標高は6.16～6.25ｍを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は灰茶色粘質土である。遺物は、弥生土器壺（34）、土師質土器皿（35～37）・杯（38）、備前焼擂鉢（39～42）、白磁皿（43）、土錘（44）、唐津焼碗（45、47）・皿（46）が出土している。重複関係は、ＳＤ１を切っており、ＳＤ６・８、ＳＫ２・18・22・31に切られている。ＳＤ２・４・９との新旧関係は、埋土が類似しているため不明である。

ＳＤ４

ＳＤ４は、調査区の北西端に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅0.60～0.90ｍ、深さ0.13～0.18ｍ、長さ2.60ｍを測る。底面の標高は6.54ｍで、断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰茶色粘質土である。出土遺物は皆無である。新旧関係は、ＳＫ１に切られている。ＳＤ３とは、埋土が類似しているため不明である。

ＳＤ５

ＳＤ５は、調査区の北西部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅0.60～0.90ｍ、深さ0.17～0.22ｍ、長さ6.50ｍを測る。北端は、ＳＤ３の１ｍ南の地点で終結しているが、南部はさらに調査区外へ延びている。底面の標高は、北端部で6.63ｍ、南端部で6.48ｍを測り、やや南部に低く傾斜している。断面形は逆台形を呈する。埋土は黄褐色砂質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＤ６

ＳＤ６は、調査区の東端に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

南北に走っている溝で、規模は、幅0.40～1.20ｍ、深さ0.10～0.18ｍ、長さ34ｍを測る。幅は、南端が広く、北に延びるに従って狭くなる。また、北端は、調査区外へ延びており、南端はＳＤ３を切って終結している。底面の標高は、北部で6.52ｍ、南部で6.45ｍを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は黄灰色砂である。遺物は、須恵器杯（48）その他に、弥生土器片、輸入陶磁器の染付等が出土しており、本遺構は、ＳＤ３を切っていることから、これらの遺物は混入の可能性が強い。時期は、遺構の新旧関係から、ＳＤ３より新しく、ＳＫ19より古いと考えねばならない。また、埋土やその他の状況から、人為的な溝と考えるより、むしろ、出水時の自然流路の可能性が強い。

ＳＤ７

ＳＤ７は、調査区の東端に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

南北に走る溝で、規模は、幅1.00～2.00ｍ、深さ0.25～0.55ｍ、長さ46ｍを測る。南北両端は、調査区外へ延びているため全長は不明である。底面の標高は、北端部が6.50ｍ、中央部で6.33ｍ、南端部で6.11ｍを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は黄灰色粘質土である。遺物は、須恵器杯（49)、土師器皿（50)、備前焼擂鉢（51、52)、青磁碗（53)、唐津焼碗（54)が出土している。本遺構は、現代の水田のセメント畦畔に並行して存在しており、過去に用水路として使用されていたため、それが埋没した可能性もある。北部でＳＤ６と接しているが、重複関係は認められない。

ＳＤ８

ＳＤ８は、調査区の南端に位置する。第Ⅲ層を除去しＳＤ３の延長を追求した結果検出した溝である。上部は、東西方向の水田の畦畔であった。

東西に走る溝で、規模は、幅1.80～2.00ｍ、深さ0.40～0.60ｍ、長さ14ｍを測る。西部は、調査区外に延びており、東部はＳＤ３を切っている。底面の標高は6.13～6.20ｍを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は白灰色粘質土である。遺物は、唐津焼皿（55)・碗（56）が出土している。重複関係は、ＳＤ３を切っている。

ＳＤ９

ＳＤ９は、調査区の中央部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅0.50～0.60ｍ、深さ0.10～0.25ｍ、長さ８ｍを測る。ＳＰ１とＳＤ３を連結して存在しており、屋敷内をさらに細かく区画している可能性がある。底面の標高は、西部が6.42ｍ、東部が6.30ｍと若干東に傾斜している。断面形は逆台形状を呈する。埋土は黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＫ28を切っており、ＳＰ１、ＳＤ３に関しては、埋土が類似しているため不明である。しかし、同時期に存在していたものとも考えられ、ＳＰ１の滞水が限界の時にＳＤ３に向けて排水する機能を有していたものかもしれない。

水溜り状遺構

ＳＰ１

ＳＰ１は、調査区の中央部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径10.10ｍ、短径2.10ｍ、深さ0.60ｍを測る。長軸方向はＮ－10°－Ｅである。壁は、緩やかに立ち上がり、断面はＵ字形を呈する。底面は、北端に延びるにしたがって、緩やかに傾斜して深くなる。基底面の標高は、南部が15.90ｍ、北部

で15.80ｍを測る。埋土は黄灰色粘質土である。南部の上面では、多量の集石を検出した。南部上面の集石を除去すると、南壁に、直径５～10㎝を測る杭状の小穴が斜めに掘り込まれていた。

遺物は、北部集石中より砥石（62)、南部集石中より土師質把手（57)、備前焼擂鉢（58)、金属製品としては、煙管（68）が出土している。その他、土師質土器、備前焼片が出土しているが、細片のため実測不可能である。重複関係は、北端部をＳＫ14に切られている。ＳＰ１の東側には、ＳＤ９が延びておりＳＤ３に連結している。ＳＰ１とＳＤ９は、上面での切り合い関係を確認することができず、同時に存在した可能性が強い。

ピット

Ｐ１～３

ピット群は、屋敷を囲むＳＤ３内にそのほとんどが分布する。また、その中でもＳＢ２・３・５・６の周辺に集中している。形態は円形を呈するものが多く、規模は、直径20～40㎝、深さ10～30㎝を測る。埋土は、灰褐色粘質土と灰色粘質土のものが混在している。遺物は、Ｐ１より砥石（65)、Ｐ２より唐津焼皿（59)、Ｐ３より土師質土器杯（60）が出土している。いずれもＳＤ３に囲まれた掘立柱建物址の遺物と時期を同じくしている。

５．まとめ

Loc.31Ａでは、掘立柱建物址36棟、土坑54基、溝14条、井戸１基、柵列址２基、ピット群を検出した。このうち掘立柱建物址20棟は、溝に囲まれた屋敷内に位置する。屋敷内の主屋と考えられるものは、屋敷中央部よりやや南部に位置するＳＢ９・11・12が考えられる。これらの建物址はそれぞれ重複しており、３回の建替えが認められる。柱穴の切り合いが認められないため新旧関係は不明であるが、建替えが行われていることから、ＳＢ９→11→12の変遷が考えられる。その他３時期の変遷が考えられる建物址をグループ別に見ると、主屋の南側に位置するＳＢ13・14・15のＡグループ、ＳＤ１西辺の外側に位置するＳＢ22・23・24のＢグループ、屋敷の北側でＳＤ１の中央部とＳＤ５に挟まれているＳＢ３・４・５のＣグループが存在する。これら建物址群の変遷を見ると、柱穴の切り合い関係から、ＡグループではＳＢ13→14→15、ＢグループではＳＢ24→23→22、ＣグループではＳＢ３→４→５を考えることができる。屋敷址の存続時期であるが、掘立柱建物址からの遺物では、出土数が少なく明確にできないが、屋敷を囲む溝であるＳＤ１の出土遺物を見ると、14世紀前半から15世紀前半を考えることができる。この約１世紀間を、建物址から３時期に小期を設ければ、Ⅰ期はＳＢ９・13・24・３、Ⅱ期はＳＢ11・14・23・４、Ⅲ期はＳＢ12・15・22・５がそれぞれ同時に存在したことになる。屋敷の東側に位置するＳＢ８・20・21に関しては、変遷を見ることは困難だが、14世紀前半か

ら15世紀前半の時期に、他の建物址と同時に存在していたものと考えられる。ＢグループのＳＢ22・23・24に関しては、溝に囲まれた屋敷外に位置しているが、ＳＤ１の西辺の壁上部に、杭の跡ではないかとみられる小穴が、壁に対して斜めに掘り込まれており、屋敷内の往還に利用した橋が存在した可能性があり、屋敷とは同時期に存在したものと考えられる。出入口は、屋敷の中央部南、ＳＥ１の存在する地点が考えられるが、この周囲には建物址が密集しており、裏口としての利用を考えねばなるまい。表入口は、ＳＤ１のいずれかに陸橋部を設けていたものと考えられるが、その位置は現段階では不明である。その他遺構群中で注目されるのは、屋敷の東南隅に位置するＳＫ28である。ＳＫ28は方形を呈しており、埋土中より炭化物と骨片が出土しており、その位置からＳＢ20・21と同時期に存在した屋敷墓と考えられる。調査区南部のＳＤ６以南にも土坑や掘立柱建物址が存在するが、これらは、近世の時期のものである。Loc. 31のＡ地点では、下層で、弥生・古墳時代の遺構を検出しているが、そのまとめは、『弥生編』、『古墳編』でそれぞれ触れている。

Loc. 31Ｂでは、掘立柱建物址６棟、土坑38基、溝９条、水溜り状遺構１基、ピット群を検出しており、本調査区Ｂ地点でも、溝に囲まれた屋敷址を検出した。しかし、屋敷の西半分は、調査区外で未調査である。屋敷内において検出した掘立柱建物址は５棟である。建替え等は行われておらず、単独で存在していることから、屋敷は短時期のものと考えられる。時期は、ＳＤ３出土の35～47の遺物から16世紀後半頃と考えられる。屋敷内は、完掘しておらず、井戸が存在しているかどうかは不明であるが、ＳＰ１がその機能を果していたとも考えられる。また、ＳＤ３、ＳＰ１に連結しているＳＤ９が、屋敷内を分割している。屋敷を囲むＳＤ３は、南側に位置するＳＤ８に切られていることから、南辺が開くコの字状を呈していることになる。

Loc. 31Ａ・Ｂ両地点で、時期を異にする良好な屋敷址を検出できたことは、今後の屋敷群研究への一助となるであろう。

第33表　LOC. 31 A 掘立柱建物址計測表

挿図番号	遺構番号	規模			棟方向	面積 (m²)	備考
		梁(間)×桁(間)	梁 × 桁(m)	柱間距離(m)			
第158図	SB 1	1 × 2	1.40 × 4.80	1.30 ～ 2.60	N－75°－W	6.7	
〃	SB 2	2 × 3	3.05 × 4.45	0.80 ～ 1.85	N－79°－W	13.6	
第159図	SB 3	1 × 2	2.15 × 3.20	1.40 ～ 2.15	N－15°－E	6.9	
〃	SB 4	1 × 2	1.75 × 3.60	1.75 ～ 1.95	N－18°－E	3.4	
〃	SB 5	2 × 2	2.75 × 3.45	1.20 ～ 1.80	N－75°－W	9.5	
第160図	SB 6	2 × 3	4.60 × 5.15	0.80 ～ 2.40	N－77°－W	23.7	
〃	SB 7	2 × 2	3.05 × 4.25	1.45 ～ 2.15	N－78°－W	13.0	
第161図	SB 8	2 × 3	5.05 × 4.85	1.50 ～ 2.55	N－18°－E	24.5	
第162図	SB 9	3 × 3	4.85 × 5.25	1.50 ～ 1.85	N－80°－W	25.5	
〃	SB 10	1 × 3	1.65 × 4.55	1.30 ～ 1.65	N－80°－W	7.5	
第163図	SB 11	3 × 3	6.55 × 7.55	1.65 ～ 3.00	N－73°－W	49.5	
第164図	SB 12	3 × 3	5.30 × 7.20	1.45 ～ 2.85	N－79°－W	38.2	
〃	SB 13	1 × 2	2.65 × 4.25	2.00 ～ 2.65	N－15°－E	11.3	
第165図	SB 14	2 × 3	3.50 × 4.65	1.20 ～ 2.20	N－13°－E	16.3	
〃	SB 15	2 × 4	4.65 × 6.15	1.10 ～ 2.40	N－80°－W	28.6	
第166図	SB 16	2 × 2	3.60 × 4.60	1.80 ～ 2.30	N－16°－E	16.6	
〃	SB 17	1 × 1	1.60 × 1.75	1.50 ～ 1.75	N－80°－E	2.8	
〃	SB 18	2 × 2	2.95 × 2.95	1.25 ～ 1.85	―――	8.7	
第167図	SB 19	1 × 4	3.50 × 5.70	1.40 ～ 3.50	N－75°－W	20.0	
〃	SB 20	2 × 3	3.65 × 6.30	1.60 ～ 2.40	N－75°－W	23.0	
第168図	SB 21	2 × 3	4.05 × 6.55	1.20 ～ 2.80	N－76°－W	26.5	
第169図	SB 22	3 × 4	5.35 × 7.90	1.15 ～ 2.80	N－71°－W	13.3	
第170図	SB 23	3 × 4	5.45 × 6.10	1.10 ～ 2.25	N－75°－W	33.3	
第168図	SB 24	2 × 2	3.55 × 4.70	1.70 ～ 2.65	N－75°－W	16.7	
第169図	SB 25	1 × 3	1.75 × 5.10	0.85 ～ 2.50	N－83°－W	8.9	
第170図	SB 26	1 × 1	1.95 × 2.20	1.90 ～ 2.20	N－73°－W	4.3	
〃	SB 27	2 × 2	2.45 × 2.75	1.05 ～ 1.45	N－17°－E	6.7	
第171図	SB 28	2 × 3	3.80 × 5.35	1.70 ～ 1.95	N－75°－W	20.3	
第172図	SB 29	4 × 4	6.10 × 9.25	1.05 ～ 3.50	N－75°－W	56.4	
第173図	SB 30	3 × 3	6.10 × 6.50	1.20 ～ 3.15	N－20°－E	39.7	

挿図番号	遺構番号	規模			棟方向	面積 (㎡)	備考
		梁(間)×桁(間)	梁 × 桁(m)	柱間距離(m)			
第171図	S B 31	1 × 2	2.70 × 3.70	1.15 ～ 3.70	N－14°－E	10.0	
第173図	S B 32	1 × 3	1.85 × 4.15	0.90 ～ 1.85	N－85°－W	7.7	
第174図	S B 33	1 × 2	2.75 × 2.85	1.20 ～ 2.85	N－67°－W	9.9	
〃	S B 34	1 × 1	2.40 × 2.70	2.35 ～ 2.70	N－77°－W	6.5	
第175図	S B 35	2 × 2	2.70 × 2.95	1.00 ～ 1.60	N－11°－E	8.0	
〃	S B 36	1 × 2	3.50 × 3.75	1.50 ～ 3.50	N－12°－E	13.1	

第34表　LOC. 31 A 土坑計測表

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第176図	SK 1	楕円形	2.00	1.90	1.29	———	逆台形	平面形、全形は不明確。
〃	SK 2	不整方形	0.96	0.85	0.29	N－27°－E	〃	
〃	SK 3	方形	0.90	0.68	0.36	N－13°－E	〃	
〃	SK 4	不整楕円形	1.28	0.83	0.51	N－21°－E	箱形	
〃	SK 5	円形	0.85	——	0.40	———	逆台形	
第177図	SK 6	不整楕円形	1.60	0.55	0.08	N－78°－W	———	
〃	SK 7	方形	0.63	0.54	0.14	N－72°－W	逆台形	
〃	SK 8	不整円形	1.00	——	0.22	———	———	
〃	SK 9	方形	1.30	0.80	0.11	N－18°－E	逆台形	
〃	SK 10	溝状	3.55	0.40	0.33	N－18°－E	〃	
〃	SK 11	不整楕円形	1.30	1.10	0.30	———	〃	
第178図	SK 12	不整方形	2.05	1.00	0.58	N－16°－E	———	
〃	SK 13	溝状	2.80	0.40	0.07	N－11°－E	———	
〃	SK 14	隅丸方形	1.08	0.65	0.10	———	浅い逆台形	
〃	SK 15	方形	0.80	0.54	0.47	N－25°－E	———	
〃	SK 16	〃	2.45	0.97	0.38	N－87°－E	逆台形	
第179図	SK 17	不整楕円形	1.85	0.76	0.10	N－69°－W	———	
〃	SK 18	〃	1.30	0.90	0.35	———	———	
〃	SK 19	〃	1.35	0.80	0.10	———	浅い逆台形	
〃	SK 20	円形	0.90	——	0.16	———	逆台形	
〃	SK 21	〃	0.90	——	0.10	———	〃	
〃	SK 22	隅丸方形	2.10	0.87	0.07	N－15°－E	浅い逆台形	
第180図	SK 23	溝状不整形	3.70	——	0.15	———	逆台形	
〃	SK 24	不整円形	0.90	——	0.11	———	浅い逆台形	
〃	SK 25	円形	0.85	——	0.12	———	〃	
〃	SK 26	〃	0.85	——	0.10	———	〃	
〃	SK 27	楕円形	0.65	0.50	0.38	N－ 6°－W	箱形	
第181図	SK 28	方形	1.45	1.08	0.33	N－11°－E	———	
〃	SK 29	隅丸方形	0.80	0.50	0.15	———	———	
〃	SK 30	楕円形	2.78	1.63	0.24	———	逆台形	

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第181図	SK 31	円形	1.80	——	0.47	———	逆台形	全形は不明確。
〃	SK 32	不整方形	0.90	0.60	0.06	N－20°－E	浅い逆台形	
第182図	SK 33	不整楕円形	2.70	1.08	0.34	N－55°－E	———	
〃	SK 34	隅丸方形	1.10	1.00	0.50	N－75°－W	逆台形	
〃	SK 35	長方形	2.35	0.85	0.67	N－17°－E	———	
第183図	SK 36	不整形	3.20	2.20	0.43	———	———	
第182図	SK 37	〃	3.20	2.18	0.38	N－32°－E	———	
第183図	SK 38	隅丸方形	0.90	——	0.21	———	浅い逆台形	
〃	SK 39	長方形	2.00	0.50	0.10	N－29°－E	逆台形	
〃	SK 40	不整楕円形	1.90	1.15	0.19	N－17°－E	———	
〃	SK 41	楕円形	1.65	1.40	0.54	N－ 7°－E	逆台形	
第184図	SK 42	長方形	6.32	3.15	0.40	N－70°－W	〃	
〃	SK 43	楕円形	0.90	0.65	0.10	———	———	
〃	SK 44	隅丸方形	1.30	0.73	0.19	N－14°－E	逆台形	
〃	SK 45	楕円形	1.40	0.85	0.46	N－23°－E	〃	
〃	SK 46	隅丸方形	1.15	0.70	0.12	N－37°－W	浅い逆台形	
第185図	SK 47	〃	0.80	0.60	0.12	———	———	
〃	SK 48	円形	1.00	——	0.18	———	逆台形	
〃	SK 49	〃	0.90	——	0.70	———	———	
〃	SK 50	楕円形	1.20	0.80	0.50	N－12°－W	———	
〃	SK 51	〃	1.00	0.65	0.50	———	———	
〃	SK 52	〃	1.00	0.75	0.50	———	逆台形	
〃	SK 53	〃	——	0.60	0.10	———	———	全形は不明。
〃	SK 54	〃	1.00	0.60	0.15	———	浅い逆台形	

第35表　Loc. 31A 包含層出土土器観察表

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
1	第Ⅰ層	瓦質土器 鍋	16.0 (4.3) —— ——	頸部はくの字形に屈曲し、口縁部は外反して上方に立ち上がる。端部は水平面を成す。	口縁端部に浅い凹線が施される。	
2	〃	擂鉢	36.4 (3.6) —— ——	口縁部は拡張され、上方に立ち上がる。内面に浅い段あり。	外面に2本の凹線。 内外面ともヨコナデ。	備前焼。
3	〃	天目茶碗	—— (2.0) —— 4.4	削り出し高台で、高台脇は広く削り出される。	化粧がけは施されない。 外面高台脇まで施釉される。	暗褐色釉。 淡黄色。
4	〃	皿	—— (2.0) —— 8.4	削り出し高台で、断面逆台形状を呈する。高台脇は深く削られ、体部は内湾気味に立ち上がる。	内面と外面高台脇まで施釉される。貫入あり。	濁白灰色釉。 胎土、黄白色。
5	第Ⅰ・Ⅱ層	瓦質土器 鍋	55.6 (4.1) —— ——	口縁部やや内傾し、肩部に退化した鍔を持つ。	調整不明。	磨滅が著しい。
6	〃	擂鉢	33.1 11.7 —— 15.2	体部は直線的に立ち上がり、口縁部は上方に拡張される。	口縁部外面に2本の凹線が施され、内面に段を有す。条線は9本1単位で上から下へ。	
7	〃	青磁 碗	—— (2.6) —— 5.0	高台内外面垂直に削り出す。高台内の削りが浅い。見込は浅い段状を呈する。	高台外面まで施釉され、畳付にも一部釉がかかる。	淡青緑色釉。 胎土、灰色。
挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手法	備考
8	第Ⅱ層	土師器 杯	—— (2.1) —— 9.1	高台は貼付高台で、断面逆台形状を呈する。体部は内湾気味の立ち上がりを示す。	調整不明。	磨滅が著しい。
挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
9	第Ⅱ層	土師質土器 杯	10.3 4.5 —— 6.7	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	ロクロナデ。 底部回転糸切り。	
挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手法	備考
10	第Ⅲ層	弥生土器 壺	19.4 (6.9) —— ——	頸部に段部を有し、口縁部は外反する。		
挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
11	第Ⅲ層	土師質土器 小皿	8.4 2.0 —— 6.7	体部は直線的な立ち上がりを示す。器壁は厚い。	調整不明。	磨滅が著しい。

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
12	第Ⅲ層	瓦質土器 鍋	19.6 (8.3) —— ——	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。片口を有す。	体部外面指頭圧痕が残る。	
13	〃	〃	19.8 (7.1) —— ——	口縁部は内傾し、退化した鍔が貼付される。	外面に指頭圧痕あり。	
14	〃	〃	24.3 (9.1) —— ——	体部は内湾し、口縁部は直線的に上方へ立ち上がる。退化した鍔が貼付される。	外面に指頭圧痕あり。 口縁部ヨコナデ。	
15	〃	瓦質土器 竈	—— (5.7) (9.2) ——			
16	〃	擂鉢	—— (4.6) —— 10.1	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	内面全面に条線が施される。	備前焼。
17	〃	ぐい呑み	—— (1.9) —— 3.0	断面逆台形の高台を有す。底部から体部は、直線的に外上方へ立ち上がる。	畳付を除き、全面に施釉される。呉須は淡い青色に発色する。	灰白色釉。 胎土、乳白色。 伊万里系。
18	〃	碗	—— (2.1) —— 4.3	体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。浅い削り出し高台。	釉の施されている部分は欠損。見込に目跡あり。	胎土、淡黄褐色。 唐津焼。
19	〃	〃	—— (3.6) —— 5.4	高台は、外方に開いた削り出し高台で、高台内の削りは深い。	畳付を除き全面に施釉。 貫入あり。	にぶい黄橙色釉。 胎土、淡黄橙色。 尾戸焼。
20	〃	土錘	全長 5.9 直径 2.0 重量(g) 22.3	土師質の土錘で円筒形を呈する。ほぼ中央部に直径7㎜の円孔を穿つ。		
21	〃	土師質土器 杯	10.2 4.6 —— 5.7	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部はやや外反する。	内外面ともロクロナデ。 底部回転糸切り。	
22	〃	青磁 碗	—— (2.6) —— 5.2	高台は断面長方形で、高台内の削りは浅い。	高台外面まで施釉される。 貫入なし。	黄緑色釉。 胎土、灰色。
23	第Ⅳ層	碗	—— (2.1) —— 3.0	高台は断面長方形を呈する。体部は内湾して外上方へ立ち上がる。	畳付を除き、全面に施釉される。体部外面に二重網目文、高台外面に二重の界線が淡い青色に発色する。	淡青灰色釉。 胎土、灰色。 伊万里系。

第36表　Loc. 31A 包含層出土石器観察表

挿図番号	層位	器種	計測値(cm, g) 最大長 / 最大幅 / 最大厚 / 重量	材質	特徴	備考
24	第Ⅰ層	石斧	(8.0) 2.7 1.7 72.5		柱状両刃石斧で丁寧に研磨され、刃部を作り出している。 基部は欠損している。	

挿図番号	層位	器種	計測値(cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重量	材質	特徴	備考
25	第Ⅰ層	凹石	9.7 8.4 3.6 377.5	砂岩	断面長方形を呈し、中央部のみ凹状になる。	

第37表　Loc. 31A 遺構出土土器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
26	SB6	擂鉢	31.4 10.7 —— 13.3	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は上方に拡張される。口縁部外面に二条の凹線、内面に浅い段を有す。	ロクロナデ。 条線は9本1単位。	備前焼。
27	〃	〃	30.2 (6.7) —— ——	〃	ロクロナデ。 条線は11本1単位。	〃
28	SB8	土師質土器 杯	11.6 (2.3) —— ——	口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。	ロクロナデ。	
29	SB15	〃	11.2 4.8 —— 6.6	体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	〃	
30	SB29	土錘	全長 3.9 直径 1.1 重量(g) 3.0	土師質の土錘で円筒形を呈する。ほぼ中央部に直径4㎜の円孔を穿つ。		
31	SB36	土師質土器 杯	—— 4.2 —— 4.4	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	ロクロナデ。 底部回転糸切り。	
32	SK1	土師質土器 鍋	28.8 (5.7) —— ——	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部はやや肥厚する。	内面はヨコナデ。	焼成良好。 外面に煤付着。
33	〃	皿	9.0 2.3 —— 5.5	外方に開いた断面三角形の高台を有す。高台内の削りはやや深い。	口銹である。貫入あり。 畳付を除き全面に施釉される。	淡青白色釉。 胎土、灰白色。
34	〃	碗	12.1 (5.0) —— ——	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	内外面文様が明るい青色に発色する。貫入なし。	灰白色釉。 胎土、灰白色。 伊万里系。
35	〃	〃	—— (3.8) —— 4.5	高台は外面端部を面取られ、畳付を狭くしている。体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。	畳付は釉が削り取られ、それ以外の全面に施釉される。貫入あり。	緑灰色釉。 胎土、黄灰色。 尾戸焼。
36	SK14	土師質土器 皿	14.8 (3.3) —— ——	体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。	外面に指頭圧痕が残る。	淡黄褐色。
37	SK16	土師質土器 小皿	5.8 1.3 —— 4.4	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	調整不明。	磨滅が著しい。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
38	SK28	土師質土器 小杯	5.9 1.8 —— 3.7	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	ロクロナデ。 底部回転糸切り。	
39	SK30	瓦質土器 鍋	24.0 (3.6) —— ——	口縁部は上方に立ち上がり、外面に退化した鍔が貼付される。端部は凹状を呈する。	調整不明。	磨滅が著しい。
40	〃	〃	19.8 (14.6) —— ——	胴部は大きく内湾して立ち上がり、内傾した口縁部にいたる。端部は内傾した面を成す。	外面に指頭圧痕が残る。	
41	〃	〃	26.4 (5.3) —— ——	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。口縁端部は外傾する面を成す。	〃	磨滅が著しい。
42	SK36	皿	—— (1.3) —— 5.1	高台は削り出し高台で、断面三角形を呈する。	外底の一部まで施釉され、畳付内外は釉を削り取られる。	淡緑灰白色釉。 胎土、灰白色。 伊万里系。
43	SK37	染付 碗	—— (2.3) —— 6.0	高台は逆三角形を呈し、体部は内湾気味に立ち上がる。	高台外面まで施釉される。 貫入あり。	灰白色釉。 胎土、黄灰色。
44	〃	碗	—— (3.7) —— 3.6	断面逆台形の削り出し高台で、高台脇は深く削られる。	体部外面中位ぐらいまで施釉され、それ以下は露胎する。	淡緑灰色釉。 胎土、黄灰色。 唐津焼。
45	SK42	擂鉢	33.0 (4.4) —— ——	口縁部は上下に拡張され、外面に二条の凹線、内面に浅い段を有す。	ロクロナデ。 条線の単位は不明。	備前焼。
46	〃	〃	21.6 (4.1) —— ——	口縁部は上下に拡張される。	〃	〃
47	〃	青磁 碗	—— (1.6) —— 5.0	高台は削り出し高台で、断面逆台形を呈する。	畳付まで施釉される。 見込は円形に釉を削り取られる。貫入あり。	青緑色釉。 胎土、灰色。
48	〃	土錘	全長 4.3 直径 1.6 重量(g) 3.0	土師質の土錘で円筒形を呈する。ほぼ中央部に直径6㎜の円孔を穿つ。		半分欠損する。
49	〃	碗	10.4 6.8 —— 4.0	高台は断面逆三角形を呈する。体部は内湾して立ち上がり、口縁は直立してから外反する。	内面及び外面高台脇まで施釉される。	黒褐色釉。 胎土、赤褐色。 唐津焼。
50	〃	蓋	—— 2.4 —— 4.4	丸いボタン状のツマミを持つ。受部は水平に伸びる。	底部は2ケ所貼付けられる。 底部回転糸切り。	〃
51	〃	碗	—— (4.5) —— 5.0	高台は外方に開き、高台内の削りは深い。体部は内湾して外上方に立ち上がる。		淡黄灰色釉。 胎土、暗灰色。 尾戸焼。
52	SK52	土師質土器 杯	—— (1.7) —— 6.4	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	調整不明。	磨滅が著しい。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
53	SD1	土師質土器 杯	11.8 4.2 —— 6.0	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	ロクロナデ。	磨滅が著しい。
54	〃	〃	12.1 4.0 —— 5.7	〃	内面にロクロ痕あり。 底部回転糸切り。	
55	〃	〃	—— 3.1 —— 7.4	体部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。	底部回転糸切り。	
56	〃	〃	11.7 (2.4) —— ——	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部やや外反する。	内面ロクロ痕あり。 底部回転糸切り。	
57	〃	〃	13.4 (5.3) —— 7.0	〃	〃	
58	〃	〃	13.0 4.9 —— 6.4	体部は外反しながら外上方に立ち上がる。	〃	
59	〃	〃	12.3 5.4 —— 6.5	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部はやや外反する。	〃	
60	〃	土師質土器 鍋	26.6 (8.1) —— ——	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、わずかに外反した口縁部にいたる。口縁端部はわずかに内傾した面を成す。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面叩目あり。	
61	〃	瓦質土器 鍋	24.0 (6.0) —— ——	胴部は内湾して上方に立ち上がり、口縁部にいたる。口縁端部は内傾した面を成す。外面に退化した鍔を持つ。	口縁部内外面ヨコナデ。	磨滅が著しい。
62	〃	〃	18.2 (6.4) —— ——	〃	外面に指頭圧痕。	〃
63	〃	〃	17.2 (3.9) —— ——	口縁部は内傾し、端部は丸くおさめる。退化した鍔を有す。	調整不明。	〃
64	〃	〃	20.0 (4.3) —— ——	口縁部は内傾し、端部は水平面を成す。外面に鍔を有す。		〃
65	〃	〃	19.0 (4.9) —— ——	体部は内湾し、内傾した口縁部にいたる。外面に退化した鍔を有す。		
66	〃	〃	22.4 (3.9) —— ——	口縁部は内傾し、端部はやや内傾した面を成す。器壁は厚手で、外面に退化した鍔を有す。		
67	〃	〃	22.8 (4.3) —— ——	口縁部は内傾し、端部は水平面を成す。外面に退化した鍔を有す。	外面に指頭圧痕あり。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
68	ＳＤ１	瓦質土器 鍋	26.0 (3.3) —— ——	口縁部は内傾し、端部はやや内傾した面を成す。外面に退化した鍔を有す。	調整不明。	磨滅が著しい。
69	〃	〃	18.0 (6.5) —— ——	胴部は内湾して立ち上がり、頸部でくの字形に屈曲した後、外反した口縁部にいたる。	外面に指頭圧痕あり。	磨滅が著しい。 胴部下位に煤付着。
70	〃	〃	16.8 (5.1) —— ——	〃	〃	磨滅が著しい。
71	〃	〃	16.6 (5.0) —— ——	〃		〃
72	〃	〃	18.1 (4.0) —— ——	内傾した胴部から頸部は屈曲して上方に立ち上がる。	口縁部外面に指頭圧痕あり。	〃
73	〃	須恵質土器 捏鉢	30.2 (7.5) —— ——	体部は直線的に立ち上がり、口縁部が拡張され面を成す。 端部に刻目が施される。	内面ヨコナデ。 体部ロクロナデ。	魚住焼。
74	〃	皿	—— (1.6) —— 3.8	高台は断面逆台形を呈する。体部は内湾気味に立ち上がる。	見込に目跡が１ケ所。	唐津焼。
75	ＳＤ４	甕	33.0 (5.1) —— ——	Ｎ字状の口縁部を呈する。	口縁部ヨコナデ。	常滑焼。
76	ＳＤ６	瓦質土器 鍋	20.4 (4.0) —— ——	口縁部は上方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。外面に退化した鍔を有す。	調整不明。	磨滅が著しい。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
77	ＳＥ１	弥生土器 甕	(8.0) 16.5 —— ——	口縁部は如意形に外反する。 口縁端部は刻目を施す。	胴部外面は斜位のハケ目。 内面は指頭圧痕が残る。	
78	〃	弥生土器 壺	(1.9) 15.5 —— ——	口縁部は漏斗状に大きく外反する。貼付口縁。	口縁部外面に指頭圧痕が残る。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
79	ＳＥ１	土師質土器 杯	—— (1.6) 6.8 ——	体部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。	底部回転糸切り。	
80	〃	瓦質土器 鍋	22.4 (4.6) —— ——	口縁部は内傾し、端部は内傾した面を成す。外面に退化した鍔あり。	外面に指頭圧痕が残る。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
81	SE1	瓦質土器 鍋	22.4 (5.6) —— ——	口縁部は内傾し、端部は内傾した面を成す。外面に退化した鍔あり。	外面に指頭圧痕が残る。	磨滅が著しい。
82	〃	〃	23.0 (4.0) —— ——	〃	調整不明。	〃
83	〃	〃	24.0 (8.7) —— ——	体部は内湾し、口縁部は内傾、端部は内傾した面を成す。外面に退化した鍔が貼付される。	外面に指頭圧痕が残る。	
84	〃	〃	21.6 (5.9) —— ——	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。端部は丸くおさめられる。	〃	磨滅が著しい。
85	〃	〃	21.0 8.1 —— 14.0	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。端部は外傾した面を成す。	〃	
86	〃	擂鉢	—— (7.1) —— 14.8	体部は直線的に外上方に立ち上がる。	ロクロナデ。 条線は7本1単位。	備前焼。
87	〃	甕	29.4 (7.7) —— ——	頸部は内傾して立ち上がり、N字状の口縁部にいたる。	ロクロナデ。	常滑焼。
88	〃	〃	37.6 (11.6) —— 43.0	〃	〃	〃
89	〃	青磁 碗	—— (2.5) —— 5.8	断面方形の高台を持つ。高台内の削りが浅い。体部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。	高台外面まで施釉される。 貫入あり。	青緑色釉。 胎土、灰色。
90	〃	皿	—— (2.1) —— 5.6	断面逆台形状の高台を有し、体部は大きく外上方へ開く。	高台脇まで施釉される。一部高台外面まで釉がかかる。見込に4ケ所目跡。	濁灰白色釉。胎土、灰色。17C前半、慶長～寛永。伊万里系、半磁器質。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手法	備考
91	P1	弥生土器 壺	—— (9.5) —— 6.3	平坦な底部から外上方に大きく開いて立ち上がる。	胴部外面縦のハケ目。 内面に指頭圧痕が残る。	
92	P2	土師器 杯	9.5 1.3 —— ——	体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。	回転ナデ調整。	
93	P3	土師質土器 杯	—— (2.4) —— 6.6	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	ロクロナデ。 底部回転糸切り。	
94	P4	〃	11.2 4.4 — 6.2	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	〃	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
95	P 5	土師質土器 杯	12.4 3.9 —— 6.4	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	ロクロナデ。 底部回転糸切り。	
96	P 6	須恵質土器 鉢	22.8 (4.3) —— ——	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は上下に拡張される。	内外面ともヨコナデ。	魚住焼か。
97	P 7	瓦質土器 鍋	17.6 (5.3) —— ——	口縁部は内傾し、端部は水平面を成す。外面に退化した鍔が貼付される。	口縁部内外面ヨコナデ。	
98	P 8	〃	19.4 (6.7) —— ——	胴部は大きく内湾して口縁部にいたる。口縁端部は上向きで凹状を呈する。	調整不明。	磨滅が著しい。
99	P 9	青磁 碗	—— (1.8) —— 5.9	高台は断面方形で、やや外に開いた形を呈する。	高台外面まで施釉され、一部の釉は外底までかかる。	青緑色釉。
100	P10	土錘	全長 (2.5) 直径 1.3 重量(g) 3.0	土師質の土錘で円筒形を呈する。ほぼ中央部に直径4㎜の円孔を穿つ。		

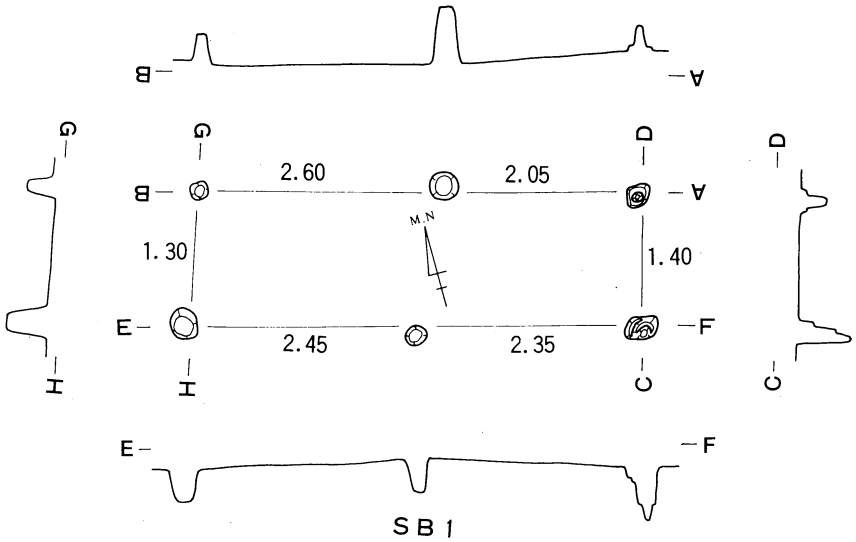
第38表　Loc. 31 A 遺構出土石器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	計測値(cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重量	材質	特徴	備考
101	S K33	砥石	12.2 8.7 7.3 1186.0	砂岩	断面長方形で3面共使用している。	
102	〃	〃	9.1 8.5 9.2 910.0	〃	大部分が欠損する。 2面使用している。 断面方形を呈する。	
103	P11	〃	(5.8) 3.6 1.0 31.0	泥岩	小型の砥石で断面長方形を呈し、表裏2面を使用している。	
104	S B29	台石	26.9 (23.2) 7.1 6500.0	砂岩	楕円形を呈する。 中央部が凹む。	

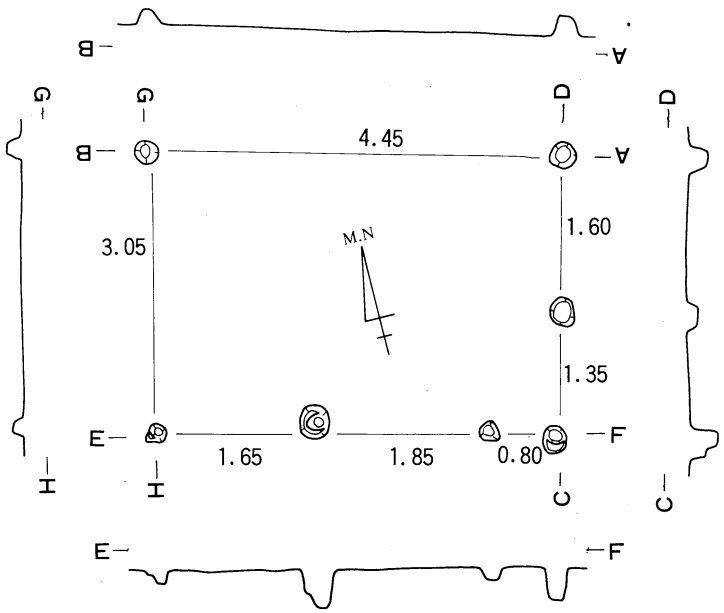
第39表　Loc. 31 A 遺構出土木器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	計測値(cm) 最大長 最大幅 最大厚	材質	特徴	備考
105	S E 1	板材	8.7 2.7 0.4	不明	上下両端を斜位に切り込んでいる。	

挿図番号	遺構番号	器　種	計測値(cm) 最大長 最大幅 最大厚	材　　質	特　　徴	備　考
106	ＳＥ１	板材	13.7 2.9 0.7	不　明	下端部は欠損している。 周辺部は削っている。	
107	ＳＫ１	〃	10.0 7.4 1.6	〃	木棺の一部破片と考えられるが、細片のため不明である。上端の一部が削られている。	
108	Ｐ12	柱痕	15.0 3.7 2.8	〃	柱の先端部と考えられ、下端が一方向から削られている。	
109	ＳＥ１	曲物底板	21.0 9.3 1.0	〃	上下端が削られており、底板の中央部と考えられる。	
110	〃	〃	13.1 2.8 0.8	〃	曲物の底板。 細片で大半が欠損している。 周辺部は丁寧に削りとっている。	
111	ＳＫ１	板材	14.6 5.3 1.3	〃	上端が削られており、下端部は欠損している。 木棺の一部と考えられる。	
112	ＳＥ１	〃	13.7 6.0 1.3	〃	下端部が欠損しているが、上端部は削られており、曲物の底板の一部と考えられる。	
113	〃	〃	18.2 6.4 0.6	〃	下端部は欠損しており、上端部は丁寧に削られている。曲物の底板の可能性がある。	
114	〃	曲物底板	18.5 6.9 6.0	〃	約½が残存している。 周辺部は丁寧に削りとられている。 曲物の底板。	
115	〃	板材	17.5 6.9 1.6	〃	上端部は欠損しているが、下端部は削りとられている。	
116	〃	桶	12.2 7.5 1.3	〃	井戸板状の桶の一部である。	
117	ＳＫ１	板材	23.2 6.6 1.0	〃	上端部の一部を削りとっている。 下端部は欠損している。	
118	〃	〃	20.1 8.0 1.2	〃	上端部は欠損しているが、下端部は削りとられている。 木棺の一部破片の可能性がある。	
119	Ｐ13	柱痕	24.6 7.2 4.8	〃	下端部は削りとられ細くしている。	
120	Ｐ14	〃	20.0 7.9 6.0	〃	下端部は削りとられて、やや細くしている。	



SB 1

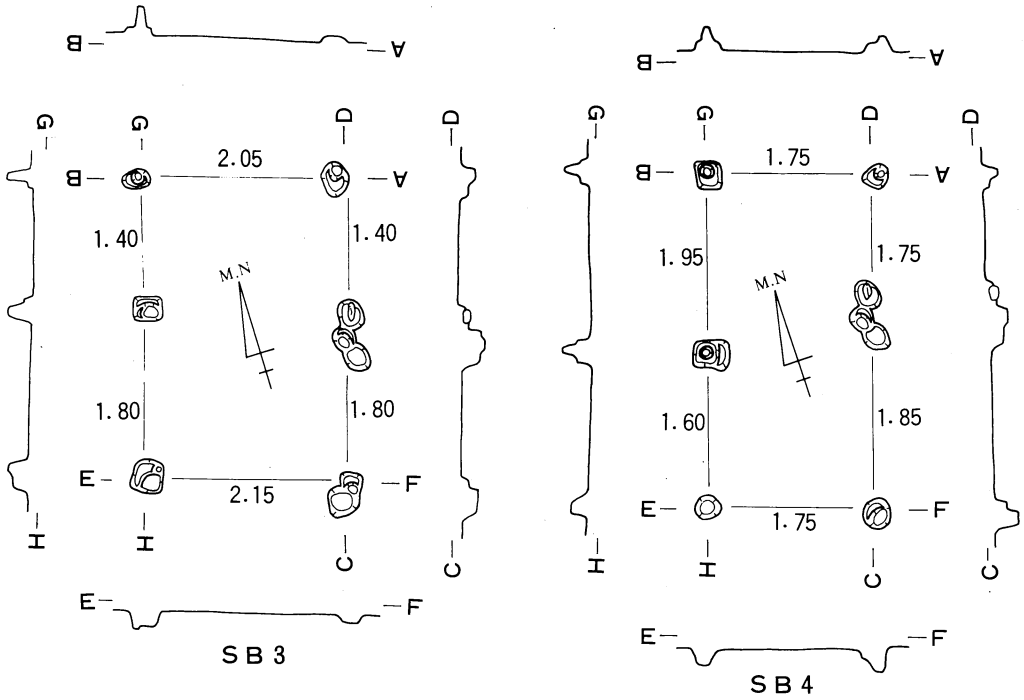


SB 2

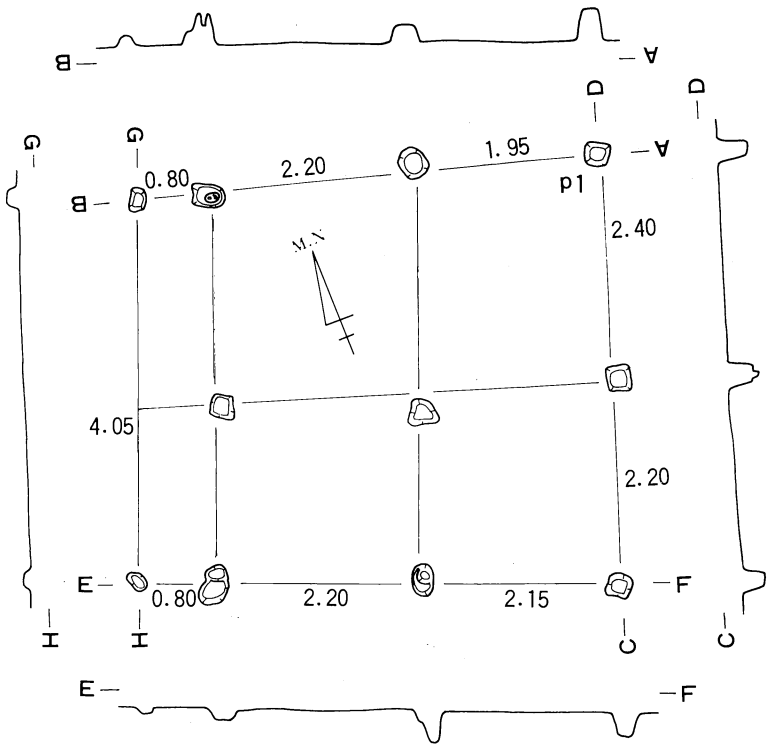
DL＝7.20m

0 4m

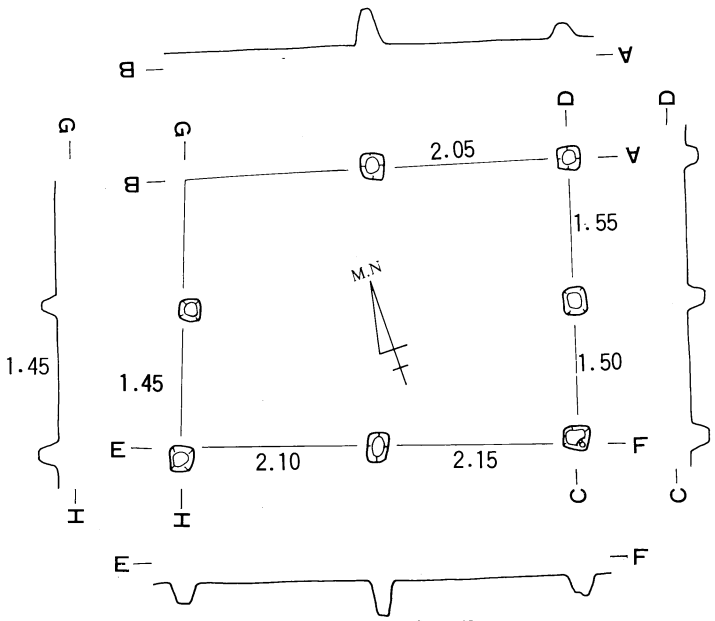
第158図　SB 1 ・ 2


SB 3
2.05
1.40
1.40
1.80
1.80
2.15
M.N
SB 4
1.75
1.95
1.75
1.60
1.85
1.75
M.N
SB 5
1.80
1.60
1.20
2.75
1.55
1.65
1.80
M.N
DL=7.10m
0
4m

第159図　SB 3～5



SB 6

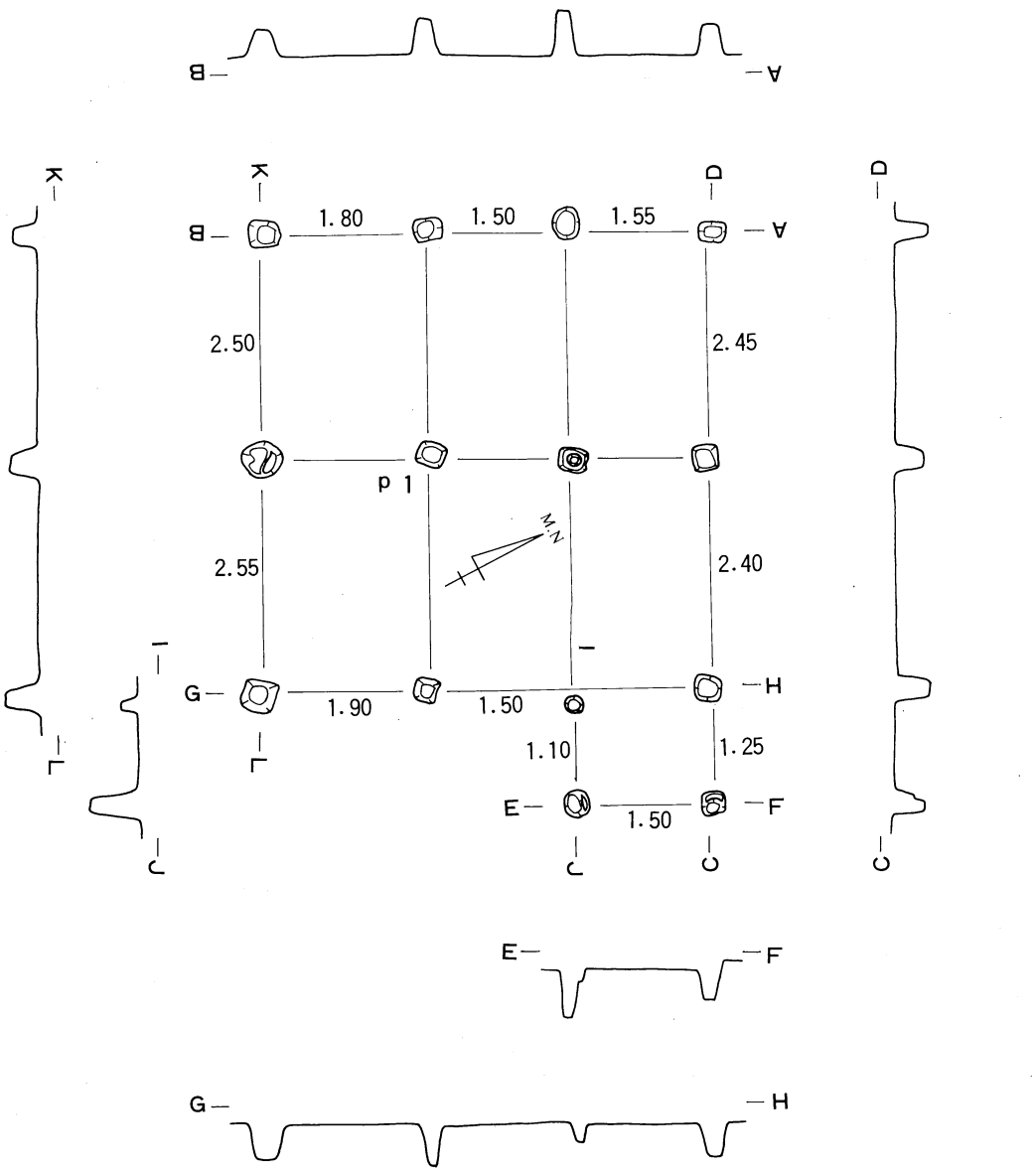


SB 7

DL=7.20m

0 4m

第160図　SB 6 ・ 7

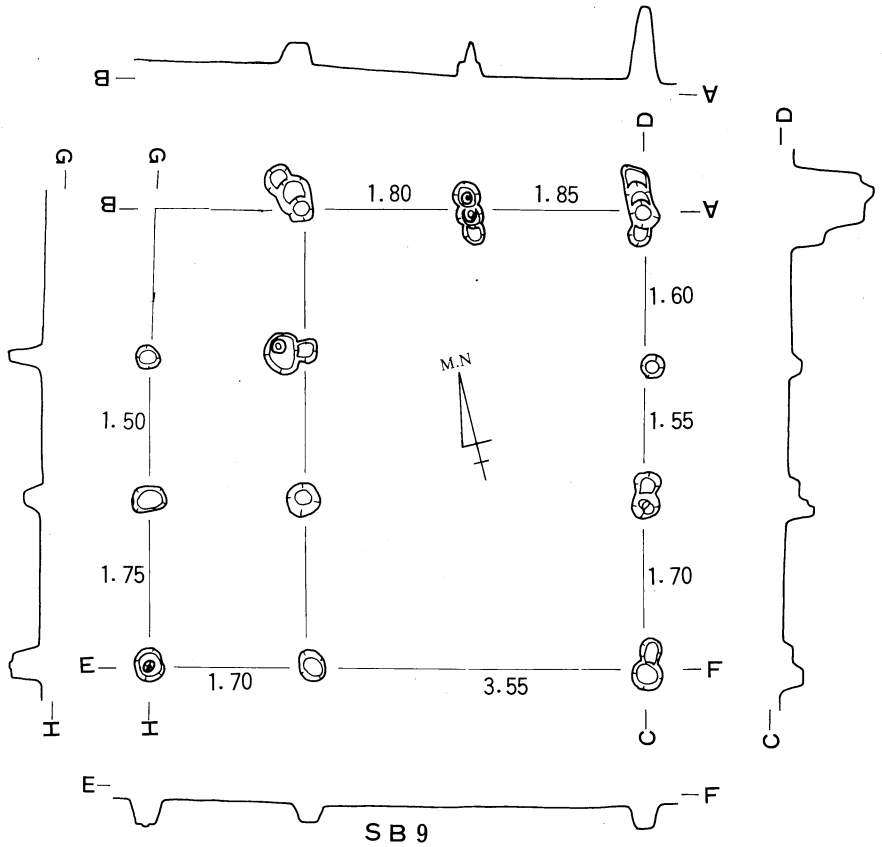


SB 8

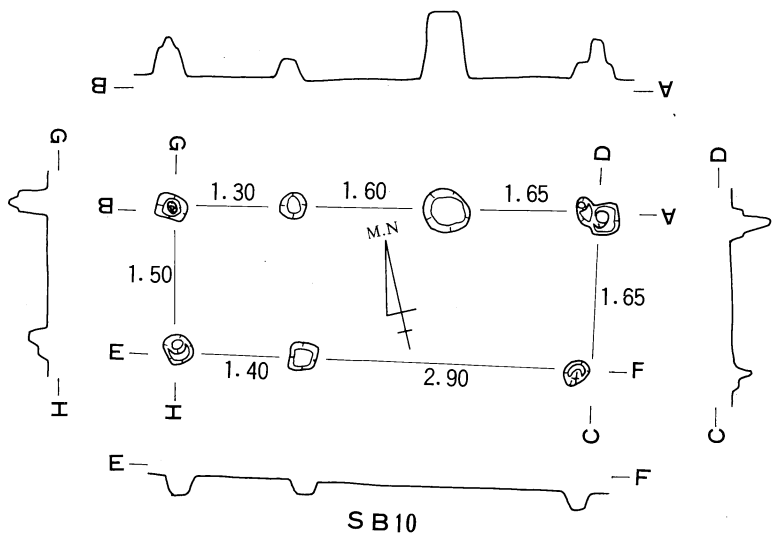
DL=7.20m

0 4m

第161図　SB 8



SB 9

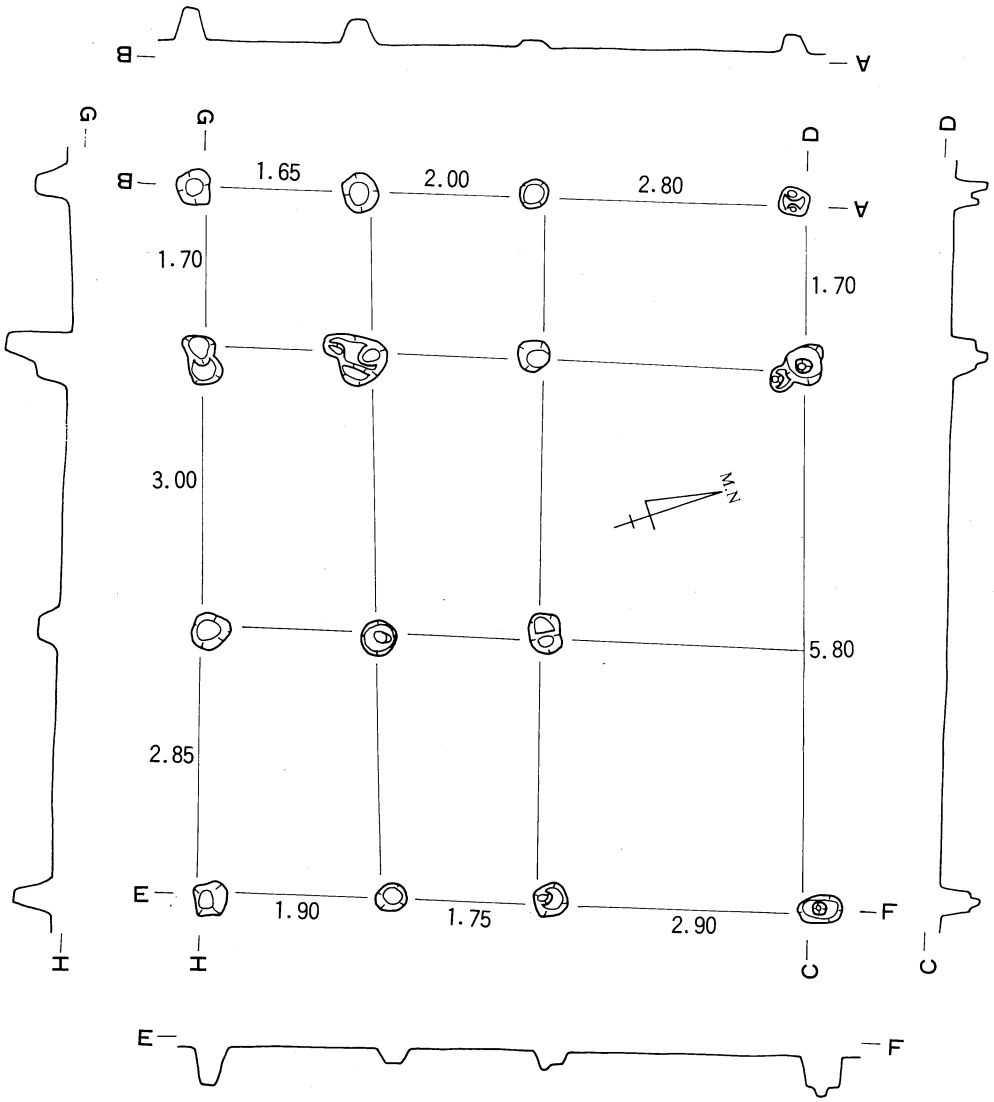


SB10

DL=7.10m

0 4m

第162図　SB 9 ・10

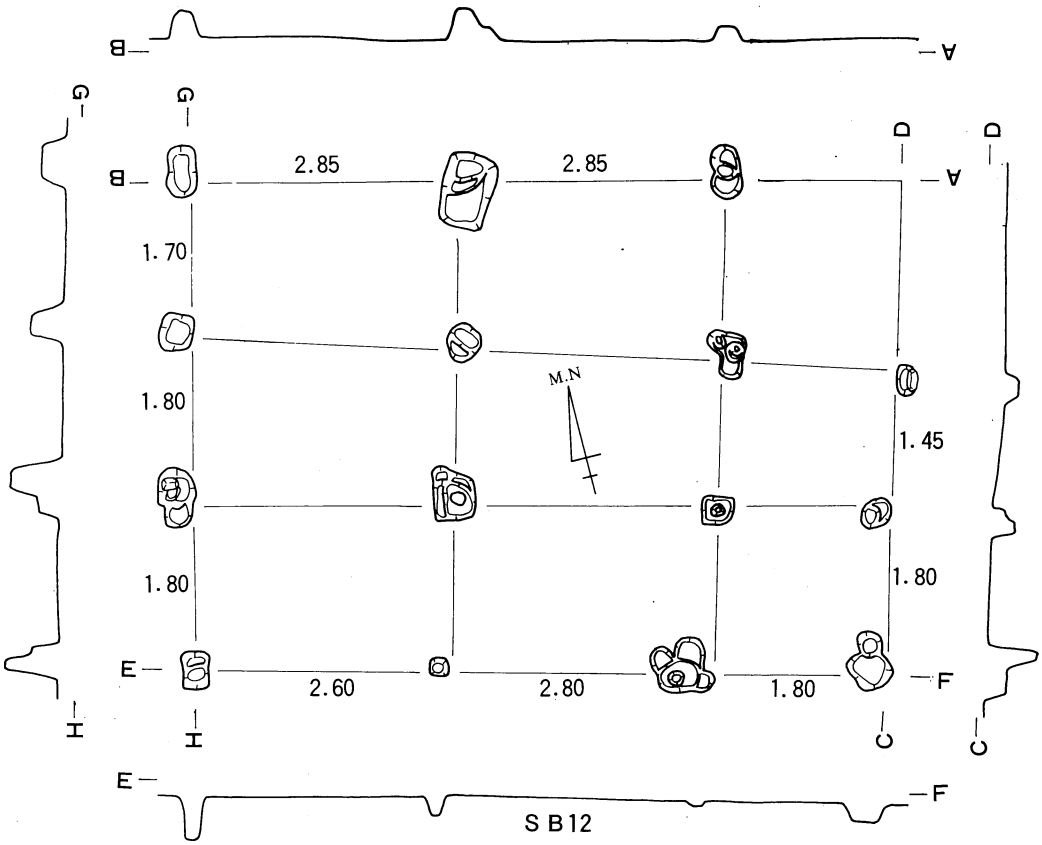


SB11

DL=7.10m

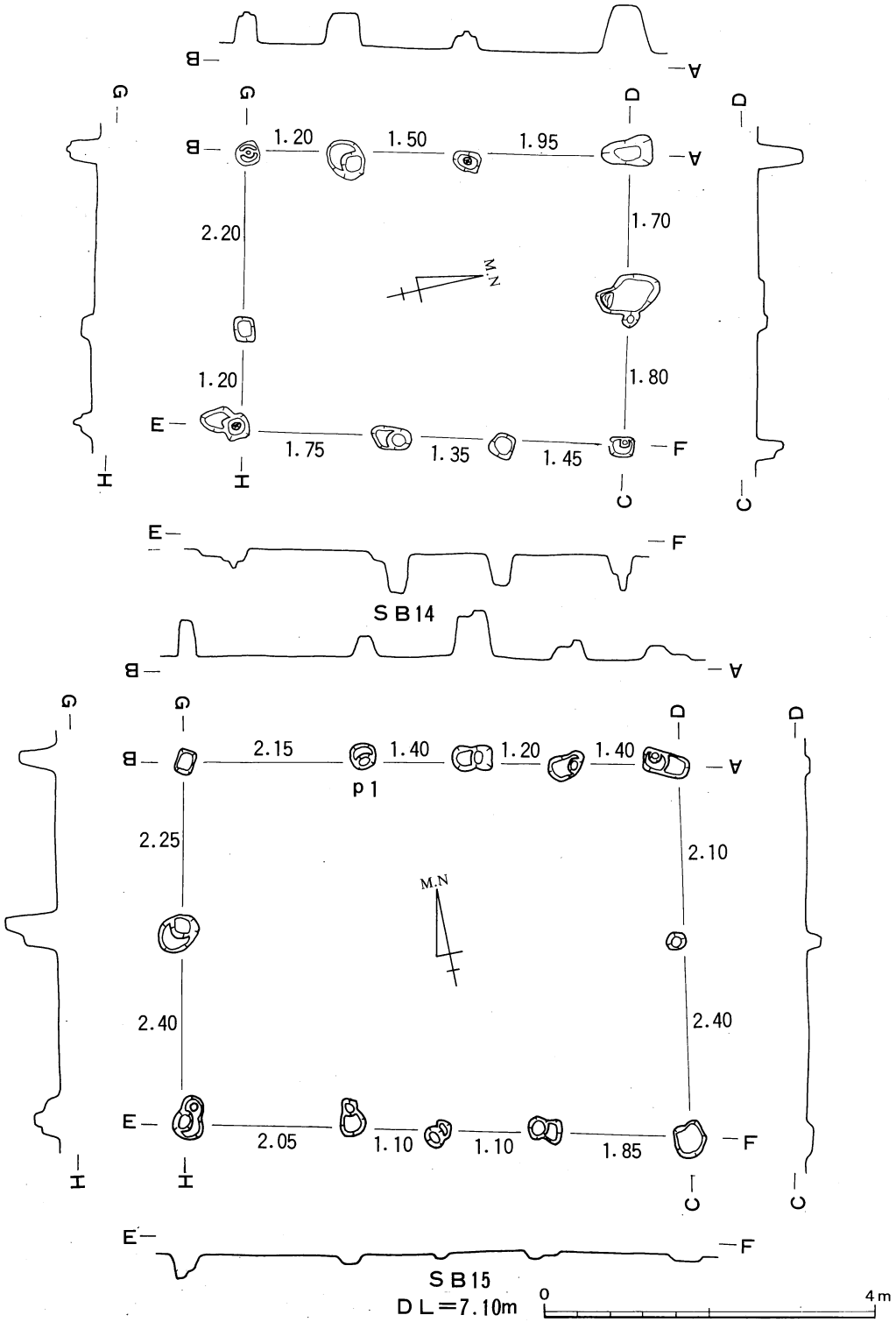
0 4m

第163図　SB11

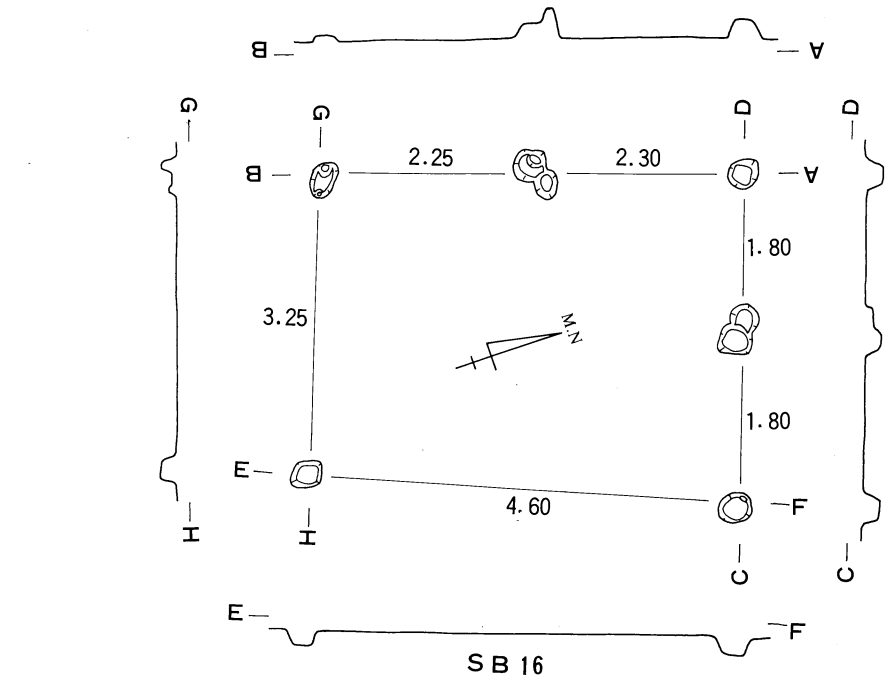


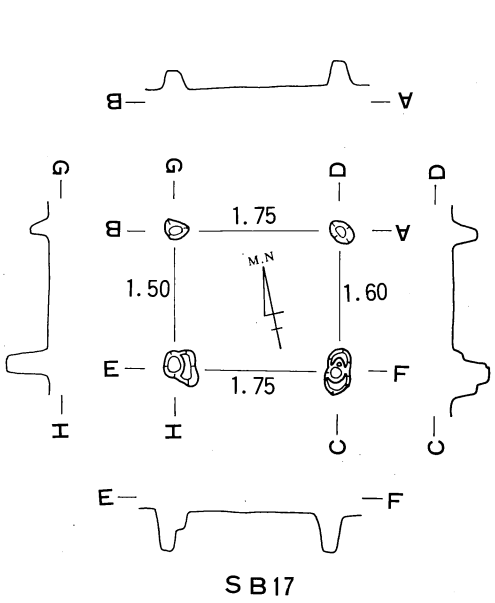
DL=7.10m 0 4m

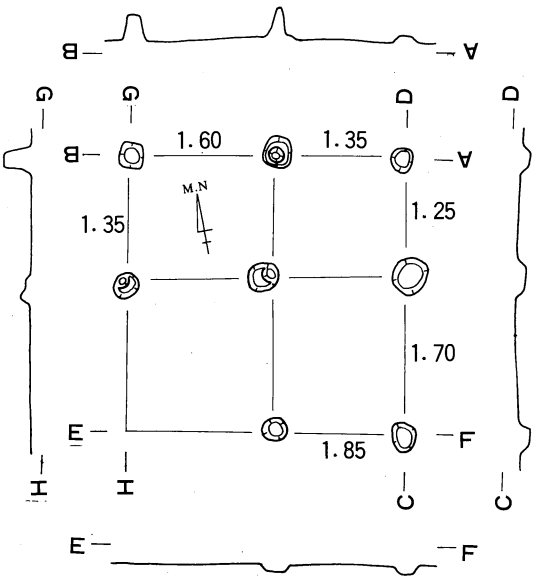
第164図　SB12・13



第165図　SB14・15



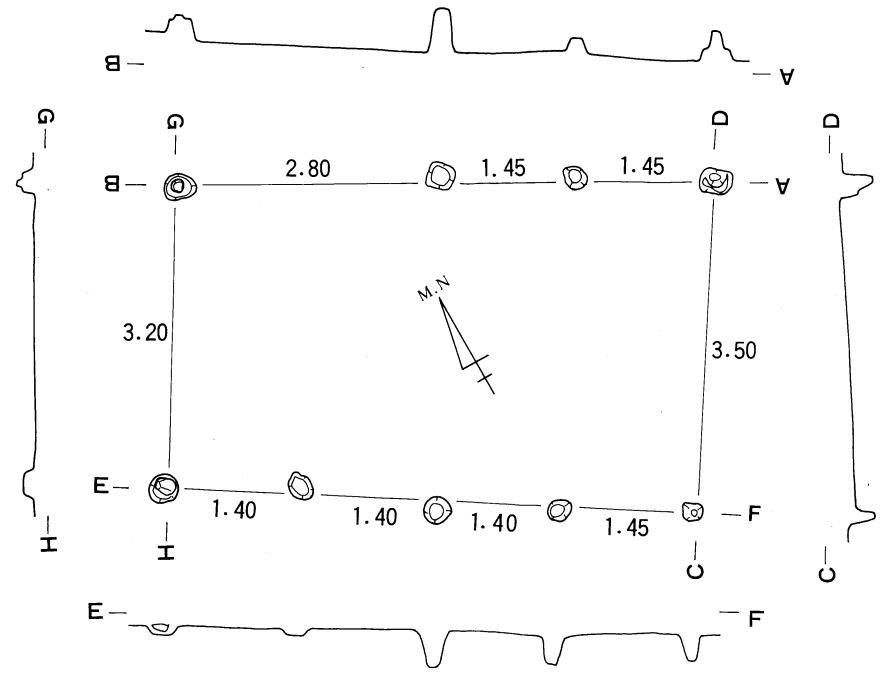




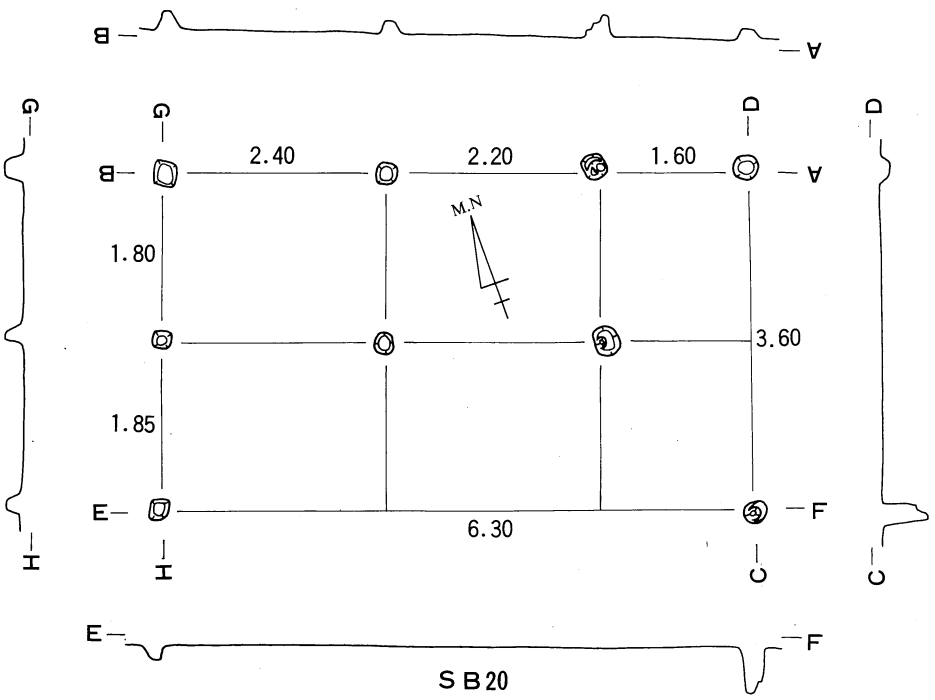
DL=7.10m

0 4m

第166図　SB16～18



SB19

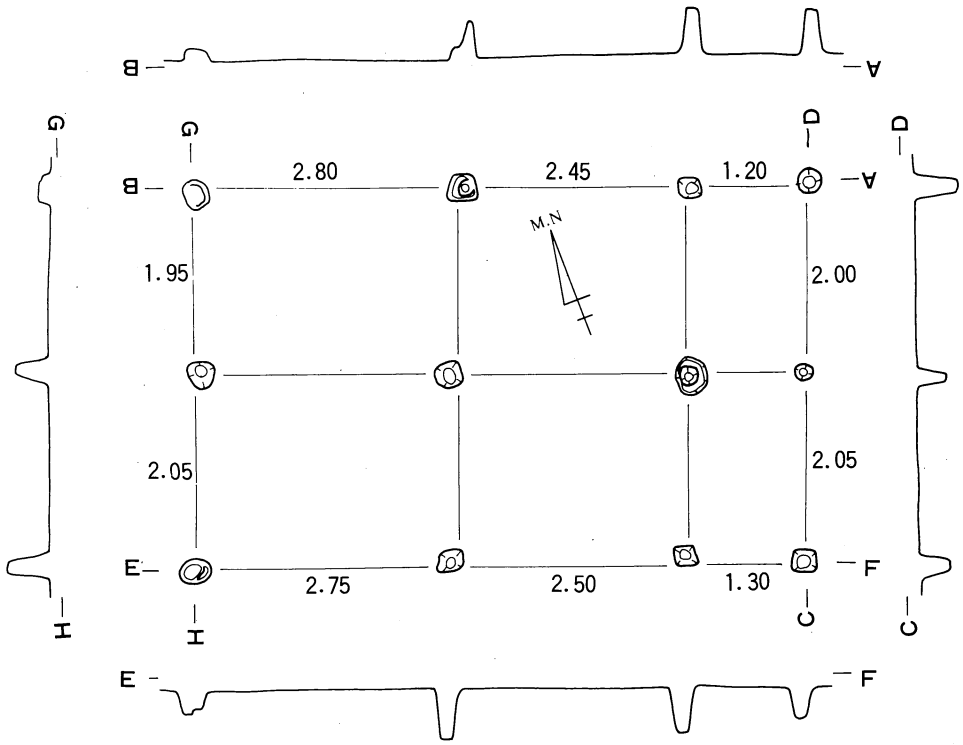


SB20

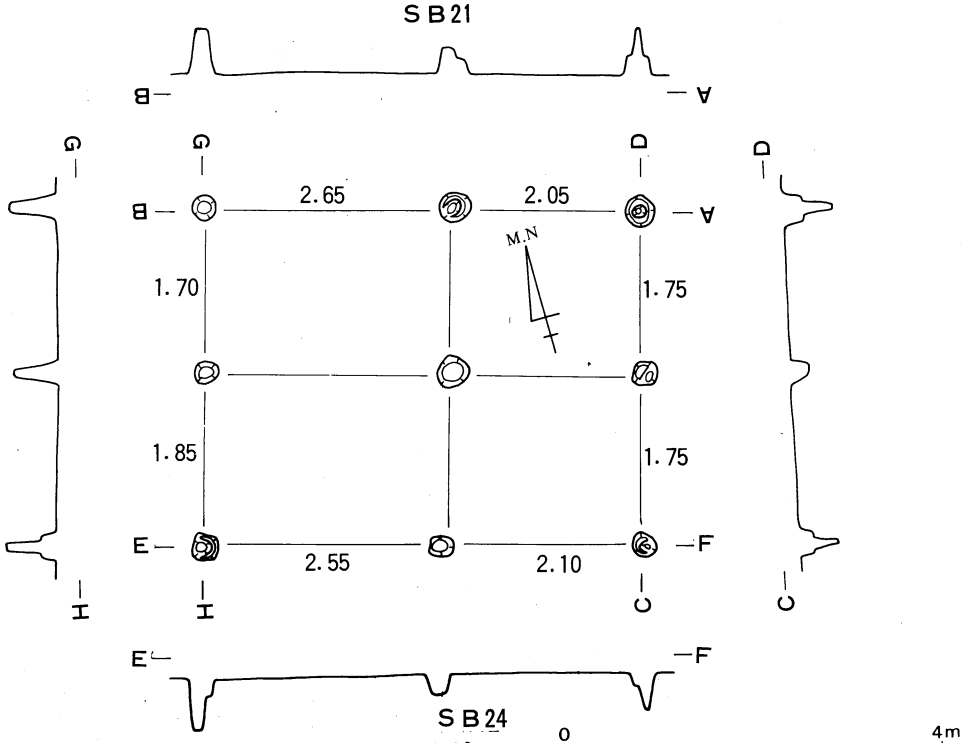
DL=7.10m

0 4m

第167図　SB19・20



SB21

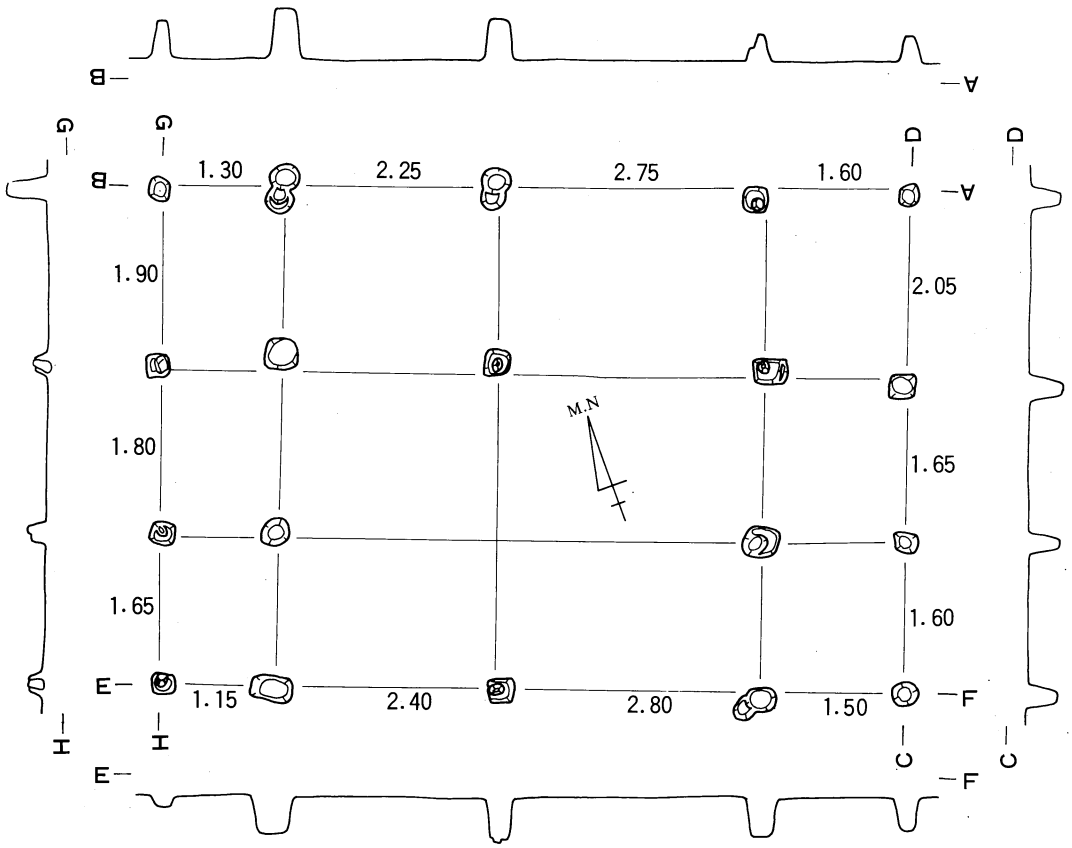


SB24

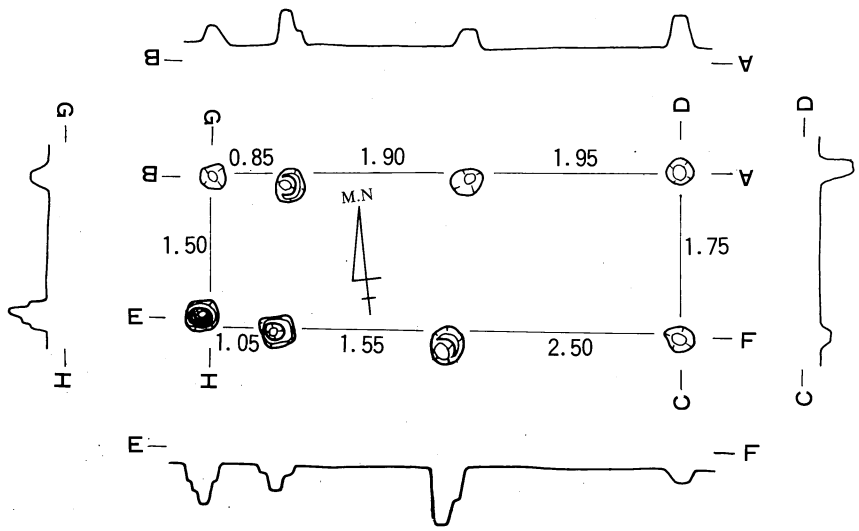
DL=7.10m

0 4m

第168図　SB21・24



SB22

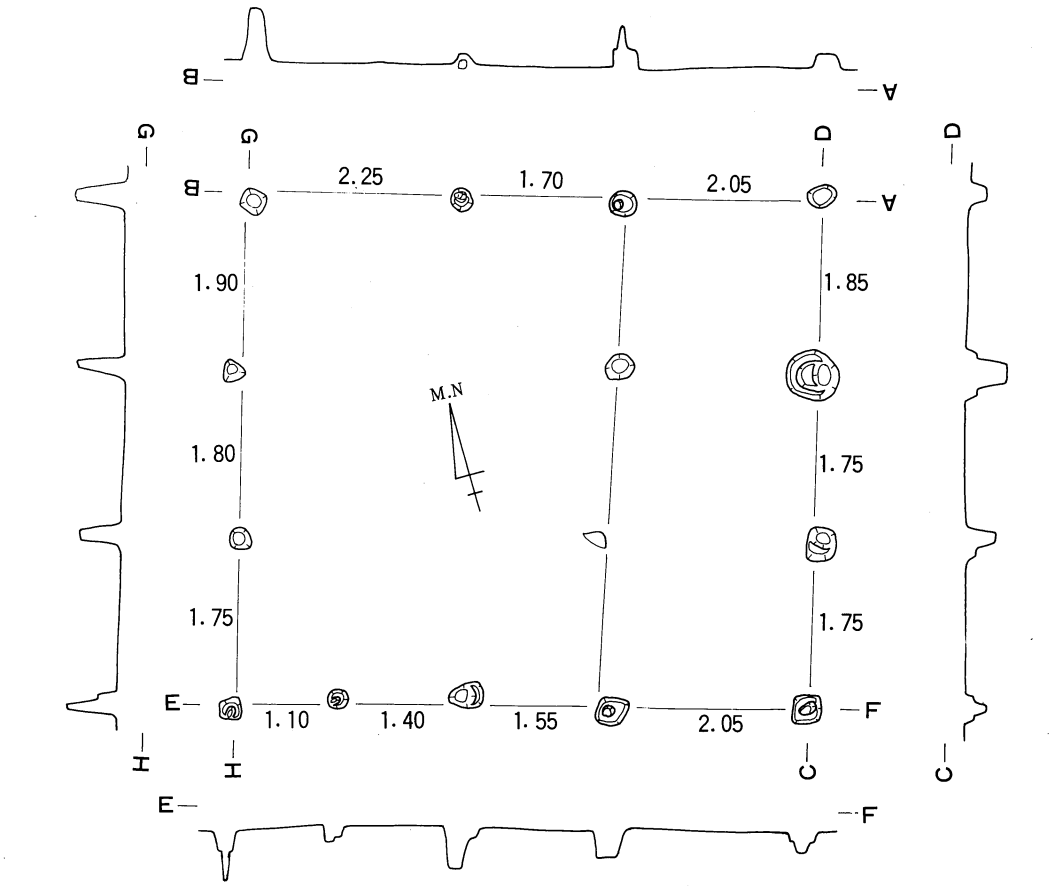


SB25

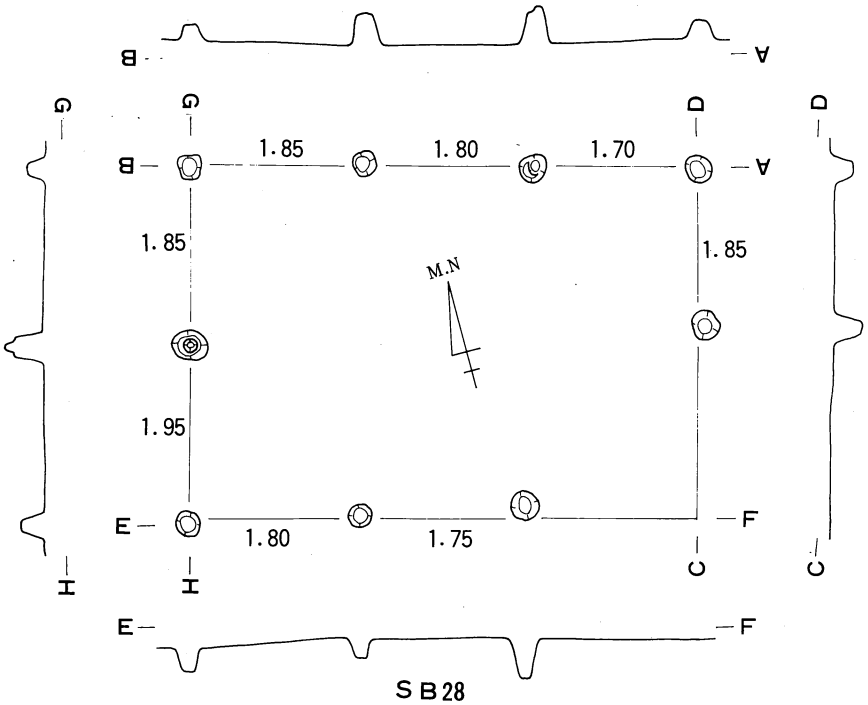
DL=7.10m

0 4m

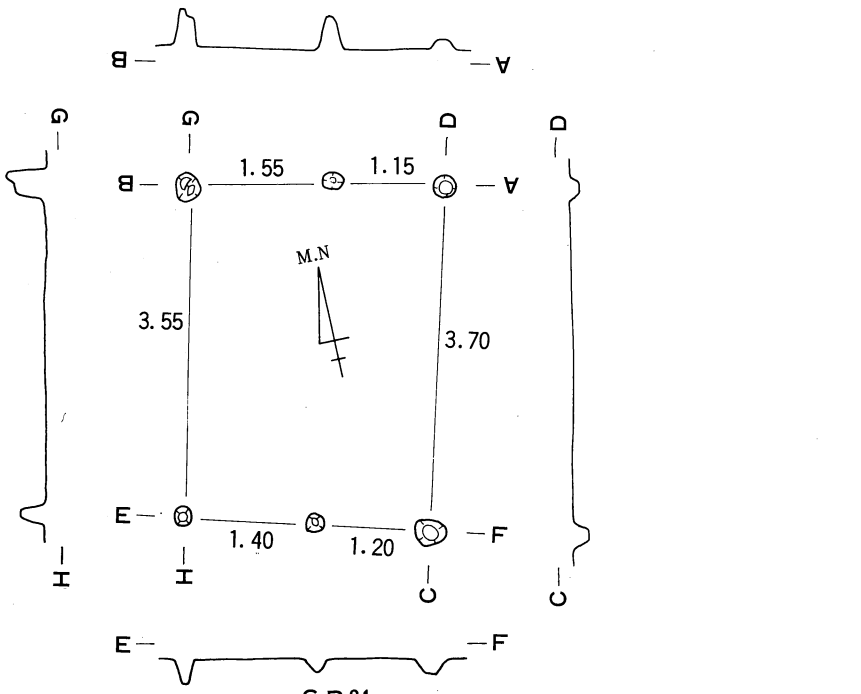
第169図　SB22・25



第170図　SB23・26・27



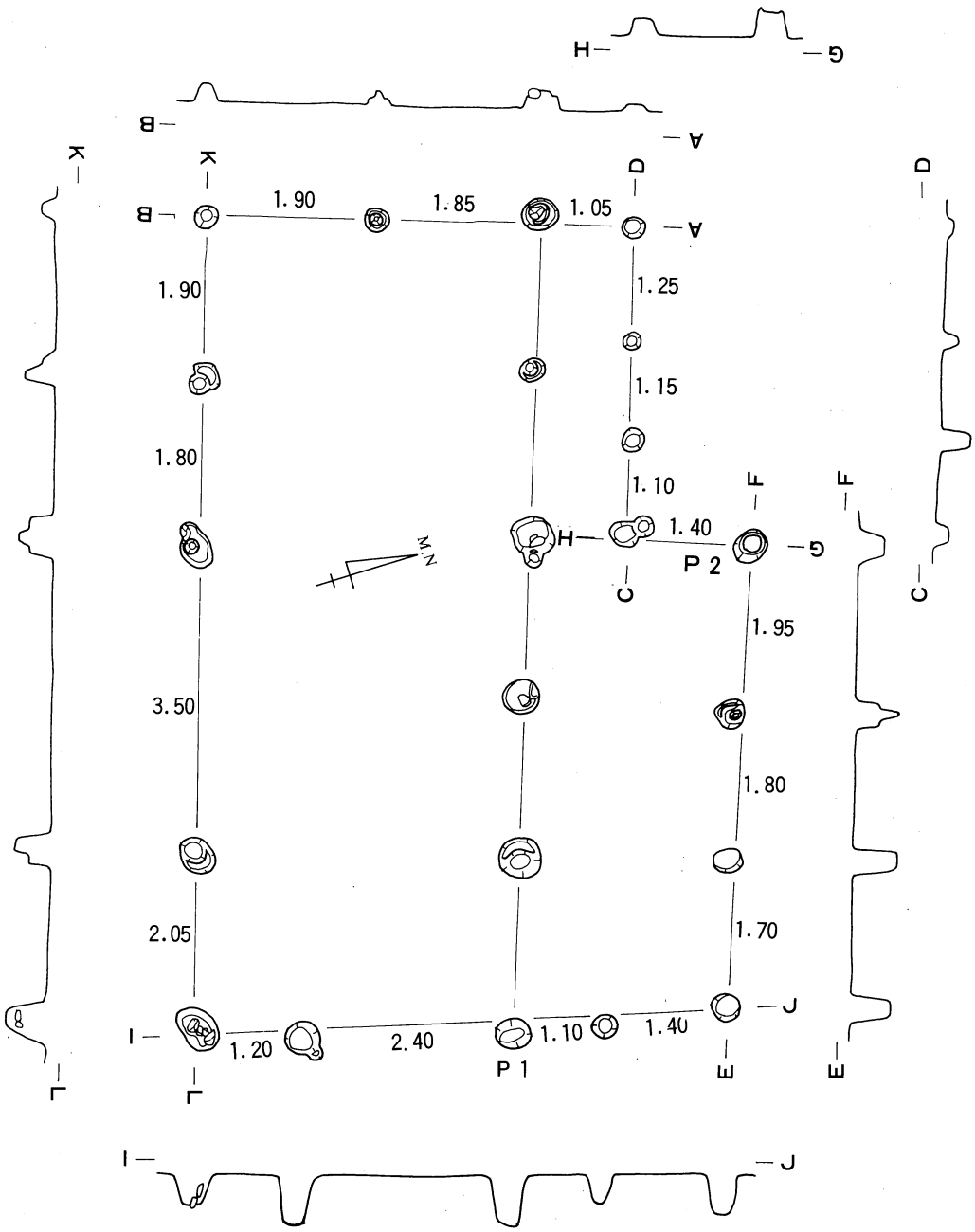
SB28



SB31

DL=7.10m

第171図　SB28・31

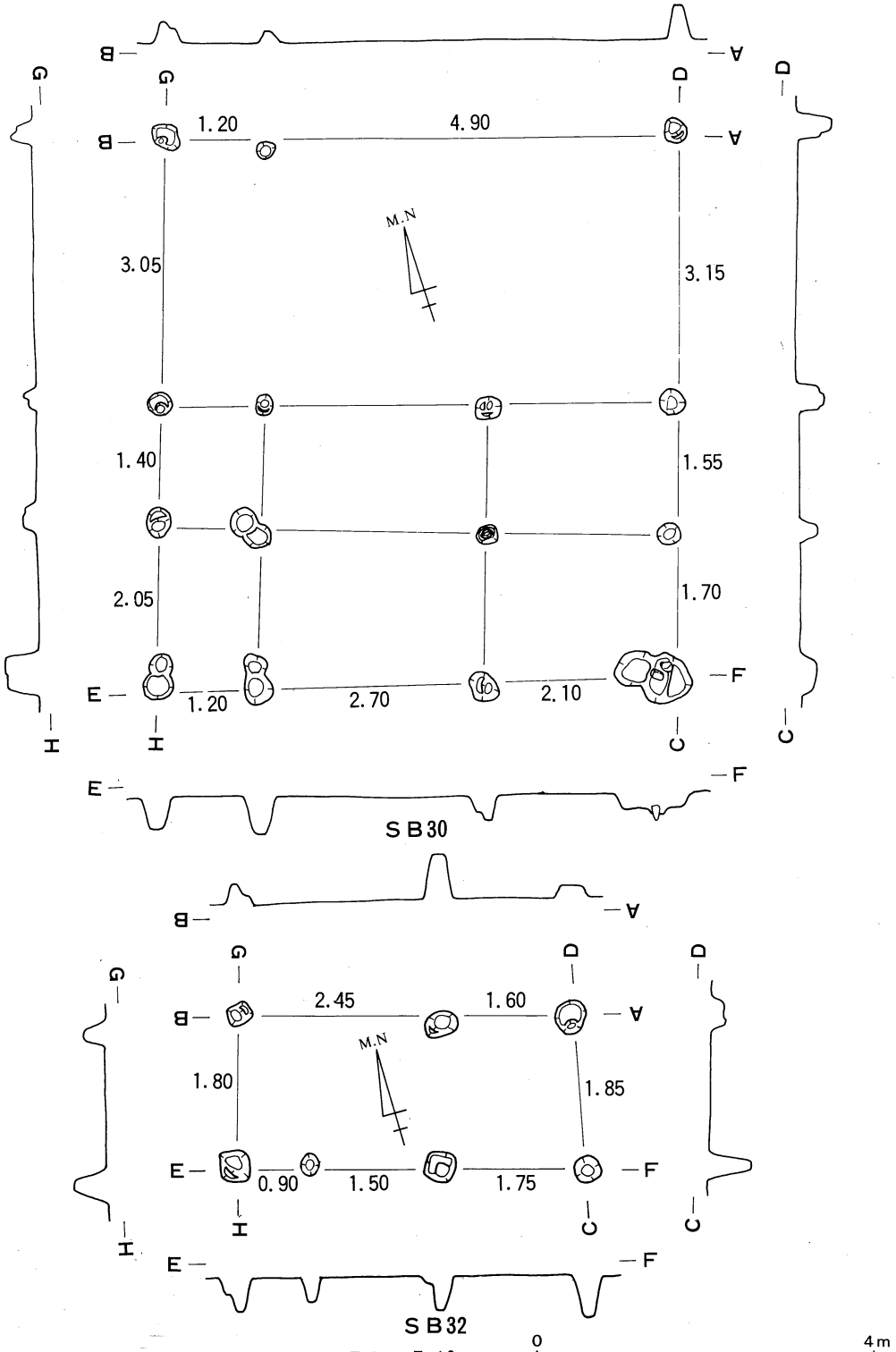


SB29

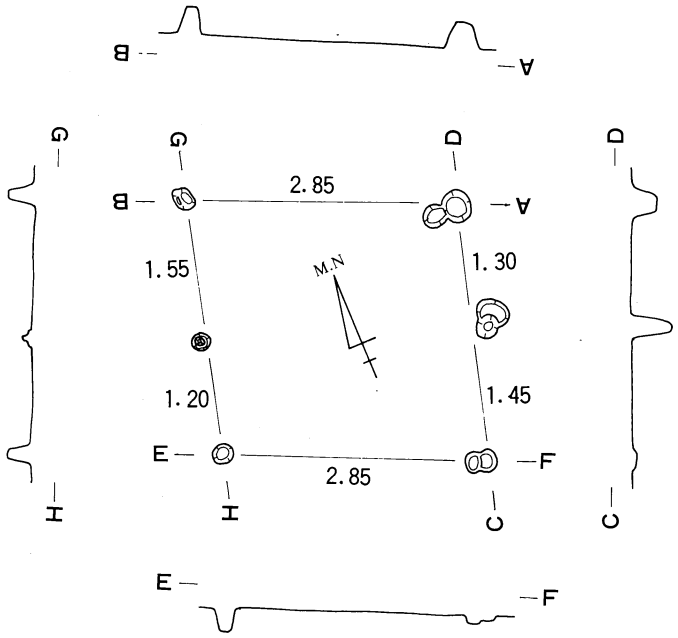
DL=7.10m

0 4m

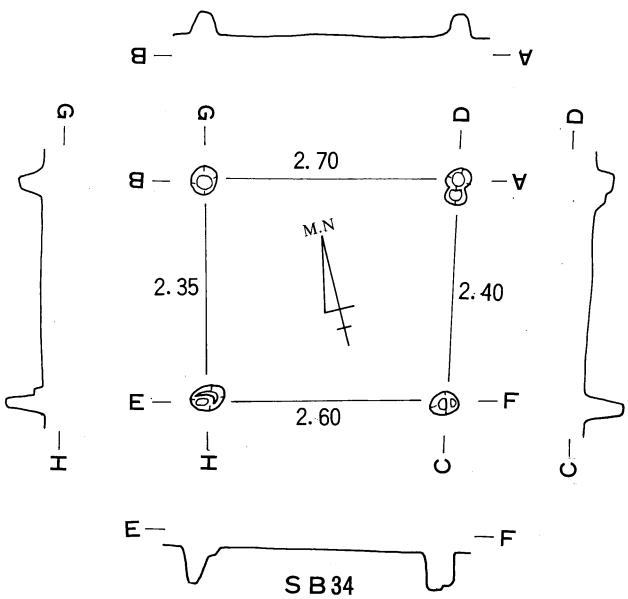
第172図　SB29



第173図　SB30・32



SB33

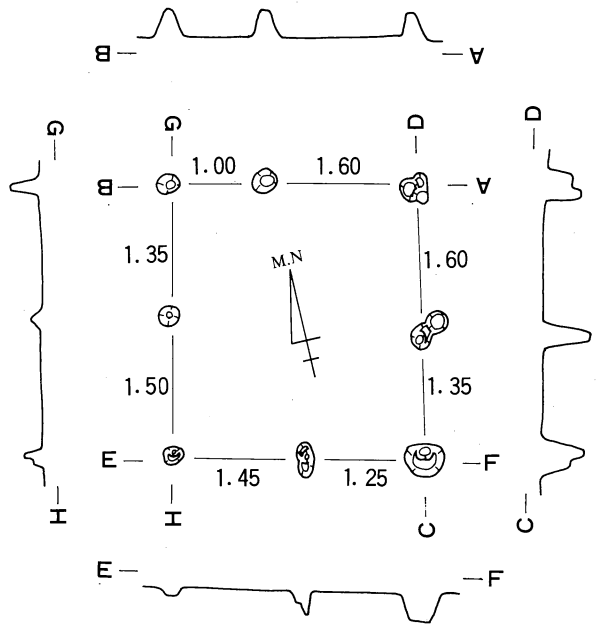


SB34

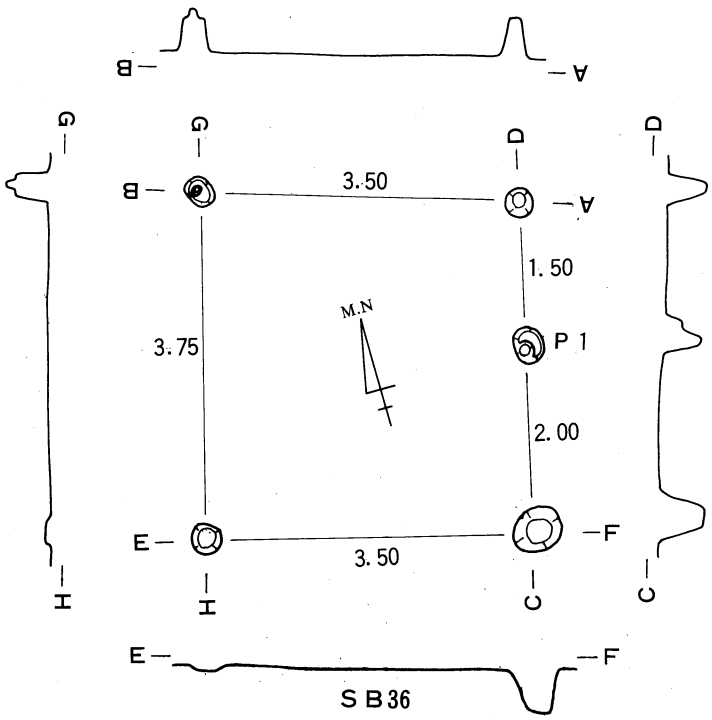
DL=7.10m

0 4m

第174図　SB33・34



SB35

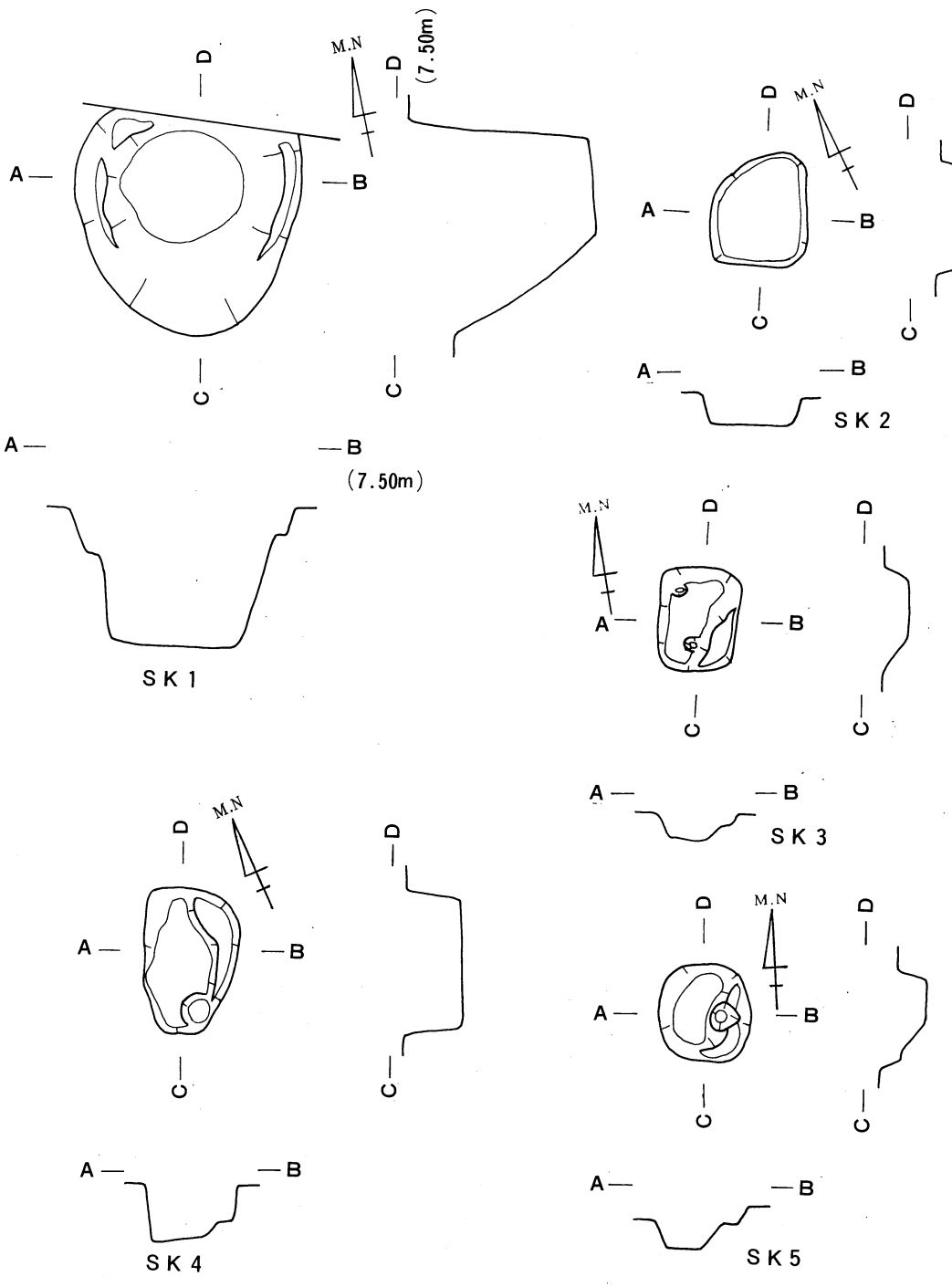


SB36

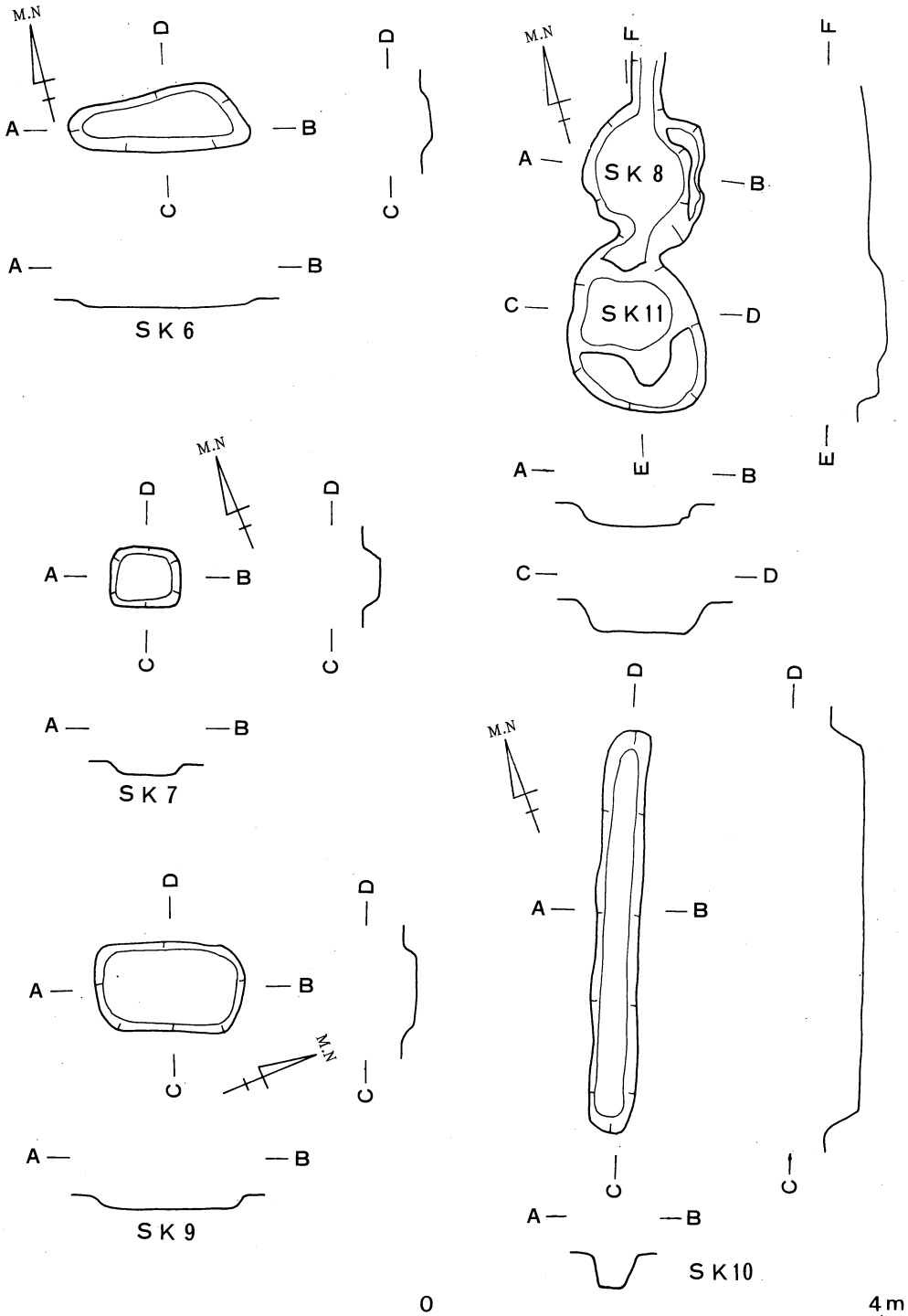
DL=7.10m

0 4m

第175図　SB35・36

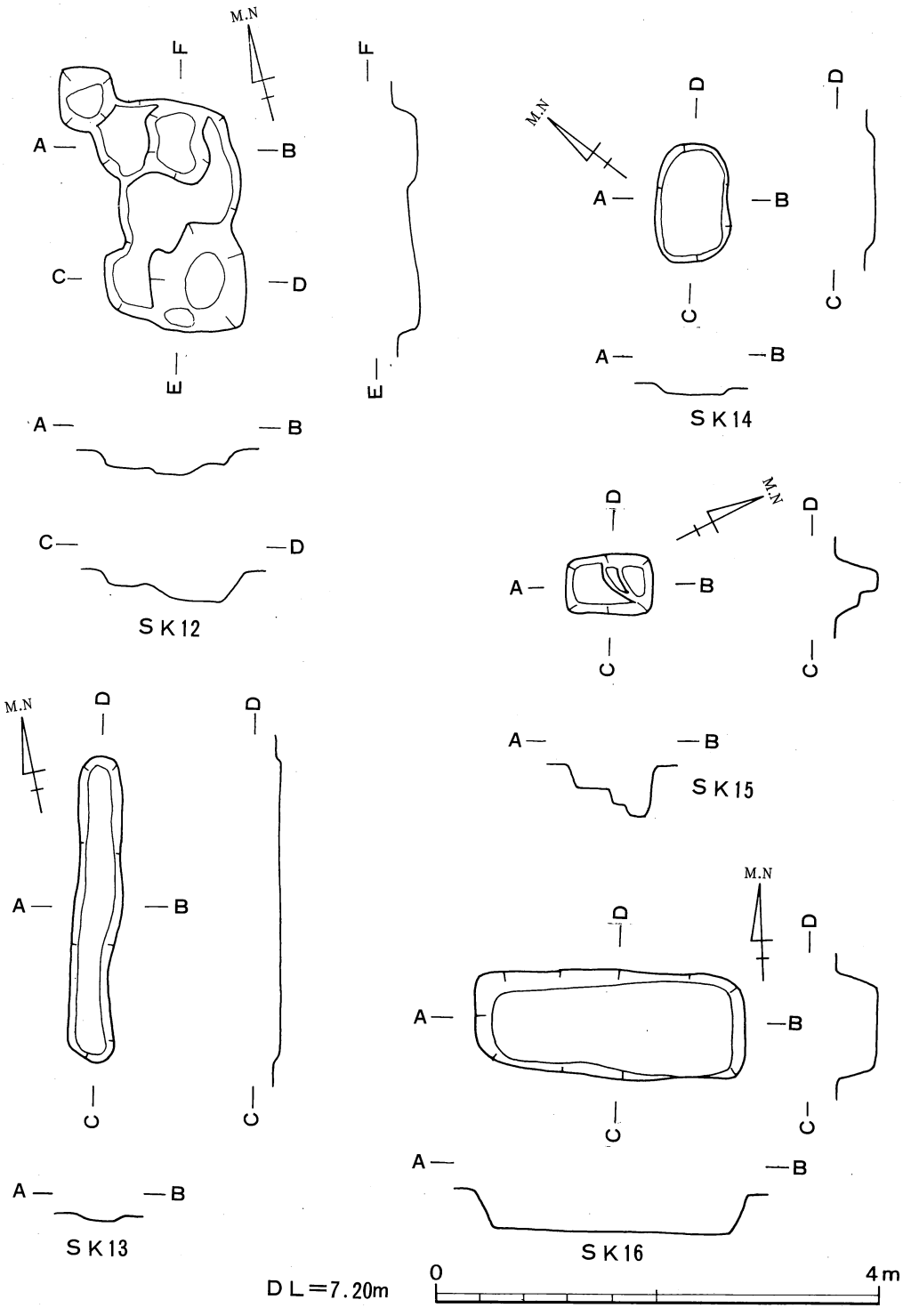


第176図　SK 1～5

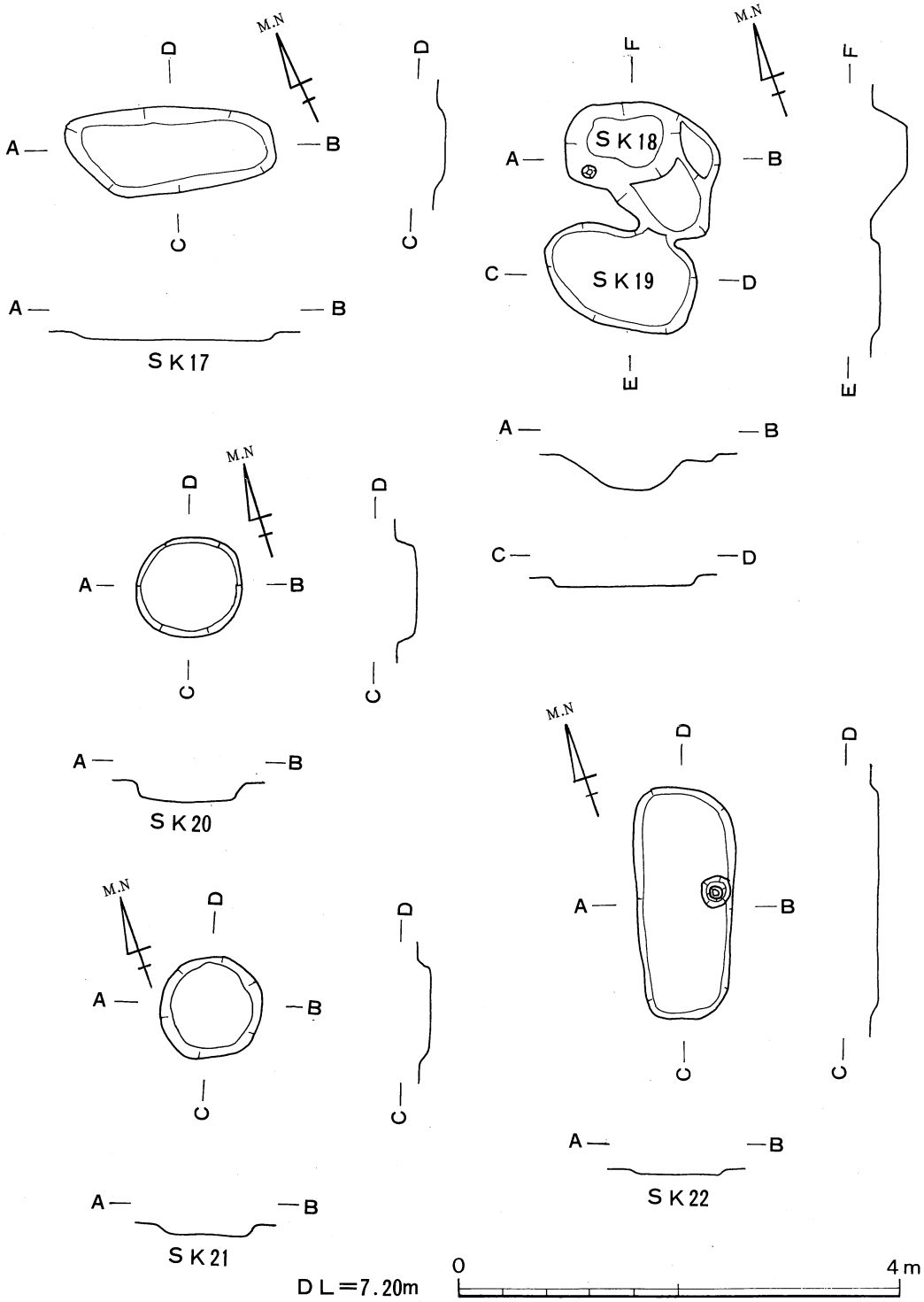


DL=7.30m

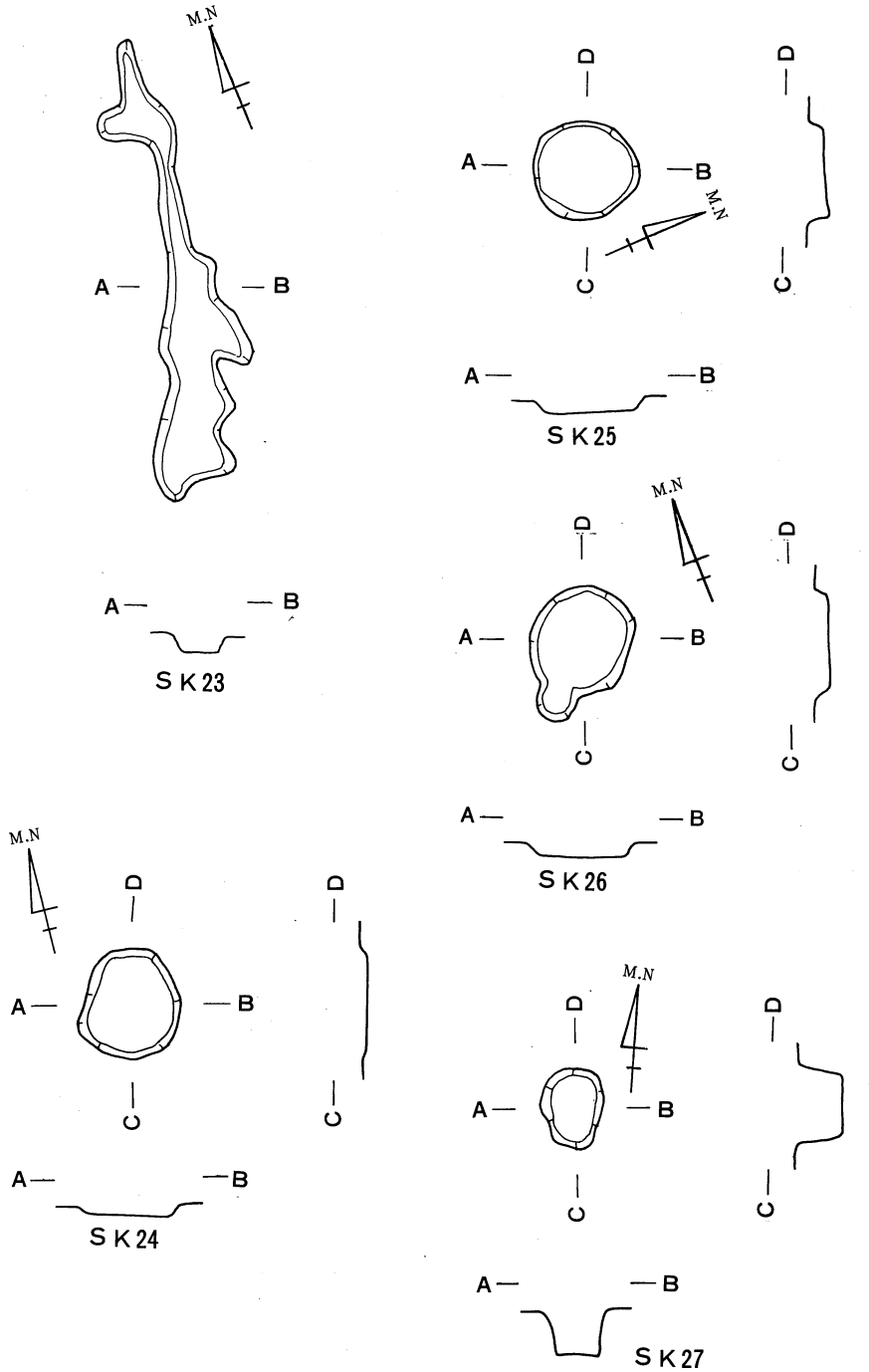
第177図　SK 6～11



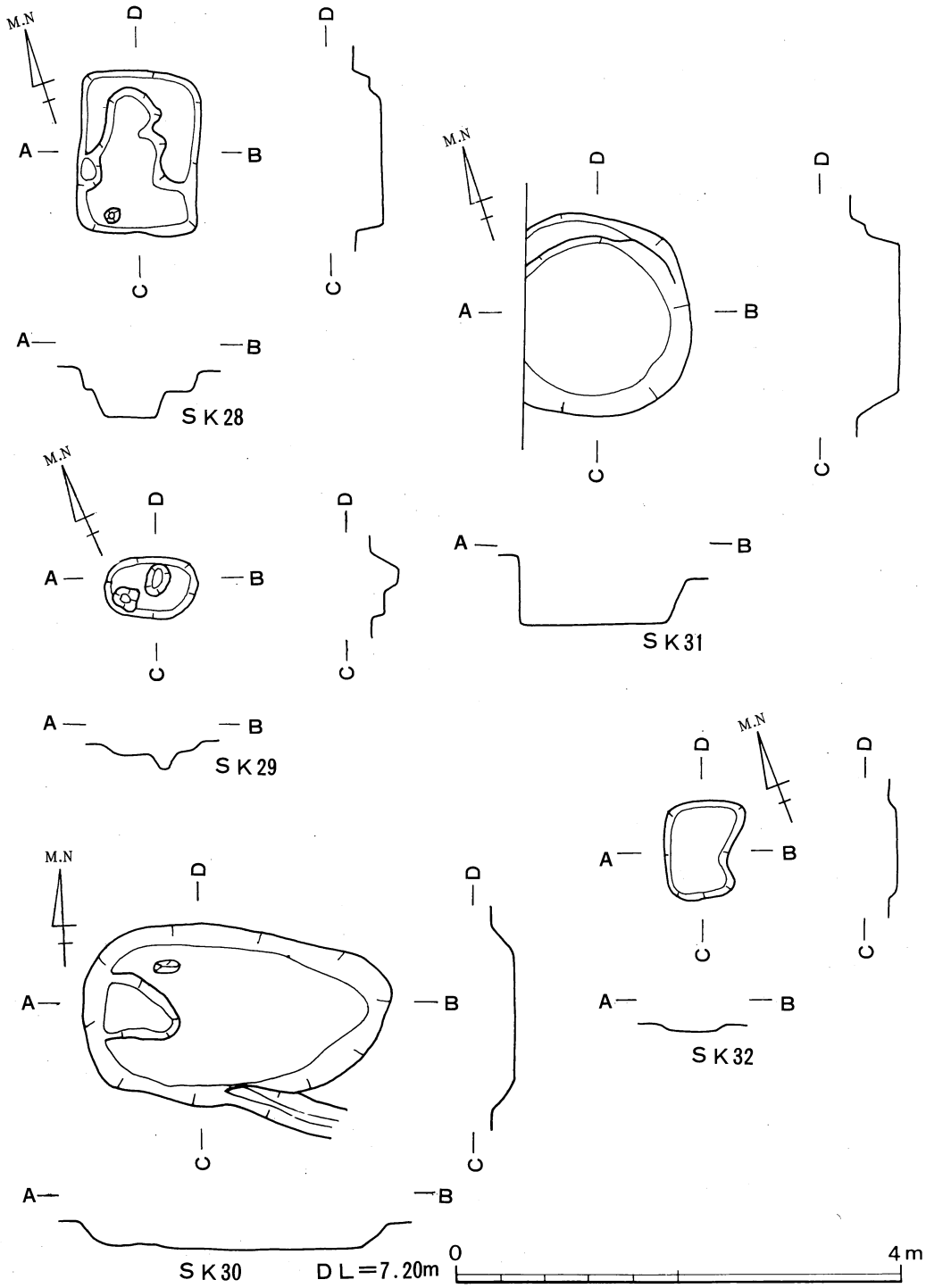
第178図　SK12～16



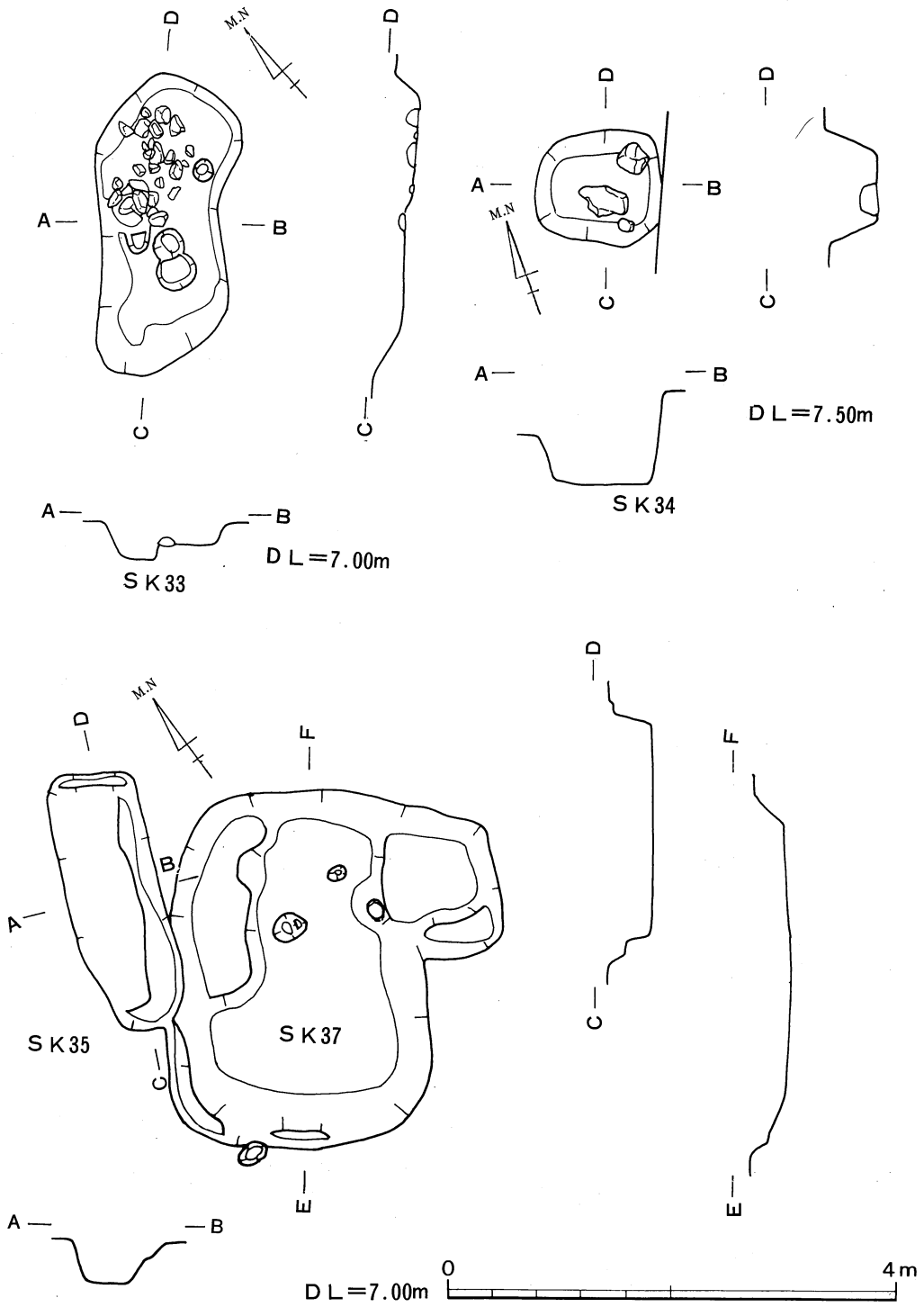
第179図　SK17～22



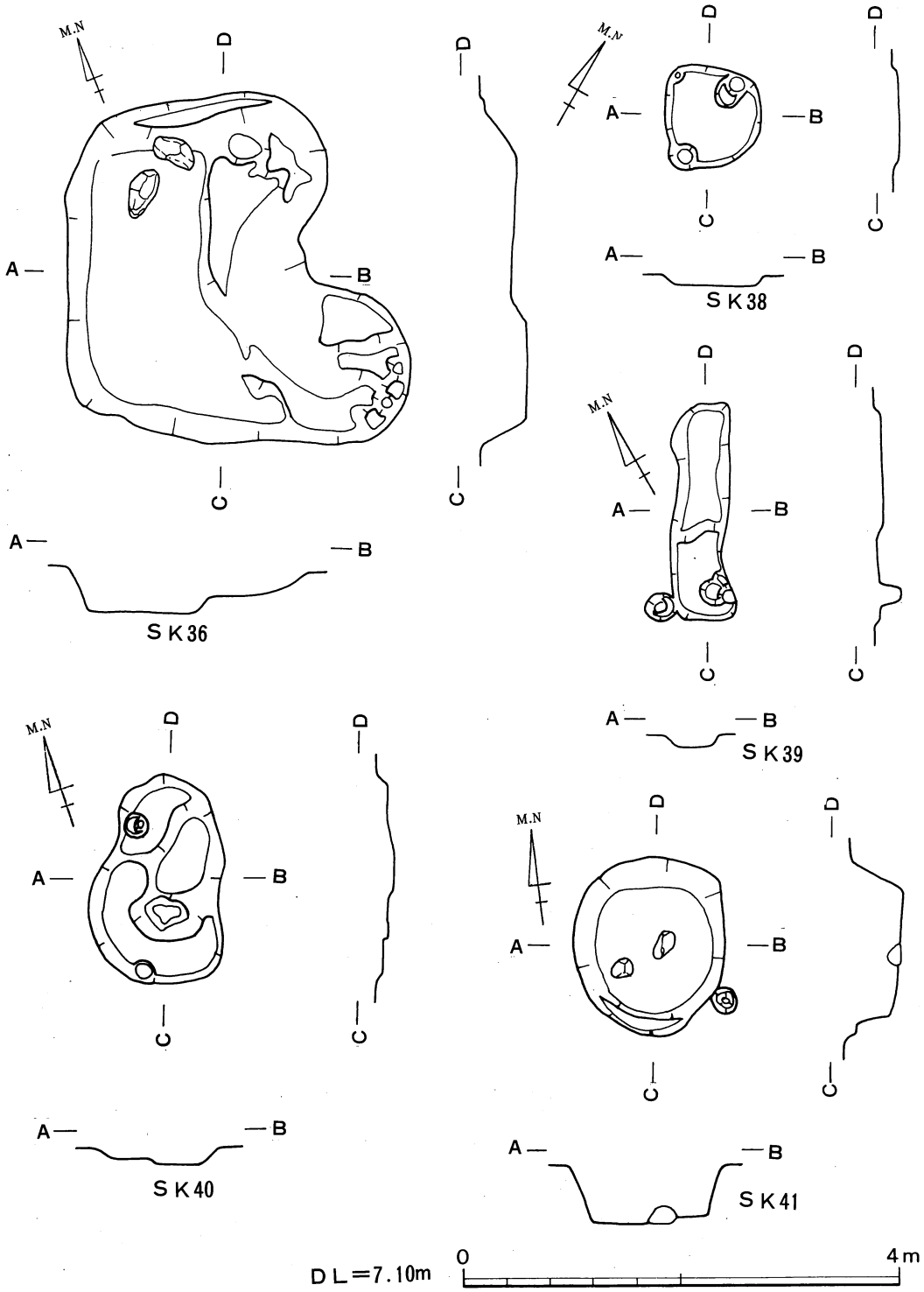
第180図　SK23～27



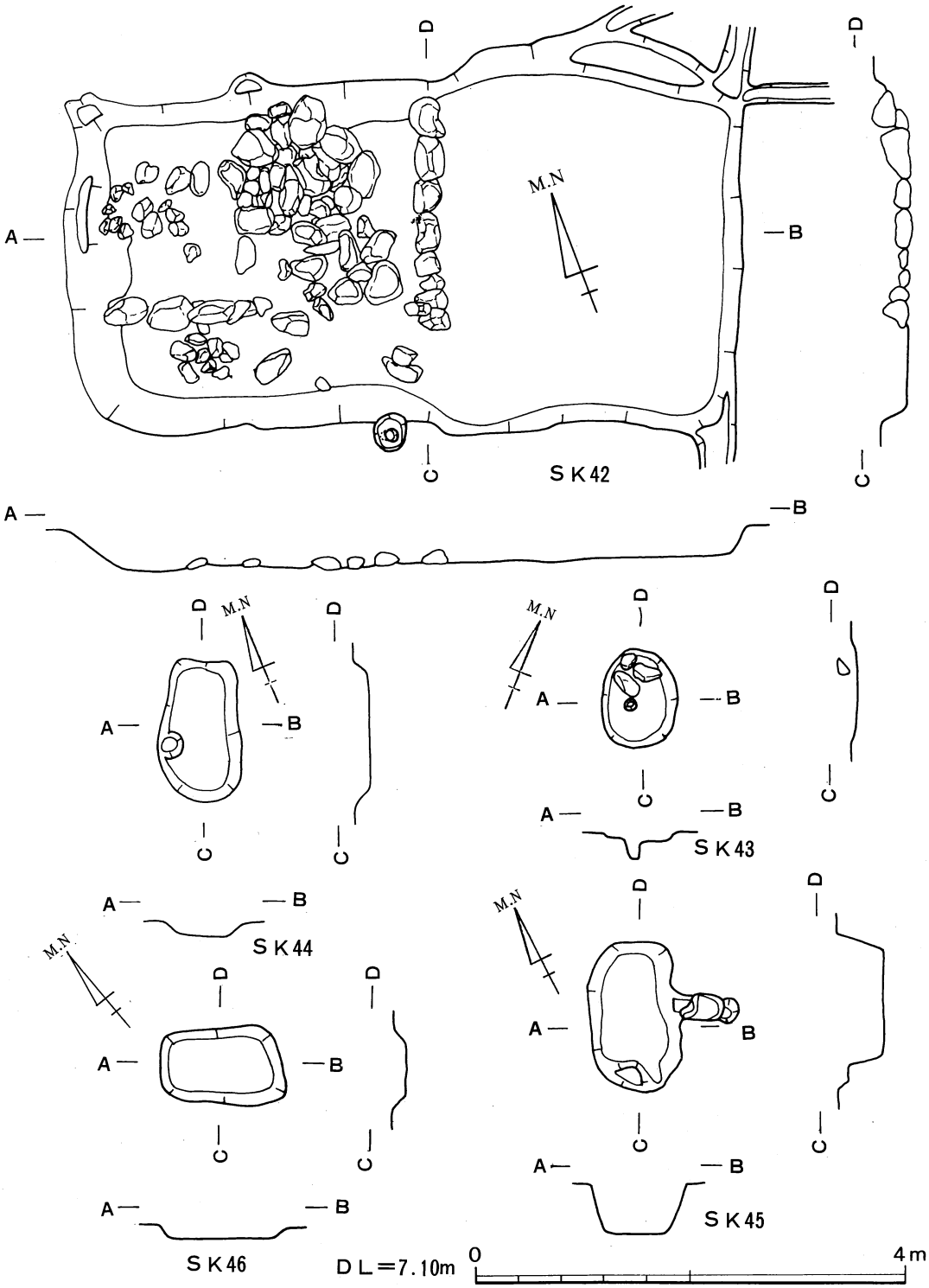
第181図　SK28～32



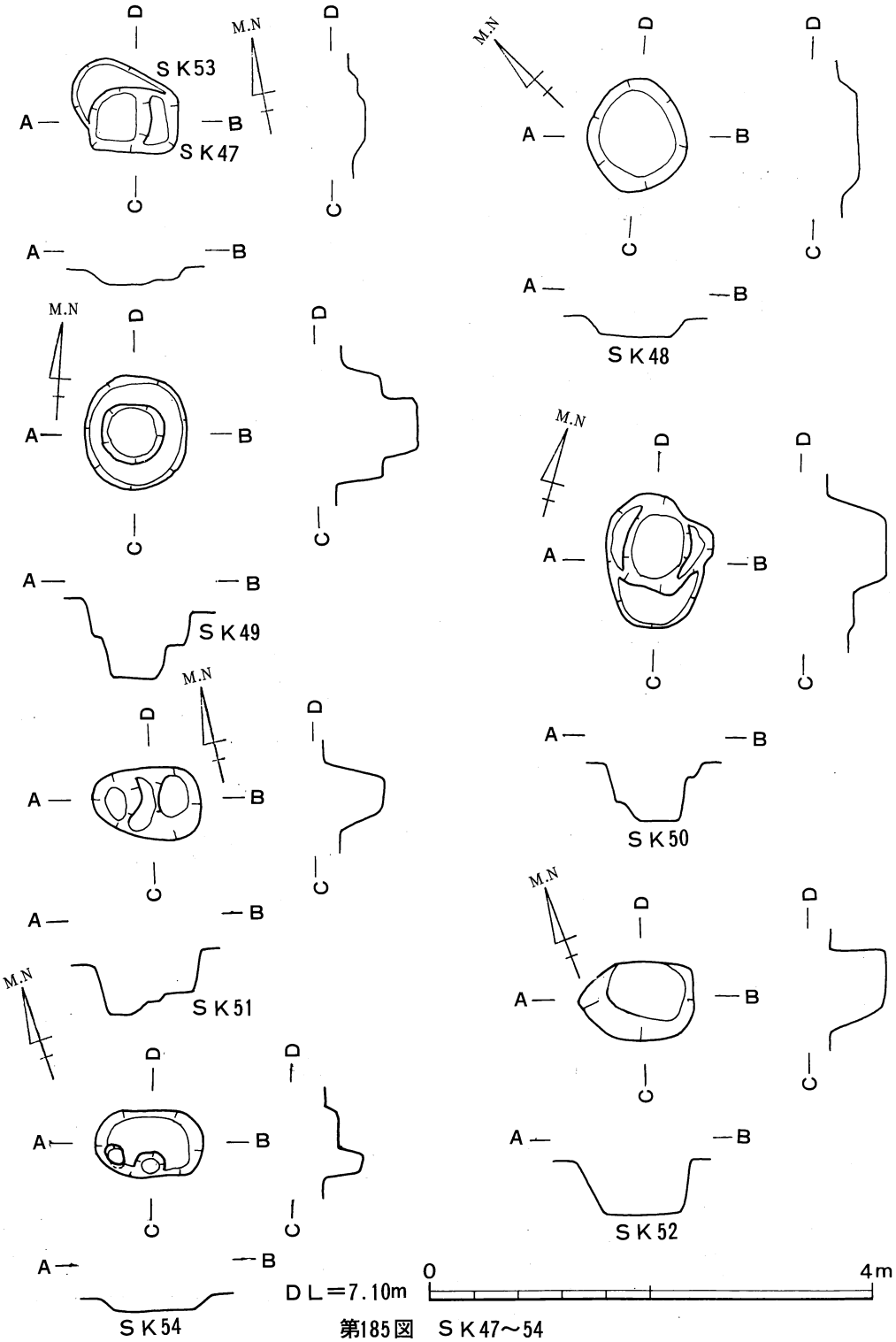
第182図　SK33～35・37



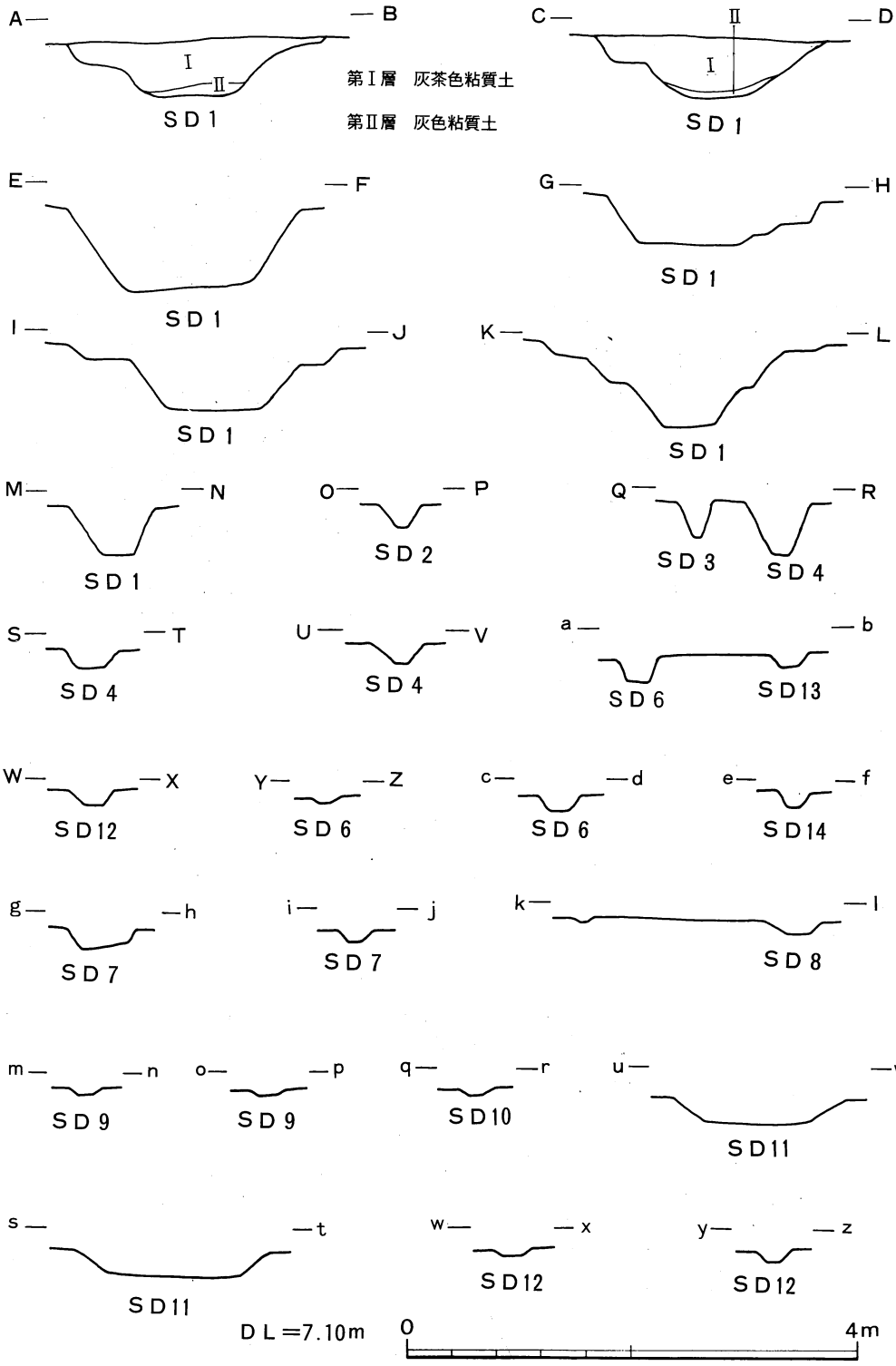
第183図　SK36・38～41



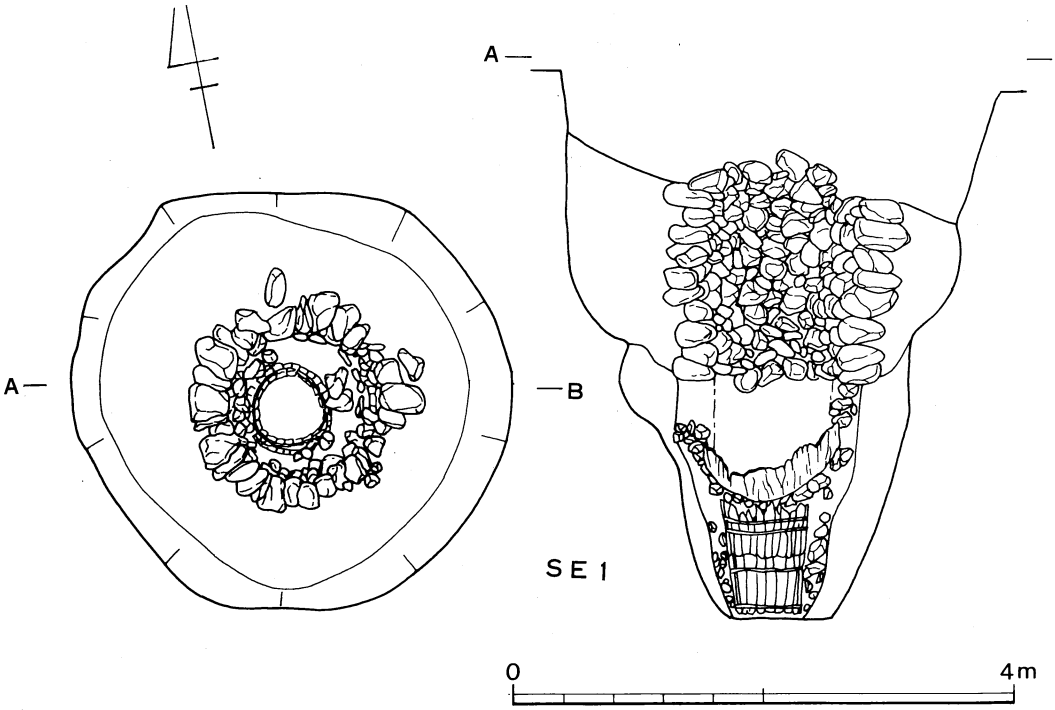
第184図　SK42～46

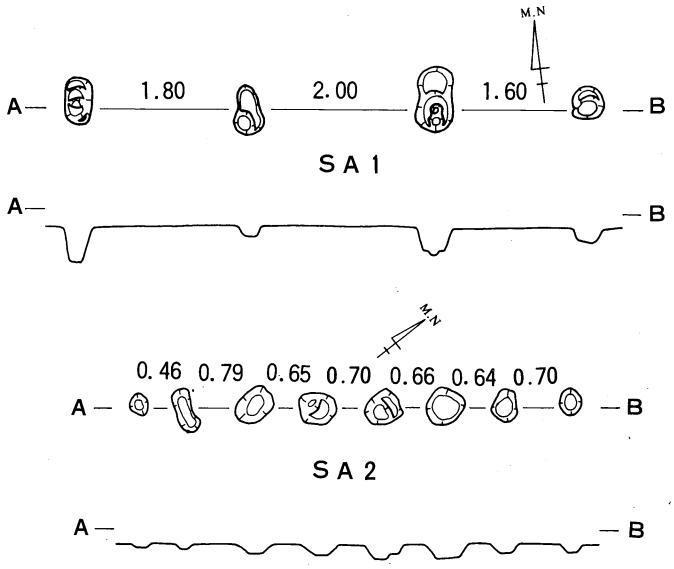


第185図　SK47～54


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
U
V
a
b
W
X
Y
Z
c
d
e
f
g
h
i
j
k
l
m
n
o
p
q
r
u
v
s
t
w
x
y
z
Ⅰ
Ⅱ
SD 1
SD 2
SD 3
SD 4
SD 6
SD 7
SD 8
SD 9
SD10
SD11
SD12
SD13
SD14
第Ⅰ層　灰茶色粘質土
第Ⅱ層　灰色粘質土
DL=7.10m
0
4m

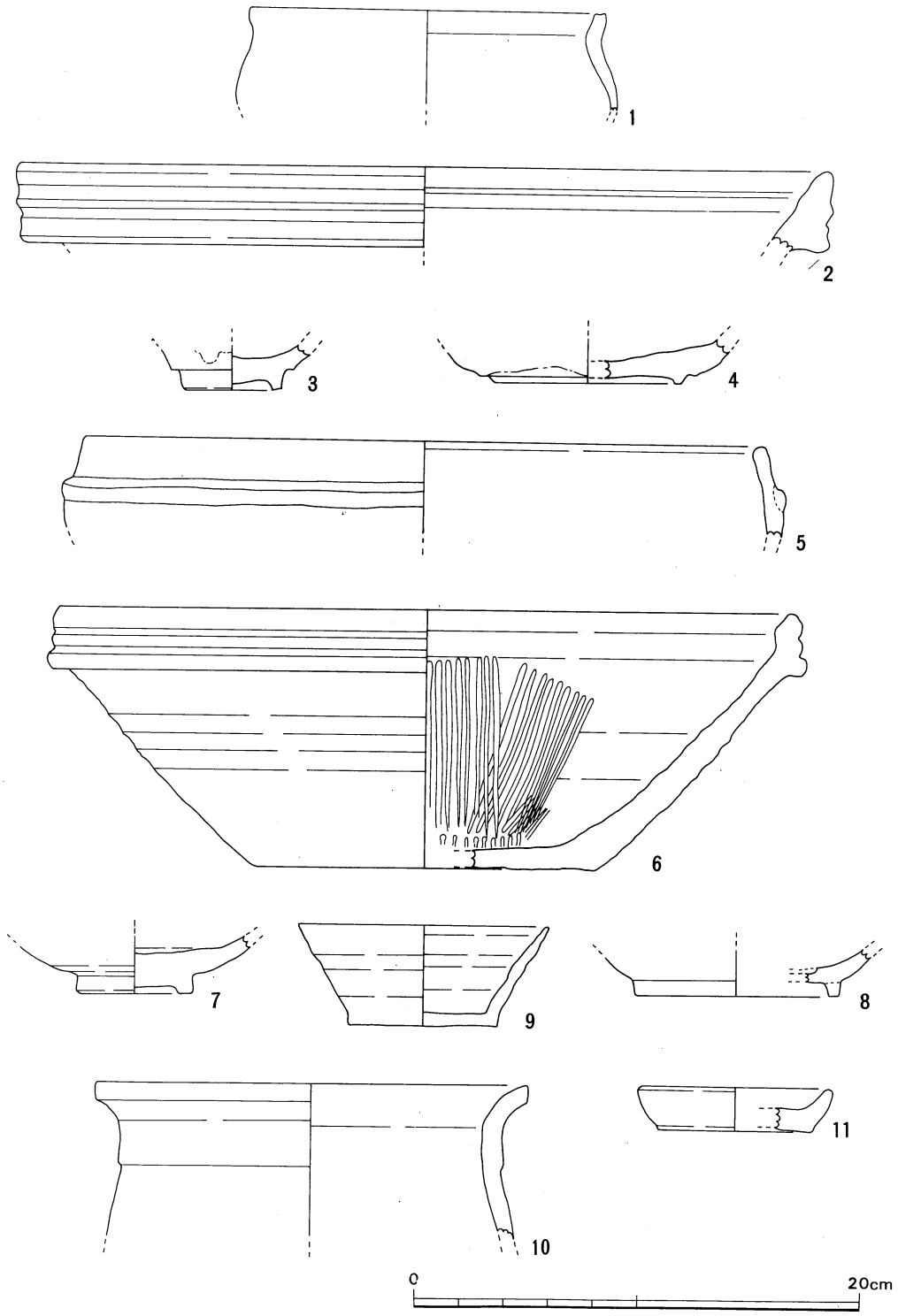
第186図　SD 1～14



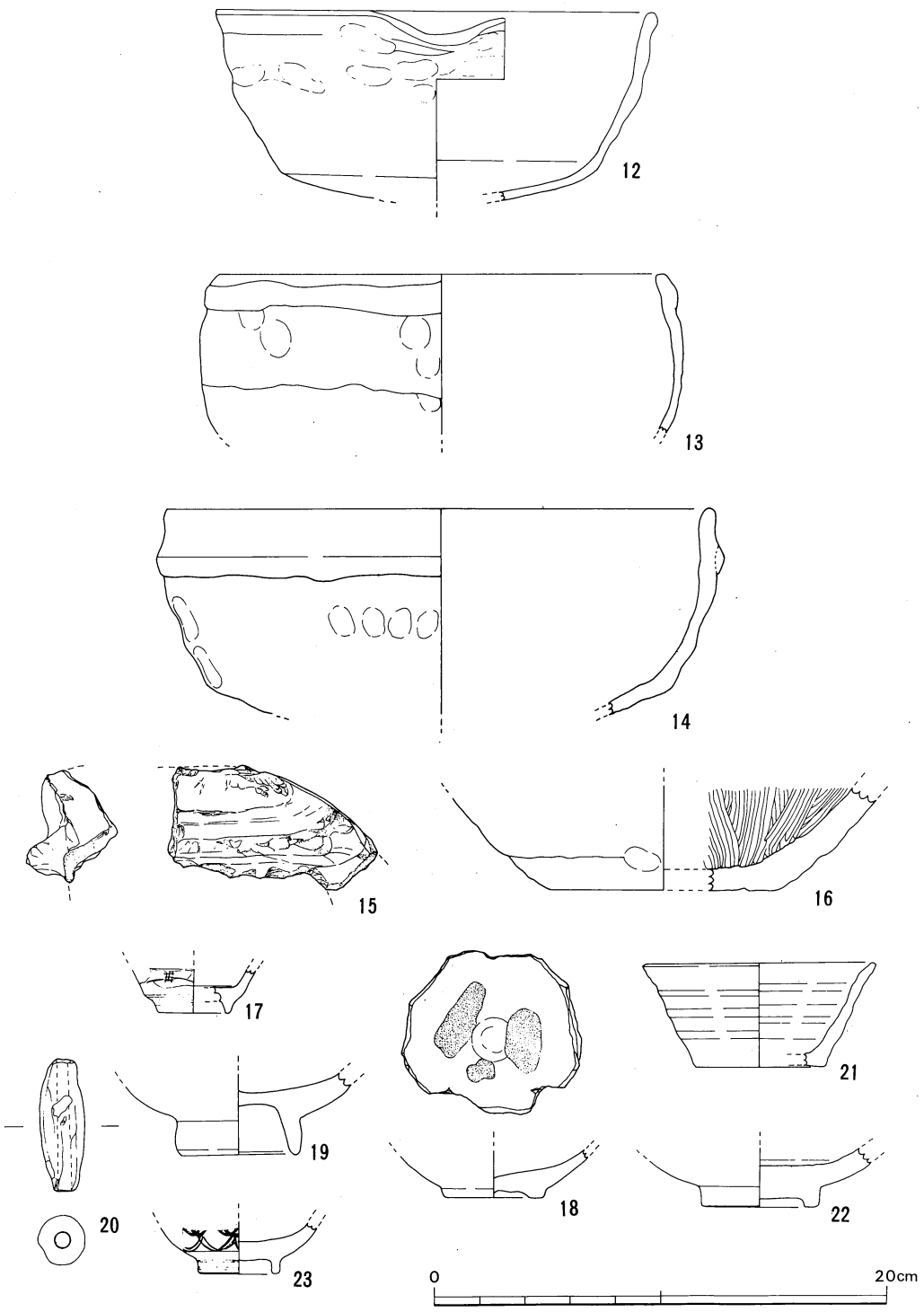


DL=7.10m 0 4m

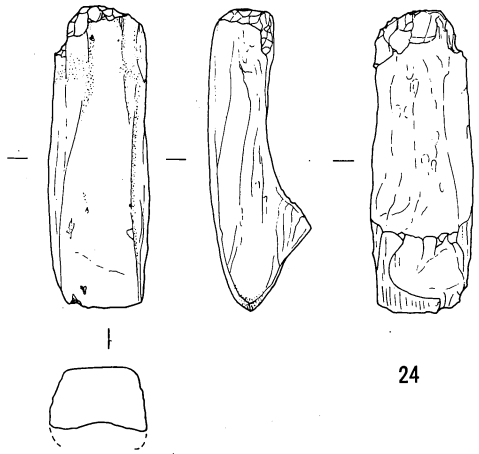
第187図 SE1、SA1・2

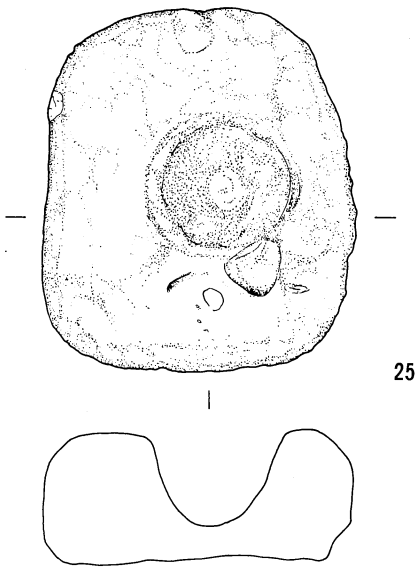


第188図　第Ⅰ～Ⅲ層出土遺物

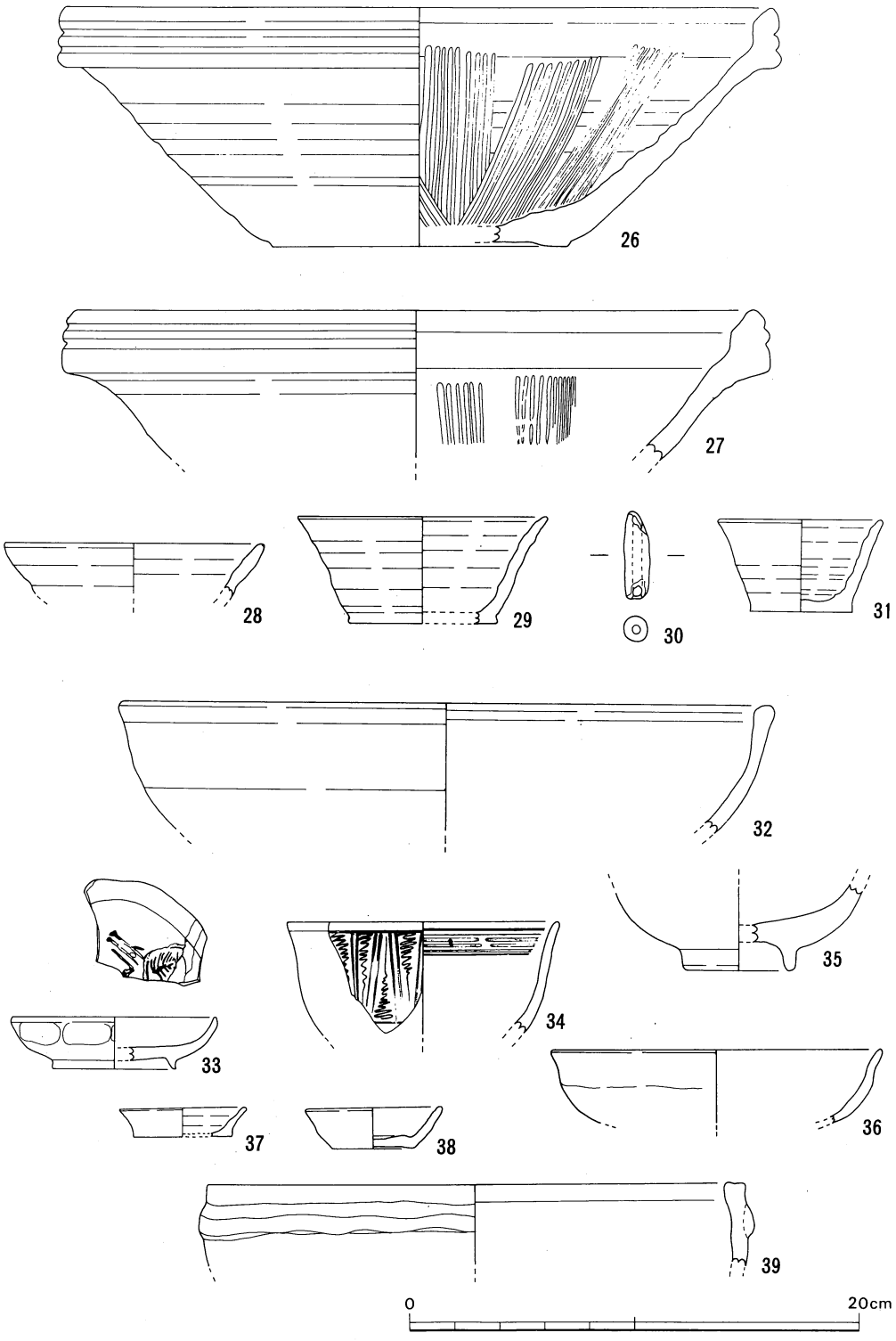


第189図　第Ⅲ層出土遺物

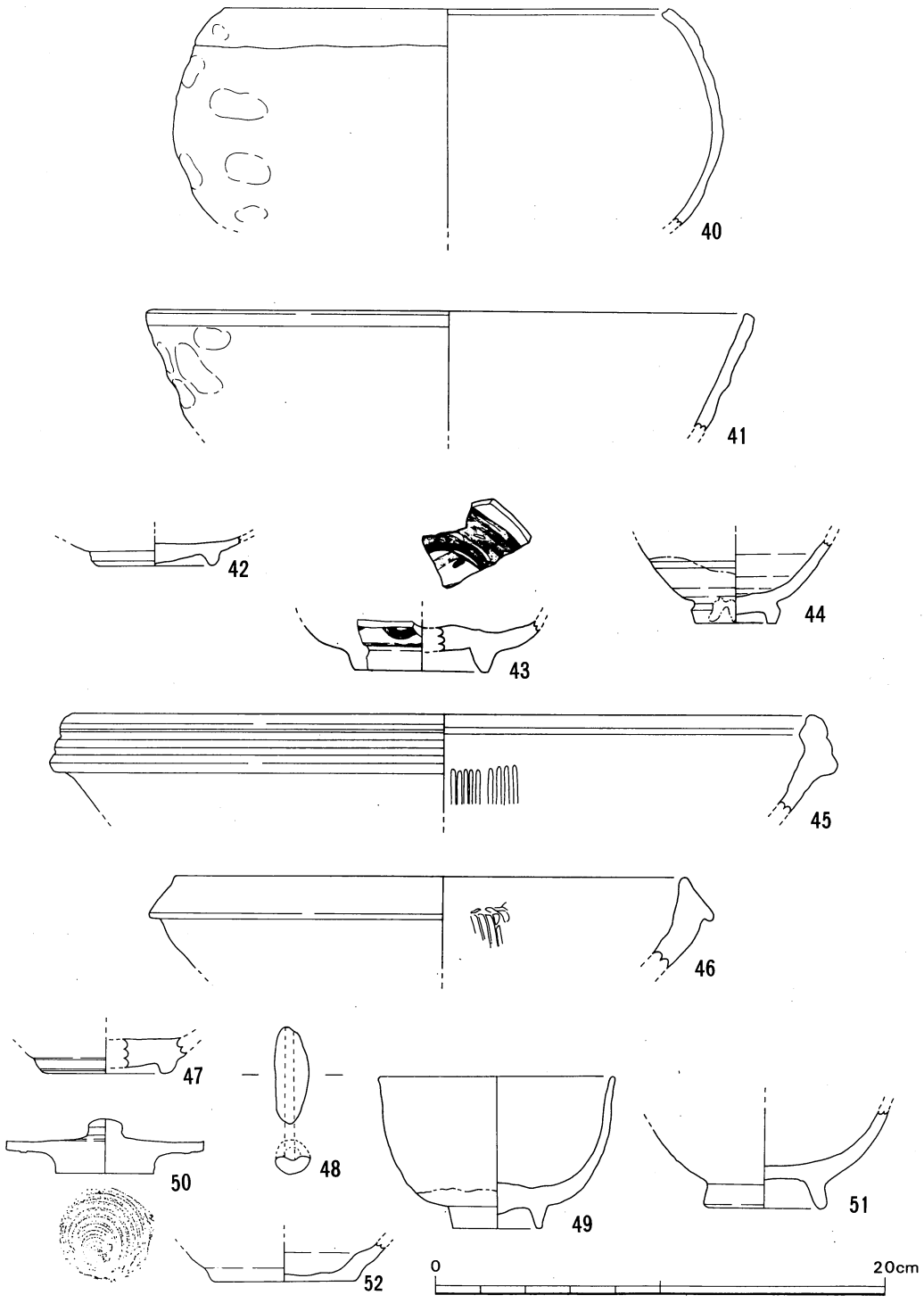




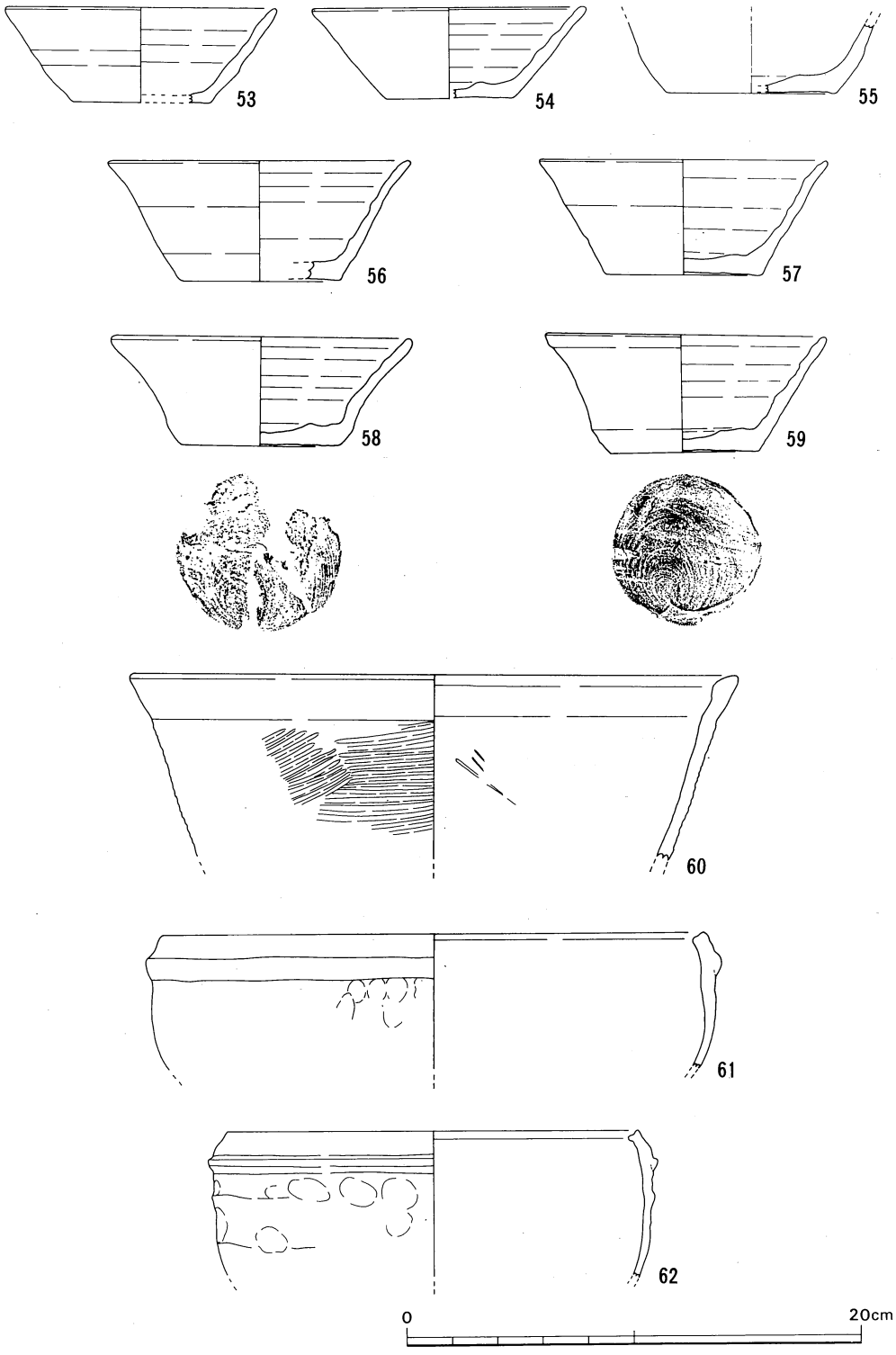
第190図　第Ⅱ・Ⅲ層出土遺物



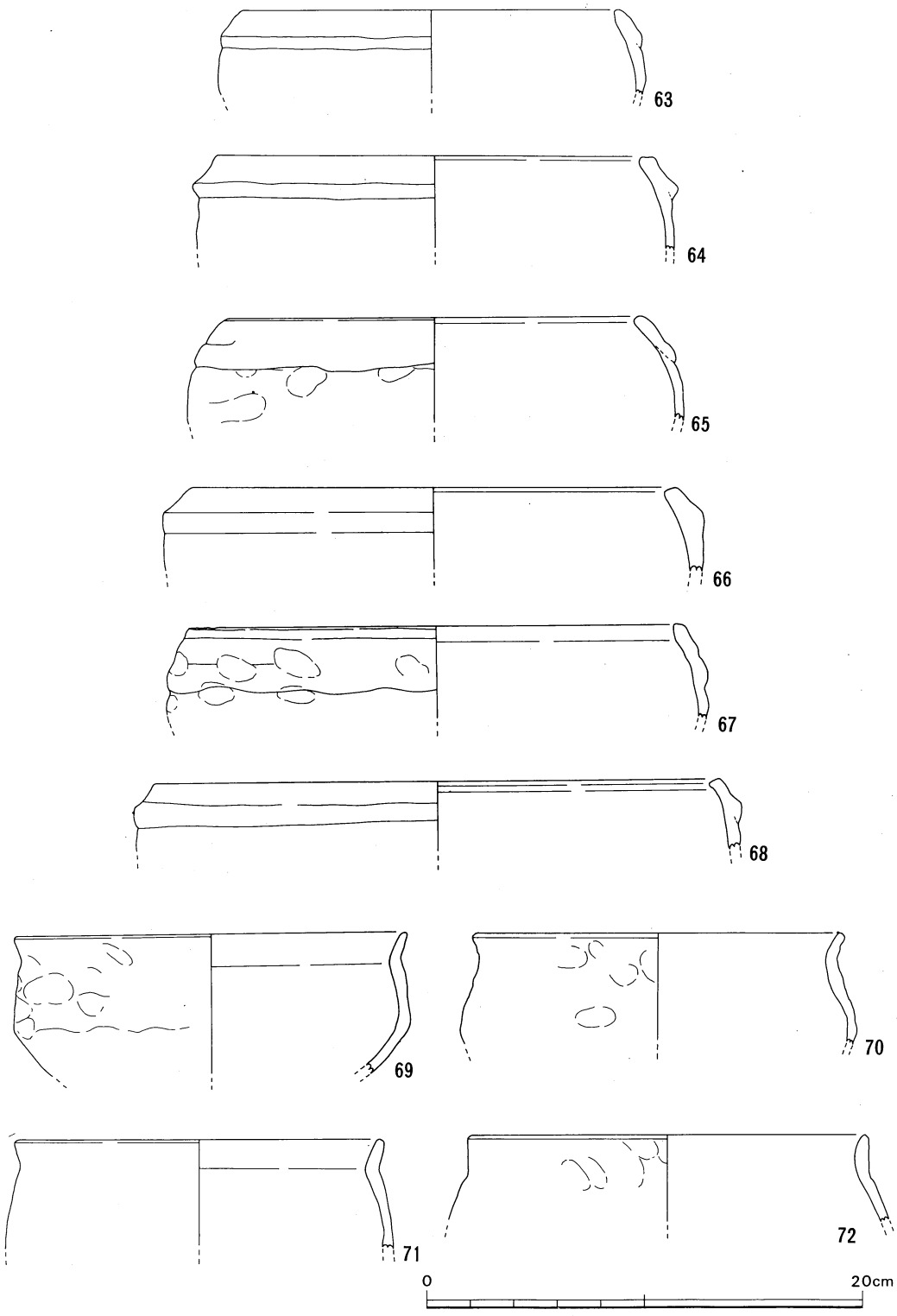
第191図　ＳＢ６・８・15・29・36、ＳＫ１・14・16・28・30出土遺物



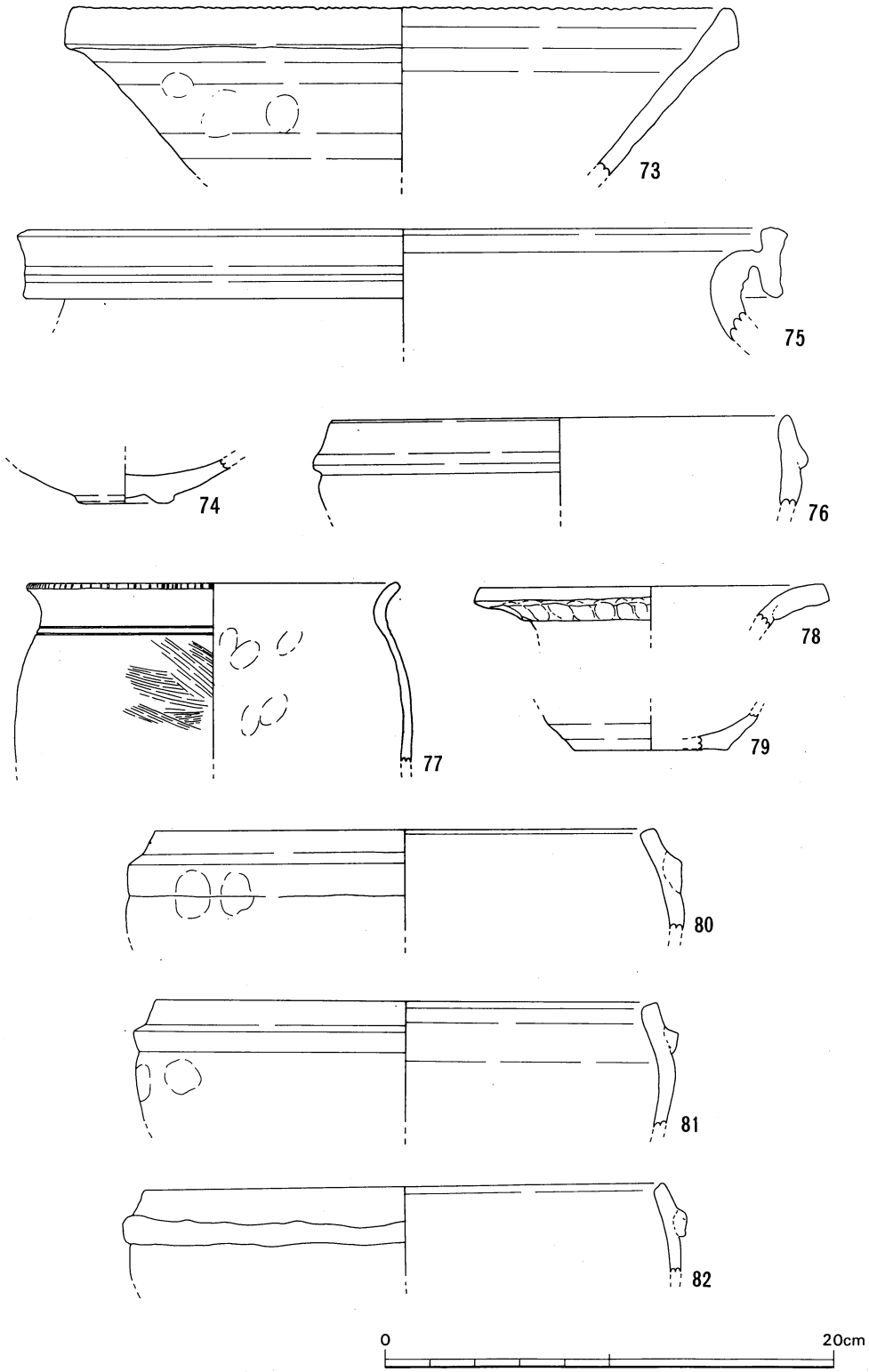
192図　ＳＫ30・36・37・42・52出土遺物



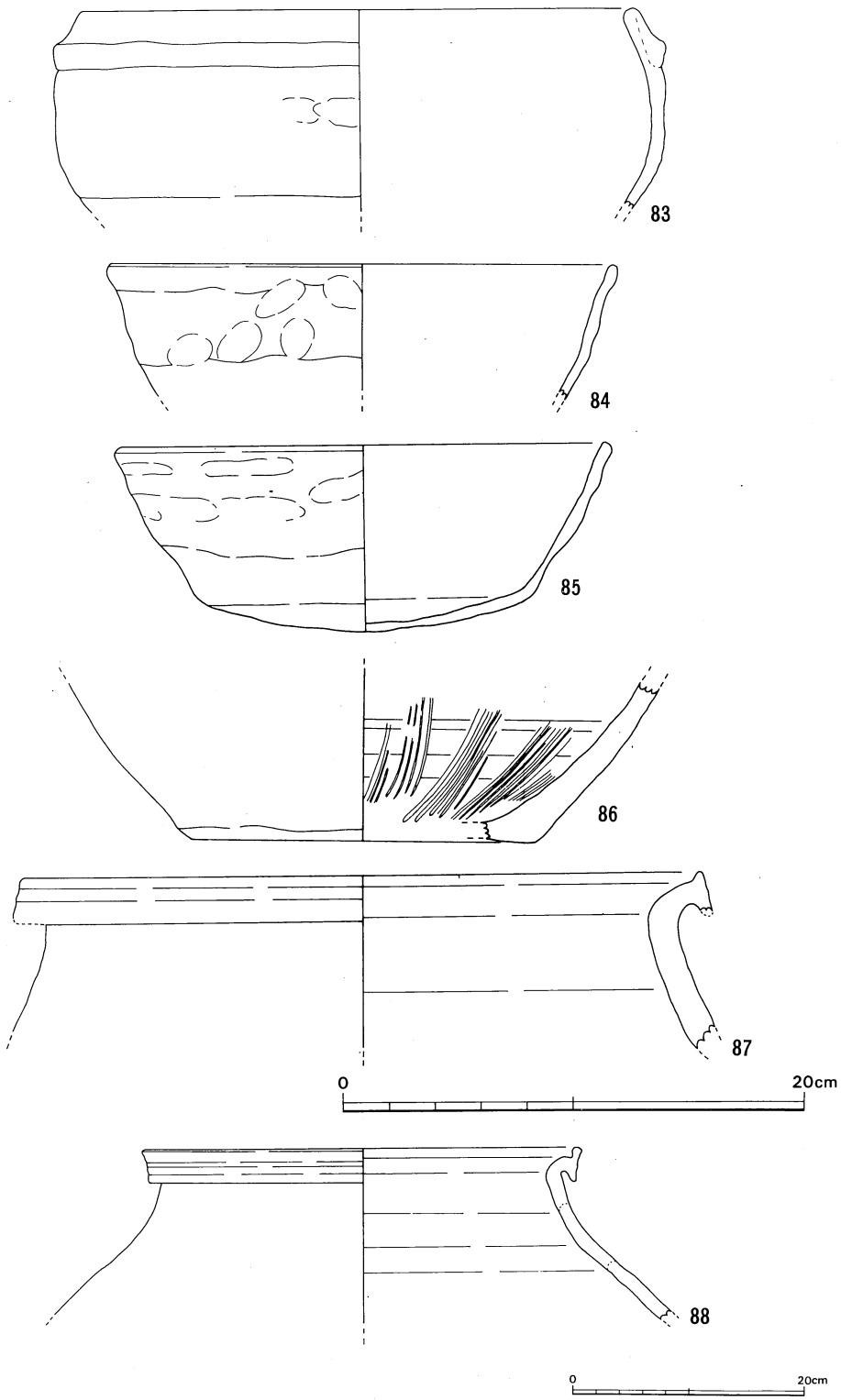
193図　ＳＤ１ 出土遺物



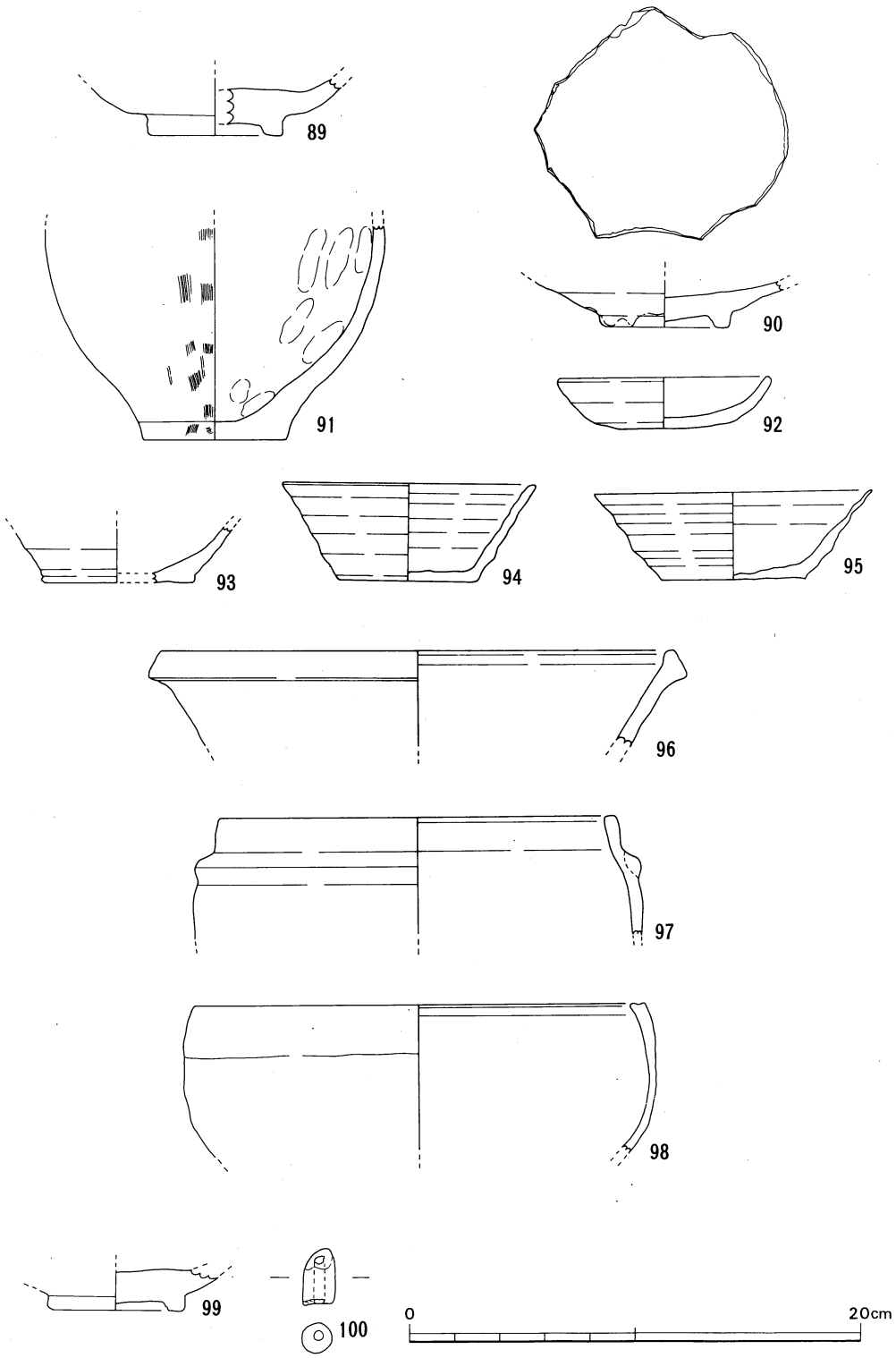
第194図　ＳＤ１出土遺物



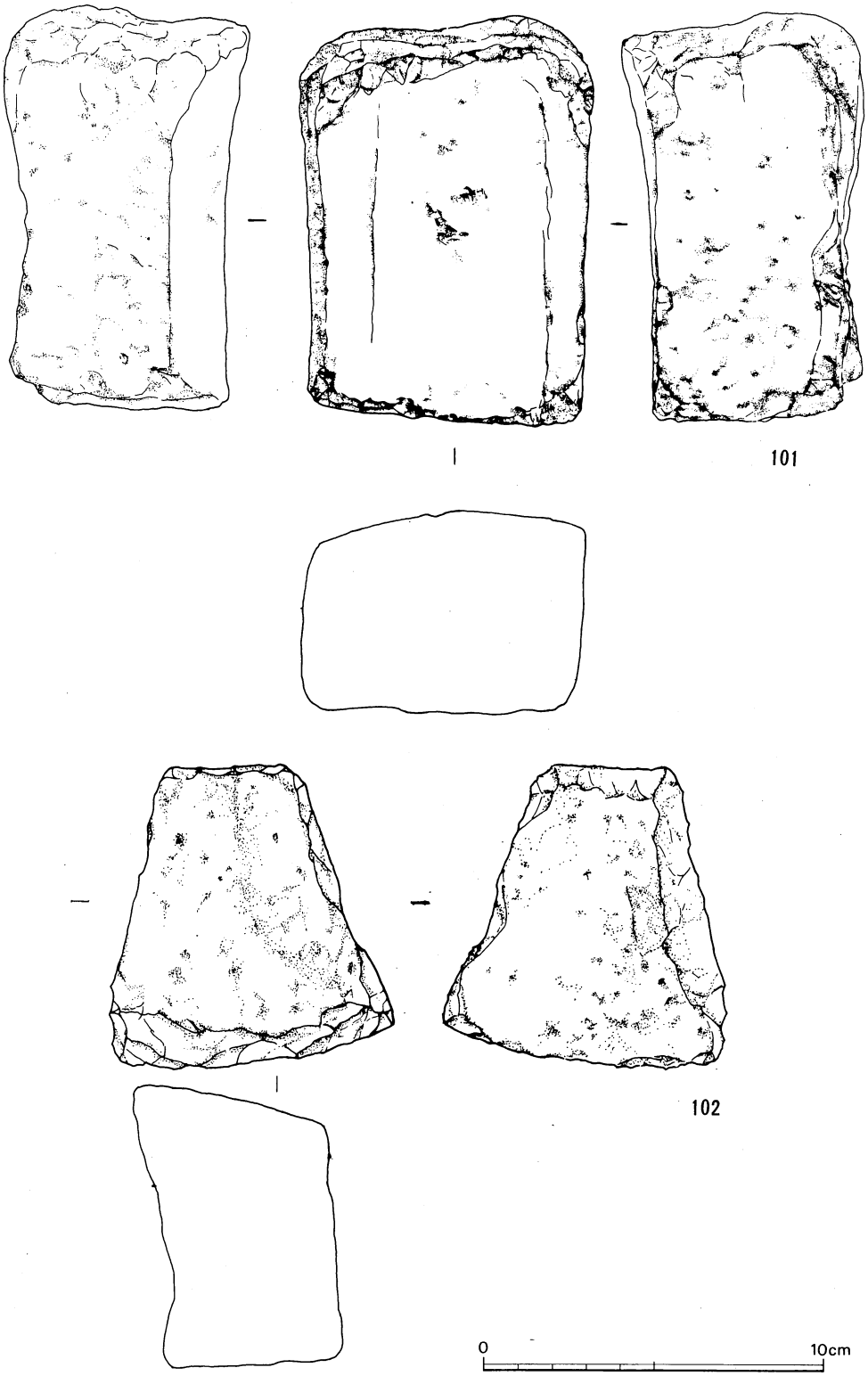
第195図　ＳＤ１・４・６、ＳＥ１出土遺物



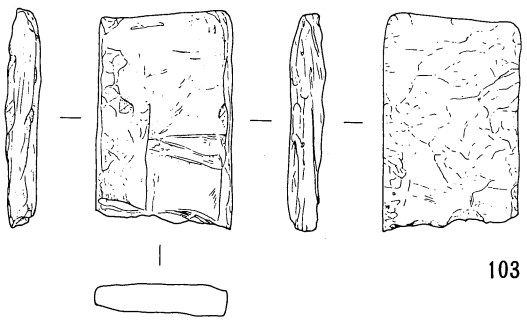
第196図　ＳＥ１出土遺物

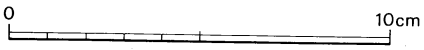


第197図　ＳＥ１、Ｐ１～10出土遺物

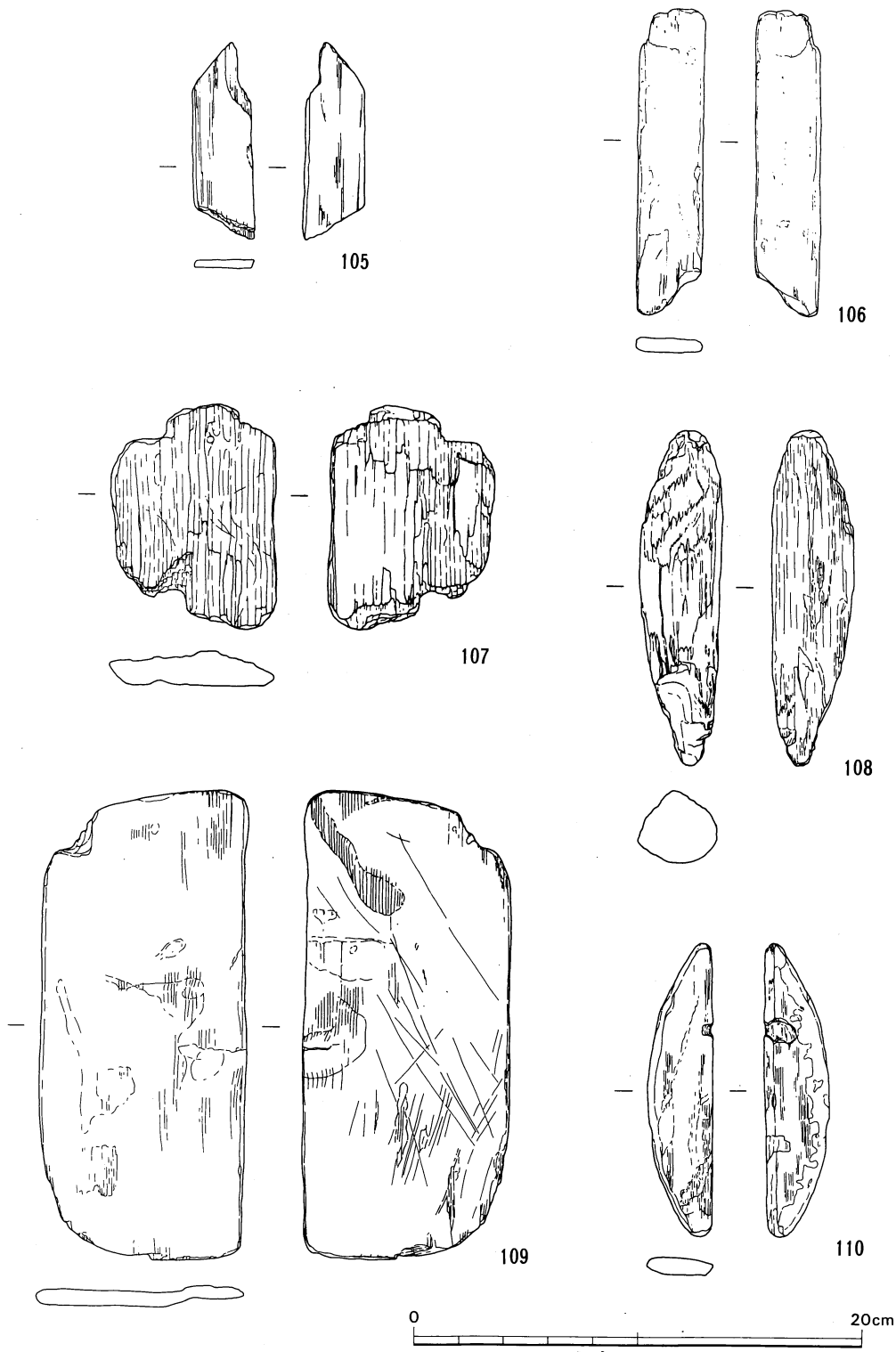


第198図　ＳＫ33出土遺物

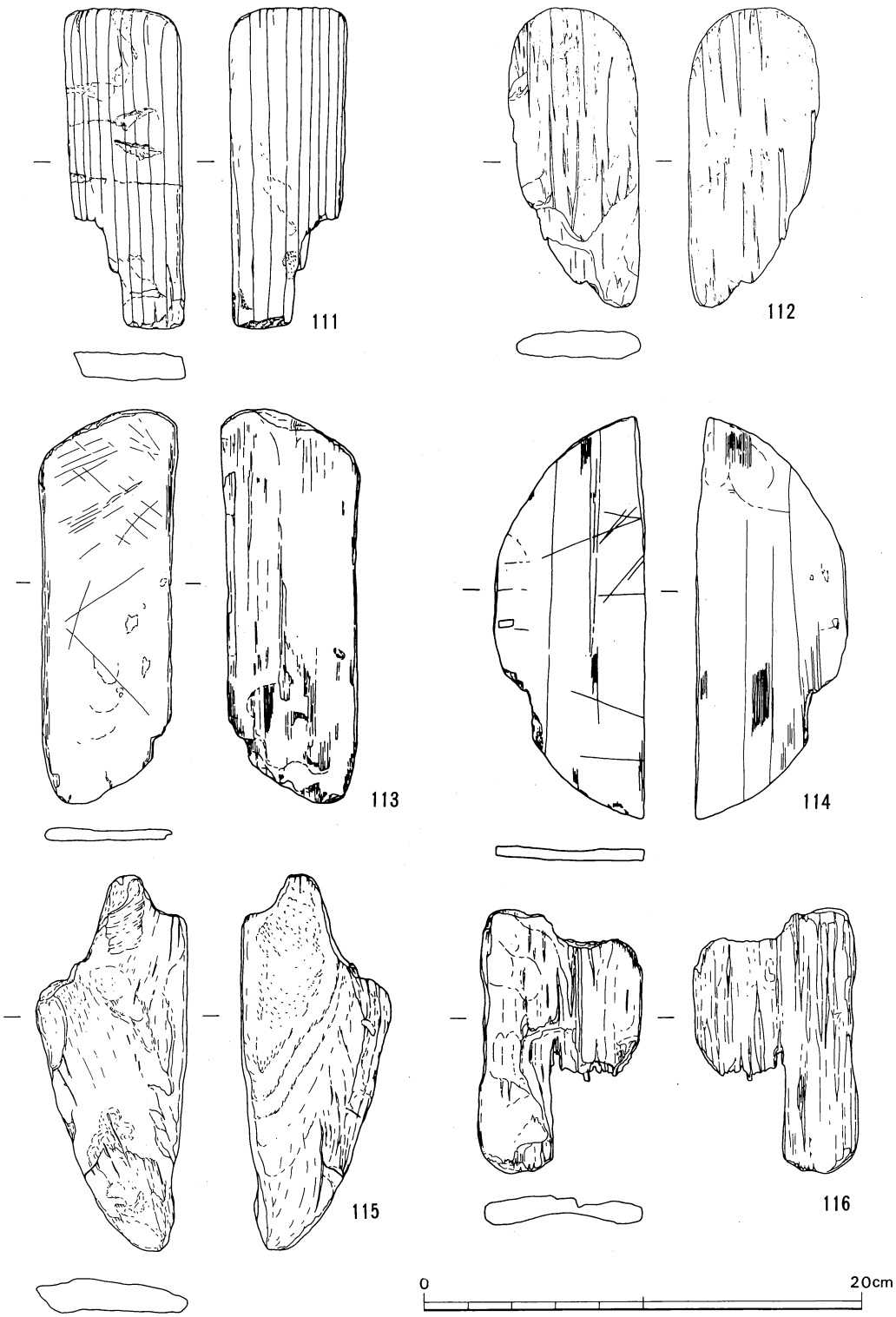




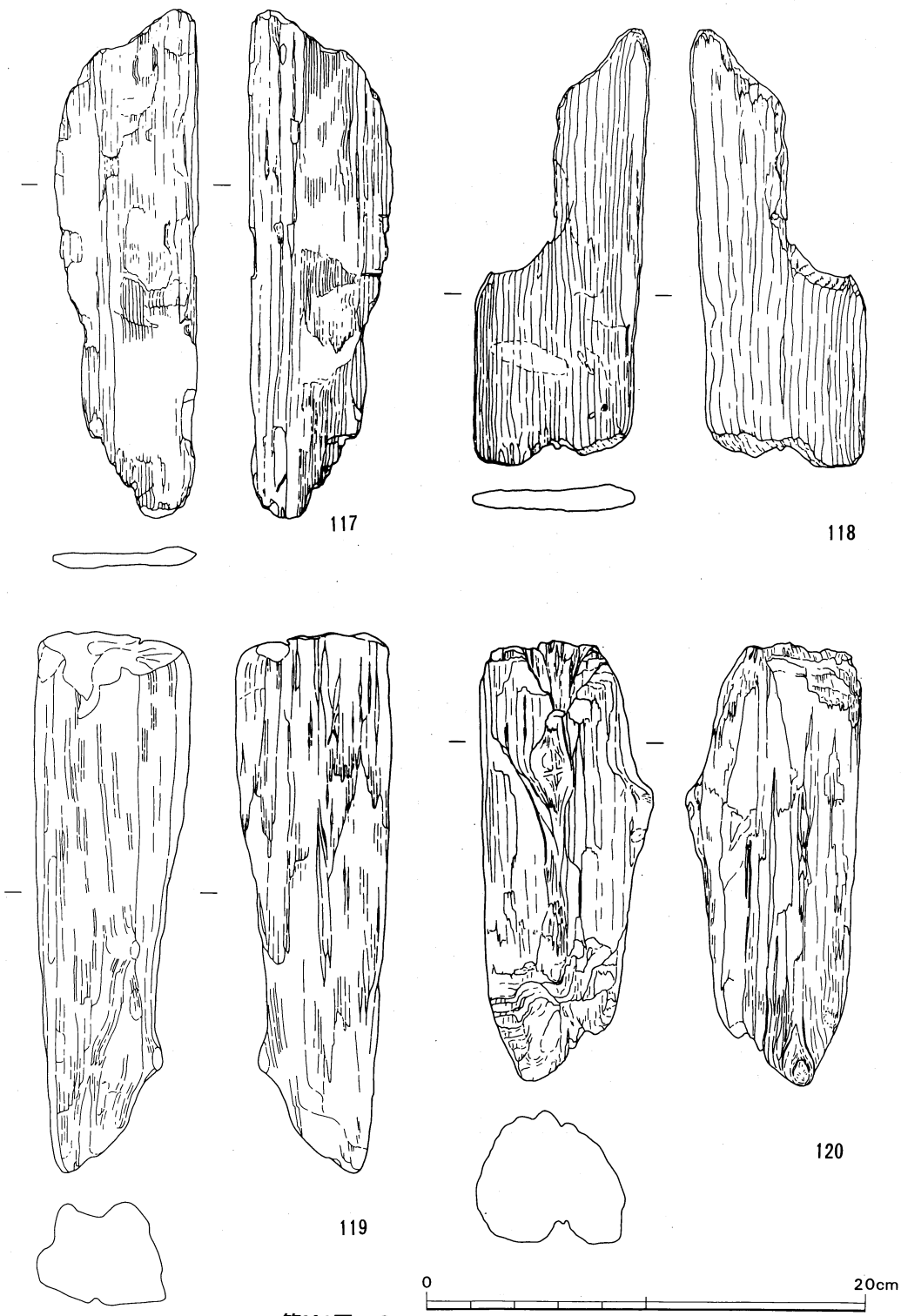
第199図　ＳＢ29、Ｐ11出土遺物



第200図　ＳＫ１、ＳＥ１、Ｐ12出土遺物



第201図　ＳＫ１、ＳＥ１出土遺物



第202図　ＳＫ１、Ｐ13・14出土遺物

第40表　LOC. 31 B 掘立柱建物址計測表

挿図番号	遺構番号	規模			棟方向	面積 (㎡)	備考
		梁(間)×桁(間)	梁 × 桁(m)	柱間距離(m)			
第203図	SB 1	1 × 2	2.75 × 4.35	2.10 ～ 2.75	N－69°－W	12.0	
〃	SB 2	2 × 2	3.25 × 4.10	1.50 ～ 2.05	N－72°－W	13.3	
第204図	SB 3	1 × 2	2.85 × 3.40	1.15 ～ 2.85	N－65°－W	9.7	
第205図	SB 4	3 × 3	5.70 × 8.30	2.20 ～ 3.70	N－17°－E	47.3	
第204図	SB 5	2以上 × 3以上	3.80 × 4.90	1.00 ～ 2.10	N－20°－E	—	
〃	SB 6	3 × 3以上	4.55 × 4.80	1.30 ～ 2.35	N－22°－E	—	

第41表　LOC. 31 B 土坑計測表

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第206図	SK 1	隅丸方形	1.16	0.95	0.27	N－30°－E	逆台形状	
〃	SK 2	隅方長方形	1.95	1.00	0.74	N－10°－E	箱形	
〃	SK 3	不整形	2.10	0.85	0.06	N－19°－E	———	
〃	SK 4	不整方形	2.80	1.89	0.14	N－19°－E	逆台形状	
〃	SK 5	方形	3.50	2.58	0.56	N－19°－E	U字形	
第207図	SK 6	〃	3.60	1.40	0.05	N－12°－E	———	
〃	SK 7	〃	5.70	2.20	0.30	N－12°－E	———	
〃	SK 8	〃	1.21	1.00	0.27	N－ 6°－E	逆台形状	
〃	SK 9	〃	0.90	0.85	0.15	N－76°－W	———	
〃	SK 11	不整長方形	4.70	1.46	0.15	N－19°－E	———	
第208図	SK 12	長方形	2.60	1.70	0.20	———	———	平面の全形は不明。
〃	SK 13	不整形	3.00	1.40	0.20	———	———	
〃	SK 14	方形	5.20	3.00	0.35	N－82°－W	———	
第209図	SK 15	不整形	1.50	1.30	0.10	———	———	
〃	SK 16	楕円形	1.80	0.80	0.17	N－89°－E	———	
〃	SK 17	方形	0.50	0.38	0.11	N－16°－E	U字形	
〃	SK 18	楕円形	2.00	1.70	0.56	———	逆台形状	
〃	SK 19	不整円形	1.40	1.20	0.45	———	箱形	
〃	SK 20	円形	0.80	——	0.23	———	———	

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第210図	SK 21	楕円形	1.75	1.30	0.31	N－4°－W	逆台形	
〃	SK 22	円形	1.65	——	0.40	———	〃	
〃	SK 23	不明	1.10	0.45	0.20	———	———	
〃	SK 24	〃	1.10	0.45	0.27	———	———	
〃	SK 25	不整形	5.50	2.00	0.10	———	———	
〃	SK 26	楕円形	2.45	1.85	0.33	N－69°－W	———	
第211図	SK 27	〃	1.80	1.00	0.21	N－72°－W	逆台形状	
〃	SK 28	〃	1.40	0.72	0.12	N－12°－E	逆台形	平面の全形は不明。
〃	SK 29	円形	2.80	1.30	0.95	———	———	〃
〃	SK 30	方形	2.95	1.20	0.30	N－18°－E	逆台形状	
〃	SK 31	長方形	7.30	2.70	0.40	N－73°－W	〃	
〃	SK 32	楕円形	1.20	0.75	0.43	N－68°－W	箱形	
第212図	SK 33	〃	1.70	1.38	0.44	———	———	平面の全形は不明。
〃	SK 34	不整方形	2.05	1.40	0.39	N－83°－W	舟底形	
〃	SK 35	〃	1.12	1.02	0.20	N－60°－W	箱形	
〃	SK 36	円形	0.70	——	0.20	———	逆台形状	
〃	SK 37	楕円形	0.78	0.60	0.15	———	———	
〃	SK 38	方形	0.50	——	0.30	———	———	

第42表　Loc. 31 B 包含層出土土器観察表

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
1	第Ⅰ・Ⅱ層	青磁 碗	— (1.8) — 6.6	高台は逆台形状を呈する。	畳付をこえて高台内面まで施釉される。 外底は露胎。	淡緑色釉。 胎土、灰白色。
2	〃	皿	— (1.8) — 6.5	体部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。 高台内の削りが深い。	見込に文様が淡青色に発色する。 畳付以外全面施釉される。	灰白色釉。 胎土、白灰色。 伊万里系。
3	第Ⅲ層	擂鉢	24.8 (4.8) — —	口縁部は上方に拡張され面をもつ。		灰赤色。 備前焼。
4	〃	〃	— (4.2) — 13.4	体部は直線的に立ち上がる。	条線は11本1単位。	〃
5	〃	青磁 碗	— (2.2) — 5.4	高台は丸みを帯びており、底部は厚い。体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。	外面に細蓮弁文が施される。全面に施釉され、外底は蛇ノ目釉ハギを施す。内外面に貫入あり。	青緑色釉。 胎土、灰白色。
6	〃	白磁 皿	12.0 5.7 — 6.3	高台は逆台形状を呈する。体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、端反りの口縁部にいたる。	全面に施釉され、畳付は釉を削りとられる。	濁白灰色釉。 胎土、灰白色。
7	〃	〃	— (1.3) — 3.0	高台はやや外にひらく四角形状を呈する。畳付の外面を面取りし狭くしている。	高台脇まで施釉される。 内外面に貫入あり。	白濁色釉。 胎土は白色。
8	〃	土錘	全長 6.2 直径 4.2 重量(g) 70.1	土師質の土錘で球形状にふくらむ。ほぼ中央部に直径1.75cmの円孔を穿つ。		
9	〃	皿	13.0 (1.3) — —	体部は直線的に立ち上がり、溝縁口縁。		淡緑色釉。 胎土、灰色。 唐津焼。
10	〃	〃	— (2.4) — 4.8	高台は浅く削り出され、体部は直線的に大きく開く。	高台脇まで施釉される。	濁灰褐色釉。 胎土、赤褐色。 唐津焼。
11	〃	〃	— (2.1) — 5.0	高台は浅く削り出され、体部は内湾して外上方に立ち上がる。	内面及び体部外面中位ぐらいまで施釉される。 見込に3ケ所砂目。	〃
12	〃	〃	13.8 4.0 — 5.0	高台は逆台形状を呈し、体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。	高台及び高台脇の一部を除き、全面に施釉される。見込は蛇ノ目釉ハギが施される。見込に目跡あり。	内面 青緑色釉。 外面 淡緑色釉。 胎土、黄灰色。 唐津焼。
13	〃	碗	— (2.4) — 3.8	〃	高台脇上部まで施釉される。	暗褐色釉。 唐津焼。
14	〃	〃	— (3.2) — 5.6	やや外開きの高い高台を有し、体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。	畳付を除き、全面に施釉される。 内外面に貫入あり。	淡黄色釉。 胎土、黄白色。 尾戸焼か？
15	第Ⅳ層	土師質土器 杯	9.0 5.0 — 5.4	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	底部回転糸切り。	淡黄橙色。

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
16	第Ⅳ層	土師質土器 杯	9.0 4.8 —— 4.7	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部はやや肥厚し丸くおさめる。	ロクロナデ。	淡黄橙色。

第43表　Loc. 31 B 遺構出土土器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
17	ＳＫ１	土師質土器 皿	9.8 2.1 —— 4.9	体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。	底部回転糸切り。	淡黄橙色。
18	〃	土師質土器 杯	9.6 3.3 —— 2.1	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、器壁は底部から口縁部へとしだいに厚くなっている。	ロクロナデ。	にぶい橙色。 焼成良好。
19	ＳＫ２	擂鉢	—— (7.7) —— 19.7	体部は直線的に外上方に立ち上がる。	底部は末調整。 内外面にロクロ痕が残る。 条線は９本１単位。	赤褐色。 備前焼。
20	〃	壺	17.4 (7.6) —— ——	頸部はやや外方に直立し、口縁部は玉縁状を呈する。	ロクロナデ。	〃
21	〃	白磁 碗	—— (2.4) —— 5.6	高い高台を有す。	見込に一条の沈線を施す。 高台外面まで施釉される。	濁白色釉。 胎土、灰白色。
22	〃	皿	24.6 (3.1) —— ——	体部は大きく開き、口縁部で屈曲する。	内面の文様及び、口縁部外面の一重の界線が淡青色に発色する。	白濁色釉。 胎土、灰白色。 伊万里系。
23	〃	鉢	—— (2.8) —— 8.2	畳付が丸味を帯びた大きくしっかりした高台を有し、体部は大きく外方に開く。	畳付を除き全面施釉され、見込は蛇ノ目釉ハギを施す。	青緑色釉。 胎土、灰色。 伊万里系。
24	〃	皿	—— (1.9) —— 5.8	高台はやや外方に開き断面逆台形状を呈し、体部は大きく開く。	畳付外底を除き、全面に施釉される。 畳付外底にも一部釉がかかる。 見込に砂目。	濁黄灰白色釉。 胎土、灰色。 唐津焼。
25	〃	〃	—— (2.0) —— 4.3	高台は断面逆台形状を呈し、体部は直線的に大きく開く。	高台脇まで施釉される。 見込に目跡あり。	明褐灰色釉。 胎土、にぶい褐色。 唐津焼。
26	〃	〃	—— (2.4) —— 5.8	高台は断面逆台形状を呈し、体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。	畳付外底を除き全面施釉される。見込は蛇ノ目釉ハギを施す。 見込に砂目。	内面 青緑色釉。 外面 淡黄灰白色釉。 胎土、灰白色。 唐津焼。
27	〃	碗	—— (2.3) —— 4.8	高台は断面逆台形状を呈し、体部は内湾して外上方に立ち上がる。	畳付外底を除き全面施釉される。	濃緑色釉。 胎土、灰白色。 唐津焼。
28	〃	〃	—— (2.2) —— 5.0	高台は断面四角形状を呈し、体部は内湾気味に立ち上がる。	高台脇まで施釉される。底部は回転糸切り後、削り出して高台を作り、外底にカプト帽状の突起を有す。高台内の削りがやや浅い。	淡黄灰白色釉。 胎土、灰褐色。 貫入あり。 唐津焼。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　　態	文　様　・　手　法	備　　考
29	ＳＫ２	碗	―― (3.4) ―― 4.0	高台は断面逆台形状を呈し、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。畳付が広い。	高台脇まで施釉される。貫入あり。	緑灰白色釉。胎土、赤褐色。唐津焼。
30	〃	鉢	―― (2.2) ―― 7.0	高台は断面逆台形状を呈し、体部は大きく開く。	見込にハケ目文様を施し、外面に一部釉が流れ落ちる。	灰褐色釉。胎土、赤褐色。唐津焼。
31	ＳＫ８	土師質土器 鍋	43.6 (8.2) ―― ――	底部付近で屈曲し、胴部から口縁部にかけて直線的に外上方に立ち上がる。	口縁部内外面にヨコナデを施す。胴部内面にナデ、外面にハケ目及び磨きを施す。	内面 淡黄褐色。外面 黒灰色。外面に煤が付着する。
32	ＳＫ31	皿	11.6 3.4 ―― ――	碁笥底で体部は内湾して外上方に立ち上がる。	体部中位まで施釉される。	濁灰色釉。胎土、赤褐色。唐津焼。
33	ＳＫ38	碗	―― (2.8) ―― 4.3	高台は断面逆台形状を呈し、体部は内湾して外上方に立ち上がる。	高台脇まで施釉される。見込に砂目。	淡緑灰色釉。胎土、淡赤褐色。唐津焼。
挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
34	ＳＤ３	弥生土器 壺	15.2 (6.2) ―― ――	頸部は直立し、大きく外反し、口縁部にいたる。	頸部外面に縦方向のハケ目を施す。	淡赤橙色。
挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　　態	文　様　・　手　法	備　　考
35	ＳＤ３	土師質土器 皿	9.4 2.6 ―― 4.2	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	底部回転糸切り。	にぶい橙色。
36	〃	〃	9.8 2.4 ―― 5.8	体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。	〃	〃
37	〃	〃	9.7 2.5 ―― 4.9	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	〃	〃
38	〃	土師質土器 杯	8.8 5.3 ―― 5.1	体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	〃	〃
39	〃	擂鉢	24.4 (11.3) ―― ――	体部は直線的に立ち上がり、口縁部は上方に拡張され面を成す。	条線は下から上へ９本１単位。	黄橙色。備前焼。
40	〃	〃	30.0 (8.7) ―― ――	〃	〃	赤褐色。備前焼。
41	〃	〃	33.1 (3.8) ―― ――	口縁部は上方に拡張される。	口縁部外面に２条の浅い凹線が施される。	〃

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
42	SD3	擂鉢	36.8 (4.2) —— ——	口縁部は上方に拡張され面を成す。	口縁部外面に2条の浅い凹線が施される。	赤褐色。 備前焼。
43	〃	白磁 皿	17.3 4.2 —— 9.0	体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は端反りを呈する。畳付内外面を削りとり狭くしている。	畳付以外は全面施釉される。	濁灰白色釉。 胎土、灰白色。
44	〃	土錘	全長 5.2 直径 1.2 重量(g) 7.0	土師質の土錘で円筒形を呈する。ほぼ中央部に直径7㎜の円孔を穿つ。		
45	〃	天目茶碗	—— (2.0) —— 3.8	輪高台を呈し、高台内の削りはやや浅い。	高台脇を水平に削りとる。 露胎部に化粧がけが施されない。	黒色釉。 胎土、灰黄色。 瀬戸・美濃系。
46	〃	皿	—— (1.7) —— 4.2	丸味を帯びた低い高台を有し、体部は大きく開く。		灰褐色釉。 胎土、灰黄色。 唐津焼。
47	〃	〃	—— (2.0) —— 4.6	高台は逆台形状を呈し、体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。	見込に目跡あり。 貫入あり。	淡緑灰白色釉。 胎土、灰白色。 唐津焼。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
48	SD6	須恵器 杯	14.0 4.5 —— 10.2	高台は貼付高台であり、ハの字状に開く。体部は直線的に外上方に立ち上がる。	回転ナデ調整。	灰白色。
49	SD7	〃	—— (1.5) —— 20.0	高台は貼付高台であり、ハの字状に開く。	〃	白灰色。
50	〃	土師器 皿	14.8 1.5 —— ——	底部は平坦であり、口縁部は外反する。		橙色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
51	SD7	擂鉢	31.4 (5.9) —— ——	口縁部は上方に拡張され面を成し、内面に段を有す。体部は直線的に立ち上がる。	口縁部外面に浅い2条の凹線を施す。	灰赤色。 備前焼。
52	〃	〃	—— (5.6) —— 20.0	体部は直線的に立ち上がる。	底部未調整。 条線は下から上へ9本1単位。	〃
53	〃	青磁 碗	—— (2.6) —— 5.0	体部は内湾して外上方に立ち上がる。	畳付及び外底を除く全面に施釉される。外面に細蓮弁文、見込に印花が施される。	青緑色釉。 胎土、灰色。
54	〃	碗	—— (2.1) —— 4.2	高台は断面逆台形状を呈し、体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。	全面に施釉される。貫入あり。見込みに目跡あり。畳付に砂が溶着する。	淡灰白緑色釉。 胎土、灰白色。 唐津焼。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　　態	文様・手法	備　考
55	ＳＤ８	皿	—— (1.6) —— 3.0	高台は低く断面逆台形状を呈し、体部は大きく開く。高台内の削りがやや深い。	内面及び外面の一部に施釉される。	濁黄灰白色釉。 胎土、にぶい黄橙色。 唐津焼。
56	〃	碗	—— (2.7) —— 3.6	高台は低く断面逆台形状を呈する。体部は内湾して外上方に立ち上がり、内面に稜を有す。	体部外面の一部及び内面に施釉される。見込みに目跡あり。	濁橙灰白色釉。 胎土、淡黄灰色。
57	ＳＰ１	土師質土器 把手	全　長 (9.0) 径　　3.8	把手上部に直径５㎜の円孔が穿たれる。中心部は空洞である。		
58	〃	擂鉢	32.8 (4.3) —— ——	口縁部は上方に拡張され、内面に段を有す。	口縁部外面に３条の凹線が施される。	内面 灰色。 外面 灰赤色。 備前焼。
59	Ｐ２	皿	10.8 3.9 —— ——	碁笥底を呈し、体部は内湾して外上方に立ち上がる。	体部上位外面まで施釉される。	濁緑灰色釉。 胎土、淡赤褐色。 唐津焼。
60	Ｐ３	土師質土器 杯	—— (3.2) —— 5.5	体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。	ロクロナデ。	黄橙色。

第44表　Loc. 31Ｂ遺構出土石器観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	計測値(cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　考
61	ＳＫ２	石包丁	7.1 4.2 0.9 39.0		刃部が欠損している。背に２個の円孔を穿っているが失敗している。部分的に研磨している。	
62	ＳＰ１	砥石	14.0 12.4 5.5	砂　岩	上下両端が欠損している。２面使用している。 断面は長方形を呈する。	
63	ＳＫ２	〃	(5.6) 4.5 0.5 22.0		薄く扁平な砥石で小型品である。 側面は垂直に作りだされ、表面を作用している。	
64	ＳＫ27	〃	(6.0) 5.1 3.5 125.0	砂　岩	大部分が欠損している。 ２面を使用している。 表面に擦痕が認められる。	
65	Ｐ１	〃	(9.8) 5.0 1.3 96.0	〃	断面長方形を呈する。 ４面共使用している。	
66	ＳＫ２	墓標	(12.0) (13.5) (1.8) 280.0	〃		

第45表　Loc. 31 B遺構出土金属器観察表

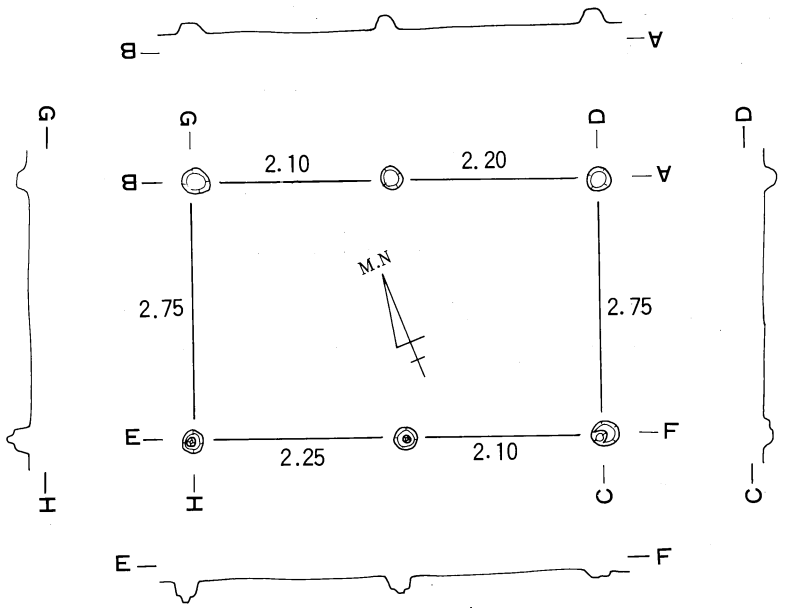
挿図番号	遺構番号	器　種	計測値 (cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　　考
67	ＳＫ２	煙管	17.3 0.8 0.1	銅	ラウは竹で構成されている。	
68	ＳＰ１	〃	12.0 1.0 0.1	〃	歪みが著しい。	

第46表　Loc. 31 A・B 包含層出土古銭観察表

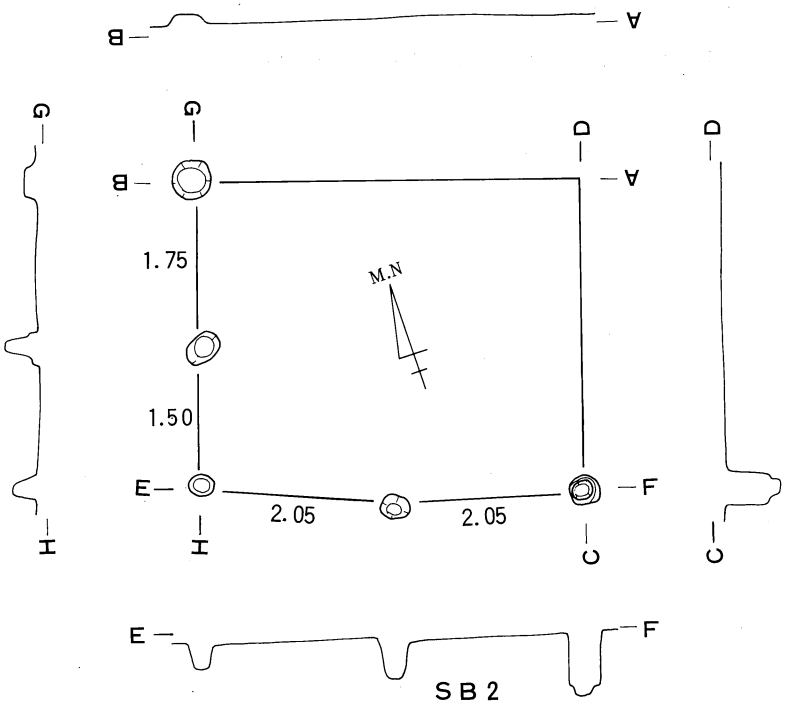
挿図番号	層位	銭　　種	初 鋳 年 (西 暦)	備　　考
69	第Ⅲ層	寛永通宝	日本明正(1636)	Loc. 31 A
70	〃	〃	〃	〃
71	〃	〃	〃	Loc. 31 B

第47表　Loc. 31 A・B 遺構出土古銭観察表

挿図番号	遺構番号	銭　　種	初 鋳 年 (西 暦)	備　　考
72	ＳＤ１	熙寧元宝	宋神宗(1068)	Loc. 31 A
73	ＳＫ２	寛永通宝	日本明正(1636)	Loc. 31 B
74	〃	〃	〃	〃



SB1

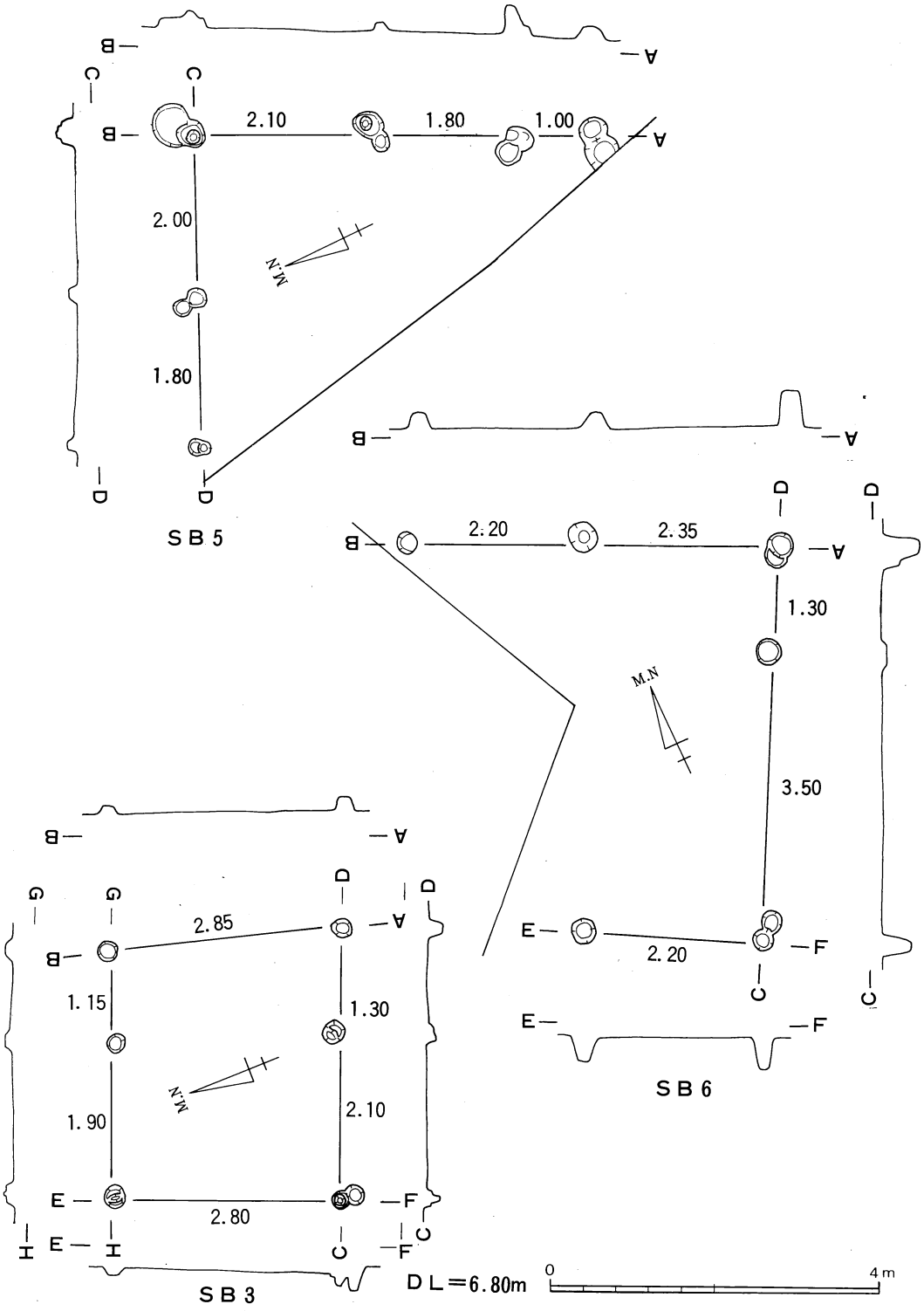


SB2

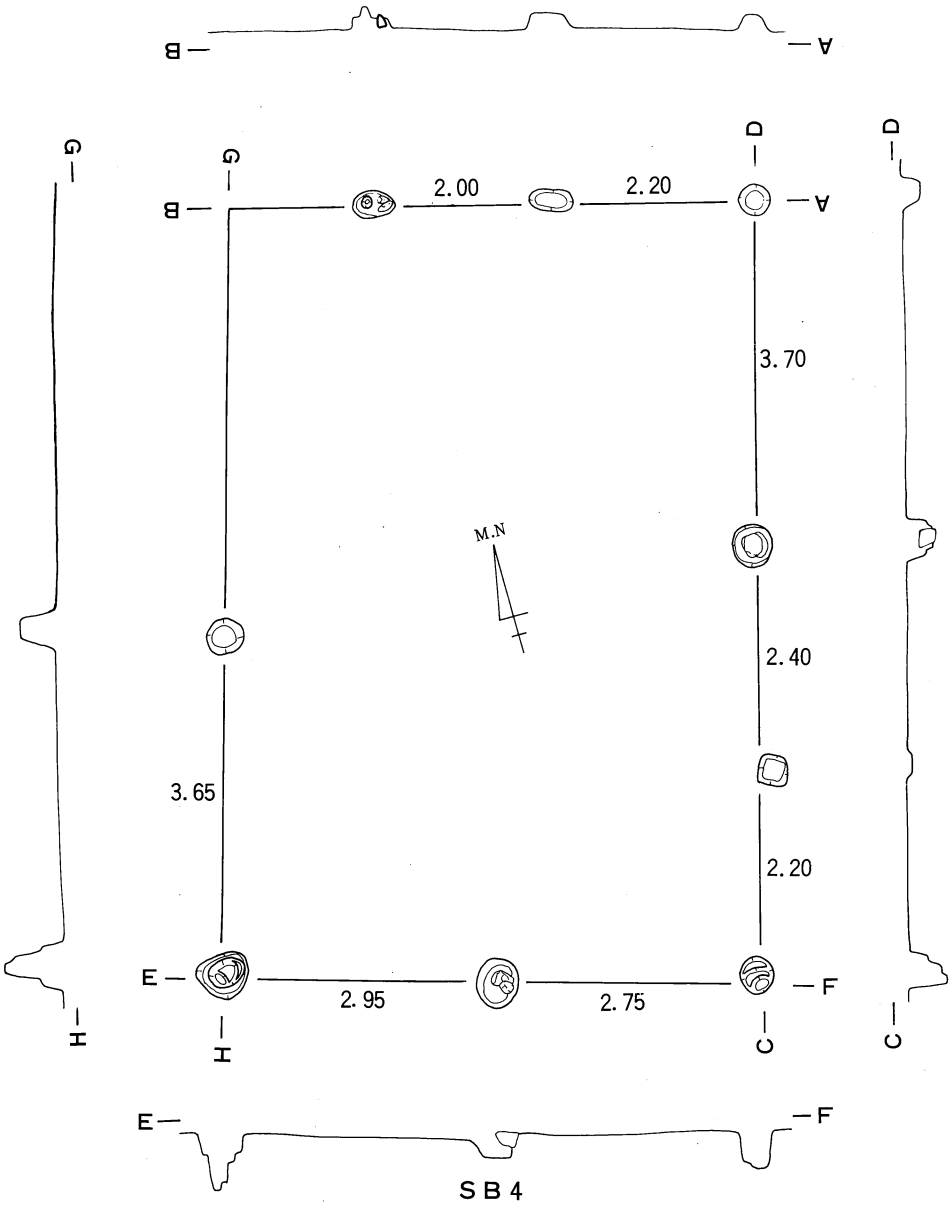
DL=6.80m

0 4m

第203図　SB1・2


SB 5
2.10
1.80
1.00
2.00
1.80
M.N
SB 6
2.20
2.35
1.30
3.50
2.20
SB 3
2.85
1.15
1.30
1.90
2.10
2.80
DL=6.80m
0
4m

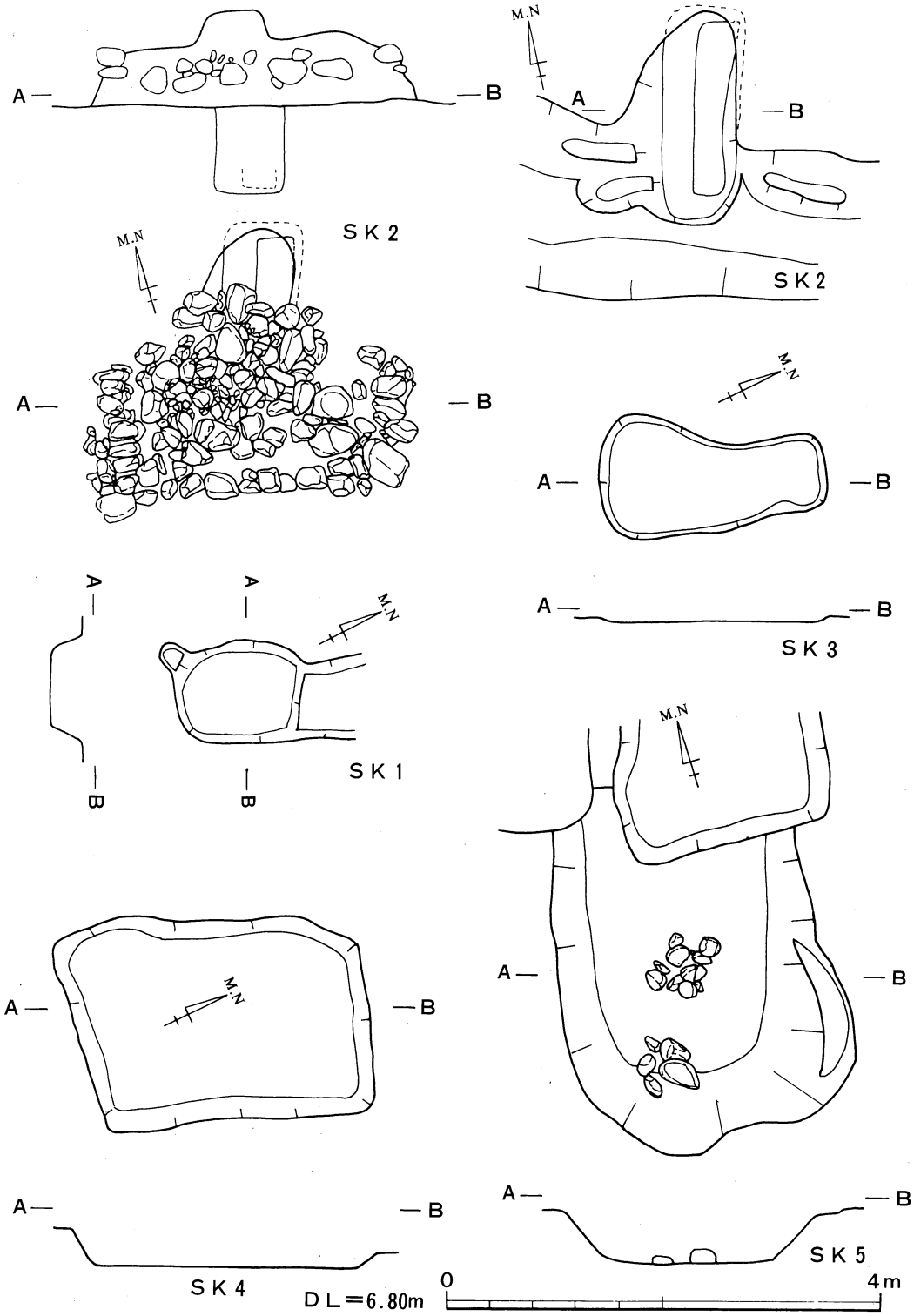
第204図　ＳＢ３・５・６



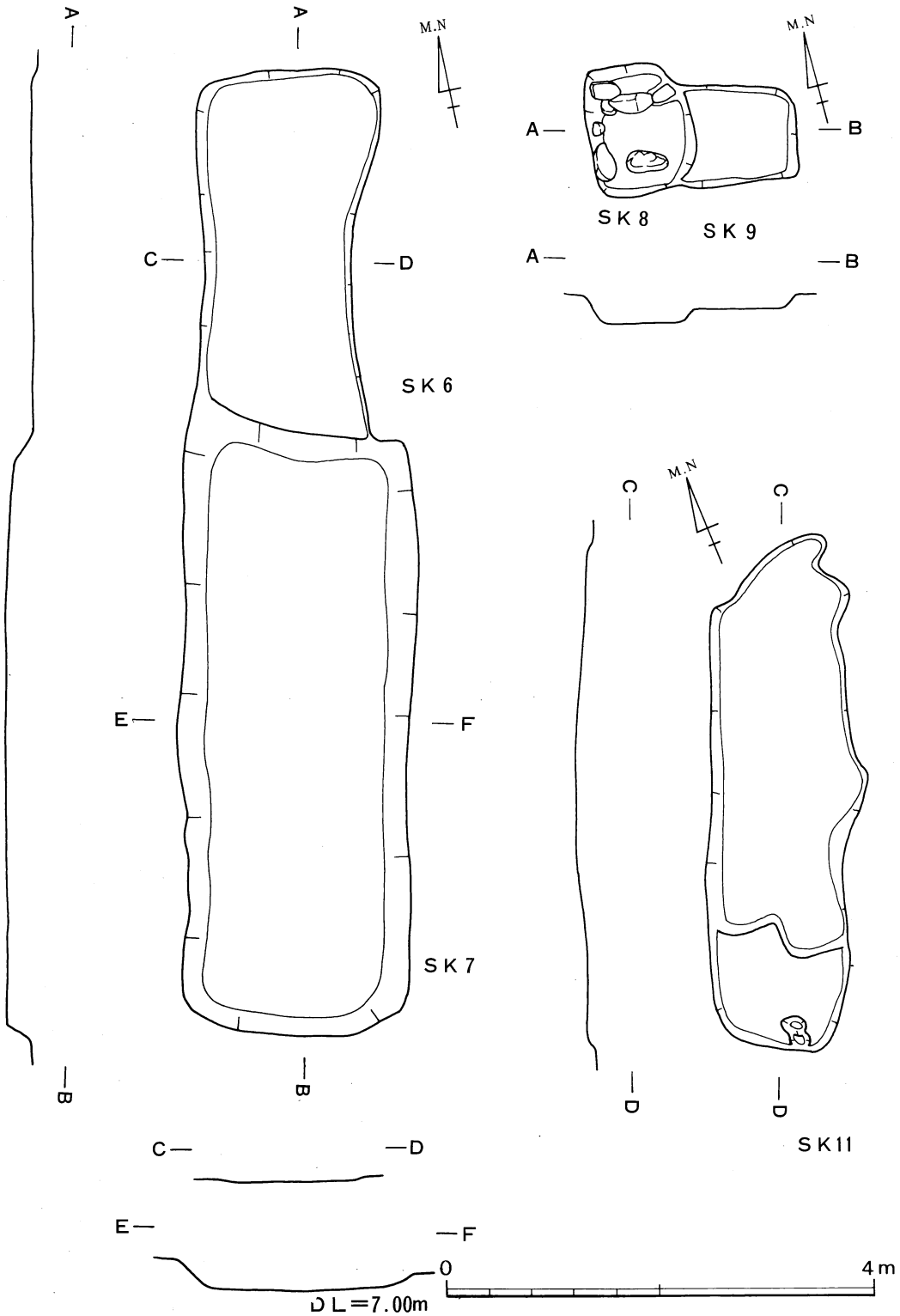
DL＝6.80m

0 4m

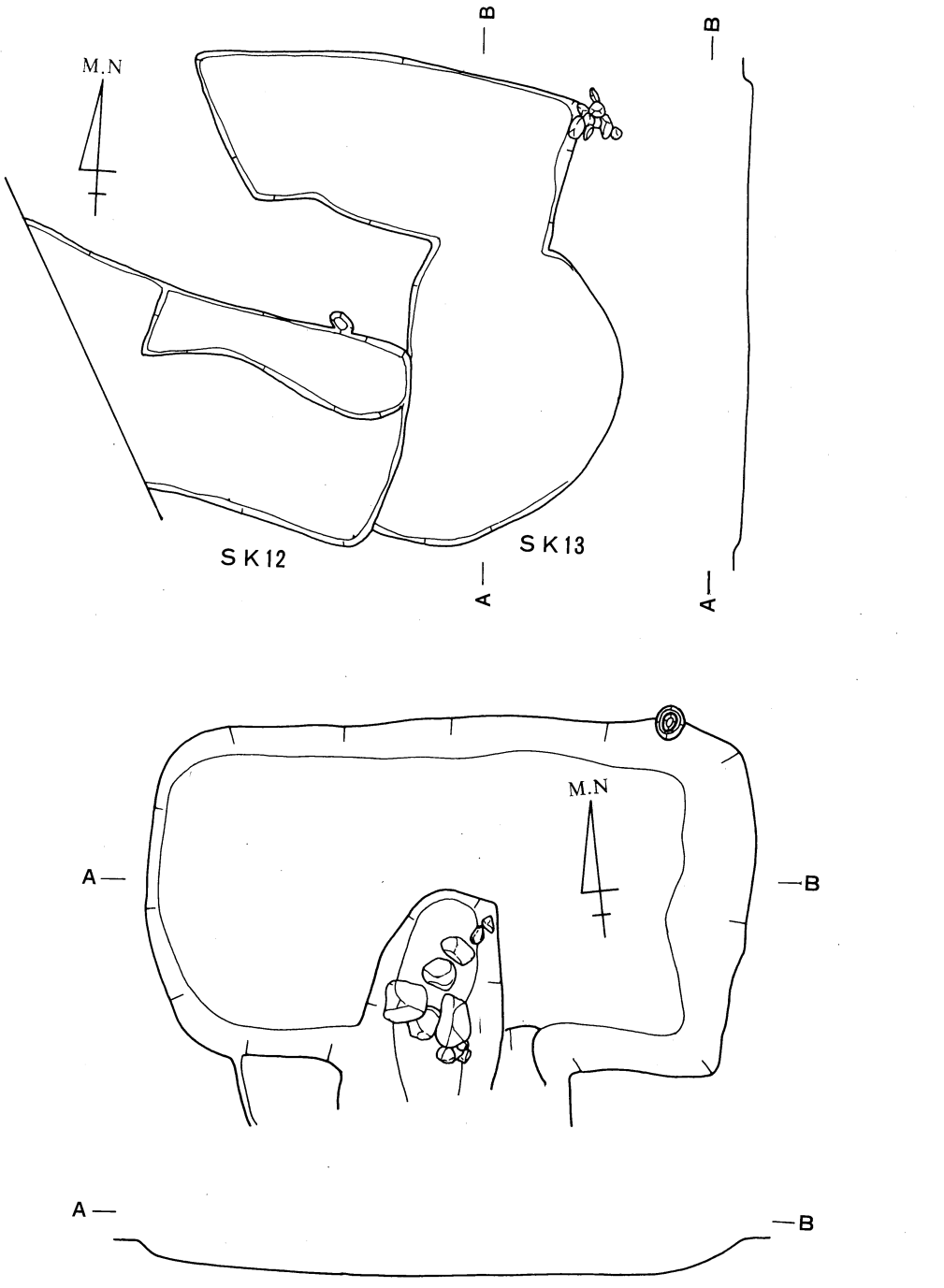
第205図　ＳＢ４



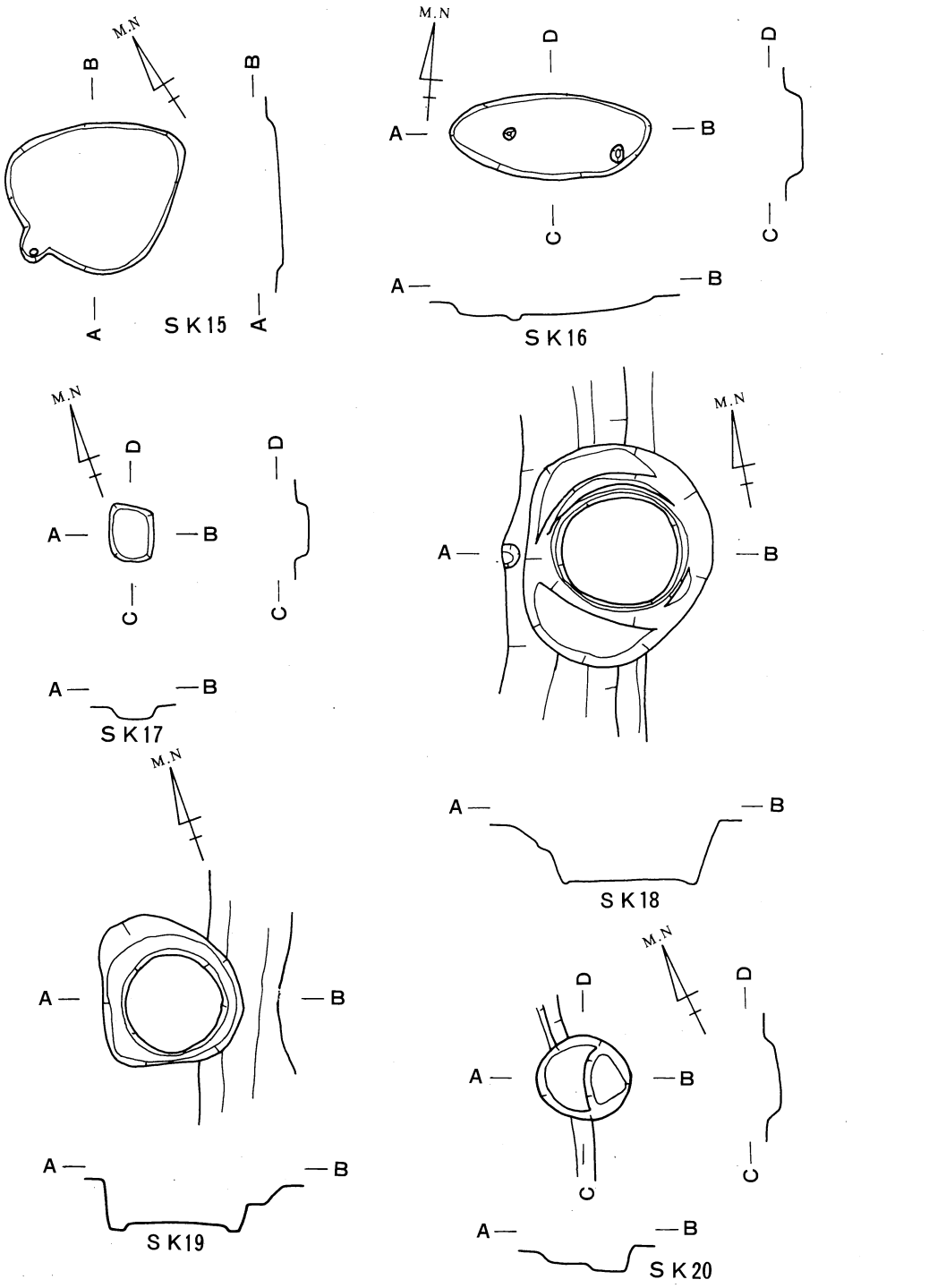
第206図　SK 1～5



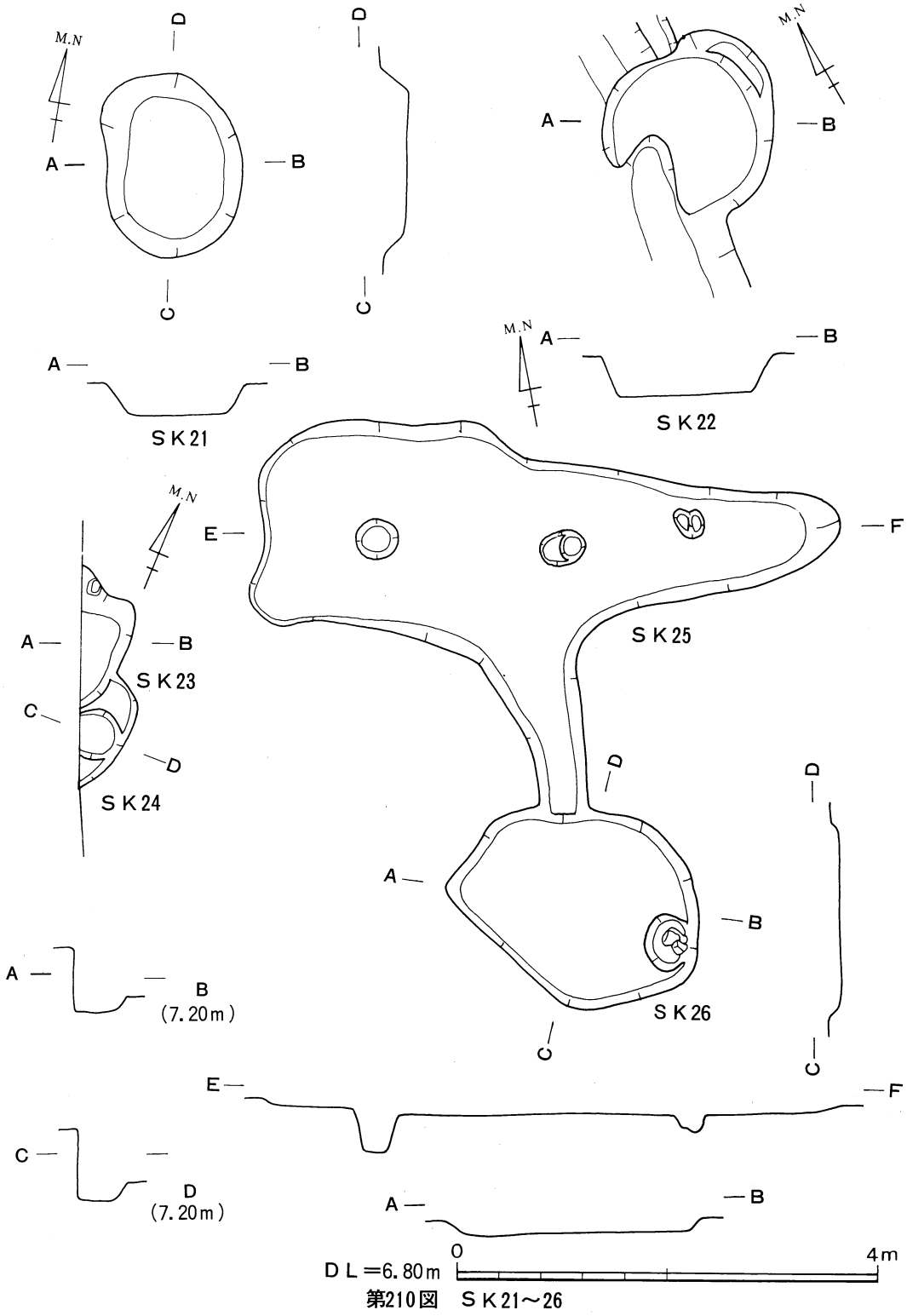
第207図　SK 6～9・11



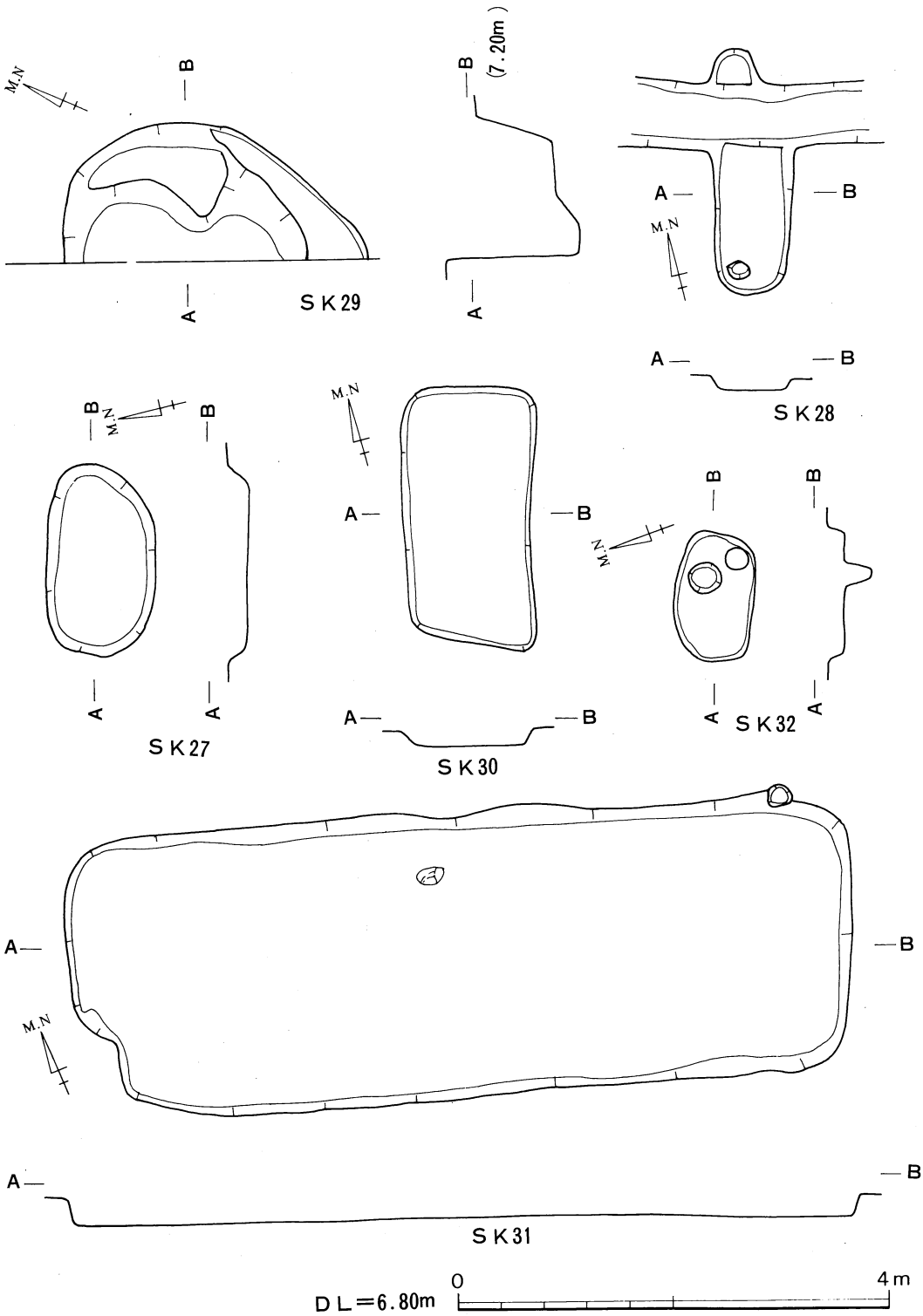
第208図　SK12～14



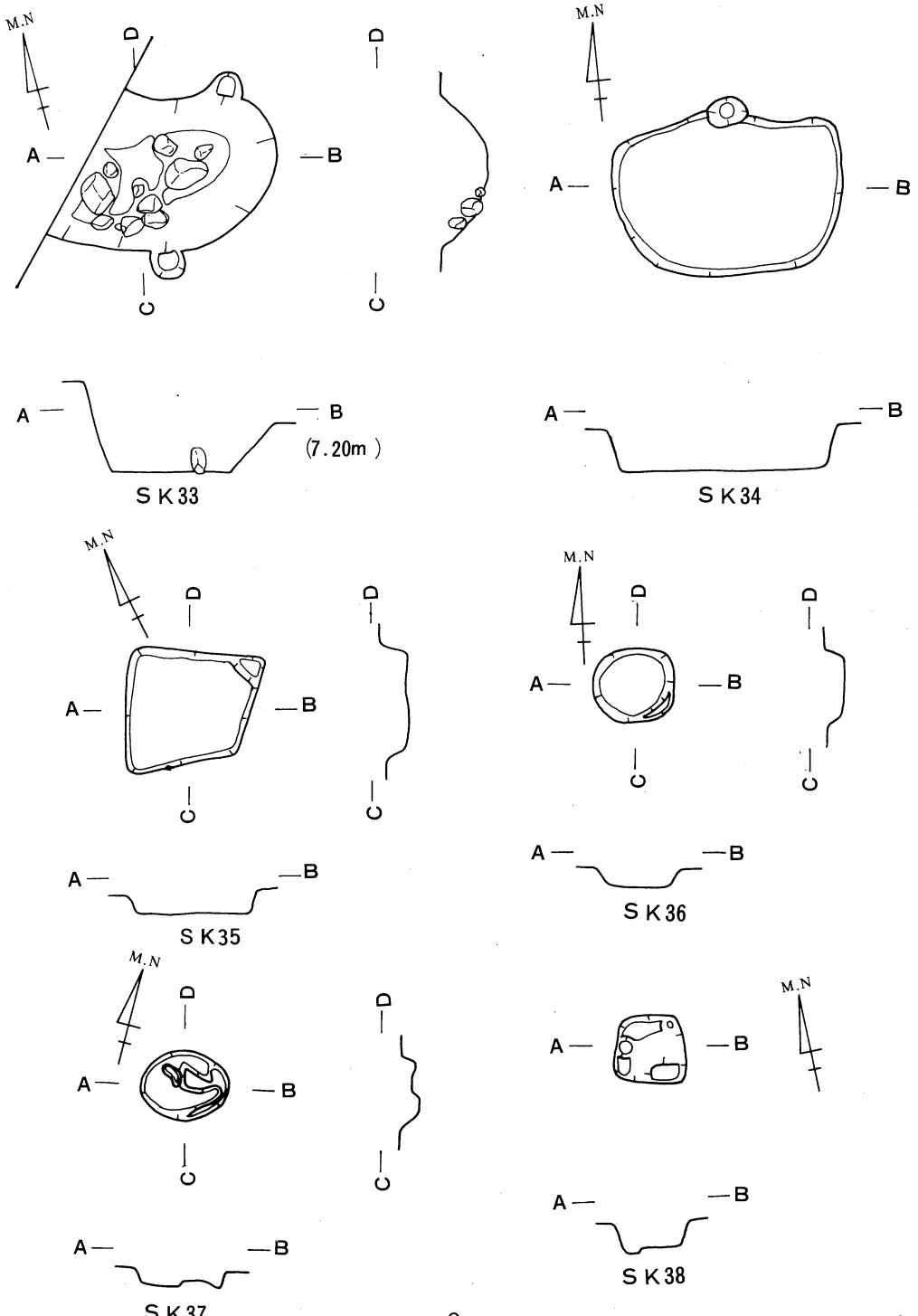
第209図　SK15～20



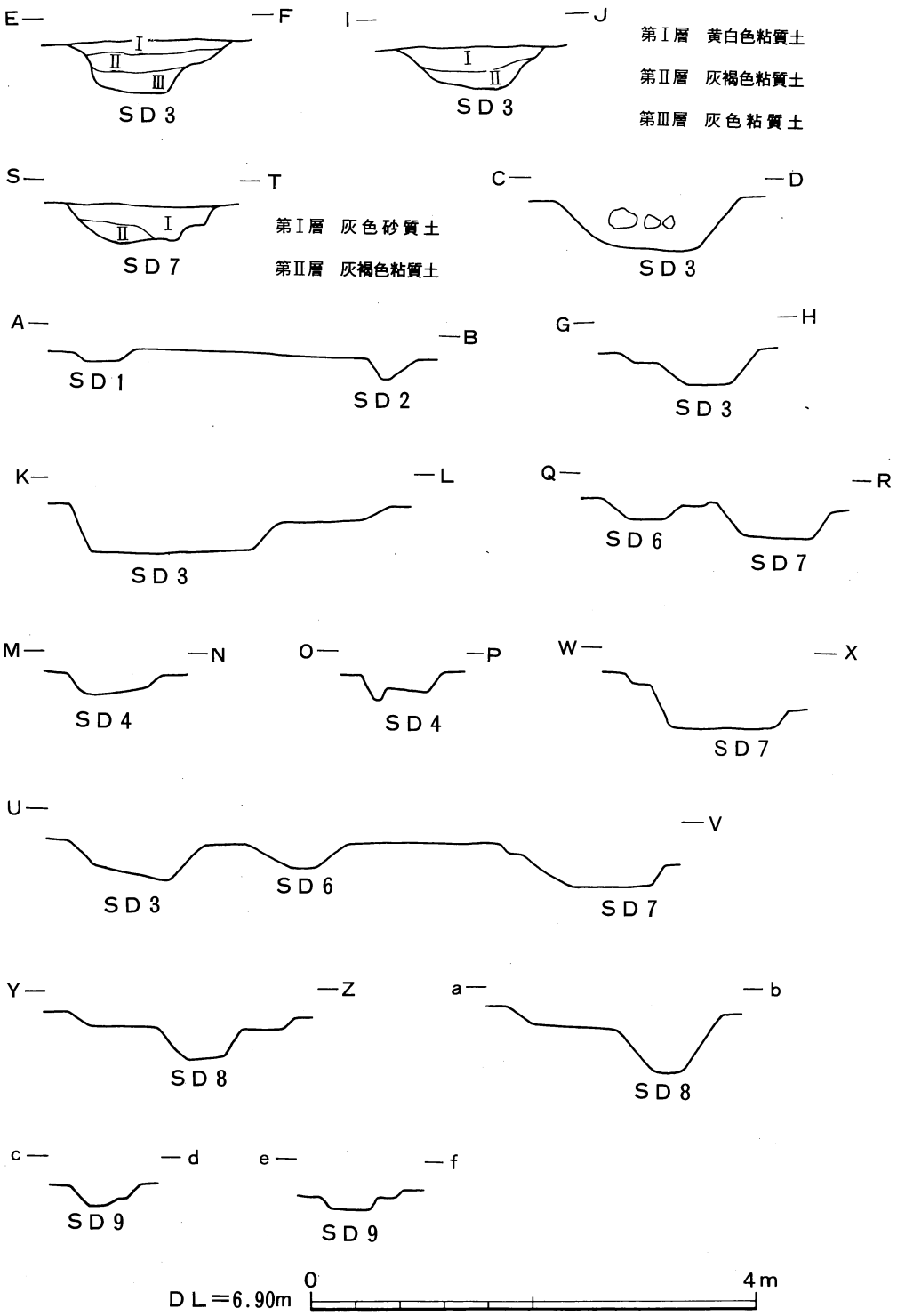
第210図　SK21～26



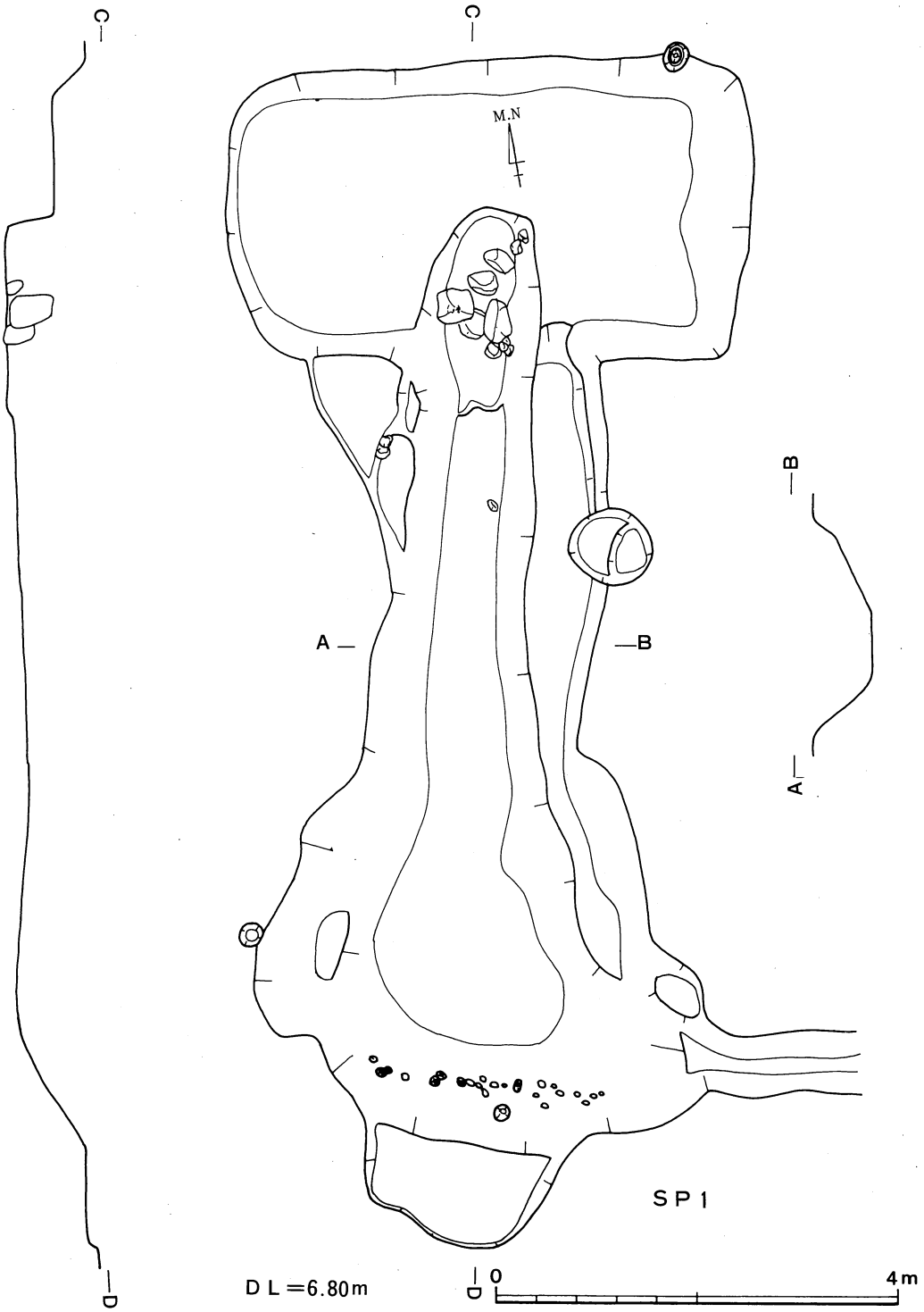
第211図　SK27～32



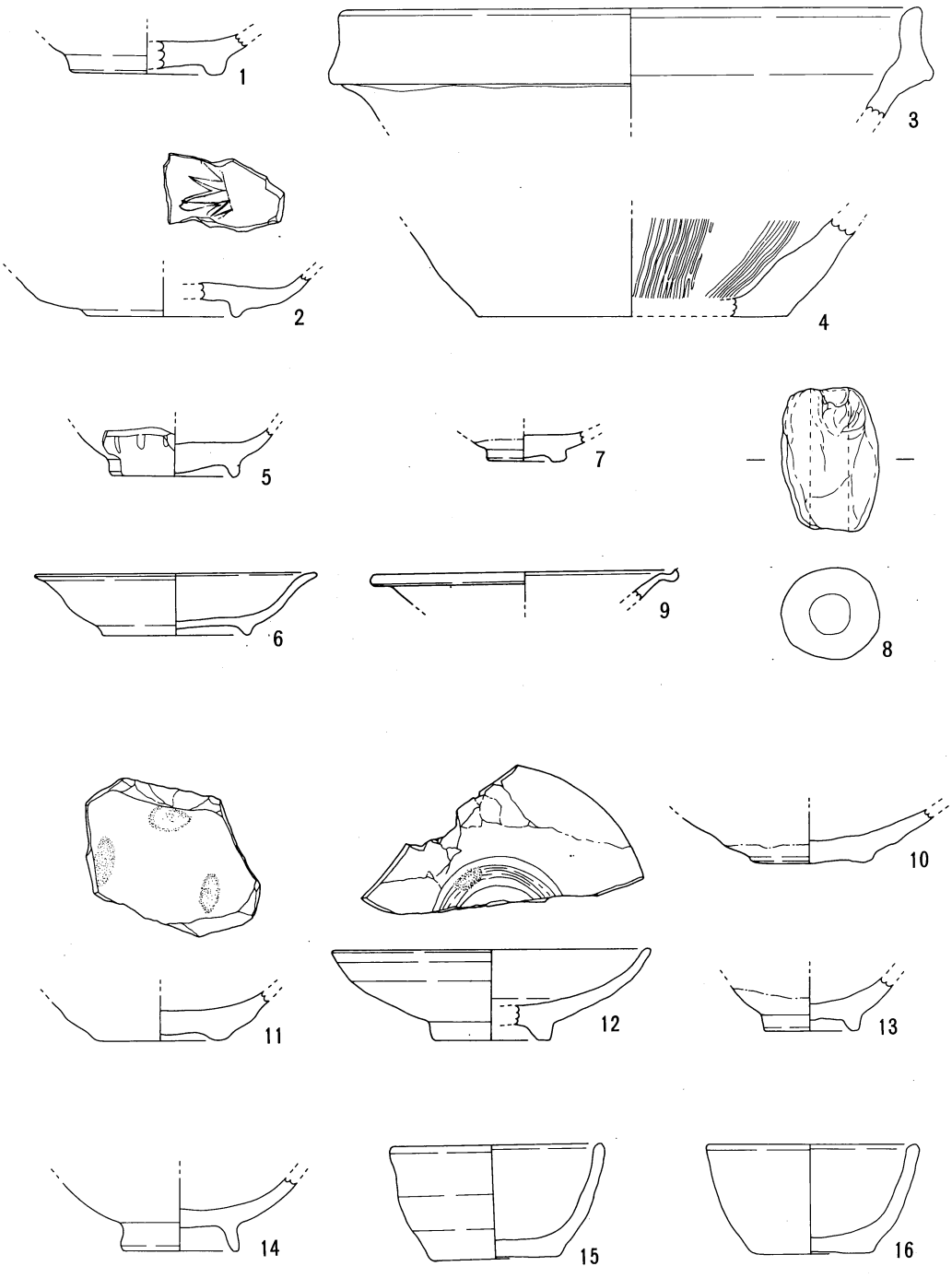
第212図　SK33～38



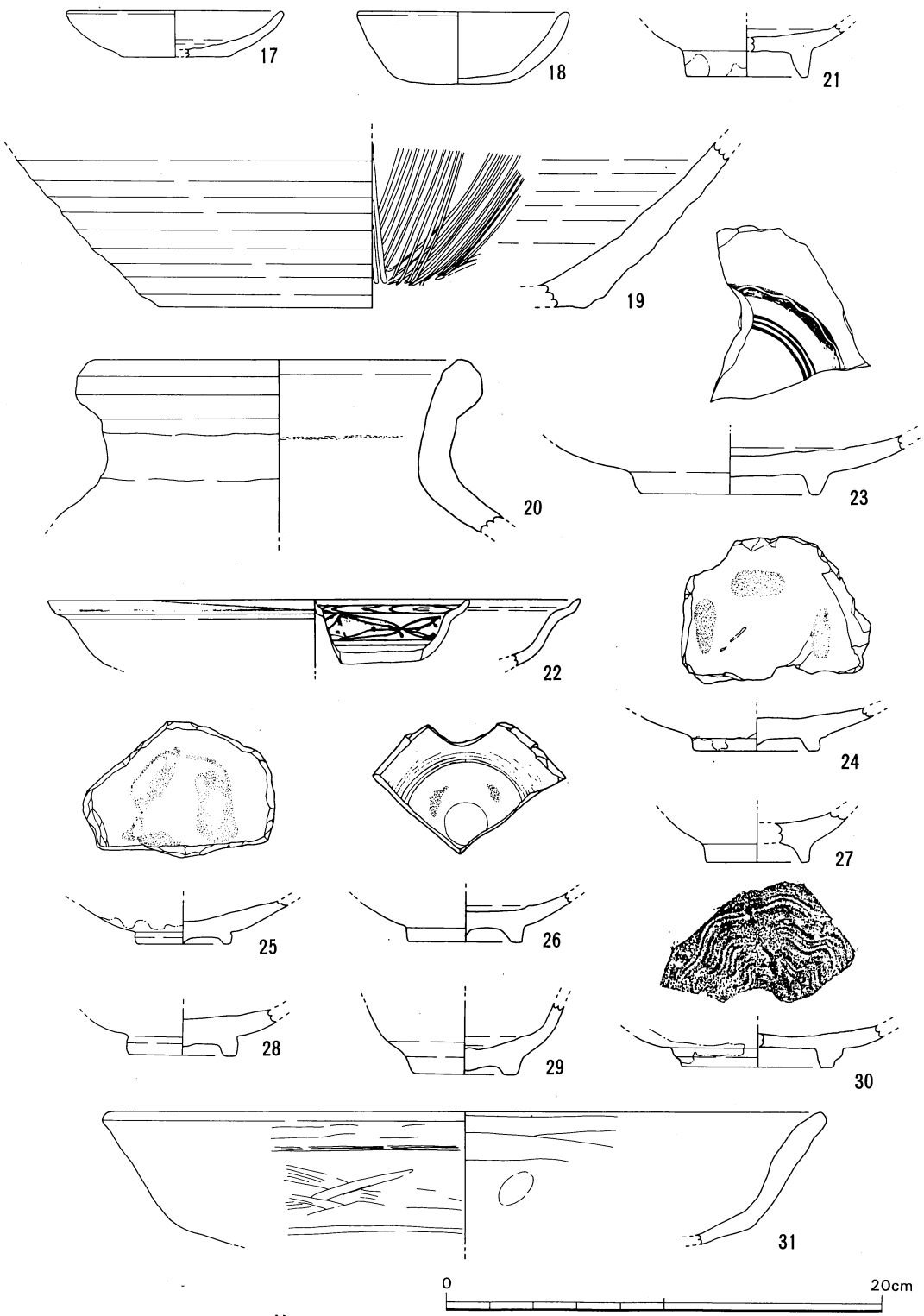
第213図　SD 1～4・6～9



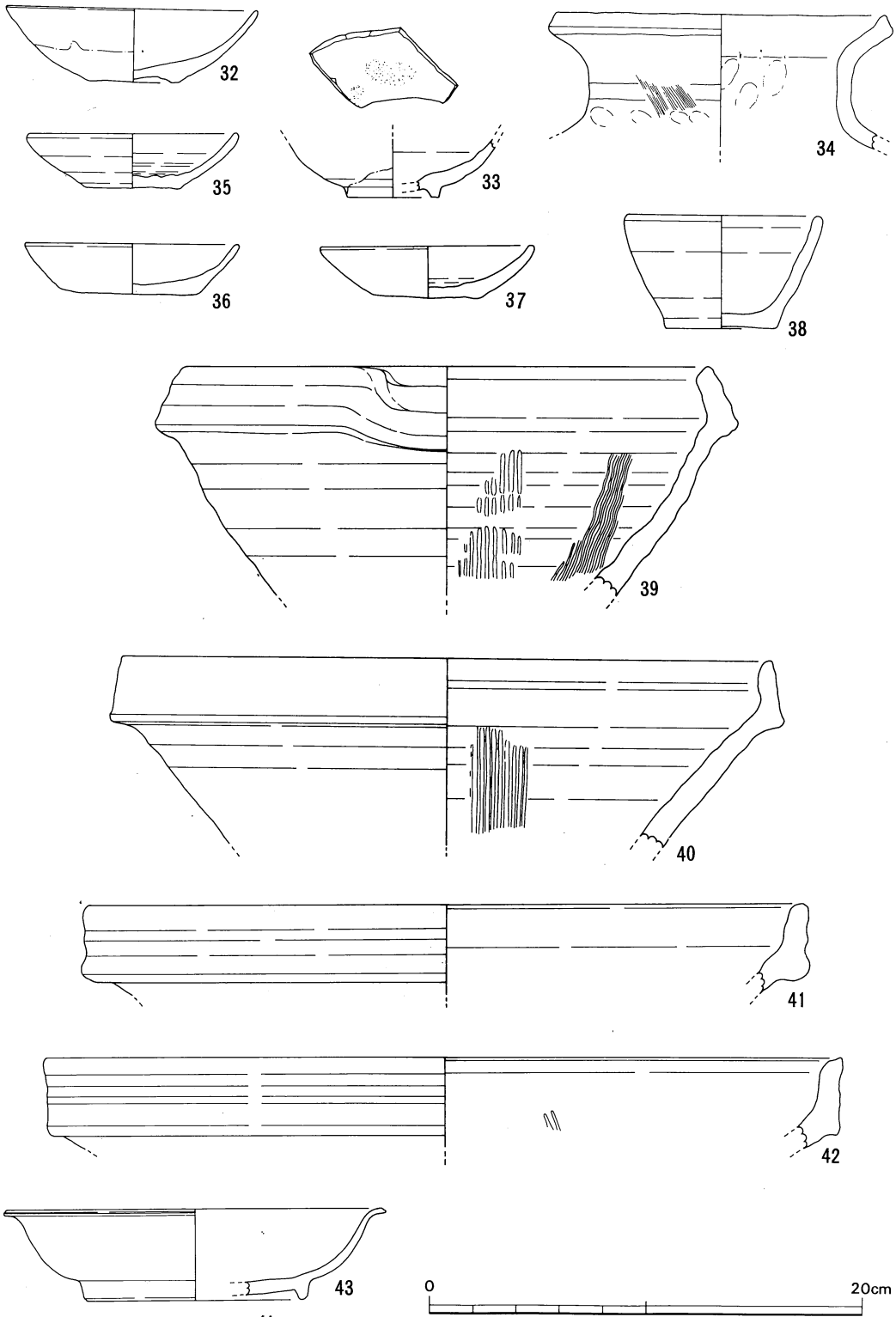
第214図　SP1



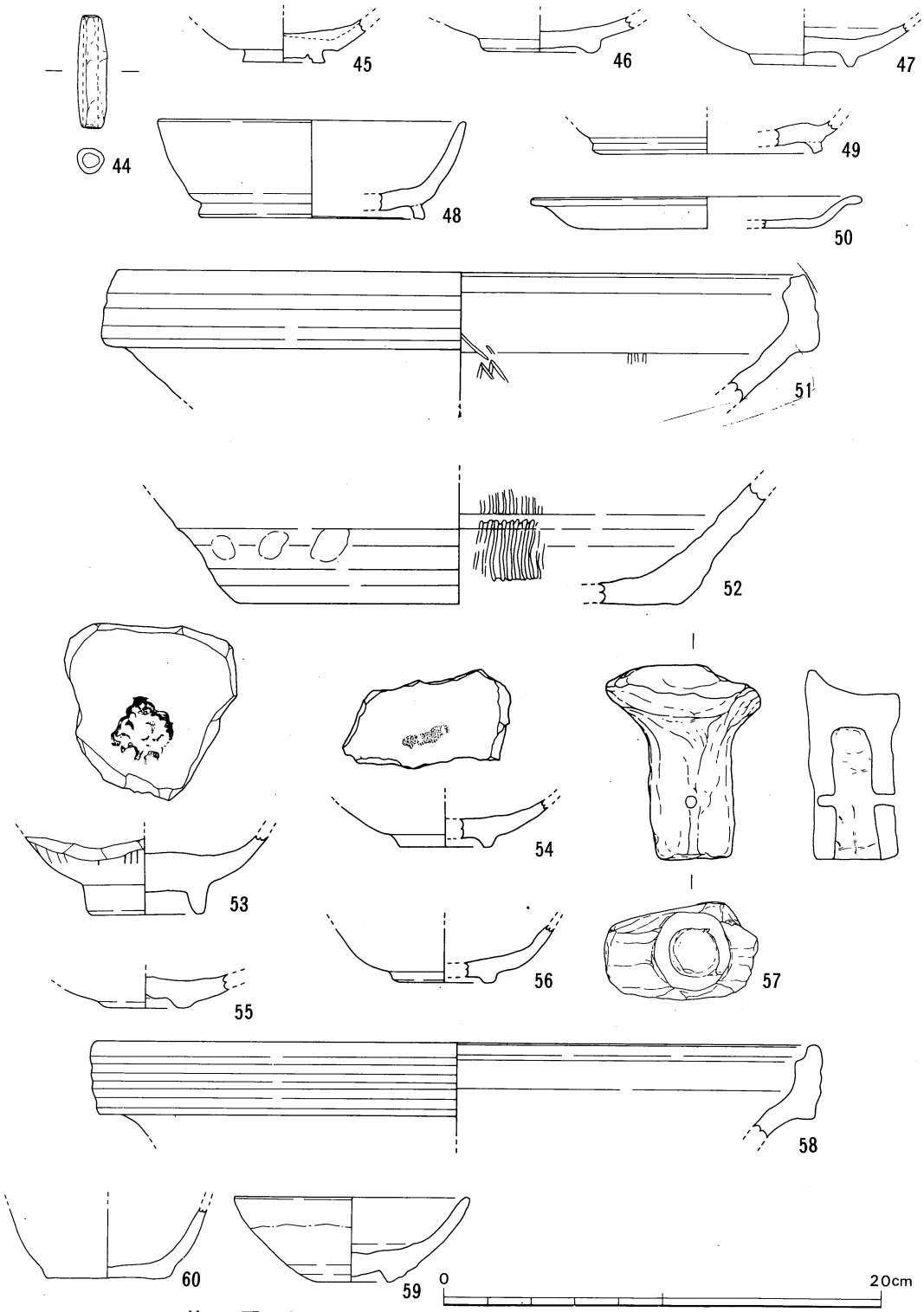
第215図　第Ⅰ～Ⅳ層出土遺物



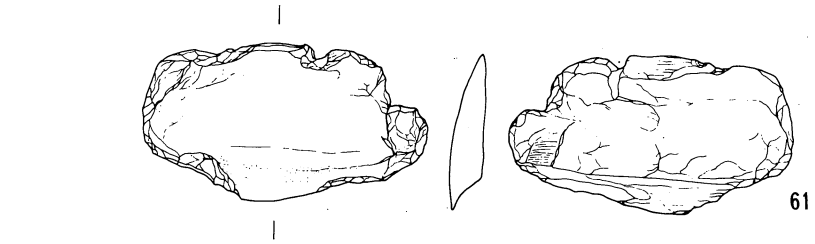
第216図　ＳＫ１・２・８出土遺物

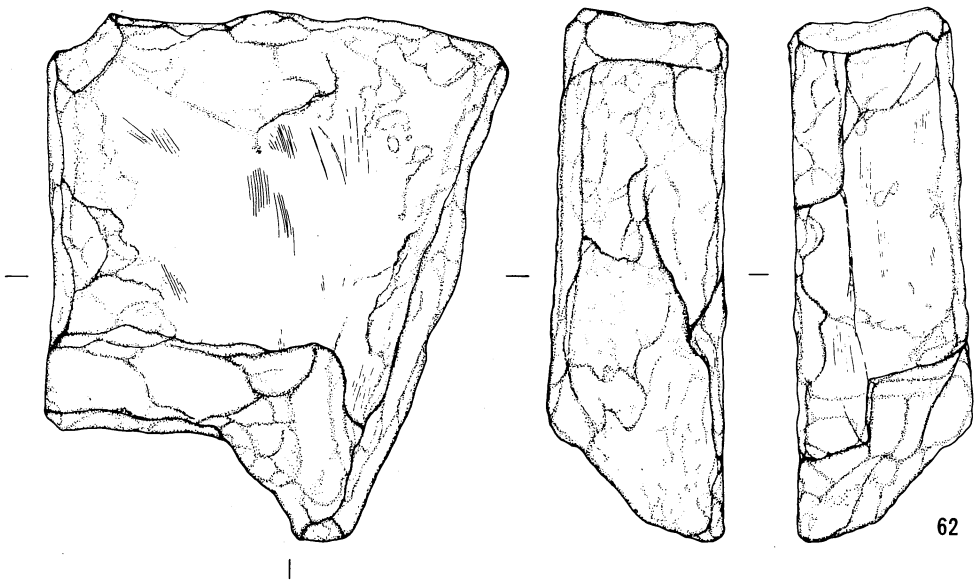


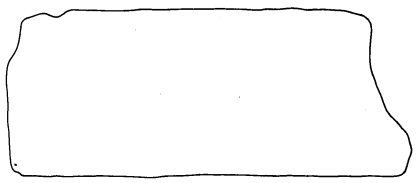
第217図　ＳＫ31・38、ＳＤ３出土遺物

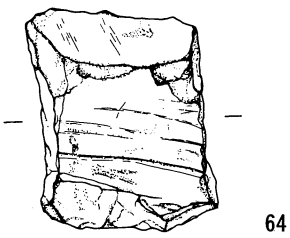


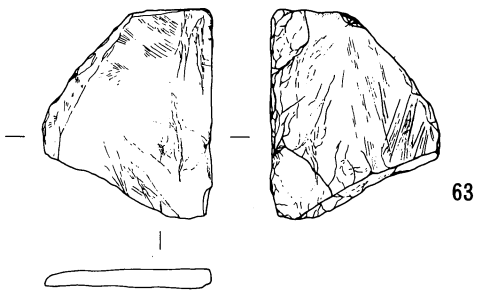
第218図　ＳＤ３・６～８、ＳＰ１、Ｐ２・３出土遺物

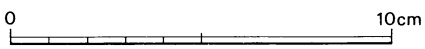




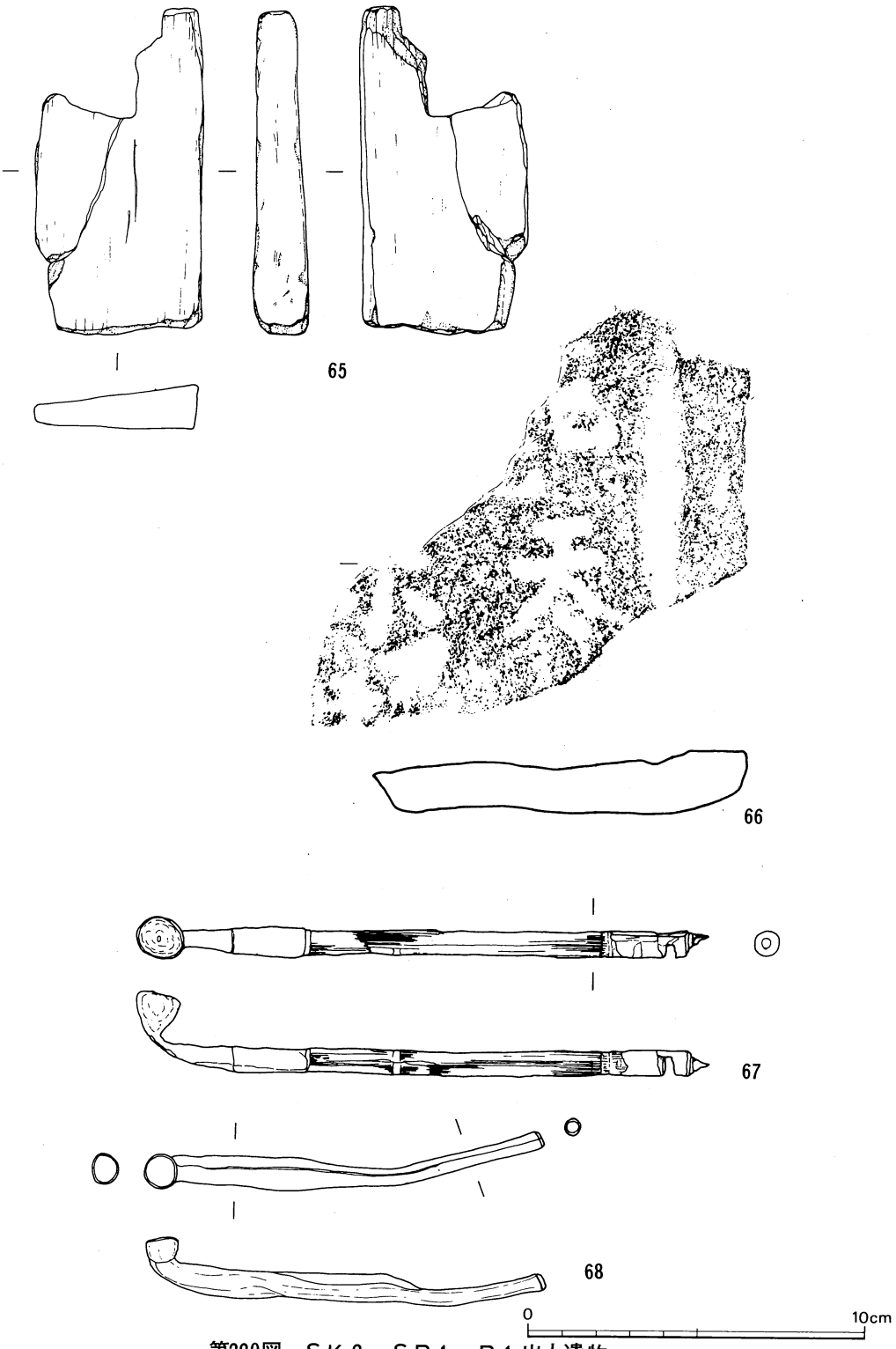




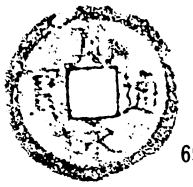


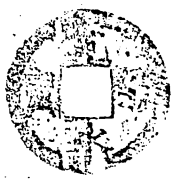


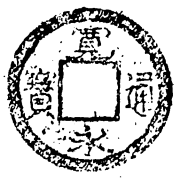
第219図　ＳＫ２・27、ＳＰ１出土遺物



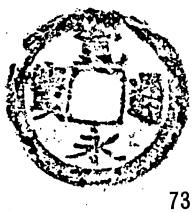
第220図　ＳＫ２、ＳＰ１、Ｐ１出土遺物

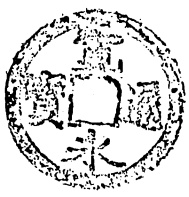

69


72


71

70


73


74

第221図　第Ⅲ層、ＳＫ１、ＳＤ１出土遺物

8. Loc. 32

Loc. 32

1．位置と調査経過

Loc. 32は、田村遺跡群の西端に位置し、小字横手前の南半部にあたる。当調査区の南はLoc. 31、北はLoc.33であり、両調査区とも中世の溝に囲まれた屋敷址を検出している。

当調査区を対象とした試掘調査は、昭和56年度より、その西半部から着手した。西半部においては、A～Jの10か所の試掘トレンチをグリッドラインに沿って設定し、遺構の検出に努めた。その結果、Cトレンチにおいて中世の掘立柱建物址を確認した他は、明瞭な遺構は確認できなかった。続いて、東半部の試掘調査も、グリッドラインに沿って、南北長60m及び40mの長大なトレンチを設定して行った。その結果、溝状遺構やピット群が検出され、また、下層にLoc. 31から北上する弥生の自然流路の存在も確認された。そこで、当調査区の西半部は全面を拡張して発掘調査するに至った。

2．調査概要

Loc. 32の試掘調査面積は、1,150㎡、発掘調査面積は、1,814㎡に及んだ。

当調査区の西半部では、検出遺構が僅少であり、中世の掘立柱建物址1棟を検出したCトレンチのみ北側へ拡張して発掘を行った。

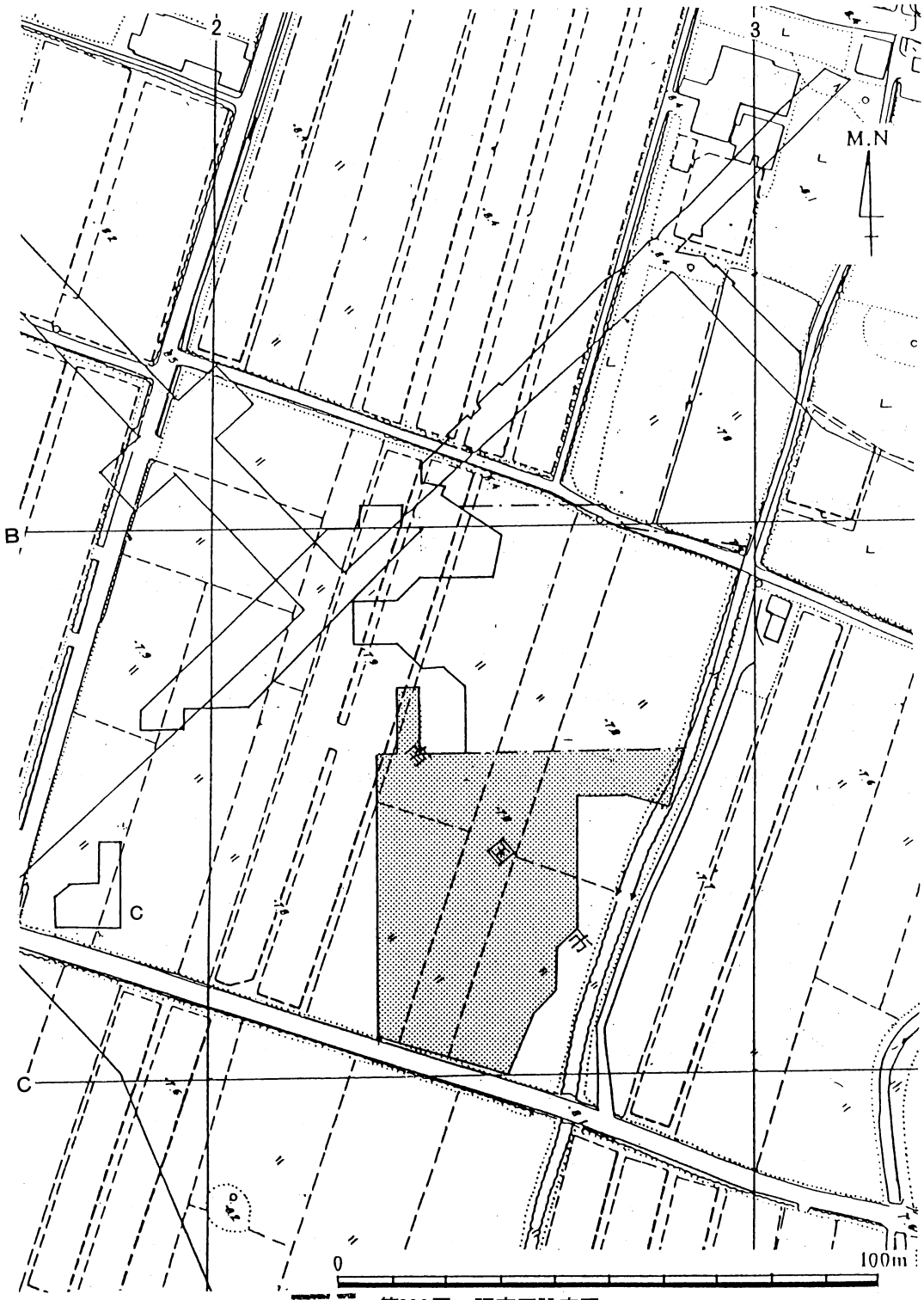
東半部においても、中世遺構の残存が中心的であり、掘立柱建物址3棟、土坑11基、溝状遺構3条を確認した。但し、古代の掘立柱建物址（ＳＢ２）も1棟検出され、また、下層では弥生の自然流路（ＳＲ３）及びそれに伴うＳＤ１も確認された。そのうち、ＳＲ３及びＳＤ１については『弥生編』で触れた。ＳＢ２も厳密には『古代編』で述べるべきではあるが、当調査区では1棟のみで、出土遺物も少ないため、便宜上ここで紹介することにした。

3．層序と出土遺物

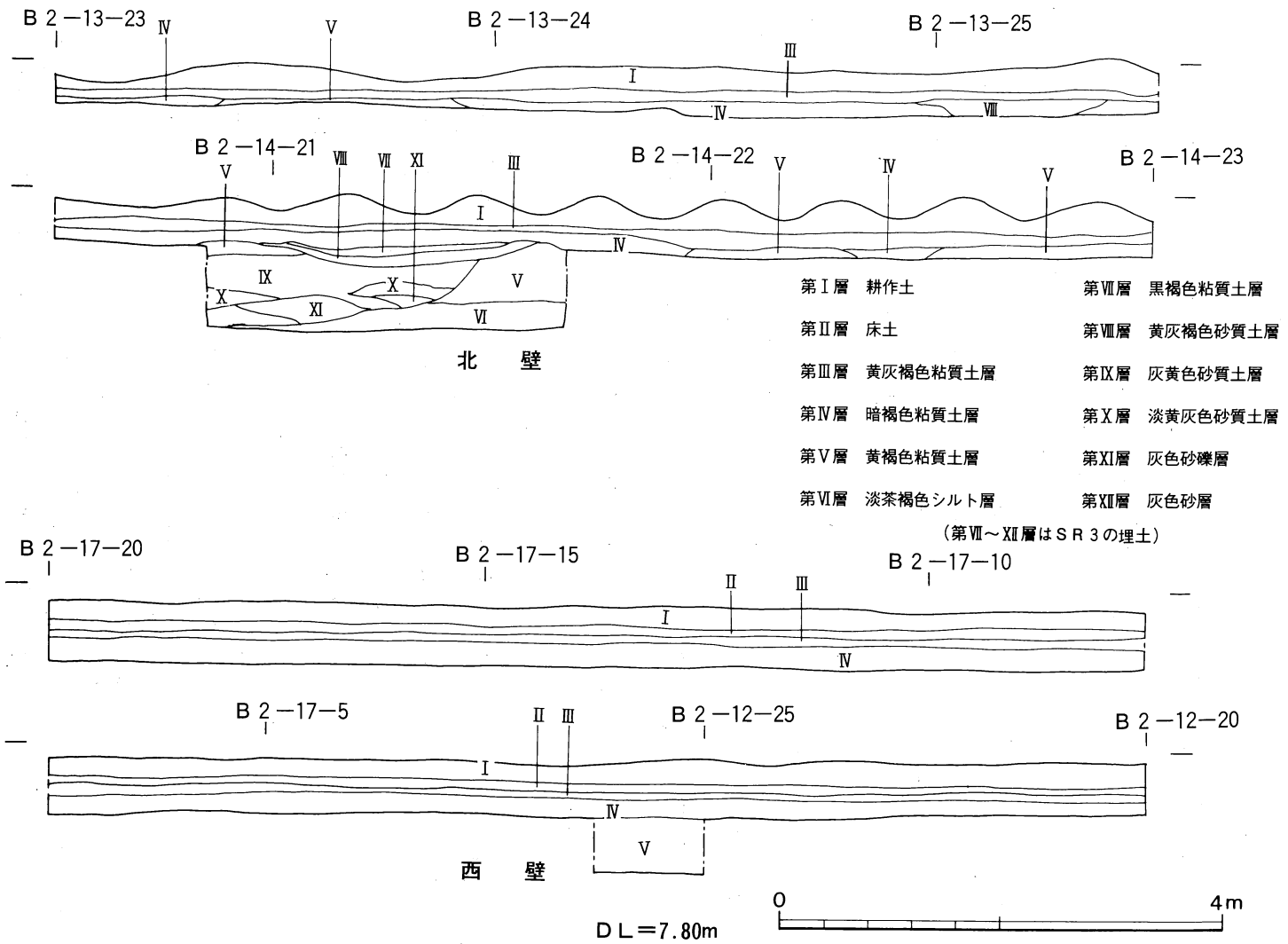
Loc. 32の基本的な層序は次の通りである。

第Ⅰ層　耕作土
第Ⅱ層　床土
第Ⅲ層　黄灰褐色粘質土層
第Ⅳ層　暗黄褐色粘質土層
第Ⅴ層　黄褐色粘質土層
第Ⅵ層　淡茶褐色シルト層

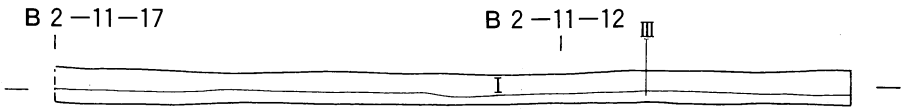
第Ⅱ層は、古代及び中世の遺物を若干包含しており（1～6）、第Ⅲ層からは、弥生土器（7、8）、土師器皿（9）・椀（10～18）・鍋（19）・甕（20）、須恵器杯（21）・蓋（22）、その他中世の諸遺物（23～29）が出土している。石器も2点（30、31）出土しており、30は弥生時代の



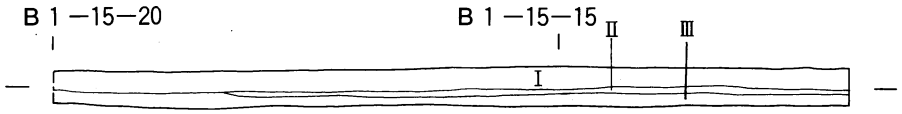
第222図　調査区設定図



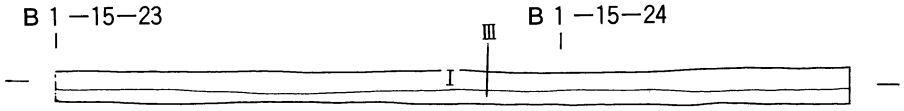
第223図　調査区セクション



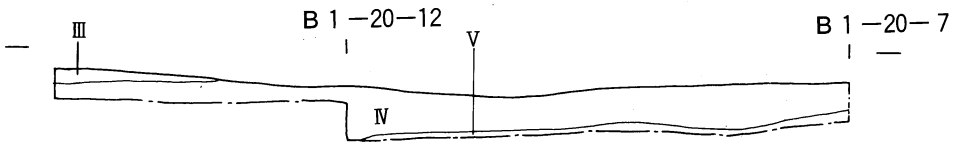
Aトレンチ　西壁



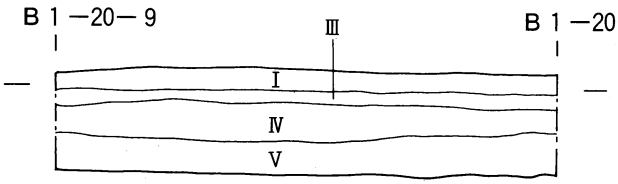
Bトレンチ　西壁



Cトレンチ　北壁



Dトレンチ　西壁



Eトレンチ　北壁

DL＝7.40m

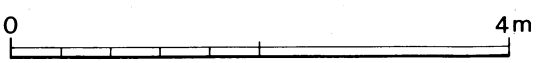
第Ⅰ層　耕作土

第Ⅱ層　床土

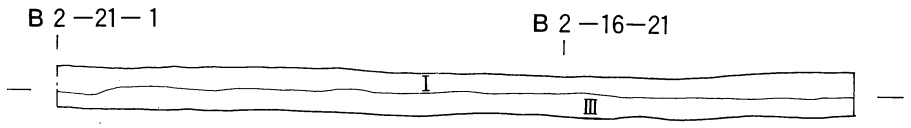
第Ⅲ層　黄灰褐色粘質土

第Ⅳ層　暗褐色粘質土

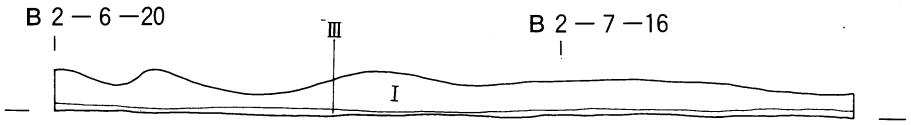
第Ⅴ層　茶褐色粘質土



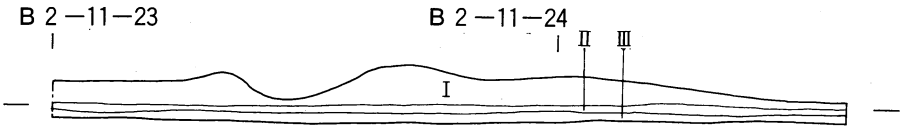
第224図　試掘トレンチセクション



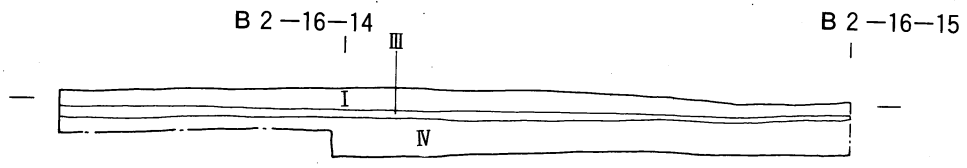
Ｆトレンチ　西壁



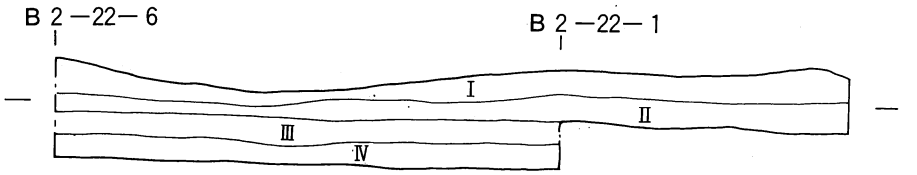
Ｇトレンチ　北壁



Ｈトレンチ　北壁



Ｉトレンチ　北壁



Ｊトレンチ　西壁

第Ⅰ層　耕作土

第Ⅱ層　床土

第Ⅲ層　黄灰褐色粘質土層

第Ⅳ層　暗褐色粘質土層

第225図　試掘トレンチセクション

ものと考えられるが、31の砥石は時期不明である。第Ⅳ層上面が古代及び中世の遺構検出面であり、第Ⅴ層上面が弥生の自然流路の検出面であった。但し、第Ⅱ～Ⅳ層は調査区の北部では堆積が薄くなっており、それに反比例して、第Ⅴ層上面のレベルは北に行くにしたがって高くなっていた。第Ⅳ層の下位からは弥生遺物の出土が目立ったが、これは自然流路に関連したものと考えられる。第Ⅴ層以下は無遺物層であった。

4．遺構と遺物

掘立柱建物址

ＳＢ１

ＳＢ１は、調査区の中央部北寄りに位置し、第Ⅳ層上面において検出された。３×３間（南側は４間）の東西棟であり、梁間5.40ｍ、桁行6.70ｍを測る。棟方向はＮ－72°－Ｗを指す。梁間の柱間距離は1.80ｍとほぼ均一であるが、桁行の柱間距離は北側と南側では差異がみられる。なお、東端には廂を有していたものと考えられ、幅1.10ｍの張り出しがみられる。

各柱穴の平面形は直径30㎝前後の円形を呈し、確認できた柱痕は直径10㎝を測る。埋土は灰褐色粘質土で、深さは40㎝を超えるものが多い。

柱穴からは、土師質土器片が若干出土したが、図示できたのはＰ１出土の小皿（32）のみであった。また、Ｐ２・３からは柱根と考えられる小木片が出土した。

ＳＢ１は、中世の掘立柱建物址と判断できるものの、柱穴からの出土遺物は僅少であり、また、包含層出土遺物も時期的に幅が大きく、具体的な年代は不明である。

ＳＢ２

ＳＢ２は、調査区の中央部南寄りに位置し、第Ⅳ層上面において検出された。４×４間のほぼ正方形を呈する総柱の建物址である。厳密には東西8.70ｍ、南北8.40ｍを測り、柱間距離はほぼ均一であるが、東西ラインでは東半部の間隔が西半部に比して大きくなっている。長軸方向は、Ｎ－66°－Ｗを指し、ＳＢ１より６°程東へ振っている。

各柱穴の平面形は直径30㎝前後の円形あるいは不整円形を呈し、確認できた柱痕の直径は10～15㎝を測る。埋土は灰黄褐色粘質土で、深さは25～50㎝と一定でないが、概して30㎝前後のものが多い。

柱穴からは、土師器及び須恵器片が出土した。うち、図示できたのは、Ｐ１・２・３・６出土の土師器椀（35）・甕（36）・杯（33）・皿（34）であった。また、Ｐ４からは砥石（38）が出土しており、Ｐ５からは柱根と考えられる小木片も出土した。

柱穴出土の土師器は時期的には10～11世紀に属するものと考えられ、ＳＢ２は当該期に機能

した建物と判断される。この建物の性格としては、総柱の建物ということから、現時点では倉庫と考えられている。なお、ＳＢ２の中心部の柱穴はＳＫ９を切っている。

ＳＢ３

ＳＢ３は、調査区の南端部で、第Ⅳ層上面において検出された。ＳＢ２の南西部に位置する。東西２間（北側は１間）、南北２間の若干南北に長い南北棟であり、東西3.00ｍ、南北3.60ｍを測る。長軸方向は、Ｎ－16°－Ｅを指し、ＳＢ１とほぼ直交する関係にある。柱穴の配置は不規則であり、柱間距離も、最長部で3.00ｍ、最短部で1.50ｍを測る。

各柱穴の平面形は直径20㎝前後の円形あるいは不整円形を呈し、深さも20㎝前後であり、概して小規模である。埋土はＳＢ１と同じく灰褐色粘質土であり、埋土中より若干の土師質土器片が出土したが、いずれも細片で図示できるものはなかった。

ＳＢ３は、全体的な規模も小さく、また、柱穴の配置においても規格性に欠け、粗雑な作りの掘立柱建物である。時期的には北のＳＢ１に併行したものと推定される。

ＳＢ４

ＳＢ４は、試掘の段階に、Ｃトレンチ北部の第Ⅳ層上面において、一部が検出された。同遺構を追って、トレンチを条件の許す限り北へ拡張した結果、２×２間の掘立柱建物址を確認できた。しかし、その全容は解明できなかった。ＳＢ４の確認部分の規模は、東西3.60ｍ、南北4.00ｍを測る。長軸方向は、Ｎ－17°－Ｅを指し、ＳＢ３とほぼ同一方向である。

各柱穴の平面形は直径30㎝前後の円形あるいは長円形を呈し、深さもほぼ均一に30㎝前後を測る。柱間距離は、東西ラインでは1.80ｍ、南北ラインでは2.00ｍを標準としている。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より土師質土器片が若干出土したが、いずれも細片であり、図示できるものはなかった。

ＳＢ４の全容は不明であるが、出土遺物からして、中世の掘立柱建物址と考えられ、棟方向の関係からも、ＳＢ１・３と同時期のものである可能性が強い。

土坑

ＳＫ１

ＳＫ１は、調査区の西端部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は長方形を呈し、長径1.25ｍ、短径0.70ｍ、深さ0.12ｍを測る。長軸方向はＮ－17°－Ｅを指す。底面は、ほぼ平坦であるが、中央部西寄りに長円形の落ち込みがみられ、最深部は0.17ｍを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は灰色細砂であり、出土遺物は皆無であった。

ＳＫ２

ＳＫ２は、ＳＢ１の北に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は隅丸方形を呈し、長径1.25ｍ、短径1.08ｍ、深さ0.30ｍを測る。長軸方向はＮ－26°－Ｅを指す。底面はほぼ平坦であるが、中央部が若干凹状を呈している。壁は、断面Ｕ字形に立ち上がっているが、西側では深さ８㎝付近で段をなしている。埋土は暗灰色粘質土であり、埋土中より土師質土器の細片が出土している。

ＳＫ２は、ＳＢ１に何らかの関連をもった遺構である可能性が強いが、その性格は特定できない。

ＳＫ３

ＳＫ３は、ＳＢ１の東に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は隅丸方形を呈し、長径0.77ｍ、短径0.67ｍ、深さ0.10ｍを測る。長軸方向はＮ－20°－Ｗを指す。底面は平坦で、壁の立ち上がりも緩やかである。埋土は黒黄灰色粘質土で、埋土中より弥生土器の細片が若干出土した。しかし、時期的には、南のＳＫ４と同じく中世の土坑と考えられ、ＳＢ１とのつながりが予想される。

ＳＫ４

ＳＫ４は、ＳＢ１の東で、第Ⅳ層上面において検出された。ＳＫ３の南隣に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長径0.80ｍ、短径0.67ｍ、深さ0.12ｍを測る。長軸方向は、Ｎ－19°－Ｗを指し、ＳＫ３と酷似している。底面及び壁の状況ともＳＫ３と同様であり、埋土も黄灰色粘質土である。埋土中より、土師器、土師質土器及び瓦質土器が出土したが、いずれも細片であり、図示できるものはなかった。

時期的には、中世のものと判断され、ＳＫ２・３とともにＳＢ１に付随していた可能性が強い。

ＳＫ５

ＳＫ５は、ＳＢ１の南に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は東西に細長い帯状を呈する遺構であり、溝状遺構とした方が妥当かもしれない。長径3.41ｍ、短径0.18ｍ、深さ0.10ｍを測り、長軸方向はＮ－62°－Ｗを指す。底面はほぼ平坦で、壁は断面Ｕ字形を呈して立ち上がる。西端部はピット状に深さ0.22ｍ程落ち込んでいる。埋土は、暗灰色粘質土で、弥生土器の細片を若干含んでいたが、弥生時代の遺構とは考えられない。

ＳＫ６

ＳＫ６は、調査区の東端部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は不整長円形

を呈し、長径1.17m、短径0.75m、深さ0.15mを測る。長軸方向はN－71°－Wを指す。底面は平坦であり、壁の立ち上がりも極めて緩やかである。埋土は淡黄褐色土で、出土遺物は皆無であった。

SK7

SK7は、SB2の北に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は不整長円形を呈し、長径1.28m、短径0.85m、深さ0.10mを測る。長軸方向はN－16°－Eを指す。底面には、若干の起伏がみられ、中央部西端には、ピット状のわずかな落ち込みがみられる。壁の立ち上がりも極めて緩やかである。埋土は黄灰色粘質土で、出土遺物は皆無であった。

SK8

SK8は、SB2の西に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は南北に長い帯状を呈し、長径2.50m、短径0.25m、深さ0.20mを測る。長軸方向はN－46°－Eを指す。底面には起伏がみられ、壁は断面U字形を呈して立ち上がる。埋土は黄灰色粘質土で、出土遺物は皆無であった。

SK9

SK9は、SB2の中央部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は不整長円形を呈し、長径1.90m、短径0.38m、深さ0.10mを測る。底面は平坦で、壁は断面U字形に直線的に短く立ち上がる。埋土は黒黄色粘質土であり、出土遺物は皆無であった。

SK9は、SB2の中心部の柱穴によって切られており、時期的にはSB2より遡るものと考えられるが、小規模な土坑であり、特別の機能を有していたものとは考えられない。

SK10

SK10は、SB2の東に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は細長い長円形を呈し、長径2.97m、短径0.34mを測る。深さは4cmと極めて浅い。長軸方向はN－36°－Eを指す。底面は平坦で、埋土は黄灰褐色粘質土であり、出土遺物は皆無であった。

SK11

SK11は、SB2の南で、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は不定形であり、長径1.31m、短径0.70m、深さ0.25mを測る。底面の形状も不規則で凹凸が激しく、ピット状の窪みが4か所ある。埋土は黄灰褐色砂質土であり、埋土中からの出土遺物は皆無であった。

溝

ＳＤ２

ＳＤ２は、調査区の北西部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。調査区北端から西南西に延びる細溝であり、幅0.30ｍ、深さ６㎝を測る。確認長は18.40ｍである。埋土は黄灰色粘質土であり、出土遺物は弥生土器の細片１点のみであった。しかし、弥生時代の溝とは考えられず、性格、時期ともに判然としない遺構である。

ＳＤ３

ＳＤ３も、調査区の北西部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。調査区北西端から東へ横走する溝状遺構である。幅0.24ｍ、深さ８㎝の細溝であり、確認長は12.20ｍである。埋土はＳＤ２と同じく黄灰色粘質土であるが、出土遺物は皆無であった。

ＳＤ４

ＳＤ４は、調査区の中央部を南北に縦走する溝状遺構であり、第Ⅳ層上面において検出された。幅0.80ｍ、深さ８㎝を測り、確認長は35ｍである。埋土は青灰色砂であり、中に小礫を多く含んでいた。平面形が長大な割には浅く、砂層の上面に礫が面を出しており、当初は畦畔の遺構かとも考えられた。しかし、全体的には屈曲が認められ、南端はＳＰ１につながっていることから、やはり、溝状遺構と捉えた方が適当と考えられる。出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器等であったが、図示できたのは須恵器杯（37）のみであった。

ＳＤ４は、検出状況及び出土遺物からして、古墳時代から古代にかけての溝と考えられるが、全体的に浅く、溝としての機能をどれ程有していたかは疑問としなければならない。また、埋土中にみられた多くの礫の堆積は、溝廃絶に伴うものかどうかも即断できない。

性格不明遺構

ＳＰ１

ＳＰ１は、調査区の西部中央に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。ＳＤ４の南に広がる不定形の浅い落ち込みである。深さはＳＤ４と同じく８㎝であるが、平面形は最大幅8.40ｍを測る程に肥大している。平面形はいびつであり、単なる地形の落ち込みとも考えられるが、ＳＤ４に接続しているため、一応ＳＰ１として取り上げた。出土遺物も、ＳＤ４と同じく、弥生土器、土師器、須恵器の類であるが、いずれも細片であり、図示できるものはなかった。

5．まとめ

Loc. 32において検出された中世遺構のうち、主要なものは、ＳＢ１・３・４である。中でもＳＢ１は、その規模・形状から考えて掘立柱住居址と推定され、また、ＳＢ４もそれに準ずるものとして捉えることが許されよう。これに対し、ＳＢ３は掘立小屋的な建物であったといえる。その他の土坑や溝も、大半は中世以降のものと考えられるが、出土遺物も限られており、性格が明瞭なものはなかった。

古代遺構としては、１棟だけではあるが、ＳＢ２がある。同遺構は、古代後期の倉庫址と考えられ、田村遺跡群における当該期の景観を考察する上での一資料を提供している。なお、ＳＢ２とＳＤ４、ＳＰ１との関連については、現時点では共通項が見い出し得ないが、両者が併存していた可能性も捨て切れない。

第48表　掘立柱建物址計測表

挿図番号	遺構番号	規模			棟方向	面積 (m²)	備考
		梁(間)×桁(間)	梁 × 桁(m)	柱間距離(m)			
第226図	ＳＢ 1	3 × 4	5.40 × 7.80	1.10 ～ 2.35	N－72°－W	42.1	
第227図	ＳＢ 2	4 × 4	8.40 × 8.70	1.90 ～ 2.40	N－66°－W	73.1	
第228図	ＳＢ 3	2 × 2	3.60 × 3.00	1.50 ～ 3.00	N－16°－E	10.8	
〃	ＳＢ 4	2 × 2	4.00 × 3.60	1.65 ～ 2.05	N－17°－E	14.4	

第49表　土坑計測表

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第229図	ＳＫ 1	長方形	1.25	0.70	0.12	N－17°－E	逆台形	
〃	ＳＫ 2	隅丸方形	1.25	1.08	0.30	N－26°－E	舟底形	
〃	ＳＫ 3	〃	0.77	0.67	0.10	N－20°－W	皿形	
〃	ＳＫ 4	〃	0.80	0.67	0.12	N－19°－W	〃	
〃	ＳＫ 5	帯状	3.41	0.18	0.10	N－62°－W	Ｕ字形	
〃	ＳＫ 6	不整長円形	1.17	0.75	0.15	N－71°－W	逆台形	
〃	ＳＫ 7	〃	1.28	0.85	0.10	N－16°－E	皿形	
第230図	ＳＫ 8	帯状	2.50	0.25	0.20	N－46°－E	Ｕ字形	
〃	ＳＫ 9	不整長円形	1.90	0.38	0.10	N－43°－E	〃	
〃	ＳＫ10	楕円形	2.97	0.34	0.04	N－36°－E	皿形	
〃	ＳＫ11	不定形	1.31	0.70	0.25	N－47°－W	〃	

第50表　包含層出土土器観察表

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手法	備考
1	第Ⅱ層	土師器 椀	—— (3.2) —— 6.0	底部は「ハ」の字状の高台を貼付ける。端部は外傾する面をなす。体部は内湾気味に立ち上がる。		
2	〃	〃	17.0 (3.5) —— ——	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。端部は丸くおさめる。		

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
3	第Ⅱ層	土師質土器 杯	—— (2.1) —— 6.6	底部は回転糸切り。	内外面ともロクロナデ調整。	
4	〃	土師質土器 鍋	42.6 (7.0) —— ——	体部は内湾気味に真上へ立ち上がる。端部は水平な面をなす。	口縁部内外面とも横方向のナデ調整。体部は斜格子の叩目。	
5	〃	土錘	全長 3.5 直径 1.2 重量(g) 3.7	円筒形を呈す。		土師質。
6	〃	擂鉢	28.0 (4.2) —— ——	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部上下を拡張する。	条線は単位数不明。 内外面ともロクロナデ調整。	備前焼。

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手法	備考
7	第Ⅲ層	弥生土器	—— (2.3) —— 5.5	若干上げ底気味の底部。		
8	〃	弥生土器 高杯	—— (4.6) 4.8 ——		脚部内面に指頭圧痕有り。	
9	〃	土師器 皿	10.6 1.7 —— 6.0	底部は内湾して外方に立ち上がる。	内外面ともロクロナデ調整。 底部は手法不明。	
10	〃	土師器 椀	—— (1.6) —— 6.4	高さ5㎜の高台を貼付ける。 端部は内傾する面をなす。		
11	〃	〃	—— (1.5) —— 6.0	丸味をおびた底に「ハ」の字状の高台を貼付ける。		
12	〃	〃	17.4 (3.0) —— ——	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。		
13	〃	〃	—— (1.6) —— 6.8	やや丸味をおびた底に高さ7㎜の高台を貼付ける。端部が外反し、ふんばる形となる。		

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手法	備考
14	第Ⅲ層	土師器 椀	—— (1.9) —— 6.0	高さ6㎜の「ハ」の字状高台を貼付ける。端部は丸くおさめる。外底は平らな面をなし、体部は内湾して外上方に立ち上がる。		
15	〃	〃	14.2 (4.8) —— ——	高台部は破損している。 体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反する。		
16	〃	〃	—— (3.7) —— 6.4	高さ8㎜の「ハ」の字状高台を貼付ける。端部は外傾する面をなす。体部は内湾して外上方に立ち上がる。	内外面とも横方向にナデ調整。	
17	〃	〃	—— (2.1) —— 6.5	高さ5㎜の貼付高台で、真下に下り、端部は平らな面をなす。体部は内湾気味に立ち上がる。		
18	〃	〃	—— (1.8) —— 5.0	高さ6㎜の高台から、体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。		
19	〃	土師器 鍋	21.2 (5.9) —— ——	体部は垂直に立ち上がり、口唇部は水平な面をなす。鍔は水平に突出し、端部は丸くおさめ、口縁端部に向かい内反する。	内面ナデ調整。	
20	〃	土師器 甕	23.8 (6.1) —— ——	体部は垂直に立ち上がり、口縁端部は若干内傾する。斜め上方に反り上がる鍔は幅約1.3㎝である。	鍔上下、横方向にナデ調整。	
21	〃	須恵器 杯	—— (1.6) —— 10.5	高台付の杯で、底部しか残存しない。底部は平らで高さ8㎜の外傾する高台が付いている。端部は水平な面をなす。		
22	〃	須恵器 蓋	11.6 (3.3) —— ——	天井部はやや丸味を持ち、天井部と口縁部の境に稜線を形成する。	天井部には回転ヘラ削り。 口縁部と内面全体に回転ナデ調整。	

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
23	第Ⅲ層	土師質土器 小皿	8.8 2.2 —— 6.0	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。端部は丸くおさめる。		
24	〃	土師質土器 杯	—— (2.0) —— 5.4		内外面ともロクロナデ調整。 底部は摩耗のため手法不明。	
25	〃	土師質土器	—— (3.2) —— 6.8	底部は回転糸切り。 高さ1㎝の高台が付き、体部は直線的に外上方に立ち上がる。	内外面ともロクロナデ調整。	
26	〃	擂鉢	—— (5.2) —— 17.2	体部は直線的に外上方に立ち上がる。	内外面ともロクロナデ調整。 外面一部ハケ調整。	備前焼。
27	〃	梅瓶	4.4 (3.5) —— ——	頸部からやや外反するカーブで立ち上がり、口縁部は玉縁である。端部は丸くおさめる。	内外面ともロクロナデ調整。	瀬戸焼。

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
28	第Ⅲ層	小皿	—— (1.9) —— 6.4	瑠璃釉を流す。内外面貫入あり。高台は低く、体部は直線的に外上方に立ち上がる。		瑠璃釉(コバルトを混ぜた青)。伊万里系。
29	〃	土錘	全長 3.0 直径 1.2 重量(g) 4.3	円筒形を呈す。		土師質。

第51表　包含層出土石器観察表

挿図番号	層位	器種	計測値(cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重量	材質	特徴	備考
30	第Ⅲ層	不明	(9.3) 2.4 1.3 55.0	頁岩	短側縁部に敲打痕が残る。	
31	〃	砥石	(6.8) (3.3) 0.7 25.0	細粒砂岩	2面を使用している。	

第52表　遺構出土土器観察表

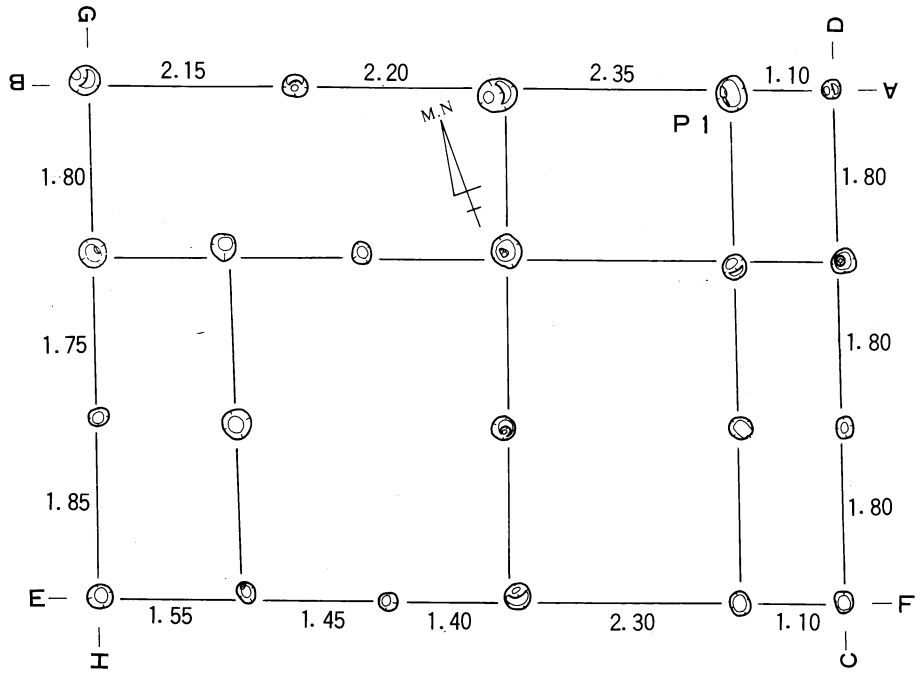
挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
32	SB1 P1	土師質土器 小皿	6.6 1.7 —— 4.1	体部は外反気味に立ち上がり、口縁部は斜め上方に向く。端部は丸くおさめる。	内外面ともロクロナデ調整。底部は回転糸切り。	

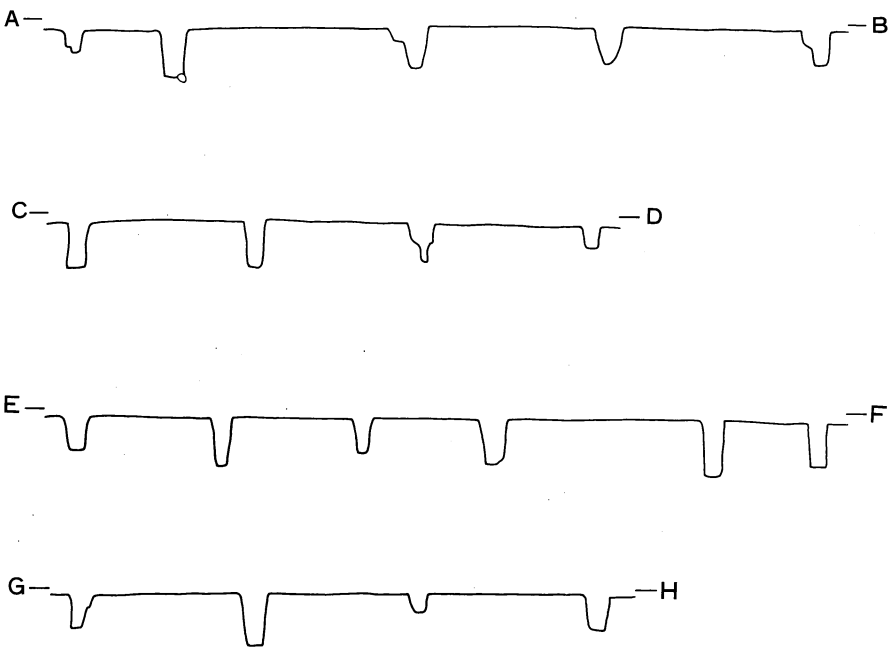
挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
33	SB2 P3	土師器 杯	—— (4.0) —— 7.6	「ハ」の字状の背の高い高台を付ける。体部下位で屈曲し、直線的に外上方に立ち上がる。		
34	SB2 P6	土師器 皿	10.1 1.9 —— 7.0	体部はやや外反して立ち上がる。 端部は丸くおさめる。	内外面ともロクロナデ調整。底部はヘラ切り。	
35	SB2 P1	土師器 椀	—— (3.2) —— 6.4	高台が「ハ」の字状に開き、端部が肥厚する。体部は内湾気味に立ち上がる。		

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　　考
36	ＳＢ２ Ｐ２	土師器 甕	25.2 (8.0) —— ——	口縁端部のすぐ下に横にのびる鍔を形成する。幅９㎜である。口縁端部は内傾する面をなす。		
37	ＳＤ４	須恵器 杯	10.1 3.8 —— ——	立ち上がりは内傾し、端部は丸くおさめる。受部は斜め上方へ上がる。底部はやや丸味を残し、回転ヘラ削りを施す。	内外面とも回転ナデ調整。	

第53表　遺構出土石器観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	計測値(cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　　質	特　　徴	備　　考
38	ＳＢ２ Ｐ４	砥石	13.8 7.5 3.7 625.0	砂　岩	３面を使用している。	

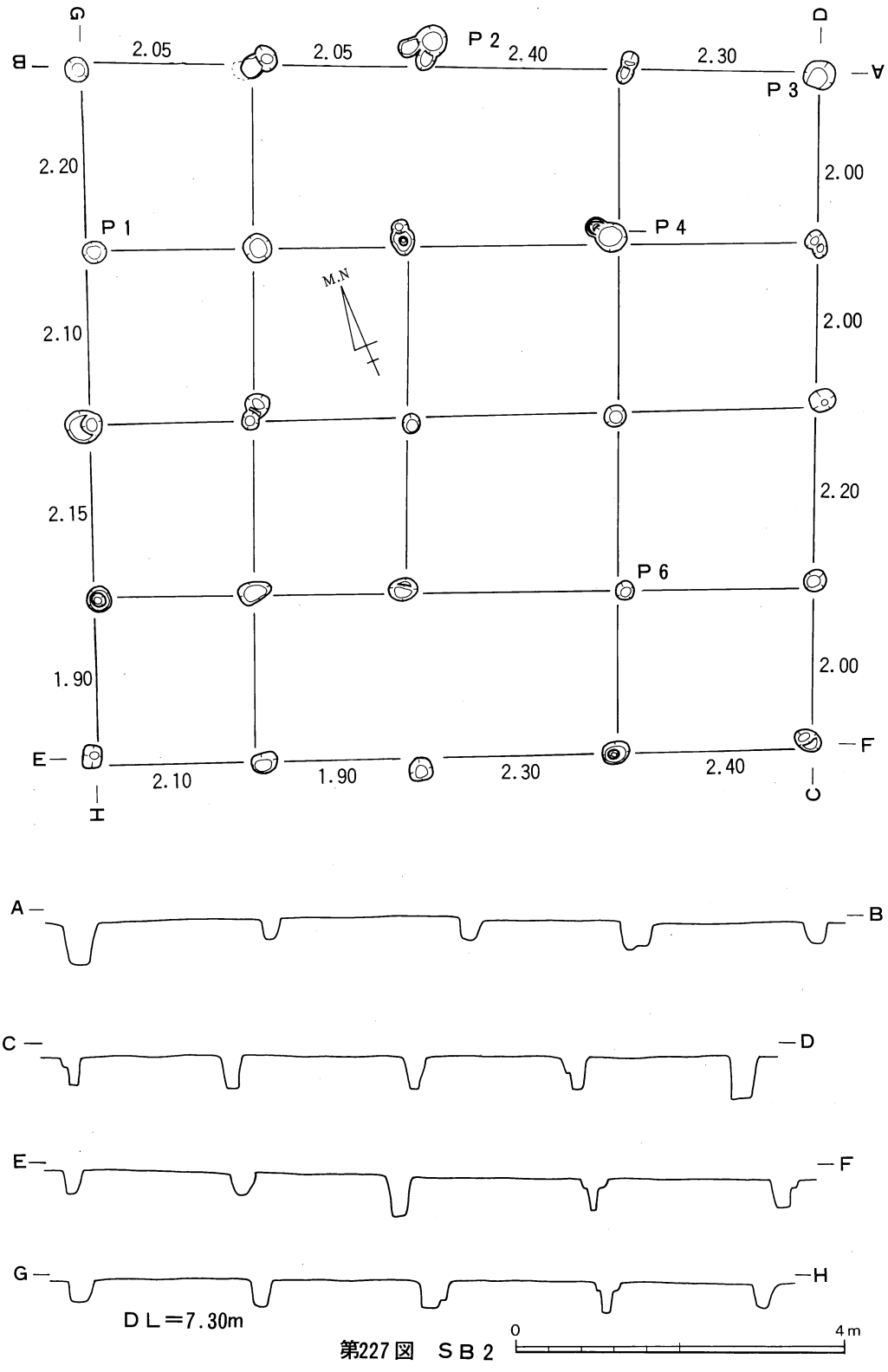




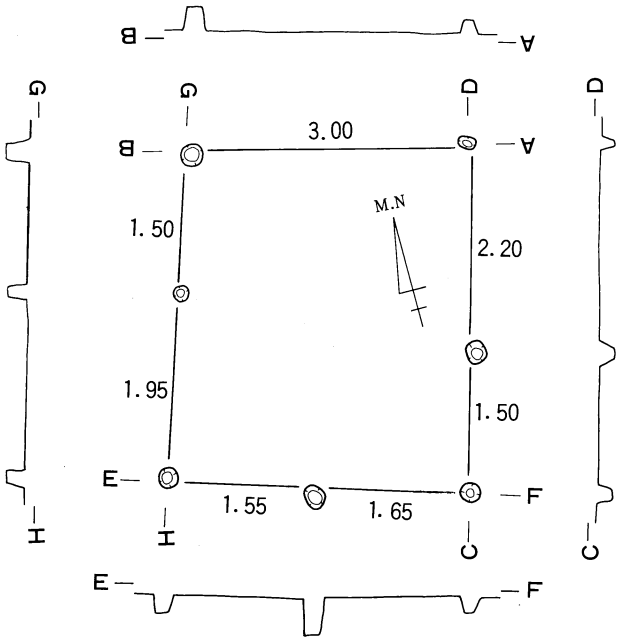
DL＝7.30m

0 4m

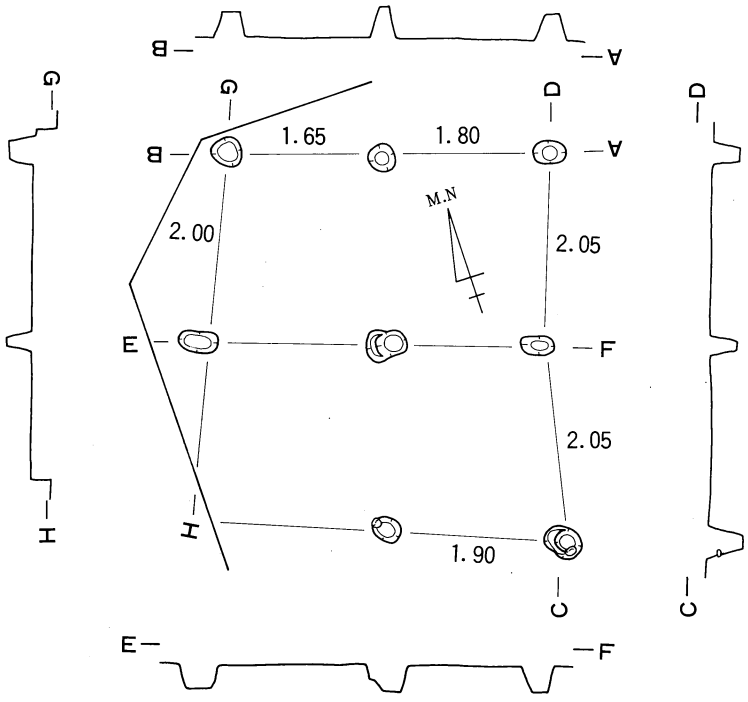
第226図　ＳＢ１


G
B
2.05
2.05
P 2
2.40
2.30
D
A
P 3
2.20
2.00
P 1
P 4
M.N
2.10
2.00
2.15
2.20
P 6
1.90
2.00
E
F
2.10
1.90
2.30
2.40
H
C
A
B
C
D
E
F
G
H
DL=7.30m
0
4m

第227図　SB2



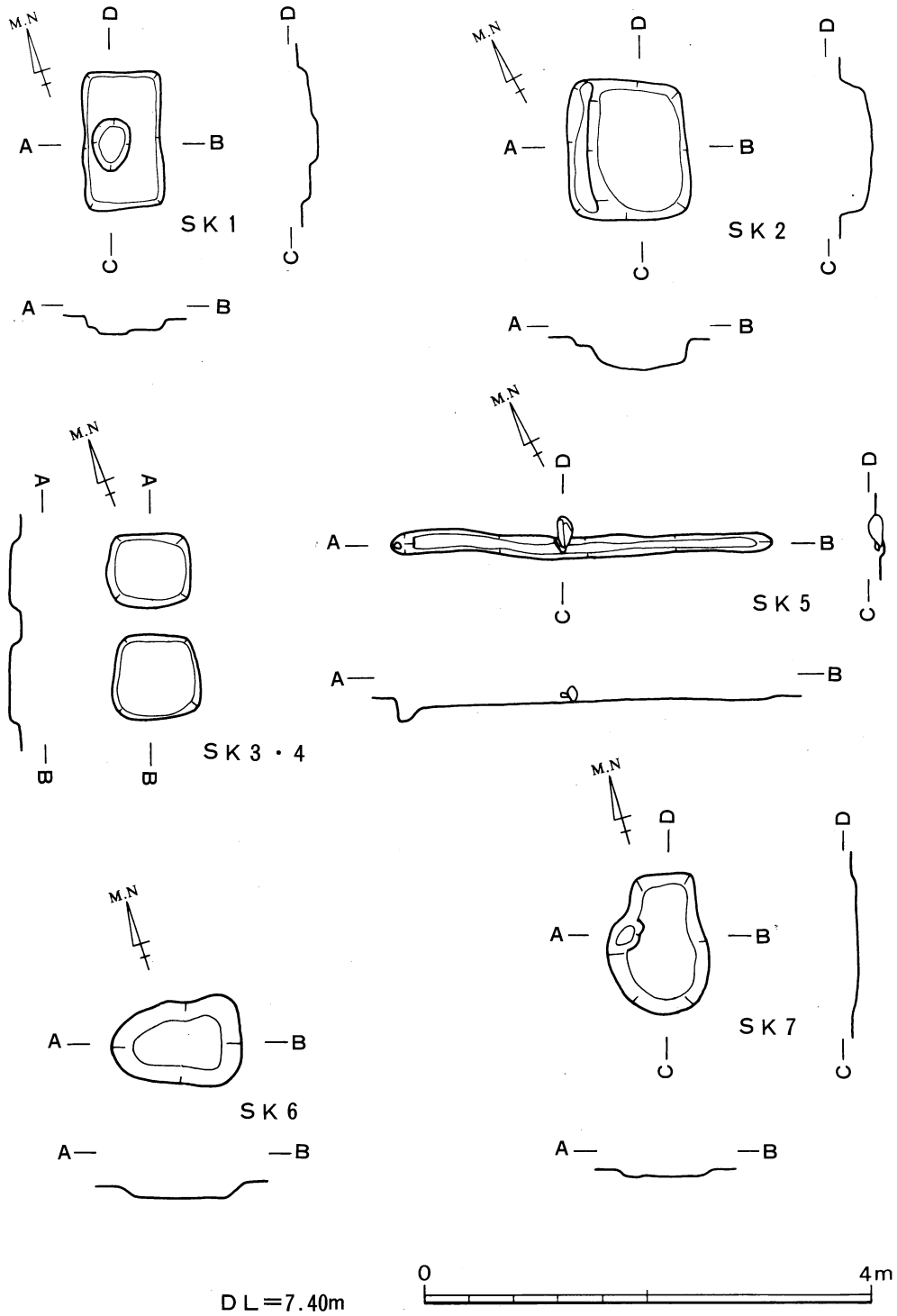
SB 3　　DL＝7.30m



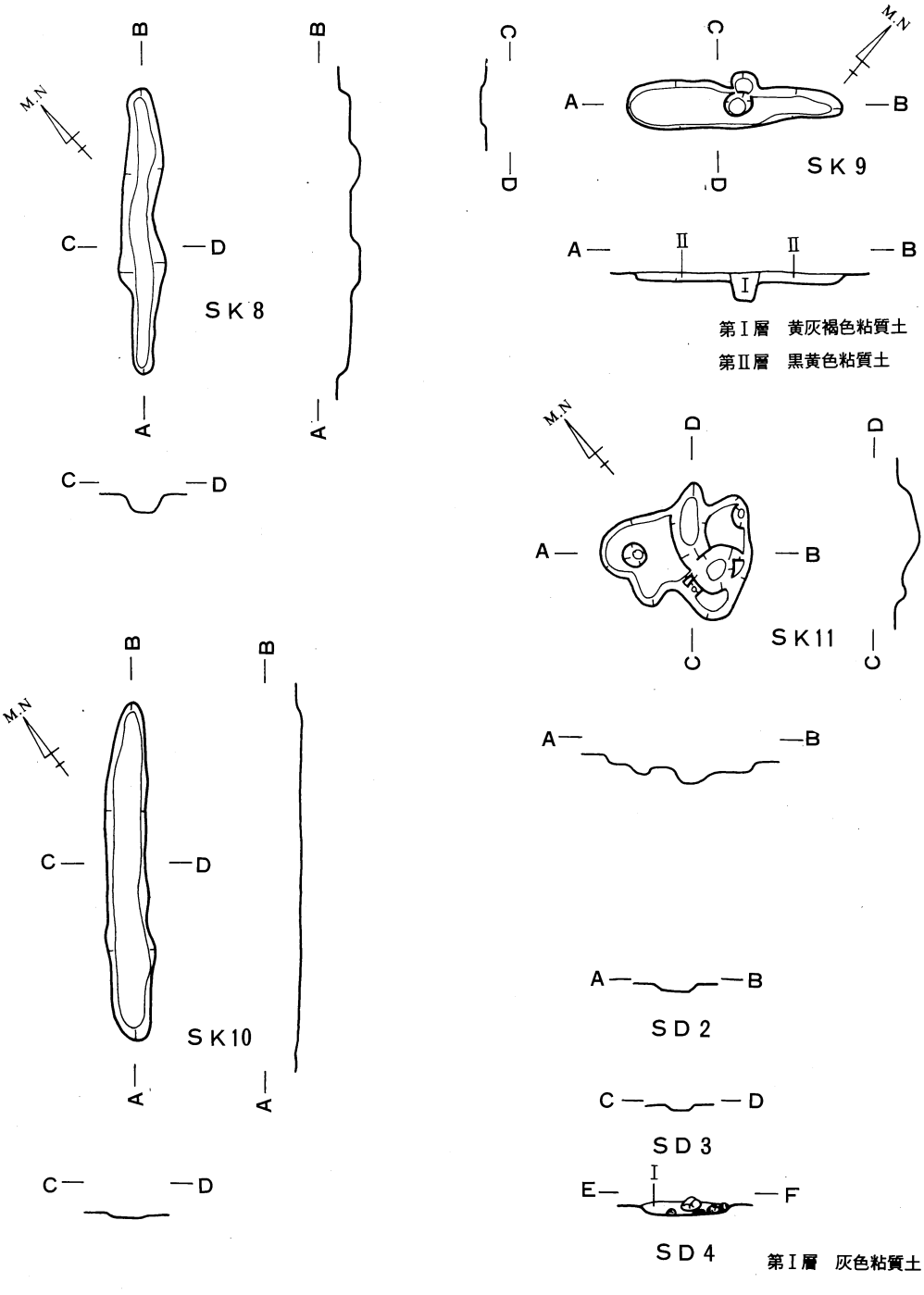
SB 4　　DL＝7.40m

0　4m

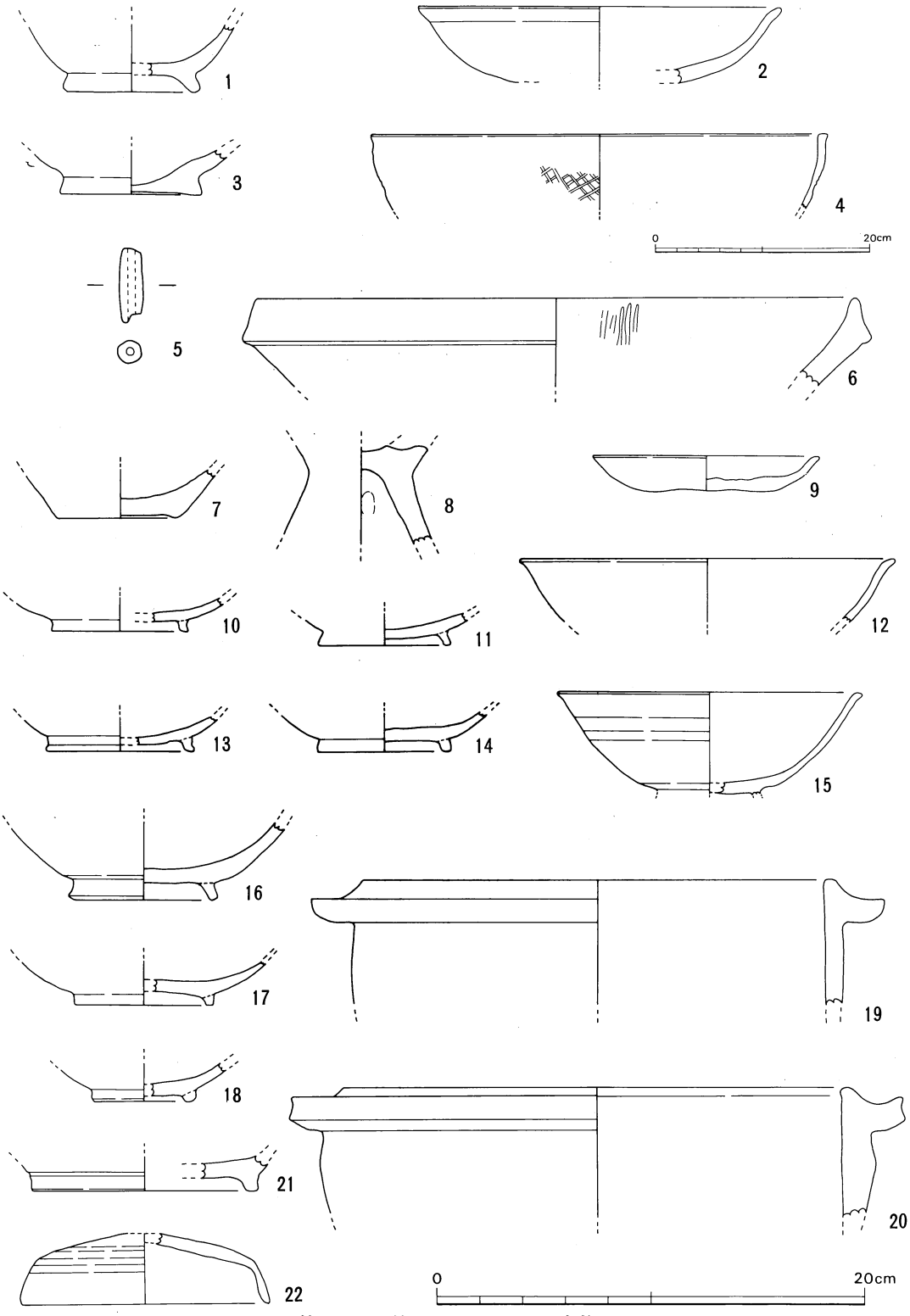
第228図　SB 3 ・ 4



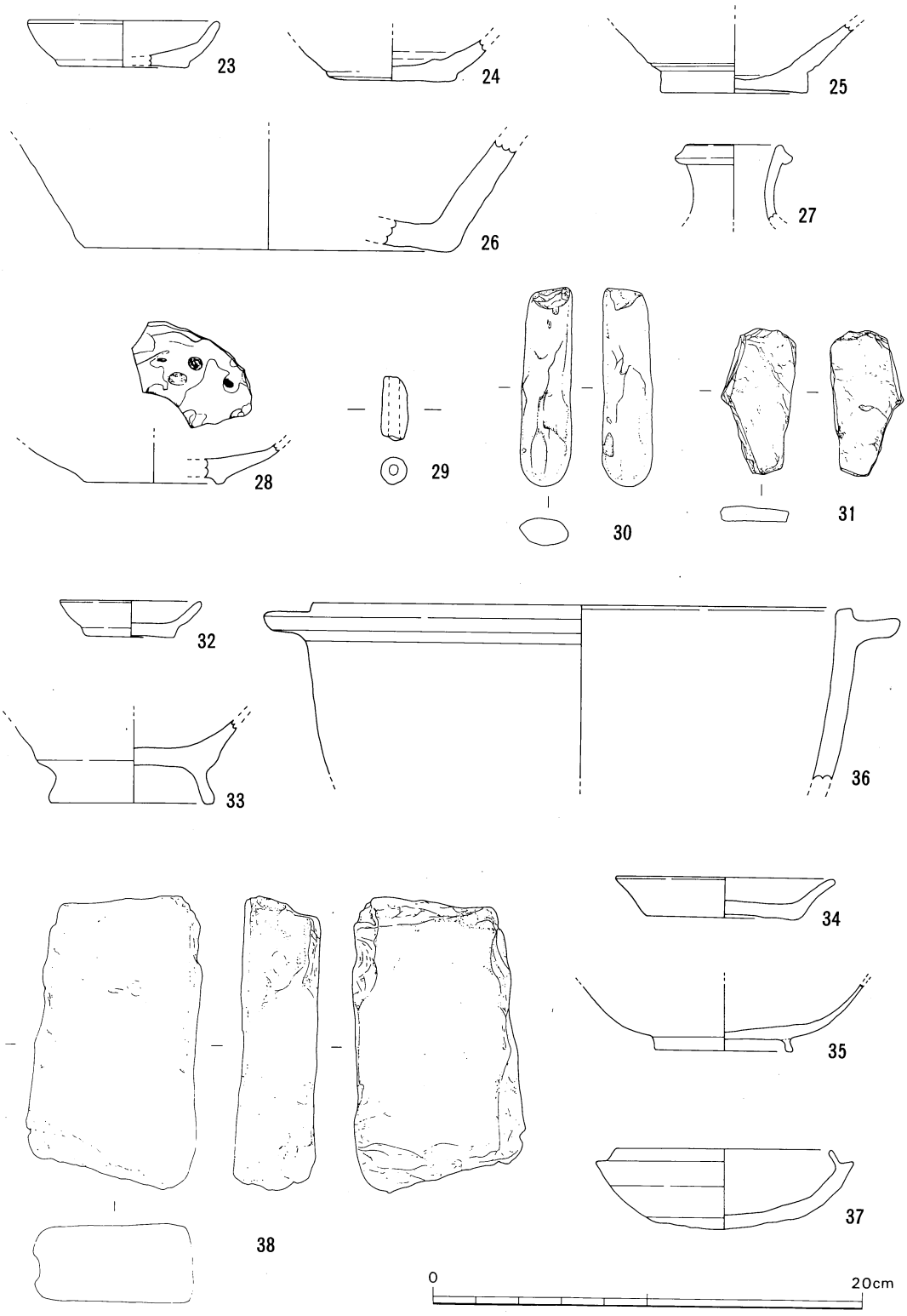
第229図　SK 1～7



第230図　SK 8～11、SD 2～4



第231図　第II・III層　出土遺物



第232図　第Ⅲ層、ＳＢ１・２、ＳＤ４　出土遺物

9. Loc. 33

Loc. 33

1．位置と調査経過

Loc.33は、空港拡張区の西端に位置する。小字横手前の北半部の東側にあたり、北には中世掘立柱建物址群を検出したLoc. 34、Loc. 35Bが接している。

当調査区の調査は、まず昭和56年度に空港場周道路敷設工事に伴って、西端部の調査が緊要とされ、南北に長い調査区を設定して発掘したところ、中世の掘立柱建物群が検出された。翌57年度には、空港拡張予定地内にＢ２－９－１～Ｂ２－10－１、Ｂ２－８－20～Ｂ２－10－17、Ｂ２－４－13～Ｂ２－５－14の３つの東西に長い試掘グリッドを調査した結果、ここでも中世のピット群が確認された。そこで、ピット群を追って全面を発掘し、溝に囲まれた屋敷址が検出された。後に、同遺構と前年度調査区との間の部分も条件の許す限り調査して、中世掘立柱建物群の広がりの確認に努めた。なお、当調査区の東半部下層では弥生時代の自然流路を検出している。

2．調査概要

当調査区における調査面積は、場周部分665㎡、場内3,307㎡で計3,972㎡に及んだ。検出遺構は、掘立柱建物址50棟、土坑73基、溝12条、井戸１基等であった。うち、掘立柱建物22棟、土坑42基、溝３条及び井戸１基は、Ｕ字形を呈する長大な溝（ＳＤ１）の内側で検出された。

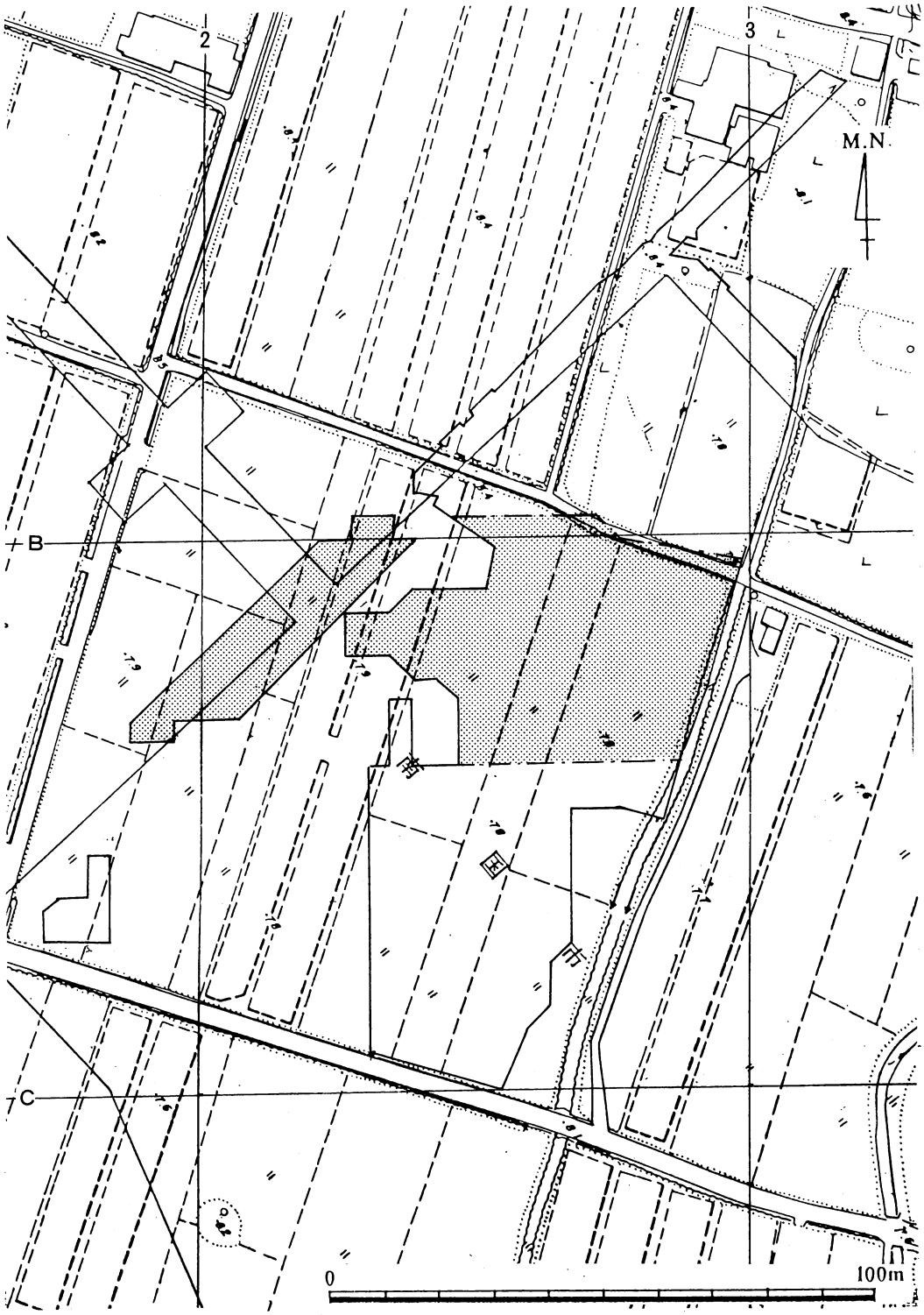
出土遺物は、15～16世紀に属するものが多いが、近世のものもあり、また、下層の自然流路との関連で、弥生土器の出土もみられた。なお、遺構番号はＳＤ１内の各遺構から先に付し、次に場内西部、最後に場周調査区の順になっている。

3．層序と出土遺物

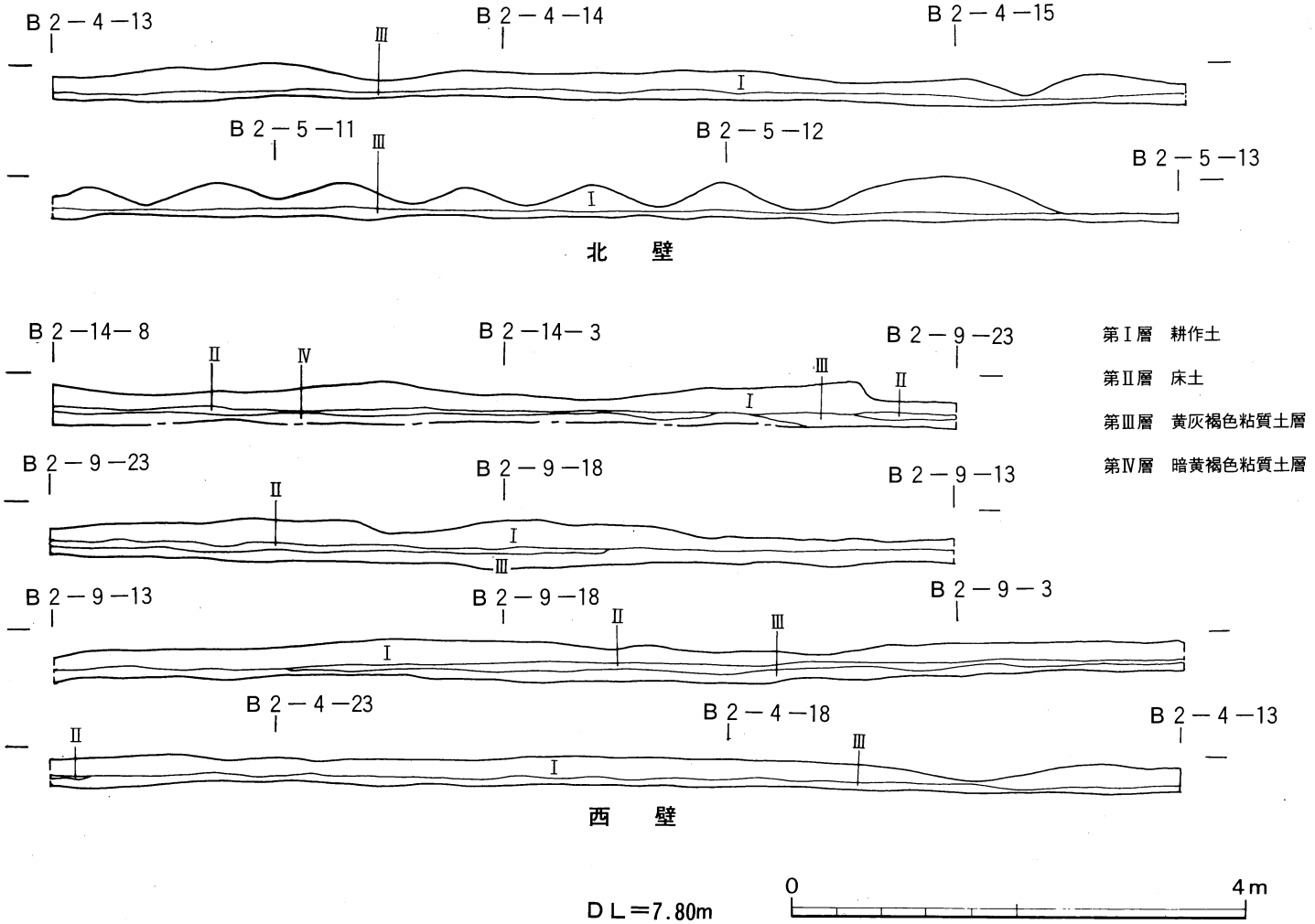
Loc. 33における基本的な層序は次の通りである。

第Ⅰ層　耕作土
第Ⅱ層　床土
第Ⅲ層　黄灰褐色粘質土層
第Ⅳ層　暗黄褐色粘質土層

第Ⅲ層は、弥生時代から近世に至るまでの遺物を包含しており、弥生土器壺（１～４）・甕（５～７）・高杯（８）・鉢（９）、須恵器杯（11、12）・椀（13）、土師質土器皿（14）・杯（15、16）、瓦質土器鍋（17～19）、備前焼擂鉢（20）・壺（21）、青磁碗（22～25）、白磁皿（26）、伊万里焼碗（27）、唐津焼皿（28）・碗（29）・鉢（30）等が出土している。また、砥石（31～33）、石臼（34）も同層から出土した。第Ⅳ層は、中・近世遺構の検出面である。但し、調査区の北東部では同層の堆積は極めて薄くなっており、弥生の自然流路の埋土と考えられる砂質を帯びた



第233図　調査区設定図



第234図　調査区セクション

土が遺構検出面となっていた。

4．遺構と遺物

掘立柱建物址

SB1

ＳＢ１は、ＳＤ１内側の北部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。２×２間の一辺2.80ｍの正方形を呈する建物である。北辺と南辺の中央の柱穴は、共に西に偏しており、西辺は１間である。

各柱穴の平面形は直径25㎝内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは18～36㎝を測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より、若干の弥生土器、土師質土器が出土している。しかし、いずれも細片であり、図示できるものはなかった。

SB2

ＳＢ２は、ＳＢ１の東に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。２×２間の建物であるが、東西6.80ｍ、南北5.60ｍを測る東西棟である。棟方向は、Ｎ－72°－Ｗを指し、ＳＤ１南辺に平行である。柱間距離は、2.60～3.40ｍを測り、２×２間の建物にしては規模が大きい。

各柱穴の平面形は直径40㎝内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは38～58㎝を測る。確認できた柱痕の直径は15㎝内外である。いずれも柱間距離の長さに対応したしっかりした柱穴である。埋土は灰褐色粘質土であり、柱痕部の埋土は濃灰褐色粘質土であった。埋土中より、土師質土器、瓦質土器及び青磁の細片が出土している。なお、ＳＢ２東部はＳＢ３及びＳＤ２と重複している。ＳＢ３との新旧関係は不明だが、ＳＤ２とは切り合い関係が認められ、ＳＢ２がＳＤ２を切っている。

SB3

ＳＢ３は、ＳＢ２の東北部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。１×２間の南北棟であり、梁間2.40ｍ、桁行3.00ｍを測る。棟方向はＮ－21°－Ｅを指す。

各柱穴の平面形は直径30㎝内外の不整円形を呈し、深さは10～30㎝を測る。確認できた柱痕の直径は15㎝内外であった。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中位より弥生土器及び土師質土器の細片が出土している。

SB4

ＳＢ４は、ＳＢ１の南西に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。１×２間の東西棟であ

り、梁間2.50m、桁行4.30mを測る。棟方向はN－69°－Wを指す。

各柱穴の平面形は円形あるいは不整円形を呈するが、その直径は20～45cmとばらつきが目立つ。深さは20～38cmを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より若干の土師質土器が出土している。

SB5

ＳＢ５は、ＳＤ１の西辺中央部東側に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。２×２間の建物であるが、東西3.20m、南北3.60mを測り、南北にやや長い形状を呈している。棟方向は、N－19°－Eを指し、ＳＤ１の西辺にほぼ平行である。

各柱穴の平面形は直径25～45cmの円形あるいは不整円形を呈し、深さは20～40cmを測る。確認できた柱痕の直径は12cmであった。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より、土師質土器、瓦質土器及び備前焼の細片が出土した。また、土錘（35）も出土している。なお、ＳＢ５はＳＢ６と重複しているが、直接の切り合い関係が認められず、新旧関係は不明である。

SB6

ＳＢ６は、ＳＢ５の南部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。２×２間の建物であり、一辺3.20mの正方形を呈す。

各柱穴の平面形は直径25cm内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは15～42cmを測る。確認できた柱痕の直径は15cm内外であった。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より土師質土器及び瓦質土器の細片が出土している。なお、ＳＢ６はＳＢ５・９及びＳＫ16・18と重複関係にある。ＳＢ５・９との新旧関係は不明であるが、２つの土坑には切られている。

SB7

ＳＢ７は、ＳＤ１内中央部北寄りに位置し、第Ⅳ層上面において検出された。２×４間の南北棟であり、梁間4.90m、桁行7.00mを測る。棟方向はN－23°－Eを指す。

各柱穴の平面形は直径25cm内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは10～42cmを測る。確認できた柱痕の直径は10cmであった。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より、弥生土器、土師質土器、瓦質土器の細片が出土している。なお、ＳＢ７はＳＫ14と重複関係にあるが、出土遺物からしてＳＫ14の方は近世のものである。

SB8

ＳＢ８は、ＳＢ７の東に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。３×５間の東西棟であり、梁間4.50m、桁行6.90mを測る。棟方向はN－71°－Wを指す。

各柱穴の平面形は直径22cm内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは８～36cmを測る。埋

土は灰褐色粘質土であり、埋土中より、弥生土器、土師質土器、瓦質土器及び青磁の細片が出土している。

ＳＢ９

ＳＢ９は、ＳＢ６の南に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。３×４間の建物であり、東西5.40ｍ、南北4.50ｍを測る。棟方向は、Ｎ－65°－Ｗを指し、南部に0.80ｍ×3.90ｍの廂が付いている。

各柱穴の平面形は直径25㎝内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは10～30㎝を測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より、土師質土器、瓦質土器及び青磁の細片が出土している。なお、ＳＢ９はＳＢ６及びＳＫ17・18・22と重複している。ＳＢ６との新旧関係は不明であるが、ＳＫ17・18・22には切られている。

ＳＢ10

ＳＢ10は、ＳＢ７の南に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。１×２間の小規模な東西棟であり、梁間1.80ｍ、桁行3.80ｍを測る。棟方向はＮ－75°－Ｗを指す。

各柱穴の平面形は直径25㎝内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは30㎝前後を測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より弥生土器及び土師質土器の細片が出土している。

ＳＢ11

ＳＢ11は、ＳＢ10の南に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。１×５間の東西に長い建物であり、梁間2.70ｍ、桁行6.90ｍを測る。棟方向はＮ－70°－Ｗを指す。

各柱穴の平面形は直径25㎝内外の円形、方形あるいは不整円形を呈し、深さは10～36㎝を測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より土師質土器及び瓦質土器の細片が出土している。なお、ＳＢ11はＳＢ12と重複関係にあり、南辺西部の４個の柱穴は完全に一致している。しかし、両者の新旧関係は把握できなかった。

ＳＢ12

ＳＢ12は、ＳＤ１内側の中央部南寄りに位置し、第Ⅳ層上面において検出された。一辺7.20ｍの正方形を呈する４間（東西）×５間（南北）の建物である。Loc.33の中では最大の規模を有する掘立柱建物であり、棟方向は、Ｎ－69°－Ｗを指し、ＳＤ１の南辺にほぼ平行である。

各柱穴の平面形は直径25㎝内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは30㎝前後を測る。特に南辺の東西両端部の柱穴の規模は大きく、東端の柱穴は平面形が直径45㎝の隅丸方形を呈していた。確認できた柱痕の直径は12～20㎝であった。埋土は灰褐色粘質土であり、柱痕部の埋土は濃灰褐色を呈していた。

出土遺物は、土師質土器、瓦質土器及び青磁等であったが、いずれも細片であり、図示できるものはなかった。なお、ＳＢ12はＳＢ11・13及びＳＫ23・30・31と重複関係にある。ＳＢ12がＳＫ31を切っているのを確認できた他は、直接の切り合い関係が認められず、新旧関係は不明である。

ＳＢ13

ＳＢ13は、ＳＢ12の南東部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。その北西部はＳＢ12と重複している。１×２間の南北棟であり、梁間2.40ｍ、桁行3.90ｍを測る。棟方向は、Ｎ－28°－Ｅを指し、ＳＤ１の方向と10°程ずれている。

各柱穴の平面形は直径30㎝内外の円形を呈し、深さは30㎝前後を測る。確認できた柱痕の直径は16㎝であった。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より土師質土器の細片が若干出土している。なお、ＳＢ13はＳＫ31・32と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ14

ＳＢ14は、ＳＢ12の東に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。３×３間の建物であるが、柱穴の配置が若干不規則であり、柱間距離も一定していない。東西3.30ｍ、南北4.50ｍを測り、棟方向はＮ－29°－Ｅを指す。方向はＳＢ13とほぼ同じである。

各柱穴の平面形は直径25㎝内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは12～44㎝を測る。確認できた柱痕の直径は16㎝であった。埋土は灰色粘質土であり、埋土中より、弥生土器、土師質土器及び瓦質土器の細片が出土している。なお、ＳＢ14は、ＳＢ17及びＳＫ34と重複しているが、それぞれの新旧関係は不明である。

ＳＢ15

ＳＢ15は、ＳＢ８の南東部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。１×１間の小規模な建物であり、東西2.40ｍ、南北2.00ｍを測る。棟方向はＮ－72°－Ｗを指す。

各柱穴の平面形は直径25㎝内外の円形を呈し、深さは12～36㎝を測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より弥生土器の細片が若干出土している。中世遺物は出土しなかったが、検出状況からしてＳＢ15も中世のものと判断される。なお、ＳＢ15はＳＢ８・16と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ16

ＳＢ16は、ＳＢ15の南に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。２×２間の建物であるが、東西3.90ｍ、南北3.40ｍを測り、若干東西に長くなっている。棟方向はＮ－67°－Ｗを指す。

各柱穴の平面形は直径25㎝内外の円形を呈し、深さは12～53㎝と差異がみられる。埋土は灰

褐色粘質土であり、埋土中より、弥生土器、土師質土器及び瓦質土器の細片が出土している。なお、ＳＢ16はＳＢ15及びＳＫ35・36と重複しているが、切り合い関係からみて、ＳＫ35・36はＳＢ16より後に掘り込まれたものである。しかし、ＳＢ15との新旧関係は不明である。

ＳＢ17

ＳＢ17は、ＳＢ14の南に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。すぐ南にはＳＥ1がある。２×２間の建物であるが、東西3.60ｍ、南北4.20ｍを測り、南北に長くなっている。棟方向は、Ｎ－20°－Ｅを指し、ＳＤ１とほぼ平行である。

各柱穴の平面形は直径22㎝内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは10～32㎝を測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より、弥生土器、土師質土器及び瓦質土器の細片が出土している。

ＳＢ18

ＳＢ18は、ＳＢ17の東に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。２×３間の南北棟であり、梁間3.60ｍ、桁行5.40ｍを測る。但し、東辺は２間である。棟方向は、Ｎ－15°－Ｅを指し、ＳＤ１にほぼ平行である。

各柱穴の平面形は直径25㎝内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは12～40㎝を測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より、弥生土器、土師質土器、瓦質土器及び備前焼の細片が出土している。なお、ＳＢ18はＳＫ38と重複しているが、両者の新旧関係は不明である。

ＳＢ19

ＳＢ19は、ＳＤ１の南西部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。３×３間の建物であり、一辺4.80ｍの正方形を呈している。但し、東辺は２間となっている。棟方向は、Ｎ－16°－Ｅを指し、ＳＤ１の西辺の方向と一致している。

各柱穴の平面形は直径30㎝内外の円形、不整円形あるいは方形を呈し、深さは20～50㎝を測る。確認できた柱痕の直径は15㎝であった。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より、土師質土器、瓦質土器及び青磁の細片が出土している。なお、ＳＢ19はＳＢ12・20と重複しているが、新旧関係は不明である。また、ＳＫ26・29とも重複関係にあり、ＳＢ19は両土坑を切っている。

ＳＢ20

ＳＢ20は、ＳＢ19の北東部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。２×３間の南北棟であり、梁間3.30ｍ、桁行3.90ｍを測る。棟方向は、Ｎ－24°－Ｅを指し、ＳＢ20より東へ８°程振っている。

各柱穴の平面形は直径30㎝内外の円形を呈し、深さは12～50㎝を測る。埋土は灰褐色粘質土

であり、埋土中より、土師質土器、瓦質土器鍋（36）及び青磁が出土している。なお、ＳＢ20はＳＢ12・19と重複しているが、新旧関係は不明である。また、ＳＫ28・29とも重複しており、両土坑を切っている。

ＳＢ21

ＳＢ21は、ＳＥ１の西に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。１×２間の小規模な東西棟であり、梁間1.70ｍ、桁行2.80ｍを測る。棟方向は、Ｎ－69°－Ｗを指し、ＳＤ１にほぼ平行である。

各柱穴の平面形は直径25㎝内外の円形あるいは長円形を呈し、深さは16～47㎝を測る。確認できた柱痕の直径は12㎝であった。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より、土師質土器、瓦質土器及び備前焼の細片が出土している。なお、ＳＢ21はＳＢ18・22と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ22

ＳＢ22は、ＳＤ１の東南端部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。２×２間の建物であるが、東西3.60ｍ、南北4.80ｍを測り、南北に長くなっている。棟方向は、Ｎ－20°－Ｅを指し、ＳＤ１の方向にほぼ平行である。

各柱穴の平面形は直径25㎝内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは25～50㎝を測る。確認できた柱痕の直径は10㎝であった。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より瓦質土器の細片が出土している。なお、ＳＢ22はＳＢ18・21と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ23

ＳＢ23は、場内調査区の西端に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。１×２間の南北棟であり、梁間2.10ｍ、桁行3.60ｍを測る。棟方向はＮ－20°－Ｅを指す。

各柱穴の平面形は直径30㎝内外の円形あるいは長円形を呈し、深さは20～40㎝を測る。確認できた柱痕の直径は10㎝であった。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より土師質土器及び瓦質土器の細片が出土している。なお、ＳＢ23はＳＢ24及びＳＫ52・53と重複しているが、それぞれの新旧関係は不明である。

ＳＢ24

ＳＢ24は、ＳＢ23の北東に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。１×１間の小規模な建物であり、東西1.80ｍ、南北1.60ｍを測る。棟方向はＮ－65°－Ｗを指す。

各柱穴の平面形は直径23㎝内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは25㎝前後を測る。確認できた柱痕の直径は10㎝であった。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より若干の土師質土

器片が出土している。

ＳＢ25

ＳＢ25は、ＳＢ23の東に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。１×２間の細長い東西棟であり、梁間1.10ｍ、桁行3.90ｍを測る。棟方向はＮ－75°－Ｗを指す。

各柱穴の平面形は直径25㎝内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは12～34㎝を測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より土師質土器の細片が若干出土している。

ＳＢ26

ＳＢ26は、ＳＢ25の北東に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。２×３間の建物であるが、一辺4.80ｍの正方形を呈している。ＳＤ１の外側の建物のうちでは、大規模な部類に入る。棟方向はＮ－67°－Ｗを指す。

各柱穴の平面形は直径24㎝内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは16～50㎝を測る。確認できた柱痕の直径は10～15㎝であった。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より、土師質土器杯（37）、瓦質土器及び備前焼が出土している。

ＳＢ27

ＳＢ27は、調査区の北部で、第Ⅳ層上面において検出された。ＳＤ１西北端部の西に位置する２×２間の建物である。同遺構は、一辺3.60ｍの正方形を呈し、柱間距離はいずれも1.80ｍ前後を測る。棟方向はＮ－16°－Ｅを指す。

各柱穴の平面形は直径25㎝内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは12～52㎝を測る。四隅の柱穴はいずれも深さ40㎝以上である。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より土師質土器及び瓦質土器の細片が出土している。なお、ＳＢ27はＳＫ44・45及びＳＤ７と重複している。ＳＢ27の西南端の柱穴はＳＫ45によってその上面を切られているが、他の新旧関係は不明である。

ＳＢ28

ＳＢ28は、ＳＢ27の南に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。１×２間の小規模な南北棟であり、梁間1.20ｍ、桁行2.10ｍを測る。棟方向は、Ｎ－16°－Ｅを指し、ＳＤ１の西辺の方向とほぼ同一である。

各柱穴の平面形は直径25㎝内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは15～40㎝を測る。確認できた柱痕の直径は10㎝であった。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は皆無であった。なお、ＳＢ28はＳＢ29と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ29

ＳＢ29は、ＳＢ28の南に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。ＳＤ１とＳＤ７との中間に位置する２×３間の南北棟である。梁間3.00ｍ、桁行3.60ｍを測るが、西辺が東辺に比して0.20ｍ程短くなっており、柱穴も２間分しか確認できなかった。棟方向はＮ－20°－Ｅを指す。

各柱穴の平面形は直径25㎝内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは20～55㎝を測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より土師質土器杯（38）及び瓦質土器が出土している。なお、ＳＢ29は、ＳＫ47及びＳＤ６と重複関係にあり、両者を切っている。

ＳＢ30

ＳＢ30は、ＳＢ29の更に南に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。ＳＤ６の西に位置する２×３間の東西棟である。梁間1.60ｍ、桁行5.60ｍを測るが、西辺は東辺に比して0.20ｍ程短くなっており、柱穴も１間分しか確認できなかった。棟方向はＮ－68°－Ｗを指す。

各柱穴の平面形は直径20㎝内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは12～56㎝を測る。確認できた柱痕の直径は10㎝であった。埋土は灰褐色粘質土であり、東南端の柱穴の底面直上より、土師質土器皿（39、40）が出土している。なお、ＳＢ30はＳＤ７と重複しているが、直接の切り合いが認められず、新旧関係は不明である。

ＳＢ31

ＳＢ31は、ＳＢ30の南で、第Ⅳ層上面において検出された。ＳＤ６の西側に位置する２×３間の東西棟である。梁間3.20ｍ、桁行4.80ｍを測るが、西辺では１間分の柱穴しか確認されなかった。棟方向はＮ－71°－Ｗを指す。

各柱穴の平面形は直径30㎝内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは20～50㎝を測る。確認できた柱痕の直径は12㎝であった。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より土師質土器及び瓦質土器の細片が出土している。なお、ＳＢ31はＳＢ32、ＳＫ64及びＳＤ７と重複しているが、直接の切り合いが認められず、新旧関係は不明である。

ＳＢ32

ＳＢ32は、ＳＢ31の南東に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。ＳＤ１の西側で、一辺3.00ｍの正方形を呈する２×２間の建物である。但し、北辺と西辺とはそれぞれ１間分の柱穴しか確認されなかった。棟方向はＮ－70°－Ｗを指す。

各柱穴の平面形は直径25㎝内外の円形を呈し、深さは17～36㎝を測る。確認できた柱痕の直径は11㎝であった。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より土師質土器の細片が若干出土している。なお、ＳＢ32はＳＢ31・33及びＳＤ６と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ33

ＳＢ33は、ＳＢ32の南西部で、第Ⅳ層上面において検出された。ＳＤ６とＳＤ７の中間に位置する１×１間の小規模な建物である。東西2.25ｍ、南北1.70ｍを測り、棟方向はＮ－68°－Ｗを指す。

各柱穴の平面形は直径22㎝内外の円形を呈し、深さは20㎝前後を測る。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は皆無であった。

ＳＢ34

ＳＢ34は、ＳＢ31の南に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。１×２間の南北棟であり、梁間2.40ｍ、桁行3.60ｍを測る。棟方向はＮ－16°－Ｅを指す。

各柱穴の平面形は直径30㎝内外の円形を呈し、深さは10～30㎝を測る。確認できた柱痕の直径は10㎝であった。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より土師質土器片が若干出土している。なお、ＳＢ34はＳＢ33及びＳＤ７と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ35

ＳＢ35は、場周調査区の北東部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。東南端は調査区外となっており、全容は不明である。２×４間の南北棟と推定され、梁間2.70ｍ、桁行5.46ｍを測る。棟方向はＮ－28°－Ｅを指す。柱間距離は、梁間2.70ｍ、桁行0.76～1.92ｍを測る。南辺と西辺の柱穴は柱間距離が0.76ｍ、1.12ｍと短く、また、西辺の柱穴は３間分の間隔をもっており、１×３間の母屋に南と西の２面の廂をもつものと考えられる。

柱穴の平面形は、直径30㎝内外の円形を呈するものが多いが、方形または不定形のものもみられる。深さは20㎝を測るものが多く、１個のみ10㎝と浅いものが存在する。方形の柱穴には、直径12㎝の柱痕がみられ、また３個の柱穴には重複関係が存在するが、建物の重複はなく、柱の建て替えである。埋土は灰色粘質土であり、埋土中より土師質土器の細片が出土している。

ＳＢ36

ＳＢ36は、場周調査区の北西部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。西端部は調査区外となっており、全容は不明である。２×３間の南北棟と推定され、梁間4.12ｍ、桁行6.32ｍを測る。棟方向はＮ－22°－Ｅを指す。柱間距離は、梁間で2.68ｍと1.44ｍ、桁行では1.80～2.56ｍを測る。東辺の柱穴は、柱間距離が1.44ｍとやや短く、２間分の間隔をもつところから廂と考えられる。

柱穴の平面形は、直径30㎝内外の円形が多いが、隅丸方形または不定形もみられる。深さは16～24㎝を測り、よく揃っている。柱痕を残す柱穴は３個存在し、柱痕は直径16㎝前後を測る。

ＳＢ36はＳＢ37と重複しているが、柱穴の切り合い関係はなく、新旧関係は不明である。ま

た、柱穴の底部に長径12cmを測る楕円形の礫をもつ柱穴が1個みられる。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物はほとんどみられなかった。

SB37

SB37は、場周調査区の北西部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。西端は調査区外となっており、全容は不明である。南北棟とするならば、2×3間の規模を有するものと推定される。梁間は、検出されている柱穴の柱間距離が2.33mを測るので、残された部分も同じように考えれば4.66mとなり、桁行は6.60mを測る。棟方向も、南北棟とすればN－22°－Eを指し、SB36と同じ方向である。柱間距離は、梁間2.33m、桁行1.71～3.02mを測る。

柱穴の平面形は直径30cm内外の円形と、一辺約30cmの隅丸方形がみられる。深さは、16～24cmを測るが、なかに36cm前後の深い柱穴が2個みられる。検出された6個の柱穴のなかで、1個を除き柱痕がみられ、直径は16～20cmを測る。重複関係をもつ柱穴は存在しないが、SB36と重複しており、ほぼ同じ規模をもっていると考えられるが、新旧関係は不明である。埋土は灰色粘質土であり、遺物は出土しなかった。

SB38

SB38は、場周調査区の北西部で、第Ⅳ層上面において検出された。SB36・37の東に接する位置にある。梁間1.90m、桁行3.35mを測る1×1間の建物であり、南北に長い。棟方向はN－20°－Eを指す。柱間距離は1.85～3.35mを測り、平面形はわずかに歪みをもっている。

柱穴の平面形は直径16～20cmの円形あるいは不整形であり、深さは10～20cmを測る。柱痕をもつ柱穴は1個みられ、柱痕は直径17cm、深さ28cmを測る。SB36と一部重複関係をもつが、柱穴の切り合いはなく、新旧関係は不明である。

SB39

SB39は、場周調査区の中央部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。梁間3.20m、桁行7.05mを測る2×4間の東西棟であり、棟方向はN－73°－Wを指す。柱間距離は、1.25～2.55mとやや不揃いであり、北西の柱穴と南辺の柱穴の2個が検出されず、他の柱穴にも歪みがみられる。東辺の柱穴の柱間距離は0.94～1.40mと短く、廂とすれば、2×3間の母屋の東面に廂をもつ建物である。

柱穴の平面形は、直径20～30cmの円形が多く、隅丸方形及び不定形もみられる。深さは8～48cmと不揃いであり、特に中央部の柱穴は深い。柱痕のみられる柱穴は3個存在し、直径16cmを測る。重複関係にある建物はSB40・41・42であるが、柱穴の切り合いはなく、3個の柱穴にみられる重複は柱穴の建て替えなどによるものである。また、SK67と重複関係にあり、SB39が新しいことが判明している。埋土は灰色粘質土に黄褐色粘質土のブロックが若干混入し

ており、出土遺物はみられなかった。

ＳＢ40

ＳＢ40は、場周調査区の中央部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。梁間3.21ｍ、桁行3.22ｍを測る２×２間の東西棟である。棟方向はＮ－78°－Ｗを指す。柱間距離は、1.42～1.79ｍを測り、平均1.61ｍと非常によく揃っており、柱穴の並びは極めて整然としている。

柱穴の平面形は、直径30㎝内外の円形あるいは長円形が多く、一辺24㎝の隅丸方形もみられる。深さは、12～36㎝であり、平均では約30㎝を測る。柱痕を残す柱穴は５個存在しており、柱痕は長径12～15㎝を測る長円形である。

ＳＢ40は、ＳＢ39・41・42と重複関係にあり、重複関係をもつ柱穴も２個みられるが、柱穴の切り合いはない。しかし、ＳＫ67・69とは重複関係にあり、ＳＢ40は、ＳＫ67に切られており、ＳＫ69を切っている。埋土は灰色粘質土であり、埋土中より土師質土器及び瓦質土器の細片が若干出土している。

ＳＢ41

ＳＢ41は、場周調査区の中央部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。梁間3.73ｍ、桁行6.22ｍを測る２×３間の東西棟であり、棟方向はＮ－68°－Ｗを指す。柱間距離は、1.77～2.23ｍを測り、平均1.98ｍと非常によく揃っており、柱穴の並びも整然としている。北西の柱穴は検出されなかった。

柱穴の平面形は直径30㎝内外の円形が多く、やや不定形の柱穴もみられる。深さは、16～48㎝を測り、平均的には約30㎝である。柱痕を残す柱穴は４個存在しており、柱痕は直径20㎝を測る。

ＳＢ41はＳＢ39・40・42と重複している。ＳＢ42とは柱穴の直接の切り合い関係がみられ、ＳＢ41が先行することが判明している。他の新旧関係は不明である。埋土は灰色粘質土であり、遺物はほとんど出土しなかった。

ＳＢ42

ＳＢ42は、場周調査区の中央部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。梁間4.22ｍ、桁行5.21ｍを測る。２×２間の東西棟と考えられ、棟方向はＮ－72°－Ｗを指す。柱間距離は、1.97～2.98ｍを測り、平均1.99ｍとよく揃っており、柱穴の並びも整然としている。北西の柱穴は検出されなかった。

柱穴の平面形は直径25～40㎝の円形及び隅丸方形の他に不定形のものがみられる。深さは、５～40㎝を測り、平均的には30㎝前後である。柱痕をもつ柱穴は５個存在し、柱痕は直径10㎝前後を測る。

ＳＢ42は、ＳＢ39・40・41と重複関係にあり、先述の通りＳＢ41とは柱穴の切り合いがみられ、ＳＢ42の方が新しい。また、ＳＫ70と重複関係がみられ、ＳＢ42が新しいことが判明している。埋土は灰色粘質土であり、遺物は土師質土器片、瓦質の鍋片等が若干出土している。

ＳＢ43

ＳＢ43は、場周調査区の中央部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。梁間2.48ｍ、桁行3.65ｍを測る２×２間の南北棟と考えられ、棟方向はＮ－20°－Ｅを指す。柱間距離は、0.95～1.89ｍを測り、梁間が短く、桁行は約1.80ｍと平均的である。柱穴の並びは整然としているが、南辺では中間の柱穴が検出されなかった。

柱穴の平面形は一辺約24㎝を測る隅丸方形である。深さは８～40㎝を測り、平均25㎝前後である。柱痕を残す柱穴は４個みられ、柱痕は直径約10㎝を測る。ＳＢ44と重複関係にあるが、柱穴では切り合いがなく、新旧関係は不明である。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物はほとんどみられない。

ＳＢ44

ＳＢ44は、場周調査区の中央部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。梁間3.95ｍ、桁行5.67ｍを測る２×２間の南北棟と考えられ、棟方向はＮ－20°－Ｅを指す。柱間距離は1.89～3.00ｍと長く、桁行は特に2.63～3.00ｍと長い。柱穴の並びは整然としており、中央部に柱穴が存在し、総柱の建物である。

柱穴の平面形は、直径24㎝内外の円形と、一辺32㎝を測る方形がみられる。深さは、16～36㎝を測り、平均約26㎝である。柱痕を残す柱穴は３個存在し、柱痕は直径10㎝を測る。

ＳＢ44は、ＳＢ43と重複関係にあるが、柱穴の切り合いはなく、新旧関係は不明である。また、ＳＫ72と重複関係にあるが、埋土の違いなどはみられず、調査においても新旧関係は判明しなかった。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物は若干の土師質土器の細片がみられるのみである。

ＳＢ45

ＳＢ45は、場周調査区の西部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。西端は調査区外となっており、全容は不明である。梁間2.95ｍ、桁行2.68ｍ以上の東西棟と推定される。２×３間以上の建物であり、棟方向はＮ－72°－Ｗを指す。柱間距離は、1.12～1.55ｍを測り、よく揃っており、柱穴の並びも整然としている。

柱穴の平面形は、直径約30㎝の円形と、一辺20㎝の方形がみられ、不定形も存在する。深さは８～44㎝を測る。柱痕を残す柱穴は２個みられ、柱痕は直径約16㎝を測る。柱穴の重複は存在するが、建物の重複はみられず、単独に検出されている。埋土は灰色粘質土であり、出土遺

物はほとんどみられない。

ＳＢ46

ＳＢ46は、場周調査区の北西部で、第Ⅳ層上面において検出された。ＳＢ40の東に位置しており、東端部は調査区外となっており、全容は不明である。南北棟とすれば、梁間2.52ｍ、桁行4.35ｍを測る１×２間の建物と考えられる。棟方向はＮ－18°－Ｅを指す。柱間距離は1.41～2.57ｍを測り、桁行に比べ梁間がやや広い。

柱穴の平面形は一辺30～38㎝の方形あるいは不整形であり、深さは40㎝前後を測るが、１個のみ８㎝と浅いものがみられる。柱痕は２個の柱穴にみられ、直径12㎝を測る。

ＳＢ46は、ＳＢ47と重複関係にあるが、柱穴の切り合いはなく、新旧関係は不明である。また、ＳＫ68とも重複しており、ＳＢ46がＳＫ68を切っている。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物はほとんどみられなかった。

ＳＢ47

ＳＢ47は、場周調査区の北西部で、第Ⅳ層上面において検出された。ＳＢ46の南に一部重複して位置している。東端部は調査区外となっており、全容は不明である。南北棟とすれば、梁間2.19ｍ、桁行3.63ｍを測る１×２間の建物であり、棟方向はＮ－24°－Ｅを指す。柱間距離は、1.70～2.19ｍを測り、桁行に比べ梁間が広い。

柱穴の平面形は一辺30㎝前後を測る方形あるいは不定形であり、深さは、24～29㎝を測るが、１個のみ10㎝と浅く、底に礫がみられる。

ＳＢ47は、ＳＢ46と重複関係にあるが、柱穴の切り合いは存在せず、新旧関係は不明である。埋土は灰色粘質土であり、遺物は若干の土師質土器の細片が出土している。

ＳＢ48

ＳＢ48は、場周調査区の南部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。梁間1.21ｍ、桁行1.90ｍを測る１×１間の建物であり、東西に長い。棟方向はＮ－71°－Ｗを指す。但し、南西の柱穴は検出されていない。

柱穴の平面形は、直径20㎝の円形であり、他の建物と比べ小さい。深さは８～31㎝を測る。埋土は灰色粘質土であり、遺物はほとんどみられなかった。

ＳＢ49

ＳＢ49は、場周調査区の南部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。梁間3.57ｍ、桁行6.30ｍを測る２×３間の東西棟であり、棟方向はＮ－72°－Ｗを指す。柱間距離は、梁間1.63～1.85ｍ、桁行1.80～2.27ｍを測り、非常によく揃っている。また、柱穴の並びを極めて整然

としている。

柱穴の平面形は、直径24～27cmの円形と、一辺25cm前後の方形あるいは不定形であり、深さは25～30cmを測り、やはりよく揃っている。柱痕を残す柱穴は５個存在し、柱痕は直径12～15cmを測る。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物は少なく、若干の土師質土器の細片がみられた。

ＳＢ50

ＳＢ50は、場周調査区の中央部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。梁間3.84ｍ、桁行7.67ｍを測る２×４間の東西棟であり、棟方向はＮ－75°－Ｗを指す。柱間距離は、1.02～2.57ｍを測り、桁行に比べ梁間はやや短く、総柱である。また、西辺の柱穴は、桁行の柱間が1.02ｍと1.07ｍを測り短く、半間の廂と考えられ、２×３間の母屋の西面に廂をもつ建物である。

柱穴の平面形は、一辺24～32cmの方形と隅丸方形であり、若干不整形もみられる。深さは、９～36cmを測り、平均的には30cm前後である。柱痕を残す柱穴は５個みられ、柱痕は直径８～10cmと細い。

ＳＢ50は、ＳＢ42・44と重複関係にあり、ＳＢ44の柱穴と切り合いが存在するが、埋土は同じであり、新旧関係は不明である。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物はほとんどみられなかった。

土坑

ＳＫ１

ＳＫ１は、ＳＤ１西北端部の北側に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は、直径1.70ｍ内外の円形を呈し、深さは0.38ｍを測る。底面はほぼ平坦であり、壁は垂直に近く立ち上がる。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より、弥生土器、土師質土器及び瓦質土器が出土している。形状的には墓である可能性をもつが、それを裏付ける遺物の出土はみられなかった。

ＳＫ２

ＳＫ２は、ＳＫ１の南東で、第Ⅳ層上面において検出された。ＳＤ１の西北端部東側に接する位置にある長大な土坑である。長径3.70ｍ、短径2.60ｍ、深さ0.88ｍを測る。但し、0.80ｍ以上の深さを測るのは北側の平面長円形を呈する部分だけであり、南部は深さ0.15ｍ前後の平坦な面をなしている。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より、弥生土器、土師質土器及び瓦質土器の細片が出土している。なお、ＳＫ２の西壁はＳＤ１と重複しているが、埋土が同一であり、新旧関係は不明である。

ＳＫ３

ＳＫ３は、ＳＫ２の東に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は不整長円形であるが、約0.30ｍ掘り下げた段階で、南側に直径1.40ｍの円形プランが確認され、同遺構をさらに0.15ｍ程掘り下げて底面に達した。円形部の底面は平坦であり、壁は垂直に近く立ち上がる。北側の方は階段状をなして地表に至っている。

埋土は、２層に分層され、第Ⅰ層が灰色粘質土、第Ⅱ層が暗灰色粘質土である。出土遺物は、弥生土器、土師質土器、瓦質土器及び備前焼等であったが、いずれも細片で図示できるものはなかった。なお、第Ⅰ層下位より径25㎝内外の自然石が若干出土しており、ＳＫ１と同様、墓の可能性をもっている。

ＳＫ４

ＳＫ４は、ＳＤ１西北端部の南に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は直径0.90ｍの円形を呈し、深さは0.32ｍを測る。底面は平坦であり、壁は垂直に近く立ち上がる。但し、東壁は小さな段状をなしている。

埋土は灰褐色粘質土であり、埋土下位より土師質土器皿（41）が出土している。なお、ＳＫ４は北端をピットによって切られている。

ＳＫ５

ＳＫ５は、ＳＢ１の北に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は直径0.95ｍの円形を呈し、深さは0.35ｍを測る。底面はほぼ平坦であり、壁は垂直に近く立ち上がる。但し、東南部は段状をなしている。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は皆無であった。

ＳＫ６

ＳＫ６は、ＳＢ２の北部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は長方形を呈し、長径1.15ｍ、短径0.88ｍで、深さは0.50ｍを測る。底面はほぼ平坦であるが、西寄りに小ピット状の落ち込みを有す。壁は垂直に近く立ち上がるが、南壁は深さ0.25ｍのところで段状をなしている。

埋土は、２層に分層され、第Ⅰ層が灰褐色粘質土、第Ⅱ層が暗灰褐色粘質土であった。第Ⅱ層中位で、径20㎝内外の石がまとまって出土した。出土遺物は弥生土器及び土師質土器であったが、図示できるものはなかった。

ＳＫ７・８

ＳＫ７・８は、ＳＤ１の北東コーナー内側に位置し、第Ⅳ層上面において東西に並んで検出された。

ＳＫ７は、平面形が不整方形を呈し、長径2.60ｍ、短径2.00ｍで、深さは0.30ｍを測る。長軸方向はＮ－76°－Ｗを指す。底面はほぼ平坦であり、壁の立ち上がりも緩やかであった。埋土は暗灰褐色粘質土をベースとしており、それに黄褐色土がブロック状に混入していた。埋土中位より、弥生土器、土師質土器、瓦質土器及び青磁の細片が出土している。

ＳＫ８は、平面形が隅丸長方形を呈し、長径4.85ｍ、短径2.25ｍを測り、長軸方向はＮ－18°－Ｅを指す。南北に延びる長大な土坑であり、深さは0.45ｍである。底面はほぼ平坦であり、壁は断面Ｕ字形をなして立ち上がる。埋土は、２層に分層され、第Ⅰ層が茶灰色粘質土、第Ⅱ層が灰色粘質土であった。埋土中より、弥生土器、須恵器椀（42）、土師質土器、瓦質土器、備前焼、常滑焼及び青磁が出土している。

ＳＫ９

ＳＫ９は、ＳＢ29の西に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。ＳＤ１西辺の上面に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長径3.65ｍ、短径3.18ｍで、深さは0.34ｍを測る。南北方向に延びる広大な土坑であり、長軸方向はＮ－21°－Ｅを指す。底面は平坦であり、壁の立ち上がりも緩やかである。

埋土は淡灰褐色粘質土であった。本遺構においては、底面直上に大小の自然石が一面に配されており、その石の間より、土師質土器、瓦質土器、備前焼及び青磁盤（43）が出土している。ＳＫ９は形状からして墓の可能性がある。なお、ＳＫ９はＳＤ１上面を切っているが、出土遺物からして、溝廃絶からさして下らぬ時期に構築されたものと考えられる。

ＳＫ10

ＳＫ10は、ＳＫ９の南に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は直径1.10ｍの円形を呈し、深さは0.30ｍを測る。底面は平坦であるが、その直上において焼土が検出された。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。埋土は暗灰褐色粘質土であるが、埋土中からの出土遺物は皆無であった。

ＳＫ11・12

ＳＫ11・12は、調査区の中央部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。埋土はいずれも灰色粘質土をベースとしており、それに黄色粘質土がブロック状に混入していた。両土坑とも集石を伴っており、近世墓と考えられるものである。

ＳＫ11は、ＳＢ４の南に位置する。平面形は不整長方形を呈し、長径3.00ｍ、短径2.40ｍで、深さは0.18ｍを測る。長軸方向はＮ－12°－Ｅを指す。底面には若干起伏があり、中央部に溝状の窪みがみられる。壁は短く、垂直に近く立ち上がる。底面直上において、大小の自然石がやや北に偏して検出された。出土遺物には、弥生土器、土師質土器、瓦質土器、青磁及び唐津

焼溝縁皿（44）がある。遺物は埋土中位の集石間より出土したものが多く、44は北東端部の集石直上から出土している。なお、ＳＫ11は中世ピット群の上面を切っている。

ＳＫ12は、ＳＫ11の南に位置する。平面形は直径1.55ｍの円形を呈し、深さは0.50ｍを測る。底面は平坦で、壁は垂直に近く立ち上がる。本遺構においても、底面直上から埋土中位にかけて大小の自然石が検出され、集石北端部より唐津焼溝縁皿（45）が出土している。その他の出土遺物には、土師質土器、瓦質土器及び備前焼の細片があり、底面直上より骨片が若干出土している。ＳＫ12には、その形状からして座棺が埋置されていたと考えられるが、それを証左するような木片類は出土しなかった。

ＳＫ11とＳＫ12は、その形状は異にしているが、出土遺物からみていずれも17世紀前半のものと考えられる。

ＳＫ13

ＳＫ13は、ＳＢ７の北西部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は直径1.30ｍの円形を呈し、深さは0.35ｍを測る。底面はほぼ平坦であるが、南寄りに小ピット状の浅い窪みを有す。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

埋土は、４層に細分され、第Ⅰ層黄灰色粘質土、第Ⅱ層淡灰褐色シルト、第Ⅲ層灰褐色砂質土、第Ⅳ層灰褐色細砂となっている。埋土中位より、弥生土器、土師質土器及び瓦質土器の細片が出土している。

ＳＫ14

ＳＫ14は、ＳＫ11の東に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は不整方形を呈し、長径2.35ｍ、短径2.00ｍを測り、長軸方向はＮ－18°－Ｅを指す。深さは0.30ｍを測り、底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は灰色粘質土であり、埋土上位から底面直上にかけて大小の自然石が多数検出された。

埋土中より、弥生土器、土師質土器、瓦質土器、備前焼擂鉢（47）及び唐津焼碗（46）が出土している。46も47も集石間より出土しており、46は東壁際に位置していた。また、南寄りの集石下よりは石臼（108）が半個体分出土している。ＳＫ14は、形状及び出土遺物の特徴がＳＫ11と多くの点で共通している。

ＳＫ15

ＳＫ15は、ＳＢ８の北に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は不整形であり、深さも0.15ｍと浅い。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より、弥生土器、土師質土器及び瓦質土器の細片が出土している。

ＳＫ16～20

ＳＫ16～20は、ＳＤ１西辺中央部の東側に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。いずれも埋土は灰褐色粘質土であり、深さ0.20ｍを超えるものはない。

ＳＫ16は、平面形が不整長円形を呈し、長径2.63ｍ、短径0.85ｍを測る。埋土中より、弥生土器、瓦質土器及び土錘の細片が出土している。なお、ＳＫ16はＳＢ６を切っている。

ＳＫ17は、平面形が不整形であり、出土遺物も皆無であった。同遺構はＳＢ９を切っている。

ＳＫ18は、平面形が長円形を呈し、長径1.04ｍ、短径0.90ｍを測る。埋土中より弥生土器及び土師質土器の細片が若干出土している。なお、ＳＫ18はＳＢ６及びＳＢ９を切っている。

ＳＫ19は、平面形が長円形を呈し、長径0.90ｍ、短径0.68ｍを測る。埋土中より土師質土器の細片がわずかながら出土している。

ＳＫ20も、平面形が長円形を呈し、長径0.95ｍ、短径0.48ｍを測る。出土遺物は皆無であった。

ＳＫ21

ＳＫ21は、ＳＢ９の西南部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は長円形を呈し、長径0.90ｍ、短径0.65ｍで、長軸方向はＮ－10°－Ｗを指す。深さは0.80ｍに及ぶが、北端部は段状に上がっており、深さ0.60ｍ程である。底面直上で自然石が検出された。壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中位より、弥生土器、土師質土器及び瓦質土器が出土している。

ＳＫ22

ＳＫ22は、ＳＫ21の東に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は瓢箪形を呈し、２つの土坑が重複しているような形状を呈しているが、切り合い関係は認められなかった。長径2.85ｍ、短径0.85ｍを測り、長軸方向はＮ－70°－Ｗを指す。深さは0.36ｍを測る。底面は起伏が激しく、壁の立ち上がりは比較的緩やかである。東壁上端部に径25㎝の自然石が食い込んでいた。

埋土は、３層に分層され、第Ⅰ層灰褐色粘質土、第Ⅱ層黄灰褐色粘質土、第Ⅲ層暗灰褐色粘質土であった。出土遺物は、弥生土器、土師質土器、瓦質土器鍋（48）、青磁及び染付等であった。48は第Ⅲ層より出土している。なお、ＳＫ22はＳＢ２を切っている。

ＳＫ23

ＳＫ23は、ＳＫ22の東に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は不整方形を呈し、深さも0.15ｍと浅い。埋土は灰褐色粘質土である。北壁上端に自然石が食い込んでいるのが検出された。しかし、埋土中からの出土遺物は皆無であった。

ＳＫ24

ＳＫ24は、ＳＢ11の北部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は長円形を呈し、長径1.00ｍ、短径0.85ｍを測る。埋土は灰褐色粘質土単一層であるが、深さは0.12ｍのところで柱痕状の長円形プランが確認され、その西半部は最深0.30ｍに達した。形状からしてピットとして扱うことも可能である。埋土中より土師質土器及び瓦質土器の細片が出土している。

ＳＫ25

ＳＫ25は、ＳＤ１西辺の南東部に位置し、ＳＤ１の埋土上層を除去した段階で検出された。すなわち、当該調査区ではＳＤ１の東肩はテラス状をなしており、その上面で暗灰褐色粘質土の埋土をもってＳＫ25が確認された。

平面形は隅丸長方形を呈し、長径0.90ｍ、短径0.60ｍを測り、長軸方向はＮ－７°－Ｅを指す。深さは0.10ｍと浅いが、底面直上において焼土塊が木炭片とともに出土している。上面はＳＤ１等によって削平を受けたものと考えられるが、若干の自然石も検出されており、火葬墓の可能性を有する土坑である。検出状況からして、ＳＤ１が機能する以前の土坑であるが、出土遺物は弥生土器と土師質土器の細片のみであり、詳細は不明である。

ＳＫ26～29

ＳＫ26～29は、ＳＢ19あるいはＳＢ20と重複する位置で、第Ⅳ層上面において検出された。平面形はいずれも不整形であり、深さもＳＫ27以外は0.20ｍに満たず、性格不明の土坑である。埋土はすべて灰褐色粘質土であった。

ＳＫ26は、ＳＢ19の北西部に位置する浅い土坑であり、埋土中より、弥生土器、土師質土器及び瓦質土器の細片が出土している。

ＳＫ27は、２基の土坑が重複したような形状を呈しているが、埋土が同一であり、切り合い関係を確認することができなかった。長径2.00ｍ、短径1.20ｍで、深さは0.40ｍを測る。埋土中位より、土師質土器、瓦質土器及び備前焼の細片が出土している。

ＳＫ28は、平面形が直径0.85ｍ内外の不整円形を呈し、深さは0.16ｍを測る。埋土中より、弥生土器、土師質土器及び瓦質土器の細片が出土している。なお、ＳＫ27及びＳＫ28は、ＳＢ20の北西端の柱穴によって切られている。

ＳＫ29は、平面形は長径2.70ｍ、短径1.75ｍを測る長大な土坑であるが、深さは８㎝と極めて浅い。埋土中より、弥生土器、土師質土器、瓦質土器、備前焼及び青磁碗（49）が出土している。なお、ＳＫ29はＳＢ20の南西端の柱穴によって切られている。

ＳＫ30～32

ＳＫ30～32は、ＳＢ12あるいはＳＢ13と重複する位置で、第Ⅳ層上面において検出された。

平面形はいずれも不整形であり、確たる機能を有した土坑とは考えられない。

ＳＫ30は、平面形は極めて異様であるが、深さは0.28ｍを測り、埋土も２層に分層された。第Ⅰ層は淡灰褐色粘質土、第Ⅱ層が灰褐色粘質土である。埋土上位及び底面直上において自然礫が検出された。出土遺物は、弥生土器、土師質土器及び瓦質土器であったが、いずれも細片であり、図示できるものはなかった。

ＳＫ31・32はともに深さ0.10ｍと浅い土坑であり、出土遺物も僅少であった。なお、ＳＫ31がＳＢ12によって切られているのを確認できた他は、新旧関係は不明である。

ＳＫ33

ＳＫ33は、ＳＫ32の南東に位置する。平面形は不整方形を呈し、長径1.35ｍ、短径1.00ｍを測り、長軸方向はＮ－57°－Ｗを指す。深さは0.70ｍと非常に深い。底面はほぼ平坦であり、断面形はＵ字形を呈している。但し、西壁は深さ0.56ｍの地点で段をなしている。

埋土は、３層に分層され、第Ⅰ層淡黄灰褐色粘質土、第Ⅱ層黄灰褐色粘質土、第Ⅲ層灰褐色粘質土となっている。第Ⅲ層より土師質土器及び瓦質土器が出土している。

ＳＫ34

ＳＫ34は、ＳＢ14の東南端部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は長円形を呈し、長径0.85ｍ、短径0.60ｍを測り、長軸方向はＮ－25°－Ｅを指す。断面形はＵ字形を呈し、深さは0.30ｍを測る。埋土は黄灰色粘質土をベースとしており、それに黒色土がブロック状に混入していた。埋土中位より弥生土器及び土師質土器の細片が出土している。

ＳＫ35・36

ＳＫ35・36は、ＳＢ16の中央部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。いずれも平面形は直径0.80ｍの円形を呈し、埋土は灰褐色粘質土である。

ＳＫ35は、円形のプランを0.10ｍ程掘り下げると、同心円状に直径0.40ｍのプランが確認され、それを、更に８㎝掘り下げて底面に達した。埋土中より土師質土器及び瓦質土器の細片が出土している。

ＳＫ36は、ＳＫ35に南接しているが、埋土は同一であり、切り合い関係は認められなかった。深さは0.16ｍを測る。底面は平坦であり、壁は垂直に近く立ち上がる。底面直上より土師質土器杯（50、51）及び瓦質土器が出土している。

ＳＫ37・38

ＳＫ37・38は、ＳＢ18の北西端部に位置し、南北に並んで検出された。

ＳＫ37は、平面形が長方形を呈し、長径2.15ｍ、短径0.90ｍで、深さは0.35ｍを測る。長軸

方向はＮ－27°－Ｅを指す。底面には若干起伏がみられ、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は、２層に分層され、第Ⅰ層が灰褐色粘質土、第Ⅱ層が暗灰褐色粘質土である。両層より、須恵器、土師質土器及び瓦質土器が出土している。

ＳＫ38も、平面形は長方形を呈し、長径1.20ｍ、短径0.50ｍで、深さは0.15ｍを測る。長軸方向はＮ－83°－Ｗを指す。底面はほぼ平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より土師質土器及び瓦質土器の細片が出土している。

ＳＫ39

ＳＫ39は、ＳＤ１西辺の南部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は長方形を呈し、長径3.75ｍ、短径2.00ｍで、深さは0.20ｍを測る。長軸方向はＮ－68°－Ｗを指す。底面には若干の起伏がみられ、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は灰色粘質土であり、埋土中より、弥生土器、土師質土器、瓦質土器鍋（52）及び青磁が出土している。なお、ＳＫ39はＳＤ１及びＳＤ６を切っている。

ＳＫ40

ＳＫ40は、ＳＤ１の南西コーナー内側に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は不整長円形を呈し、長径0.90ｍ、短径0.70ｍで、深さは0.50ｍを測る。長軸方向はＮ－17°－Ｅを指す。底面はほぼ平坦であり、壁は垂直に近く立ち上がる。但し、西壁は小さな段を有していた。

埋土は灰褐色粘質土であったが、その上層には一面に大小の自然石が配されていた。出土遺物は、弥生土器、土師質土器皿（53）及び備前焼擂鉢（54）であった。54は集石の間より出土しており、53は北部集石直下より出土している。ＳＫ40は、形状及び出土遺物からして中世墓と考えられる。

ＳＫ41

ＳＫ41は、ＳＫ40の東に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は直径1.65ｍの円形を呈し、深さは0.35ｍを測る。底面はほぼ平坦であるが、周縁に幅0.25ｍ、深さ６㎝程の環溝が巡っている。

埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中位を中心にして弥生土器及び土師質土器が出土している。また、環溝部より鉄滓も出土した。ＳＫ41は、座棺を埋置した近世墓と考えられるが、それを証する出土遺物は皆無である。

ＳＫ42・43

ＳＫ42・43は、調査区の北西部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。両者とも帯状を

呈して東西に延びる土坑であり、あるいはＳＤとした方が適当かもしれない。埋土はいずれも灰褐色粘質土であった。

ＳＫ42は、深さは６cmと非常に浅い。埋土中より弥生土器壺（55）及び土師質土器が出土している。

ＳＫ43は、長径3.68m、短径0.68mを測る。深さは0.12mと浅い。埋土中より土師質土器及び瓦質土器の細片が出土している。

ＳＫ44～47

ＳＫ44～47は、ＳＤ１西辺北部のさらに西側で、第Ⅳ層上面において検出された。

ＳＫ44は、ＳＤ１とＳＤ７との中間に位置し、ＳＢ27と重複している。平面形は不整方形を呈し、長径0.93m、短径0.80mを測り、長軸方向はＮ－70°－Ｗを指す。深さは0.25mを測る。底面にはやや起伏がみられ、壁は垂直に近く立ち上がる。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より土師質土器及び瓦質土器の細片が出土している。

ＳＫ45はＳＤ７と重複関係にあり、ＳＫ45がＳＤ７を切っている。ＳＫ45の平面形は不整長円形であり、長径1.70m、短径1.00mを測る。深さは0.42mに及び、埋土は２層に分層される。第Ⅰ層は淡灰褐色粘質土、第Ⅱ層は暗灰褐色粘質土である。比較的深い土坑ではあるが、出土遺物は皆無であった。

ＳＫ46は、ＳＢ28の北に位置する。平面形は不整円形を呈し、深さは0.10mと浅い。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より弥生土器及び土師質土器が出土している。

ＳＫ47は、ＳＤ６と重複した位置にあり、同溝を切っている。平面形は長円形を呈し、長径1.25m、短径0.75mで、深さは0.18mを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は皆無であった。

ＳＫ48・49

ＳＫ48・49は、ＳＤ１の南西コーナーの外側に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。埋土はいずれも灰褐色粘質土である。

ＳＫ48は、平面形が一辺1.00m内外の不整方形を呈し、深さは0.14mを測る。底面は、西が低く、東が段状を呈して高くなっている。瓦質土器片が数点出土している。

ＳＫ49は、平面形が不整長円形を呈し、長径1.20m、短径0.65mを測る。ＳＤ１の屈曲部に対応するように若干湾曲している。深さは0.57mを測るが、北部は段状をなしている。埋土中位より土師質土器及び瓦質土器鍋（56）が出土した。

ＳＫ50

ＳＫ50は、調査区の南東端部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は長方形を

呈するものと推定される。深さは6㎝と浅い。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より、弥生土器、土師質土器、瓦質土器及び備前焼の細片が出土している。

ＳＫ51～54

ＳＫ51～54は、場内調査区の西端に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。埋土はいずれも灰褐色粘質土であった。

ＳＫ51は、北半が調査区外にのびているため全容は明らかでない。深さも５㎝と極めて浅く、出土遺物も皆無であった。

ＳＫ52は、平面形が長円形を呈し、長径1.45ｍ、短径0.70ｍを測る。長軸方向はＮ－30°－Ｅを指す。底面は北部が低くなっており、深さ0.20ｍを測る。埋土中より土師質土器及び瓦質土器の細片が出土している。

ＳＫ53は、平面形が一辺0.75ｍ内外の不整方形を呈し、深さは0.20ｍを測る。底面は平坦であり、壁は垂直に立ち上がるが、東西両壁は断面が台形状をなしている。出土遺物は皆無であった。

ＳＫ54は、溝状の小土坑であり、深さも５㎝と極めて浅い。弥生土器、土師質土器及び瓦質土器の細片が若干出土している。

ＳＫ55

ＳＫ55は、ＳＢ26の北西端部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は長方形を呈し、長径1.13ｍ、短径0.70ｍを測り、長軸方向はＮ－70°－Ｗを指す。深さは0.34ｍを測り、断面形はＵ字形をなす。出土遺物は皆無であった。

ＳＫ56～59

ＳＫ56～59は、ＳＢ30の西に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。ＳＫ57～59は南北方向に重複しており、ＳＫ58が他の土坑を切っている。

ＳＫ56は、平面形が不整形を呈し、深さも２～10㎝と極めて浅い。埋土は灰褐色粘質土であるが、埋土中からの出土遺物は皆無であった。

ＳＫ57は、南北に長い帯状の土坑であり、深さは５㎝と極めて浅い。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より土師質土器及び瓦質土器の細片が出土している。

ＳＫ58は、平面形が不整形を呈し、深さは0.12ｍを測る。埋土は灰色粘質土であるが、埋土中よりの出土遺物は皆無であった。

ＳＫ59は、平面形が不整長方形を呈し、長径1.10ｍ、短径0.68ｍを測り、長軸方向はＮ－20°－Ｅを指す。深さは0.16ｍを測り、埋土は灰褐色粘質土である。埋土中より瓦質土器及び備前焼の細片が出土している。また、砥石も１点（106）出土している。

ＳＫ60～62

ＳＫ60～62は、ＳＢ26の南東に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。埋土はいずれも灰褐色粘質土である。

ＳＫ60は、平面形が不整長方形を呈し、長径1.85ｍ、短径0.75ｍを測り、長軸方向はＮ－70°－Ｗを指す。深さは0.16ｍを測り、底面は平坦で、壁の立ち上がりも緩やかである。埋土中より土師質土器及び瓦質土器の細片が出土している。

ＳＫ61・62は、いずれも南北方向に帯状に延びる小土坑であり、深さも７～10㎝と極めて浅い。埋土中より、弥生土器、土師質土器及び瓦質土器がわずかではあるが出土している。

ＳＫ63

ＳＫ63は、ＳＫ62の南西に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は不整方形を呈するものと推定されるが、南半が調査区外であり全容は不明である。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より土師質土器及び瓦質土器鍋（57）が出土している。

ＳＫ64

ＳＫ64は、ＳＢ31の東部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。東西に延びる帯状の土坑であり、形状からしてＳＤとして取扱うことも可能である。深さは0.14ｍと浅く、埋土は灰褐色粘質土であった。埋土中より土師質土器及び瓦質土器の細片が出土している。なお、ＳＫ64はＳＤ７によって切られている。

ＳＫ65

ＳＫ65は、ＳＢ34の南西に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は直径0.98ｍの円形を呈し、深さは0.32ｍを測る。底面は中央が凹状をなし、断面舟底形を呈している。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より瓦質土器及び備前焼の細片が出土している。

ＳＫ66

ＳＫ66は、場周調査区の北東部に位置し、ＳＢ39の西に隣接して第Ⅳ層上面において検出された。長径2.60ｍ、短径1.95ｍを測り、平面形は方形を呈するがやや崩れている。深さは0.20ｍを測り、底面は平坦である。断面形は浅い逆台形であり、壁はしっかりと立ち上がる。長軸方向はＮ－14°－Ｅを指す。北部に一辺16㎝の方形ピットがみられるが、性格は不明である。

埋土は灰褐色粘質土であり、重複関係はみられない。出土遺物はほとんどなく、時期、性格については不明である。

ＳＫ67

ＳＫ67は、場周調査区の北半部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。長径3.45ｍ、短径3.05ｍを測り、平面形は方形を呈している。深さは0.30ｍを測り、底面は平坦である。断面形は浅い逆台形であり、壁はしっかりと立ち上がる。長軸方向はＮ－70°－Ｗを指す。重複する柱穴は３個みられ、ＳＢ39・40・41が重複関係にあるが、ＳＫ67は、ＳＢ40・41を切っており、ＳＢ39には切られている。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物は若干の土師質土器片のみである。

ＳＫ68

ＳＫ68は、場周調査区の中央部に位置し、ＳＫ67の東で第Ⅳ層上面において検出された。長径2.90ｍ、短径1.41ｍを測り、平面形は不定形である。深さは0.10ｍと浅く、断面形は逆台形を呈す。底面は平坦であり、長径0.16ｍ程の小ピットがみられる。長軸方向はＮ－76°－Ｗを指す。また、ＳＫ68はＳＢ46と重複関係にあり、ＳＢ46の柱穴に切られているので、ＳＫ68が古いという新旧関係がみられる。埋土は灰褐色粘質土であり、遺物はほとんどみられなかった。

ＳＫ69

ＳＫ69は、場周調査区の中央部に位置し、ＳＫ67の南で第Ⅳ層上面において検出された。長径4.40ｍ、短径1.55ｍを測り、平面形は長方形である。深さは0.10ｍと浅く、断面形は逆台形を呈す。底面は平坦であり、長軸方向はＮ－68°－Ｗを指す。

ＳＫ69は、ＳＢ40・41と重複関係にあり、ＳＢ40・41の柱穴に切られているので、ＳＫ69が古いという新旧関係がみられる。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物は若干の土師質土器と瓦質土器の細片がみられる。

ＳＫ70

ＳＫ70は、場周調査区の中央部に位置し、ＳＫ69の南で第Ⅳ層上面において検出された。長径2.95ｍ、短径1.80ｍを測り、平面形は崩れた方形である。深さは８㎝と浅く、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。長軸方向はＮ－13°－Ｅを指す。

ＳＫ70には６個のピットが重複しているが、この中で重複関係にある建物はＳＢ42であり、ＳＫ70をその柱穴が切っている。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＫ71

ＳＫ71は、場周調査区の中央部、西壁に近く位置しており、ＳＢ43の北で第Ⅳ層上面において検出された。長径2.85ｍ、短径1.55ｍを測り、平面形は不整形である。深さは0.13ｍを測り、断面形は皿形を呈す。底面は南半分がやや深く、小さな段がみられる。長軸方向はＮ－26°－

Eを指す。重複関係はみられず、埋土は灰色粘質土である。出土遺物はほとんどみられなかった。

SK72

SK72は、場周調査区の中央部南寄りに位置し、SD13の北で第Ⅳ層上面において検出された。長径3.05m、短径2.20mを測り、平面形は方形である。深さは0.60mを測り、壁は緩やかに立ち上がる。底面は中央部がやや深く、断面形は緩やかなU字形を呈す。長軸方向はN－21°－Eを指す。

SK72には3個のピットが重複しているが、このなかで重複関係にあるものはSB44、SA2の柱穴である。SB44との新旧関係は不明であるが、SA2の柱穴はSK72の床面に検出されたものであり、SK72がSA2を切っている。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SK73

SK73は、場周調査区の南部に位置し、SK48の南で第Ⅳ層上面において検出された。長径2.35m、短径0.75mを測り、平面形は不整長方形である。深さは0.34mを測り、底面はほぼ平坦であるが、中央部に長径12cmの小ピットがみられる。断面形は浅い逆台形を呈す。長軸方向はN－67°－Wを指す。重複関係はみられず、埋土は灰色粘質土である。出土遺物は若干の土師質土器がみられる。

溝

SD1

SD1は、SB1～22をU字状に囲む長大な溝であり、第Ⅳ層上面において検出された。幅1.30m、深さ0.40mを標準とし、最深部は0.60mを測る。断面形は舟底形を呈す。長さは西辺36m、南辺32m、東辺37mを測る。なお、西辺は東肩部が広くなっており、その北端は環状を呈して終わっている。また、東辺の北端からは西へ10mばかり延びている。これらを合わせると、SD1の総延長は129mに及ぶ。東辺及び西辺の方向は、N－18°－Eを指し、南辺はこれらに直交している。

SD1の埋土は、5層に細分され、第Ⅰ層灰褐色粘質土、第Ⅱ層赤灰褐色粘質土、第Ⅲ層暗赤褐色粘質土、第Ⅳ層暗灰褐色粘質土、第Ⅴ層黒灰色粘質土となっているが、基本的には第Ⅰ層と第Ⅳ層との2層に分類される。

出土遺物は、弥生土器甕（58～60）、土師質土器杯（61）・鍋（62～67）・釜（68～70）、瓦質土器擂鉢（71）・鍋（72）、備前焼擂鉢（73、74）・壺（75）、青磁碗（76、77）、白磁皿（78、79）

及び唐津焼皿（80）等であった。また、土錘（81）や砥石（105、107）それに釘（111）も出土している。

ＳＤ２

ＳＤ２は、ＳＤ１東辺の北寄りから西に延びる小溝であり、第Ⅳ層上面において検出された。幅は0.60ｍ前後を測るが、深さは８㎝と極めて浅い。長さは10ｍである。埋土は灰褐色粘質土であり、ＳＤ１の埋土上層と同一であった。埋土中より、弥生土器、土師質土器及び瓦質土器が出土しているが、いずれも細片で図示できるものはなかった。なお、ＳＤ２はＳＢ２の南東端の柱穴によって切られている。

ＳＤ３

ＳＤ３は、ＳＤ２の東端付近から南へ延びる小溝であり、第Ⅳ層上面において検出された。幅0.20ｍ、深さ５㎝を測り、断面形は舟底形を呈している。長さは11ｍに及び、方向は、Ｎ－21°－Ｗを指し、ＳＤ１東辺にほぼ平行である。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より土師質土器及び瓦質土器の細片が若干出土した。また、釘状の鉄製品も１点（114）出土している。

ＳＤ４

ＳＤ４は、ＳＥ１の南東で、第Ⅳ層上面において検出された。ＳＤ１南辺の北側を東西に走る小溝である。幅0.21ｍ、深さ0.10ｍを測り、断面形は舟底形を呈す。長さは６ｍで、方向はＮ－66°－Ｗを指す。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より弥生土器及び土師質土器の細片が出土している。

ＳＤ５

ＳＤ５は、調査区の北西部で、第Ⅳ層上面において検出された。幅0.40ｍ、深さ８㎝を測り、断面形は舟底形を呈す。長さは７ｍで、方向はＮ－76°－Ｗを指す。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より弥生土器及び土師質土器の細片が出土している。

ＳＤ６

ＳＤ６は、ＳＤ１西辺の西側で、第Ⅳ層上面において検出された。幅0.60ｍ、深さ0.15ｍを測り、断面形は舟底形を呈す。長さは25.60ｍで、方向は、Ｎ－16°－Ｅを指し、ＳＤ１とほぼ平行である。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より、土師質土器、瓦質土器及び備前焼の細片が出土している。なお、ＳＤ６はＳＢ29及びＳＫ39・47によって切られている。また、ＳＢ32とも重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＤ７

ＳＤ７は、ＳＤ６の西側で、第Ⅳ層上面において検出された。幅0.25ｍ、深さ0.15ｍを測り、断面形は舟底形を呈す。幅は南寄りでは0.70ｍを超える部分もあるが、深さはほぼ同一である。細溝ではあるが、南北に長く延びており、長さは33ｍに達する。また、南端部で西へ屈曲して４ｍ程で終わる。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より、土師質土器、瓦質土器及び青磁の細片が出土している。なお、ＳＤ７はＳＫ64を切っており、ＳＫ43・45に切られている。また、ＳＢ27・30・31・34とも重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

ＳＤ８

ＳＤ８は、ＳＢ34の西方で、第Ⅳ層上面において検出された。幅0.50ｍ、深さ0.27ｍを測り、断面形は舟底形を呈している。南北に延びる溝であるが、南端は調査区外となっており、全容は不明であるが、確認長は５ｍに及ぶ。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より土師質土器杯（82）及び瓦質土器鍋（83）が出土している。

ＳＤ９

ＳＤ９は、調査区の南部で、第Ⅳ層上面において検出された。幅0.25ｍ、深さ５㎝の小溝であり、長さは７ｍを測る。埋土は黄灰色粘質土である。埋土中からの出土遺物は皆無であった。

ＳＤ10

ＳＤ10は、ＳＤ９の東方で、第Ⅳ層上面において検出された。幅0.24ｍ、深さ８㎝の小溝であり、長さは8.50ｍを測る。埋土は灰色粘質土であり、埋土中より若干の土師質土器片が出土している。なお、ＳＤ10はその東端をＳＫ50によって切られている。

ＳＤ11

ＳＤ11は、場周調査区の北部に位置し、ＳＢ35の北側で第Ⅳ層上面において検出された。

ＳＤ11は中間部が切れており、その間隔は0.80ｍである。西の溝が長さ3.60ｍ、幅0.24ｍを測り、深さ0.10ｍと浅い。底面はほぼ平坦であり、東端部に直径８㎝の小ピットがみられる。東の溝は東壁にかかっており、検出長は4.48ｍ、幅0.24ｍを測り、深さは0.13ｍとやや深い。北壁の中間部に直径６㎝の小ピットがみられる。方向は、Ｎ－71°－Ｗを指し、掘立柱建物群と同じ方向性をもっており、その北には柱穴がみられない。埋土は灰色粘質土であり、細片ではあるが瓦質の鍋片が出土している。

ＳＤ12

ＳＤ12は、場周調査区の南部で、第Ⅳ層上面において検出された。長さ6.24ｍ、幅0.48ｍ、

深さ0.24ｍを測る。底面はほぼ平坦であり、西端部近くに直径24㎝と８㎝の小ピットがみられる。方向は、Ｎ－73°－Ｗを指し、掘立柱建物群と同じ方向性を持っている。ＳＤ12の北に建物の集中部がみられるが、南にもＳＢ48・49の２棟が検出されている。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物はほとんどみられなかった。

井戸

ＳＥ１

ＳＥ１は、ＳＤ１南東コーナーの内側に位置し、第Ⅳ層上面において確認された。同遺構上面では、第Ⅲ層除去の段階から大小の自然石が出土しており、第Ⅲ層下位において人頭大の石が孤状に並んで検出された。第Ⅳ層まで掘り下げて精査したところ、これらは石組井戸の上端であることが確認され、その掘り方も検出できた。

ＳＥ１は、上端部石組が内径0.90ｍの環状を呈しており、深さは4.52ｍを測る。下端部中央には自然木をくり抜いて作った口径0.48ｍ、高さ0.24ｍの井筒（110）が設置されており、これを固定するように、外周には径40㎝内外の自然石が敷き詰められていた。井戸は、更にその外縁に順次石を積み上げていくことによって構築されていた。下端部石組の内径は0.80ｍを測り、上端より若干小さくなっていた。

井戸内部の埋土は、上層が灰褐色粘質土、中層が暗灰褐色粘質土、下層が青灰色粘土であった。最下層では粘土に細砂が混入しており、井筒付近では若干の湧水がみられた。掘り方は、平面形が不整長円形を呈しており、長径3.80ｍ、短径3.20ｍを測る。掘り方部の埋土は、灰褐色粘質土をベースとしており、それに黄黒色粘質土がブロック状に混入していた。なお、石組の裏込部には若干の小礫と灰色粘質土とが認められていた。

出土遺物は、弥生土器、土師質土器鍋（84）、瓦質土器、備前焼擂鉢（85、86）、青磁碗（87）、白磁杯（88）等であり、弥生時代の石斧も２点（103、104）出土している。また、火鑽板（109）も埋土中位より出土している。図示できた遺物はすべて井戸内の埋土からの出土品である。

なお、井戸を半截して調査する段階で、石組の上半が陥落し、そのため断面図は残存部のみの図とならざるを得なかった。上部断面については写真を参照されたい。

柵列

ＳＡ１

ＳＡ１は、場周調査区の北部に位置し、ＳＢ36の東で第Ⅳ層上面において検出された。長さ6.80ｍを測り、４間である。柱間距離は1.12～2.40ｍを測り、北に比べ南の柱間が狭い。方向は、Ｎ－22°－Ｅを指し、ＳＢ36・37の東面に並行しており、長さもほぼ同じところから、Ｓ

B36・37に付属する柵列ではないかと考えられる。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は土師質土器の細片が若干みられた。

SA2

SA2は、場周調査区の南部に位置し、SD12の北で第Ⅳ層上面において検出された。南北方向に5間、9.12m、南端部から東へ2間、4.16mを測り、L字形をしている。柱間距離は、1.68～2.40mを測るが、平均1.70m前後とよく揃っており、南北方向の5間が東西方向の2間に比べやや間隔が狭い。方向はN－20°－Eを指し、SB44と同じ方向性をもっており、かつ、西面と南面に対応する位置にあることからSB44に付属するものではないかと考えられる。また、SK72と重複関係にあり、SA2の柱穴が切れている。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ピット

P1

P1は、SB4内北寄りに位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は一辺36cmの円形を呈し、深さは50cmを測る。柱痕部の直径は18cmである。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中位より唐津系皿（89）が出土している。

P2～4

P2～4は、SB5の西部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。埋土はいずれも灰褐色粘質土である。

P2は、平面形が直径26cmの円形を呈し、深さは37cmを測る。埋土下位より土師質土器皿（90、91）が出土している。

P3は、平面形が長円形を呈し、長径34cm、短径21cmで、深さは23cmを測る。柱痕部の直径は18cmである。埋土中位より瓦器椀（92）が出土している。

P4は、平面形が長円形を呈し、長径28cm、短径20cmで、深さは24cmを測る。埋土中位より土師質土器小皿（93）が出土している。

P5

P5は、SB7内南寄りに位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は直径22cmの円形を呈し、深さは24cmを測る。埋土は暗灰褐色粘質土であり、埋土上位より青磁碗（94）が出土している。

P 6

P 6 は、S K19の西に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は不整長円形を呈し、長径34cm、短径26cmで、深さは22cmを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より青磁碗 (95) が出土している。

P 7

P 7 は、S B 8 の北に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は直径23cmの円形を呈し、深さは21cmを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中位より土錘 (96) が出土している。

P 8～10

P 8 ～10は、S B11の東部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。埋土はいずれも灰褐色粘質土である。

P 8 は、平面形が長円形を呈し、長径50cm、短径34cmで、深さは39cmを測る。埋土中より備前焼壺 (97) が出土している。

P 9 は、平面形が直径29cmの円形を呈し、深さは39cmを測る。柱痕部の直径は10cmである。埋土中より土師質土器杯 (98) が出土している。

P10は、平面形が直径28cmの円形を呈し、深さは39cmを測る。埋土下位より青磁碗 (99) が出土している。

P11

P11は、S B14の南部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は直径48cmの円形を呈し、深さは22cmを測る。埋土は暗灰褐色粘質土であり、埋土中より土師質土器Ⅲ (100) が出土している。

P12

P12は、S B26の西に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は直径25cmの円形を呈し、深さは23cmを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より釘状鉄製品 (112) が出土している。

P13

P13は、S K59の東に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は直径28の円形を呈し、深さは52cmを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中位より青磁杯 (101) が出土している。また、底面直上において径12cmの自然石が１個検出された。

P14

P14は、ＳＢ30内西寄りに位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は直径24cmの円形を呈し、深さは26cmを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より釘状鉄製品（113）が出土している。

P15

P15は、ＳＢ33内南寄りに位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は直径32cmの円形を呈し、深さは26cmを測る。柱痕部の直径は16cmである。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より土師質土器鍋（102）が出土している。

5．まとめ

当調査区における主要な検出遺構は、ＳＤ１とその内側にみられる掘立柱建物群（ＳＢ１～22）である。

ＳＤ１は、出土遺物からみると15～16世紀に機能したものと考えられ、ＳＢ１～22も、その大半が同時期に存続していたものと考えられる。ＳＤ１で区画された屋敷内における柱穴の分布状況は、北側に疎で、南側に密である。特に、南西部における柱穴分布状況は非常に密であり、Loc.13の類例と同様である。

南東部で検出された井戸も同時期のものと考えられ、その西側では建物址は検出されず、小空間をなしている。また、南西部のＳＫ40も屋敷墓的存在であった可能性が持たれる。ＳＫ９・11・12・14等の集石を伴う土坑も墓として把握できるものであるが、これらは若干時期が下るものと考えられる。

ＳＤ１西辺以西においても、比較的多くの掘立柱建物址が検出されている。これらの「溝に囲まれない」建物址も、出土遺物からみる限りでは、15～16世紀に併存していたものと考えられる。なお、田村遺跡群内における溝を伴わない屋敷址のうちでは、当調査区の例は建物の規模及び出土品に、溝の内側のものとの差異が少ないのが特徴である。

第54表　掘立柱建物址計測表

挿図番号	遺構番号	規模			棟方向	面積 (㎡)	備考
		梁(間)×桁(間)	梁 × 桁(m)	柱間距離(m)			
第235図	SB 1	2 × 2	2.80 × 2.80	1.00 ～ 2.80	N－30°－W	7.8	
〃	SB 2	2 × 2	5.60 × 6.80	2.60 ～ 3.40	N－80°－W	38.1	
第236図	SB 3	1 × 2	2.40 × 3.00	1.40 ～ 2.40	N－21°－E	7.2	
〃	SB 4	1 × 2	2.50 × 4.30	1.30 ～ 2.45	N－69°－W	10.8	
第237図	SB 5	2 × 2	3.60 × 3.20	1.55 ～ 1.95	N－19°－E	11.5	
〃	SB 6	2 × 2	3.20 × 3.20	1.50 ～ 1.70	N－72°－W	10.2	
第238図	SB 7	2 × 4	4.90 × 7.00	1.70 ～ 2.73	N－23°－E	34.3	
第239図	SB 8	3 × 5	4.50 × 6.90	0.95 ～ 1.95	N－71°－W	31.1	
〃	SB 9	4 × 4	4.50 × 5.40	0.80 ～ 1.70	N－65°－W	24.3	
第240図	SB 10	1 × 2	1.80 × 3.80	1.80 ～ 2.00	N－75°－W	6.8	
〃	SB 11	1 × 5	2.70 × 6.90	1.20 ～ 2.76	N－70°－W	18.6	
第241図	SB 12	4 × 5	7.20 × 7.20	0.85 ～ 2.95	N－69°－W	51.8	
第242図	SB 13	1 × 2	2.40 × 3.90	1.80 ～ 2.50	N－28°－E	9.4	
〃	SB 14	3 × 3	4.50 × 3.30	0.55 ～ 2.14	N－29°－E	14.9	
第243図	SB 15	1 × 1	2.00 × 2.40	2.00 ～ 2.40	N－72°－W	4.8	
〃	SB 16	2 × 2	3.40 × 3.90	1.33 ～ 2.50	N－67°－W	13.3	
第244図	SB 17	2 × 2	4.20 × 3.60	1.60 ～ 2.14	N－20°－E	15.1	
〃	SB 18	2 × 3	3.60 × 5.40	1.50 ～ 3.40	N－15°－E	19.4	
第245図	SB 19	3 × 3	4.80 × 4.80	1.15 ～ 3.25	N－16°－E	23.0	
〃	SB 20	2 × 3	3.30 × 3.90	0.80 ～ 1.85	N－24°－E	12.9	
第246図	SB 21	1 × 2	1.70 × 2.80	1.33 ～ 1.75	N－69°－W	4.8	
〃	SB 22	2 × 2	4.80 × 3.60	1.70 ～ 2.47	N－20°－E	17.3	
第247図	SB 23	1 × 2	2.10 × 3.60	1.80 ～ 2.10	N－20°－E	7.6	
〃	SB 24	1 × 1	1.60 × 1.80	1.55 ～ 1.85	N－65°－W	2.9	
第248図	SB 25	1 × 2	1.10 × 3.90	1.10 ～ 2.00	N－75°－W	4.3	
〃	SB 26	2 × 3	4.80 × 4.80	1.33 ～ 2.55	N－67°－W	23.0	
第249図	SB 27	2 × 2	3.60 × 3.60	1.75 ～ 1.85	N－16°－E	13.0	
〃	SB 28	1 × 2	1.20 × 2.10	1.00 ～ 1.20	N－16°－E	2.5	
第250図	SB 29	2 × 3	3.00 × 3.60	1.00 ～ 2.20	N－20°－W	10.8	
〃	SB 30	2 × 3	1.60 × 5.60	1.35 ～ 3.00	N－68°－W	9.0	

挿図番号	遺構番号	規模			棟方向	面積 (㎡)	備考
		梁(間)×桁(間)	梁 × 桁(m)	柱間距離(m)			
第251図	SB 31	2 × 3	3.20 × 4.80	1.20 ～ 3.20	N－71°－W	15.4	
〃	SB 32	2 × 2	3.00 × 3.00	1.45 ～ 3.10	N－70°－W	9.0	
第252図	SB 33	1 × 1	1.70 × 2.25	1.70 ～ 2.25	N－68°－W	3.8	
〃	SB 34	1 × 2	2.40 × 3.60	1.65 ～ 2.90	N－16°－E	8.6	
第253図	SB 35	(2)× 4	3.82 × 5.46	0.76 ～ 2.70	N－18°－E	14.7	
〃	SB 36	(2)× 3	4.12 × 6.32	1.44 ～ 2.68	N－22°－E	26.0	
第254図	SB 37	(2)× 3	(4.66)× 6.60	1.71 ～ 3.02	N－22°－E	29.4	
〃	SB 38	1 × 1	1.90 × 3.25	1.85 ～ 3.35	N－20°－E	6.2	
第255図	SB 39	2 × 4	3.20 × 4.05	1.25 ～ 2.55	N－73°－W	13.0	
〃	SB 40	2 × 2	3.21 × 3.22	1.42 ～ 1.79	N－78°－W	10.3	
第256図	SB 41	2 × 3	3.78 × 6.22	1.77 ～ 2.23	N－68°－W	23.5	
〃	SB 42	2 × 2	4.03 × 5.21	1.97 ～ 2.98	N－72°－W	21.0	
第257図	SB 43	2 × 2	2.48 × 3.65	0.95 ～ 1.89	N－20°－E	9.1	
〃	SB 44	2 × 2	3.95 × 5.67	1.89 ～ 3.00	N－20°－E	22.4	
第258図	SB 45	2 ×(3)	2.95 × 2.68	1.12 ～ 1.55	N－72°－W	7.9	
〃	SB 46	(1)× 2	2.52 × 4.35	1.41 ～ 2.57	N－18°－E	11.0	
〃	SB 47	(1)× 2	2.19 × 3.63	1.70 ～ 2.19	N－24°－E	7.9	
第259図	SB 48	1 × 1	1.21 × 1.90	1.21 ～ 1.90	N－71°－W	2.3	
〃	SB 49	2 × 3	3.57 × 6.30	1.63 ～ 2.27	N－72°－W	22.5	
第260図	SB 50	2 × 4	3.84 × 7.67	1.02 ～ 2.57	N－75°－W	29.6	

第55表　土坑計測表

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第261図	SK 1	円形	1.70	——	0.38	———	逆台形	
〃	SK 2	長円形	3.70	2.60	0.88	N－30°－E	〃	
〃	SK 3	不整長円形	2.70	1.70	0.50	N－35°－E	〃	
〃	SK 4	円形	0.90	——	0.32	———	〃	
第262図	SK 5	〃	0.95	——	0.35	———	〃	